KAIZO

改造

二月號

1928


森永コーラス
愛すべし
求むべし
美味と
榮養の
クライマックス
冬の保健飲料
コーラス
CH—19



改造二月號目次



創作

新有權者に警告す

普選第一回の總選擧は目捷の間に迫りつつある。今度こそは自信を以つて選擧に當つて貰ひたいのである。選擧を人ごとのごとく冷淡に思つてゐてはいつまで經つても我國は浮ばれないことを深く考へてもらひたい。外交において、内政において就中財政において我國は危機に面してゐる。それ以上に重大性を帶べる階級鬪爭の激化は我國を何處に持つて行くやを思念すべきである。今回の選擧を輕視し、若くは郷土的情實に囚はれて選擧權を行使するがごときことあらば、我國の前路は眞に寒心すべき道程に入るのである。然らば如何なる標準を以つて選擧に對すべきか、第一に世界的大勢を洞見し、複雜多難なる轉換期の財政經濟に通じ、特に現下の社會情勢に深き諒解ある人物と政黨とを選ぶべきである。鉅萬の軍資を擁する候補者に對しては充分の警戒と考察とを拂ふべきであり、そして在來の利權的政黨を斥け、利權的黨人を斷乎として拒くべきである。地方官の干渉に期待し、鐵道、港灣、義務敎育費、地租委讓等々のお題目に動かさるる時代は夙くに過ぎた。

一面、無產政黨を支持する諸君が階級的立場を嚴守するのは當然だが、あまりに感情に囚はれ、小我に拘泥して共同の敵を忘れ見す〱千載一遇の時機を逸するのを深く惜むものだ。そして大人物においても缺ぐるところがあるのを否み得ない。現下においては百の議論はあらうが一の必要は無產政黨の合同である。合同が急に不可能ならば共同戰線の協定を疾風的にまとめるにある。既成政黨の鬪士は何と云つても場數を踏んだ百錬の老將だ。此戰に勝利を得ることは並大抵のことでない。

新有權者はかうした新興政黨の弱所は大目に見る寛宏さを有ち、此一戰をして、財政、經濟その他すべての點に於て我國を坦途ある展開に導き得る手腕識見ある候補者を擧ぐることに鋭意努力すべきだ。

法律家より見たる休銀問題

末弘嚴太郎

はしがき

昭和二年の金融恐慌は近來稀れに見る悲慘事である。多數の銀行が休業した結果今尚拂戻を受け得ない預金は七億圓の巨額に上つてゐると傳へられてゐる。成程昭和銀行關係の三行及び左右田銀行は昨年末に百圓以下の少額預金を拂戻しそれ以上のものについても一部拂戻の便法を行つた。しかし此等の銀行に於てすら結局極めて多額の「預金切捨」を行ふにあらざれば到底整理の目的を達し得ない現狀にある。況んや其他の諸銀行は一部拂戻の便法を實施し得る程度にまでもまだ其整理が到達してゐない。いづれにするも結局何億と言ふ巨額の預金は所謂「切捨」の悲運に遭遇すべく豫期されてゐる。これをしも悲慘事と言はずして何であらうぞ。

成程企業の成否には時の運がある。事業の破綻は必ずしも其罪を理事者の過失にのみ歸することは出來ない。預金者としても亦銀行の選擇を誤つたと言ふ點に於て多少なり失策を行つたのである。けれども預金の「切捨」は預金債權の拋棄である。昨年來休業諸銀行は預金者

に對して預金切捨の已むなき事情を說明し重役の所謂「私財提供」を對價（？）として預金の一部切捨に同意せむことを勸說しつゝある。而して結局和議法の適用によつて其目的を達しやうとしてゐる。成程有限責任會社たる銀行を相手にする以上、今更破產法の適用によつて洗ひ渫ひ銀行の資產を取り上げて見ても、預金者としては結局反つて損を見る位のことである。けれども、預金の「切捨」は預金債權の任意的拋棄である。預金者は重役の私財提供によつて假令一部の「切捨」を受けても尙預金の拂戾を受けることが破產の場合に比して結局有利であると說き聞かされる。そうして見す〲「切捨」に同意を與へてゐる。けれども、彼等の「切捨」同意は結局切端詰つての窮策に外ならない。これより外により良き方法なしと思へばこそ與へた同意である。從つて、銀行理事者が之を得るについては出來得る限り切捨金額を少からしむべく最大の努力をせねばならない。何故なれば、預金者としても其最大努力を前提としてのみ「切捨」に同意を與へて居るのだからである。

　しかし、銀行理事者が此點について如何なる程度まで努力すべきか、預金者が如何なる程度まで「切捨」に同意するかは、結局に於て重役の「私財提供」が法律上の義務であるか若くは單なる道德的（？）の義務に過ぎないかによつて決定される問題である。又假に之を法律的義務なりとするとき其義務の範圍如何によつて決定せらるべき問題である。然るに、現に進行しつゝある休銀整理事業は此根本問題を有耶無耶の裡に葬りつゝ專ら勸說・强制・哀請其他あらゆる不合理的方法によつて行はれつゝある。而して今や和議法と特別融通法との適用によつて萬事を理窟拔きにして圓々と治めやうとしてゐる。しかし、吾々法律家から見ると事物は決して合理的に進行してゐない。預金者の法律的無智に乘じて事は有耶無耶の裡に然るべく片付けられやうとしてゐる。吾々法律家は、どうしても玆に默止するを得ないのである。

　此故に、私は本文に於て先づ第一に、「私財提供」の法律的性質を明かにしたい。而してそれが何人も異論なかるべき明々白々たる法律的根據の上に立つてゐることを明にしたい。尙次に、今回の休銀問題に關聯して吾々法律家が平素から抱懷してゐる疑問事項の一二を、解釋問題として又立法問題として論述して見たいのが本文の目的である。

　而かもそれは何等私の一創見をも加へた議論にあらずして、吾々法律家仲間日常の茶話に外ならない。私は玆に自己の創見を誇らむよりは寧ろ吾々法律家仲間では實に當然事に外ならないことが實際社會に於て行はれてゐないと言ふ事實を一般民衆の前に開示し、以て休銀問題解決の一端に資したいのである。

第一　重役の私財提供

休業銀行はいづれも例外なく重役の所謂「私財提供」によつて預金拂戻の資金を得つゝある。然らば、私財提供は彼等重役の法律的義務であらうか、それとも又單なる道德的（？）の義務に過ぎないであらうか。換言すれば、或る重役が不當に私財提供を拒む場合若くは其提供額が不當に少額な場合に、銀行從つて銀行の債權者たる預金者は法律上裁判所に訴へて私財提供を強要し得べきであらうか。私は勿論之を法律的義務なりと解する、而して世上動ともすれば之を單なる道德的義務に過ぎずと爲すものゝ少からざることを心より怪しみ疑ふのである。然らば、其法律的根據如何、其義務の範圍如何、而して又株主乃至預金者が其義務の履行を強要するについてとり得べき方法如何、私は以下逐次此等の諸點を論述するであらう。

一　重役の私財提供義務は彼等が重役として法律上負擔してゐる事業管理義務の不履行に因つて生ずる損害賠償義務である。

會社の重役中取締役は會社の代表機關であり業務執行機關である。而して「會社ト取締役トノ間ノ關係ハ委任ニ關スル規定ニ從フ」（商法第一六四條）のであるから、「委任ノ本旨ニ從ヒ善良ナル管理者ノ注意ヲ以テ委任事務ヲ處理スル」ことは彼等取締役當然の義務でなければならない（民法第六四四條）。從つて、取締役が會社の爲めに爲す所が「善良ナル管理者ノ注意」義務に違背し其他法律の命ずる所に違反するならば、受任者として不履行の責任を生ずべきこと素より當然なりと言はねばならない。商法は此主旨を明言して「取締役ガ其任務ヲ怠リタルトキハ其取締役ハ會社ニ對シテ連帶シテ損害賠償ノ責ニ任ズ」（第一七七條）と規定してゐる。次に又監査役は「取締役ニ對シテ營業ノ報告ヲ求メ又ハ會社ノ業務及ビ會社財產ノ狀況ヲ調査」し、又「取締役ガ株主總會ニ提出セントスル書類ヲ調査シ株主總會ニ其意見ヲ報告スル」等取締役の業務執行を監督する機關であつて、其會社との關係は同じく「委任ニ關スル規定」の適用を受ける。從つて又彼等が「其任務ヲ怠リタルトキハ（中略）會社ニ對シ連帶シテ損害賠償ノ責ニ任」ぜねばならぬ。而して取締役監査役の兩者が同時に賠償義務を負擔するときは二者すべて連帶して其責に任ぜねばならない（商法第一八一條、第一八三條、第一八六條、第一八九條）。所が此等重役の責任に關しては――特に今回の休銀問題に關聯して――二種類の反對意見が行はれつゝある。其一は株式會社の有限責任性に根據を置くものであつて、重役をして「私財提供」の義務を負はしむるが如きは株式會社の性質に背反し、一般事業家の企業心を阻害すると言ふ說である。此說は往々にして實業家若くは商業學者の口にする所であるけれども、法律的には全く根據なき俗論である。何となれ

ば、株式會社の有限責任性とは會社株主の出資義務が有限であることを意味するに過ぎない。株式額面金額の拂込をしさへすれば、會社に如何程の缺損が生じやうとも、株主としては最早何等の責任を負ふことなしとするのが有限責任性の精神である。然るに取締役監査役等の業務執行義務は株主の拂込義務とは全然別物である。彼等が其業務執行上善良なる管理者の注意を怠り其結果會社に損害を與へたならば、連帶して賠償の責に任ずべきこと素より當然であつて、其責任は言ふまでもなく無限責任でなければならない。

第二の反對説は商法第百九十三條に論據を置く議論である。同條によると、「定時總會ニ於テ前條第一項ノ承認——財産目錄、貸借對照表、營業報告書、損益計算書等の承認——ヲ爲シタルトキハ會社ハ取締役及ビ監査役ニ對シテ其責任ヲ解除シタルモノト看做」される。從つて、重役が業務執行上善良なる管理者の注意を怠つて會社に損失を與へたとしても、一度株式總會の承認を得た以上彼等の責任は法律上當然に解除されると言ふのが、此種反對説の所論である。けれども、先づ第一に、彼等の責任解除は彼等に「不正ノ行爲」ありたる場合には生じない（第一九三條但書）。從つて、彼等の職務懈怠が法律違反其他不正行爲と認むべき程度のものであるならば、假令株主總會の承認ありと雖も責任の解除を生じない。第二に、本條による責任解除は、計算書によつて知り得べき職務違反に對してのみ責任を解除するものであるか、若くは計算書によつて知り得べきものたると否とを問はず一切の任務違反に對して責任を解除するものであるかに付いては解釋上相當の異論があるけれども、大審院の前例によると「定時總會ニ提出シテ承認ヲ經タルニセヨ、其書類ニ掲記セラレザル事項ハ總會ノ調査承認ヲ經タルモノト謂フヲ得ザレバ、該事項ニ付キ責任ヲ解除セラレザルヤ勿論」であると言はれて居る。從つて此前例によると、假令取締役等に「不正ノ行爲」がなくも、彼等責任の原因たるべき事實が提出書類を通して知り得べからざるものなるときは、假令株主總會の承認ありと雖も未だ責任の解除なきものと解せねばならない。尚第三に、假に重役の責任は第百九十三條によつて解除されたとしても、同條による責任解除は單に會社に關する關係に於て相對的に生ずるに過ぎない。是れ同條が特に「會社ハ取締役及ビ監査役ニ對シテ其責任ヲ解除シタルモノト看做ス」と規定してゐる所以である。此故に、假令株主總會の承認によつて重役の責任が解除されたとしても、之によつて會社の財産を減少し、以て會社の債權者を害し得べからざるは素より當然である。何故なれば、若しも總會が絶對的に重役の責任を解除し得るものだとすれば、總會が過失により又は故意に——重役と通謀して——承認を與へた場合でも、重役の責任は解除せられ、そうして會社債權者も亦

當然損害を蒙ることゝならなければならないからである。此故に、總會が承認を與へやうとも、之によつて會社債權者の利益は害せられない、彼等は——後に述ぶるが如く——民法第四百二十三條により會社に代位して重役に對する賠償請求權を行使し、以て會社資產の充實を計り得るものと解せねばならない。此故に、商法第百九十三條を論據とする重役無責任論は結局何等の理由なきものと言はねばならない。

二　然らば次に休業銀行の重役は如何なる點について職務の懈怠ありたりと言ひ得べきであらうか。

此點について先づ第一に注目すべきは彼等の不良貸付に對する責任である。勿論貸付の不良なりしや否やは多く事後に決定される事柄である。若しも苟も會社に損失を與へた貸付のすべてが不良貸付なりとして非難されるならば、何人と雖も到底安んじて銀行の重役たるを得ないであらう。何故なれば、貸金の回收不能は經濟社會の變化によつて必然に生じ得べき事柄である、如何に注意深き重役と雖も事實到底其種の危險を避け得る筈がないからである。此故に、私は貸付の回收不能に對してすべて當然に責任を負擔すべしと主張するものではないけれども、若しも重役が其種の貸付を爲すに際して善良なる管理者の注意を怠り、或は某銀行に於けるが如く特に緣故深き一會社に對して銀行資本金に數倍する貸付を爲すが如き——善良な銀行家として通常爲すことを躊躇する——不當の行爲を行ひ、或は又重役自らの利害關係を有する事業を救濟する爲め見す〳〵損失を豫期して貸付を行ふが如き不當の所爲があつたならば、會社が彼等重役に對して商法第百七十七條の責任を問ひ得べきは素より當然である。何故なれば、彼等の所爲は正に同條に所謂「任務ヲ怠リタル」ものと言はねばならないからである。

第二に注目すべきは所謂蛸配當の事實である。元來「會社ハ損失ヲ塡補シ且前條第一項ニ定メタル準備金ヲ控除シタル後ニ非ザレバ利益ノ配當ヲ爲スコトヲ得ズ」、若しも「前項ノ規定ニ違反シテ配當ヲ爲シタルトキハ會社ノ債權者ハ之ヲ返還セシムルコトヲ得」る（商法第一九五條）。加之かゝる不法の配當を爲したる取締役乃至監査役は「一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金」に處せられることになつて居る（商法第二六一條）。此故に、今回の如き破綻を見るに至る前既に事實上缺損あるに拘らず事實を僞つて不當の配當を爲した事實があるならば、銀行の債權者は勿論株主をして右配當金の返還を爲さしめ得べく、又若し實際上其返還が不能となつたならば取締役及び監査役は連帶して其損害を賠償する事に任せねばならない。而して吾々は今回休業の悲運に陷つた諸銀行が從來尙相當の配當を續けてゐた事實から推論して如上不法配當の事實が陰蔽されてゐると言ふ疑を抱かざるを得ない

のである

第三に、商法は「會社ガ其資本ノ半額ヲ失ヒタルトキハ取締役ハ遲滯ナク株主總會ヲ招集シテ之ヲ報告スルコトヲ要ス」「會社財産ノ債務ヲ完濟スルコト能ハザルニ至リタルトキハ取締役ハ直チニ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ要ス」(第一七四條)と明定し、且此規定に違反して「破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ怠リタル」取締役監査役等は之を「一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス」(第二六一條)る旨を規定して居る。蓋し會社が著しく其資本を失ひたるにも拘らず重役之を株主に祕して陰に善後の劃策を爲すときは動ともすれば更に株主に向つて不當の損失を加へる虞がある、又會社財産を以て會社の債務を完濟すること能はざるに至つたにも拘らず之を祕して自ら破産宣告の請求を爲さゞるときは其結果會社の內情を知つてゐる債權者は格別善意の債權者は愈々會社の資産狀態が最後の窮境に陷るまで之に氣付かずして特に不當の損害を蒙る虞があり得るからである。無論會社が債務超過に陷つた場合に理事者自らをして破産宣告の請求を爲さしめやうとするのは情に於て相當無理な要求である。理事者としては成るべく內情を祕して會社の信用を維持し以て一陽來復の春を待たむことを希望する素より無理からぬ希望である。けれども、他の一面に於てかくして會社が內情を祕してゐる間に益々悲境に陷り遂に破綻を暴露するの已むなきに至る場合を想像して見ると、若しも以前に於て其所まで立ち至らない間に破産手續をとれば僅かですんだ債權者の損害が著しく增大し、愈々蓋を開けて見ると殆ど債權者に支拂はるべき何物も殘つてゐないと言ふやうな不都合の結果を生むことゝなるのであつて、其弊は有限責任會社たる株式會社について殊に甚しいのである。是れ商法が斷乎として如上の規定を設け、以て自ら破産宣告を請求すべき義務を命じて居る所以である。然るに、從來此規定は多く實際上行はれてゐない。今回の休業銀行についてもそれは一般に遵守されてゐない。若しも休業銀行の重役が逸早く此規定の命ずる所に從つて自ら破産宣告を求めたならば預金者に與へる損害は遙に僅少で濟んだのではあるまいか。然るに、彼等は萬事を隱祕し糊塗し彌縫して終に現在の如き窮境に陷り以て預金者に向つて多大の損害を加へた。重役の職務懈怠にあらずして何であらうぞ。彼等はよろしく商法第百七十七條、第百八十九條及び第百八十六條により連帶して損害賠償の責に任ずべきである。彼等が事情を隱祕するのは回復の春を期待すればこそである、而かもそれを行ふについての責任は飽くまでもこれを負擔せねばならない。事幸に成功すればよし、然らざる場合に於ては飽くまでも因つて生じた損害に向つて責任を負はねばならないのが彼等の立場である。而して此所にも亦彼等が今日所謂「私財提供」を爲すべき法律

的根據の一部が存在するのである。

第四に、株式會社が債務超過の狀態に陷つた場合に取締役として先づ第一に力むべきは株主をして株金拂込の義務を履行せしむることでなければならない。殊に商法によると、若しも現在の株主が正規の催告に應じて拂込を爲さゞるときは、會社は彼等に對して失權手續をとつた上「株式ノ各讓渡人——即ち舊株主——ニ對シ二週間ヲ下ラザル期間ニ拂込ヲ爲スベキ旨ノ催告ヲ發スルコトヲ要」し、かくして舊株主をして拂込を爲さしめ得る、而かも彼等舊株主の責任は「讓渡ヲ株主名簿ニ記載シタル後二年ヲ經過シタルトキハ消滅ス」るのであるから、取締役としては出來得る限り神速に右の手續をとつて極力會社債權者の損害を防止せねばならない譯である（第一五二條、第一五三條、第一五四條）。然るに現在諸休業銀行の爲しつゝある所を見ると、重役等の現に爲しつゝある所は事實上極めて緩漫であつて、舊株主の責任は日に日に解消せられつゝあり、かくして會社債權者の利益は日に〳〵實際上毀傷せられつゝある。かくの如きは會社の取締役として明に其任務を怠るものである。彼等若し神速に拂込請求の手續をとりたらむには正に得べかりし利益がかくして容易く失はれゆくに於ては、彼等は此理由によつても亦商法第百七十七條所定の賠償責任を負擔すべきであつて、此所にも所謂「私財提供」の法律的根據が存在するのである。

要之重役の私財提供には幾多の法律的根據が存在する。彼等の責任は決して單なる道德的責任ではない。飽くまでも裁判所に訴へてまでも強要せられ得べき法律的責任である。

三　然らば彼等が法律上私財を提供すべき責任の範圍は何であるか、それに彼等の任務懈怠の程度如何によつて定まる實際問題であつて、彼等の任務懈怠によつて生じた損害は、それが任務懈怠と相當因果關係を有する限り、すべて重役に於て之を賠償せねばならない。而して其責任は現に「任務ヲ怠リタル」重役等の連帶責任である（商法第一七七條、第一八九條、第一八六條）。

四　無論以上に說明した重役等の責任は會社に對する責任である（商法第一七七條等參照）。從つて其責任を問ふて訴を提起すべきものは會社でなければならない。所が會社が取締役又は監査役に對して訴を提起するについては株主總會の決議を經るか又は「資本ノ十分ノ一以上ニ當タル株主」の請求あることを要する（第一七八條、第一八七條）。然らば、株主等が——例へば重役と通謀して——此種の手續をとらない場合に會社債權者としては見す〳〵之を看過するの外ないのか？　否そうではない。民法によると「債權者ハ自己ノ債權ヲ保全スル爲メ其債務者ニ屬スル權利ヲ行フコトヲ得」（第四二三條）るのである。從つて、會社が重役等に對して正に請求し得べき權利を有するにも拘らず、何等かの理由によ

つて其行使を爲さず、因つて會社債權者の利益を毀害するに於ては、債權者は右代位訴權の規定によつて直接會社を訴へて損害賠償を爲さしめ、以て——會社債權者の共同擔保たる——會社資產の保全を計ることが出來るのである。此故に、現在休業銀行の預金者は此方法によつて直接重役の責任を問ふ手段をもつてゐると言はねばならないのである。

第二　休業銀行と破產法の適用

「會社財產ヲ以テ會社ノ債務ヲ完濟スルコト能ハザルニ至リタルトキハ取締役ハ直チニ破產宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ要ス」ること既に上述の通りである（商法第一七四條）。其外同樣の場合に會社債權者より破產宣告の請求を爲し得べきことも亦素より當然である。然るに、現在休業銀行について爲されつつある所を見ると、破產法は未だ全く其適用を見るに至つてゐない。今後も亦其適用を見るべき傾向を示してゐない。しかし、かくの如きは果してこれを健全なる現象なりと言ふことが出來るであらうか。

元來破產制度は債務超過の際成るべくすべての債權者に向つて公平且充分なる滿足を與へることを目的とする制度である。從つて、債務者が債務超過に陷つた場合に少しも早く破產手續をとる方がより能く破產の目的を達し得る譯合であつて、ぐづぐづ日を過した後愈々切端つまつた際に初めて破產手續に入るが如きは全く破產制度本來の精神に背馳するものである。

然るに、吾國從來の實際を見てゐると、破產制度は殆どすべての場合に於て其本來の目的を達してゐない。企業者は縱令債務超過に陷つても隱し得る限り萬事を隱しつくして、或は無理なやりくり算段を行ひ、或は甚しきに至つては其間にあらゆる方法を用ひて財產の隱匿を計り、かくして愈々切端つまつて破產に陷つた場合には、殆ど債權者に配當すべき何物をも殘さないやうな事例が非常に多いのである。然らば其原因は果して何所に存するのであらうか。

其主なる原因は無論何人も破產に陷りたくない、何とかして破產を避けて悲境を切り拔けたい、否切り拔け得るであらうと言ふ人間普通の情操に存するのであつて、其點は如何にも尤も千萬な事柄である。けれども、債務者がかくして切拔に努力すればする程愈々破產の場合に債務者を害する程度が大きくなるのであつて、破產制度本來の精神から考へると債務者としても大に此點を反省する必要がある。破產制度の目的は債務超過の場合出來る限り公平且充分な滿足をすべての債權者に與へやうとするにある。而かもそれは唯それだけの目的を有するに過ぎないのであつて、決して破產者に制裁を加へることを目的と

するものではない。成程債務者が愈々破産に陥る以前財産隠匿其他債權者を害すべき不正行爲を行ふならば之に向つて充分の制裁を加ふべきや素より當然である（破産法第三七四條、第三七五條等）。けれども、かくの如き破産犯罪は別として、破産制度そのものは毫も破産者に制裁を加へることを目的とするものではない。

然るに、吾國從來の實際を見ると、債務者自らの請求によつて破産が宣告される場合の殆ど皆無なるは勿論、破産宣告の事例は英獨等の諸國に比して極めて僅少である。獨逸の如きにあつては債務者自らの請求による破産宣告が破産事件總數中四割乃至五割に上つて居ると傳へられてゐるのに反して、吾國のかくの如き現象は果して何を物語り又何を其原因としてゐるのであらうか。無論それは債務者が極力破産を避けやうと努力することに原因してゐるけれども、其又原因は果して何れに存するのであらうか。

吾國破産法の權威者たる加藤正治博士は此事實に向つて左の如き說明を與へてゐる。曰く、破産制度本來の目的は債務者が債務超過に陷つた場合に出來得る限り總債權者に充分且公平なる滿足を與へることに存するにも拘らず、吾國の現行法は今尚破産者に向つて或る程度の不利益を加へて居る。即ち第一には選擧法其他各種の法令に於て「破産者ニシテ復權ヲ得ザル者」に選擧權を與へざる等各種の不利益を與へて居る。第二に又現行破産法に於ても破産犯罪の成立について破産宣告を要件としてゐる、債務者が如何に破産犯罪に相當すべき不正行爲を行はうとも破産宣告がない限り事實犯罪の成立を來たさないと言ふのが現行法の主義である（破産法第三七四條、第三七五條）。從つて、事業の破綻に際して財産隱匿其他各種の不正行爲を行つた債務者は、極力破産の宣告を回避して刑罰を免れやうと努力する。而して債務者が此等の不利益を免れやうと努力することが破産事件を少からしめる原因であり、殊に債務者自らの請求による破産宣告を少からしめる最大原因であると言ふのが、加藤博士の說明である（「破産者解放論」破産法研究第四卷三三七頁以下）。

推ふに、現行法がかくの如く破産本來の精神に背馳して或る種の不利益を破産者に加へてゐること、及び破産を不名譽とする一般民衆の傳統的感情は、今尚破産事件を極度に少からしめ、そうして破産本來の精神に反して不當に債權者に向つて不利益を與へつゝあるのである。

現に休業しつゝある諸銀行の如き、若しも事業の破綻が明瞭になつた際に於て、直に破産宣告を受けたならば、債權者の受くべき損害は恐らく今日に比して遙かに少かつた筈である。然るに事實茲に至らざりし所以のものは、一面一般民衆の破産制度に關する無理解と他面現行法の不備とが其原因を成してゐるのである。茲に於てか、吾々は

一面破産に關する法令の徹底的改正を要求すると共に、他面民衆の間に破産勵行の風を興さむことを希望して已まないものである。

殊に——先にも一言した通り——株式會社については債務超過の際「直チニ破産宣告ノ請求ヲ爲スコト」は取締役の責任となつてゐるのであるから（商法第一七四條）、休業諸銀行の取締役の如き支拂停止の當初直に破産宣告を請求すべきであつたのである。而して若しも其事さへ行はれたならば預金者の損害は今より遙に少かつた筈である。私は取締役此種の行動に對して、今尙商法第二百六十二條所定の刑事制裁が要求されてゐないことを不思議とし且——破産制度本來の精神の爲め——心より之を遺憾とする。而して今後一層破産の宣告が勵行されむことを希望し、且破産後其他各種の法令が其必要に應ずべく適當に改正されむことを切望するものである。

第三　休業銀行と轉質の問題

今回の金融恐慌によつて意外の損失を蒙つた者は獨り預金者のみではない。質物を提供して銀行から貸附を受けた債務者の中にも銀行の轉質によつて意外の損害を受けたものが少くないのであつて、其救濟手段を法律的に考察することは亦吾々の責任でなければならない。

金融恐慌の襲來と共に諸銀行はいづれも急遽日本銀行に救濟を求めた。しかし日本銀行は勿論何等か適當の擔保が提供されない限り金融を與へないから、破綻の危急に瀕した諸銀行は擔保物に窮した餘り終に從來自己の債務者から受取つてゐた株券公債其他各種の質物を日本銀行に轉質してまでも金融を受けたのである。無論民法によると「質權者ハ其權利ノ存續期間內ニ於テ自己ノ責任ヲ以テ質物ヲ轉質ト爲スコトヲ得」るのであるから（第三四八條）、諸銀行が其債務者から擔保にとつてゐた質物を其債務額の限度に於て轉質したに過ぎないのであれば、事實上何等の問題は起らない。何故なれば、債務者は本來銀行に支拂ふべかりし債務額と同一の金額を日本銀行に支拂ひさへすれば、無事に質物を取戻すことが出來るからである。

所が、現在の實際に於ては、例へば銀行が一萬圓の貸附を爲すに際して時價一萬五千圓の公債を擔保にとり、そうして銀行は又それを擔保にして日本銀行から一萬三千圓の融通を受けて居る結果、債務者は日本銀行に——自己本來の債務額以上たる——一萬三千圓を支拂はなければ公債を取戻し得ないと言ふやうな事例が少くない。かくの如き債務者は果して救濟に値しないのであらうか、否。

先づ第一に、銀行が擔保をとるに際し債務者をして之を他に轉質し得べき旨の特約を爲さしめた場合を想像して見る。而して又其中に、

（一）轉質によつて借受け得べき金額が本來の債務額を越へ得べき旨

を特約してゐる場合、（二）越ゆ可からざる旨を特約してゐる場合及び、（三）其點について何等の特約を爲してゐない場合の三を想像することが出來る。（一）及び、（二）の場合については勿論何の問題も起らない。所が實際上最も多い事例なりと傳へられてゐる（三）の場合に、債權者は果して本來の債務額を超へて有效に轉質を爲し得るのであらうか。其如何は無論轉質契約の意志解釋によつて決定せらるべきである。而して世上では其意志如何に關係なく皆く超過轉質を行ふことを一般の慣例としてゐるやうであるけれども、私はそれを以て明かに違法の慣例なりと解せざるを得ない。何故なれば、特約なき以上質權者の轉質し得べき限度は條理上本來の債務額を超え得る筈がないからである。

第二に吾々は轉質について何等の特約なかりし場合を想像して見やう。此場合は言ふまでもなく正に上述民法第三百四十八條の適用を受くべき場合である。從つて質權者が本來の債務額を超へて轉質を爲し得ざること素より當然なりと言はねばならない。

かくの如く質權者が法律上適法に爲し得べき限度を超へて爲した轉質は其超過額について法律上當然に無効である。從つて、質權者が如何程の超過轉質を爲さうとも、債務者は其本來の債務額を轉質權者に辨濟して質物の返還を請求し得べき譯合である。所が、先づ第一に質物が動産——無記名債權を含む（民法第八六條第三項參照）——である場合については、「平穩且公然ニ動産ノ占有ヲ始メタル者ガ善意ニシテ且過失ナキトキハ即時ニ其動産ノ上ニ行使スル權利ヲ取得ス」（第一九二條）る旨の規定が存在する結果、轉質權者が善意無過失で轉質を受けた以上、縱令本來は違法從つて無效なりし超過轉質と雖も右規定の適用によつて有效となり、從つて債務者は轉質金額のすべてを轉質權者に支拂はなければ質物の返還を請求し得ないこととなるのである。無論因つて生ずる損害を最初の質取主に向つて請求し得べきこと素より當然であるけれども。第二に、質物が記名式の株券公債等有價證券である場合に於ても、例へば其質入が白紙委任狀附讓渡の形式によつて爲されてゐるやうな場合には、質權者は更に之を他に轉質するであらう。而して其轉質が違法の超過轉質であるならば法律上無效たること言ふを俟たないけれども、轉質權者の側より見れば其行爲の違法なる超過轉質であるかどうかは容易に之を知り得る筈がない。從つて彼れは「惡意又ハ重大ナル過失ナクシテ」「金錢其他ノ物又ハ有價證券ノ給付ヲ目的トスル有價證券」を取得したる者をして法律上保護を受け得る、縱令本來の質入主から返還を求められても轉質債務金額の辨濟なき限り證券を返還する必要がないのである（商法第二八二條、第四四一條）。

此故に、例へば日本銀行が諸銀行に融通を爲す際見返品としてとつ

た公債其他の有價證券は、それが事實上違法の超過轉質たる場合に於ても、融通金額全部の辨濟なき限り其返還を爲す必要がないのであつて、結局損失を蒙るものは最初の質入主である。無論彼等は違法の超過轉質を爲した銀行に對して質物の返還乃至損害賠償を請求し得るけれども、銀行に其資力がない以上結局損失を受けるのは彼等でなければならない。

以上は現行法の解釋上當然に出て來る結論である。しかし、實質的に考へて見るとそれは明に不合理である。法律としては飽くまでも最初の質入主の利益を保護すべき何等かの方策を講ずる必要ありと言はねばならない。大審院は此點について「新ニ設定シタル質權ガ被告人ノ有スル質權ノ範圍ヲ超越シタルトキ、即チ債權額、存續期間等轉質ノ内容範圍態樣ガ質權設定者ニ不利ナル結果ヲ生ズル場合ニ於テノミ被告人ノ行爲ハ横領罪ヲ構成スルモノ」となし、刑事制裁の方面から違法なる超過轉質を戒しめる方策をとつてゐるけれども、國家としては更に民事的の方面から最初の質入主を救濟する方法を考へる必要がある。

此點について吾々の此際特に氣付く事柄は、有價證券の質入に關して現行法の規定が甚しく不備なことである。先づ第一に無記名有價證券は普通の動産と同じく單に其占有を債權者に移轉するによつて質權を設定し得る。倉庫證券の質入については特に質入裏書の制度が設けられて居り、必ず「債權額其利息及ビ辨濟期ヲ記載スルコトヲ要ス」ることになつて居る（商法第三六七條）。從つて、更に之を轉質にとらむとする者は容易に其の超過轉質なりや否やを知り得る。然るに、普通の無記名有價證券については全く質入裏書の制度が設けられてゐないから、超過轉質も全く自由に行はれ得る。そうして其結果最初の質入主に向つて意外の損害を加へることがあり得るのである。次に記名の社債及び登錄公債の質入については特別の對抗條件が規定されて居る爲めに如上の不都合を生じないけれども（民法第三六五條、明治三十九年法律第三十四號第三條）、記名株式及び記名公債については民法第三百六十四條第一項の適用なく（同條第二項、明治三十七年法律第十號參照）白紙委任狀附にて自由に輾轉質入し得ることになつてゐる爲め、超過質入の弊は極めて容易に生じ得る。何故なれば、轉質をとらうとする者は證券面其他から其超過轉質なりや否やを知り得る途が全く存在しないからである。此故に、有價證券の超過轉質の弊を防ぐ爲めには、單なる證券の占有移轉による質入を不可能ならしめ、質入裏書若くは──記名社債に關する民法第三百六十五條に於けると同樣──株主原簿其他證券原簿に質權の設定を記入するが如きことを要求すべきであると、私は考へて居る。

尚此問題については右の外にも立法上考ふべき點が少なくないけれども、ともかく何等かの立法によつて如上の不都合を除くことは此際の急務である。私は立法の當局者が特に此點に意を用ひて金融恐慌の教訓を無に終らしめざるやう努力せむことを希望して已まないものである。

（了）

全日本の知識階級に與ふ

藤森成吉

まづ此の命題が決して私の自發的意志によつて爲されたのでない事を、讀者諸氏にことはらう。これは編輯者に依つて課せられたのだ。此の辯解は卑怯でも、虚飾でも、又徒らな謙遜でもない。自分を顧みて、私はかかる學識と洞見と自信を要する題目が自分に不適當なるを、あまりに知り過ぎてゐる爲めだ。

にも係はらず、私は此の課題を引き受けた。それは私の內心的傲慢の爲めでも、物質的必要の爲めでもない。丁度日本の知識階級の大轉廻期に際して、敢て知識階級の一員として（決して單なる藝術家としてではなく）全諸君に訴へ、重ねて諸君の精到な意見に聞かんと欲する情熱を有するが爲めに外ならない。

今まで多くの、むしろ無數の宣言が知識階級へ向つて投げられた。バルビユツスをして語らしめよ。「知識階級への文藝的宣言や檄文が、今のわれ〱の時代ほどウヨウヨ出たことは嘗てない。……そうしてそれは理の當然だ。さて、そうした樂譜にスツカリ埋め込まれてゐるとは云へ、又そうした調子に耳を聾されてゐるとは云へ、——そうしてそれだから尙の事——今度はわれ〱が他の一切を超越して、われ〱の檄文を持ち出す番だ。（新潮正月號、「知識階級への宣言」武林無想庵氏譯。）

バルビユツスの立場に私は同感する。が、彼の新「宣言」そのものには、遺憾ながらなほあまりに不足な、あまりに啓蒙に過ぎない物を見出す。その呼びかけで、彼はただ一般的なコムミユニズムの理論を說明し、反動時代への反抗を促し、又アナアキスチツクな思考への駁撃を試みてゐるにとどまる。更に彼は、特に藝術家を目ざして發言してゐる。その程度の宣言も必要でないと、むしろ必要過ぎないとどうして云へやう。が、彼が云はんと欲するほどの事は、すでにブハーリン等に依つて盡されてゐる氣がする。もし彼が、彼自ら云ふ如く「知識階級及び藝術家等の第一の義務は、その彼等の双肩に荷つてゐるところの、社會的のハツキリした役割をば識別し且つ決定する事だ」（これは全く正當な提案だ。）と思ふなら、まづ彼がその說明に用ゐてゐる一般的な敍述の前に（もしくは後に）、知識階級そのものの具體的、從

つて科學的な檢討を試みる事が當然であらう。——でない限り、此の「頭腦勞働者」の一群は、決して心底から彼の欲する方向へ轉廻しやうとする決心を固めないであらう。理論的（從つて現實的）に說明されん事を望む者へは、その要求される手段に依る事を要する。此の點に於いては、彼バルビュッスより、むしろ日本の若き無產階級文學運動の同志諸君の言說の方に遙かに適切な、遙かに重要な檢討を見出す事を私は誇りと考へる。

　さて、直に本質的檢討へ入らう。まづ知識階級とは何ぞや？　これを具體的に指示するなら、官公吏、會社員、技師、店員、軍人、學者、教師、學生、文筆業者等々を意味する。大約すれば、俸給生活者又は自由職業者の大群だ。更に抽象化すれば、所謂「頭腦勞働者」の一群だ。此の定義に從へば、それはかの筋肉勞働者（所謂プロレタリア）の一種類、もしくは姉妹階級と考へられる。

　その本質に於いて、又それはさうでなければならないのだ。今私が（又我々が）問題にしてゐるやうな知識階級は、全然資本主義時代の一產物、然も工場勞働者（プロレタリアート）と並んで顯著なるそれだ。それは、近代的大企業組織の發展に伴つて發生したところの分業過程（筋肉と頭腦との）の一現象だ。それは又、資本主義社會の統率的組織要素としての現象だ。

　然し此の後者の意味に於いて、（すでに幾分前者の意味に於いても）それは甚だ曖昧な意義を帶びて來る。あたかも、それはプロレタリア階級と資本家階級との中間に位するところの中間層、獨特階級を示す名稱のやうに見える。生產條件に於いてのみならず、（むしろその故に）物質條件に於いて、彼等は從來所謂勞働階級よりも惠まれた境遇に置かれた。それ等は、延いて彼等の意識狀態に影響した。彼等は、あたかも無產階級と何等の共通點を持たないところの、むしろ資本家階級の一部分（手先）、乃至一個獨立（又は半獨立）の階級の如くに自ら考へ、他も然く信じた。

　これを換言すれば中產階級であり、小ブルジョア階級だ。嚴密な意味に於いては、中產階級乃至小ブルジョア階級が即ち知識階級とは決して云へない。もしこれを生產の意義から離れて、單に有產（多少の）有閑階級の意味に從ふならば、ブルジョア階級も亦大體知識階級とどうして云へなからう。然しながら、從來の所謂知識階級が小ブルジョア階級の一部分であり、（乃至そのうちに最もその多數を占め）、從つて最もよく小ブルジョア意識を代表し得た事は、（殊に日本の過去の現實に於いて）恐らく何れも異議がないであらう。

　然し、我々は當該（知識）階級を出來るかぎり生產上の意義に於いて見なければならない。これは決して現實から遊離する事ではなく、反つてその最も正しい（少くとも現在及び將來の）認識に達する唯一の方法だと考へる。豫め結論を約言するなら、從來の比較的[illegible]たる、然も大體に於いて最も小ブルジョア、イデオロギイを代表し得たところの知識階級が、資本主義社會の進行過程に伴つて、（即ち一方中產階

級の沒落過程に伴つて）如何に極少部分を除いてすべて無殘に無産階級化（生産的に、又物質的に）し、延いてその意識が鋭く無産階級化し、その本質に立ち返つて筋肉勞働階級と密接不離な關係聯絡を獲得しつゝあるか、と云ふ事を私は論究したいのだ。

が、その前、知識階級（無論生産過程に於ける）の特異な諸點に就いても少し綿密な研究を必要とする。特異なとは、プロレタリアート（主として工場の）とのあいだの顯著な（又當然な）意識的差別だ。前述の、從來の分業過程並びに生産組織上の位置に結果する意識の差違は、その第一だ。（或は最後の、第三の差違と呼んでもいい。）

第二は、その職業的性質に依る當然の差違だ。これは、一部分第一の差違に聯絡する。即ち、知識階級は所謂頭腦勞働者の名を以て呼ばれるとほり、直接生計生産に接觸してゐない。關係は充分してゐる。（たとへば工場に於ける技師や事務員のやうに）言葉を換へて云へば所謂經濟的基礎機構からは間接の地位に立つ。（ハンマアを振る職工と計算する事務員とを比較せよ。）

此の問題を、所謂上部構造的職業に從事する知識階級に持つて來れば、プロレタリア階級とのあいだの意識的差違は愈々顯著になる。抽象的に說明する事を避けて具體的な例に就かう。たとへばその（當該知識階級の）最も著るしい職業、學者（哲學、歷史學、法律學その他の）を採らう。彼等は職業として、乃至研究の對稱として、常に概念（乃至概念化された事實）を取り扱つてゐる。概念から概念へ、抽象から抽象へ、……これこそ彼等の全世界だ。（此の場合、概念と云ふ言葉は充分廣い意味に使はれていい。別言すれば、上部構造的全世界と云ふほどの）彼等は、論理からして論理を生産してゐる。そう云ふ日常生活、乃至日常思考修練の結果はどうなるか？　代つてブハーリンをして語らしめよ。「……の原因は、同志エム、エヌ、ポクロフスキイが美事に發見した。史家は、第一に彼の個人的地位よりすれば一個の精神的勞働者、即ち知識人であり、次に一層特殊的な標識へ移るならば、彼は操觚勞働者、即ち文筆業者である。彼、歷史家に取つては、精神的勞働を歷史の主要事となし、詩や小說から哲學的論策や科學的研究に至る文筆上の著作を、文化の根本的事實と考へることは最も自然なことである。……否、更に『精神的勞働者は──而して之は可成り自然なことであつた──エヂプト諸王へ讚歌を奉つたと同一の誇りに捉へられた。彼等は彼等が歷史を作ると信じ始めたのである。』尙吾々は之に附加するに、此の職業見地が、支配階級、即ち大多數を指揮した少數者の階級見地と全然一致したことを以てせねばならないであらう。……（後略）（史的唯物論、楢崎勳氏譯）」

かゝる精神的勞働者（知識階級）の誤りは、今や言を待たない。が、そんな誤りに容易くも陷るほどそれほど、彼等は經濟的基礎機構から日常離れて生活してゐると云ふ特徵を見逃すわけには行かない。此の生活事實が、（誤りに陷ちないまでも）如何に彼等の意識を形づくるか、は見逃してならない第二段だ。

そんなら、かくも彼等が知識的生活に沒頭する事は誤りであるか？誤りだと同時に誤りでない。誤りと呼ぶ理由は、如何なる抽象も事實を離れては存在しないからだ。(延いて理論と實踐とのマルクス的同一については、あとへ行つて述べるであらう。)誤りでないと云ふ理由は、かかる程度の分業と沒頭に依つて初めて社會はその充分な利益を獲得し得るからだ。ドイツの一理論家の言を引用せしめよ。「むしろ、確定の法則に從ひ、巨大なる社會的實驗の道程に於て、次の事が明かにせらるるに相違ない。卽ち若し社會がそのインテリゲンチヤをして宵に一時間、一日のみならず、『永遠にわたつて』卽ち貯藏的に思考させ、實驗させ、且つ生產せしめるならば、それは社會に取つて、より多く利益を齎すものである事、社會が一層榮え一層有利に鬪爭し得られるであらうことを。——精神的貯藏經濟の理念は、自由研究者並に自由研究の獨特なる事實を說明する唯一のものである。」(カー、アー、ウキツトフオーゲル、「マルクス主義科學概論」田口憲一氏譯。)

然も、如何に此の意味の沒頭、蓄積(具體的に云へば、或る程度までの「科學の爲めの科學」「藝術の爲めの藝術」)が好結果を齎すとしても、その境界突破的危險(殊に資本主義社會にあつて)は儼存する。マルクス的理論以外に此の危險を克服するに足るものはなく、然も從來マルクス的に思惟する事を知らなかつた日本の知識階級が、如何に多くのかかる誤りを犯し、又犯さないまでもその特異的風貌を持つたかは容易に察せられるであらう。

ここで第二原因の檢討を措き、第三の原因へ移らう。それは、彼等の日常生活の孤立化だ。そこから又知識階級の著るしい意識的特徵が生れる端的な例を採らう。たとへば我等文藝家を見よ。此の世界に於いては個々人の「獨創」(內容表現共に)を原則とする。そこには所謂生產上の分業は當て嵌まらない。所謂工場的集合勞働は適用出來ない。彼等は偏へに「自己の世界」に沈潜する。彼等のあいだの連結は、精精個人的乃至職業的聯結に過ぎない。それ(後者)すらも、つい近年まで日本では實現されなかつたのだ。(プロレタリア文學者の團體や運動は、措いて後段に譲る。)それほど彼等は「孤獨的」に「非團結的」「非社會的」存在だつたのだ。

別言すれば、彼等は全く個人主義的だつた。(それは又、彼等のプチブルジョア的境遇に極めて適切な、相應したイデオロギイだつた。)彼等がその敏感性の故に(實はヨリ多く、職業的性質の必然性の故に)社會現實を觸感し始めた時、、、、、、、、、、、、方向へ流れたのは、當然すぎるほどの當然だ。それは、現代資本家の大工場に於いて否應なく協同的勞働に割り當てられ、緊密な同一利害關係に結びつけられてゐるプロレタリアートが、、、、、、、、、、、、方向へ趨くと殆んど同程度の。

知識階級の範圍は(前述の如く)廣汎だ。從つて、その各種類に依つて、甚しい程度上の差別が存在する。が、以上大體列擧したやうな(三個の)原因に依つて、從來の知識階級がプロレタリア階級に對し

て如何なる差別乃至特徴を持つべきだつたか、又持つてゐたかは恐らく讀者の承認されるところであらう。

　然しながら資本主義の段階は進み、社會狀態は刻々に變轉する。その位地に於いて、その思潮に於いて、資本主義の組織と發展に取つて缺くべからざる要素であり協力者だと認められたところの知識階級は、今や急激にその位地を滑り出し、その思潮を失はうとしつつある。語を換へれば「急激なる無產階級化」だ。彼等のうちの極少部分を除き、すべて恐るべき無產と無位地によつて一齊に異樂されつつある。どころか、すでに或る者達は、所謂プロレタリアよりも更に貧困な狀態に迫られてゐる。今や彼等は全くプロレタリアートと同じく、資本主義、、治下の失業と搾取の鐵則に當面させられたのだ。知識的勞働者の名は、その實を恢復し、又完成せんとしてゐるのだ。

　註一。此の現實を裏書するものは、近來漸々として新聞雜誌上に報告論議されるところの知識階級の問題だ。最近には、中央公論正月號集中課題「大學卒業生の就職難と知識階級の沒落」を見よ。「沒落」とは、まさに「特權的」それの沒落の意味でなければならない。

　此の變化は何によつて將來されたか？　無論その原因は、識者の聲を攫へて承認してゐるとほり、資本主義組織の展開にある。それが最後の、獨占的帝國主義的段階に達すると共に、又その順調な餘裕ある時代を過ぎて沒落期に入ると共に、頭腦勞働者をも用捨なく一般勞働法則の適用に委し出したのだ。萬一を僥倖するをやめよ。かかる意味に於いて、知識階級の窮乏と不景氣に、すでに資本主義の存する限り動かすべからざる運命だ。

　此の事實は、從來知識階級がその根據としてゐたところの小ブルジヨア的生活意識（此の標準を彼等の最高標準乃至信念として、彼等は嘗て資本主義をも批判した。明治大正の日本文學者の思想的主潮を見よ。が、その事は、勿論決してプロレタリアートに味方する事ではなかつた。彼等の兩刄の劍は、右に向つて漠然と資本主義に觸れると同時に、左にプロレタリアートをも切る事を敢て躊躇しなかつた。）と全く兩立しない。「聰明な」知識階級は、此の矛盾の前に甚しく狼狽したが、彼等の狼狽に頓着せず、事件は小ブルジョア階級の分解過程と共に進行した。ここに意識的一大動搖が生じた。

　此の現象は果して日本だけの物であるか？　否、それは世界全般の知識階級の物だ。あたかも資本主義組織が全般の物だと同樣に。――更に精密に云へば、帝國主義的段階に立つ世界諸國に共通の現象だ。再びバルビュッスを引用せしめよ。「知識階級の一般的心境について云ふと、不確實な時代だ。右往左往の時代だ。探求の時代だ。不安の時代だ。（中略）かれ等は道をさがしてゐる。新奇をさがしてゐる。一變動が用意されてゐる事をば、かれ等はしみじみ感じてゐる。が、誰がそれを欲してゐるのか分らないのだ。（知識階級への宣言。）

　その動搖が、「知識階級への文藝的宣言や檄文が、今のわれわれの時

代ほどウヨウヨ出たことは嘗てない」理由なのだ。その現象の秘密の鍵を、今指示したのだ。然らば解決は？　それは最早上述の（知識階級の）新位地の說明によつて充分であらう。が、もう一層私は愼重に論究して行かんと欲する。

すでに、その生活の急激な貧困化、無產階級化に依つて、知識階級中の最も敏感精銳な分子はプロレタリア意識を獲得した。（獲得せざるを得なかつた。）が、ここに第二段の知識階級特有の過程が始まる。自己と同時に社會一般の動搖現象に對して、彼等は彼等の特質に應ずる理論的解明乃至解決を要求する。彼等は、その爲めにあらゆる方向へ飛びつく。が、最後につかむところの物は、そしてそこにこそ彼等の理論的、、、を見出すところの物はまさにマルキシズムに外ならない。何となれば、資本主義社會を解剖し、そのあらゆる現象を說明して最も精到剴切な物はマルキシズムだからだ。それは、單に社會學經濟學の範疇にとどまらず、哲學の分野にまで徹底する。此の意味に於いて、最も知的勞働に慣れ、最も思索を得意とし、又全面的見とほしに於いて有利な地位に立つところの知識階級が、逸早く（プロレタリアートをも越えて）マルキシズムの精密な獲得を獲得する事が考へられるであらう。

が、かかる學術的分野に於いては、もう一つの有力な推進力が加はる事を見逃してはならない。それは、すでに資本主義社會に於いては、所謂「純正な」科學を發展せしめ得ず、眞摯な科學的欲求を滿足せしめ得ない事の自覺だ。ブハーリンその他によつて明快に指摘された、純粹科學研究に對する帝國主義的資本家階級の阻止の傾向、然も時と共に益々決定的にならうとする此の阻礙現象に就いては、敢て槩說しないであらう。ただ一言、その理由をウヰットフオーゲルの諷刺的批評に借りて說明しやう。

「資本主義はその墓掘人を創り出す！資本主義は、その科學的要求の完全なる充足の爲めには、研究者に『自由なれ！』と叫ぶ必要があり然かも彼は、研究者が今やこれ等の合言葉の一つ〱を眞面目に（餘りに眞面目に！）考へてゐると云ふこと、從つてその普及が、命令者自らの利益を漁る喉頭にメスを擬するやうな認識がブルジョア社會の命令の下に生產せられる、と云ふことを、體驗しなければならないのだ。」（マルクス主義科學概論）

ここにも又御手製の墓掘人か？　それは、全くプロレタリアートの使命と同一ではないか。腹背共に敵を受くる底の資本主義も、又多忙多難なるかな！

然し、何故かかる叛逆的現象は必然に生ずるか？「――同樣に（藤森註、ブルジョア的產業革命の進展を、ブルジョアジイが欲しなくなつたと同樣に）又ブルジョアジイは、最早近代の大ブルジョア的イデオロギイ（實證主義の意味に於て）を欲するものではない。何となれば、彼等は此等の精神的革命は「餘りに廣く」波及し、マルキシズムの航路に迷入らなければならない事を知つてゐるからである。」（同前）

かくして、否應無しに知識階級はマルキシズムの研究にまで到達した。ここに第三段の現象が待ち構えてゐる。彼等は、今や此の研究洗禮に依つて殆んど質的變化を經驗しなければならない。變化とは、第一、理論と、、、、、、第二、國體精神化。

何となれば、マルキシズムの精髓は此の二つに表現されるからだ。それはあくまで理論的（俗學的でない意味に於いて）だと同時に、具體的、現實的だからだ。それは眞實の意味に於ける、、の哲學であり單に「世界を解釋」するにとどまらず、これを「、、」せんと欲する意味だからだ。同時に、それは新興プロレタリアートの國體意識を代表して、鋭く個人主義的それに對立する。

これこそ、まさに先きに（從來の）知識階級の特性として擧げた二點の根本的破壞だ。（即ち、上部構造的雰圍氣の中に、概念と抽象を追つて生活する事に依つて生ずる特性と、孤立的、個人主義的、アナアキズム的生活に依つて生ずる特性との破壞だ。もう一つの新き特性を形づくるもの、即ち特權的、中間階級的、乃至資本家の手先き的位地から生ずるそれの崩壞は、すでに前提だ、ここに云ふを待たない。）

此の破壞過程を通過したあとに立つ者は、全く新しい知識階級だ。それは更生せるインテリゲンチアで、知識新人だ。文字どほり、彼は頭腦勞働者であり、深く正確な認識と、果敢な實行力鬪爭力を併せ持つところの、、、インテリゲンチアだ。かくの如き新インテリゲンチアは、空想の乃至推論上の産物であるか？　否、かのマルクス、エンゲルスを先達として、歐洲の勞働運動史乃至社會運動史（就中ロシアを見よ）には、かかるフイギュアの無數が充滿してゐるではないか。日本に於いても、おくればせながら、然し急激に、此の種類の新人が勃興した。殊に此の數年來の社會的狀勢に伴つた、おどろくべき各種の趨勢を見よ。

まづ學生のあいだには、社會科學研究の機運が潮のやうに漲つた。直接生活の問題に苦しむ事尠いところの、然もあらゆるブルジョア的教育機關に依つて蜘蛛手に敎へ込まれたところの彼等青年のあいだの此の情熱は何事を語るか？　然も周章した學校及び政府當局によつて、露骨に壓迫されればされるほど、將來の一層の就職難を以て脅迫されればされるほど、（否、むしろその爲めに）更に根強く旺盛になつて行くところの此の研究的情熱は何を物語るか？　然もその「社會科學」は、全く「マルキシズム」の同義語（シノニム）ではないか。今やスポーツと共に、マルキシズムは日本全學生の分野を兩斷するとまで云はれてゐるではないか。

更に藝術家……又はヨリ狹く文藝家の世界を見よ。此の最も個人主義的イデオロギイに適應した職業乃至生活を持つところの一群に、近年目ざましくも發展した新しい運動を見よ。さしも强硬な既成文壇の對抗と否定にも係はらず、否、一部社會運動家のあいだに於いてさへの反對と冷笑にも係はらず、着々としてその苦艱な運動を進め、今や何人も否認する事の出來ない新興文藝的大勢力となつてゐる現實を見

よ。それはマルキシズムに依つて文藝理論を革め、作品を變へ、更に遡つてはあらゆる視覺と風貌と生活様式とを一新しつつあるではないか。その科學性、その行動性、その團體性に於いて、嘗てこれに類似する如何なる文學運動が日本に在り得たか？

更に眼を一般知識階級の領野に轉ぜよ。マルキシズムはまさに時代的流行の観を呈するではないか。單に改造社又は岩波發行の「資本論」翻譯廉價版の賣行きに徴しても、如何なる方向へ知識的欲求が轉じつつあるかを證して餘りあるではないか。その需要が、決して知識階級に於いてのみならず、プロレタリアート方面に於ける欲求をも示すと云ふか。(註二。)勿論、私は決してその事實を(たとへ如何に資本論の味讀その物が知識的頭腦を要求するとしても)認めるに決して吝かな者ではない。然し、從來の知識階級に於いても如何にかかる知識が最も缺け、その熱望が所謂讀書階級の大きな流れとなつて現れたかを、充分公平に認めなければなるまい。

註二。ここに又、新しき勞働者を生み出す。彼等は、前述の知識新人に對して勞働新人とも呼び得るであらう。即ち、所謂勞働者階級から出て(乃至その中にあつて)頭腦勞働者たる群だ。しばらく生産的意義を離れて此の名稱を考へるとしても、彼等は從來の知識階級よりも遙かに眞實の知識と認識と自覺と、又熱烈性と、、、、を有する。彼等にあつて、理論と實踐は全く辨證法的に唯一無二だ。此の型と、全身を擧げて勞働運動社會運動に携はるところの新知識階級とが、如何に引き離す事の不可能な兄弟であるかは架說するを要しないであらう。すでに所謂「新知識階級」のあいだに差違はない。

これ以上、知識階級の各種類の實例を擧げる必要はあるまい。ここに於いて最後に問題となるのは、彼等新知識階級の究極だ。その徹底性に於いて、彼等は筋肉勞働者(工場乃至農村プロレタリアート)にまで移り行かなければならないかどうか？　今まで述べて來たところに依つて、此の答案を考へるよりもむしろ質問を無駄としなければならないと讀者は考へるであらう。そのとほりだ。が、これは今まで餘りにもたびたび誤つて提出されたところの疑問なのだ。それが單に日本に於いてのみでない事を、次のウヰットフオーゲルの答案に依つて知られるであらう。

「とは云へ、だからと云つて、これ等の敍述者(藤森註、マルクス的)や編輯者(同註、勞働新聞の)が、今やプロレタリヤとなる！と云ふのではない。それは第一に不可能であるし、第二には、決してそのことは運動に役立たないであらう。然し一度自ら勞働階級の住宅難、鑛坑、工場及びその他の分野に於ける彼等の運動を暫くでも共にしたものは――それは勿論當然一回的體驗のみであつてはならない。規則的な間隔で繰り返し得る體驗でなければならない。――苦しい、稀有なプロレタリアートの日常生活をプロレタリヤ階級に屬する者と共にしたる者は、彼が大學の圖書館や教室を出て、プロレタリヤの木賃宿や集合所に一度も來なかつた時とは、全く異つてその教課を開始、實行するであらう。」(マルクス主義科學概論。)

此の言葉に、私は（他の所ではやや著者と意見を異にするとしても）全く同感する。私が嘗て勞働體驗を試みた時、徒らに嘲笑するより外の批評的方法を知らなかつた人々に向つて、敢て此の言葉を贈るであらう。

然しながら更に附加しやう。如何に知識階級が新生しても、彼等は決して彼等自ら解放の主體となる事は出來ないと云ふ事を。——單獨に解放運動の主體及び客體となり得ない事は、所謂プロレタリアートの場合でも異らない。それは農民一般、知識階級、その他あらゆる被壓迫階級の協力を待たずしては、決してその大目的を達し得ない事はレエニンの言葉を待つまでもない。が、新しい社會への根本的動力となるものは、ただプロレタリアートあるのみ。ブハーリンも擧げてゐる如く、それは彼等があらゆる生活條件に於いて完全してゐるからだ。（ここで、農民と知識階級との生活條件的比較を試みる事は、決して無駄でないであらう。が、急ぐ爲め、讀者諸君に私はそれを委ねる。）

ここに於いて、敢て私は新知識階級に課せられた當面の任務を擧げるであらう。第一、更にマルキシズムの敎ふるところに從つて、自覺と、、、（無產階級解放運動の）（その個々の當面の問題はここに揭げない）、、、、！第二、マルキシストとして、ヨリ精細な科學的研究の發展の道（たとへば上部構造諸部門——藝術の場合には藝術理論の完成等）を推し進めよ！藝術の作品行動に於いても協力せよ！かくて相共に、新頭腦勞働者として結びつき、プロレタリアを支持して共同の解放の大目的へ邁進しやうではないか。多事なるべき一九二八年の初頭に當り、敢て此の（粗雜なりとも情熱に滿ちたる）言葉を全知識階級諸君に贈る！

1928・1

マルクス國家論と政治批判の方法論

佐野學

(一)「最善の國家形態のための鬪爭」

過般の府縣會選擧を中心契機として、わが勞働人民の間から諸々の新しい階級的運動が發展してゐる。工場代表者會議、農民大會、村民大會、町村政革新同盟、檢閲改正期成同盟、借家人同盟、婦人同盟、靑年同盟等々、たゞにプロレタリアート及び貧農の間からのみならず、中小農、無産小市民、小ブルジョアの間からも新しい性質及び形態を具へた運動が發展してゐる。(これらの運動は來るべき第五十四議會を中心として一層發展するであらう。)是等の諸運動を特徴付けてゐる最も大きい特色の一つは、彼等がその鬪爭過程において次第に國家權力の作用、、、、所在等に關する、、、な問題に直面するに至つたことであらう。勿論これに關する意識はまだ決してハツキリしてゐない。その經濟的社會的生存條件から、全ての勞働人民の指導者たるべく必然づけられてゐるプロレタリアートの間ですら、それはなほ鮮明でない。

プロレタリアートは速かにこの問題をとりあげねばならぬ。不鮮明なものを鮮明なものとなし、自然生長的なものを目的意識的なものにすることは、プロレタリアートの任務である。この問題は狹くより實在してゐる。階級鬪爭の最も根本的な問題は權力の問題に外ならないのである。だが社會上、既に實在せるものは直に現象となつて萬人の眼に映ずるものでない。社會上に實在せるものから、それを蔽ふてゐる一切の外皮をとり去り、その本質を露はに全面的に描き出すことは、マルクス主義の唯物史觀に照らしてのみ可能である、と吾々は考へる。國家權力の問題はブルジョア科學の諸領域——國家學、憲法學、國法學、行政學等——において、それぞれブルジョア的な目的と方法との下において詳密に論ぜられてゐるが、今日、この問題に關するプロレタリア的認識が必要となつてきたのである。プロレタリアートにとつて、この問題を解決するための鍵はマルクス國家論の外にない。

マルクスが「新ライン新聞」の雄渾な一論文のなかで書いた「最善の國家形態のための鬪爭」といふことは、プロレタリアートの不斷の任務であるが、今日特にそれを想起する必要があるやうに思はれる。彼は次の如く書いてゐる。

「吾々民主々義者は、吾々の前に口を閉いてゐる深淵に惑はさるべきであらうか？ 吾々は、國家の新形態のための諸鬪爭は無意味であり、幻想であり、空虛であると妄想することを許されてゐるであらうか？ 弱者のみ、憶病者のみ、かくの如き問を發する。ブルジョア社會の條件そのものから發生する葛藤は最後まで戰はれねばならぬ。それは一片の理屈を以て片付けることはできない。最善の國家形態とは、その中で諸々の社會的對立物が暴力的でなく、即ちたゞ人爲的にのみ、たゞ外觀的にのみ、緊ぎとめられてゐるところの形態である。最善の國家形態とは、その中で諸々の對立物が、、の鬪爭となつて衝突し、かくして始めて解決に到達するところの形態である。」（メーリング編遺稿集第三卷一一八頁）

マルクスは諸々の社會力が一切の傳統的な、、的な外衣を脫ぎ捨て、對立し、歷史の進行をヨリ容易ならしむるが如き國家形態を最善の國家形態と名付けたのである。實際、エンゲルスが

「ドイツに於ては、國家に關する迷信が哲學からブルジョアジー及び多數の勞働者すらの一般的意識に移つてきてゐる。哲學上の觀念に從へば、國家は「理念の實現」又は哲學的に翻譯された地上神國であり、即ち永久の眞理及び正義が實現され又は實現さるべき領域である。このことからして國家及び國家に關係してゐるあらゆる事物に對する迷信的信仰がおこる。吾々は幼年時代から全社會に共通なる事務及び利益は、それがこれまで處理されてきた方法、即ち國家及びその高級官廳を通ずる外に道がないと想像し慣れて居り、それだけ此迷信は容易に成立する。」（マルクス「フランスの內亂」の序文 Conrady 版、一九二〇年、一三三頁）

と書いてゐるが如く、一國の迷信すら國家關係について伴ひ得る。そして在來、わが勞働階級の政治生活の發展の不充分であつたことと照應して、わが社會主義理論の歷史上、マルクス主義の國家論は餘りに輕く取扱はれてきてゐるのである。

マルクス國家論はマルクス主義學說の全體系の歸結を成してゐると言ふことができる。マルクス主義は辯證法的唯物論の哲學的出發點からプロレタリア階級鬪爭の政治的戰略及び戰術の問題に至つて完了する複雜な廣汎な世界觀である。それは自然及び歷史を通ずる發展原理と共に、社會的人間の行動の原理を規定してゐる。一八四五年に書かれた「フォイエルバッハ・テーゼ」に既に明確に示されてゐるが如く、、、といふことはマルクス主義の全認識の基準である。一八四五—四六年に成つたマルクス及びエンゲルスの共著「ドイッチェ・イデオロギー」には社會生活上における勞働の意義が高調されてゐるが、階級社會の下における人間的、、が勞働及び政治鬪爭を指すことは、マルク

ス及びエンゲルスの根本思想であり、それは彼等のあらゆる著作から窺ひ得るところである。プロレタリアートの政治的階級闘爭の基準としてのマルクス國家論、個々の歷史的事情の下に示された其具體的適用としての戰略及び戰術、これらのものを研究しなければ、マルクス主義は骨拔きのものとなるであらう。

マルクスは彼の國家論を體系的組織的に叙述しなかつたのであるが、吾々は

「ライン新聞」諸論文、「獨佛年報」二論文及書翰、「ヘーゲル國法學批判」、「哲學の貧困」、「共産宣言」、「新ライン新聞」諸論文、「フランスの階級闘爭」、「革命及び反革命」、「ブルメール十八日」、「ケルン共産黨事件の闡明」、「ニウヨーク・トリビユーン」諸論文、「フオクト氏」、「第一インタナショナル發會宣言」、「第一インタナショルナに對する陰謀」、「ゴータ綱領批判」、「フランスの內亂」、「マルクス、エンゲルス往復書翰集」、「クーゲルマンへの書翰」、「ゾルゲへの書翰」等

の如き彼の書き殘した政治認識上の尨大な資料を有して居る。マルクスの國家論の最も根本的な構成分はブルジョア國家の批判及びプロレタリアートヽヽの學說である。それを中心として多方面の具體的認識がある。吾々は以上にあげた、彼の壯年期より衰死に至るまでの政治的著作から之等の成果を學びとることができる。

（二）マルクス國家論の當面の諸問題

さきに少しく述べた如く、わが國における社會主義理論の歷史は、マルクス國家論に關係したことがまことに僅小であつたのである。世界大戰後、勞働者運動の勃興するに際して、それを支配した主要潮流はアナルコ・サンヂカリズムであつた。(當時の指導者たりし人々は今日もなほ多かれ少かれアナルコ・サンヂカリスト風を帶びてゐる。)國家權力の問題に關心を持つたのは、却て高畠素之君のやうな人であつた。同君が國家權力の問題を問題としてとりあげた所まではマルクス主義者として正當な態度であつたが、しかも同君はこの問題自體から直に非マルクス主義的見地へ逸脫せられたのである。福田博士はレーニンの「國家と革命」について長論文を發表されたことが有るが、それはプロレタリアートのためのものでなかつた。近年、河野密君が社會問題講座のためにマルクス國家論を組織的に叙述されたが、遺憾ならが學校教師風の濃厚なものであつたのである。

國家權力に關するマルクス主義的認識の問題が吾國において貧弱な歷史しか有してゐなかつたことの社會的根據は、大摑みに言へば、わが資本主義の發達過程における經濟的政治的條件に制約されて、わが勞働階級がマルクスの所謂「階級自體」(Klasse an sich)とはなつたが所謂「それ自體のための階級」(Klasse für sich)として結成することができず、從つて一階級の他階級に對する鬪爭としての政治鬪爭が充分展開され得なかつたことに在るであらう。

だがこの事情は昨年以來、殆んど全く異つた形相を呈するやうにな

つた。勞働階級の階級的結成過程は、その前衛から見ても、その大衆的闘爭力から見ても、その意識水準から見ても、著しく進行して居るのであり、また直接の生活窮乏から政治的反抗の運動をおこさざるを得なくなつた剩餘の勞働人民層との政治的相互關係も有利に進行してゐる。普通選擧法はブルジョアジーが將來の大きい譲歩を最小限に喰ひとめたいために、また資本の安定のために社會的勞働を一層反動的に再編制するために、採用した手段であるにしろ、それは勞働階級及び剩餘の勞働人民を一の政治力として高むる條件であり、國民の政治生活上における新舊の諸矛盾を一層露骨に對立せしむる契機となつてゐる。昨年以來、社會運動上における素朴な現實主義、經驗主義、折衷主義が哲學的にも實際的にも駁撃されて、マルクス主義が最も指導的な思想となつたこと、特に方法論的基礎として唯物辯證法の要求されたことは、決して偶然でなくて、、、、、、、、、、、、、、、、の政治生活の根本傾向を表はすものである。昨年以來の主要な合言葉となつた「全無產階級的政治闘爭」といふ言葉は、過度に使用されて消極的な弊害を持つたにしろ、歴史的必然の列外に逸脱したブルジョア的思想家の皮肉に冷笑するが如きものでなく、根本的にはわがプロレタリアートの當面の最も正しい要求を代表してゐる。

以上の事情は、マルクス國家論の理論的把握をわがプロレタリアートの緊急の任務たらしめてゐる。そして既に次の如き主要な題目が、わが無產階級の一般的戰略の指標の明確な決定のために、この見地からの解決を促してゐるのである。

マルクス國家論は國家權力の單なる抽象的分析ではなく、プロレタリアートの階級闘爭の戰略（ストラテジー）及び戰術（タクチク）の、、、、、と直接に關聯する。＊今日、吾々は單に戰術上の要求でなく、それよりも、、、、、、、、、、、、、するために、マルクス國家論の見地から少くとも次の三つの題目を論證せねばならぬ。

＊戰略とは一定の歴史的段階におけるプロレタリアートの主要攻擊の方向を決定し、その闘爭上の基準を立つることをいふのである。こゝに歴史的段階といふのは個々の短き特殊の段階でなく、一定の政治機構の質的變化の行はれる期間であり、この期間の全闘爭過程の內容を決定する根本方針が戰略である。之に反して戰術とはこの歴史的段階內における客觀的事情の個々の變化に伴ふての闘爭方法であり、運動の波の高低に伴ふて比較的に短い時期內にも屈伸せねばならぬ。戰術は戰略の一構成分であり、後者の規定する一般的目標を追求するものである。今、わがプロレタリアートは政治的闘爭の進展に伴ふて、其戰略を明確に決定することを、すでに決定されたる戰略上の目標を一層明確に展開することを要求されてゐる。これを解決することなしに個々の科學的な戰術は立て得られない。

第一、政治批判の方法論。――この問題はすでに或る程度まで論證されて居るが、なほ特に二つの反マルクス的方法の再生產の可能が想像されるから、これを嚴密に規定しておく必要がある。第一はレーニ

ンが經濟主義と命名して駁撃したところの折衷主義的方法であつて、經濟的分析のマントの下に政治の經濟に對する優位即ち「政治が經濟の集中的表現」(レーニン)であること、並に政治と經濟との辯證法的關係を忘却するものである。第二はエンゲルスが「反デューリング論」のなかに暴力論(Gewalttheorie)と名付けて駁撃したところの傾向であり、政治の優位を過重して經濟的基礎との連關を忘却するものである。

第二、ブルジョア的三權分立論の批判。――ブルジョア國家の政治機關に對する批判的認識は今日特に重要である。わが勞働人民は府縣會選擧以來、或は官憲紏彈、或は知事排撃、或は警察彈劾といふが如くに、國家行政綱の末端に盛に不平を投げつけてゐる。行政機關のブルジョア國家機構における、、、、それと立法機關との連關、無産階級の政治的闘爭が立法機關に一應集中することの歴史的意義、等が精確に認識されねばならぬ。中央集權、地方分權に關する問題も特別の論題として玆に取扱はれねばならぬ。

第三、ブルジョア民主々義の問題。――わがプロレタリアートの當面の戰略的目標がブルジョア民主々義の獲得であるといふことは一應規定され來つたところである。勞働農民黨の歴史的使命はこの點から決定される。いふまでもなくプロレタリアートはブルジョア民主々義それ自體を要求するのでなく、この階級が果さねばならぬ歴史的闘爭への必然的な過程として之を要求するのである。今日、ブルジョア民主々義の獲得といふことは、反抗的諸階級を統括する政治的焦點であり、特に勞働者が農民大衆を獲得するための主要條件である。今日のブルジョア國家の根本的な支配階級が帝國主義ブルジョアジーであり、その根本的な階級對立がブルジョアジーとプロレタリアートであり、プロレタリアートの基本的な闘爭對象がブルジョアジーであることは言をまたない。だが現實的具體的關係の下においては、事物は純粹の抽象的の形を以て現れるものでない。資本主義自體についてみても、純粹の、何等の混合物のない資本主義だけが存在するのでなく、前資本主義的經濟形態やまた社會主義的經濟形態すらも同時に存在し得るのであり、階級關係においても純粹にブルジョアジーとプロレタリアートだけの階級對立なるものは存在せずして種々の過渡的な階級が同時的に存在し、特に農民は一の過渡的階級であつても頗る重大な政治的經濟的意味を有してゐる。その如く、すべての階級力の消長の全形像であるところの政治關係においては、前代的要素と共に未來的要素がまじり入つて居る。わがプロレタリアートが單に帝國主義ブルジョアジーの政治的反動に對抗してブルジョア民主々義を要求するだけのことであれば、それは歴史的必然に立脚した具體的な戰略目標と言ふことができぬ。

わが國の政治關係において特に解決されねばならぬ問題は、、、主義的遺制の問題であつて、この點において政治批判の方法論上に經濟主義とマルクス主義とが對立するであらう。吾々が、、主義的遺制といふ言葉を使用する場合、一派の人々は、恰も吾々が、政治歴史上の

一節時たる「、、主義」が吾國に、、、そのまゝに卽ち稍い內容をそのまゝに、殘存してゐると信じてゐるかの如くに非難する。だが吾々はかく考へたことはない。それは吾國が帝國主義段階に進入したことと相應じて、內容的に變化がおこつて居り、むしろ所謂ボナパルト主義の內容を帶びてゐる。吾々は一切の政府力を、、、、する。マルクス主義者としてそれ以外の考へ方はない。吾々は日本の今日の支配者、、階級を構成してゐる具體的要素はブルジョアジー及び地主であると理解する。地主的要素は政治的に既に凋落してしまつてブルジョアジーに屈服してしまつてゐるのではない。農村には封建主義すら未だ殘つてゐる。(封建主義 Feudalismus と、、主義、、、ismus とは異つた範疇であるが、一派の人々はこれを無雜作に同一視してゐる。)、、、官僚、軍閥はそれ自身、階級であり得るものでないと同時に、階級から遊離したものでない。彼等こそ地主的要素の政治的代表者なのであり、彼等の占據する、、、こそ、主として地主階級の階級的機關である性質を有する。勿論、わが國の地主は舊き形、舊き性質のまゝの地主でなく、地主のブルジョア化は一定程度において既に行はれ且つ今後一層行はれるであらうけれども、勞働者と農民とが異る如く、ブルジョアジーと地主とは異りし階級であり、地主はブルジョアジーよりも前代的な要素である。わが、、、官僚、軍閥は地主的要素の政治的代表者としてのみ階級的意味があり、、、主義的遺制の階級的基礎は正にそこに在り。既に反動化した帝國主義ブルジョアジーと、ヨリ前代的、從つてヨリ反動的な地主的要素の政治的代表者との結合が吾々の眼前にあればこそ、わがプロレタリアートの闘爭は複雜であるのである。吾々の、、主義的遺制に對する闘爭は、單なる、、主義的イデオロギーに對する闘爭でない。いかなるイデオロギーも物質的階級的基礎なくして存在し得るものでない。イデオロギーだけを相手どる闘爭は、階級闘爭の具體的實踐から離れた人々だけの問題たり得る。尤も吾々が嘗つて當面の闘爭目標を、、主義的遺制そのもの、、、と言つた場合、ブルジョアジーとの闘爭が第二義だと理解する誤謬が一部に存在したかも知れない。資本との酷烈な闘爭を通ぜずして上記の問題を解決し得ないのは、いふまでもなく明かなことである。何となれば、ブルジョアジーは今日、一切の非民主的機關を一層確保し、、、の如き民主的機關をすら非民主化さうとしてゐるほどであるから。――要するに私がこゝに經濟主義と名付けようとする見解を執るものは、プロレタリアートが社會主義的任務として戰ひとらんとするブルジョア民主々義の歷史的必然性を理解することができず、それとプロレタリア・デモクラシーとの內的連絡を理解することができず、從つて、不均衡のテンポを以て展開してゆく階級闘爭の個々の具體的場面において(例へば金融恐慌、府縣會選擧、來る第五十四議會への闘爭等々の如き)眞に戰鬪的な現實的戰術を提供することができない。この問題について近く詳論し度いと考へてゐる。

私は以上に三つの主要な問題をあげたが、この小稿においては第一

の問題だけを取扱ふのである。

(三)政治批判の方法論について

マルクス主義の全體に亘る方法論的基礎は唯物辯證法である。それは自然及び歴史に通ずる根本的な方法論であると共に、またマルクス主義の世界觀の基礎を成す。マルクス的政治批判の基本的な方法論は勿論、唯物辯證法以外のものでない。だが唯物辯證法自體を論ずることはこの場所における任務でない。私はむしろ、この根本的な唯物辯證法に立脚した上での政治批判の方法論上の特殊な重要な事項を指摘するであらう。その第一は政治の優位といふ觀點、第二は階級力の消長といふ觀點、第三は飛躍的發展といふ觀點、第四は大衆的經驗の「自然史的」綜合といふ觀點である。

(イ)政治の優位(政治と經濟との關係)

マルクス主義に立脚する政治批判の第一の方法論的要求は、經濟に對する政治の優位を認めることである。社會生活の基底は經濟である。だが政治は諸經濟關係の集中した具體的表現である。經濟的基礎の上に發展する人間的行爲は政治のなかに集中される。

嘗つてレーニンは、折衷主義的誤謬を犯したブハーリンを論難して次の如く云つたことがある。

「政治は經濟の集中的表現である。……經濟に對する政治の優位は無條件的法則として認められねばならぬ。この他のことを言ふものはマルクス主義のイロハを忘れたものである。……政治的態度と經濟的態度とを對等視し「その一及び他」を均しくとりあげることができると主張することは(又は此考を間接に許すだけでも)マルクス主義のイロハを忘れたことを意味する。

「若しブハーリンが政治的方法と經濟的方法との結合を說くならば彼は理論的に折衷主義に乘り上げたのである。

「同志ブハーリンがこゝで犯した誤謬の理論的內容は、彼が政治と經濟との辯證法的交互關係(それはマルクス主義の敎ふる所である)と折衷主義とを混同した點にある。「一方と他方」「一方において——他方に於て」、これがブハーリンの理論的態度である。これこそ折衷主義である。辯證法は相互關係を、その具體的發展に於て全面的に考慮することを要求する。彼から一片を、是から一片を、摑みとつてくるやうなことを要求しない。」(レーニン「勞働組合、現勢、トロツキイ及びブハーリンの誤謬について」、獨文レーニン選集六一一頁以下、邦譯「內外政策」六七頁)

これは決して政治の經濟的基礎を無視する意味を含んで居るものでない。また單にプロレタリアートの行動上の指針としてのみ政治の優位を主張するのでもない。經濟が下部建築であり、政治が上部建築の一つであることは唯物史觀の敎ふるところであり、一切の政治闘爭も結局は經濟上の解放を中心としてゐるのである。政治の經濟に對する

優位といふ思想は、マルクス、エンゲルスのあらゆるの著書を通ずる根本思想たる唯物史觀から背反するものではなく却てそれに根據を有してゐる。

一切の社會的變化は（從つて政治的變化も）根本においては生産力と生産關係との矛盾衝突からおこる。經濟的基礎の變動につれて上層建築の變革が行はれる。新しい世界は、滅びゆく世界の歴史的成果、舊世界の內部に發展した物質的條件から組み立てられる。だが之等一切の變化、換言すれば歴史の進行は、人と人との間の關係、階級と階級との間の關係となつて表はれる。人間が歴史を作る。階級社會においては、經濟的に支配する階級（生産條件の領有者）は餘剩勞働搾取の過程を確保する生産關係（所有關係）を政治的に、即ち權力を以て堅めようとする。生産條件の領有者と直接の生産者との間の搾取被搾取の經濟形態は、權力を以てする階級支配の形態をとる。純粹に經濟的物質的な生産力の變化からおこる社會生活上の變化は先づ且つ全面的に、階級間の政治的衝突といふ人間的行爲の形となつて表はれる。マルクスは政治形態と經濟形態との交互作用について次の如く言ふ。

「不拂餘剩勞働が直接の生産者から搾取される特殊の經濟形態は支配及び隷屬の關係を規定する。この關係は生産から直接生長してゐるがら夫自體は又決定的に生産へ反作用する。然し此支配及び隷屬の關係に、生産關係自體から生ずる經濟的共同體の全形態及び之と同時に其特殊な政治形態が立脚するのである。吾々が全社會的構造、從つて主權對隷屬關係の政治的形態、要するに夫々の場合における特殊な國家形態の最奥の秘密、夫等の隱れたる根柢を發見するのは、常に生産條件の所有者が直接の生産者に對する直接の關係――この關係の形態はいかなる場合にも勞働の種類及び方法の、從つてその社會的生産力の一定の發達段階に相應する――にある。」（資本論第三卷第二册三二四頁高畠氏譯本四五九頁）

こゝで一應、政治を定義してみよう。私は次の如く言はうと欲する。すなはち政治とは一社會における物質的基礎――生産力及び交換方法――に根ざしてゐる諸階級が國家權力を中心として相互に軋轢してゐるところの具體的な全面的な姿であると。國家權力とは何であるか？それについてエンゲルスは次の如く言つてゐる。

「社會は內外からの攻撃に對して自己の共同利益を擁護するために一の機關を作り出す。この機關が國家權力である。この機關は發生するや否や社會に對して自立するようになる。しかもそれが一定階級の機關となつて其階級の支配を直接に施行するやうになればなるほど、右の傾向が甚しくなる。支配階級に對する被壓迫階級の鬪爭は必然に一の政治鬪爭となり、先づ第一に此階級の政治的支配に反對する鬪爭となる。」（エンゲルス「フォイエルバッハ論」邦譯一四四頁）

權力は一定發展段階における社會的生産物であつて、社會自身のなかから發生したものではあるが、しかも社會に對し、少くとも勞働人民に對し、外力的な、不可抗なものに變化し、それから遊離したもの

となり、そして、その一定階級の階級支配の要具となつたことは益々この外力的性質を強めたのである。被搾取者の搾取者に對する闘爭は必然にその政治的支配に對する反抗となる。他方から言へば、諸階級の力の増減は社會生活上、政治的に表現される　政治の優位を認めることは、單に實踐的要求を現はすばかりでなく、政治自體が經濟的基礎に根ざしてゐる社會關係の最も具體的な、最も全面的な、最も緊張した形像だからである。マルクスが、あらゆる階級闘爭が結局政治闘爭であることを指摘したのも、政治關係が經濟關係の集中的表現であることを認めたからである。

エンゲルスは其晩年にブロッホに與へた手紙のなかで、「しかし他の種々の上層建築の要素、即ち――階級闘爭の政治的形態及び其結果、戰勝後、戰勝階級に依つて定められる憲法、法律形態、及びこれらの現實的闘爭の反映として、參加者の頭腦に生ずる政治的、法律的、哲學的諸學説、宗教觀及びその教義體系への發達――は歴史的闘爭の過程に影響を及ぼし、多くの場合、その形態を決定する」と說き、經濟的要素の決定力を多少柔らげたのであるが、しかし上述した政治の優位といふことはこの見地からのものでない。

(ロ)階級力の消長

既に述べた所に依つて明かであるやうに、政治の優位といふ思想は階級概念と深く結び合つてゐる。そして、それは直ちに次項に述べる飛躍的發展の概念と內的に連絡する。

マルクスのあらゆる著書に溢れてゐる二つの大きい概念は階級と、、である。矛盾とその解消といふことは、辨證法の根本的な思想の一つであるが、マルクス主義は社會上における矛盾は階級對立であり、その解消過程に階級闘爭であると解する。他の言葉を以て言へば、社會上の生活條件の內在的矛盾は歴史上、階級の分裂となりて現はれ、矛盾を解決する發展途上の內的衝突は階級闘爭の形をとる

政治とは階級間の力の消長の形像に外ならない。政治の最も動的な、最も鮮明な姿が階級闘爭なのである。

マルクスは階級自體及びそれ自體のための階級といふ概念を說明して、階級的結成の重要性を指摘し、階級的に結成し得たる階級は必然に階級的政治闘爭に進出することを明かにしてゐる。(「哲學の貧困」)資本主義の下に一の共通の地位と利害を持つに至つた勞働者は、資本に對して一の階級自體であるが、闘爭裡においてお互に結合することに依つて、それ自體のための階級となり、政治的對抗をなし得るに至る。故に、それ自體の階級として結成し得たか否かは、その階級の力を、政治的闘爭力を、決定する重大な條件である。マルクスは「マニフエスト」に「プロレタリアートの階級結成、ブルジョアジーの支配の、、、、プロレタリアートの、、、、」といふ明白なスローガンを揭げたが、それは從來のあらゆるプロレタリア黨の揭ぐる所ともなつた。

かくて階級間の力の關係を客觀的に評價することは、マルクス的政治批判の一根本方針たらざるを得ぬ。それは戰術上の最も緊切な要求である。さればレーニンも次の如く言つたことが有る。

「マルクス主義は階級間の相互關係及び各個の歷史的狀態の具體的特徵を最も精確に、客觀的に觀察することを吾々に要求する。吾々ボリシェヴイキは政治を科學的に基礎付けるといふ立場から絕對に必要なる此要求に常に正しく從ふことを力めてきた。」(「情勢の批判」、邦譯「一九一七年」六七頁)

階級力の分析の典型はマルクスの政治的著作の至る所にある。マルクスは資本論其他において、資本主義社會の基本的階級を分析してプロレタリアート、ブルジョアジー、地主の三つをあげてあるだけであるが、それは資本主義を抽象的に解剖する科學的要求に出たものに外ならず、政治的の諸著作においては、小ブルジョア及び農民の典型的な階級分析がある。例へばマルクスは一八四八年のブルジョア民主々義革命期におけるドイツのブルジョア及び小ブルジョアの階級狀態を分析し、その裏切的性質を暴露してゐる。(「革命及び反革命」、メーリング編遺稿集第三卷二一三頁其他。)

マルクスは農民階級に對して多大の注意を拂つてゐる。「ブルメール十八日」、「フランスの內亂」等にはフランスの農民の政治的役割が精密に分析されてゐる。マルクスが一八五六年四月十六日にエンゲルスに送つた手紙に書いてゐる「ドイツの全事情は、農民戰爭の第二版に依つてプロレタリア、、を支持することができるか否かにかゝつてゐる」(マルクス、エンゲルス往復書簡集、第二卷一〇八頁)といふ言葉は勞働者、、と農民、、との結合を說くものとして、レーニンによつて屢々引用されてゐる。

(八)社會の飛躍的發展

唯物辯證法がマルクス的政治批判の基礎的方法であることはさきに述べた如くである。だが唯物辯證法が最も見事に適用せられるものが政治批判の領域であることを忘れてならない。辯證法は「自然に飛躍なし」といふ常套語を一蹴して、、、、、、、、が最も根本的な發展であることを明かにする。生産力と生産關係との矛盾衝突は社會上の上層建築を變革するが、この變革作用の最も具體的に、最も直接に、最も全面的に及ぶものは政治生活である。諸國における、、の歷史は唯物辯證法の、、さを證明してゐる。

方法論としての唯物辯證法の最も根本的な特徵は、一切の事物を過程的に、發展的に考察することに在る。「この哲學の前には究極的な絕對的な神聖な何物も存在しない。この哲學は一切のものの消滅性を證明する。この哲學の前に存在するものは生成と衰滅との過程、低きより高きへ向ふ無限の高上の連續的過程だけである。」(エンゲルス「フオイエルバッハ論」邦譯一九頁)「すべての實在的なものは、發展の經過中に非實在的のものとなり、自己の必然性、存在の權利、合理性を失ふ

のである。萎縮してゆく實在に代つて一の新な生氣ある實在が現れる。この實在は、舊いものが賢明にも抵抗せずに、、する場合には不和に現はれ、この必然性に反抗する場合には、、的に現れる。」（上掲書一四一一五頁）この發展過程において、漸次的なものが中斷されて、量の質への轉化若しくは其逆がおこる場合、即ち、、、はれる場合、その發展は特に目ざましき形相を呈する。政治生活上における、、變化は、、である。この時、社會的に堆積してゐる諸矛盾が急速に解決されて、社會が、、に發展する。マルクスはその一生を貫いて、この、、、、の見地に忠實であつた。だから彼はいふ、「、、は歷史の機關車である」と。（「フランスの階級鬪爭」一九二五年版九〇頁）

だがマルクスは、、製造（又は、、道樂…………me lerei）に眞向から反對する。彼は「ケルン共産黨事件の闡明」のなかでこの種の人々を痛烈に非難してゐる。客觀的な社會的條件が成熟しない限り、社會的變化はおこることができない。そうした場合に於てプロレタリアートは一時的に權力を握り得ても、忽ち奪ひ返されてしまふであらう。この、、製造者どもは、批判的考察の代りに、獨斷的考察を持ち、唯物論に代ふるに觀念論を以てする。「、、の推進力を現實の諸關係のなかに求むる代りに、單純なる意思を以てしようとする。」彼等は民主主義者が民衆といふ言葉を神秘化するが如くに、プロレタリアートといふ言葉を神秘化してゐる。彼等は政治と詩とを同一視する。マルクスはこの種の人々の、、遊戲を非難し、自らも一八四九年に一度陷つた過失――、、の彼の過大觀――を直ちに矯正した。マルクスは眞に熱情ある、、であり、隧道的胸儒でなかつたが、常に、、の客觀的條件について正しい評價を持たうとした。

社會の、、、、の思想は戰術問題と直ちに連絡するのである。マルクスは、プロレタリアートがあらゆる他の、、運動をも支持せねばならぬこと、ブルジョア、、をプロレタリア、、のための必然的過程として經過せねばならぬこと等を述べてゐる。

マルクスの「クーゲルマンへの手紙」は非常に興味ある文獻であるが、レーニンはそのロシヤ譯の序文において、同書中の諸々の手紙を引いて如何にマルクスが「最も平和な時代に於てすら、、の接近を感じ、プロレタリアートを鼓舞して彼等の前進的、、的任務の自己意識を高めることを忘れなかつた」かを述べてゐる。

マルクスの政治批判は深い歷史の知識を以て基礎付けられてゐる。たとへば彼の最も傑出せる歷史的著作たる「ブルメール十八日」（フランスの內亂」には、フランスの絕對君主制の時代からナポレオン一世を經て近代的中央集權國家が成立し、尨大な官吏團と常備軍とかに成る行政權力の發展するに至る過程が叙述されてゐる。しかも是等の事象を把握するに、燃ゆるが如き、、、、の觀點を以てしてゐる。たとへば「ブルメール十八日」の結論は、近代國家の重心が議會權力より行政權力に移つたことに對する次の如きプロレタリア的批判を戴せてゐる。

「然し、、は根本的である。、、、、、のなかを潜つてなほ進行してゐる。彼はその仕事を、方法を以て完成してゆく。一八五一年十二月二日（ナポレオン三世のクーデターの日、譯者附記）までに、、、は彼の準備の一半を成就したが、今や他の一半を成就してゐる。彼は、それを破壞し得んがために、先づ議會權力を完成した。その目的を遂した今日、彼は行政權力を完成し、それを最も純粹なる形に還元し、それを孤立させ、彼のあらゆる力をそれの破壞に集中し得んがために、それに唯一の非難を向けてゐる。そして、彼が彼の準備の後半を完成した場合、ヨウロッパはその座席から躍りあがり、ブラボー、汝もぐらよ、よく掘つた！と歡呼するであらう。」（「ブルメール十八日」リヤザノフ版、一九二七年、一一四頁）

（二）大衆的經驗の「自然史」的綜合

だがマルクスは單に頭のなかだけで、、の學説を編み出したのでない。マルクスの政治的認識は具體的な政治情勢、プロレタリアートの、、的經驗に對する最も正しい唯物辯證法的把握に依つて發展した。最初、マルクスは近世における、、の歷史、即ち十七世紀のイギリスのクロンウエル、、、十八世紀のフランスのジヤコバン黨の、、から多くを學んだが、彼自ら參加した一八四八年の、、、一八五一年のルイ・ボナパルトのクーデター、一八七一年のパリ・コムミユン等の經驗は、彼の政治的認識を一歩々々發展させ、プロレタリアートの、、といふ明確な目標に到達したのである。

マルクスが近世國家の政治機構に明確な批判を下し、プロレタリアートは之をそのまゝ繼承すべきでなく、獨自の新しい政治形態を創造せねばならぬといふ認識に到達したのは、ルイ・ナポレオンのクーデターを論じた「ブルメール十八日」であるが、レーニンはこの際におけるマルクスの問題の提起と解決とに關する態度を批評して次の如く言つてゐる。

「マルクスは彼の哲學たる辯證法的唯物論に忠實でありつつ、一八四八―五一年の偉大な、、、の歷史的經驗を（問題解決の）基礎にとり入れた。マルクスの學説は、こゝでも他の場合と同じく、深い哲學的世界觀と豐富な歷史の知識とに依つて解明せられた經驗の綜合である。」（レーニン「國家と革命」一九二六年版二八頁）

一八七一年のパリ・コムミユンは世界史上の最初の勞働者政府を作りあげた。マルクスは之を「勞働の解放のために、終に發見せられたる政治形態」と名付けた。そして彼の不朽の政治的著作「フランスの內亂」のなかで、パリー勞働者の英雄的行動を叙すると共に、コムミユンの經驗を精細に分析し、その歷史的意義を明かにし、將來のプロレタリア國家の萌芽形態を明確に指摘した。レーニンはこの時のマルクスを評して次の如く言つてゐる。

「マルクスは、こゝでも、「新しい」社會を宣言したり妄想するといふ意味においてのユートピヤ主義の痕跡を毫も持つてゐない。否、彼は當

社會からの新社會の誕生を、自然史的過程の如くに研究し、前者から後者への過渡形態を研究したのである。彼はプロレタリア的大衆運動の事實的經驗を把握し、それから、、、、、を引き出さうと力めた。あらゆる偉大な革命的思想家が被壓迫階級の大運動の經驗に衒學的な「道德的教訓」を向けずして、却てそれから教訓を學ぶのを恥としないと同樣に、マルクスもコムミユンから「學んだ」のである。」(レーニン上掲書四六―四七頁)

マルクスは「マニフエスト」において「支配階級として自らを組織したるプロレタリアート」といふ思想を展開したのであるが、一八四八年革命以來のヨウロッパの政治的經濟的情勢の發展とプロレタリア大衆運動の發達に應じて、その思想を深めてゆき、一八七一年のパリ・コムミユンにおいて新國家形態のいかにあるべきかを明確に規定し得たのである。實際的具體的の鬪爭經驗を、唯物辯證法の光りに照らし、「自然史的過程の如くに」研究し、新しい政治的認識を生み出してゆくことは、マルクス的政治批判の一根本方針でなければならぬ。

マルクスが大衆の創意、大衆の、、的精力に對する深い信頼を持つてゐたことは、パリ・コムミユンの爆發以前に於て、彼が早まりすぎた一揆を警告してゐたに拘らず、一度その勃發するや、「天をも搖がす大衆の創意」(マルクスのクーゲルマンへの手紙)を歡呼して迎へ、その、、的經驗の教訓を熱情を以て學びとつたことをみても分かる。マルクスのこの熱情的な態度は政治批判の客觀的な要求と背反するか? 否! かゝる態度こそ眞のプロレタリア、、の態度である。小ブルジョア社會主義者は、大衆に對する信頼を持つことができず、大衆の鬪爭の昂揚した場合には之を恐怖し、その失敗した場合にはこれを道德的に叱り付けるのである。日和見主義首領の至る所で犯す罪惡の階級心理的根源はそこにある。眞摯なる政治批判者はマルクスの熱情ある態度をこそ學ぶべきであらう。

われわれは大衆を偶像視してはならない。またカウツキイ主義者の如く、意識水準の低い大衆の意欲のもとに屈服してはならない。だが吾々は大衆の創意、大衆のエネルギーに强い信頼を持つてゐなければならない。*われわれはブランキー主義者の如く、一個の血盟者團體のみを以て行動の全基礎とするのでない。大衆的鬪爭の發展なくして階級的運動は發展することができない。

* レーニンはロシヤ革命の眞中で書いた一論文のなかで次の如く言つてゐる。「大衆の創意と自立性とを怖るゝ勿れ、革命的大衆團體(こゝではソヴイエツトを指してゐる、筆者)を信頼せよ――諸君は大衆が共同一致して勇敢な逆襲を以てコルニロフの叛亂に對抗した際に示したと同じ力、同じ崇高、勞働者農民の同じ不撓性を、國家生活のあらゆる方面に認識するに至るだらう! 大衆のエネルギーの廣汎な自己犧牲的な促進の代りに、大衆に對する不信、大衆の創意に對する不安、大衆の自立性に對する不安、大衆の革命的エネルギーに對する戰慄、――これこそ社會革命黨及びメンセヴイキの首領があらゆる場所で犯した

罪の根元である。」(拙譯「一九一七年」二四二——三頁)

單純に大衆に追隨するものが問題とならぬのは言を俟たぬ。吾々の最大の關心事は大衆の創意、大衆の戰鬪的エネルギーを一層、、目的のために組織し展開せしめることでなくてはならぬ。この點において吾々は吾々の同志の一部がこれまで犯し來つた過失を承認し且つ速かに訂正せねばならぬと考へる。その過失とは、「、、的理論はたゞ外部からのみ勞働階級の大衆の間に注入し得る」といふ思想の機械的應用である。資本主義の下における勞働大衆の物質的精神的發達は一定の限度を有するから、レーニンの上記の思想は、、、、、、。しかし吾四の一部の同志はこの思想を機械的に理解して、大衆のイニシアチーヴを輕く取扱ひ、、、的インテリゲンチャのみが階級運動の指導力であるかの如き空想に到達した。そういふことを考へるインテリゲンチャは、、的インテリゲンチャでも何でも無いのだ。、、的インテリゲンチャとは、自己の出生した階級の小ブルジョア的性質を殘るところなく克服し、勞働階級の運命を自己の運命とし、一人でも多くの社會主義的勞働者を作り出すためにマルクス主義を勞働階級の間に宣傳し其大衆の鬪爭を通じて同階級の歷史的使命を實現することに獻身するところのプロレタリア的、、、をいふのである。わが勞働階級の間から既にかなりに生み出された社會主義的勞働者と、眞實の意義における、、的インテリゲンチャとは、わが勞働階級の前衞隊である。これらの人々は、善良なる意思を有しつつ傲慢なる空想に陷れる一部のインテリゲンチャの過失を速かに匡正せねばならない。

だが、折衷主義と呼ばれてゐる人々の、いはゆる大衆主義といふもののほど唾棄すべきものはない。彼等の最大の疾病は、プロレタリア前衞の意義を全然閑却することに存してゐる。前衞は廣汎なる大衆に向つて其方向を與へる指導力である。前衞と大衆との生命ある交互作用の下に於てのみ、階級運動は展開する。折衷主義者は、プロレタリア前衞がいかにして作り出され、いかにして組織され、いかにして活動するか、といふことについて眼をつぶつてゐる。それを考ふることを恐怖してゐる。あらゆる資本主義國家においては階級意識あるプロレタリアートの外に、自己の力をもプロレタリアートの力をも信ぜずして日和見主義に追隨する無數の無自覺のプロレタリア大衆、半プロレタリア大衆、非プロレタリア大衆から成る勞働人口がある。折衷主義者は、これらの意識水準の低い大衆の意欲にそのまゝに追隨し、そうすることを社會主義だと稱してゐるのである。これらの人々はマルクス主義のＡＢＣにも無知であると言ひ得る。

* * * *

マルクス主義的政治批判の基準として、マルクスが「ゴータ綱領批判」のなかに述べてゐる過渡期の國家、プロレタリア・デモクラシーの觀念を持つてゐなければならぬのは言ふまでもなからう。

(四)非マルクス主義的政治批判の方法論

ブルジョア政治學における政治批判の方法論は全體として反マルクス的である。しかし社會主義運動の勃興以來、ブルジョア科學の諸領域において、ゆがめられた形であるにせよ、多少ともマルクス主義に「感染」してゐるものが有る。哲學では、カントを素晴らしく發展させたコーエンに、社會主義に對する歩み寄りが見られる。經濟學ではゾムバルトや、わが福田博士などがマルクスの方法論や認識成果の幾分を承認されて居るように見受ける。政治學の領域に於ても斯くの如き風潮があるのである。たとへばフランツ・オッペンハイマーの國家理論の如きは、むしろ後に述べる暴力論の正統であるであらうが、しかもマルクス國家論の影響が明かに見える。ブルジョア科學における之等の風潮を以て、單にマルクス主義をゆがめて勞働者を欺瞞するものだと考へてはならぬ。十九世紀以來の偉大な社會的事實たる社會主義運動がブルジョア學者中の進歩分子をしてマルクス主義に對する幾分の讓歩を餘儀なくさせたものと解すべきであらう。だが、いふまでもなく、いかにマルクス主義の幾分をとり入れるにしろ、ブルジョア科學一般とマルクス主義とは本質的に相容れない對立物である。それは相背反せる二階級のイデオロギーであるから。

ブルジョア的政治批判とマルクス主義のそれとの本質的差違、ブルジョア政治學におけるマルクス主義の影響、等は興味ある命題であるが、こゝではそれを論じない。私はプロレタリアートの陣營内にも發生し得る非マルクス主義的政治批判の方法論を簡單に論じてこの稿を終るつもりである。

第一に經濟主義的な政治批判の方法論がある。經濟主義(エコノミズム)とはレーニンが今世紀初頭のロシヤにおける社會主義の一流派に命名した特殊の言葉であるが、政治を經濟的にのみ理解し、若くは政治と經濟とを分離する方法論をこの言葉を以て表現することができるであらう。彼等は個々の經濟事實を加算して其總和を政治と考へる。少くとも、政治の經濟に對する優位といふマルクス主義の根本原則に無理解である。この方法論に從ふ人々は政治を以て、國家權力をめぐる各階級の交互關係として考へない。

政治の基礎はいふまでもなく經濟である。だが政治は經濟の集中的表現である。勿論、經濟的分析は社會主義的認識の出發點として役立ち且つまた構成要素でもある。しかし社會主義は、國家權力との關係において、勞働階級を代表するものである。マルクス主義的政治批判は、勞働階級が他のあらゆる階級の組織された政治力と對抗して、自己階級の政治的自立性を確保し、階級的政治闘爭を遂げ得んがための手段である。マルクス主義者は勞働者の政治意識を全體的に發達させるためには、國家權力をめぐる各階級の力の全形象を描き出して見せねばならぬ。社會生活の根柢である經濟の分析のみでは足りない。政治批判はこの經濟の上に築かれる人間的、階級的關係の全面的な姿の描出を要求する。

實際、國家權力の作用は各階級のあらゆる生活過程に反映してゐ

るのである。それはレーニンの言ふ如く、職業的、市民的、個人的、家庭的、宗教的、科學的生活のあらゆる範圍に及んでゐる。勞働者のストライキや農民の小作爭議に對する刑罰、選擧に際しての官吏の腐敗や横暴、政治犯人に對する、、判決、教育や學術に對する不當の壓迫、言論機關に對する專制的な檢閲、學生や自由主義インテリゲンチャに對する干渉等々、これらの事實の經濟的基礎だけを說明するのでは勞働者の政治的認識を深めることはできない。それは、政治的に、卽ち權力との關係において、說明せられねばならぬ。

政治の經濟主義的批判は、經濟的鬪爭に政治的性質を附與するといふ美辭の下に、階級鬪爭をいはゆる組合主義的政治鬪爭に引きさげる傳統的傾向に返つて行き得るものであらう。

彼等はまたプロレタリアートのヘゲモニーを懷疑することもできる。プロレタリアートの力は全人口中に占めてゐる其數的割合よりも遥かに大きい。それはプロレタリアートが資本主義生產の中樞を成すといふ社會的條件から決定されたことであり、プロレタリアートが相對的に少い場合においても、それは全勞働民層の利害を眞に代表することができる。今日、經濟主義的政治批判の方法論の代表者となつてしまつたカウツキイは、嘗つてロシヤにおけるソヴイエットは勞働者よりも農民が多數を占めるのであるから、ロシヤ革命は勞働者革命でないと言つたことが有る。レーニンは是れに對してかゝる觀察方法は、經濟的分析のマントにかくれてのブルジョアジーへの阿諛だと論駁した。

また此人々は、組織論の領域においては、前衛の役割に無理解であり得る。

勿論、かく言へばとて、經濟的分析を輕視する意味は少しもない。否、今日まで吾々にとつて不足であるのは經濟的分析であり、このために政治的認識のアイマイならざるを得なかつたことを認める。ただ、政治批判の領域においては、政治が經濟の集中的表現であり、個個の經濟事實は全政治過程のうちの個々のモメントであることを、飽くまで意識して居なければならない。

第二の非マルクス主義的政治批判の方法は所謂暴力論（ゲワルト・テオリー）である。エンゲルスは「反デューリング論」のなかで、デューリングが歷史の基本文は、、を以て直接の政治的暴力であるとなし、經濟が歷史の動力でないと說いたことに對し、これを暴力論と名付け、唯物史觀の立場から其非なる所以を明かにした。事實上、國家の、、は征服に基いたが、それは國家の本質的說明たり得ない。國家權力の發生と存續と將來とは唯物史觀の光りに照らしてのみ科學的に說明される。この暴力論はなほ種々の形をとつて殘つてゐる。政治の優位を機械的に解すれば、この誤謬に陷り得る。筆者は數年前にこれに近い誤謬を犯したことがあるが、今は改めてゐる。この種の考へ方は、いはゆる、、主義的遺制の問題について、特に留意して避けねばならぬと考へる。

第三にマルクスが「政治的無關心主義」と名付けたものも非マルク

ス主義的政治批判の方法論の一つと考へることができるであらう。＊

＊マルクスは一八七三年にエンゲルスと共にイタリーの一社會主義雜誌に寄稿してプルードンの自由聯合主義を排し、プロレタリアートの政黨、その政治行動は國家を承認することになるから遣つていけないと說敎する無政府主義者の愚論を駁擊した。マルクスは頗る辛辣な皮肉を放つて、「やはり政治的無關心主義を說敎した初期のキリスト敎徒は自らが被壓迫者から壓迫者に變るためには一カイゼルの强い手を利用したが、政治的無關心主義の現代の說敎者は、彼の說く永遠の原理が實はブルジョア社會における俗世的享樂や過ぎゆく特權を維持するものであることを知らないでゐる」と言つてゐる。（「ノイエ・ツアイト」第三十二卷第一册四四頁）

今日、わが國においてこの政治的無關心主義は殆んど問題にならないかに見える。殆んど誰れも熱心に無産政黨問題を論じてゐるから。だが事實上、この政治的無關心主義が存在してゐる。折衷主義と呼ばれてゐる人々は、實は政治的無關心主義の一變種である。その理由は簡單である。それは彼等が眞實の戰鬪的なプロレタリア黨の主張者でないからである。勞働階級の政治的獨立性は、本質的には政治的無關心主義であるところの、中途半端な政治鬪爭主義から發展することはできない。

貧乏の起原

長谷川如是閑

四　二種の群形質

蟻の社會に關する生物學的事實に基く考察は暫く後段に讓り、前號の簡單な記述に於て明かされてゐる通り、極めて原始的の社會的群生活に於て、協同的、有機的生活の組織と、非協同的、非有機的統一の組織とがあることを知り得る。前者は、群が、それなしには決して成立しない生活的行動の有機的結合から成り立つ社會關係で、たとへば家族といふ群が夫婦親子といふ成員間の性的、哺育的行動の協同なしには決して成立しないやうな場合のそれである。反之、後者は群が、それによつて新らしい形態を産み出すが、しかしその形態は、社會的群生活の成立には積極條件をなすものでないといふ場合であつて、たとへば、ある家族に、協同的でない寄食者又は奴隷の類に加つたやうなものである。協同群の場合には、成員の各が生産の組織に於て機會均等の立場に居り、従つて消費の組織に於て共同の地位をもつものであるから、その統一は、社會的生活行動の組織に於ける有機關係であるといへるが、非協同的統一の場合は、生活行動の組織に於ける有機關係ではなく、さういふ關係を全く離れた強制的統一狀態の下に群が成立するのである。生産に關係せずして消費に關係するといふやうな組織は、かういふ統一の下に於てのみ發生する。

たとへば前に掲げた蟻の社會に於て、ホキーラーが Mess-Mate (Commensals) 即ち「同卓會食者」と名づけた異樣な統一狀態がある。即ち小さい蟲の一種が、恰も食卓についたやうに蟻の身體に、必ず對を爲して吸ひついて離れないで、一生とりついて生活するのである二匹ならば蟻の頭の兩側に取りつき、三匹ならば、二匹は前同樣に取りつき他の一匹は體の中心即ち背中に取りつく、四匹ならば、二匹はやはり頭の兩側、他の二匹は腹の兩側に取りつく。五匹ならばあとの一匹は背中に取りつく。といふ風にどこまで行つても「相稱的」たることを失はないのである。しかもさうして取りついた蟲は、全然、蟻の營養を掠取して生活するので、決して蟻の生活行動の組織に協同するのではない。蟻は、始めてその蟲にとりつかれた時は、身體を振つて

それをふり落さうとするが、その目的を達せずして取りつかれてしまうと、やがてそれに馴れて、その蝨と一心同體的に平氣で重荷を負ふて生活する。蜂にも同じく蝨が取つき、蜂の口の邊を刺戟して、蜂の胃から食物を吐き出させてそれを喰つて生活するといふやうな例がある。

かやうな例は共棲が宿主と宿借りとの双方に利益である場合（たとへば蟻と蚜虫との場合の如き）即ち所謂 Symbiosis 的共棲に對して Synoekiosis と稱せられる共棲の一種（前號に擧げた Myrmecophily の第二の Synoeketes よりも廣い意味で片務的共棲狀態一般をいふ。）のであるが、かういふ片務的共同生活の成立する理由は生物學的には說明されない。蓋し、生物學的の理解は、生存に有利な狀態が存在することに理由を求めるものであるが、この場合は、有利であるのは寄生する一方にだけであつて宿主は多少とも不利な狀態の下に置かれてゐる。この不利な狀態が持續される理由は、決して生存上の理由でないことはいふまでもない。

非協同的の群は、その他いろ／＼の形態に於て成立するが、要するにその條件は、共同生活者の一方の生存は、他方の行動に全部的に依賴するが、他の一方の生存は、決して他方の行動に依賴してゐないといふことである。

そのやうな不公正な狀態が生物界に存在するのは甚だ不可解なやうであるが、然し生物學者が Coenobiosis と呼んでゐる生物界の相關的生活狀態は往々、さういふ不公正な條件の下に置かれてゐるものである。ケノビオシスとは、生物の複雜な集合的生活に於て一定狀態が保たれるために、その狀態の下に在る一切の生物が一定の關係で互ひの生存利害に於て結びついてゐるといふことである。たとへば蜂は花の蜜を吸つて生活するが、花は蜂の媒介によつて生殖するといふ狀態の下に於ては蜂の全滅は、花の滅亡となり、花の全滅は蜂の生存を脅かすといふ關係にある。而もさういふ單純な二つのもの丶關係と同じやうな結合が交錯してあらゆる生物の間に存在し、互に撲滅し合ふかと思はれるやうな弱肉强食的關係に於ても、相互の生存がその關係で互に保障されるといふ狀態に在る。たとへば、原生動物は、それよりも細微な極微の動植物を餌物とし、大きい魚類は小さい魚類を餌食とするが、然し、その關係が成立した一定狀態の下に於ては、決してその强大な一方が弱小な一方を全滅せしめることは出來ないで、强大者の全食量が愈增大すれば、それに應じて、弱小者の繁殖力が愈增大し、兩者の生存の安全率は依然として前通りに保たれる。而してそれと同じく、ある生物間に成立した一定の食・被食の關係は、他の生物の關係をも支配し、その變化は、甚だ廣い狀況の變化を惹起す。例へば、有益鳥の存在は、害虫の數を制限し、從つて植物の生存を保障し、人間及び動物の社會の安全を一定の率に於て保障することゝなる。故に有益鳥の全滅は、人間の社會的生活を脅かす關係となる。又微生物は人間の疾病の殆んど唯一の原因を爲すものであるが、それの繁殖は非

に旺盛で、もしこれを最も安全な環境の下に發育せしめれば、恐らく數年にして天文學的に認められてゐる全宇宙をこれら微生物で埋め盡くすであらうとは科學者の計算である。然るに、自然は他方にこれらの微生物を食餌とする多くの生物を生じて、その宇宙塡充を防ぐための調節を怠らない。といふ見方は寧ろ顚倒的であつて、事實は、それらの微生物の繁殖力の旺盛なのは、それらの生物の生存力が極めて薄弱で、生物相互の競爭のため又は自然狀況の微少な變化のためにも、甚だ頻度の死亡率をもつてゐるので、大量生產によつて、始めて種が保存される狀態にあるのである。(ダーウヰンの『種の起原』第三章は生物間に於ける此等の關係を說いたもので、あらゆる生物學者に引用されてゐる有名な『クローバーと猫との關係』も同章に見える。)

故に、彼等にとつて最も安全な環境のなかつたことが、その旺盛な生物の繁殖力を必要とした所以である。さうして、その狀況の下に於て此等微生物と他の生物との關係が決定されてゐるのであるから、もしこの狀況に變化が生じて、此等微生物がより安全の環境を持つこととなつたとすれば、他の生物間の相關々係にも變化を來し、他の生物、たとへば人間の生存はこの微生物のために脅かされ、生物界の現狀は攪亂され、全體の狀況が變化せしめられる。種々なるペストの人間界及動物界に於ける流行の如き又肺病、性病等の社會的蔓延の如きはその一例である。

故に、生物界の平衡狀態といふのは、決して正義の釣合がとれてゐるといふことではなく、不正義によつて破壊されないやうな塡補狀態が成立してゐるといふことである。それもある意味では正義の觀念に一致する狀態といへないこともない。蓋し、多くの被害數は多くの生產數で塡補されるといふのは、やはり一種の衡平狀態だからである。然し、その場合、加害者はその加害行爲に於てただ利益するのみで、何等の代償も要求されてゐないので、その點からいへば正義的狀態は破られてゐる。

然し、より發達したケノビオシスに於ては、加害者は、被害者の種的生存を保障する積極的關係に入り込むのである。即ち農作物、家畜等と人間との間の關係といふやうた場合には、人間は、米や豚等に對して加害者の地位にあるが、その代り、種としての米や豚の全量を益々多量に產出せしめる人爲的方法をとつて、加害による米や豚の減滅を防いでゐる。即ち生物學的のモツトーたる、『一つの種の犠牲に於て他の種が榮える』といふ關係は、より發達した社會的關係に於ては多少狀況を變じて、犠牲を要求する種は、犠牲となる種の保存を許るといふ一種の相互關係を結ぶに至るのである。

さういふ作爲的の關係の生じない場合に於ても、加害種はもしその自然に任かせて被害種を全滅せしめれば、從て自己の種をも滅亡せしめる結果を招くので、一定度まで被害種の數を減少せしめれば、おのづから自己の種の數を減少せしめることによつて自然の調節を保ち、決して相互の種の絶滅を來すまでに至らないのである。この自然的調

飼に任かせずに、加害種が被害種の繁殖を作爲的に計畫するに至るのが人間の家畜飼養の起原である。

然し、かやうな飼養による増殖及び變異の製造は、生物を自然狀態に於ける生存競爭から隔離して、特に人間の生活に便利なやうに改造するのであるから、所謂「天性」を害すること甚だしく、その生物の生存力は弱められ、もしこれを再び初めのやうに天然の狀態に復歸せしめれば絶滅を免れないか、又は本來の形態に歸ることによつて始めて生存をつゞけ得るのである。故にこれは自然のケノビオシスとは性質を異にするもので、ある意味に於て、奴隷制度に比すべきものであることは既に生物學者等の說いてゐる所である。ダーウヰンも、家畜種の動物が變態的性質を呈するのは、それが家畜自身の利害のためでなく、人間の利益のために變化せしめられるからであるといつてゐるが、人間と家畜との共棲は、双務的ではなく、矢張り片務的で、その飼養によつて、家畜の生活だけが犧牲とせられる意味のものである。

生物間の關聯的生活が右に述べた如く、必ずしも正義的でないことは生存競爭の事實に依る「强者の權利」の說を發生せしめた所以であるが、然し、このケノビオシスに於て、ある生物が優位を占め他の生物が劣位を占める事情は、そのまゝ人間の社會的群生活に於て有効であるか何うかは問題である。

無論、人間社會に於ける階級間の優劣關係は恰も、異種の生物間に於ける食者と被食者と、又は利用者と被利用者との關係、若くは同種の社會的膜翅類に於けるCaste即階級群の關係に似たものであり、從つて人間の階級的差別も他の生物のそれと同じく動かすべからざる決定的條件の下に置かれてゐるものゝやうでもあり、それがため、古來存在した所の社會的階級に對する各の時代の人間の觀念は、その差別を絶對的と見做すことに於て一致してゐたのであるが、然かも人間社會の進化は、他の生物社會のそれと異り、その社會學的生態の歷史は一つの典型に於て全く固定せしめられてゐるやうなことはなく、多くの人間社會はその形態を進化せしめ、人間社會の歷史を生物の自然史から全く別のものとしてゐるのである。蟻の社會史は、現在生存する蟻がもつてゐる社會的生態の靜的記述がそのまゝ一貫して過去及び將來の長年月の歷史を構成するに止まるのであるが、反之、人間社會の歷史に於ては、たゞ靜的にそのある時期の生態を記述したのみでは、それは横に空間的の歷史をなすのみで、縱に時間的の歷史をなすものとはいへないので、人間の歷史としては意味をなさないことゝなる。

而してこの社會的生態の進化過程に於て人間社會を觀察すれば、人間同士のケノビオシスは、恰も生物間のケノビオシスに於て、常に情況の變化が起つてゐるやうな動的經過をとつてゐるのである。前にもいつた如く、生物間の生活關聯は複雜な諸條件の現狀維持に於てある典型を成立せしめてゐるので、その數知られない條件のうちのたゞ一つに變化が起つても全體の生活關係に變動が生ずるものであるが、生物

の歴史は、この變化に觸れるものではなく、一定狀態の下に於ける生態そのものである。反之、人間の歴史は、たゞその變化そのものである。無論、生物の進化論も、生物が如何なる段階を經て現狀に達したかを知識せんとするものであるが、然し、その場合と雖も、各の段階にある生物の生態が靜的狀態に於て知識されるもので、ある段階にある生物の生態の動的變化なるものは存在し得ない故にその知識には入つて來ない。反之、人間は、生物學的には、數萬年來一つの段階に靜的に固定されてゐるのだから、もし人間の生態が生物學的に記述されるならば、人間社會の歴史も亦蟻や蜂の社會の歴史と同じく横に、空間的の歴史があるのみで、縱に時間的の歴史は存在しないわけであるが、人間社會は、人間そのものが生物學的に決定されてゐるに拘らず、その社會的生態學は生物のそれと異り、全く動的で、その歴史は日一日と新らしい頁を加へて行かねばならぬのである。

されば、人間相互の社會群的關係の組織は決して生物學的に固定されたものではなく、社會的生物の生態に於て固定的の事情は、人間の社會條件によつて可變性をもつことゝなるのである。たとへば前の例に於ける蟲と蟻との關係は、その歴史過程は全く簡單至極のもので、生物學者が想像によつて考へたところから殆んど一歩も出ないであらうし、さうして固定した兩者の關係は、恐らく數万年間靜的に保たれたものと見て差支ないであらう。然るに、人間同士の場合に於て、もし右の蟲と蟻との關係のやうな狀態が成立したとしても、それは必ず一定の時期に於て何等かの變化を見なければ已まないのである。それが即ち『制度』の進化に外ならない。ある制度は數千年間保たれることもあらう、然し、その固定も生物學的ではなく、內容的に絕へず變化してゐること、たとへば主從關係の如きが、奴隷時代、帝國時代、封建時代等によつてそれ〲變化し、資本主義時代に至つて殆んど消滅せんとしつゝあるが如きものである。

然し、このことを以て、生物界に於ける生活の相關的法則と人間社會に於けるそれとの間に根本的の相違の存するものとすることが出來ないのはいふ迄もない。生物の生態の靜的であり、人間のそれは動的であるといふことが、たゞ程度の問題であることは今日世界の各地に棲息してゐる野蠻人の歴史と文明人のそれとが程度の違ひであるのと異らない。野蠻人の歴史は全く博物學的であるが、それは彼等が歴史を作る過程の恐ろしく緩慢なためで、決して歴史過程をもつてゐないといふことではない。それと同じく社會的昆虫の社會に歴史のないのは、彼等の社會生活に社會史的法則が進行してゐないことでなく、ただその法則を具體的に表現する行動が、全く簡單且つ一樣なのに過ぎない。

然かもそれだけの差異の生じたのは、人間社會に於ける行動の複雜性とそれに伴ふ意識の發達とによつたもので、丁度、形態上の變異が生物の生態に變化を生ずるやうに、人間的行動の型式に於て常に變異を生じ、その行動典型を新たにする結果、その行動組織に變化を生じ、

從つて、新たな意識形態を生じ、行動の性質とその組織の、即ち、社會的生態の變化を産み出すのである。

かくて人間社會のある形態に於て發生した事情は、一つとして決して絶對性乃至恒久性をもつて、人間社會の必然的運命を形作つてゐるものではない。貧乏は、畢竟、今云つたやうな人間社會のケノビオシスの結果として發生した現象で、ある社會形態には必然であるが、その形態は決して人間社會に絶對のものでない。それらの事情を次ぎに説明するであらう。

五　群形質とその交錯＝貧乏發生の社會的條件

社會群の二つの性質、即ち協同的、有機的組織と、非協同的、非有機的組織とは、決して別々の異る社會に行はれるのではなく、同一社會に於て、同時に交錯して行はれてゐるのである。それは丁度、強盜を生活とするものも他方で家族生活を生活してゐるやうなもので、社會といふものが、それ／＼いろ／＼の異る行動の組織であることの當然の結果である。傳統的の社會の觀念によれば、社會とは統一された人間の群で、行動の如何に拘らず同一統制の下に、同一生活圏を作つて集團のやうに理解されてゐるが、事實としての社會は決してそんなものではなく、社會は、それ／＼異る行動をもつた生活圏で、國家といふ社會は、國家的行動の生活圏であり、家族といふ社會は、家族的行動の協同關係に於ける生活圏であり、その他自治體といふ社會に自治的政治行動の、村落といふ社會に郷黨的生活行動の、商業社會は、商業的行動の、農業社會は農業的行動の、それ／＼それらの行動で統一的に組織立てたものである。即ち特殊の行動から成る一定の生活圏が社會である。

故に、ある社會群は、いろ／＼の種類の行動の生活圏の交錯狀態であつて、それ自體の統一的行動といふものはない。日本といふ社會は人間群には相違ないが、日本といふ行動などの有り得べき筈はないから、社會としては、國家、家族、商業社會、農業社會、その他すべて特定の行動圏としての社會が交錯して全日本人群を成してゐると見る外はない。されば、そこには協同的有機的の群もあれば、非協同的非有機的の群もある譯である。

その場合に、協同的、非協同的乃至有機的非有機的といふ意味は、今云つた各種の行動圏自體の内に於てさういふ別があるといふ意味ではなく、その各の行動圏と他の行動圏との關係に於て、さういふ別があるといふ意味である。如何なる行動の生活圏も、それ自體の內的結合に於ては協同的であり有機的である。盜賊團のやうな社會といへども、その點に於ては社會的協同關係をもつて從つて所謂有機的組織をもつて成立してゐるものといはねばならぬ。たゞ、その特定の社會を爲す生活圏の行動の性質によつて、それが他の種類の行動の生活圏との交錯的關係に於て複式共棲組織を成さしめる場合に、協同的であ

る場合と然らざる場合とがある。即ち盜賊の社會は、それ自體はある程度に於て社會的有機關係を組織の條件としてゐるとしても、その生活圏を構成する行動の性質は盜奪であつて、他の行動圏との協同關係に擁着する性質のものであるから、それは社會圏の有機的交錯關係からは必然に除外されるであらう。これ則ちそれらの社會が、有機的協同群としての組織をもつ社會に於ては必ず所謂秘密結社として、社會群全體を敵とする地位に立たねばならぬ所以である。

然し、社會が非有機的の亂脈狀態に陷ると、此の盜賊社會が、行動圏の社會的交錯狀態の中に入り込み、その特殊の行動の性質をもつて一定の社會群的交錯狀態を統制する地位に立つこともある、その統一が先きに云つた非協同的非有機的統一に外ならない。中世までは、地方の豪族と稱する武力的集團が、各地に城砦を築き、社會的交通を遮斷し又はそれに課税し、その周圍の各種の社會的生活群に對して掠奪を行ひ、やがてその行動と精神とをもつて、周圍の地域に國家的統一狀態を作り出したのが、帝國分裂後の封建時代の世界的狀態であつたが、それは、即ち非協同的統一の極端な例であつた。

それは餘りに極端な場合であつたが、その時でも、全體的の社會群は決してすべてさういふ非協同的行動圏の交錯から成立つてゐたのではなく、その封建的國家行動の生活圏たる一社會群を除いた他の社會群の多くはそれ〴〵協同的行動の生活圏だつたのである。

人間の社會群を構成する各種の行動圏の行動の性質が協同的、有機的である場合は、生物學者の所謂 Symbiosis 即ち双務的共棲と稱する關係と同樣で、自然界に於ける各種の生物が、互ひにその特徴ある異種の生活行動を持ち寄つて相共に生存に利益することを得るといふ場合に成立する現象である。人間群も環境又は遺傳によつて、それ〴〵その行動の特徴を異にするのであるが、人間がもしその特殊の行動形質に閉籠つてしまへば、一般生物と同じく、その社會的生態は、生物及び蠻人のそれと同じく進化しない狀態に固定せしめられるわけであるが、人間群は、各特徴ある行動形質をもつた、多くの群の接觸によつて、その行動の効果を交換すること、恰も物資の交換の如くするに及んで、人間群としての行動の形質、即ちその社會的生態は複雜化し、從つて絶へざる進化過程をとるに至るのである。

然もそれ〴〵異る行動形質をもつ人間群の接觸は、所謂前史の示す通り、戰闘的であつた。異種の行動形質をもつて協同するといふことは、同一社會群内に於ても多少は行はれたが、原始的の社會の單純性のために、同一社會に於ては行動形質も一樣で、異種行動の混交の利益は鮮い、從つて、外群に對して行動の効果を交換する物々交換の形をとつたが、それらの異種の行動群が交錯した一社會群を作る過程は平和的には行はれなかつた。異種の行動群たる別々の社會が、平和的に接觸してゐる程度では、社會的混淆即ち生態の交錯が起らないので、さういふ平和的交換狀態に止まつてゐる原始的社會群はいつまでも進化の段階を上昇することを得なかつた。それを成し遂げる過程は、必

ず不幸にして、戰爭であつた。

　で人間の社會史に於て、異種の行動群の交錯による社會群を成立せしめるには、必ず敵對狀態の各群を强制的に協同せしめるといふ統一方法がとられた。これ文明は戰爭から始まるといふ人間的社會史の特徵の生じた所以であり、又有史以後の人間社會の歷史が、戰爭に始まり戰爭に終つてゐる所以である。

　この事實が、人間の社會構成に重大の結果を齎す筈のものであることはいふまでもない。がそれは普通、歷史家が考へてゐるやうに、赫赫たる戰史が人間の歷史を飾るに至つたことが重大の結果であつたといふ意味ではなく、さういふ過程の性質が、人間的社會の形式と實質とを規定するに至つたことである。

　旣にいつた如く、生物界に於ても必ずしも雙務的共棲のみがそのケノビオシスの唯一の性質ではなく、所謂弱肉强食の害・被害の關係が支配してゐるに相違ないが、然し、その全體的形勢は、始めにいつた如く、各種の生物がある特定の狀態の下に於て生存の安全率を一定度で保ち得るやうな衡平狀態を得てゐたのであるから、自然界の統一は、必ずしもそのまゝ正義的ではないが、衡平的ではあつた。言ひかへれば、ある急激の事情の變化の發生しない限り、生存競爭による損害は自然的に塡補される傾向をもつてゐた。然るに、かやうな自然的傾向は、人間の社會群に於ては、その通りに行はれることを妨げる事情が存在してゐた。それは、その自然的傾向がそのまゝに行はれるほど、人間社會が生物學的自然狀態を保存し得なかつたゝめであつた。

　生物學的自然狀態は、相互關係を甚しく形態及び生態の異る生物間に生ずるもので、これらの生物はその關係によつて統一的社會群を形作るものではない。故にその異る生物間の關係も行動的相互作用ではなく、生物學的相殺作用である、詳しくいへば、一方の生物の行動が他方の生物の生活に必須な關係で結合するといふ事情は少しもなく、恰も空氣と樹木と又は暴風と微生物との關係のやうに、有益である場合も有害である場合も、相互の行動關係ではなく、物理的の生存競爭に終始するのである。反之、人間同士は、その單純な社會生活に於ても、必ずしも同種の人間共通の祖先をもつたそれではないが、しかし最も單純な社會を形作るとその各員の相互の關係は、既云つた如く行動的に相關聯し甲の行動と乙の行動とは離れ難い關係で結びついて、互の生活が多くの行動の組織的に關聯した體系を爲すことゝなる。そこで一方の生活は他方の生活にとつて互に必須の條件をなすに至り、その結果、一方は他方の生活を、他方は一方の生活を、互に保障し合はねばならなくなる。生物界のケノビオシスのやうに、生存競爭的である譯には行かなくなる。これ極めて原始的の人間社會は、內部的には決して生存の鬪爭組織ではなく、互助組織たる所以である。今日でも社會內にさういふ形態をもつた社會がある。それは卽ち『家族』である。此單純社會に於ては社會の各員の關係は、決して食・被食のそれではなく、又、害・被害のそれでもなく、全くシンビオシスのそれでこと

更原始社會と同樣である。

然るに、さういふ群が、他の群と接觸した時に、互に戰鬪的であるといふのは、これらの群と群との間では、右にいつたやうな關係が行はれてゐない證據である。（かういふ關係が、即ち「外群」關係である、）所が、この戰鬪の結果、人間の場合は、そこに必ず群と群との合同が起る。恰も蟻の種の間の戰爭の場合に、一方が他方の幼生や繭を奪ひ去る結果、奪つた群と奪はれた群との間に、社會的合同が起るのと同樣である。（これは社會的生物の常態である。）所で、かやうにして蟻の場合の奪者と被奪者とが主人と奴隷との關係を生ずるやうに、人間の場合も、勝者群と敗者群との間に、强制的統一を生ずる。

この統一に於ては、今まで外群同士であつた敵對群が强制的統一組織の下に、恰も少しもさういふ反撥的關係のなかつた協同社會に於ける内群的關係狀態のやうな外形の下に强制的に協同せしめられる結果、内的關係に於て、全く敵對的行動的の生存競爭を、行ふやうな變態的協同狀態が成立するのであつた。

その社會群に於ては自然界に於けるやうな食・被食の關係がある程度で制限されると同時に、社會的協同に代るに社會的對立が根本の社會的衝動となり、個人と個人とが對立しないまでも、異種の行動群はそれ／＼對立的地位をとることゝなつた。その結果、ある群は他の群に對して、原始的協同社會群に於けるやうな共通關係に基く行動の協同を必要とせず、丁度、外群同士の關係のやうに、交換的條件なしには、何等共通的の融通の行はれないことゝなつた。これが群的私有財産制の成立であつた。ある氏族群はその氏族群内では生産消費の共通が行はれ、ある行動群はその群だけでは原始社會的互助組織が行はれるが、それらの群と群との間には、原始時代の外群關係と同じやうな對立關係をもつて「協同」し、場合によつては昔の外群の通りの戰爭も行つた。

これが即ち貧乏の可能性をもつた群關係の成立であつた。かういふ社會群の發生以前には貧乏はある意味で不可能であつた。何となれば、かゝる社會群の發生以前の社會狀態に於ては、一つの社會は、それが缺乏狀態にあれば、全體的に缺乏して、生活狀態が低下し、人口が減じるまでで、その中のある特殊の人々が特に缺乏に陷るといふことはないのであるから、丁度、アフリカの黑人部落が必ずしも貧乏とはいはれないごとく、その低下した生活、減少した人口をもつた社會を貧乏といふことは出來ない。貧乏とは前號にいつた如く、同一社會内に特に缺乏的生活の人口の存することである。

六　貧乏發生の環境としての群形質

對立的關係に於ける社會群に於て貧乏が必然的に發生したといふことは、決してそれが群成立のための戰爭の惨禍によるとか又は對立群間の戰爭又は競爭の結果であるとかいふ意味ではない。

さういふ貧乏狀態も、亦對立的社會群の特徴であるには相違ないが、それは必ずしも對立的形勢にのみ必然のことではない。又ある種の群と他の種の群とを、ある行動群と他の行動群とを比較すれば、如何なる關係の下にも、一方は他方に比して富むとか貧しいとかいふ狀態の存在しないわけに行かぬ。然し、對立的社會群に於ける貧乏の發生は、對立的社會群の統制そのものが貧乏の現象を生む制度であるといふ所に存す。

それは即ち財產制度の進化——或は退化——である。對立的群生活は外群と同じく、それぐ\自己の群生活を終極の目的とするものであるから、その生活を支持する生產組織は彼等の群に專屬し、土地その他の生產用具はすべて群の獨占である。從つて消費の組織も自己の群に固有の制度をもち、武人は武人の、農民は農民の消費組織をもつてゐた。かういふ組織に於てはたとへば、武人階級は掠奪によつて自己の經濟組織を構成し、農民は耕作による經濟組織をもつてゐるが、その武人と農民との相關々係は全く外群的で、奪ふことの出來ない武人の餓へたのに農民は食を與へる衝動を感ぜず從つて義務をも感ぜず、又奪はれた農民の餓へるのに對し、武人は、同群の武人に對する如くにこれに扶持を與へる衝動も義務も感じない。かゝる社會に於ける貧乏の可能性はかゝる事情に基いてゐる。

然し、この可能性が直ちに貧乏そのことの直接の原因でないのは、不潔が直ちに黴菌を生むものでないのと同じである。それは貧乏の生れ且つ育つ環境である。されば之れを生む親は別に存する。

對立的關係の社會は、それぐ\群的獨占の生產組織及び生產用具をもつものであるところから、さういふ群に於て群的私有財產制の成立することは前にいつた如くであるが、さういふ群的私有制度の下に於ては、貧乏も亦群的である道理である。即ち、武人の群が富めば、農民の群が貧乏し、商人の群が富めば貴族の群が貧乏するといふ群的比較級に於て抽象的貧乏が考へられる譯である。が、さういふ社會に於ても、事實上の、具體的の貧乏は、常に必ずしも、さういふ一般的狀態をもつて現はれるものではなく、一つの富貴群又は貧乏群の內部に、更らに貧富の懸隔が生じてゐたのである。しかもそれが亦、同じく對立的社會關係に原因してゐること群的貧富狀態のそれと同じなのである。

といふのは、對立的社會群の發生以前の社會に於ては、同一群內に於ては交換も行はれず、贈與といふ觀念さへもなかつたといふ位で、人々は、生產と消費とに於て恰も、同一食卓についた家族のやうなもので、今日のピクニック、收穫祝ひ、宴會等の習慣は、當時の社會の共同的生產及び消費の形式の殘存であるといはれてゐる。從つて同群內に貧乏の發生することは不可能であつた。然るに、異種群の對立が强制統一の下に持ち來たされた結果、この群的共同の組織は、前いつた如く、なほある程度で保存されながら、各の群生活を構成する單位——同じく家族といふ群であつた——も亦、以前の氏族的構成から分

裂して、將來に於て恰もゴリアの家族のやうに一家族單位に陷るべき進化傾向をとり出した。此の傾向は最近代までは形式的、觀念的に壓迫され、實質的にもある程度まで傳統的の氏族群的性質が殘されてゐたが、然し、さういふ形式から離反し、又はその形式が實質的に支持されない例は無數に起つて、社會的生活形質は、氏族的に衡平狀態を保つことは早くから已んでしまひ、氏族的共通關係の下に置かれない孤立的家族の發生は全く防ぐことが出來なくなつた。これは、一方で、氏族的行動圏が、古代のそれのやうに統一されずに、社會的複雜性に伴つて分裂し、互に利害の相反狀態を生ずる關係に立つに至つたことと、他方に於て、その分裂に伴つて、私有財産關係も分裂し、互に共通財圏としての相關々係が無くなつてしまつたゝめとであつた。要するに、行動圏の分裂と群的私有制度の分裂とに基いてたのであつた。

この意味の行動圏の分裂とは必ずしも基本的行動形質を異にするに至ることではなく、行動組織の編制に變化が起るのである。たとへば、同じ農業的行動圏內に於ける同一氏族の間にその氏族的中心勢力の分裂が起り、それに伴つて、群的私有制に分裂を生じ、經濟的平衡が內部的に破られゝば、同一の基本的行動圏內に於ける組織的地位の差違が生じ、それに應じて行動の形質が變化し、同一群內に異群的行動圏の分立狀態を生ずるのである。

かやうな分立狀態に於ては、前にいつた武人と農夫とのそれのやうな異種群に於けるやうな消極的の、無衝動的の非協同的關係に止まらないで、丁度狩獵群と農耕群との接觸に於けるやうな攻伐掠取の關係を、外群的統一社會の統制組織の下に於て、——平和的、合法的に——社會的內群の裡に發生せしめることゝなるのである。これは貧乏の可能な環境ではなく、貧乏の直接原因である。

かやうな內群自體に於ける行動圏の分裂は、外群的統一社會に於ては、無論各方面に起り得る。而してその有力な具體的動因の一つは、奴隷制度であつた。奴隷制度は、一つの協同的、有機的社會群を構成する單位群が、その小群の各に外群的統一社會を構成する敵對分子を收容したものであつたが、その分子は群としては、各の單位群の成員の群よりも大群であるのが普通であり、その制度の極度を既に經過したといはれるギリシヤ、ローマに於ても、一家族に數百人の奴隷は珍らしくなく、それがためローマ時代に於ては、奴隷の供給に不足を來し、城外一歩を出づれば、自由民も何時奴隷狩りのために捕へられて奴隷に賣られるか知れぬといふ危險があつたといふ位であつた。されば、強制的統一社會に於ける單位群はやがてそれ自體が、大統一社會の見本のやうな敵對關係をもつた、小社會となつたのである。

さういふ小對立社會をもつた內群は、その對立形式を保つ間に、事實上、奴隷群と主人群の混交を生じ、最も純粹なるべき單位群は却つて最も尨雜な對立的群組織の實質をもつに至るのである。氏族的原始群的意識は、この生活事實に打ち克たれて次第に形式に止まることゝなり現實の生活關係に於ては、この內群が最も著しい敵對群を內藏す

る社會群の性質をもつたものとなつたのである。

されば、かやうな單位をもつた統一社會に於ては、主人的社會群の統一が敵對的關係者の强制的協同であると同時に、その主人群を構成する單位群たる氏族群乃至家族群自體が、敵對群を包含する强制的協同組織であつた。だから從前の行動圈的統一は全く『觀念的』のそれとなり、現實の社會事實としては、最早、武人階級といつても農民階級といつても、決して同一行動圈を從つて同一私有財産單位を意味するものではなくなつたのである。そこで此等の單位群の內部關係に於て互の生活の協同でなしに互の生活の搾取が常態となり、貧乏が內群的に普通の現象となつてしまつた。これは貧乏の消極的原因でなく積極的原因であつた。

七　群形態と貧乏の起原

社會群構成の事情は貧乏の客觀的條件ではあるが、それだけでは貧乏現象の起原をつくしたものとはいはれない。殘てゐるのは次のやうな諸問題である。

1、社會的協同群それ自體に含まれてゐる、貧乏の內在的的行動關なるものがあるか？

2、外群的强制協同の關係に於て一つの群は何故に他の群よりも貧乏であらねばならぬか？

3、外群的統一社會群に於て、如何なる行動形質をもつ群が貧乏の運命を擔ふか？

4、內群の對立狀態に於ける貧乏の性質？

5、それ自體必然に貧乏なるべき行動形質は何か？その行動形質をもつ群は必ず貧乏するか？

6、貧乏は行動形質の如何によるか、又は社會的ケノビオシスによるか？

對立關係の群と群とが强制的協同關係に統一された時に、如何なる理由によつて一の群は他の群よりも貧乏であらねばならぬか。

社會群は、行動關係であるが、一定の行動によつて結合された群はその生活圈に於ける各員の生存を相互に保障する關係をもつものであること既にいつた通である。それは全く理性を超越した自然事實であつて、極端にいへば、樹木の根幹が枝葉を支へ、それに地中の營養を送り枝葉は根幹に空中の營養を送るといふ關係のやうなものである。而してさういふ關係の成立は、元來、枝葉が根幹の延長であり、從つて枝葉と根幹とは相合して一個の有機的全體を構成するものだからである。有機的全體とは、生命の機構の組織された統一であつて、その各部分は他の部分との關係なしには、自己及び全體の生命を維持し得ないといふ構造をもつものである。人間の社會群も亦、その最も簡單なものは樹木に於ける根幹と枝葉との如く、その全群は中心たる母體から派生したその延長に外ならぬこと蜂の社會のそれの如きものであ

る。從つて、全體は、一つの生命組織なる構造をもち、各分子は、その統一的生命組織に於ける機能によつて各の生存が保障され、同時に犠牲ともされるのである。

かやうな有機的群に於てもなほ且つ各分子の地位によつて內部的競爭のあることは、脫れないので、その競爭の結果によつて、群進化の性質が決定されるのである。一個の生物學的有機體に於ては、胚質を構成する諸分子の生存競爭が起り、そのうちの優性のものが遺傳形質を決定すると唱へるのが卽ちワイズマン說である。從つて單位的分子の地位に利不利を生ずる譯である、人間社會に於て同じ事情が存すれば、そこに貧富の差別が生ずるといふのが、生物學者の社會觀に於て往々唱へられるが、それはある意味での貧富當然說ともいふべきものである。

然しかやうな機能的差別による利不利は、必然に貧富の懸隔を生ずるものとは限らない。蓋し、如何なる群にも分業的差別が發達すれば、そこに成員の間に地位の利不利は起る。人間の細胞でも、そのあるものは迅速に生命を奪はれて無機物に追ひやられ毛髮、爪等に變じて切り取られる。然し、その細胞にも機能的役割を演ずるだけの生存力卽ちその機能に應ずるカロリーが與へられてゐることは、他の細胞と少しも異らない。人間の貧乏とは、その人間の一定の機能に相應する生活の熱量が與へられないことで、言ひかへれば人間的機能を果し得ない狀態に置かれてゐることで、有機體に於ける分業による分子の地位の利不利とは異つた現象である。

生物學者はまた、有機體の分子の機能的分業の事實を人間社會のそれに援用して、營養價が特に有機體のある部分に集積される事實、たとへば母體の子宮及び乳腺等に營養價の集中されるやうな事實は、鳥がその卵に營養價をコンデンスせしめる事實の進化したもので、剩餘營養の蓄積によつて全有機體の增殖に資するものである。そして人間社會に於ける資本の蓄積はそれと性質を同じうする有機的社會生活に必然の過程であるといふやうな見地をとり、資本蓄積が人間社會に恒久的の事實であるが如くに考へやうとする。ロンドン大學のテンディー敎授の如きは、その一人だが、氏は前號にあげた六蟻——蜜蟻——が多量の蜜を腹に蓄へるために腹部が地球儀のやうに膨脹して動くことも出來ず巢の天井にぶら下つて、勞働蟻のための食糧貯藏器のやうな役目をつとめるのを稱して『勞働管理の下に置かれた强制的資本家』であるといつてゐる。

有機體に於ける餘剩營養の蓄積と、今日の所謂資本とは、生產の要具として特に資本なるものを必要とする經濟組織の社會に於ては、多少の類似點を認めることが出來るが、然しさういふ經濟組織が、有機體に於ける營養關係のやうに、人間社會で必然のものであるとはいはれないし、更らに、有機體に於ける營養價の蓄積は、特に營養的細胞の生活組織のためではなく、全有機體の生命の機構であるが、人間社會の資本は資本所有者の生活の機構であつて、勞働階級はその手段に過ぎ

ないこと恰も有機體に營養價を供給する被食者のやうな地位にあるものである。有機體に於ける資本は、營養價の蓄積それ自體で、格別の實細胞がそれに結びついてその營養價を獨占するといふやうなことがなく、それは全有機體の關係に於て消費さるべき蓄積であつて、全く人間社會の資本とは性質を異にする。有機體に於ける營養價の蓄積は貧乏を生ずる原因ではなく、その反對で、貧乏を減ずるものであるが、人間社會に於ける資本の蓄積はそのこと自體が貧乏の原因である。これを有機體のそれに譬ふるならば、貧乏は、多くの細胞のもつてゐる營養價がある特殊の細胞に集注されて、一方に多くの細胞を貧血狀態に陷れると同時に、他方に贅肉を發生せしめるといふ病的現象である。

されば、一定の有機體に於ける機能的地位の差別と人間社會の貧富とは別物であるが、然し蟻の社會の樣な社會的有機體に於て、(寄生生活の場合でなく單純社會の場合) 營養價が特に其社會の特定の個體——女王——に集積される場合は全く人間社會に富者と貧者を生ずるのと同じ現象ではないかとも思はれるが之も生物學的比喩の誤用である。

蟻の社會のやうな極めて機械的の社會的有機體に於て、營養の蓄積がある個體に起る場合は、その個體は必ずそれを種の生殖作用に消費する。言ひかへれば、その個體は殖産の機能をもつものとなる。卽ち主として女王となり。あるものは生殖力をもつ雌となる、女王は全く種を生産する機械のやうなもので、蟻の社會的生活には何の交渉をもたない個體となる。ある女王は同種の職蟻の數千倍大もある巨軀をもつものとなり、一日に數千の種族膨脹を行ふ。蟻に似て蟻でない白蟻の女王は、更らに猛烈で、體軀も同種の職蟻の二萬倍大に達し、一日に三萬の人口增殖力を行ふこと十年以上に及ぶといふから、もしその間每日生産したら一女王から産れる人口は無慮一億九千五十萬に及ぶわけである。蟻の社會に於ける資本は、たゞ全く種の繁榮のために消費されるものである。

然し、女王の何千分の一の體軀しか持たぬといふ職蟻は卽ち蟻の社會中の貧乏人ではないか。女王をして贅澤な安逸生活を營ましめるために働くのも貧乏人そのまゝであるとも考へられる。

如何にして職蟻が出來るかについては說が岐れてゐるが、營養量の不足から生ずるといふホキーラーの說が最も有力である。して見れば人間社會に於ける貧乏人發生の理由は、職蟻の發生と同一の事情に基くものであるらしくも思はれる。卽ち、自然現象的理由によつて、群中のある特定の個體に營養を集注せしめ多くの成員は貧弱な營養しか與へられない事情が、蟻の社會に存在する如く、人間の社會にも存在することが、貧富の存する所以ではないかといふのである。

がこれ亦誤つた比較である。蟻の社會に於ては、決して群中の特殊の個體に營養が集注されるのではなく、營養の集注した個體から種が作られ——その種の生活を維持する勞働に從ふ職蟻が作られ——るのである。されば營養が特殊の個體に集注されることは、それが多くの種の成員に分配される第一過程に過ぎないのである。多數の職蟻は、

決して貧弱な營養しか惠まれぬ貧乏人ではなく、生活機能を果たし得る相當の營養を與へられて何の不足もない身分である。反之、女王や蜜蜂やは、營養倉庫に過ぎない。女王は一旦職蟻を産み出してしまふと蟻の社會を支持する何等の行動をとらない、即ち生活行動に拘らない——言ひかへれば、蟻的行動圏の行動形質を働かない——非社會的生活をする。從て蟻の社會がもはや女王の生殖機能を必要としなくなれば、女王は職蟻に喰ひ殺されてしまふ。さればかやうな女王や蜜蜂は決してこれを富者といふべきものでない。同時に、職蟻も決してこれを貧者といふことは出來ない。

以上の事實は、社會群的協同體に於ては各成員は、その機能に應じた充分な生活のカロリーを與へられてゐるといふこと、即ちそこに決して貧者の發生しないといふことの證據である。これは、生活群が、協同して一定の行動形質を行動するための自然過程であつて、樹木の一枝一葉が機能に相當する營養量を攝取する現象と同じことである。この場合にも、たとへば、ある樹木の片隅の葉が光線を遮斷されたために綠素を失ひ營養攝取の力を失つた時は、それは貧乏に陷つたといはねばならぬが、それは決して、人間の貧富のやうに、社會群の組織から生じた現象ではなく、全く外部の偶然の原因により、恰も偶々胃腸病に罹つた人間の痩せ衰へたのと同じく、これを病的營養不足に比べることを得るが、これを貧乏に比することは出來ない。貧乏を研究する學者が、往々貧乏の原因としてかやうな個體的變質を擧げてゐるは滑稽な見當違ひで、かゝる個體的現象は決して社會的貧乏現象の原因ではなく、さういふ偶然の事情で生活力を失つた社會の成員を貧乏狀態に放置する社會組織が貧乏の原因なのである。歐洲戰役には戰傷による不具のために貧乏に陷つたものも澤山あるが、その人の貧乏の原因を不具そのものに歸して、かゝる不具者を社會的有機關係の外に放置する社會そのものに歸せしめないには、病者を放置し死に至らしめた醫師が、死の原因を病氣に歸して、自己の責任を感じないのと同樣である。個體的變質は、貧乏を生ずるやうな社會關係の結果ではあり得るが、決して貧乏を生じた原因ではない。

果して然らば、先きに擧げた第一の問題に對しては、群は內群關係それ自體に於て貧乏を發生せしめる內在的事情をもつものでないと答へねばならぬ。即ち群の內的シンビオシスは貧乏現象に對して責任をもたないのである。

八　貧乏を發生せしめる非協同の動機

協同體としての群自體に貧乏なしとすれば、本論の六節以前に於て記述した貧乏の客觀的條件即ち强制的統一群に於て貧乏の發生する理由は各群に於ける內群的事情によるものではなく外群的關係によるものであるといふことは立證されたわけである。然らば、一の群が他の群と强制的協同關係に於て統一された時に、一つの群が貧乏に陷るこ

との必然的であるといふことは、右の內群的性質と矛盾する現象である。が一方の內群に於て全く不可能である矛盾現象が、外部的集合に於て可能である理由は何によるか。苟も群的生活組織は、それが內群的集合であらうと外群的集合であらうと、又その發生が『自然』的であらうと人爲的強制によつたものであらうと、之を要するに、單純群であらうと複雜群であらうと、その一方には、群生活の一般法則の下に矛盾のないシンビオシスが成立し他方には成立しないといふ理由は何處にあるか。

その理由を『種』に求めるのが傳統的の解釋である。種族鬪爭說は、その意味で淵源は甚だ古い。異つた種は本來鬪爭するといふ事實の嚴存する以上、異種の集合よりなる社會群は內部的に鬪爭する必然性をもつ。これ亦理由を超越した自然現象であるといふのである。前號にいつた通り貧乏の原因に關する『掠奪說』に於て有力なのは、この種的反撥を掠奪的行動の動機とする說である。

此說は、最近の生理學說に於て有力な後援者を見出した。それは卽ち各の種の血液には、それ〴〵、未だ科學的に判明しない性質の特異性があつて、異種の血は互に混淆を拒む特性をもつてゐるといふ發見である。血液の檢査によつて生兒の系統を見出し得るといふのもこの事情に依つてゐるのである。

そこから、民族主義は生物學的根據をもつものであると主張する。前に擧げたデンデイー教授もその一人である。これは畢竟、外群的鬪爭は、種の血液の相違から來る不合理的の必然で、道德や生活利害やがそれを消滅に歸せしめることは決して出來ないといふのである。而してこの鬪爭は、全く生物學に於ける片務的共棲の現象を生ずるものであつて、一方の生活利害のため他方の利害を犧牲とする性質のものであることは既にいつた通りであるから、要するに貧乏の動因を『種』的差別に歸せしめるものである。

然し、此見地は、人種社會に於ける『種』を純然たる生理的事實に基づけることによつて、極めて明瞭な社會的事實を無視する結果に陷つてゐるのである。種が生理的事實であることは、人間を除く多くの生物に於ては間違ひないことであらう。彼等の間に臭氣によつて同類を認識することなどの行はれるのもそれと關聯する事實である。又人間に於ても、それと同じ生理的條件が種について存在してゐることも確かであらう。日本人とヨーロッパとは各異質の血液をもつてゐるであらうし、同じ日本人に於ても、互に近親の間柄の人々のもつ血液は質を同じ、全く親族關係のない間柄の血液は質を異にするといふことは、現代の醫學で移血法を行ふ時に、出來るだけ近親のものゝ血をもつてしなければならないといふことの立證されてゐるので明かだが、古來からの迷信にも、親族關係の信僞を檢するのに、血液を合はせて見てその混るか混らぬかを檢するといふやうなことも行はれた相である。がかういふ事實が、人間の社會的範疇に於ける『種』とどれほどの必然的關係があるかは無論問題である。

種は人間社會に於ては、事實であるよりは寧ろ『觀念』である。それは一つの社會的生活事實の抽象であつて、肉體的現象としての事實ではない。而して種の觀念に統一されてゐる人間群は、生物學的の同種でもまた生理學的の同血でもない。大和民族は數十の『種』の集りであるといふことだが、今日の『種』としての日本人は、それらの事實に關係なく尨雜な群がそのまゝ一つの『種』として觀念されてゐる。

外群的の統一された集團に於て互に爭ふ『種』は即ちこの意味の人間社會的種で、決して生物學的乃至生理學的意味の種ではない。然らば、その種が互に爭ふのを、各自の血液の相違に歸するのは珍論理といはれざるを得ない。」

人間社會に於ける觀念的種は即ち民族であるが、訝しなことには、外群的統一に纏められた社會集團は、必ず一つの民族に、觀念的に纏められる。大和民族、アングロ・サキソン民族といふやうなものは、外群的統一群であるが、それにも拘らずそれ〴〵一つの氏族即ち『種』であると觀念されてゐる。されば、その内部に外群的闘爭の存在するのを『種』に基くとすれば、その種は、觀念のそれでなく、生物學的のそれでなければならぬが――なるほど德川氏と豐臣氏の闘爭といふやうな種類のものは多少種的とも思はれるが、それも實は『氏』そのものが觀念的事實になつてゐるのである――武士と農民との對立、領主とギルト市民との對立、市民同士の對立、その他階級的、生活的のすべての對立を何うして血液の相違に歸せしめることが出來やう。」

前にもいつた如く、貧乏は戰爭の結果ではなく、戰爭や競爭を可能ならしめる對立的生活組織の結果なのであるから、その對立が異種の血液の爭ひであるとしない限り、貧乏の責任を血液に歸せしめることは出來ない。

又たとへ、對立の原因を種即ち血液に歸せしめるも、如何なる血液の所有者が特に富み又は貧乏せねばならぬかはつひに解決されない。」コビノー說のやうに優秀の種が富むとしても、如何なる性質の血液が優秀の種のそれであるかは決して明かにされ得ない。

そこでもう一度蟻の社會を顧みる必要が起る。社會群が自然の協同的行動によつて統一されることは蟻の社會に於ても人間の原始社會それと同樣だが、その場合に、理性を超越した協同の起ることは、蟻の社會に於ては純粹に血族的であるが、それは蟻の社會は、絕へず多産的の女王によつて新社會が作られ、少し人口が殖へれば、新女王は分れて、自から産んだ種で新社會を作るといふ過程が繰り返されてゐるからである。がその場合に、社會群の各員間の密接な結合が、全く利害を超越した、血液の同一性に基く親愛關係といふやうなことに基くものであるか何うかは問題で、ホヰーラーは、それをやはりある程度まで利害關係に歸してゐる。即ち女王と職蟻との關係の如き蟻の社會生成の第一條件としての過程も、母の愛といふよりは、職蟻の幼生から分泌する汁液が女王の嗜好に適せることに原因してゐるのであり、成長した職蟻同士も互に食物を吐き出して食べさせ合ふことが相互の結

合を緊密ならしめるものと認め、それを trophallaxis（吐食）と名づけた。而かもこの現象はやがて、異群間に延長し、そこに前號にあげた、異種の蟻同士の集團たる各種の寄生的社會を發生せしめたのである。ホヰーラーは『このトロフアラキシスこそは、‥‥諸種の外群的體制と關係を結ぶに至つた蟻の行動を理解する鍵であることを立證する事が出來ると思ふ。』といつてゐる。

されば、蟻の社會に於ては、內群に於ける協同は偶然同じ祖先から産れたといふ事情によつて群が生じたが、その群の行動的交錯を緊密ならしめ持續せしめるものは所謂トロフアラキシスの關係である。從つてこの關係が起り得れば、外群同士が恰も內群同樣の群結合を生ずるに至るのである。然るに此場合に、その外群的結合が內群のそれと性質を異にし、前號に擧げたやうな、內群に於ては決して發生し得ない各種の寄生的社會を發生せしめるのは如何なる理によるのであらうか。

それは、即ちかうである。內群に於ては群の成員の行動形質が一致して居り、從つて自己の營養量の剩餘も平均的であり、行動も同性質なるが互に交換的であり得ると共に、營養も平均的なるが故に互の塡補が結局同量的であり得る。これ內群に於ては寄生的生活の起り得ない所以である。人間社會に於ても、內群關係に於ては、老人幼者等の外にはみな機能的勞作によつて平均營養量を受授するのである。即ち互に剩餘を社會に向つて吐き出し合ひ又それを貰ひ合つてゐるのである。

反之、外群同士は、第一行動形質を異にするために、たとへば肉食的蟻群の勞作は戰鬪であり、菜食的蟻群の勞作は食料の平和的蒐集であるといふ風に、機能的勞作の性質が一定しない。又各種の勞作の剩餘の程度に相違があり、分配は勢ひ衡平を失するが故に、平和的に行はれることが不可能である、又外群同士は互に遺傳形質の相違があり、異る行動形質の組み合せが、平和的に成立する見込は少ない。勢ひ、外群間の接觸は、內群に見ることの出來ない性質の結合法をとる。その一つは物理的の壓迫による掠奪であり、他の一つは、互の行動傾向を利用する寄生である。蟻の社會に於て前號に擧げたやうな各の強奪組織や寄生組織の發生したのはその故である。

物理的の壓迫か『種』の憎惡によるものでないことは、寄生がそれによつてゐるものでないのと少しも異らない。寄生は、ある群の行動形質が偶然に他の群の行動形質にぶつかつて寄生的トロフアラキシス關係を生じたことに原因するのである。衣魚の一種が、トロフアキシスの實行中の二つの蟻の顔中に飛び込んで蟻の吐き出す汁を中途で吸ひ取つて逃げるのも、兩者の習性が偶然行き當つた方法の發達である。同樣に、外群間に武力的强奪による關係を生じたのも、一方の習性が鬪爭的であり他方の習性が比較的平和的であれば、平和的群は同時に必ず營養の剩餘に富むものであるから――平和群は必ず農耕群であるが故に、發達した食料收護組織を有し、同時に多數の人口を有し、生産剩餘に富むために、少數の掠奪群に生産果實を奪はれることによつ

て生活を全然滅ぼされる慮のない所から暴力による降服的協定に甘んずる——兩者の間に害者、被害者の統一群が成立するのである。

人間社會に於ても、外群社會の關係は全然蟻の社會のそれと同一である。人間の群が結合によつて、一方が他方の生活を壓迫し又はそれに寄生する關係は、種そのことゝは具體的に何等の關係もない。事實は、群の行動形質の相違である。種の相違は同時に行動形質の相違を伴ふことは常であり、さうして種の遺傳的性質が先天的に行動的形質を區別せしめることもあれば、それを種的對立といふことは妨げないが、しかし、社會事實としては『種』といふことは何ものを説明してゐないので、事實は特異の行動形質であることを知らなければならない。

次ぎに蟻の場合に於ては、各種の寄生生活は必ずしも被寄生者側を貧乏ならしめないが、人間の場合には、それが貧乏の起原をなす所以が別に存するのである。この場合に人間の社會と蟻の社會との間に重大な相違の生ずるのは、既に述べた如き、人間の生態の進化性である。

生物學者の指摘してゐる通り、動物の生活は、全然本能的行動の反復を出でず、一見甚だ知的、意識目的的のやうに見える行動もその實は全く無意識の行動である。無論動物もある程度まで叡智的であり、又微生物と雖も種々なる心理的性質をもつことは認められるが、さういふ叡智的生活も、それがみな一定の本能的行動の組み合せによるもので、從つてその叡知は本能が巧みに組み合はせられる程度を出ることは出來ない。いひかへれば、やはり全く反復的である。これ生物の生態の一定不動たる所以で、蟻の今日の生態も、過去五六千萬年の長年月間全く同樣であつたといふことは、古生物學的研究によつて明かにされたところである。

動物の生態のしかく固定的なるに反して、人間の生態は意識作用の發達に伴つて、生物學的範圍を超へて、所謂文化的に進化する。人間のこの文化的進化は、これを生物學的生態に分解すれば、やはり原始的生態の組み合せの進化で、本能的性質は全く不動であること人間の形態に進化の起らないのと異らない。文化は畢竟、人間的生態の進化ではなく、その生態が取扱ふ材料の長年月の蓄積による組み合せの進化に外ならない。そのことは野蠻人を生れ落ちると直ちに純然たる白人文明の環境の中に生長せしめれば、殆んど白人同樣の文化人たることを得るのでも證明せられるといふのである。この説は、科學的に有力であるが、しかもさうした性質の進化に於て、人間社會は、全蟻の社會の原則に外づれて進むのである。

といふのは文化的發達によつて生活態樣が進化するものとすれば、その進化の契機に觸れたものは、それに觸れないものと全然違つた社會形態、卽ち行動形質の組織に進むこと、丁度今云つた、白人の裡に入つた蠻人の生兒と、依然として南洋の蠻地に殘された生兒との間に生活樣式の全然相異するに至るのと同じである。さうして、外群的接觸によつて、寄生者の地位を得たものと、被寄生者の運命を荷つたものとは卽ち、この進化の契機に觸れるといふ點に於て積極、消極の兩極

に分かれてしまうのである。即ち寄生群は被寄生群の生活剩餘を獨占することによつて、固有の原始的生活形質を修正し又進展せしめる自由をもち、所謂生活發展の自由を獲得するが、反之、被寄生群は、營養生産の責任を荷負せしめられてゐるが故に、固有の生活形質から離れる自由をもたず、勢ひ文字通りの原始的生態を持續する傾向に放置せられねばならぬ。一層悪いことは寄生群はその生活の自由によつて生活程度とそれに要する營養價とを幾何級數で增進せしめるに對し、寄生群の生産力は、その生活の保守的なるに應じて生産方法も固定的なるため、その收穫が寄生者の要求の增加と比例を保つて增加する譯はない。蟻の社會に於て、寄生者の生態が依然として同樣であり、その要求も從つて同樣程度である場合は寄生者對被寄生者の生活比率は永久に始めの通りである故、一旦成立したらトロフアラキシスは甚しい程度で一方を富裕ならしめ、他方を貧乏ならしめることはないが、人間の場合は、生態的進化が一方に起つて、他方に起らないため、前者は富者となり文化人となるに反し、後者は貧乏人となり原始人的に止まるのである。

しからば人間社會に於ける貧乏の起原は即ち、外群的社會といふ環境の下に、トロフアラキシス的關係が生じ、それが人間的進化の可能性に影響したといふ事實に存するのである。

結　論

殘つた問題は、これを一括して考へて見るならば、先づ、對立的社會形態に於て如何なる行動の性質が必然に貧乏すべき、運命をもつか(3)といふことであるが、それは複雜な條件に左右されるが故に一般的にそれをいふことは困難である。これを貧乏の起原に關してのみいへば、それは生産的行動の群であることは、前節の記述によつて明瞭であらう。營養の剩餘をもつものは生産群であらねばならず、又平和的な生産群でなければ、寄生々活を容れる寛仁性をもつてゐない。

然し同じ生産群の內群關係に於て貧乏の發生する場合(4)は、前にも觸れた如く、行動形質の分離であつて、それは、人間的關係からいへば、家畜と同じ地位にあつた奴隷の內群化であり、制度的關係からいへば、外群的非共産的財産獨占の制度が、內群に於ても小群的私有財産制として成立したことである。從つて、行動形質として內群的に分離が起り、一方は固有の原始的生産行動に定着せしめられ、他方は寄生的行動に進化せしめられたのである。されば貧乏の內群的起原は行動形質の相違に動機せずして、外群的統一社會に必然な制度の結果である。

それ自體貧乏なるべき行動形質は如何なる種類のそれであるか(5)といふ問題は、貧乏が行動それ自體の性質に起原したものでない限り貧乏起原の問題に關聯しては起り得ない。多くの貧乏學者の擧げてゐる本來貧乏なるべき行動形質は、皆、貧乏を生ずるやうな制度の結果であつて、原因ではない。さういふ人間の群に於ても、貧乏そのもの

を無くなせば、その群が、人間群である以上、忽ち生態の進化を生じその道德的性質が變化する。

富は人間を墮落せしめるといふ說、言ひかへれば營養過多の社會は頽廢するといふ說も、ある。意味に於て眞實であるが、その考へ方に錯誤を含んでゐる。富んだ人間群は決して富即ち營養それ自體によつて墮落するのではなく、その行動形質の變化によつて墮落するのである。富は、今日までの社會形態に於ては、必ず對立的群を貧乏ならしめることによつて一群が富む、といふことで社會が富むといふことではない。ソロモンの富と雖も、秦の始皇の富と雖も、その時代の全社會が、ソロモンや始皇のそれの程度で富んだではなく、たゞ特殊の階級だけが、他の階級の犧牲に於て富んだのである。即ち富んだ群は、その富むといふことそのことが、社會的生活行動から離れた反社會的行動形質に陷つてゐるといふことである。されば彼等は恐らく富まなくとも墮落したであらう。何となれば、彼等の行動形質は、制度的の組織で富むことを得なかつた場合には、強盜、匪徒の類となり、又は浮浪人となり、徒食者となり、要するに社會の蝕となつて、貧乏寄生群として墮落したであらう。

然し、社會史に實現された貧乏の起原に關する事實を離れて、抽象的に、それ自體當然貧乏なるべき性質の行動形質は如何なる種類のそれであるかといへば、言下に、それは戰鬪的行動の群であると答へなければならない。

この答は貧乏發生の社會事實には反するが、貧乏發生前の社會事實には妥當する。蟻の社會でいへば、寄生的社會成立以前の事實である。人間社會に歷史を持つやうになる前の社會に於ては、富裕に進んだのが、農耕群であつたことは、蟻の社會の記述に於けると同樣であつた。さうして、狩獵的の貧乏群がその富裕群を攻略することによつて形勢は一變し、本來貧乏なるべき行動形質をもつた群が富裕群となり、本來富裕なるべき行動形質をもつた群が貧乏群となつたのである。それが人間的生態の進化性によることは前述の通りであるとすると人間にとつて最も、惠まれた特性である人間的進化性は、貧乏群にとつては甚だ有り難くない特性であるといふことになる。人間がそんな進化性をもたない蟻のやうにその生態を固定せしめるものであつたら生產群も必しも貧乏にされる必要も原因もなかつたのである。貧乏なるべき行動形質の群が當然貧乏しないで、富裕なるべき行動形質の群が不當然に貧乏するのは、人間が萬物の靈長だつたからである。

されば、次ぎの、貧乏起原は行動形質によるか、ケノビオシスによるか(6)といふ問題に對しては、當然、後者によるといはねばならぬ。從つて、貧乏は不合理的歷史現象で、決して貧乏人自體の不道德によるものではない。それは貧乏人自體の責任を超越した、大震災と同じ不幸である。但しその地震の鯰は非生產的人間群である。

然し、ケノビオシスは、事情の變化によつて絕へずその關係當事者の地位を轉換せしめてゐる。ダーウヰンは、その地位の顚倒について

澤山の例をあげてゐるがそのうちに、左のやうな一例がある。

『障圍が、いかに重要な要素であるかを私はあからさまにサーレーに近いファーナム附近で見た。そこには廣大な原があつて、隔つた丘の頂には銀松の老樹の森があつた。十年足らず前にその原に廣い障圍が設けられた。で今は自生の銀松がとてもその悉くが繁茂し得ないほど密生してゐる。これらの松は決して蒔かれたのでも植へられたのでもないことをきいたので、私は、驚いて、方々を見て廻つたが、圍まれてゐない數百エーカーの土地には、昔植へられた老松林の外に一本もその松が生へてゐないことを知つた。處が原の雜木の間を、精査すると、絶へず家畜に喰はれてゐた苗や、小樹の簇生してゐるのを見出した。老樹から數百ヤード離れた邊に、一平方ヤードに三十二本も小樹の生へてゐるのを數へた。さうしてその一本は二十六の年輪をもつてゐて、多年の間、その頭を雜木の丘にもち上げやうとして失敗して居たのであつた。もし障圍が設けられたら、その土地は、勢よく生へた若い松で蔽はれてしまふのは知れきつてゐる。然かも、原はまるで不毛で、廣漠としてゐて、誰もそこを、家畜がそれほど入念にそれほど有效に、食物を漁り廻つたのだといふことを考へるものはないであらう。』

松と、その自然の成長を妨げる家畜群との關係は、一寸した圍ひで忽ち變化してしまつた。さういふ變化は、人間の社會的ケノビオシスでも當然起り得る筈である。然し本論は『貧乏の起原』を叙述するのが目的なので、『貧乏の終末』に説及ぼすことは他日の機會に讓らねばならぬ。

ホヰーラーは、蟻の研究をボストンで講演した時に、社會學者が、人間社會に存在する蟻以上の寄生々活を研究するもの丶少いのに憤慨して、『生物學は唯一の無上命令を我々に授ける。それはかうだ。「寄生者及び宿主の何方にもなるな。而して、人々を寄生者たり宿主たることから思ひ止まらせろ。」』然し、これはカントの有名な無上命令よりも實現が六かしいといひ、而して、『もし私が此問題についてもつてゐる私の説をあらひざらひ喋舌らうとしたら、いかにボストンのやうな寛大な社會でも、私は次回の講演日まで生きてゐることを許されないだらう。』といつてゐる。

私も亦、今こ丶にホヰーラーの言葉を繰返して、此の小論の筆を擱かないわけに行かぬ。(終)

河上博士の『眞摯なる態度』と『事實の虚構』

福田徳三

（一）

私が、本誌に續掲を乞ひつゝある「アリストテレースの流通の正義」（其一）及（其二）について、河上博士は、特に『社會問題研究』第八十四册なる著書を、前例を破つて東京に於いて發行せしめ、『反動學派の陣營における窮餘の一戰術としての事實の虚構――拙譯資本論に對する福田博士の非難について――』てふ四十餘頁に亘る長大篇を、これに掲げ、逐一に、私の所論を檢討せられた。

私は、未だ私の當面の問題とするところに進入してゐない未完の一小論文に對して、斯くも、綿密、叮嚀なる取扱を、同博士から賜つたことを、筆執る身の冥加ともし、又た餘榮とも感ぜざるを得ぬものである。

マルクスの著書の翻譯に關して、私が、河上博士に疑を質したのは、前後凡そ二回ある。第一回は、去大正八年、同博士が、其の『社會問題研究』第四册に、掲出せられたマルクスの『賃銀勞働と資本』の邦譯について、同年八月の『解放』第一號に於て、第二回は、即ち、近刊の同博士等譯資本論第一卷第一分册について、今本誌に續掲しつゝある拙文に於いて、これである。

第一回の拙文に對しては、此度の第二回に於けるとは、全く異つて、博士は、久しい間、私の質疑に對して、何事も述べられず、而して、二年斗りの月日を閲したる後其『賃勞働と資本』とを、私の進言を悉く納れられて、マルクスの原本に就いて、改譯せられ、其序文に於いて、私の前の所言に對して、詳しく答へられた。私は、博士の虚心坦懷、而して、實事求是の志厚く、私の所言中、或は妥當を缺く點があつたかも知れないにも拘らず、其趣意を悉く嘉納せられて、エンゲルスの改竄本を底本とした初譯を、マルクスの原本によつて、改譯せら

れたことを見て、其れが、羅語であつたことは兎も角もとして、拙言の徒爾ならざりしを喜ぶと共に、博士が、マルクスの眞を得んとの誠意の周到なるに、敬服せざる能はなかつたのである。

第二回たる此度は、前回と全く正反對に、博士の答辯は、實に電光石火的のものである。即ち、昭和三年一月一日發行の日付を有つ『改造』に於ける拙文に對する博士の答辯をまで收むる『社會問題研究』第八十四册は、日付の上に於いても事實の上に於いても、既に、昭和二年十二月中に發行せられてゐるのであつて、後世、益もない詮索立てをする學者があつて、實際の發行日を確めずに、單に、印刷された文字のみによつて考證し、昭和三年一月發行の雜誌に載せた福田文に對する河上駁論が、それよりも前の昭和二年十二月に發行されてゐるとは、『珍妙』不思議な事實であると叫び出す虞れは、必ずしも、絕無とは云へまいと思ふのである。事ほど左樣に、河上博士の此度の駁論は前回と正反對に、疾風迅雷的であつたのである。

此一事は、私に於いて、心から有りがたく思ふところである。前回の私の進言を、河上博士が、快く容れられた事實は、博士改訂譯の『賃勞働と資本』を手にした人は知つてゐるであらうが、『解放』第一號の當時の多數の讀者は、或は、恐く其事を知らずに過してゐることであらうと思ふ。否、知らない丈けなら、別に大したこともないが、道聽塗說によつて、私の文中の一二の點について、甚しい誤斷をしてゐる人があるようである。其最も甚しい誤斷は、私が、右『解放』第一號所載の文に於いて、『社會問題研究』は果して、其名の如く、社會問題の研究を事とするものであるか、或は名は社會問題研究と稱するも、實は、一種の宣傳を事とするものであるか、其何れなりやに就て疑を開陳して置いたのを、何處を如何誤り傳へたか、私は、政府を使嗾して、河上博士を投獄せよと主張したとの、一犬虚を吠へて萬犬實を傳ふる的の甚しい訛誤が傳へられてゐることである。これは、私に於いて、今に殘念に思ふところである。右問題の拙文は、今は、拙著『經濟學全集』第四集一二二六頁から一二八四頁までの間に收錄してあるから、事の眞を知らんとせらるゝ方は、其を御覽下されば、私が右樣な事を、夢にも、筆にしたものでないことは、容易に諒解を願へると思ふ。

前回の拙文に關する訛傳の爲めに、私は、永い間、隨分度々不當の誹謗を受けた。果ては、私を泥棒呼りをしたり、犬呼りをしたりする人もあつた。しかし、私は、私の文を一讀する勞を取つて下さる方々は、其妄を十分に知つてゐて下さると信じてゐたから、今日まで、辯疏の爲めに、一言をも費やしたことはなかつた。事學問に關する限り、私は、誤傳訛說を訂す爲めに、幾度でも筆を執ることを惜しとはしないが、自己一身の事の辯明の爲めに、公けの出版物の紙面を少しにて

も、徒勞することを欲しなかつたからである。

然るに、此度は、河上博士の電光石火的駁論あるによつて、右樣の心配は、全くなくて濟むことは、私に於いて、心から感謝せねばならぬところである。恐らく、此れが、所謂河上博士の『眞摯なる態度』の賜であらう。而して、前回は、此の意味に於ける『眞摯なる態度』なるものは、顯著でなかつたことは、河上博士も、亦當さに自認せられるところと信じ、數年來の宿疑の一掃し得られたことを、私は殊更に深く、喜ばざるを得ぬものである。

（二）

河上博士の此度の長大篇は、左の如く、說き起してある。

『マルクス學は、マルクスおよびエンゲルスよりレーニンに至るまでの發展を含めてのマルクス學は、少くとも經濟學の領域にあつては、——私は他の領域について語るの資格を有せざるがゆゑにのみかくの如き限定をなす、——科學的研究の最高頂に位してゐる。しかるに、ただに之を理解することに務めざるのみならず、淺薄なる知識により何とか彼とか之を非難せんとする學者が少くない。これらの學者は、その人自身が如何に意識しつゝあるかに拘らず、客觀的には、人類の科學的認識の發展を阻害しつゝあるに外ならぬから私はその意味において彼等を反動學派の名稱のもとに一括する。彼等が此の如く學問的に反動的であることが、同時に社會的にも反動的な役割を果すの結果を齎しつゝあることは、言ふまでもあるまい。

ところでマルクス學は、かゝる反動學派のあらゆる妨害にも拘らず、年一年その勢力を增大しつゝある。こゝにおいてか反動學派の陣營においては、窮餘の一戰術としての事實の虚構が行はるゝこととなつた。かゝる戰術は已に以前から行はれてゐたが、最近の日本においては特にそれが絕頂に達したかに見ゆる。私はその具體的な實例を、二人の大學教授の最近の勞作について擧げるであらう。』

——二頁

右の一節と照應すべく、博士文は、其終末の部分に於いて、更らに、次ぎの如くに、結んである。

『今や白晝公然、學問の名において、黑が白とされてゐる。

吾々の近頃譯出した資本論第二分冊の二二〇頁の脚註には、マルクスがシェクスピアの「アセンスのタイモン」から引いた次の句がある。

『黄色い、ぎら／＼する、貴重な黄金だ！

……こいつがとのくらゐありやア、黑も白に、醜も美に、邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇にすることが出來る。……』

黑を白にするのは、この『ぎら／＼する貴重な黄金』のみかと、私は思つてゐたが、商品生產が資本論第一篇の階段に止まらず、資本論自體でさへが商品化したる今の階段では、何物かが福田博士をして黑を白となさしむるの力を有するかに見える。この力が博士をして、ドイツ原本第一版の序文のフランス譯を、マルクスがわざ

フランス譯のために起草した別種の序文となさしめたのである。たゞ吾々はかゝる力の外に獨立する。微力にして淺學なりといへども、敢て大衆に向って『眞實』を語らんとするの意氣を維持しうるゆゑんである。私は竊にこのことを光榮とする』(三三頁)

更らにまた、博士の追書の終りには、次の一句が、見出される。

『しかも、此くの如くにして、マルクスに對する眞の理解を妨げんとするところに、正に反動學者の重大な社會的任務(?)がある。資本論の誤譯に對する批評ですらが、今日は、すでに、政治的意義を有する階段に進んだのである』(四四頁)

博士は、又た云はれる。

『何萬何十萬といふ天下の讀者は、果して、福田が正しいか、河上が正しいかを、判斷すべき何等の材料を有たぬ。之れに、附け込んで章魚の墨汁を吐くが如くにして、學界を混沌化せんとすることが、實に反動學派の窮餘の一戰術なのである。』(三二頁)

而して、

『私が、以上の事實を明かにしたことは、決して、無用ではなかつたと信ずる。――之れは現在の學界が如何に混沌たるものであるかを證明すると同時に、反動學者のいふところは、その人が如何に博識であり如何に才智に長けてゐようとも、結局如何に信用しがたきものであるかを暴露することにより、彼等に對する民衆の信用を破壞するための有力な材料となるであらうから』。(三一頁)

以上數節が、河上博士の長大篇執筆の動機と其の態度の基礎付けとを物語るものである。

私は、私の小やかな論文、而かも、未だ其の主題に論及せず、僅かに、當面の問題に若干の關係あるが爲めに、敍述の順序として、試みに例示したに止る數節が、此くも、重大な意義あるものと、博士によつて認められたことを、殆んど、驚愕に近い印象を以つて眺めつゝあるものである。

私は、初め博士の着題『反動學派の陣營に於ける窮餘の一戰術としての事實の虚構』と云ふのを見て、其れが、拙文に關係あるものとは些も思ひ寄らなかつたのであるが、附題として『拙譯資本論に對する福田博士の非難について』としてあるによつて、十二月二十五日朝刊の某新聞上の廣告に本日出來とあるを信用して、早速使を派して、一本を求めんとしたのである。然るに、河上博士の用語を拜借すれば、『本日出來』とあつた新聞廣告は『事實の虚構』であつて、少くとも、其日に於いては、東京市中にては、發賣してゐなかつたのである。其翌日も亦同樣であつた。十二月廿九日に至つて、初めて發行書店からの

恩返に接したのである。斯くも慌しい而してセンセーショナルな廣告が必要とせられるほど、博士の私に對する駁論の頒布が急がれた所以は、博士執筆の動機が、極めて切迫したものであり、極めて熾烈なものであつたことを、如實に物語るものと考へられる。殊に其れが、平素容易に物に動ぜず、毅然として究理求眞の事に潜心して居られる如くなる博士の出處に關するものである丈け、其れ丈け、私共には、異様の印象を與へたのである。

さて、右引用の數節に言明されてゐる博士の動機なるものは、約して云へば、左の數點に歸着するもの丶如くである。

（一）マルクス學は、經濟學の領域に於ては、科學的研究の最高頂に位してゐる。

（福田曰。私は必ずしも左樣とは思はぬ。）

（二）しかるに、淺薄なる知識により、何んとかかんとかこれを非難する學者があるが、それは、客觀的には、人類の科學的發展を阻害する輩である。

（福田曰。私は某を[illegible]した。非難は未だせぬ。しかし、非難することが、人類の……發展を阻害するなどとは、毛頭信ぜられぬ。）

（三）其の意味に於いて、此等の學者を、博士は、一からげにして、反動學派と名付ける。學問的に反動的であることが、同時に、社會的にも、反動的な役割を果す。

（福田曰。學問的批評が反動とは、其意を得ぬ。更らに、其れが社會的役割を果すとは、何事の意か。）

（四）然るに、か丶る反動學派のあらゆる妨害にも拘らず、マルクス學は、年一年、其の勢力を增大しつ丶ある。

（福田曰。勢力を增しつ丶あることと、學問の最高頂に達してゐることとは、同一事ではない。）

（五）こ丶に於いて、反動學派の陣營に於ては、窮餘の一戰術として、事實の虛構が行はれる。

（福田曰。陣營の、戰術のと、比喩としても、物騷千萬な、而して、餘りに業々しい。事實の虛構云々は後に細論す。）

（六）か丶る戰術は、最近の日本に於いて、將に其の絕頂に達したかに見ゆる。

（福田曰。日本に於いては、マルクス批評は極めて幼稚極るもので、絕頂どころか、麓にも達して居らぬ。）

（七）其の具體的な實例としては、土方博士及び福田二人の最近の勞作がある。

（福田曰。土方博士と私とを一からげにするところ、博士の所謂『戰術』の巧妙を見る。）

（八）此くの如くにして、マルクスに對する眞の理解を妨げんとするところに、福田等の重大な社會的任務がある。（福田曰。私はマルクスに對する眞の理解を妨げようとしたことは、一度もない。其反對である。）

（九）而して、河上博士等の譯『資本論』に對する福田の批評は、すでに、政治的意義を有する階段に進んだのである。（福田曰。私などの論文が、如何して政治的意義などを有するか、餘りに過大視されたものである。）

（十）福田は、天下の讀者が、適當の材料を有せぬに、つけ込んで、章魚が墨汁を吐くが如くに、學界を混沌化せんとするものである。その人が、如何に博識であらうとも、結局如何に信用しがたいものであるかを、博士は、其の長大篇によつて、天下に示して、福田等に對する民衆の信用を破壞せんことを欲せられた。（福田曰。民衆信用の破壞、これが博士の最大目的と見える。）

先づ順序を立てゝ見ようとなれば、右の如くにでもならうかと思ふ。更らに、此の十項を要約すれば、『マルクスに對して、彼れ是れ非難の言を弄する福田輩の河上博士等譯資本論に對する批評が、すでに、政治的意義を有するに至つたから、此輩に對する民衆の信用を破壞すること』これが、博士が、其の長大篇を起稿し、これを慌だしく且つ爆彈投下的（メーリングの語借用）に天下に宣傳せしめられた動機であると申して、大過なきを覺ゆるのである。

マルクスは、其の『資本論』の第一版の序文の最後に於いて、次ぎの如く云つてゐる。私は、河上博士譯文のまゝを、特に、玆に掲げる。

『眞に科學的な批判によつて行はれた總ての判斷は、私の歡迎するところである。私の曾て譲歩したことのない輿論と稱さるゝものゝ成心に對しては、これまでの如くこれからも、私は偉大なるフローレンス人（ダンテを指す——譯者）の言葉を格言としてもつ。汝の道を歩め、そして人々をしてその云ふに委せよ！』（河上博士論文の二五頁、同譯『資本論』一六頁參照）

『年一年その勢力を増大しつゝ』あり、『科學的研究の最高頂に位してゐる』マルクス學てふ『輿論の成心』に對しては、ダンテの言通り、自身『の道を歩み、そして人々をしてその云ふに委せる』ことが、最も賢き態度であらうが、他面、私は、眞に科學的批判によつて行はれる『總ての判斷を』歡迎するマルクス其人の學説に對しては、『あらゆる妨害にも拘らず』私は、自分の力の及ぶ限り、眞に科學的批判による吟味、批評を辭せざる所存である。而して、私の吟味、批評に對する駁論に對しては、それが眞に科學的批判に屬する限りは、更らに再吟味、反批評を爲すことを怠りたくないと思ふものである。

（三）

河上博士の長大篇は、其動機は、マルクスの所謂『眞に科學的な批

判によつて行』はうとするものでないことは、以上引揩の博士の言によつて、いとも、明白に語られてゐる。言葉を換へて云へば、河上博士此度の執筆の動機は、學術的に云へば、甚だ不純なものであることは、博士自らこれを明言して居られるのである。而して、博士の其長大篇に於いて執らるゝところの態度は、學術上から云へば、決して眞率なものではない。

以上に私が要約を試みた十項、其の一つも、眞に科學的批判の精神を以て動機とするものでなく、『反動學派の陣營』中に於ける『戰術』に對する『反戰術』として、殊に、其れが、『すでに、政治的意義を有する階段に進ん』でゐるに對して、『民衆の信用を破壞』するの『政治的意義』を以て、動機とするものであつて、凡そ學術文として、これほど、學術研究の上から見て不純な動機を有つものは、容易に考へ及び能はざる底のものであるのである。

然るに、河上博士は、學術的に斯くも不純な動機を以つて起稿せられた其の長大篇を『社會問題研究』と名付けらるゝところの學術研究發表機關に收錄して居られるのである。博士が執られたる此の態度は、誰人が見ても、決して、學術的に『眞摯の態度』などと申すべきものでないことは、歷然たるであらう。

斯く學術的に見て、其の動機が不純であり、其の態度が、不眞率である博士の長大篇が、また學術的に見て、首肯し難き幾多誹謗の言を、私に對して含んでゐるのも、敢て異とするに足りないやうに考へられる。

即ち博士の文中には、例へば、左の如き誹毀の言が所々に見出さるゝのである。

（一）事實の虛構を敢てした（六頁）
（二）吾々の何れが虛僞を申立てゝゐるかを裁判されうるの日があらう（一二頁）
（三）これに關する博士（福田）の文章は實に珍妙なもので、何等かの見本に後代に貽す價値があらう。（一五頁）
（四）そんな馬鹿げた點について（二〇頁）
（五）全く虛構である（二三頁）
（六）博士はづう〳〵しくも（二六頁）
（七）それは、愈々出でて、愈々怪（二六頁）
（八）それは、完全なる事實の虛構のほかの何物でもない（二八頁）
（九）それは外國人の著書をいゝ加減に抄譯して之を自己の研究になる勞作なりと稱して公刊しうる人のみが言ひうることである。驚くべきことである。（三〇頁）
（十）馬鹿があつてたまるものか（三〇頁）
（十一）博士の頭腦の健康狀態を疑ふ（三一頁）

（十二）結局如何に信用しがたきものであるかを暴露することにより、彼等に對する民衆の信用を破壞する（三一頁）

（十三）それに附け込んで、章魚の墨汁を吐くが如くにして、學界を混沌せんとす（三二頁）

（十四）事實の虚構をその本質となしてゐる（三二ー三頁）

（十五）今や白晝公然、學問の名に於いて、黒が白とされてゐる（三三頁）

（十六）何物かゞ福田博士をして黒を白となさしむるの力を有するかに見える。（三三頁）

（十七）それ以上の文法に對する無智を裝つてゐられる（四二頁）

（十八）そんな馬鹿なことは、勿論ありえない（四三頁）

（十九）此の如くにしてマルクスに對する眞の理解を妨げんとするところに、正に反動學者の重大な社會的任務（？）がある。（四四頁）

（二十）この際高等文法の無智を裝ふことが、何萬といふ多數の讀者に對しては、博士のため、却つて便宜でもあつたのであらう。驚くべきことである。（四四頁）

學術的に見て、斯くも不純な動機から出で、而して、また學術的に見て、斯くも不眞率な態度を以て書かれた博士の長大篇中に於ける右等の惡口雜言が、學術的に、全く無價値のものであることは、當然である。否、獨り無價値たるに止まらず、學術研究者としての博士に取りては、一の自殺的作用を有するものである。自殺は、基督教に於いては、一の大なる罪惡と認められ、基督教國の刑法の多くは、自殺未遂者を刑に問ふのであるが、我邦にありては、自殺は、往々にして、世の稱讃を招くことすらある。私共は、むしろ基督教流の見方に傾いてゐるものではあるが、日本人たる河上博士は、日本の或る階級の間には、其自殺的行爲の故を以て、更らに、一段と『民衆の信用』を高められることになるかも知れないと思ふ。從つて、私は、敢てこれを防止せんと努むることの、却つて不可なるにあらざるかを感ずるものである。

他面に於いて、これらの學術的自殺行爲は、河上博士の所謂『戰術』なるものとしては、甚だ有効有力のものであらう。少くとも、經濟學界に於いては、博士は、日本一の『戰略家』たることは、これに於いて、いよ〳〵明白に確められることになつたものと思ふ。

これを東隅に失つて、これを西楡に收む。學術研究者として今や自殺によつて其の存在を失はれんとする博士が、社會的並びに政治的戰術家として日本一の大家たる存在が確められたことは、一得一失、敢て喜ぶにも足るまいが、また敢て悲しむにも當るまい。從つて、私は、此點に於ける、博士の『眞摯なる態度』について、多くの言葉を費やすの、全く無用に屬することを認めつゝあるものである。

（四）

學術研究の立場から見て、肝要なることは、博士の所謂『事實の虚

構」これである

私は、此點について、以下逐一、博士の論せられるところを私の淺薄なる見聞の屆く限り吟味して見たいと思ふ。

博士はいふ。

『土方博士に劣らざる事實の虚構を敢てした今一人の學者は(中略)高田鐵三氏である(中略)尤もこの範圍において、博士が吾々の譯本における缺點として指摘されてゐるところは、(略)いづれも何等重要なものではない。重要なといふことは、マルクスの思惟を活かす上に重要なといふ意味でなければならぬ。恐らく副題にいふところの『重要なる不正確又は誤謬』は、追て論文其二以下に現はるゝことであらう。今は取り敢へず前記の範圍に記載されたるものゝ檢討をなすに止める。』 六一七頁

これは、如何にも、博士の推察されたとほりであつて、私の論文は(其一)、(其二)に於いては、未だ當面の問題とする處まで進入して居らぬのであつて、私の問題に於ける『河上博士等譯資本論中最重要なる不正確又は誤謬』なるものについては、私は、まだ、一言も論及してゐないのである。從つて、博士が今、『事實の虚構』と呼號せられるところのものは、拙文の主題とは、直接には、何の關係もないものに屬する。河上博士等譯の資本論中の最重要なる不正確又は誤謬なるものは、決して、右等と混同せらるべきものではないのである。私は、唯だ、河上博士等の資本論に、正確、叮嚀、親切などを、聲高く賣物にせられつゝあるに拘らず、隨處に、其言を裏切るが如く見ゆる箇々の見出さるゝことを、云はゞ例示的に擧げて見たに過ぎないのである。其は、例示的であつて、決して、網羅的ではない。從つて、若し博士流に、一々詮索立てをして見るとならば、右例示の外にも、未だ未だ幾多の點をあげ得ると思ふのである。(高島氏譯本は、カウツキー本さへ未だ到來せざる以前に着手せられたものであり、殊に『私の語學は英獨二語に限られてゐる』『兎に角、私の翻譯は失敗であつた』と極めて謙遜に告白して居られ、正確、親切、叮嚀を賣物とせず、はたまた、一字一句全責任を負ふものであるなどと大見得を切られるものでない。極めて奧床しい而して驕傲なしに眞率の態度、眞に燃ゆるが如き篤學の心事を以つて、刻苦精勵ついに譯出を完了せられたものであるが故に、其れに、如何に多くの缺點が見出されようとも、其れは眞に止むを得ざることであつて、譯者に於いては、全力を傾倒したものなることが、十分に窺ひ知られるのであるが、河上博士等の譯本については、事態全く異るのであつて、天下の讀者は、其の爆彈的宣傳に魅せられて、思はず不覺を取るであらうことを恐るゝの餘り、私は、唯だ例示的に、正確、詮索立ての不十分であつたと思ふ事柄を二三あげて見たのである。』

さて、河上博士が、私を以て『事實の虚構』を敢てしたと云はるゝは、次ぎの二點についてゞある。今博士の言葉をあげて見れば、

第一の點は、

『それは、前後二箇條にわたる。その一は、吾々の譯文『第一章の三(價値形態)は全部書き變へた』といふ一句についてゞある。』(七頁)

第二の點は、

『吾々がフランス譯の卷首に掲げられてあるマルクスの『私信を序文に昇格』させながら、フランス譯には、『別に、第一版序文なるものが、マルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の日付をもつて、四頁に渉つて載せてある』のを譯出してゐないといふことである』(一五頁)

此二ケ條が、博士論難の二大眼目であるが、更らに、これに附加へて、博士は、

(三)博士(福田を指す。以下同じ)は、吾々が、フランス譯の實物を見たか見ないかを、しきりに氣にしてゐられるやうである。私はそれについて、倚一言を費さう。

(四)なほ、博士は、吾々が、フランス譯の卷末に出てゐる『讀者に告ぐ』といふマルクスの一文を譯出せざりしことにつき、疑惑をさしはさまれた。

の二點について、若干述べられ、更らに、追記に於て

(五)福田博士が『ドイツ語第一年生もこれを知つてゐる』文法だけを持ち出して、それ以上の文法に對する無智を裝つてゐられる。

云々についても、多くの言を費されてゐる。

以下私は、順を追ふて、此等に於ける私の敢てしたと云はるゝ『事實の虛構』なるものについて述べて見ようと思ふ。但し私の述ぶるところは、マルクスの言ふ通り『眞に科學的批評』の精神を以てするものであつて、河上博士の『戰術』に屬する部分の發言、從つて、それから派出してゐるところの惡口雜言に對しては、別に改めては、申述べざるつもりである。

(五)

第一の點に關して。

博士は、まづ、私の言を引いて居られる。

『こゝに河上博士等が「全部書き變へた」と邦譯されたのは、非實相違であることは、私の以上の記述で明であらう。而して、右一句の其邦譯は、マルクス文の邦譯としては、正確、親切、若くは、說案を缺くものではあるまいかと思ふ。マルクスは、第一版の其部分を全部削り去つて、而して第一版附錄文に多少の修正を加へて、此れと差し換へたのである。其附錄文は、決して、全部書き變へられなどはして居らぬ。否、大體に於いては、全く第一版其儘なのである。マルクスの原文は gänzlich umgearbeitet とある。此語は場合によつては「書き變へた」としても差支ないのであるけれども、マルクスの用ゐた此場合には、其れでは、不正確であり不適當であ

り、又は不親切ではあるまいか。原意を正確に言ひ表はすには、「全部入れ換へた」「全部差し換へた」とすべきであらう。河上博士等は、第一版に、附錄文のあることは、明かに、わざわざ「譯者註」を入れて、其の詮索の細密さを示めしてゐるから、其附錄が、書き變へられなどしてゐないことも、また、知つて居られるべき筈である。しかるに「書き變へた」と譯出するは、少くとも、不正確、不親切、若くは、不丁寧の評を免れまい。若しまた知らなかつたと云はれるなら、其れは、少くとも不詮索の嫌を免れないように思ふ。』（下略）

これに對して河上博士の言はるゝところは、次ぎの如くである。

『第一版も第二版も有たぬ人々にとつては、右の記述は恐らく理解し難いであらう。私はそれを次の如く分析的に表示しておく。

一、第二版における價値形態の節は、二二頁から四七頁に及んでゐる。

二、右の部分が、福田博士によれば、『處々修正を加へつゝ、大體においては、第一版の附錄文をそのまゝ取り入れ』たものである。

三、たゞその例外となれるものは、脚註を除き本文では、二九頁より三〇頁に亘る一頁あまりの部分——福田博士の表現では、これが『二九頁の第二項……同第三項……同第四項……三〇頁の第二項』となつてゐる——である。

此の如きが博士の言ふところである。だが私の見るところによれば、これこそ『事實相違』である。

第三節の價値形態は、カウツキー版では、一四頁から三五頁に及んでゐる。私は誰でもが容易に見うる此の版本について、ありのまゝの事實を次に述べよう。（吾々の譯本には欄外にカウツキー版の頁が記入してあるから、それを見られても大體の見當はつく。）今しばらく脚註を度外視し、本文だけについて見れば、全體が約十九頁分になるが、その第一版に對する關係は次の如くである。

二〇頁六行目から二一頁九行目まで、——約一頁分、これを第一版本文より取る。

二二頁三三行目から二三頁二〇行目まで一頁足らず、二四頁終より二行目から二六頁三行目まで一頁あまり、二八頁に四行あまり、二九頁五行目から三〇頁一六行目まで約一頁半、三二頁から三三頁へかけての所々合計約二十行、三四頁一行目から三五頁六行目まで一頁あまり、——以上合計約五頁、これを第一版の附錄より取る。

一四頁から二一頁五行目まで約五頁半、二一頁一〇行目から二二頁三二行目まで約一頁、二三頁の半ばから二四頁の終より三行目まで約一頁半、二六頁五行目から二七頁の終まで約二頁、二八頁から二九頁にかけて十行あまり、三〇頁の半ばから三二頁一一行目まで二頁足らず、三二頁一八行目から三三頁へかけての所々約十行、——以上合計約十三頁、これは新たに執筆された部分。すなはち本文約十九頁のうち、第一版の本文がそのまゝ殘されてゐるのは約一頁であり、第一版の附錄から採用したものを合計しても、舊稿をそのまゝに利用した部分は、全體十九頁のうち約六頁であつて、殘り約十三頁は第二版のために新たに執筆したものである。

なほそれのみでなく、第二版には第三節『價値形態』の次に、第四節として『商品の物神崇拜的性質およびその秘密』と題するものがあり、それはカウツキー版において十二頁餘に及んでゐるが、これは第一版の附錄では、二頁足らずのものに過ぎなかつたのであり、しかも等價形態の第四の特徵として、最初の簡單なる價値形態を說明せる條下に掲げられてゐたものである。しかるに第二版において

は、これを『價値形態』の節から引き離して、獨立の節となしたのであり、從つて簡單なる價値形態の條下における等價形態の特徴の列記は、これを第三までに止めてあるのである。これは價値形態に關する第一版の附錄と第二版の本文との間における著しき差異の一に屬する。

第二版の跋文におけるマルクス自身の言葉（吾々の譯本一七頁參照）によれば、『講義的な說明』をなしたところの・またエンゲルスへの書簡中における言葉（一八六七年七月二十二日づけ、『書簡集』第三卷三八三頁參照）によれば、『できうるかぎり學校教師風に敍述した』ところの・第一版の附錄『價値形態』のうち、第二版以後に殘つてゐる部分は、實に以上の如きものにすぎぬのである。しかし私がかく言へばとて、第一版は今日容易に入手しがたいのだから、果して私の言ふところが正しいか、あるひは福田博士の言はるゝところが正しいか、その判斷に苦まれるであらう。だが私はすでに雜誌『我等』に第一版附錄『價値形態』の一部分を譯載したことがあり、また私が編纂してゐる『マルキシズム叢書』中の一篇としても、かねてより之が邦譯を發行する計畫であり、實はその豫告をなしてから既に久しきを經てゐる。いづれそのうち公刊するであらうから、讀者はそれについて、吾々の何れが虛僞を申立ててゐるかを裁判されうるの日があらう。

事實は以上のごとくである。しかるに福田博士は、吾々が『第一章の三（價値形態）は全部umarbeitenした』とあるのを『全部書き變へた』と譯出したことをもつて、『事實相違』であり、『マルクス文の邦譯としては、正確、親切、もしくは詮索を缺く』と言はるゝのである。博士のいふところによれば、『マルクスは、第一版の其部分（價値形態を論ぜる部分）を全部刪り去つて、而して第一版附錄文に多少の修正を加へて、これと差し換へたのである。……マルクスの原文は gänzlich umgearbeitet とある。原意を正確に言ひ表はすには、『全部入れ換へた』『全部差し換へた』とすべきであらう』といふのである。

だが、第一に、『第一章の三は全部入れ換へた』では、日本語としては意味をなさぬ、——ドイツ語の umarbeiten にはたとひ如何なる意味があらうとも。もし博士の主張せらるゝ如く、それが第一版の附錄と入れ換へたといふ意味であるならば、『第一版の附錄と』いふ文字を補はねばならぬ。たゞ入れ換へたでは意味をなさない、何と入れ換へたかが示さるべきである。尤も日本語でも、ただ『足駄の齒を入れ換へた』などとは言ふ、しかしそれは、新らしく元のものを入れたといふ意味である。

第二に、全部入れ換へたと言つては、それこそ却て『事實相違』になる。私はすでに全體約十九頁のうち舊稿をそのまゝに採用した文句は約六頁にすぎぬことを述べた。それは入れ換へたとは言はるべきではない。しかしそれを入れ換へたとしなければ『不正確であり、不詮索であり、または不親切である』と言はるゝならば、私は博士に尋ねる、——人が家屋を改築した場合に、もし舊建築の用材が何程か元のまゝで利用されてゐれば、彼れは家を『全部建て變へた』といふべきでなく、『全部入れ換へた』といふべきだと、博士は主張さるゝのであるか？

第三、同じ跋文の續きには、『第七章、殊に第二部は、ist bedeutend umgearbeitet』としてある。博士に尋ねるが、同じ文章の續きにある此の umarbeiten は、やはり『入れ換へた』といふ意味であるか？

もしさうであれば何と入れ換へたのであるか？　この場合第一版の附錄はない筈である。――それとも同じ文章の續きに出てゐる同じ文字が、玆では前と違つた意味を有つのであるか？

「かく言へばとて、私は決して『全部書き變へた』といふ譯文を固執するのではない。同じ文章の中に『第一章の最後の節「商品の物神崇拜的性質」は ist grossenteils verändert』とあるのを、同じやうに『大部分書き變へた』と譯出したのは、umarbeiten と verändern との原語の區別を正確に反映してゐないわけである。gänzlich umarbeiten は獨英辭典にも to recast, to remodel などとしてある。『改鑄した』または『改作した』とした方が、より適切であつたであらう。この場合、主たる變化は、理論の內容よりも其の表現の仕方に關して行はれたのであるから。その意に於いてならば『不正確』の非難を甘受するのであり、機會さへあれば、勿論悅んで之を訂正するのであらう。しかし之を第一版の附錄と『入れ換へた』などいふ意味には、到底訂正しえないであらう。」（一〇一一五頁）

今讀者の諒解を容易からしめる爲めに、右河上博士の言を數項に分けて吟味して見よう。

（第一）『第三節價値形態は、カウツキー版では、一四頁から三五頁に及んでゐるが、脚註を度外して、本文だけを數へると、其れは、十九頁となる。其中約十三頁は、新たに執筆された部分で、舊稿を其まゝ利用した部分は約六頁である。』

從つて、博士は、其の『書き變へた』說を維持し、私が、それを『マルクス文の邦譯としては、正確、親切、若しくは詳密を缺くものではあるまいかと思ふ』といつたのは、『事實の虚構――反動學派の陣營における爲餘の一戰術としての――』であると言はれるのである。

十九頁中十三頁が全く新たに執筆せられたものであり、六頁が舊版其儘を利用したものにすぎなくとも、其れは、單にめのこ勘定の上の話であつて、趣意が舊版通りであつて、唯字句の上に於いて、改稿したものであれば、これを『全部書き變へた』と云ふこと能はざるは、『戰術』を離れて、純學問的に觀察する人の首肯するところであらうと思ふ。『全部書き變へる』（私は、『變』へると云ふ字は、『換』へるといふ字とは、意味が、著しく異るものと信ずる）といふのは、單に文句を改めたことを意味するのでなく、全部新たな趣意を述べる場合を指して云ふものなるは、言ふまでもあるまい。唯だ器械的に、新たに紙の上にインキを落したことを云ふのでなく、意味の上に於いて、趣意を異にしたことを認めたことを指して、『書き變へた』と云ふのである。殊に『全部』と云ふ文字がある。河上博士の計算によつても、十九頁中の六頁、即ち約三割八分は、舊稿のまゝなのである。書き變へたとしても、其れは、殘六割二分のことであつて、決して『全部』ではない。

ところが、博士の頁數計算は、如何なる標準によつて爲されたもの

であるか、分らないが、――河上博士は、二〇頁六行目から二一頁九行目まで第一版本文より取るとし乍ら、一四頁から二一頁五行目まで約五頁半は新たに執筆された部分などと、言つて居られる。博士の言葉によれば、これは『事實の虚構』と云ふ可きだらうが、私は、其様に大げさなことは言はない。唯だ、書き換へた部分を成るべく多くしようとの趣意とのみ解する――私の計算するところによると、其計算は少し違ふようである。私は、博士の言あるによつて、甚だ末梢的な事ではあるが成るべく正確にする爲めに、頁數でなく、行數で計算して見た。――但しめのこ勘定――其れによると、總行數と舊稿から取つた行數とは、粗ぼ、左の如くなつて居るのである。

河上博士に倣ひ、カウツキー版本にて、

頁	總行數	内、舊稿利用の行數
第一四	一六	―
〃一五	四六	二七
〃一六	四一	二四
〃一七	三七	四
〃一八	四七	―
〃一九	三八	三
〃二〇	四三	三七
〃二一	二三	一〇
〃二二	四七	一五
〃二三	四二	二〇
〃二四	四七	八
〃二五	四五	四五
〃二六	四一	三
〃二七	四五	―
〃二八	二八	一八
〃二九	四五	三九
〃三〇	四五	一九
〃三一	四七	―
〃三二	四六	五
〃三三	二六	一七
〃三四	四五	四五
〃三五	七	七
合計	八四七	三四六

即ち總行數の四割八厘五毛が舊稿を利用した部分の行數で、五割九分一厘五毛が新加の行數に屬するのである。而して、舊稿利用の分の少しも見出されざる頁は、第十四、十八、二十七、三十一の四頁たるにすぎないのである。

然るに、河上博士は『第一版の附錄のうち、第二版以後に殘つてゐる部分は、實に以上の如きにすぎぬのである』と云ひ、而して、何れ

自分の邦譯が發行せられるであらうから、『讀者は、それについて、吾々の何れが虚僞を申立てゝゐるかを裁判されうるの日があらう』と云つて居られる。

しかし、河上博士發賣豫告の其の邦譯が公けにならうがなるまいが、『全部書き變へた』ものでないことは、河上博士自らのめのこ勘定でも明白なことである。私のめのこ勘定によれば、四割強、博士の其れによれば、約三割八分は、文字の上に於いても、舊稿其まゝを利用してあるのである。況んやマルクス論述の内容から云へば、『處々修正を加へつゝ、大體に於いては、第一版の附錄文を其まゝ取り入れてある』――マルクスも亦右句に直ぐつゞけて、『ところどころ、屢々たゞ文體の上から本文を變更したのであるが、それに一々立入る必要はあるまい。かゝる變更は全卷に亘つてゐる』（博士譯本一八頁）と云つてゐるのを見出す。――と私の言つた言は、事實を有りのまゝに語つてゐるのであつて、虚僞とか、虚構とか云ふ非難を、毫も被むるべきものではないと確信する。其れと共に、『全部書き變へた』と云ふのは、『事實相違であり、『マルクス文の邦譯としては、正確、親切、若くは、詮索を缺くものではあるまいかと思ふ』と私の言つたのは、不當の言でないことが諒とせられ得ると思ふ。私は、河上博士に對して『虚僞』とか、『事實の虚構』とか云ふ言葉は、夢にも用ゐたことはない。其樣な言葉すらも、思ひ及ばないのである。故に、若し裁判が開かれることありとしても、それは、虚僞對虚僞の申立ての裁判でなく、河上博士の私に對する虚僞若くは虚構呼はりに對する、私の『事實相違、正確、親切、若くは詮索を缺くものではあるまいかと思ふ』云々の何れが正しいかの裁判であるべき筈である。即ち虚僞を敢てしたか否かを裁かるゝ者は私一人のみであつて、河上博士は、これに預からざる者である。私は何時にても、公平なる判廷に立つて、私が、『虚僞』の罪を犯したか否かを、嚴正に裁かれんことを欲する。

（第二）『なほそれのみでなく、第二版には、第三節 價値形態』の次に、第四節として『商品の物神崇拜的性質およびその秘密』と題するものがあり』云々（下略）

これは、私の文に於いて、少しも問題としてゐないところである。從つて、これについては、私に於いて何も申す必要はないのである。唯だ、博士が、此一節をこゝに挿入せられた趣意は、私に於いて諒解し難いところである。何となれば、マルクスの眞を得ることに、熱心なる博士が、マルクスが、其本當の第一版序中の言（私が『改造』上の拙文の開題言としてあげたもの）に就いて少しも言及してゐないことを、茲に引出されるは、果して、マルクスの趣意を、諒解してゐられるのであらうか否かについて、我々に疑を懷かしめるからである。博士のあげられた第四節なるものは、マルクスは、其の第一版序文に於いて、其處（第一版三十五

頁）から本文へ讀みつゞけよと明言してゐるところなのである。而して今博士と私との間に問題となつてゐる『全部書き變へた』云々のマルクスの言は、明かに第一章第三節のみについて言つてゐるのであつて、第四節は、全く其以外に屬するのである。だからこそ、マルクスは、右句につゞいて、『第一章の最終節（卽ち第四節）『商品の魔術性云々』は大部分變更されてある』（博士の譯大部分書き變へた）と明かに、斷つてゐるではないか。其れが、『なほそれのみでなく』として、引入れられたのは、マルクスの原文が忠實に邦譯せられたか否かの一事が問題たる此場合には、ふさはしからぬことであつて、少くとも、マルクス文の忠實なる解釋としては、却つて、眞の理解を妨ぐるものではあるまいかと思ふ。福田を難ずるに急なるの餘り、却つて祖師マルクスの毫も言はざりしことまでも引出して、其の『全部書き變へた』譯の正しいことを證明せんとせらるゝのは、私共、戰術などを少しも解せず、唯學問の立場のみに立つものとしては、祖師マルクスに忠なる所以とは、解し難いのである。

（第三）『かく言へばとて、私は決して『全部書き變へた』といふ譯文を固執するのではない。同じ文章の中に『第一章の最後の節（略）は、ist grossenteils verändert とあるのを、同じやうに『大部分書き變へた』と譯出したのは、umarbeiten と verändern との原語の區別を正確に反映してゐないわけである。gänzlich umarbeiten は獨逸辭典にも to recast, to remodel などとしてある。『改鑄した』または『改作した』とした方が、より適切であつたであらう。この場合、主たる變化は、理論の內容よりも其の表現の仕方に關して行はれたのであるから。その意味においてならば『不正確』の非難を甘受するのであり、機會さへあれば、勿論悅んで之を訂正するであらう。しかし之を第一版の附錄と『入れ換へた』などいふ意味には、到底訂正しえないであらう。』

これが『土方博士に劣らざる事實の虛構を敢てした今一人』として『何れが虛僞を申立てゝゐるかを裁判されうるの日があらう』と博士の言はるゝ二箇條中の第一條に對する、博士の總括的答辭であるのである。博士はすでに『その意味においてならば「不正確」の非難を甘受するのであり、機會さへあれば、勿論悅んで之を訂正するであらう』と云はれてゐるので、私は、私の進言の徒爾ならざりしを喜ぶのである。其れほどの雅量を有つ博士が、私が、『事實相違であり』『マルクス文の邦譯としては、正確、親切、若くは詮索を缺くものではあるまいかと思ふ』と云つた言を捉へて、『何々陣營に於ける何々戰術としての事實の虛構』などと云はれるのは、（商略としても、）餘りにも辻褄の合はぬ話と思ふ。詮じ詰めれば、唯此れ丈けの事に歸する。其れが、政治的意義とか重大な社會的任務とかを有つてゐたり、これに對する民衆の信用を破壞する必要があつたりするとは、餘りにも業々しい次第

ではあるまいか。博士既に『全部書き變へた』の譯を固執せずと云はれる。私の『入れ換へた』『差し換へた』は、無論私に於いて固執するわけはない。私は拙文に明なる通り、唯試みに、これを進言して見たにすぎないのである。唯此の方が『全部書き變へた』よりも、原意を表はすにより近いと思ふ旨を申述べたに止る。而して、讀者は既に十二分に、此事を看取せられたことゝ思ふ。

しかし、博士の右言中には、私が指摘した以外の若干の不正確を自ら告白して居られる。ist grösstenteils verändert は『大部分變更されてある』とするのが本當で、博士の譯『大部分書き變へた』は、たしかに正確を缺くのである。更らにまた、gänzlich umarbeiten が、獨英辭典に to recast, to remodel などとあるとは、少々受取り離いことである。博士の其辭書とは、何れの辭書を指して云ふか知り能はぬが、umarbiten を to recast, to rem del などと釋く辭書はあるに相違ない——例へば、博士愛用らしい流布本フリユゲルの其れの如き——が、gänzlich umarbeiten を to recast, to remodel などと釋く辭典があらうとは、私には解し兼ぬることである。藏書に乏しいことを誇とせらるゝ如くなる博士にして、左様に『珍妙』(博士の言葉拜借)な解を下した獨英辭書までも見られたとは、此一點に關する博士其後の勉強は一方ならざりしものと推察される。

更らに、右何に先ち、三ヶ條に分けて、博士が、私に詰問せられるところは、要するに、『入れ換へた』『差し換へた』が日本語として意味をなさぬと云ふ事に歸着する。博士にして、左様御考になるなら、私の進言を容れないで置かれゝば、其れで濟むのである。問題は『全部書き變へた』の當否にかゝはる。『入れ換へた』『差し換へた』は、唯私の試みの進言たるに止る。從つて、博士が『入れ換へた』などいふ意味には、到底訂正しえないであらう」と言はれる丈けで、事は十分に盡されてゐる。其以外の博士の惡口雜言は、學術的に見て、全く無用の長物であつたのである。

（六）

第二の點に關して。

先づ、博士の言をあげる。

『高田博士が、吾々の譯本を非難せらるゝ第二の點は、吾々が、フランス譯の卷首に掲げられてあるマルクスの『私信を序文に昇格』させながら、フランス譯には、『別に第一版序文なるものが、マルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の日付をもつて、四頁に渉つて載せてある』のを譯出してゐないといふことである。』

右文の初めの部分は、たしかに私の言つたところであるけれども、飛んでもないのを譯出してゐないと博士が要略的に下された承句は、誤解——博士の言葉を用ゆれば、『虚構的[illegible]』——に出づるものであ

る。但し、博士が引用せられた拙文中には、誤植が一字ある。私は、何れ誤植訂正表を、私の論文の終末に附載するつもりであつたから、其儘にして置いたのであるけれども、博士が、其一節に、痛く重きを置かれるから、茲に其誤植を訂正して置かねばならぬ。

　其れは『改造』十二月號三十七頁下段第七行に見出される。即ち同行の下から第七字の『此』と云ふ字は『彼』と云ふ字の誤植である。河上博士論文一六頁第八行下から第十三字。念の爲め、其前後の文と共に、左に掲げて置く。

『河上博士等の譯本には、此の書翰を『フランス譯への序文』として、其三三頁に譯出してある。河上博士の見られた其のパンフレツト本には、此書翰のことを序文としてあるか否か、其本を見る能はざる私の知らざるところであるが、一番の定本として刊行された此書には、其れは、明かに、序文ではない。原著者が出版者ラシアトル氏へ宛てた私信として、マルクス自筆の書翰を、寫眞版で複製して掲ぐるに止めてある。而して、別に、第一版序文なるものがマルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の日付を以つて、四頁に渉つてのせてあるのである——カウツキーは、此序文のことを、其民衆版序中に言つて居らぬ。而して彼は右の私信と、後にあぐる『識者に告ぐ』とは、ドイツ文序文と並んで、資本論の向後の版に掲げる値ありとは云つてゐるが、其れよりも、遙かに重要な彼の(此のと誤植しあり)本當の序文を重刷する必要のあることについては、一言もしてゐない、而して、河上博士等も、全く同樣である——』

河上博士は、右の『彼の本當の序文』を、フランス譯への所謂『第一版序文』の事を指すものと解せられたものと見える。私が『本當の』又は『正眞の序文』と名くるものは、ドイツ文第一版に掲げられた序文を云ふものであることは、私の論文殊に『改造』一月號揭出の(七)七十三頁の三様の異文の列擧を見られた方は、些の誤解もせられないことと思ふ。思ふに、河上博士は、私の論文の(其一)を讀まれた丈けで起草せられた其長大篇を、私の論文(其二)を見られて後も、少しも改められることなく、其儘急ぎ且つ慌だしく公刊せられたのでもあらうか。さりとは、(商略上は兎に角、)周章狼狽も、亦た極れりと申すべきが如くに思はれる。——或は(其二)を見てからの上としては、其長大篇の肝要の的が失せて仕舞ふからこそ、かくも、慌だしく發賣もせぬものを『本日出來』などと、私に、二度も無駄の神田使ひをさせるほどに、只管に、配布を急ぎ立たられたのか、否か、それらすべては、私に取つては、『知られざる徑』である——私が、斯く推測する理由は、更らに、後の段に至つて、力強く確められてゐる。

　かくて、博士が、第二の點とせらるゝところは、其第一の點同樣、實は極めて、たわいのないものなのである。

　私が、博士等の譯本において、不正確または不詮索と感じたところはフランス譯に掲げられてある出版店主人宛の私信をマルクスの『フ

ランス譯への序文』とせられたことこれであるのである。而して、事の序に、既に、ラシアトル宛の書翰を譯出して、分册刊行を、マルクスが喜んだことを示されたなら、同じく、分册刊行に伴つた缺點を、後に至つて公認したマルクスの告白をのせた『讀者に次ぐ』をも、譯出せられるのが、忠實な所業と考へられる次第を陳べたのである。『彼の本當の序文』云々に關する一節は、主として、カウツキーに對して云つたので、河上博士たちに對しては、唯其の追從者として、『而して、河上博士等も、全く同樣である』と申添へたにすぎず、而して其れは、本文中に於いてゞなく、註記（ハイフエンに挾んで）中に記して置いたにすぎないのである。私が、此の註記中に於いて、カウツキーに對して云つたことは、彼が、『讀者に告ぐ』をも譯揭する程、河上博士等よりは、遙かに忠實であるのに、本當の第一版序文（即ち削り取りもなく、日付に錯簡もない、ドイツ文原版第一版の其れ）を重刷する必要あることについて一言もしてゐないこと、これである。其れは、私に於いては、下らぬ穴探しをする爲めでなく、私が私の小さやかな論文の開題言とした程の深刻の問題を含む肝要な一節に關するものであるから、特に、其事を言つたのである。而して、私は、更らに、河上博士等は、『讀者に告ぐ』を譯出することに於いて、其宗とするカウツキーの用意周到なことには倣はず、却つて、其の用意の缺けた點に於いて、全くカウツキー同樣であることを、其機會に一言して置く必要を感じたにすぎない。

（七）

これ丈けを述ぶれば、河上博士が、私が『事實の虛構』を敢てしたと難ぜらるゝ第二點なるものは、雲散霧消して仕舞ふものであることは、聰明なる讀者の、容易に看取せられたところであらう。しかし、河上博士が其長大篇の大半をあげて、千萬言を費やされた勞に酬ゆべく、私は、徒勞とは知りつゝ、以下、博士所論の各項について、逐一、吟味を加へて見よう。

其一。

『私は先づ、吾々がフランス譯の卷頭に載せてあるマルクスの書簡を『フランス譯への序文』となしたことについて、一言する。福田博士の言はるゝ如く、この書簡は『寫眞版として載せてある』。ところで何人の注意をも惹くであらうことは、有名なる惡筆家のマルクスの筆蹟としては、それが特に極めて讀み易きやう丁寧に書かれてあることである。そしてそれは恰も一頁大にをさまつてゐる。それで――もちろん私の單なる推測にすぎぬが――私は之をもつて、マルクスが豫め譯本の卷頭に寫眞版で載せらるゝことを承知の上で執筆したものだらうと考へる。それは發行者に寄せた單なる『私信』ではなく、言はゞ『公開狀』であつたのであらう。そのことは、この書簡の內容自體（吾々の譯本の三三―三四頁參照）からもまた看取しえらるゝ。そこには發行者に對する私用が述べられてゐるのではなく、むしろそれは讀者に向つて語られてゐるのである。福田博士は、それを指して『マルクス自筆の書翰を寫眞版で複製して掲ぐ

るに止めてある』と言つてゐられるが、筆跡そのまゝを寫眞版にしてゐるのは、これを輕んずる意味ではなく、むしろこれを鄭重に取扱つたと見るべきであらう。私はこれを書簡の形態における序文だと見、從つてカウツキーがこれをもつてフランス譯への Vorwort または Vorrede と言つてゐるのは、決して彼れの誤りと看做すべきではないと考へる。恐らくそれは、今後も『ラシアトル氏へ宛てた私信』としてでなく、『フランス譯への序文または序言』として通用するであらう。

なほラシアトル版には、マルクスの書簡を載せた裏の頁に、ラシアトルからマルクスへ宛てた書簡が載せられてゐる。(櫛田博士が指定されてゐる進歩書院版にはこれを削つてゐるが)。これも、もし博士が見られたならば、發行者から原著者へ宛てた『私信』だとされるであらうが、私はやはり書簡の形態における發行者の例言だと見る。博士は『フランス譯は、第一版を底本としたか、第二版を底本としたかを判然と示めしてない』とて、ながながと腑に落ち兼ねる點をならべ、それについて色々の想像をめぐらされてをり、この關係が『決して明瞭に現はされてゐないといふことは、河上博士等の所謂「文字の末梢にまで神經の敏感性を有し」たマルクスの著述としては、私には、聊か腑に落ち兼ねるものである』などと述べてゐられるが、もし博士が此のラシアトル版につき發行者の例言を見られたならば、少くとも最初のうちはドイツ原本の第二版原稿を——それがドイツにおいて公刊さるゝ以前に——使用しえたものだといふことが分るであらう。

要するに、フランス譯には、書簡の形態における原著者の序文と同じく書簡の形態における發行者の例言とが、卷頭に載せられてゐるのであり、吾々はそのうち原著者の分を譯出して、これを『フランス譯への序文』となしたのである。しかし斯く言ふことが悪るければ、これを『フランス譯の卷頭に掲げられた書簡』などと訂正しても可い。そんなことは何れにしても重大の問題でないと、吾々は考へる。マルクスが『文字の末梢にまで神經の敏感性を有してゐた』と吾々が言ふのは、そんな馬鹿げた點について言ふのではない。』

（一八—二〇頁）

此一段も、其落ちるところは、最後に『「フランス譯への序文」となしたのである。しかし、斯く言ふことが悪るければ、これを「フランス譯の卷頭に掲げられた書簡」などと訂正しても可い』と言はるゝ一言に盡きてゐる。左樣訂正せられんことを欲したればこそ、私は、博士に進言したのである。左樣訂正して可いものならば、反動學派の戰術の、事實の虚構のと、大聲疾呼せられる必要は、——商賣上はイザ知らず——些もないように、私共は考へる。『フランス譯への序文』で本當にあるものを、左樣でないと、私が申したのなら、博士の戰術の御都合上左樣大聲疾呼せられることも、或は意味を成すかも知れないが、——其れにしても、餘りに仰山である——事實、『フランス譯への序文』でないものを、ないと私が言つたのに對する揚言としては、何の戰術から云つても、的なきに放つた矢と云はねばなるまい。博士云ふ『そんなことは、何れにしても重大な問題でない(中略)そんな馬鹿げた點について言ふのではない』と。私は云つた、『茲に、少し腑に落

ち兼ぬることがある』以上何れも、私の此小論文に於いて、當面の問題とするところではないけれども、私の問題とするところを含む部分に、密接の關係を有する事柄であるから、私は、管々しくも、私の小やかなる疑を開陳して置く必要ありと考へたのである』と。私に於いては、少しく腑に落ち兼ぬることとし、管々しくはあるけれども、小やかなる疑として開陳したところ、而して、河上博士に取つても、『そんなことは、何れにしても重大な問題でない』ことが、重大な社會的任務を有する職術に屬し、これに對する民衆の信用を破壞する必要ありと、博士によつて認められてゐるのである。此二つ、其何れか一つは、博士の誤記に屬するものとするのでなければ、辻褄が合ふまいと考へられる。が、假りに、其れが重大な事であるとして、さて博士の前掲の文を二小目に分けて見る。

(八)

其一の(一)

『問題のマルクスの書翰は有名なる惡筆家のマルクスの筆蹟としては、特に極めて讀み易きやう丁寧に書かれてあり、そしてそれは恰も一頁大にさまつてゐる。(中略)私はこれを書簡の形態における序文だと見、從つて、カウツキーがこれをもつて、フランス譯への Vorwort 又は Vorrede と言つてゐるのは決して、彼の誤りと看做すべきではないと考へる。恐らくそれは、今後も『ラシアトル氏へ宛てた私信』としてでなく『フランス譯への序文または序言』として通用するであらう。』

此一節の前半は、博士の言はるゝが如くであつたのかも知れないし、また、左樣でなかつたのかも知れない。これは博士の單なる推測にすぎないので、推測は、元より、何事をも論證するの力を有せぬ。但し、彼のマルクス書翰の寫眞版が原寸大のものであるか否か、如何して之を確めることが出來ようか。二頁でも三頁でも書かれたものを一頁大にをさめることは、寫眞版は、伸縮自在なるものである以上、容易に出來得ることである。從つて印刷された其一頁が原寸大のものであることをも、また、然らざることをも、我々は、推測だもする資格は有たぬのである。否マルクスが、あんな大形の書翰箋を使用してゐたか否か、私は、これを知るべき何等の便宜をも有たぬものである。兎に角にも、博士が此書翰を『序文』に昇格せしむ可く、種々推測を逞うせられた勞は、多とせざるを得ないようではあるが、しかし、私は、マルクス自らが明かに『序文』と題せざるものを『序文』と斷定することは『跋文』を『序文』とするよりも、遙かに念入りの細工に墮するものと信じて敢はらざるものである。從つて、カウツキーがこれをフランス譯への序文としたことは、少くとも彼の『ラプスス・カラミ』であらうと、今猶ほ思つてゐる。『向後左樣に通用する』か否かは、マルクス其人の眞意に些の關係ないことである。私は唯だマルクスの眞を知らんことをのみ欲する。向後の通用の如何によつて、マルクスの眞

を究めることを斷念するわけには行かぬ。念の爲め一言を添へて置く。資本論の現行流布のイタリア譯本 Il Capitale. 3a Ristampa. Torino. Unione Tipografico. Editrice Torinese. 1924 には、マルクス書翰は譯出してなく『讀者に告ぐ』が『フランス譯について告ぐ』Avviso relativo alla edizione francese と題して譯掲してある。其日付は、カウツキーの如く四月二十五日と誤記せず。マルクスの眞を其儘に四月二十八日としてある。また第二版跋文拔萃も、カウツキーとは異りて、ドイツ文第二版の眞本に於ける例を守つて卷尾にのせてある。河上博士の所謂後世の通用は、此の廣く行はるるイタリア譯に於いては、全く見出されず、私の言つた通りが見出されてゐるのである。また現行流布のロシア譯本 Капиталъ. Томъ первый. Полный переводъ съ 5-го, провѣреннаго Фридрихомъ Энгельсомъ, нѣмецкаго изданія подъ редакціей В. Базарова и И. Степанова. Общая редакція А. Богданова. Кіевъ. には、第二版跋文は、エンゲルス通り序文 предисловіе（プリエヂスロウイイエ）とされて卷頭にかゝげてあつて、河上博士の所謂『フランス譯への序文』も『讀者に告ぐ』も譯載されてあらぬ。

其一の(二)

『なほ、ラシアトル版には』云々(下略)

私は、私の文に於いて、ラシアトル版を見る能はず、進歩書院版本のみを見得るに止ることを、誰人にも誤解せられざるよう明白に記して置いた。私が見る能はざりしと明言して居る版本を、『もし博士が見られたならば』『私には、聊か腑に落ち兼ぬるものであるなどと述べてゐられるが、もし博士が此のラシアトル版につき發行者の例言を見られたならば、少くとも最初のうちは、ドイツ原本の第二版原稿を使用しえたものだといふことが分かるであらう』とて私を難ぜられてあるが、見ることの出來ないものは、如何することも出來ないと御答するより外はない。しかし、假りに博士の言を其儘に信ずるとしても、出版店主人の書翰などによつて、マルクスの第二版とフランス譯との關係を臆斷するのは、當を得て居らぬ。私の問題としたのは、マルクス其人が、第二版原本とフランス譯との關係について、直接何にも言つて居らぬ一事であつた。河上博士の其の珍藏本からの發見は、私の此問題に對して、何事をも答ふるものでないは、言ふまでもないことである。博士云ふ『何萬何十萬といふ天下の讀者は、果して櫛田が正しいか、河上が正しいかを判斷すべき何等の材料を有たぬ。之れに附込んで章魚の墨汁を吐くが如くにして、學界を混沌化せんとすることが、實に反動學派の窮餘の一戰術なのである』。又曰く『しかし、斯く言ふことが惡ければ、これを『フランス譯の卷頭に掲げられた書簡』などと訂正しても可い。そんなことは何れにしても重大な問題でない』と。

以上が、博士が、私を以て『事實の虚構』を敢てしたと云はるゝ第二條の(其一)に關する二つの點である。

（九）

次に、第二點の（其二）が來る。此（其二）なるものは、博士論難の中堅を爲すものであり、博士をして、其の長大篇を起草する氣にもさせたものであるさうである。依つて私も念入りに、博士の御論を拜聽することとしよう。

（其二）。

『以上述べたことよりも更に驚くべきことは、福田博士が、この當箇の外にマルクスがフランス譯のため特に執筆した第一版の序文なるものがある、と主張せらるゝことである。これは愈々出でて愈愈珍妙といふべきである。實はこの點に關する博士の言說の餘りなる珍妙さが、私をしてこの一文を起草する氣にもさせたのである。博士のいふところを聽け！　博士の（中略）架上には『マルクスの公認した定本としてのフランス譯』があり、そしてそれには『第一版序文なるものが、マルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の月付をもつて、四頁に涉つて載せてある。』ところで、『ドイツ原文の第一版を見ぬ人は、それを、そのドイツ文序文のフランス譯と速斷するかも知れない』が、しかし、『それは、明かに速斷である……兩序文を一見すれば、兩者は、決して同一文でないことは、直ぐ知り得られる』（二〇—二一頁）

何故に、私の此言が『愈々出でゝ愈々珍妙』であるか、博士は隨々の數を得ても、私は其れを會得し兼ぬるのである。フランス譯本にかゝげた『第一版序文』なるものが、ドイツ原本の第一版に掲げてある序文と、決して同一でないことは、私は、私の論文（其二）の初めに於いて、更らに、繰返して、事實有りのまゝを述べて置いた。博士の文は、此部分を見られざる前起草せられ、私の（其二）を見られた後も其段は見落されたのかも知れないが、（其二）に於ける繰返しの說明がなくとも、少し注意して（其一）の當該部分を見られたならば、ドイツ文第一版に於ける眞正の序文と、フランス譯に於ける僞り取り序文とは、決して同一のものでなく、私が、當面の問題とするところに關して重要な變更が見出されることは、直ちに理解され得ることと信ずる。これをしも、同一物なりと云ふは、其れこそ『事實の虚構』とでも評するの外はあるまい。而して、フランス譯に於ける此の所謂『第一版序文』なるものは、ドイツ文第二版に於ける所謂『第一版序文』とも、また決して同一物ではないことも、私の前文を一讀せらるれば、容易に知り得ることであらうと思ふ。

今博士難詰の各項について吟味して見る。

（其二）の一。

『多くの讀者は、博士のこれらの言葉を信ずるであらう、そして吾吾が斯かる序文を見落してゐることを甚しい不詮索だと考へるであらう。しかし少し落ちついて前後を見通す讀者は、單に博士の文章

自體からでも或る疑問を起すであらう。なぜといふに、第一には、フランス譯の第二版が出るか出ないか分らぬ先きに、──ドイツ原本の第二版が出ることとこそ已に分つてゐたが、──初めて公にする版本に對してフランス譯への『第一版序文』なるものが附せらるゝ筈はないから。現に資本論のドイツ原文の第一版には單に『序文』としてある、それが『第一版への序文』となつたのは、もちろん第二版からである。注意深き讀者にとつて不思議とさるゝであらうと思ふことの第二は、福田博士の謂ゆる『フランス譯への第一版序文』の日付は、博士のいふところによれば一八七五年七月二十五日となつてゐるさうだが、年號こそ違へ、その七月二十五日といふ月日は、恰もドイツ原本の第一版序文の日付（吾々の譯本の一六頁を見よ）と符節を合することとである。『腑に落ち兼ねること』を頻りに列擧してをられる博士が、かゝることを平氣で腑に落としてをられるのは、聊か私の腑に落ち兼ねる。』（二一─二二頁）

第一の點は、無論、博士の言はるゝ通りである。だからこそ、私は所謂『第一版序文』なるものに三樣の異文があることを、不思議として居るのである。第二の點は、『博士の言ふところによれば』ではない、博士も亦其本を見られたことを、自ら告白して居られるではないか。即ち、右節を掲げた同じ頁に博士は『もちろん、博士の指定さるゝが如き版本はある』と明言し、更らに同頁に、『なるほど其の進步書院版では、第一版の序文の日付が、一八七五年七月二十五日となつてゐる』と明かに言つて居られる。其れが僅か十二三行前には『となつてゐるさうだが』と、私の言ふところが、如何にも怪しいものゝ樣な口吻を用ゐられてゐる。これは、博士の『戰術』に屬するものであるかも知れないが、學問は、其樣な曖昧なものであるべきではない。博士が進步書院版本のあることを知らず、又は知つてもこれを見るを得られなかつたのなら、『となつてゐるさうだが』は正しい、其代り『となつてゐる』てふ次の發言は、正しくない。既に其本を見られたものなら、『となつてゐる』が正しく『となつてゐるさうだが』は正しくない。二者其何れかでなければならない。ところが、博士が『となつてゐるさうだが』と曖昧なことを言はれるのは、其れにつゞく一節を有力ならしめる爲めの『手段』であつたらしく見える。即ち博士は云ふ『となつてゐるさうだが、年號こそ違へ、その七月二十五日と云ふ月日は、恰もドイツ原本の第一版序文の日付と符節を合することとである。『腑に落ち兼ぬること』を頻りに列擧してをられる博士が、かゝることを平氣で腑に落としてをられるのは、聊か私の腑に落ち兼ぬる』と。博士は、私が腑に落してゐると言はれるが、私は決して、此事を腑に落したと記したことはない。否、本誌一月號に於いては、明かに『茲に異とすべきことは、其日付が（略）一八七五年となつてゐるのである。月日は、故意か、偶然か、何れも、七月二十五日とせられてゐる』（同號七三頁）と記してある。博士は、此言を見ても、猶、私が、此一事を『平氣で腑に落してゐる』と主張せらるゝものなりや、其れこそ愈々以つて私の腑に落ち兼ぬるところである。

以上二點が、私の文章自體からでも、讀者は或疑問を起すであらうと博士の言はるゝものであるが、右の如くに事を分けて說明すれば、誠心を有つ博士は兎に角、公平なる讀者は、私の文章自體からは、何等の疑問を起されぬことと信ずる。

（十）

博士はつゞいて、『私は、讀者のために、順序を追ふてこれらの不思議を解かう』と言つて居られる。此場合、不思議は、三樣の異文を有する『第一版序文』なるものにかゝる。私の所論には、何等の不思議は存して居らぬ。さて、博士は、此の不思議を如何に解かるゝか。

（其二）の二

『博士のいふところによれば、『私の架上にある本は、出版者はラシアトルとせず、……「進步書院發行」……の本である』。すなはち『出版者ラシアトル氏へあてた私信』を卷頭に載せてゐる本でありながら、博士の引用せらるゝものの出版者はラシアトルではない。博士は何故こゝに再び『簡に落ち兼ねること』を發見されないのか？もちろん博士の指定さるゝが如き版本はある。しかしそれは確に後のものである。それよりも先きに、ラシアトルの發行したもので、進步書院版とは印刷所を異にし、且つところ〴〵のカットを異にしてゐるところの、假綴の定本が出てゐる。もし言ひうべくんば、これこそ『マルクスの公認した定本としてのフランス譯書であらう』。

しかるに何故か、博士は『私が今見つゝある本（進步書院版）こそ』それだと主張される。

なるほど其の進步書院版では、第一版の序文の日付が一八七五年七月二十五日となつてゐる。しかし前記のラシアトル版では、序文の內容は一字一句盡く同一であるに拘らず、その日付は一八六七年七月二十五日となつてゐる。そしてそれは正にドイツ原本における第一版序文の日付なのである。私はたゞこの一事を指摘しただけで、福田博士の主張せらるゝ事實――マルクスが一八七五年七月二十五日の日付をもつてドイツ原本への序文とは相違する序文を新たにフランス譯のために起草したといふこと――の全く虛構であることを讀者が納得せらるゝであらうと信ずる。だが私は今少し說明を加へるであらう。』（二二――二三頁）

博士は、『「私が見つゝある本（進步書院版）こそ」それだと主張される』と云はれるが、私は、左樣な斷定的言葉は用ゐたことはない。私の言葉は次ぎの如くである。『パンフレット本には、如何樣にあらうとも、私が、今見つゝある本こそマルクスの公認した定本としてのフランス譯書であらうと思ふから』又た『河上博士の見られた其のパンフレット本には、此書簡のことを序文としてあるか否か、其本を見る能はざる私の知らざるところであるが、一册の定本として刊行された此書には、其れは、明かに序文ではない』（本誌十二月號三七頁上下段）博士は『私が』から『こそ』までは、私の文を取り、直ちに其れへ『それだと主張される』と、全く事實無根の略筆を用ゐてゐられる。此略筆法は、『戰

術』としては、實に巧妙を極めたものではあらうが、學問文の議論としては、其れこそ博士の所謂『事實の虚構』に當るのである。

進歩書院版が『後のものである』ことは、私も、據文に於いて左様ではあるまいかと申して置いた。唯だパンフレット版を見ざる私としては、何れとも、斷定的のことを言ひ能はなかつたのである。今博士が『ラシアトルの發行したもので、進歩書院版とは印刷所を異にし、且つところ〴〵のカットを異にしてゐるところの假裝の定本が出てゐる』と、懇に教示せられたにより、私は、據文に於いて、單に推測したことの事實に合するを見て、喜ぶものである。此段は、偏へに、博士の高示に對して感謝せねばならぬ。しかし、其本が『もし言ひうべくんば、これこそマルクスの丞認した定本としてのフランス譯書であらう』か否かは、實物を見る幸福を有せず、更らに、それらについて考證する便を持たぬ今の私に於いて、何れとも判じ兼ぬる次第である。――所藏せざるものは、いくら架上を探しても出て來ようはない。出來ない相談をかけられるは、卑怯と考へるが、藏書に乏しいを誇らるゝ如くなる博士が、偶々ラシアトル版の『珍本』を藏せらるゝ喜びの如何に大なるものであるかは、後に云ふ高等ドイツ文法の新發見にかゝる喜びと同様に、十分御察し申上ぐる――

ところが、右の河上博士のラシアトル版では、日付は一八六七年七月二十五日となつてゐるさうである。此れは、私に於いて、屢々申す如く、見る能はざるものであるが故に、私に、其事を知り得ようがないのである。此點も、固に博士の高教を感謝する。しかし、こゝに、私の解し兼ぬる一句がある。博士日く、『前記のラシアトル版では、序文の内容は一字一句盡く同一であるに拘らず』と。其一字一句盡く同一と云はれるのは、進歩書院版本の其れと、ラシアトル版の其れとについて、言はれたものであらう。然りとするならば、其れは、マルクスの本當の第一版序文とは一字一句盡く同一でないのみか、著しい削り取りが行はれてゐるものなのである。即ち私が譯出を試みたフランス譯本に於ける所謂『第一版序文』と一字一句盡く同一なものと見へる。これだけ細かく、色々な事をあげられる河上博士が、ラシアトル版の所謂『第一版序文』なるものは、本當の『第一版序文』でないことについては、一言半句も云はれず、況んや其の本當の第一版序文の眞を傳ふる爲めに、何事もせられないのは、私に於いて、愈々更らに、解し難いことであるのである。而して博士は、其の異文たるラシアトル版の所謂『第一版序文』なるものが、『正にドイツ原本における第一版序文の日付なのである』ことの不思議については、顧みて、他を言つて居られるのである。日付が一八七五年となつて居れば、其の異文たることは、直ちに分る。然るに、其日付が眞正の第一版序文と全く同一であり乍ら、内容の異るものが掲出されてあることこそ、忠實、正確、綿密、親切を切念とせられる河上博士の出版書店主人宛私信を、博士流に序文に昇格するの勞を執るまでもなく博士に於いて、篤と考慮せらるべき管ではなかつただ

らうか。しかるに、博士は「私は、たゞこの一事を指摘しただけで福田博士の主張せらるゝ事實――マルクスが一八七五年七月二十五日の日付をもつてドイツ原文への序文とは相違する序文を新たにフランス譯のために起草したといふこと――の全く虚構であることを、讀者が納得せらるゝであらうと信ずる」と云つて居られる。私は、むしろ、此一事を指摘しただけで、河上博士の所謂正確、忠實なるものゝ聊か腑に落ち兼ぬるものであるを、讀者が納得せらるゝであらうと思ふものである。

(十一)

一八七五年の日付を以てのフランス譯掲出の所謂『第一版序文』なるもの、而して、河上博士の教へらるゝところによれば、其れと一字一句盡く同一である由の一八六七年七月二十五日付のラシアトル版フランス譯本に於ける所謂『第一版序文』なるもの、此二者は何れも、ドイツ原文第一版に掲出されたマルクスの本當の序文とは、決して同一のものでないことは、讀者は、うるさきまでに、承知せられたことである。私が、此事實を主張することは、如何なる意味にても、事實の虚構ではない。否、事實有りの儘なのである。

マルクスの眞正の第一版序文と異る所謂『第一版序文』なるものゝ内では、私が見るを得た進歩書院版本の方が、正直さが多いのである。何となれば、其れは、日付を一八七五年として、一見一八六七年の其れと同一のものなりとの錯覺を、讀者に生ぜしめないから。之れに反し、内容を異にし乍ら、同じ一八六七年の日付を附する河上博士の珍本ラシアトル版こそ、不正直なものと云はねばならぬ。何となれば、第一版を見る便を有せぬ人は、其序文を以て眞正の第一版序文と全く同一のものと速斷する虞が大であるから。せめて、日付でも違つて居れば、少し注意する讀者なら、第一版を見る能はずとも、多少の疑を惹き起し得べき筈である。然るに、日付迄も全く同一であつては如何に注意する人と雖も、第一版本と現實に比較するに非ざる限り、兩者を全く同一物と認むるの誤に陷らしめられるを免れまい。幸ひ進歩書院版があるによつて、私共は、第一版を見ざる以前、危く此誤に陷ることを免れ得るのである。

然るに、河上博士は、此の明白の事實を、却つて逆用せんと欲せらるゝもの如くに、私には見える。卽ち博士云ふ『福田博士の持出された進歩書院版には、何故第一版の序文の日付が年號だけ改竄されてゐるか、それは發行者の故意に基づくものか、それとも印刷の際における何等か偶然の誤植に基づくものか、私はそれらのことについて何等確たることを言ひえない。だが、その第一版序文なるものがドイツ原文第一版の序文の翻譯であることだけは、明かに斷定し得られる』と。ドイツ原文第一版序文其まゝの翻譯でないことは、私が、うるさいほど繰返したところである。進歩書院版の何れのところに、私が、拙文の開題言とした一節が譯出されてゐるか。跡も形もないのであ

る。然るに博士は、『明かに斷言し得られる』と云ふ。再び博士の爆彈的用語を拜借すれば、これこそ『今や白晝公然、學問の名に於いて、黑が白とされてゐる』『資本論自體でさへが商品化し』白銅二つの安本唯一册が、何千圓だか、何萬圓だか知らないが、巨大な爆彈廣告によつて賣弘められ、これに對する重大事でも何んでもない一寸した批評を反駁する爲めに、態々一册の著書までも急遽刊行せらるゝに至り『たる今の階段では何物かよ』河上博士をして、『黑を白となさしむるの力を有するかに見える』とでも申すべきであるかも知れない。但し、私は、其樣な毒々しい日本語を浪費する必要は、些もこれを感じない。唯事實有りの儘を明かにし得れば、即ち事足るのである。

一八六七年でなく一八七五年の日付が、進歩書院版本にのせてあることを、博士は、『發行者の故意に基づくものか、それとも印刷の際における何等か偶然の誤植に基くものか』確たることを言ひえないと、事もなげに片付けてゐられる。これも、『戰術』としては、たしかに、巧妙を極めたものである。『だが——その第一版序文なるものが、ドイツ原本第一版の序文』其儘の『翻譯で』無い『ことだけは、明かに斷言し得られる』のである。從つて、博士が、確たることを言つて下さるとも、下さらずとも、其れは、全く無用事に屬する。私も無論確たることは知り得ない。しかし、兎に角、此の進歩書院版本が、マルクスの生存中に刊行されたものであり、無論マルクスの知つて居るものであることは、粗ぼ確かに推し得られるのである。其トビラに『全部原著者校訂』と明記してある以上、マルクスが、これを知り、否これを公認して刊行せしめたものなることは明かと思ふ。彼のマルクスが誤刷本などを默過してゐたらうとは、到底想像し得られないから。然れば、一八七五年七月二十五日の日付は、マルクスは、當然これを認めたものとする外はない。進歩書院版には、卷末に可なり詳しい誤植訂正表が附載されてあるが、其中に此日付は訂してはない。但し其表には註記があつて、此訂正表以外にも誤植はある。而して、此誤植表は、若干の取り除けの外は、此書の初めの部分 Première section de ce livre のみについてのものであるとしてある。所謂『第一版序文』は、卷頭にかゝげてあるから、當然其の『初めの部分』なるものに屬すと云ふべきであらう。殊に序文の日付の誤植などは、極めて目につき易いもので、誤植ありとしたら、餘程不體裁のものである。文字の末梢にまで敏感だつたと云はれるマルクス其人が、此場合誤植を訂正せずに捨て置いたらうとは、到底想像し得られぬところである。河上博士が、漫然と『發行者の故意』だの『誤植』だのを以つて、私の此一事の指摘を骨拔きにせられようとの用意は、決してマルクスに忠實なるものとは思はれないのである。マルクスは或は言ふかも知れない。『神よ、我敵は、我自らこれを防ぐ。唯願くは、我友と稱し、我が遺志を尊重すと稱する諸々のエピゴーネンに對して、我を守護し玉へよ』と。

（十二）

次に、博士は、其フランス譯中から若干句を引き、これを直譯し、それを『吾々の譯本におけるドイツ原本第一版の序文と比較』して居られる。此比較は全く無用である。何となれば其の『吾々の譯本における』ドイツ原文第一版の序文』なるものは、ドイツ原文第一版の序文ではなく、フランス譯同様のドイツ本第二版に於ける所謂『第一版序文』――私の名付けて、削り取り並に日付錯簡の第一版序文――であるから。即ち、兩者は、一々比較するまでもなく、同一であることは、初めから、分り切つたことなのである。其れをわざく長々と掲出せられたのは、他の多くの部分に於ける如く、定價二十錢の『社會問題研究』の頁數を充實する必要から來たのであるかも知れないが、『私はそれらのことについて何等確たることを言ひえない』のである。『だが其れが、全く無用の長物で『あることだけは、明かに斷言し得られる。』

長々と比較をなし終つた博士はいふ。『端初と終末との斯かる比較は、福田博士のいふところの『フランス譯文の序文』なるものが全くドイツ原本の第一版の序文のフランス譯に外ならぬことを明かにしえたと考へる』と。

三十年近くの其昔、私がドイツに居たとき、下宿屋の子供たちが、よく『だまし繪』といふものを、私の處へ持つて來て、私と一緒に遊んだ。其れは如何にも面白いものであつた。頭と尻ッぽ丈け書いた繪がいくつもあつて、其れで、其が何物の繪であるかを當てつこするのである。頭と尻ッぽ丈け見たのでは、如何しても、象だらうと思つたものが、別添の解説書にのせた全繪を見ると、ビール樽になつてゐたり、化物になつてゐたりするのである。

河上博士は、頭と尻ッぽ丈けを比較して、『私のいふところの『フランス譯の序文』なるものは、全くドイツ原本の第一版の序文のフランス譯に外ならぬ』と主張せられる。私が以上屢々繰返したとをり、削り取りは、第三項に於いて行はれてゐるので、頭にも尻ッぽにも關して居らぬのである。然るに、博士は、頭と尻ッぽと丈けを比較して、『フランス譯』とドイツ原本と同じだと主張するのは、子供のだまし繪を象と見たと主張するが如きものである。種を明けて見れば、ビール樽か、化物になつて居るかも知れない。況んや博士の比較せられた同博士邦譯本中の第一版序文なるものはドイツ原本の第一版序文ではない。其れを、博士は『ドイツ原本の第一版の序文』だと、『事實虚構』のことを主張し、更らにフランス譯とドイツ原本第一版序文とは全く同一だと、全く見當違ひのことを――比較もせぬものを、恰かも、比較したものゝ如くに――主張して居られるのである。

然るに、博士は、曰く『なるほど、博士の『架上書』にあるフランス

譯本には年號が一八七五年となつてをり、ドイツ文第一版の序文の年號一八六七年とは明かに相違してゐるのだから、博士はこの年號だけを『一見』して『兩者は決して同一文でない』と早合點されたのであらう、――斯樣に讀者は想像されるかも知れない。しかし博士は決して左樣な『速斷』をされたのではない。事態はもつと念の入つたものである』と。

（十三）

其の『念の入つた』とは如何なる事であらうか、玆で、博士は、其の長大篇のクライマックスに達して居られる。而して、其れは、博士の『戰術』の最も巧妙を極めた部分に屬する。私は、博士に倣つて、『その一帶の文』を、左にかゝげて見よう。

『私から見れば博士はづう〳〵しくも、天下何萬の讀者に向つて、そのいふところの『フランス譯本第一版序文』なるものの一節を、原文のまゝで引用し、次いでそれに邦譯を加へ、且つそれに該當する文章は、カウツキー版にも英譯本にも吾々の譯本にもないと言つてゐられる。これは愈々出でて愈々怪、私は殆んど言ふべきところを知らない。その一帶の文、實に左の如し。

『さて、私が當面の問題とすることに關しては、フランス譯本第一版序文――河上博士の所謂序でない本當の序文――は、此論文の最初に開題文として掲げた原本第一版序文とは、著く異るものである。其文左の如し。――此文カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし――

（引用文中略）

此の旨は、原本第一版にも第二版跋文中にも見出されず、而して、私が今問題とするところの價値形態、就中、等價形態に關するアリストテレースの「流通正義」論の一部についての、マルクスの解釋に關して可なり關係の深い發言なのである。其はカウツキーが、資本論の新版に譯掲するに値すると云つて、自ら譯筆を下して其自序中にかゝげた二文よりも、更らに、譯掲に値するものと、私は信ずる。』

さて博士が以上引用されたものは、『フランス譯本の本當の序文』のなかにあるもので、『カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等の譯本にもなし』とのことであるが、それは完全なる事實虚構のほかの何物でもないのであつて、實際はその全部が吾々の譯本の九頁から十頁に出てゐるのである。面倒だがそれを玆に轉載して見よう。』　二六―二八頁

私が、フランス譯本の所謂『第一版序文』なるものゝ一節を、原文のまゝで引用し、次いで、それに邦譯を加へたことが、如何してづう〳〵しくも、天下何萬の讀者に向つて』『愈々出て、愈々怪、私は殆んど言ふべきところを知らない』ことになるのであるか。私は、出來る丈け、綿密、忠實ならんことを欲するの餘り、既に、高畠氏譯本にも、河上博士本にも、譯載せられてゐる其一節を、更らに、フランス

譯本の原文と、其の抄譯とを掲げたのである。河上博士等譯本に邦譯ある部分を、私に於いて改めて邦譯したことが『づう〳〵しい、愈々出で、愈々怪なる』ことになるのか。博士邦譯の原文——削取り及び日付錯簡の第一版序文——なるものが、私の原文とするところと、寸分違ひのないものであらうとも、私は、任意に刪譯を試み得ると確信する。況んや、兩者は、言廻しの上に於て、種々異點あること、博士も認めらるゝ如くなるに於てをや——

序にいふ、マルクス資本論の著作權の期限が切れたればこそ、カウツキーは其民衆版を刊行したので、而して、河上博士等は、其本を底本とせられてゐるのである。カウツキー本邦譯について、河上博士等は、適法に、編者並びに出版者に、翻譯權允許料金を支拂ひ、明白に其承諾を得られたものであるか否か、博士等の譯本には其事については、一言ものせてない。私は、『内外經濟學名著』を十數年前創刊し、近頃其續册を再刊すべく始め（博士には、其何れの册も、發行の度毎に遞滯なく、今迄は拜呈してゐた）たが、我邦に於ける外國書の翻譯が、原著者にも、出版者にも無斷無償で刊行せられるもの多きを常に憾いてゐるから、右『内外名著』には、著者又は其遺族の知られ得る限り、一々發行前に交渉して、其明白なる承諾を得、又た發行店の明かに存在の知られ得る限り、一々交渉して、其要求にかゝる報償は一々嚴肅に支拂ひ、其旨をも出來る丈け、明瞭に記載することを、各譯者と共に努めてゐるのである。——大鐙閣『マルクス全集』着手のとき、私は、『資本論』の發行所マイスナー店へ、書留め書状を前後三回も出した。一昨々年ハムブルグへ行つたとき、わざ〳〵同店を訪ひ、其事について話したら、同店は今は全く方針を改め、商工實務書の販賣を專としてゐて、『資本論』のことは、全く分らぬと云つてゐた。横濱には、現に同店主の令息が、何商會かに居られるが、矢張同樣のことを云つて、祖父の時代と今の自分とは、全く異つたと笑つて居られた——たしか、河上博士も、アーヴヰング・フイツシアー氏の何本かを邦譯せられたとき、同樣の用意を示されたことがあつたと記憶する。否、今より廿數年の昔、私は、河上博士の御依賴を受けて、クラインヴェヒター教授著原論を博士が邦譯せらるゝことにつき、承諾を乞ふ一狀を差出したことがある。教授は快諾されたが、出版店から何百麻克かの請求があつて、ついに、右邦譯は沙汰止みになつた。其後ク氏の本から澤山の箇所を取入れた本が、博士によつて公刊された。明治三十八年刊の同博士の『經濟學原論上卷』即ちこれである。

兎に角、博士は原著者の承諾を求むることについては、私とは、粗ぼ同樣に考へてゐられるものであると思つてゐた。然るに、甚だ大切な『資本論』邦譯については、カウツキーの承諾、ヂーツ書店の同意は、何年何月何日に於いて、これを得られたものであるか、否抑もこれを得られたものであるか否かさへも、一向明言せられてないのを、——外の人なら兎に角——博士には不似合なことと、私は、痛感しつ

つあるものである。私が譯出したのは恐らく一八七五年以後刊行のものと推せられるフランス譯からで、譯者ロア氏の其後の消息は私は全く知らず、又た巴里に右進歩書院なるものが現存するや否やを、全く知らないのである。

兎に角、私が、ロアの譯本から、序文の一節を原譯兩文共にこれを掲げたのは、綿密の點に於いて可とせらるゝことはあらうとも、其故を以て、誰人からも非難さるべき理由は寸毫も存しないのである。然るに、博士は、其擧について、『づう〳〵しくも天下何萬の讀者』云々『愈々出でゝ愈々怪』などと、殆んど最上級の毒評を下して居られる。私には、其事が、むしろ、不思議千萬に思はれるのである。

博士は、また『且つ之れに該當する文章は、カウツキー版にも英譯本にも吾々の譯本にもないと言つてゐられる』と事實全く『虚構』なことを以つて、私を難じて居られる。私の論文（其一）を見られた丈けの博士なら、右一句には、誤植があつたから、博士が、左樣言はれるのも無理は無論ない。然し、私は、與へられた最も近き機會、即ち『改造』本年一月號の（其二）に於いて、而も本文の一番始めに、いとも、明白に其誤植を訂正して置いたことは、『天下何萬の讀者』が熟知せらるるとほりである。博士の長大篇の追記によれば、博士は、明かに、右一月號の『改造』の私の文の（其二）を見られたことを報じて居られる。誤植を訂正したのに、其れは、全く無視して、『愈々出でゝ愈々怪』と云はれる、河上博士の『戰術』なるものは、茲に到つて、其最高頂に達したとでも云ふべきであらう。

誤植とは『此文カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし』といふ註記が一行左へ寄つたことが、主なことなのである。これは、わざ〳〵註記せずとも、開題の當該部分を、少し注意して讀まれた讀者の疾くに知り居らるゝところなのである。從つて、私は、當初下稿のときは、其事を少しも認めて置かなかつたが、校訂の際、事私の開題文に關することであるから、其れは、註記して置いた方が、讀者の記憶を新たにするに都合宜しからうと思つて、前後若干句を改むると共に、餘白へ註記して置いたのである。其れが、誤つて、一行左へ組み入られたのである。而して、此部分は、私に於いて、特に注意して、何度も添削したものに屬する。從つて、右註記の地位以外にも、脱漏や誤植が多かつた。其等は、一月號の本誌に於いて、特に明白に、文初に訂正してあるのである。

河上博士は、私の文に於ける此誤植を利用して、『それは完全なる事實の虚構のほかの何物でもないのである』と大聲疾呼せられてゐる。否、此一點が、博士の自ら告げられる通り、其長大篇を、『窮餘の戰術としての事實の虚構』を、起草する氣にもならせ、而して、『博識はついに虚僞の惡しき飾りであつても、眞理の良き標しではなかつた』云云の爆彈廣告によつて、天下何萬の讀者を驚かすことになつたのであ

る。博士の常用語を拝借すれば『何と馬鹿らしい詰らない』ことではないか。

（十四）

以下博士の論ぜらるゝところは、一度誤植を利用し、而して、其訂正を見ざるが如く『裝ひ』つゝ、[illegible]――自己暗示の――に乘じて、私に對する民衆の信用を破壞す可く用ひられた戰術の展開以外の何物をものせてゐないのである。

『それは外國人の著書を、いゝ加減に抄譯して之を自己の研究になる勞作なりと稱して公刊しうる人のみが言ひうることである。驚くべきことである』は、新たに加へた打撃を、更らに一層有効ならしむべく、古狸の痛所に三十棒を下されるつもりであらう。『戰術』も茲に至つて、實に天才的ひらめきを示すとも、申すべきであらう。

私は、去明治四十年初めて『經濟學研究』（此書名、後に河上博士また模倣せらる）なる書を、刊行したとき、其れは、名の實に過ぐる甚しいものなる旨を開陳して置いた。

更らに、大正十三年、過去二十五年の諸篇を經濟學全集にまとめて、出版したとき、左の通り開陳した。

『今此全集にまとめたものを回顧しますと、（中略）多くは先進學者の業績を紹述し、間々若干の批評を試みた丈けで（中略）如何なる意味に於ても、他の諸々の全集の樣に、其著者の誇りとす可きものではありません。寧ろ一部の懺悔錄たり雞肋集たるに過ぎないもので（中略）過去の私の研究の跡を示すものとしてゞなく、將來に於ける私の研究に、發奮の資料たる可きものとしてのみ意味を有つものであります。從て此全集に對しては如何なる酷評を受くることありとも、私は其を當然のことゝして甘受するもので、（中略）辱められて而して憤し、憤して而して啓するを得んと申すのが、私の此書に對する覺悟であります。私の學問上の仕事が、此全集のみに止るならば、私は日本の學界の一員たる光榮に背くものと存じます。此書は、唯私に轉回の一刺戟を與ふると云ふことのみに其價値が存するものであります。』

私に對する剽竊呼はりを始められたのも、實に河上博士であつた。博士の『賃銀勞働と資本』に關する私の論文が、『解放』第一號に顯はれた後、博士は久しく沈默を守つて居られた。其沈默を破つて、私を論難せられたのは、私が本誌にのせた『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』に對し、其は、トウガン・バラノフスキーからの剽竊であると云ふことを記された一論文であつた。――當時、論壇の老大家某氏は、これを以て河上博士の戰法の實に妙を極めたものであると、稱へられた――其以來、屢々、殊に私の一昨々年外遊の留守中、いろ〳〵のことについて、私の剽竊が指摘されたそうである――私は、それらを見て居らぬ――が、其筆者は、河上博士の所謂『陣營』に屬する

方々であつて、其以外の方の筆にせられたものには、少くとも、私は見ることを得なかつた。

私は、今剽竊云々の辯護をするつもりは、少しも持たぬ。一昨々年の外遊以前に、私の筆にしたものは、多くはこれ、先輩學者の糟粕を嘗めたもので、自己の研究になる勞作などと云ふ可きものではない。しかし、私は『いゝ加減に抄譯』したものを、之を自分の研究になる勞作なりと稱して公刊』したことは一度もない。私は、其度々に、研究などと稱すべきものでないことを、虚榮からでなく、事實其ものとして、序文中に認めるを怠らなかつたつもりである。從つて、多少なりとも、自分の工夫・研究になるものありとせば、其は、外遊歸來後昨年『改造』に揭出した『唯物史觀經濟史出立點の再吟味』と、今博士論難の對象たる『アリストテレースの流通の正義』との二篇あるのみである。

博士は云ふ『これを要するに、マルクスが一八七五年に『わざく起草した』フランス譯への『本當の序文』と福田博士の稱さるゝところのものは、實は、ドイツ原本第一版への序文に外ならぬのである』と。而して、博士の此の主張の誤なることは、以上私が屢々繰返した通りである。然るに、博士は、直ちに其れについて云ふ『カウツキーはこの序文（博士の謂ゆるフランス譯への本當の序文――河上）のことを、その民衆版序中に言つて居らぬ（！）……彼は右の私信（吾々がフランス譯への序文となしたもの――河上」と、後におくる一讀者に告ぐ」とは、ドイツ文序文と並んで、資本論の向後の版に揭げる價ありとは云つてゐるが、それよりも、遙かに重要な此の（彼のの誤植――福田）本當の序文を重刷する必要のあることについては、一言もしてゐない（！）』一言もしてゐない筈だ。ドイツ文を、フランス文に譯したものを、更らにドイツ文に譯して重刷する馬鹿があつてたまるものか』と。

河上博士は、右誤植を含む『彼の本當の序文』を、フランス譯に於ける所謂（削り取りの）『第一版序文』のことと解せられ、從つて『これを重刷する馬鹿があつてたまるものか』と言はれてゐるのである。私が重刷の必要についてカウツキーが一言もしてゐないと言つたのは、削り取り及日付錯亂のないドイツ原本第一版に於けるマルクスの本當の序文のことである。此一條は、誤植の爲め、河上博士に、無用なる『馬鹿呼はり』の勞を煩はしたことを、御氣の毒に思ふ。今誤植が訂された後、博士が其の馬鹿呼はりを撤回されるか否か、其れは、元より、博士の御勝手である。

博士は、私が『カウツキーは、此序文のことを、其民衆版序中に言つて居らぬ』と認めたのを、『カウツキーは、この序文（博士の謂ゆるフランス譯への本當の序文――河上）のことを、その民衆版序中に言つて居らぬ（！）』として居られる。これは、本誌十二月號四五頁上段

第二行に於ける私の註記から、『本當の』てふ三字を拾ひ出され、これを全く場所違ひの此の箇所（本誌十二月號三七頁下段第四行）に挿入して、『本當の』てふ三字に、重大な攪亂的役割を演ぜしめられたものである。其御手際は、『戰術』としては、實に鮮かなものである。しかし、私が、右註記のところに於いて、『本當』のと云つたのは、河上博士の所謂序、即ち私信昇格序と區別すべく、特に附加したのであつて、それは、決して、ドイツ文第一版に掲出してあるマルクスの本當の序文のことを指したものでないことは、言ふまでもないのである。

私が、右三七頁下段に於いて、特に、右註記を挿入した所以は、其れが、一八七五年七月二十五日の日付を有つものなるにカウツキーは、其事について、何事も言つて居らぬことを、讀者の記憶に喚び起さんが爲めである。これは、正さに事實其儘を記したものである。各版本を、いとも懇ろに且つ詳しく考證し、幾多の誤植、誤謬を訂し、エンゲルスによる諸々の錯簡を匡したカウツキーこそは、此事について、何事か一言すべき筈であつたと、私は考へる。特に、彼の民衆版は、此のフランス譯本を、利用したことを以て、其特長の重なるものゝ一とするものである以上（カウツキーの序文一五頁中頃から、十八頁上段までに詳しく、其事が述べてある）、私は、其事を何處までも必要と認めて渝らざるものである。

博士またいふ『博士は吾々に質問されてゐる「河上博士等が……彼れ（マルクス）の公認した本當の序文を譯出してないことは、何の理由に基くものであらうか」と。私はかゝる質問を提起せらるゝ博士の頭腦の健康狀態を疑ふ』と。私が私の小さやかな論文に於いて當面の問題とするところに密接な關係を有ち、從つて、私は、私の小論文の說き起しに開題言として引用する必要ありと信じた肝要な一節を含む唯一の本當の第一版序文を、河上博士等が譯出されてないことは、私の今以て、理解し能はざるところである。而して、博士は、其長大篇に於いて、些も、私の此の疑を釋かうとはせられず、逆しまに、かゝる質問を提起する私の頭腦の健康狀態を疑ふと云つて、私を狂人扱にして居られる。頭腦の健康狀態の疑はれる私の書いた『改造』紙上三十何頁の論文の或部分の記述に對して、四十餘頁の一單行書を發行せられる博士の親切は、世にも珍らしいことであるが、折角四十何頁、肝要の質問には答へられず、唯頭腦の健康狀態を疑ふといふ。其位ならば、博士は、何故初から、簡單に、『福田は氣違である。其書くところ一も信ずべからず』と丈け書いた引札でもを、前金まで取つて、其始末につき聲明の義務を有せらるゝ其の得意先に配られて、貴き『社會問題研究』の全一册を費した大論文を著述せらるる勞を省かれなかつたのか。私は、河上博士の頭腦狀態に、少しも疑を有たぬ。然るが故に、却つて、此事を以つて、私の腑に落ち兼ぬることが、更らにまた、一つを增し加へたと申さざるを得ぬのである。

果然、博士は、つゞけて言はれる『さて、私は、實につまらぬ爭ひのために時間を費して來た』と。私も、此文を認めて、こゝまで來り、痛切に、感を博士と同くするものである。然るに『つまらぬ』ものなら、せめて、以上三十一頁に言はれたことで御仕舞になつて居れば、あきらめもつくが、博士は、此く言はるゝ言葉の下に、更らに以下、十數頁を費やして、再び、其論難をつゞけて居られるのである。實にウンザリさせられる――甚だ失禮な申分ではあるが、其れが、偽はらざる私の所感である。――而して、以下、博士の言はるゝところは、要點を申盡くされた後の出し殼である丈け、實質的には何ものも加へてなく、其代り、惡口雜言は、愈々出でゝ愈々精彩を發揮してゐるのである。故に本來なら、私は、以上で御免を蒙りたいのであるが、折角博士の御論を逐一に吟味し來つた序であるから、此一回に限り、其の部分も吟味して見よう。但し二度とは、平に御免を蒙むることを、同時に申添へて置く。

(十五)

博士いふ。

『フランス譯の冒頭に載つてゐる同じフランス文を提へて、福田博士はそれがドイツ原本第一版の序文と同一文でないことは、兩序文を一見すれば直ぐ知り得られる』といふに對し、私はそれと全く逆に、それが同一文であることは、一見すれば直ぐ知り得られるといふ。議論が分れるものならまだしも、事實の認識が此の如く相反するといふことは、反動學者の眼と吾々の眼とが今や事物の觀察において徹底的に相反するに至つたことを示す。同じ物を指して、博士は黒でなく白だといひ、私は白でなく黒だといふ。學界の混沌はすでに極に達したといふべきである。論爭者は能ふかぎりの對立をなし了へたといふべきである。殘念なことには、資本論のドイツ文第一版はもちろんのこと、最初のフランス譯も、今日では容易に手に入れがたい。何萬何十萬といふ天下の讀者は、果して福田が正しいか、河上が正しいかを、判斷すべき何等の材料を有たぬ。それに附け込んで、章魚の墨汁を吐くが如くにして、學界を混沌化せんとすることが、實に反動學派の窮餘の一戰術なのである。

對立者の何れが事實を事實とするか? 眼あるものは見よ。

土方博士、福田博士、これらの學者は何れも常に事實に卽したる實證的な研究、歴史的な研究、乃至は考證的な論述を重んずる學者である。諸君の勞作は、一見したところでは、まことに事實を重んずるかの如き現象形態を呈してゐる。玆に掲げた福田博士の論文はもちろんのこと、土方博士の『マルクス價値論の排撃』でも、その卷頭には多くの頁がマルクス價値論の解説のために割かれてある。しかし如何にも事實を重んずるかの如き斯かる現象形態は、逆に事實の虚構をその本質となしてゐる。

今や白晝公然、學問の名において、黒が白とされてゐる。

吾々の近頃譯出した資本論第二分册の二二〇頁の脚註には、マルクスがシエクスピアの『アセンスのタイモン』から引いた次の句が

ある。

『黄色い、ぎら〳〵する、貴重な黄金だ！
……こいつがこのくらゐありやア、黒も白に、醜も美に、
邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇にすることが出來る。
……………』

黒を白にするのは、この『ぎら〳〵する貴重な黄金』のみかと、思つてゐたが、商品生産が資本論第一篇の階段に止まらず、資本論自體でさへが商品化したる今の階段では、何物かが櫛田博士をして黒を白となさしむるの力を有するかに見える。この力が博士をして、ドイツ原本第一版の序文のフランス譯を、マルクスがわざ〳〵フランス譯のために新たに起草した別種の序文となさしめたるのである。たゞ吾々はかゝる力の外に獨立する。微力にして淺學なりといへども、敢て大處に向つて『眞實』を語らんとするの勇氣を維持しうるゆゑんである。私は驕にこのことを光榮とする。』（三一―三三頁）

フランス譯の冒頭に載つてる所謂『第一版序文』なるものが、ドイツ原本第一版の序文と同一文でないことは、私の實に何度か繰返して證明したところである。然るを河上博士は『私はそれと全く逆に、それらが同一文であることは、一見すれば直ぐ知り得られる』と言はれる。成程、これでは、博士の言の如く『同じ物を指して、博士は黒でなく白だといひ、私は白でなく黒だといふ』のである。しかし、私は、此事實を以て『學界の混沌は、すでに極に達したといふべきである』などとは、少しも考へて居らぬ。河上博士は、兎に角、私のような微賤淺學な一學究が、何を何と云はうとも、其れが爲めに、學界が混沌せられるなどゝ、自惚れたことは、些も思ひ及んだことはないのである。『鬪爭者は能ふかぎりの對立をなし了へた』と博士は言はれる。私は鬪爭などをしてゐるものではない。唯僅か斗りの自分の吟味の結果を辛ふじて、たど〳〵しい文に綴つて、『改造』に掲載を乞ふて居るにすぎぬ。而も、私の文は、未だ、其本題に進入してゐないのである。對立などとは少しも考へて居らぬが、若し、これをしも、對立と名くべくんば、其對立は、これから初まるので、拙文（其二）丈けでは、對立にも、何にも、私が見て『河上博士等の最重要なる不正確文は誤譯』となすものについては、一言も觸れてはゐないのである。博士は其れを待つ面倒を省かん爲め、立上りをしない角力に對して『勝負あつた』と、行司を待たずに、關取自ら土俵の上で叫んで居られるのである。角力道にはそんな行儀はあるまいと思ふが、學界にそんな事が流行り出せば、其れこそ『學界の混沌化』とでも名づけ可きであらうか。

博士云ふ『殘念なことには……（略）それに附け込んで章魚の墨汁を吐くが如くにして、學界を混沌化せんとすることが、實に反動學派の窮餘の一戰術なのである』と。即ち博士長大篇着題の『モチーヴ』は、玆に在るのである。私は『反動學派』なる學派の存在を知らぬ。否、私は、三十年斗り前留學したときから、今日まで、實證的研

究、歷史的研究を生命とするといふ意味に於けるドイツの歷史學派に、最も近く身を置いて居る。必ずしも、歷史學派に屬するとは思つてゐない。其以外、私は、何の學派にも屬してゐない。又た私は、河上博士によつて、私と同學派に屬するものとせられた土方博士とは、如何なる意味にても、同一學派に屬してゐるとは思はない。土方博士の專攻は、財政學であり、私は、財政學については、殆んど門外漢である。また同博士の『マルクス價値論の排擊』は、たしかに一讀した。而して、少くとも、其書中に見へた限り、私は土方博士の所論に、贊同することが出來ない。私は、土方博士の論爭の相手たる舞出教授の論の方が、マルクスを理解する點に於いて、遙かに、多くの強みを有してゐることを信ずる。此事は、筆に上せて公言したことは、一度もないが、私の講義に於いては、二三回申述べて置いたところである。

『窮餘』とは、何事の謂か、少しも分らぬが、私は、何も少しも困ることはない。私は、自己の學問的興味の赴くが儘に、『改造』紙上に、彼の論文を登載して貰ふ可く起草したまでである。尤も、私が頂戴する月給の足らぬ窮餘原稿料稼ぎを爲す可く餘儀せられたとでも云ふなら『窮餘』は意味を成す。此れは別に公けに辯明する必要もないことであるから、其意味の『窮餘』なら甘受すべきであらうが、幸ひ、私には、背後に他の何人も居ないが、一人の老妻があつて、二人の子供と一人の老母とを愛護しつゝ、私の家計を私の月給で賄つて呉れてゐる。私の得る原稿料は、大學教授であり乍ら讀書の乏しいことを自慢とする勇氣を、生憎持合さぬ私は、第一に書物や雜誌の買入れ——其中には、隨分無駄なものがある。例へば河上肇、宮川實連名の（譯とも、閲ともなく）『經濟學批判』同本の廣告を見て、河上博士か共譯者である新本だと思料して、早速一本を買入れたら、其れは、嘗て二圓出して買つた宮川氏一人署名の譯本であつて、河上、宮川共譯と變更された其の『序說』何十錢と都合三册も同じものを買はされた、など、など、の例はいくらもある。——などなど、に費消してゐる。從つて、窮餘どころか、何も困却を感ずることはない。其れらを已めて仕舞つても、私は依然として、生きて行かれるのである。

だから、私は、別に『窮餘の戰術』などを講じたり、雜誌と著書とを、チャンポンにしたりする、必要を有たぬ。否、其必要があつても、私は『陣營だの』『戰術』だのとの戰さごつこは、比喩としても、これを考ふることは、大嫌ひである。

『章魚が墨汁を吐くが如く』は、私が、事實有りの儘を、既に何回となく申述べたので、讀者諸君は、之れが、むしろ、誰について言はるべきかを判ずるに苦まれないであらう。章魚の吐く墨汁などは、『カモフラージュ』中の最も簡單なもの、世の中には、毒素を滿々と盛つた爆彈を、平和な學界や、論壇へ比々として投下する軍略家乃至は、商略家もある。其れに何學派の窮餘の一戰術に屬するか、私は知らない。

唯、それがあること丈けは、確かである。

『對立者の何れが事實を事實とするか？　眼あるものは見よ』と博士は言はれる。私にも、其醉に和することを許されたい。

博士はいふ『茲に揭げた福田博士の論文は、もちろんのこと、土方博士の『マルクス價値論の排撃』でもその卷頭には、多くの頁がマルクス價値論の解說のために割かれてある』と。これは、亦、私に關する限り、事實相違である。私の論文には、卷頭に於て說き、其一)(其二)の何れの部分にも、未だ、マルクス價値論の解說などをした部分はない。これこそ『白を黑となす』ものである。

(十六)

ア、、私は疲れた、實に疲れた。讀者は、更らに一層然るであらう。しかし、博士の論は、猶以て縷々として盡きてゐないのである。ア、。仕方がない、讀者には災難とあきらめて頂いて、極く大急ぎに、跡始末をつけねばならぬ。

『フランス譯は、相當な珍本ではあらうが』云々。

私は、私の獨占物だなどと思つたこともなく、無論言つたことはない。――京阪地方には、六人も所藏者ありと、博士は敎へらる。後段記すマルクスの手紙によれば、初版一萬部刷とある。其内、千部や二千部は、今日でもヨーロッパには存するであらう。『最も藏書に乏しい』と名乘らるゝ河上博士さへ、『幸に一本を藏して』居られる。しかし、博士は、一頁斗り後には、『別にそんなことが幸福だとは思はぬが』と云つて居られる。幸だつたり、別に幸福と思はなかつたり、博士の感情といふものは、都合次第で、二三分の間に、容易に『全部書き變』られ得るものと見える。其の博士は、散々に私を罵倒された後、此邊に至つて、其感情を『全部書き變』へて、少くとも經濟學界にあつては、日本一の文獻學者だの、日本一の藏書家だのと、薄氣味の惡い御世辭を賜はつてゐる。私は、最も貧弱の藏書しか有たず、マルクス文獻に關する限り、たど〳〵しいものである。而してまた、其の考證も、極めてことに於いては――量の上でなく質の上で――私の知つてゐる狹い範圍内では、慶大の小泉、高橋兩敎授は無論として、商大の大塚、井藤敎、助敎授、神戸高商の八木、坂本兩敎授、小樽高商の手塚敎授、大分高商の梅田敎授など、更らに量質共に拔群なのは、在巴里の森氏、在米の朝河博士など、私如きの到底企て及ばざるところであると思ふ。

さて其の幸にか、幸でも何でもなくか、所藏せらるゝフランス譯本について、博士は、定價がいくらの何のと鑑定をして居られる。

日本に於いて實現し得る限りの最高限度に於いて資本論を發行することが、マルクスの遺志を最高度に尊重する所以とせられた博士が、定價調べの錢勘定をせられるのは、誠に忠實な所爲と云ふ可きだらうが、『この推定を助くる事由が今一つある』との重大な說き出しで、『一八七七年に發行されたフランスの圖書目錄』とかをあげて居られる。藏書に乏しいと云はるゝ博士には、珍らしいことである。これは、曾て、マルクスの資本重刷か、世上に流布してゐるにも拘らず、これを採らず、却つて、『帝大……藏』と云ふ或る度までの稀本を、共譯『賃勞働と資本』の底本とせられた前例を襲はれたものであらう。

何故一八七七年に發行された右の目錄か、此場合提出さるべきであるか。成程此のロレンツのカタローグは、昔しは、極めて調法なものであつた。しかし、經濟學に關するフランス出版の圖書總目錄は、今や誰も、これを認めて權威とするものが出來てゐるのである。『推定を助くる事由』としてあげるなら、經濟學の領域に屬する限り、佛國出版書については、先づ此の權威に據るのが當然である。博士の『目錄學』は、私共から見れば、甚だ『あぶなげ』を帶んだものである。

更らに、また、マルクス文獻に關する圖書總目錄としては、今日誰も先づ第一に指を屈するものが、チヤント出來てゐる。但し、此書は、今日のマルクス研究の現狀に對しては、慊らざる節なきにしもあらずである。しかし、今日現存のマルクス文獻一覽として人の能く知るドラーンののなどよりは、確かに勝つて居り、而して、今日までのところでは、此書の上に出づるマルクス文獻總目錄は、出て居らぬのである。〔故に大塚教授は、現に、非常の苦心を以て、出來るだけ完全なマルクス文獻一覽の作成に殆んど全力を傾倒して居られるのである。リヤザノフ氏の許でも、必ず遠からざる内に、廣汎なマルクス文獻總覽を作成すると云ふ話を、私は先年モスクヴアで、自ら承つた。〕

右の次第であるから、今日のところ、『推定を助くる事由』として、目錄の詮索をせらるゝなら、私があげた右二書を、先づ第一に擧げらるべきで——ロレンツの目錄は、旁證的に持出すことは結構である——ある。私は、かく斷言して、過なきものと思ふ。其二書とは、左の如きものである。

(1) Bibliographie générale des sciences juridiques, politiques, économiques et sociales de 1800 à 1925-1926, par A. Grandin. Paris, 1926.

これは、珍書でも稀本でもない。而して必ず京大圖書館に備せられてあんに相違ないと思ふ。否、法政經濟の學に從ふものなら、いかに藏書に乏しい人とて、必ず一本を坐右に置いて居るべき筈のものである。

其の第二卷八〇九頁第一欄に左の記入がある。

Marx (Karl)—Le Capital, traduction de J. Roy, in 4°. 1873. Lachâtre. 5 fr.

（2）Bibliographie des Socialismus und Communismus bearbeitet und herausgegeben von Josef Stammhammer. Jena. 1893.

此書も珍本でも何でもない。而して、社會主義に衣食する人は勿論、社會主義を多少なりとも研究する人の架上には必ず見出されなければならぬものである。

其の一四五頁第一欄に左の記入がある。

Marx, Karl.

—8. Le Capital. Traduction de M. J. Roy, entièrement revisée par l'auteur. 4°. Paris M. Lachâtre & Co. 1873.

右兩書とも、粗ぼ同一の記入を爲して居る。而して、定價の記入は、役者になく、前者にある。其記入は、河上博士の珍本たるロレンツの目錄と同じく五フランとしてある。ところが、兩書とも、刊年を一八七三年としてある。これは、無論誤りであること、カウツキーが言ひ、私も、私の論文に於いて、若干考證して置いたところである。

（十七）

河上博士は、世間流布の本をわざ〳〵避けて、珍本たるロレンツ目錄を持出され、其れについて、何サンチームの、何折のと、我々の眞似をして、考證的なことを陳列せられて居る。其れは何の爲めか『この書のフランス譯がこの日本譯と同じやうに分册で發行され云々』と同じ程度の小分册として出版され云々』について、『不正確』を承認して私の考證慾を幾分なりとも、滿足させて下さる爲めであつた。

しかし、其れでは、私の考證慾は、少しも滿足されぬ。滿足させるつもりで持出されたロレンツ目錄について、私は新たに一つの小さい不滿足を附け加へられた。しかし、其れは、兎に角として、抑も、分册發行のことを言はれるのに、何故フランス譯本の其れのみを言つて、マルクス自らの原本たるドイツ文第二版の分册發行のことを一言もせられないのか。此の事は、博士が、殆んど唯一の賴みとせらるゝカウツキーの序文にも認めてあるではないか。如何に考へて見ても、可笑しい。最廉價云々に熱中せられた餘り、其方にのみ氣を取られて、分册發行の全體について、忠實に事實、殊に本屋たるラシアトルの事でなく、マルクス自らさせたと考へられる第二版分册發行のことを、テント忘れて仕舞はれたのか。不相替、私には、腑に落ち兼ぬることである。

フランス譯の分册發行と、ドイツ原本第二版の其れとは、同時に始められ、——第一分册は、共に、一八七二年六月廿一日付、マルクス

書翰では、其次の週に刊行——而して後者は、日付は一八七二年とはなつてゐるが、實際は一八七三年の初めに刊行を了したが、フランス譯の方は、左樣に早く取り運ばず、三年後の一八七五年になつて、初めて最終册を發行したものと思はれる。河上博士が、ドイツ原本第二版の分册發行のことを默殺して、フランス譯の其れのみを綿密に紹介せられたのは、博士等の譯本が、ドイツ第二版のやうに、迅速に刊了し得られず、フランス譯本の其れの如くに、全部刊了までには三年餘りも要するであらうことを豫想せられたが爲め、例としては都合の惡しきドイツ第二版分册刊行のことを默殺されたのでもあらうか。

其れは兎に角、資本論のドイツ文第二版の分册發行とフランス譯本の其れとは、恰かも同時に始められたけれども、其刊了が一方は、迅速に、他方は、甚だ緩漫にのみ進行した理由は、ドイツ文第二版は、刊行着手に先つて、原稿は出來上つて居り、而してマルクスは、フランス譯校訂の際の經驗からして、ドイツ文第二版の成稿にも訂正を加へる必要を感じつゝ、ついに其れを實行せず、——其事は、河上博士等譯本一八頁『私は今や』以下にマルクス自ら陳述してゐる——成稿其まゝに、印刷刊行を進行したので、刊行に際してのマルクスの仕事は、單に、印刷の校正刷を見る丈けに止つてゐたが故に、斯く迅速に刊行を完了し得たものと思はれる。

其反對に、フランス譯は、ロアの譯稿は、刊行着手前に全部出來上つてゐたものと思はれるが、マルクスは、其印刷の校正刷を、一々ロンドンへ送らせて、其れについて、いとも念入に訂正を加へ——マルクスは、これを『惡魔の仕事』と名け、ロアの譯文を訂正するのは、自分自ら譯筆を取るよりも、遙かに、事面倒だと苦情を言つたと、メーリングは其『マルクス傳』三九二頁に記してゐる——訂正の濟んだ分丈けを刊行せしめたのであらうと思はれる。從つて、忙しいマルクスは、ドイツ文第二版の校正刷とフランス譯の校正刷とに責められて、ほとく困憊を極め、時には、校正刷を永く机上に放置したまゝであつたこともあるらしく想像される。

私の此想像を助くる文獻は、淺薄なる私の知る限り、唯だ左の一つがあるのみである。其れは、マルクス文獻一覽の著者エルンスト・ドラーンの著『社會主義的出版業並に勞働者諸新聞の發達及歷史ガウチ一九一三年刊』Ernst Drahn, Zur Entwicklung und Geschichte des sozialistischen Buchhandels und der Arbeiterpresse. Gautsch b. Leipzig. 1913. (Kultur und Fortschritt No 472/76) 三二頁以下に引用されてゐるマルクスのゾルゲ宛書翰である。今ドラーンの言と共に其れを摘引する。

Von der Korrespondenz zwischen Marx und Engels und dem

Meisnerschen Verlage ist leider nichts erhalten, wie die Firma freundlichst auf eine Anfrage mitteilte. Auch in den Veröffentlichungen der Korrespondenz von Marx ist eine grosse Lücke, da erst wieder die Briefe und Auszüge aus Briefen von Joh. Phil. Becker, Jos. Dietzgen, Friedr. Engels, Karl Marx u. A. an Sorge und andere (Stuttgart 1906) etwas über das Kapital enthalten, und hier ist es ein Brief Karl Marx' an Sorge vom 23 Mai 1872 aus London, der einiges enthält.

„………habe täglich die deutschen Korrekturbogen der zweiten Ausgabe des ‚Kapital' (sie wird in Lieferungen ausgegeben werden) und die épreuves der französischen Uebersetzung zu Paris (erschien 72 bei Lachâtre), die ich oft ganz umzuschreiben habe, um die Sache den Franzosen klar zu machen………Sie werden, deutsch und französisch, fortwährend Lieferungen von uns erhalten. In Petersburg ist eine vortreffliche russische Uebersetzung erschienen. "…………

Am 27. Mai 72 schreibt M. an denselben: „Ich bin ueberschwemmt mit Druckbogen……, die expediert werden müssen."

Und am 21 Juni…………„ Was mein Kapital betrifft, so wird die erste deutsche Lieferung nächste Woche erscheinen, ditto die erste französische zu Paris. Von der französischen Ausgabe sind 10000 Copien abgezogen und schon 8000, vor Erscheinen der ersten Lieferung abgesetzt………In die russische Oeffentlichkeit kam es (nach einigen Zensurschwierigkeiten) am 28. März und am 15. Mai waren schon 1000 Exemplaren verkauft.

Und am 27 Sept. 1877 „ ……Herr Uriel Cavagnati in Neapel bereitet die italienische Ausgabe des „Kapital" vor, er druckt auf seine Kosten und wird das Buch zum Kostenpreis verkaufen. Braver Mann."

右譯

『マルクス、エンゲルスとマイスナー出版店（資本論の出版者、在ハムブルグ）との間の往復書簡類は、不幸にも一も保存せられて居らぬ由は私が特に問合せたに對し同書店が、懇ろに返答せられたところである。マルクスの書翰を公刊したものにも、（此點については）一の大なる缺陷がある。資本論（出版）のことについて、或るものを含むものは、『ベッカー、ヂーツゲン、エンゲルス、マルクス等のゾルゲ其他に與へた諸書翰并に其の拔萃』（ストットガルト一九〇六年刊）である。其中に、ロンドン、一八七二年五月二十三日付でマルクスが、ゾルゲに送つた手紙がある。此手紙の中に、若干（關係箇所）がある。

『（前略）（私は）毎日、『資本論』の第二版（ドラーン註。此第二版は分冊で刊行された）のドイツ文の校正刷と、而して、巴里に於けるフランス譯（ドラーン註一八七二年ラシアトル發行）の校正刷とを有つ。（フランス譯の校正刷はフランス人に、分り易くする爲めに、私は、屢々全く書き改めなければならない。（福田註。私はマルクスの此言により、彼は、ロシア譯本の冒頭に、掲出されてある所謂第一版の序文——削り取りの序文——の「フランス譯文の序文を起草した」

ときには「(本誌十二月號三八頁下段)又は、「わざ〳〵序文まで起草して定本とし刊行するフランス譯が」(同上三九頁上段)と認めたのである。しかし、其れは、私の推定であつて、事實は序文の譯稿はロシアがこれを作り、マルクスがそれを訂正したのであるかも斗られない。しかし、日付の一八七五年は、(無論マルクスが承認したものと信ずる。)貴君は、右ドイツ文のも、フランス文のも、絶へず其の分册を、我々から(の寄送を)受けられるであらう。ペータースブルグに於いては、甚だ上出來なロシア語の翻譯が刊行されてゐる……(省略)』」

五月二十七日付のマルクスのゾルゲ宛書翰に曰く、「『私は返送を急ぐところの校正刷の洪水の中にたゞよつて居る。』

六月廿一日付……『拙著資本論については、ドイツ文本の第一分册は、來週刊行されるだらう、巴里に於けるフランス文の第一册も亦た同樣に。フランス譯本は、一萬部の註文があり、其中八千部は第一分册刊行前に、既に豫約濟である。ロシアでは(ドラーン註檢閲にかゝはる若干の困難の後に)三月二十七日に公衆の手に(ロシア譯本が)渡り而して五月十五日迄には既に一千部が賣捌かれた』(中略)

一八七七年九月二十八日『ナポリのウリエル、カヴアニヤチ君は資本論の伊譯版を準備してゐる。彼は自費出版をし、其譯本を實費で賣るそうである。健氣なる男よ』

マルクスの以上の諸手紙を見れば、私が、前段に想像として述べたことは、粗ぼ事實に近いことが、確められると思ふ。だから、フランス譯は文體の不均整を來たし、マルクスは、刊了後其の『讀者に告ぐ』に於いて、其事を明記したのであらう。其代り、ドイツ文第二版に加へんと欲して實現し能はざりし、幾多の訂正は、此のフランス譯には加へられて居り、殊に、其のフランス語は、ドイツの原文とは、殆んど別人の手に成るが如き觀ある流暢明快にして、而して甚だ分り易いものとなつてゐるのであつて、此點に於いては、恐らく、資本論の各版、各國語版(モリトル氏の近譯までも算入して)中、此のフランス譯本が、文章の上に於いては、最傑作と見ても大過ないものであらう。

――前掲の通行イタリア譯本は、此のフランス譯を底本としたらしく見へる。從つて、其本の文體も、極めて、流暢である――而して、マルクス自ら、其は一の獨立せる學問的價値を有すと云ひ、エンゲルスは、其第三版以後に、此譯本から、若干部分を取り入れ、カウツキーは更らに、エンゲルスの採り洩した部分を其民衆版に取り入れて、其爲めに、資本論の價値を增進せしめたと云はれて居る。私は、河上博士等の譯本が、タトヘ三年も四年も長引かうとも、此のフランス譯に於ける樣に、少くとも、正確、綿密、忠實の點に於いて、他國語譯本に勝るものとなり、又た文章の上に於いても、日本文として、此以上なきものとならんことを切望すればこそ、不正確、又は誤謬と思はるるところをあげて、博士たちの參考に供し、腑に落ち兼ぬる諸點を明

かにして、其の解明を希つたのである。しかるに、博士は、此度に限り、虚心坦懐、私の進言を容るゝことをなさず、却つて私の眞意を全く逆に取られて、事實の虚構の何のと、强辯的に、喧嘩を吹きかけられる。『賃勞働と資本』は、私の批評によつて、たしかによりよくなつて居る。此事は、博士も遥か後ではあるが、其序文に明記して、私に感謝されてゐる。（大正十年刊改譯序言三及二一頁）岩波文庫30の其重刷の此本の序によれば、同は、其の諸版を通じて三萬部以上も世に頒布せられた由。三萬人近くの右本の讀者は、私の『解放』第一號の批評あるによつて、よりよくせられた本を與へられてゐるのである。思ふに、河上博士は、今は、如何樣に、陳辯せられるとも、他日必ず、私の此度の進言を恐らく其全部を容れて、其の資本論邦譯を改善せられるであらう。而して何萬何十萬と云ふ右本の讀者は、私の批評によつて、學問上、より善くなつた資本論を手にせらるゝ日も遠くはあるまい。私はかくすることによつて、マルクスの眞を我日本に傳へることについては、河上博士等に劣らざる功績あるものと認められる日のあらんことを、窃かに自信するものである。――資本論引用の『經濟學批判』中の一節は、私の本誌上の指摘後、沈默の間に、私の言通りに、コッソリ改竄されてゐる。而して、岡本には、舊のまゝ。岡本及二岡本の一六頁、資本論の一一七頁の註――

河上博士は云ふ『翻譯が時を異にしてなされ、從つて、不均整なる注意をもつて遂行されることに缺點が伴ふといふことは、それ自身としては、資本論が定價の安い小分册に細分されることを喜ばない理由になるのでは決してない』と。この前段は、私の言つたところと違ひ、而して、（敢て『從つて』と云ふ）事實と間離してゐると思ふ。私は、ロアのフランス譯本は、翻譯が時を異にしてなされたものとは思はない。時を異にしてなされたのは、マルクスの訂正の仕事である。これは、前段の考證で、粗ぼ明かと思ふ、またマルクスの『讀者に告ぐ』の文中にも、ロアの翻譯が時を異にして、切れ〳〵になされたことは少しも言つてない。彼自らの訂正の仕事が切れ〳〵になされたことに伴ふ缺陷を自白してゐるのである。此點も河上博士の例の不正確の他の一例である。

從つて、私は、フランス譯と河上譯との間に於けるパラレルは、其善い方面よりも、其惡い方面の方が、より多く共通になるであらうことを虞れるものである。翻譯は成稿が出き上つてゐて、マルクスの訂正だけが、切れ〳〵に時を異にして爲されたのであつてさへも、マルクス公認の通り、不均整てふ缺陥あるを免れない。然るに、河上博士等の邦譯は、抑も、翻譯からして、新たに着手せられたので――而かも、慌々しくと見へる。昨年夏、岩波書店主人が、私を訪れての話に、高畠本以外に、資本論を邦譯するものはあるまいかとあつた。私は答へた。先以て、高畠本を、出來る丈け、改訂して、縮刷版を出すが、順序であらう。新に別譯本を作るには、少くとも二三年を要するであらうと。而して岩波文庫最始の發表のときには、資本論はなかつた――

『翻譯が出來上るに從つて印刷に附してゆく』ものだそうである。從つて、不均整云々の缺陷は、右フランス譯に於けるよりも、更らにより大となるかも知れない。または、ならぬかも知れない。が、兎に角、より大となる虞の方がより多いと思ふ。此點は、博士たちに於いて、絶へず念頭に置かれて、マルクスの『讀者に告ぐ』中の告白を、再演する必要のないよう、切に御注意あらんことを、マルクス資本論其ものゝ爲めに希望せざるを得ぬのである。

が、博士は、不均整てふ缺點を公認することと定價の安い小分册發行を喜ぶこととは、同一でないと云はれる。私も、私の論文に於いて分册發行と、日本に於いて實現され得る限りの最廉價とは、同一事でないことを申して置いた。而して、マルクスが喜ぶと云つたのは、分册發行のことのみで、二十錢とか一圓とか云ふ定價の大小は、右文中には、些かも言つて居らぬことを示めして置いたのである。

しかるに、博士は、其長大文を結ぶ一節に於いて云はれる。『資本論の日本譯が吾々の譯本の如く定價二十錢の小分册になつてゐることをたとひ喜ばない人があるにしても、それは地下のマルクスでないことを吾々は今もなほ確信する』

マルクスが、二十錢を喜んだか、一圓を喜んだか、否、抑も商品として賣出す資本論の定價のことについて、何と考へてゐたか、私の淺薄な見聞の届く限り、彼の心地を窺ひ知る可き文献は、見出されない。生きて居たときのマルクスについてさへ然り。地下のマルクスが喜ばないか喜ぶか、其れは私に於いては、絶對に推測だもすることを許されざることである。『博士は確信する』と言はれる。而して其の確信を支持すべき資料は、些もこれを示して居られない。從つて、其れは、唯、博士の『確信』であるに止つて、事實は、博士が、何かの都合上唯左様思はれるといふこと丈けに止る。

ところがマルクスが定價の安いことを喜んだ證文は、一も見出せないが、事實として、マルクス自らの原本たるドイツ文資本論の定價は決して安いものでなく、却つて當時の事情に照らして高いものであつたこと丈けは事實である。即ち、『資本論が發賣禁止を命ぜられなかつた主な理由の一つは（第一）内容が人好きのしないものであつたこと（第二）定價が割合に高かつたこと、從つて、其發賣を許しても、一般民衆は、これに近づき難いだらうから、敢へて差支あるまいと、時のドイツ官憲は考へた爲めかも知れない』云々とドラーンは前掲書第三十二頁に記してゐるのである。

右當時のドイツに比ぶれば、今日の日本は、兎に角餘程進んでゐる。定價二十錢と云ふ誰人にも近付き得る價で、何萬何十萬だか知れないが、大批生産的に、Schleuderware として、資本論の日本譯が賣出さ

れても、マルクスが遭遇した様な——殊に、其のロシア譯について——發賣禁止の脅威は、少しも見出されない。

河上博士の言によれば、一冊の定價で賣出すよりも二十錢で賣出す方が、地下のマルクスはより多くこれを喜ぶらしく見へる。若し然るならマルクスの『遺志』とかを最高度まで尊重せん爲めには、定價を十錢、五錢、一錢に引下げたら、尚宜しかるべく、殊に、今日迄の新聞紙上で拜見すると、恐らく二十錢本の何千部か、何萬部かに相當するだらうと思はれる廣告費を投じたらしい爆彈的廣告がなされてゐる。マルクスの遺志が、定價の安いことに存するなら、其を最高度に尊重する博士たちは、其の廣告を全廢せしめ、其何千部か何萬部かを、無代で勞働者の間に配布せしむべかりしではなかつたらうか。しかし、私は、度々申す通り、賣價についてのマルクスの遺志なるものを知らないから、此點『確たることは言ひえない』のである。

其反對に、明かに、マルクスの意志であつて、而して、河上博士たちの資本論について、其正反對の事が行はれてゐる事實を、私は知つてゐる。それは、メーリングの『マルクス傳』第三八八頁に記してある左の一事である。

Seine Hauptsorge blieb einstweilen der Erfolg seines Buchs.

Am 2. November 1867 schrieb er an Engels: „Das Schicksal meines Buches macht mich nervös. Ich höre und sehe nichts. Indes muss mans machen, wie die Russen —warten." ....

Die Ungeduld, die aus diesen Zeilen ausspricht, war sehr begreiflich, aber bei alledem nicht ganz berechtigt..

Sogar eine Bombenreklame nach den Begriffen der damaligen Zeit, die Veröffentlichung eines biographischen Artikels über Marx, sowie seines Bildnisses in der Gartenlaube, hatten sie (Engels u. Kugelmann) fertig, als Marx selbst sie bat, von dem "Spass" abzustehen. „Ich halte dergleichen eher für schädlich als nützlich und unter dem Charakter eines wissenschaftlichen Mannes. **Zum Beispiel Meyers Konversationslexikon hat mir seit längerer Zeit schriftlich eine Biographie abverlangt. Ich habe sie nicht nur nicht geliefert, sondern auf den Brief nicht einmal geantwortet. Jeder muss nach seiner Art selig werden."**

右譯

彼（マルクス）の主なる心配は、暫くの間は、彼の著書（資本論第一卷）の成果であつた。一八六七年十一月二日、彼はエンゲルスに書を送つて云ふ『私しの著物の運命如何は、私をして神經的なら

しめる。私は、(此本について)何物をも、聞かずまた見ない(中略)。しかし、我々は、ロシア人のするようにしなければならない——待つことこれである。』(略)

此等數行に言表はされた(マルクスの)待遠しさは、甚だ諒察すべきところである、しかし、それだとして、其の心理は、全く理由あるものではなかつた。

(中　略)

當時の考に從へば、福田註。今日から見れば何でもないことであるがの竊。爆弾(投下)的廣告と云ふべきものをさへ、彼等(エンゲルスとクーゲルマン)は、準備を整へてゐた。即ち『ガルテンラウベ』雜誌へマルクスの履歴を叙した一論説の公表、並にマルクスの肖像を掲出することこれであつた。(然るに)マルクスは、そんな『惡戯』は已めて吳れと、自ら申出した。(曰く)『私は其樣なことを、有益よりもむしろ有害と認める。而して學者としての品格を傷くるもの(原文、品格の下に)だと認める。例へば、マイヤーの百科字典は、久しい以前から、私に書を寄せて、私の傳記を求めてゐる。私は、其要求に應ぜざるは勿論、手紙の返事さへも出してゐない。人は、各其好む所(原文、其流儀)によつて、聖化せられねばならぬ』。

マルクスが、半生の心血を絞つて著作した其の『資本論』に對する世評について、焦慮してゐた光景は、宛として、眼の前に見るが如くである。自分が以著を盡くしただけ、それだけ、其の運命について、大なる關心を持つことは、凡ての努力者に共通なことである。彼は、其第二版跋文に於いても、ロシア譯本が、三千部殆んど賣切れとなつたと、我事の樣に、喜んで報じてゐる。(河上博士等譯本二五頁)マルクスは、世上の批評如何を案じたのみでなく、其本の賣行についても、少からぬ關心を有つてゐたのである。然るにも拘らず、彼は、エンゲルスやクーゲルマンが、資本論を宣傳せんが爲めに、爆弾投下的廣告を爲さんと企て其準備一切を整へてゐたのを、斷乎として拒絶し、其樣なことは、學問にたづさはる者の品格を傷つくるものなりと、切に中止を懇請したのである。

これが、實に、マルクス其人の正眞正銘の遺志で、夢枕に立つて告げられた託宣と違ひ、明かに、其遺志を開陳した彼の書面が殘されてあるのである。此點に於いて、二十錢本の何千倍か何萬倍かの廣告料を投じた爆弾廣告——而も、私信を、廣告文に、降格までさせて——更らに、僅かに、一箇條の不審にかゝわる私への反駁文の廣告にも二十錢本の何十倍か何百倍かの費用を投ずる戰術廣告を承認する河上博士は、明かにマルクスの意志を、最高度に於いて、無視し、學者としての品格以下なることを、公けに承認して居られるのである。私は、唯此事を記録して置く。是非の評言は、これを下さない。唯だ、此事はたとひこれを喜ぶ人が、他にいくらあるにしても、『それは、地下のマ

ルクスではないことを』私は、心底から確信するものである。

（十八）

終りに、博士の追記について、一言する。事は、abstrakt menschliche Arbeit の譯出に關し、而して、博士の結論は、要するに、私が『ドイツ語第一年生も、これを知つてゐる文法だけを持出して、それ以上の文法に對する無智を裝つた』といふにある。

私は、ドイツ語には、唯一つの文法しかないものと思つてゐる。文法書には、初等、中等、高等などがある。文法其ものには、其んな種類はない。從つて、ドイツ文法に第一年生文法の、其れ以上の文法のなどの種類あることを知らない。私の多少知つてゐるところのものは、其の單一なるドイツ文法だけである。其以外の何物をも知らない。知らないものは、有智も無智も裝へるものではない。無智を裝ふことは、宜しくないことである。其れと共に、ありもせぬ高等文法とかの『有智を裝ふ』ことも、亦宜しくないことと思ふ。

しかし、博士は、此度の追加文によつて、其資本論序文中に於ける、長々しい說明の如何に無用なものであつたかを、私の論じたよりも、遙かに有力に、自ら擧證せられた。即ち

（一）『カウツキー版三九頁には abstrakte menschliche Arbeit とあり、同一五四頁には abstrakte gesellschaftliche Arbeit とあるが、それは abstrakt menschliche Arbeit と全く同じものを指すことは、何人にとつても疑ひあるまい』

成程これは、マルクスの手で刊行された第二版原本にも、其通りある。即ち前者は、其の五三頁十行目に、『生格に置かれて Verkörperung abstrakte menschlicher Arbeit として出てゐる。後者は、其の一八九頁第二十二行に abstrakte, gesellschaftliche Arbeit überhaupt と abstrakte と gesellschaftliche との間に『コムマ』が施されて出てゐる。

即ちマルクス自ら或は abstrakt menschliche Arbeit とも或は abstrakte menschliche Arbeit とも書いてゐるのである。カウツキー序二四頁によれば、マルクスの訂正草稿には "abstrakt" を "schlich" と直してさへ（一三頁）あるそうである。

然れば、e 一字の無いことが、方法論亟大な意義を有つ云々の管々しい博士の解說は、全く無意味に歸する。マルクス自ら e 一字の有無を、些も頓着せず、時ありては、e あり、時ありては e なしに認め、而して博士によれば『兩者は全く同じものを指すことは何人にとつても疑ひ』ないのである以上、私が、博士の管々しい講說にあらわれた敏感性は、『あわれマルクス自らによつて嘲られた如く見へる

も、笑止とこそ申すべきであらうか』と申したのは、博士自らの考證によつて、愈々確められてゐるこそ、更らに、益々笑止とこそは云ふ可けれであらう。

而して、博士は『吾々の試みたこの譯語（抽象性に於ける人間勞働）を固執しようといふのでなく、或は、『抽象的であると同時に取りも直さず人間的である勞働』とでも譯すべきであるかも知れない』と云つて居られる。

私は、私の論文に於いて、マルクス訂正のロアのフランス譯では、右一句は、le travail humain abstrait となつてゐることをあげた。

通行本イタリア譯は、ドイツ版第二版でなく、ロア譯のフランス譯を底本としたものと見へることは、前に言つた。其れには、abstrakt menschliche Arbeit も abstrakte menschliche Arbeit も、何れもロア譯の le travail humain abstrait を全く其まゝに lavoro umano astratto としてある。即ち右譯本二〇頁、二六頁、四一頁何れも然りである。而して河上博士のあげられたカウツキー本一五四頁の處は、ロア譯には travail humain en général（八十六頁）となつて居り、伊譯は lavoro umano in genere（一四八頁）としてある。

通行露譯本（書名前出）では、左の通りになつて居る。

カウツキー本		露譯本
Abstrakt	一七頁	一七頁 абстрактный человѣческій трудъ
	二四頁	二五頁 абстрактнаго человѣческаго труда
Abstrakte	三九頁	四二頁 абстрактнаго человѣческаго труда
	一五四頁	一六五頁 абстрактный, общественный трудъ вообще.

即ち、『主格』にても、『生格』にても、абстрактный（抽象的）、は名詞 трудъ（勞働）が男性であるに應じた男性の語尾を有つ形容詞であり、一六五頁の общественный（社會的）も同様であつて、而し兩者は、『コムマ』によつて分たれてゐるのである。

河上博士の例にあげられたカウツキー本三五頁の sinnlich übersinnliches Ding は、ロアのフランス譯では à la fois saisissable et insaisissable となつてゐる。（二八頁）伊譯本もまた、palpabile a un tempo e impalpabile（三七頁）となつてゐる。兩者何れも、『及び』で結付けられた形容詞である。

ロシア譯には、（第三七頁）左の通り。

онъ превращается въ чувственно-сверхчувственную вещь（女性・單數・對格）

私は、此のロシア譯が、最もドイツ原文に其まゝ忠實である樣に思ふ——少くとも、英獨伊佛の通行譯本に比較するときは——而して、其れには右引く如くに、『チユヴストヴイエンノ』(感性的)は、簡單語尾(又は斷尾)(此場合(о)) と云ふロシア語特有——と思ふ——の、格の變化なき形容詞(これを副詞の形ちに於ける形容詞と云ふ。此形は、其まゝ、中性單數で副詞に適用される)を用ゐ、次の『超感性的』は、完全語尾此場合(ую)を有つ形容詞『スヴイエルフ・チユヴストヴイエンヌユ』を用ゐ、而して、此兩語を、結付くるに、『ハイフエン』を以つてしてある。ドイツ語——客語たる形容詞の變化の有無は別として、佛伊語も——には、此の簡單語尾形容詞と云ふ調法な形ちがないから、abstrakt, abstrakte の問題が生ずるので、もし、マルクスの原文が、ロシア語であつたら、河上博士と私との間の此問題は、初めから起らなかつたらうし、また、方法論上重大な意義云々の河上博士の說法は、考へ付かれなかつたらう。殘念千萬なことである。しかし、右ロシア譯の他の一つの例は、ドイツ語にもこれを、應用することが出來る。即ち sinnlich と übersinnlich とを、別々にせず、兩語の間に、『ハイフエン』を置くこと、これである。——但し、私のロ語の智識は、第一年生にも到らないことを、諒し置かれたい——

ドイツ文としても、實は、左樣した方が、穩當であるのである。其れなら、誤解は、起らない。唯マルクスは、自家の好みによつて、sinnlich-übersinnliches Ding とせず、二語を、別々に置いたのであらう。abstrakt menschliche Arbeit も abstrakt-menschliche Arbeit とすれば、何等の間違もなく、abstrakt は、右ロシア譯文の『チユヴストヴイエンノ』と同じに、副詞形態に於ける、簡單語尾又は斷尾形容詞たることが、明かにせられ得る。——但し、河上博士の『高等文法』には、如何あるか、私は、それを知らない——而して、一切の誤解を免れ得ると思ふ。『ハイフエン』なくしては、文法上は、其れは、一年生に取つても、河上博士の如き高等科生に取つても、副詞と認むる外はない。而して、マルクスは、必ずしも、其用法を一貫せず、abstrakte menschliche として、兩語とも、明かに、形容詞たることを示してゐること、河上博士の示さるゝとほりである。

マルクスは、第一版附錄に於いては abstrakte とかいてゐること、河上博士の示されたとほりである。(博士論文四二頁)しかし、例へば、同附錄七七〇頁には四五ケ所も、『生格』で abstrakt menschlicher Arbeit となつてゐる。マルクスは、すでに、其附錄に於いて、e 無し、e 有りの兩用法を混用してゐたのである。

博士は云ふ『「それだけの敏感性は、マルクスは、他國語への翻譯において必ずしも要求しては居らぬのである』は滑稽である。(中略)な

ぜなれば、（略）資本論の原本そのものゝ中に abstrakte menschliche Arbeit なる言葉が見出されるからである』と。然り、博士が此の大發見によつて博士の譯本の序文四頁終二行から五頁第七行までに述べられたことが全然無用なペダンテリーであつたことが、愈々、確實に而して美事に決定せられたのである。そこには方法論上重大な意義――形式論理における抽象との區別――が含められてゐるなら、abstrakte としたマルクスは、方法論上此の重大な意義を沒却し、または、無視した者となる。地下のマルクスは言ふかも知れない。畏るべき方法學者プロフエツソル・カワカミよと。

かくて、無用なる詮索立て、滑稽に近いペダンテリーによつて、ただに、マルクスを眞によく理解することに努めざるのみならず、有り餘り過ぎるかの如くなる知識により、何とか彼とか之を曲解せんとし、その人自身が如何に意識しつゝあるかに拘らず、『客觀的には、人類科學的認識の發展を阻害しつゝある』の日本一の戰術の大家よりも、更に何にも、我々方法論に無學無知な非哲學的俗學者の方が、マルクスの眞を理解すること、聊か勝れてゐることが確められたのである。『驚くべきことである』ではないか。

博士仰せの如く、時正に寒に向ふ。私は、今伊豆の海岸、梅三分、四分咲き初めたる暖き地にありて、此文を認め了る。腕くらゐは寒からしめられても、敢て厭ふところではない。京都の地獄山の麓こそ寒熱共に烈しと聞く。博士に望む。幸に自愛されんことを。

（一月五日稿了）

此稿、校正は、自ら念入にしたつもりであるけれども、元より、誤植無きを保し難し。其は他日、正誤すべし。博士に望む。誤植の利用は、一回限りで御勘辨願ひ度し。（一月十一日追記）

福田氏論文アリストテレースの「流通の正義」(其一 其二)正誤表

(十二月號)「(其一)

頁—行	誤	正
三四上—一	ば前者に於けるよりも	は前者の説明に於けるよりも
三四下—一一	河上氏譯本六〇頁から	河上氏譯本六〇頁第三行から
三五上—三	三五頁第一項	三五頁第三項
三六下—八	私は一八七一年の秋、他の	私は一八七一年の秋・他の
三七上—一二	le Calital	le Capital
三七上—五	衆版序中	衆版序文中
三七下—七	遙かに重要な此の	遙かに重要な彼の
三九上—二	刊行するフランス譯が、	刊行するフランス譯と、
三九上—一 八及び九	として、一八七二年春から一八七五年春までに刊行したフランス譯本は別に	として一八七二年春から一八七五年春までに刊行したフランス譯本は、別に
三九上—一〇	刊行の記載なき故	刊年の記載なき故
三九上—一六	ではあるまいが。	ではあるまいか。
四一上—一四	略に附することは他の點からは、如何に川意の周到を	略に附することは、他の點からは如何に用意の周到を
四一下—一二	草稿にもこれを加へたもの	草稿にも、これを加へたも
四二上—四	であることを述べて左様に斷言してゐる—	のであることを、述べて左様に斷言してゐる。—
四二下—九	不可解である。	不可解である。
四三下—二	た解釋を正しいものと	た解釋を、正しいものと
四三下—五	第二版とも同一の	第二版と同一の
四三下—一五	如何樣ありとも	如何樣であらうとも
四四上—四	有つか、否かは一概に	有つか否かは、一概に
四四下—七	私は、先つ、	私は、先づ、
四五上—三以下	原本第一版の序文云々	原本第一版の序文中の一節—此文カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし—を載せざる點に於て、原本第一版序文とは、著しく異るものである。
四五上—四	—此文云々—	倒る
四五上—一八	plus profond. Pourqoui	plus profond. Pourquoi
四五下—八	qui contient l, analyse	qui contient l'analyse
四五下—七	perdre dans leminustios	perdre dans lesminusties, ce sont en effet et necessairment des minuties,
四五下—一五	商品の解剖についての部分	商品の解剖を含む部分
四六上—五	到達し得たに止まる。	到達することができたので

頁・行	誤	正
四六上—最終	ト此の書は、原本第一版にも第二版跋文中にも見出されず、而して、	あつた。即ち、私が開題文として擧げた一條は、このフランス譯に掲げられた原文第一版序文中にも第二版跋文中にも見出されず、而して、
四八上—欄外	The Ethics of Ari t tle ill trated	The Ethics of Aristotle illustrated
四九下—一三	von der distributiven	von der distributiven
四九下—二〇	Entwickel ng	Entwickelung
四九下—二一	unddies	und die
五〇上—一	L ipzig 1921	Leipzig 1921.
五〇上—二	Steuerfähigk it	Steuerfähigkeit
五〇上—一五	Nicomacheatransla	Nicomacheas transla-
五〇上—最終	士院版	士院版
	(一月號)(其二)	
七二下—四	四六頁上段第一行	四六頁上段最終行
七四上—八	悪なき能はざるのである。	悪なき能はざるものである。
七四上—一五	何の斷りかきなしに	何の斷りがきなしに
七六下—一	東京日々紙二年十一月七月所掲	東京日々紙二年十一月七日所掲
七七下—一五	決めて當然	極めて當然
七八上—八	Das Ideelle	Das Ideelle
八〇上—一八	qu'il Personnifie	qu'il personnifie
八〇下—一	que la frome	que la forme
八一下—一六 割註	但し博士たちは、高 本を眼中には置かぬと辨ぜられるで	但し博士たちは、高畠本を眼中には置かぬと辨ぜられるで
八二下—一〇	私は左様は思はない。	私は左様には思はない。
八三下—一四	負ふべき何ものを有つものは、	負ふべき何ものかを有つものは、
八三上—六	abstrait ement	abstraitement
八五上—二	洞察してゐる 彼は	洞察してゐる。彼は
八九下—一	假か第三に、正義たる	假かに第三の正義たる。

追記。訂正洩れの分は他日掲出する。

大衆講座

辨證法的唯物論

山川均

(一)

昔、ある哲學者は、『我れ考ふ、故に我れ在り』と云つた。しかし日常の體驗はむしろそれとは反對に、私が考へる先きにまづ私の肉體が在り、私がもはや考へなくなつてからも、なほ或る時間のあひだ、私の肉體の在ることを思はせる。私はいま風をひいて寢床の上にある。私の體溫は、わづか一度ばかり、平溫よりも高い。この僅かな肉體上の差し障りは、この講話を書くことをさへも、非常に困難にする。平素の三倍四倍の努力をしても、なかなか考へが纒まらぬ。これは私の精神作用が、直接に、私の肉體組織の制約を蒙つてゐることを思はせる。もし私の風引が肺炎に急變し、四十度以上の發熱を伴ふたなら、私の意識は朦朧となるだらう。この時、心臓のはげしい痲痺を起こしたなら、私はもはや、考へなくなるにちがひない。しかし私の肉體が火葬場に送られるまでには、法律の命ずるところに從つて、少なくとも二十四時間は、なほこの寢床の上に安置される。そこで私の肉體の一生涯には、少なくとも二十四時間のあひだ、我れ在り、然しながら我れ考へざる時期がある。かように私の肉體は、私が何事をも考へない前から、母親の胎内で生成しつゝあつた、そして私がもはや考へなくなつてからも、なほ或る時期の間は殘つてゐる。これに反して、私の精神作用の全生涯中には、たゞの一瞬間も、肉體の無かつた時期はない。

ちようどその通りに、この世界のうちには、**物質は精神なしにも存**

在してゐるが、物質なしに存在してゐる精神といふものはない。のみならず、廣さから云へば、精神と名づける現象は、この世界のほんの一角に現はれてゐる現象であつて、また時間の上から云へば、精神作用はこの世界の生涯の、ほんの最近の一瞬間に現はれた作用にすぎぬ。たゞこの地球のみについて考へても、いかなる生物も存在することのできない狀態のうちに、悠久の歲月が經過した。そのうちからぼつ〳〵と生物が現はれ、この生物のうちから、考へる作用をもつた人間が現れた。そこでこの世界の根元は、精神ではなくて物質であり、この物質が或る一定の組合せになると、こゝに初めて、精神と名づける作用を起こす。物質が或る一定の複雜な結合狀態をとると、無生物が初めて生物になり、刺戟に對する反射作用や、外界に對する無意識的な順應のような、精神の芽生えともいふべき作用を起こす。ところがこの物質が、さらに複雜な一定の結合狀態をとると、これらの作用が意識化され、こゝに初めて精神と名づける現象が起こつてくる。

　であるから、物質の世界と精神の世界といふ、二つの世界が並んで在るわけではない。そしてその一方が他方を――即ち物質が精神を、ないしは精神が物質を――支配してゐるといふわけではない。精神とは、或る條件の下においての、物質の作用である。吾々は便宜のために、物質界と精神界とを區別したり、時としては自然と精神とを對立せしめることもあるが、人間が自然の一部であるように、精神的な精神もまた、この物質的な自然の一部である。世界をかう見るのが、哲學上の唯物論――特に一元的な唯物論――である。

　これと反對に、この世界の眞實究極の實在は、物質ではなくて精神だといふ唯心論がある。

　唯物論は、外界の探求から發足し、唯心論は自分自身の心の働らきの內省內觀から出發する。後者は眼をつむつて世界を見ようとし、前者は、眼を見開いて世界を見ようとする。唯物論にとつては、外界は人間の心から獨立して存在する客觀的な實在であるが、徹底した唯心論にとつては、眞實に在るものは、たゞ現に考へつゝある自分の心であつて、外界は吾々の感覺に映じた幻影にすぎないものである。でなくとも、かりに外界は、客觀的に實在してゐるものと認めるにしても、その實體は吾々には分らない。吾々が感覺によつて知ることのできるのは、たゞそのうわべの現象にすぎないものなのである。

　これに反して唯物論によれば、吾々の心のそとに眞實の實在があるばかりでなく、吾々が感官を通じて理解する世界こそ、即ち眞實の實在であり、客觀的の眞理である。それ以外には、實在もなければ眞理もない。もちろん吾々は、この絕對の眞理を知りつくしてゐるわけではない。また知りつくすことは出來ぬ。かような意味では、吾々の心の働らき、即ち吾々の理解は制限せられてゐる。であるから、吾々が理解してゐるものは、相對的の眞理である。しかしこの相對的の眞理は、絕對的の眞理とかけ離れたもの、または正に對立したものではない。吾々の理解力は制限せられてゐる。しかし制限せられてゐるとい

ふ意味は、客觀的な實在、絕對の眞理は、或る地點までしか人間の理解の力が屆かない、それから先きは、知るべからざる世界だといふ意味ではない。科學的研究の進む一歩ごとに、人間は絕對の眞理に近づいてゆく。

かように唯物論は、人間が意識してゐる時でも意識してゐない時でも、この意識とは獨立して客觀的な實在、客觀的な眞理の存在することを認める。たとへば人間が、そして人間に心が在る前に、この地球が存在して居つたといふ自然科學の主張は、たゞ單に吾々人間の經驗を組織だてた普遍的に妥當な觀念なのではなくて、現に人間の經驗にお構ひなく、地球が存在したといふ現實に一致してゐるから、初めて客觀的な眞理なのである。これに反して、或る宗教上の信仰は、數百年數千年に亙る人間の經驗を組織だてたところの、從つて普遍的に妥當な觀念ではあらうとも、客觀的な眞理ではないのである。

極めて大ざつぱに云へば、唯物論は世界をかくの如くに見る。そして辨證法的唯物論、または唯物論的辨證法は、その言葉がこれを示してゐるように、哲學上では、かような唯物論の上に立つてゐる。

(二)

唯心論と唯物論とが、哲學上で久しく對立して來たように、この二つの見地は、社會觀の上でも對立する。

世界のうちに、謂ゆる物質と精神とがあるように、吾々の社會生活のうちにも、物質的な現象と精神的な現象がある。世界のうちに占める精神現象の割合は、極めて僅かであるが、社會生活のうちに占める精神現象の割合は、はるかに大きなものである。社會は人間の集まりであつて、これに參加するすべての個人は、めい〳〵に自分の精神の配け前を携帶しないものは、一人もないからである。そこで社會の場合には、精神といふ現象が、一そう著るしく目立つてくる。

この人間社會の基礎をなすものは、精神なのか物質なのか？ 社會の精神的な存在の上に、物質的な存在が乘つかつてゐるのであるか、それとも物質的生活の基礎の上に、一切の精神生活が築づかれてゐるのであるか？ これに對しても、唯心論と唯物論とは、全く正反對の答へをする。

社會を形成する個人の意識、思想、感情によつて社會の意識、思想、感情が形造られる。そしてこの精神に照應した生產と分配との關係や、その他の一切の物質上の社會生活が現はれる。であるからまた思想の變化が、社會の變化する原因なのである。人間が封建的に考へたから、社會は封建制度の形を取り、資本主義が人間の觀念であつたから、社會は資本制度の形を取つた。これが唯心論的な社會觀であるが、唯物論的な見方は、これとはまるきり反對で、人間は意識するように生活するのではなくて、社會的存在が、即ち、どのような社會生活をするかといふことが、その意識を決定するものだと主張する。

唯物論的に見た人間の社會とは、自由自在に翔け廻はる思想や觀念

の舞踏してゐるところではなくて、それは究極においては、人間が自然のうちから生存の資料を取り出すための勞働の組織であり、生産の組織である。であるから、自然を一定のものとして見れば、生産の道具と技術とが、この勞働の組織であるところの社會の形態を決定する。弓と矢が主たる生産の道具であつて、狩獵が主たる生産の方法だつた時代には、それ故に社會は、原始的な共産制度の形をとつた。そしてこれに照應した人間の意識を伴うた。その通りに、精巧な大規模な機械が主たる生産の道具となり、工場生産が主たる生産の樣式となると、初めて社會は資本主義社會の形を取り、そしてこれに照應した精神上の文化──資本主義的文化──が現はれた。

かやうに唯物論的見地からすれば、社會はその存在のために、どのやうにして、どのやうな方法で、自然のうちから生存の資料を取り出すかといふことが、その社會がどのやうな社會であるかを決定する物質的基礎なのであつて、これが人間の意識を決定し、人間の思想を決定し、これがその社會の一切の精神上の文化を決定するのである。

辨證法的唯物論は、哲學の方面で唯物論の上に立つやうに、社會觀においても、同じく唯物論的見地に立つ。

（三）

かやうに世界は──自然界ばかりでなく、人間社會をも含めて──吾々の意識や觀念にのみ存在する幻影ではなくて、吾々の意識の外に、吾々がそれを意識する時も意識せぬ時も同じやうに、現實に在るところの客觀的な實在である。

のみならずこの實在の世界は、たへず變化する世界である。かつてはこの宇宙間の萬物は、開闢の初めから今日にいたるまで、現にあるがまゝのものとして、少しも變化しなかつた、それは太初に──恐らくは神樣によつて──現在の姿で造られたものだと考へられてゐた。現に植物學者リンネーは、現在この地球の上にある無數の植物は、一定不變の種類として神が造つたものだといふ考へで、その分類を試みた。

しかるに現實の世界は、たへず變化し變動する。この宇宙間には、一定不變なものは一つもない。吾々の知る最も大きなもの──この太陽系は、驚くべき速度をもつて動いてゐる天體の結合である。その如く、吾々の知る最も小さなもの──物質の原子は、廻轉する電子の集合體である。すべてのものは動いてゐるばかりでなく、動いてゐると共にたへず變つてゐる。今日、生物を滿載してゐるこの地球は、かつては氷で蔽はれてゐた。その前には流動體であつた。もつと前には瓦斯體であつた。今日もまた、地球は變化をつゞけてゐる。すべての山は、だん／＼低くなつてゐる。現在の海底がかつては陸地であつたやうに、今日の陸地も、海岸線の不斷の變化によつてたへず變化しつゝある。この地球の上の生物──動物も植物も、一つとして一定不變のものはない。私自身もまた、たへず變化する。私は母親の胎内に發生

し、成長し、成熟し、老衰し、死滅するばかりでなく、この講話を書いてゐるうちにも、たへず變化しつゝある。一時間前に私を形成してゐた細胞と、一瞬後のそれとは、決して精密に同じものではない。それは新しい物質の攝取と、舊るい物質の排泄とによつて變化しつゝある。私は私の一生涯を通じて、同一人たる私であり、同時にまた、同一日の朝と晩との間にも、私は決して同一の私ではない。

かように、すべてのものは絶えず變化する。いかなるものも、固定したもの、出來上がつたものではなくて、變動しつゝあるもの、生成の過程にあるものである。であるから、吾々の認識の對象となる一切のものは、一定不變の固定した物ではなくて、過程である。

私はこの萬年筆を、昨日も今日も、同じ萬年筆として取扱つてゐる。これはこの萬年筆の實用の上では、同一の萬年筆と見做して何らの差支へもない。しかし實際には、今日の萬年筆は、精密に昨日の萬年筆ではない。かように吾々が、同一のものと見做してゐるものが、縱には絶えず變化する過程の或る瞬間々々であつて、すべてのもの、すべての現象が變動の前と後とにつながつてゐるように、吾々が或る一つのものとして、その他のものから區別してゐるものは、横には、その他の一切のものと、離すことのできない關係をもつてゐる。いかなる物、いかなる現象も、その他の物、その他の現象から孤立してゐるものはない。たとへば、こゝに一脚の古椅子が立つてゐる。この古椅子が立つてゐるといふことは、決してそれ自身で、孤立して在るところの現象ではない。それは地球の引力との關係において、空氣の壓力との關係において、床板の抵抗力との關係において――そして究極においては、椅子以外のすべてのものとの相互關係において――いまこのところに見すぼらしく立つてゐるのである。

すべてのものは、いかにそれが小いさなものであらうとも、この無限な宇宙の一部である。であるから、この無限の宇宙のあらゆる部分と、切り離すことのできない關係をもつてゐる。すべてのものは、獨りで在るものではなくて、その他の一切のものとの相互關係においてのみ在るものである。

かように吾々の認識の對象たる客觀的な現實は、絶えず變化してゐる過程であり、かつその他の一切のものとの相互關係においてのみ在るものである。であるから、すべてのもの、すべての現象は、靜止し固定したものとしてゞはなくて、不斷に變動しつゝある過程として理解せられた時に、初めて眞實に理解せられたものである。次にこれらの現象は、互いに孤立した個々の現象としてゞはなくて、切り離すことの出來ない關係をもつものとして、即ちその他の現象との相互關係において、全體的に理解せられた時、現實のまゝに理解せられたものである。そしてかような客觀的な現實と一致した理解が、即ち辨證法的に理解することである。

自然界から人間社會に移つても、これと同じであつて、社會は決して固定した一定不變なものではない。これは人間の歴史のうちに、いろ／＼の社會形態のあつたこと、また現にあることによつて明らかである。吾々は少なくとも、二千年以前から、日本人の社會が、繼續的に存在してゐたことを知つてゐる。しかし二千年前の日本人の社會は今日吾々が生活してゐる日本人の社會と同一の社會ではなかつた。それは同一でないばかりか、多くの點において、むしろ似てもつかないものだつた。これは必ずしも、二千年の昔に溯ぼつてみるまでもない。百年前の日本人の社會は、多くの小支配者に分割されたいはゆる封建制度の社會であつた。百年前には、これらの小支配者を征服した大支配者を戴だく專制國家が現はれてゐた。鋤と鍬とは主要な生産の道具であつて、社會が自然の中から生存の資料を取り出す主要な方法は、農業であつた。であるから土地を支配した者が、あらゆる社會生活をも、絶對の權力をもつて支配して居つた。農民は、牛や馬が農耕に必要なと同じ意味において必要なといふ範圍で尊重された。手工業は漸次に發達はしてゐたが、まだ主要な生産の方法とはなつてゐなかつた。であるから、工匠は、支配者によつて、百姓や牛ほどに重要視されてゐなかつた。一般に、まだ自足經濟が行はれ、支配階級の權力も、この基礎の上に立つてゐた。商人と商人の資本とは、そこゝにこの障礙を食ひ破つてはゐたが、商人を無用有害なものとする思想は、また完全に殘つてゐた。

これは今日吾々の生活する社會——工業が主要な生産の方法となり、大小を差した武士が反身になつて濶歩する代りに、大資本を擁した資本家とその旗下足輕が自動車を疾驅する今日の社會——とは、まるきり違つた社會である。ひとり生産の技術や方法や、これに基づく經濟生活の關係が違つてゐるばかりでなく、政治の形態も全く違つてゐる。法律も違つてゐる。何が善いことで、何が惡いことであるかといふ、道徳の内容すらも同じでない。人情、風俗、日常生活の習慣までも違つてゐる。

このほか人間の歴史のうちには、血族關係で結びついた、小ひさな社會もあつた。青草と水とを逐ふて、家畜の群れと共に漂泊した社會もあつた。その他のいろ／＼な形態の社會があつた。かように自然界に、靜止固定したものは一つも無いように、人間の社會も靜止固定したものではなくて、その組織と秩序と形態とは、たえず變動する。それはすべての物と同じように、起原があり、生長と發達があり、また衰頽と滅亡とがあつた。それは自然界のあらゆるものと同じように、同形のものではなく、流動し流轉する過程にほかならぬ。

かように、互ひに異つた二つの社會は、自然との關係を異にし、生存の方法を異にし、その組織と構造を異にし、その政治上、社會上、思想上のあらゆる形態を異にするばかりでなく、從つてまた、この二つの異つた社會は、異つた社會法則によつて支配せられてゐる。そこで先づ第一に、おの／＼の社會形態を眞實に理解するためには、その

他の社會形態とは異つた特殊の性質をもつものとして、即ちその特質を理解しなければならぬ。たとへば經濟學者は、資本とは、過去の勞働の結果を、新しい生産の目的に振り向けたものだと云ふ。この定義によれば、資本主義社會における三井や三菱や安田の金融資本も、久原の工業資本も、鈴木の商業資本も、蒙昧人の手にある弓と矢も、同じく一樣に資本であつて、その間に何らの相異もない。けれども近代資本主義社會の特徴的な現象としての資本と名づけるものは、これと全く異つた社會形態、即ち原始共產社會に現はれた弓矢とは、全く異つた特質において理解せられた時、初めて眞實に理解せられたものである。

かように吾々は、たとへば封建社會の倒れたあとに、全く性質を異つた別個の社會たる、資本主義社會の現はれたことを見た。この二つの社會は、異つた法則によつて支配せられる異つた社會である。けれどもそれと同時に、封建社會に代はつて資本主義社會が現はれたといふことは、封建社會といふ鑄型で鑄造された一定不變な固まつた社會が忽然として姿を消し、そのあとに、今度は資本主義社會といふ鑄型で鑄造された、一定不變の固まつた社會、完成された別個の社會が忽然として立ち現はれたわけではない。人間社會は、一つの社會形態から他の社會形態に變化するように、これらのおの〳〵の社會形態のそれ〳〵もまた、決して不變なもの、固定したもの、出來合ひのものではなくて、絶えず變化し、絶えず生成してゐるもの、即ち形成の過程にあるものである。吾々は封建社會と區別して、吾々の社會を資本主義社會と名づけてゐる。しかし資本主義社會は、いつでも同一の資本主義社會であつたかといへば、決してそうではない。それは不斷に變化を遂げてゐる。たとへば、吾々は明治維新から今日にいたるまでを、總稱して資本主義の時代と云つてゐる。けれども明治維新の直後には、なほ微弱な商業資本が現はれてゐたにすぎなかつた。しかるに日清日露の兩戰役を經て、有力な工業資本が勃興し、世界大戰を經て金融資本の段階に進入した。また明治維新の直後には、まだ小規模の製造工業が生まれてゐたにすぎなかつた。たとへば日常必需品の一つである糸の最大部分は、農業の片手間に、糸車で紡がれてゐた。從つて農業は社會の生産のうちに、今日よりも遙かに重要な役割を占めてゐた。從つてまた、資本所有者階級に對する土地所有者階級の相對的の勢力は、今日とは大に違つてゐた。これはやがて當時の政治形態と今日の政治形態との相違となつても現はれてゐる。

かようにおの〳〵の社會形態は、いろ〳〵の發達段階を辿つて變化する。であるからそれ〳〵の社會形態と、そのうちにある諸々の社會現象とは、かような變化の過程において、かような過程のおの〳〵の段階として理解しなければならぬ

二つの社會形態——たとへば封建社會と資本主義社會とが、全く異つた社會形態だといふことは、決して封建社會といふ固定した社會の消滅したあとに、資本主義社會と名づける別個の社會が、忽然として

完成せられた一定不變の形をもつて現はれたといふ意味でないことはさきにも說明した通りである。事實は反對に、一つの社會形態は、これに先行する社會形態のうちに始まつて居り、舊るい社會形態は、これを繼承した社會形態のうちに終つてゐる。かように封建社會は資本主義社會に流れ込み、資本主義社會は、封建社會の中から流れ出てゐるのである。おの〳〵の社會形態は、絕えず變化する。これはすでに指摘した通りである。しかしこの變化は、一つの社會形態――たとへば封建社會と名づける一定の特質を備へた社會を、もはや封建社會でないところの別個の社會とするにはいたらない。變化がなほこの範圍內にある間は、かような變化は、封建社會の發達のおの〳〵の段階なのである。しかるにこの變化が或る一定の點に達すると、それは一つの社會形態を、全く性質の異つた他の社會形態たらしめる。たとへば封建社會が、資本主義社會に變化するのである。

であるから、それに先だつところの社會形態と、この社會形態に續いて起こつた社會形態とは、全く性質を異にしてゐるにもかゝはらず決して互ひに孤立した、關聯のない、別々の現象ではないのである。おの〳〵の社會形態は、それが發生し、生長し衰亡する全過程において理解しなければならぬといふことは、やがてはまた、おの〳〵の社會形態はこれに先だつところの社會形態と、そのあとに續づいて起こるところの社會形態との關係において理解しなければならぬ、といふことを意味してゐる。たとへば資本主義社會を眞實に理解するためには、それは封建社會のうちにどのような根柢をもち、どのような條件の下に發生し、どのような條件によつて形成され、どのような法則によつて發達したかを理解するばかりでなく、この法則の支配の下に、資本主義社會はいかなる段階を經て、いかなる方向に變化をしてゐるか、それはどのような必然的な發展によつて、どのような必然的な衰亡の條件を作り出し、從つてまた、どのような新しい社會形態の發生の條件を作りつゝあるか、といふことをも理解しなければならぬ。

（五）

私はいま、一つの社會形態、たとへば封建社會が多くの段階を經て變化をしてゆくうちに、この變化がある段階に達すると、それはもはや封建社會の變化の一段階ではなくて、封建社會と全く性質の異つた社會形態、たとへば資本主義社會に變化すると云つたが、これは世界の變化についての、極めて重要な問題に關係がある。

自然は『飛躍をせぬ』ものと思はれてゐる。一般に、進化といへば漸次に、徐々と行はれる變化と認められてゐる。多くの人々は、この世界の進化を認めるが、それはたゞ漸進的な變化をのみ認めるのであつて、この世界には、飛躍的變化はないかの如く考へてゐる。ところが事實はその反對であつて、かような飛躍的な變化は、自然界でも人間社會でも、常に行はれてゐるのである。

水は攝氏百度に溫ためると、沸騰して蒸氣に變化する。しかし九十

九度に温めたのでは、沸騰もしなければ、蒸氣ともならぬ。もちろん熱が加れば加はるほど、水は變化する。八十度、八十一度、八十二度と漸進的に水の溫度は高まつてゆく。けれども百度に達するまでは、依然として水であつて、決して水の性質を失はない。ところがこの變化が、攝氏百度をもつて現はされる段階に達すると、水は忽然としてもはや水ではない別個の性質たる蒸氣に變化する。かやうに水は攝氏百度に達するまでは、幾多の量的な變化の段階をへるが、この量的變化が百度といふ段階に達すると、この量的變化は質的變化となる。水はもはや水ではなくなつて、異つた性質の或る物に變化するのである。

これは反對に、水を冷却しても同じであつて、攝氏零度に達するまでは、水は漸次的に溫度を失つてゆく。しかし依然として、水の性質を備へた水なのである。ところが零度に達すると、水はもはや流動體でないところの、氷となるのである。

これと均しい事實は、自然現象のうちには無數にある。量から質への變化こそ、物質の運動する根本的な法則の一つである。社會の變化もその通りであつて、吾々は歷史のうちに、數多くの、かやうな飛躍的な變化を見るのである。

しかしながら漸進的な變化と飛躍的變化とは、決して相反した兩極なのではない。水から蒸氣への變化は、飛躍的に行はれる。けれども、それは決して突如として起つたものではない。この飛躍的な變化は、それに先きだつ漸進的な變化の必然の發展であつて、自然の場合も人間の社會の場合も、量的變化は質的變化に導びくものであり、漸進的な變化（進化）は、飛躍的な變化に導びくものである。「急激な變化はこれに先きだつ進化を豫定し、漸次的な變化は、急激な變化に導びく。これは單一な過程の、二つの必要な要因なのである」。

（六）

この世界のすべてのもの――吾々の生活する社會をも含めて――は絶えず變動し變化する。この世界のうちには、靜止し固定したものはない。それは不斷の變化の過程である。しからばこの變化の過程は、どのやうにして行はれるか？　この問題がなほ殘つてゐる。

靜止の狀態、變動のない狀態とは、すべての力が矛盾し對立し衝突しないで、その間に均衡が取れ、互いに相殺し合つて居り、從つて互いに作用し合つてゐない狀態にほかならぬ。たとへばこゝに、大小二つの磁石があつて、その中央に、鐵片を吊り下げる。この鐵片は垂直には下がらないで、より强力な磁石の方へ片寄つて、たとへば三分の二のところで靜止する。この狀態は、二つの磁石の力が相殺された狀態、即ち二つの力の均衡の狀態であつて、この力に變化が起こり、そして二つの力が再び對立し鬪爭せぬ限りは、この均衡狀態は破れない。從つて靜止の狀態が續づいてゐる。しかるにもしこの磁石の一方に、更らにもう一つの磁石を附け加へたなら、この均衡狀態は打破せ

られ、二つの力の對立と衝突が開始する。鐵片は、この二つの力の間を動搖する。しかし二つの力にこの上の變化がない以上は、吊り下げた鐵片は再び新しい位置で靜止する。即ち異つた兩勢力との間に、新しい均衡が恢復せられたわけである。

かように變動は、內部における諸勢力の矛盾、對立、衝突、鬪爭によつて惹き起こされるものであつて、靜止の狀態とは、これらの諸勢力が均衡した狀態なのである。であるから、この世界が不斷の變化の過程であるといふことは、これを構成してゐるあらゆる部分の間、あらゆる勢力の間に、たえず矛盾と對立と衝突があることを意味してゐる。もちろん、これらの部分と勢力とに變化が起こり、そして部分と部分、勢力と勢力との間に對立と衝突が起こり、鬪爭が行はれた結果は、こゝに新しい均衡が恢復される。しかしこの均衡――靜止の狀態――は、決して永久的なもの、絕對的なものではない。この世界のすべてのものは、絕えず變化する。この一時的瞬間的な均衡の中から、すぐさまこの均衡を打破する勢力の矛盾と對立が發展する。そうしてこの內部鬪爭の結果として、新しい勢力關係にもとづく新しい均衡がさらにこの均衡を破るべき次の矛盾と對立とを孕んで恢復される。

これは生物とその環境との關係を見ても、よく分かる。こゝに或る種の植物の繁茂した一定の地域があり、この植物の實を食物とする習性を得た動物が棲んでゐる。この動物を食物とするさらに有力な一定數の食肉獸がゐる。この動物を生育期に見舞ふ病菌が、一定の繁殖力をもつて待ち構へてゐる。かような環境が、著るしい變化なしに或る期間のあいだ續づくなら、この動物の種屬は、この環境に順應する。この地域內における、この動物の數にもほゞ變化がない。即ち同じ習性をもつたほゞ同じ數の動物が、代々、複生產せられてゆくだけである。この場合には、この動物と環境との關係は、均衡の狀態にある。ところが、たとへば氣候の變化のために、或る特定の植物の實が、永久的に少なくなつたとする。その結果は、この動物と環境との均衡が打破せられる。この動物の種屬は、永久的にその數を減じるか、さもなければ、他の植物の實を食物とする新しい習性を得て、その種屬を維持することになる。この植物の實は、さきの植物の實よりも、もつと豐富であつたとすれば、この動物の種屬は、この變動の以前よりも、さらにその數を增加する。かうして環境に起つた變化のために、舊るい均衡が打破せられると、こゝに環境と動物との間に新しい矛盾と對立の作用が起こり、その結果として、動物はこの新しい環境に對して新しい順應をする。即ち、新しい均衡が恢復せられたわけである。

人間の社會もこれと同じであつて、社會の構造、形態、性質は、究極においては、自然の環境によつて決定せられてゐる。社會は自然に依存するものであり、自然の中から生存の資料を獲得することによつてのみ、その存在をつゞけてゆくものである。それ故に、社會は究極においては、自然の環境によつて條件づけられてゐる。即ち、ある動物

の種屬が自然の環境に順應してゐるやうに、全體として見た、人間社會もまた、自然の環境に順應して形成せられてゐる。言葉をかへて云へば、自然の環境と社會との間には、力の均衡が見出だされる。そこでもし環境と社會との二つの勢力に何らの變化も起らぬなら、社會には何らの變動も起らない。それは靜止の狀態にある。次の世代は、ただ單に、前の世代を複生産するだけである。

けれども實際には、社會はかような絕對的な永久的な、靜止の狀態にあつたことはない。卽ち環境と社會との間の力の均衡は、たえず攪亂せられてゐる。この攪亂は、二つの方面から起こつて來る。

第一には、自然の環境の變化である。地球の表面は、たえず變化する。この自然的環境の變化は、勢ひ舊來の均衡を破つて、新しい順應を社會に强要する。いふまでもなく、環境の變化——この地球の表面の著るしい變化——は、例外的な場合を除いては、急速には行はれぬ。それは地球の曆日から見れば急激な變化であつても、人間の曆日から見れば、徐々に行はれる變化である。けれどもその變化が急激にもせよ、徐々にもせよ著るしいにもせよ著るしくないにもせよ、とにもかくにも變化する以上は、この環境の變化は、在來の均衡を攪亂するにちがひない。

これに反して、社會自身の側には、著るしい變化が絕えず起つてゐる。この變化の著るしいこと、言葉をかへて云へば、主として社會自身の側から起こつた變化のために、この均衡がたえず攪亂されてゆくことは、人間の社會が動物の社會と異なる著るしい特徵の一つである。それ故に動物の社會が比較的に靜止的であるのに對して、人間の社會は遙かに動的なのである。人間社會に起こるかやうな著るしい變化は、自然の中から生存の資料を取り出すための——卽ち生産の——道具と技術との變化である。自然の環境に著るしい變化がなくとも、この同じ自然の中から生存資料を取り出す新しい道具と技術とが發見せられゝば、舊るい均衡は打ち破られ、この新しい生産の道具と技術とを基礎として、新しい均衡が打ち建てられることになる。この新たな均衡——言葉をかへて云へば、新たな立場における、自然的環境への新たな順應——は、究極において勞働の組織であり、生産の組織であるところの社會の構造と性質とを一變し、この物質的基礎の上に立つてゐる一切の關係やあらゆる制度と共に、精神上の生活をも一變する。そこで自然的環境を一定のものとして見れば、社會の變化は、究極において、生産の道具と技術との變化によつて惹き起こされる均衡の破壞によるものだといふことになる。

しかるに、社會そのものは一つの組織體であつて、その內部には、これを構成する多くの部分と勢力とを含んでゐる。これこの部分が結合して、一つの組織體として存續してゐることは、これらの部分が、互いに相順應してゐることを意味してゐる。卽ち均衡が保たれてゐるのである。けれどもこの均衡狀態は、決して安定的なものではない。それはたえず、これらの部分の間の新たな矛盾と對立との發展によつて

攪亂されさらに新しい基礎の上に、一時的な均衡を恢復する。たとへば農業が主要な生產の方法であつた時代には、土地を支配する階級と土地を耕作する農民との間の均衡が、封建社會となつて現はれた。けれどもこの封建社會の內部に發達した手工業と、商品交換經濟とによつて、この均衡狀態が破られると、新しい基礎における均衡は、資本主義社會となつて現はれた。けれどもこの新しい均衡狀態もまた、決して安定的なものではない。この新しい均衡狀態——資本主義——の出現により、社會の生產力は激增し、企業と資本の集積集中は進行した。これは必然に、生產方法と所有關係との矛盾と對立——これを代表する資本家階級と勞働階級との對立と鬪爭——とを激增した。かように新しい均衡狀態は、必然にその內部に、この均衡を否定するところの要素この均衡を打破する新たな矛盾と對立の萌芽を含んでゐる。この矛盾と對立とが一定の發展をすると、舊來の均衡狀態は全く打ち破られ、新たな基礎の上に、新たな一時的の均衡が恢復される。

かように人間社會をも含めた一切の世界の變化する過程は、その內部における諸勢力が一時的に均衡を保つた狀態と、この均衡狀態のうちに發展する諸勢力の矛盾と對立とによつて、この均衡が攪亂せられた狀態と、その結果として、さらに新たな基礎の上に新たな均衡狀態が恢復せられた狀態との、この三段の過程の無限の連續にほかならぬ。

ヘーゲルは、この出發點となつた均衡狀態を正題目と呼び、この均衡を否定し打破する矛盾と對立を反題目と呼び、その結果として生じた新たな均衡狀態を指して綜合題目と呼び、この三段の過程によつて行はれる發展を、辨證法的の發展と云つた。即ちヘーゲルによれば、一切萬物は、辨證法的に變化し發展してゐるものであつて、世界をかような發展過程において理解することが、即ち辨證法なのである。

(七)

かように萬物を變動するものと見る考へ方は、古代ギリシアの哲學の特徵であつた。吾々が自然界または人間の歷史を見ると、それは數限りのない相互關係と相互作用との、無限の錯綜として吾々の眼に映ずる。古代ギリシアの哲學者は、世界をかくの如く素直に有りのまゝに見た。この幼稚にして素朴な動的世界觀は、ヘラクリトスによつて最も明白に言ひ表はされてゐた。かれは萬物は流轉すると云ひ、萬物は流轉し不斷の變轉と生滅の過程にあるものだから、即ち萬物は存在しまた存在せぬと云つてゐる。ヘラクリトスの見解は、エンゲルスの指摘してゐる通り、この世界の一般的な性質を正しく理解したものではあるが、この現象全體を形造つてゐる個々の現象を說明するには、まだ充分でない。そしてこれは自然科學の發達を俟たなければならなかつた。

十五世紀にいたつて、自然の研究は非常な進步をした。自然科學は、

自然をその部分々々に分析し、切り離して、これを分類した。これは自然に對する吾々の理解に、一大進歩をもたらしたが、しかしまた一方では、自然を全體的に、相互關係において、變化の過程において見ないで、個々別々な、バラ／＼なものとして、靜止し固定したものとして見る習慣を作り出した。そしてこの自然科學の考へ方が哲學の領分に移されて、動的、辨證法的な考へ方の正反對に立つ思惟方法――即ち中世から近代初葉にかけての哲學の特徴たる唯心論的、形而上的な考へ方を生み出した。

十七世紀になると、唯物論はまづ英國に擡頭し、十八世紀のフランスにいたつて、唯物論はこの時代の思想を風靡した。唯心論は中世の封建制度と專制政治を正當化し、この舊るい社會秩序の支柱となる哲學であつた。これに反して十八世紀の唯物論は、舊るい制度と、舊るい權力と、舊るい傳統との偶像を破壞し、封建貴族と專制政治と鬪爭する、革命的新興ブルジョアジーの哲學であつた。かようにフランス大革命の思想的先驅となつた當年の唯物論は、あらゆる傳統的な外來の權威を排し、理性を唯一最高の審判者として、一切の舊觀念、舊制度、舊秩序を徹底的に批判し、舊社會における迷信と不公正と、特權と隷屬とその他の一切の不合理なものを弊履の如く棄て去つた。

けれどもかうした不合理な舊制度を打破して生まれた『理性の王國』は、エンゲルスの言葉のように、畢竟、『ブルジョアジーの理想化せられた王國』にほかならぬものだつた。その『永久の正義』とは、ブルジョア的法律の中に實現せられた正義であり、平等とは、法律の前におけるブルジョア的平等にすぎなかつた。そして『最も基本的な人權の一つとして宣言せられたものは、要するにブルジョア、、、』であつた。當年の唯物論は、現實によつて置かれたかような限界を脱することができなかつた。當年の唯物論は、一方の端に舊秩序の不合理を見、反對の端に『永久の眞理』、『永久の正義』、『自然に基づく平等と人權』を見た。それはこの二つの反對極を對立させたばかりであつた。であるから當年の唯物論にとつては、過去の歷史はたゞ誤謬と不合理との累積であつて、何ら必然にして必要な發展の過程でなかつたばかりでなく、これに代はるべき理性國家は、永久の眞理、永久の正義であつて、そのうちには、新たな不合理の發展を包んでゐるものでもなかつた。これは舊秩序に對しては革命的であつたが、これに代はるべき資本主義社會の秩序を、永久の眞理、永久の正義、永久の秩序と考へるブルジョアジーの所要に一致して居つた。

かように十八世紀の唯物論は、平面的機械的であつて、動的進化的ではなかつた。即ち、それはなほ形而上學的な考へ方を脫せぬ唯物論であつて、辨證法的な唯物論ではなかつたのである。

（八）

十八世紀のフランス唯物論につゞいて、ドイツの新哲學が現はれた。カントは、ニュートンの太陽系の永久不變說を破り、これを一つ

の發展の過程として說明した。カントによれば、この太陽とその他の一切の遊星とは、星雲から發生したものであつて、從つてまた、それは永久不變なものではなくて、必然に滅亡を豫期せられるものであつた。

かようにカントにおいて、世界は變化の過程として見られたが、この新しいドイツ哲學は、ヘーゲルにいたつてその最高點に到達した。即ち、ヘーゲルの哲學にいたつて、自然と人間社會とその精神現象とを含めた世界の全部が、初めて進化の過程として、即ち不斷の運動、不斷の變化、不斷の發展として說明された。のみならず、ヘーゲルはさらに一歩を進めて、この不斷の變化は、どのようにして行はれるかを說明した。これが即ち、ヘーゲルの辨證法であつた。

しかしながらヘーゲルも、カントと同じく唯心論者であつた。即ちヘーゲルによれば、吾々の思想は、客觀的な現實の世界が、吾々の腦髓といふ鏡面に結んだ映像なのではなくて、反對に、この客觀的な世界とその發展とは、この世界の初まり以前から存在してゐた『絕對理性』ないしは『理念』と名づけるものゝ映像にすぎないものであつた。そこでヘーゲルの辨證法は、吾々の意識の外に存在する現實の世界が發展する法則なのではなくて、このイデアの發展する法則なのである。そしてこのイデアの發展が、自然界と人間界となつて物質的に現はれてゐるのであつた。

かようにヘーゲルの辨證法は、唯心論的な辨證法であつた。しかるにこの逆さまに立つてゐた辨證法を、正しい位置に引き直して、唯物論的辨證法、ないしは辨證法的唯物論としたものは、マルクスであつた。そこでマルクスにあつては、辨證法における主觀と現實、心と物質との關係は、ヘーゲルのあべこべとなつた。ヘーゲルにあつてはイデアといふ獨立の主觀が現實界の造物主であり、現實界は單にこの主觀の外面的現象にすぎないが、自分にあつては之に反し、觀念とは、たゞ物質が人間の頭腦に移植され、反映されたものにすぎない。ヘーゲルの辨證法は、頭で立つてゐる。だから吾々はその神秘の皮をはいで合理的な實を求めるために、彼れの辨證法を逆さまにひつくり返へしたのである」（マルクス）。

辨證法的唯物論によつて、吾々は初めて、自然界と人間社會とを理解する正しい考へ方、正しい思惟方法に到達した。なぜならば、現實の世界は、かくの如く――即ち辨證法的に――動いてゐる。そして科學は日々に、その新しい證據を累積してゐるからである。

辨證法的唯物論によつて、過去及び現在の社會秩序と、これに代はるべき新たな社會的秩序についての考へも、一變した。マルクス以前の空想的社會主義者も、資本主義社會の批評に出發した。彼らはこれによつて、資本主義社會が不合理にして不公平なことを見た。けれども彼らもまた、中世紀的特權と闘爭するブルジョアジーを代表した、形而上學的なフランス革命の唯物論と同じように、この不合理な專制度に對して、絕對に合理な公正なものと考へたにすぎなかつた。彼ら

にとつては、この絶對に合理公正なものは、現在あるところの不合理不公正の對立物として、出來合ひでどこかに轉ろがつてゐるものであつた。人間はたゞ、これを發見すればよかつたのであつた。であるから、彼らの社會主義社會が實現せられるためには、たゞこの眞理を發見する『天才的な個人が缺けてゐたのであつた』。しかるに今や『かくの如き個人が出現して眞理を認識した、けれども今かゝる個人が出現してまさに眞理が認識されたのは、歴史的發展の關聯から必然的に繼起した不可避な出來事ではなくて、純然たる僥倖にすぎない、そこでもしこの個人が五百年早く生れてゐたならば、人類は五百年、誤謬と鬪爭と苦惱をしなくて濟んだ』のであつた。

辨證法的唯物論によつて、社會主義は初めて、資本主義社會の必然の發展として理解された。社會主義は初めて、空想から科學となつた。

けれども社會主義は空想から科學となつたばかりではない。辨證法的唯物論によつて、社會主義は初めて、、、、、、、、、として理解されたのである。

辨證法的唯物論は、資本主義社會をその發生と、生長と、衰亡の過程として理解する。この立場は、資本主義から自らを解放するために鬪つてゐる階級のみが取ることのでき得る立場である。それ故に、辨證法的唯物論は、×××プロレタリアの、、、、、である。けれども辨證法的唯物論がプロレタリアの正しい思惟方法であるといふことは單にそれがプロレタリアにとつて有利であるとか、または便利であるとかといふ意味ではない。辨證法的唯物論が正しいのは、、、、、、、が唯物論的辨證法的に動いてゐるからである。そして辨證法的唯物論は、この、、、、、、に一致してゐるからである。たゞこの、、、、、、、またはこの、、、、、を受け入れ得る階級は、資本主義社會にあつては、ひとりプロレタリアのみである。

（この講話は、初めて辨證法的唯物論といふ言葉に接する多くの人々を目標において、辨證法的唯物論とは大凡どのようなことであるかといふ、輪郭を説明しようとしたものにすぎぬ。説明の仕方は、多くプハリンの著書にならつた。また辨證法的唯物論に對するレーニンの貢獻についても、説明する暇がなかつた。最近、辨證法的唯物論に關する著述は數多く反譯されてゐる。進んで辨證法的唯物論を研究しようとする讀者は、次の諸著によつて得るところが多いであらう。これらのうちには、同一の著書が重複して反譯出版されてゐるものもあるが、次に掲げたものは反譯の優劣によつて選擇したわけではなく、たま〳〵私の手元にあるものを掲げたにすぎぬ。稻崎勳譯『史的唯物論』。川内唯彦、永田廣志譯『辨證法的唯物論』。河上肇譯『レーニンの辨證法』。恒藤恭譯『マルクス主義の根本問題』。經濟學批判會編『唯物辨證法』。林要、河野密譯『反デューリング論』。大山一郎譯『唯物辨證法と自然科學』。大森義太郎譯『レーニンと辨證法的唯物論』。其他。）

解散・どうする

總選擧戰と選擧法

三輪壽壯

一 總選擧を前にして無產黨の動き

閉會中の第五十四議會は十目の見るところ正しく解散の一途あるのみである。野黨が如何に意氣地なしでも、或はまた政府が如何なる秘策を弄しやうとも、今や全國民に滲透して居るところの『旣成議會を一日も早く解散して普選による淸新なる議會を形作れ』との要求を無視して所謂三黨首妥協式のおかしな眞似が國民を前にして重ねて出來るものではない。かくて解散によつて展開される總選擧を想ふとき、その競爭の激甚なるべきは言ふを俟たずとして、政友民政の爭霸戰も興味深いことではあるが、より以上の興味と注意をひくのは選擧戰に於ける無產政黨の活躍ぶりであり、之によつて幾何の戰績を收め得るかにあると思ふ。昨秋府縣會議員選擧にあたり四つの無產政黨と其他の地方無產政黨とは互に鎬を削りつゝも二十一萬餘の投票と二十六名の當選者とを獲ち得たのであつた。人々は之を好むと否とにかゝはらず兎に角一つの勢力が崛起して來たことを認めた。若し互に爭ふことをやめて協力するならば、より多くの當選者と得票と而してより大なる威力の發揮が出來たであらうにといふ世評はもとより當事者も肯定せざるを得ないところであつた。果然統一合同への叫びはこれ等無產黨内部にあがつて最も峻烈に他黨をエセ無產政黨として旣成政黨よりも強く排擊した黨の人々すらもが急角度を描いて合同論者となり、無條件卽時合同を主張することによつてその逞しき轉換振に世を驚かしたのである。昭和三年の春を迎ふるの時半歲前の排擊的氣分は煙の如く消え去つたかに見える。そして今や總選擧を前にして旣成政黨に對し最大の偉力を發揮せんが爲め各無產政黨間には選擧協定が行はれん

として居る。更にかくの如き協同を飛び越えて、日本勞農黨と日本農民黨との合同、或は關西民衆黨九州民憲黨と日本勞農黨との提携等戰線の整理統一は加速度的に行はれんとして居る。かくの如くにして始めて無產政黨は大衆に呼びかけて、その判斷に訴へ意義ある一票を獲得することが出來るのである。

二　既成政黨の脫法的選擧運動

普選法は昨年の府縣會議員選擧によつて試驗されたが、選擧權の擴張を別にして買收を防止せんとし、戶別訪問及類似行爲を禁じ、選擧運動の中心を言論と文書においた點に於て舊法に比して一段の進歩を認むるに躊躇せぬ。だが然しそれによつて買收が無くなつたかといふにさうでない。都市は兎も角農村では依然たる買收が而も公々然と行はれた例がざらにある。例へば群馬縣下に於て屑繭買入の爲手附をおきてわざと流した如き、或は青森縣下に於て有權者に對し一圓二圓の薬の手附金を渡し選擧期日たる九月二十五日を取引日とするといふが如き巧妙なる脫法的買收行爲は罰則の適用を受けなかつたやに聞及んで居る。

既成政黨は新選擧法の取締規定を潜つて、彼等の使ひなれた戰法を如何に生かさうかに腐心したのである。戶別訪問はいけないといつてもその手が使ひたく、ポスター張札を掲示する爲には所有者の承諾を要するといふ法令を濫用して其目的を遂げる。

『立候補屆出以前に於ては立候補準備の爲必要なる行動を除く外選擧運動を爲すことを得ず』といふのは當局が新選擧法に對して下した一の解釋であつた。かくて立候補屆出以前には演說會ら推薦狀も罷りならぬと嚴命されたのであつた。然しながらその準備行爲としてなさる候補者推薦會、講演會等によつて巧なる選擧運動が爲されたことは周知の事實である。

無競爭當選は新選擧法の一特色であるが、各地の無競爭當選の選擧區にあつて而も投票の前日候補を辭する者の多かつたに徴しても、よし違反罪に問はれなかつたとしても、此間の事實を想像するに難くない。選擧期日の十日以內に候補を辭すれば衆議院議員の選擧にあつては、二千圓の供託金を失はなければならぬが、然し金はすにより大なる利を以つてして立候補を斷念さす樣な際どい藝當が、總選擧に當つても行はれない限りでない。若し無產黨候補が割込んで居る場合であると、恐らくは群馬縣下で行はれた樣な戰法がとられるかも知れぬ。それは定員二名の選擧區に政友、民政各二名を立てゝ期日間際に投票の集中を兩派とも行ひ、即ち各一名を犧牲にして當選した如き例である。かくの如きは既成政黨としても政黨の地盤としてよく耕されて居る事實を物語るものかも知れぬが、此間戶別訪問、個々面接はおろか、買收さへもが行はれたことを誰が否定し得やうか。費用の制限にしても、既成政黨候補にとつては之を潜る法なしとしない。『議員候補者又は選擧事務長と意思を通じて支出し[illegible]

選擧費用に計算しないですむのだから、かくの如き演説會の援助費の費用等が多額に上ることも想像し得る。たゞ制限額を定むることによつて或程度の制限を爲し得る實益は之を認めねばならぬ。

選擧運動員の異動、事務所の移轉等も窮餘の一策として行はれた脫法らしいが問題になるまい。

前述した樣な脫法的運動方法は在來の運動方法に慣れた選擧ブローカーの思付にふさはしい姑息なやり方であるが、二三回總選擧が行はるゝ中にはさして效果を發揮し得なくなるであらう。のみならず、言論と文書の力を以て、かくの如き情實と利慾の運動を征服しなければならない。それは法の力よりも人の力を必要とする。

三　新選擧法の缺陷

普選法の最初の實驗に徴して我等は多くの不備缺陷を見出す。既成政黨すらがその不便不自由を感じて改正を云々して居る。内務省も自ら作つた省令の『選擧運動に關する文書圖畫の件』に關し立札看板ポスターの類の取締は實情に適せぬものが多く改正の必要あることを認めて居る樣なわけで、選擧運動の爲頒布する引札張札の類は二度刷又は二色以下とし長さ三尺一寸幅二尺一寸以下、或は立札看板の類は白色に黑色を用ゐたるものに限り縱九尺横二尺以下等と規定して居るが、ポスターの色彩まで制限する何の必要があるかといひたい。其他法令を通じて取締的規定の煩瑣にたへざらしむるものがある。候補者選擧[illegible]居る。然るに、實際の取締に當り同一候補者の爲に引きつゞき二回以上演説をすることはならぬとか、第三者が同一候補者の爲連續的に應援演説をするとき候補者と從屬的關係に立つ者と認めらるゝ場合多く演説による選擧運動を越えて運動員のみの爲し得ることである、といふ樣な一面法の不備に乘じ不當に制限的解釋を附して一種の選擧干渉を行はしめたのであるが、之は解釋の誤謬である。言論戰に重心をおいた現行法にあつて第三者の選擧運動は演説と推薦狀は差支なきものと規定した法の精神から云つて斷じて誤つた解釋と謂はざるを得ない。又運動員の數を府縣會議員の選擧には十五人乃至二十人、衆議院議員の選擧には五十人と制限するが、それは概して少きに過ぐるといはれる。尤も運動員を有權者に限る關係上府縣會選擧に際しては市町村公民權を有する者即ち二年以上の定住者たるを必要とする關係上郡市に於ける無産候補にあつて有資格者を五六人しか得られなかつた例もあつた。で此選擧委員事務員は有權者ならざるべからずとする資格條件が、先づ撤廢されなければならないが、それと共に運動員制限數を增加する要がある。選擧運動員を限定することによつて費用の削減をはからんとする立法の趣旨ならばわかるが、若し運動員を監視することによつて取締の實をあげる目的ならばその要を認むるに苦しむ。だが然し何れにしても員數は大した問題でもない。

四　普選法の徹底的改正要求

選擧權の行使をなすに就て取締規定がその障害となる場合が少くない。更に候補者を中心とする選擧運動が取締上の便宜の爲に阻害されるが如き法規は改廢せられねばならぬ。けれども今無産政黨が選擧法を改正せんとする要求はさうした末節に拘泥するものでなくもつと根本的な選擧權の徹底的擴張と、選擧運動の自由とである。もとよりそれに今直ちに行ひ得ることではないかも知れない。新興勢力の擡頭に刺戟されてブルジョア政黨のみで作られた普選法はいふ迄もなく中途半端な片輪なものである。そして今より後無産政黨自身の努力によつてその闘爭によりてのみ徹底的な普選法が獲得さるゝといつてもそれは決して過言ではない。

然らば無産政黨の要求如何といふに各黨の主なる要求は左の諸項に要約される。

一、滿二十歳(勞農黨――滿十八歳)以上の男女の選擧權及被選擧權
二、居住年限の撤廢
三、供託金制度の撤廢
四、缺格條項の撤廢
五、投票日の公休制と給料の全額支拂(勞農黨――投票日の休業と賃銀、日當、俸給を公費負擔たらしめよ)
六、無料郵便制度の擴大
[illegible]
七、[illegible]
會、[illegible]
七、言論及び文書による運動の自由
八、不在投票制度の確立
九、大選擧區制の採用

選擧權に於て二十五歳、被選擧權に於て三十歳の制限を低下せしめよとの要求は觸れる迄もない問題として、居住年限の撤廢は殊に都市鑛山の勞働者の選擧權に關することであるが、府縣會市町村會に二年、衆議院議員選擧權の行使に一年の定住を要件とすることによりて夥しい無資格者を出す。我等はこの制限を撤廢せよと叫ぶが、少くとも選擧人名簿調製の爲の便宜を考慮した六箇月位に短縮して然るべきであると思ふ。

供託金制度は府縣會選擧に於て無産黨より立候補せんとする者の最も惱まされた意地悪い制度であるが、衆議院議員の場合の二千圓は更にひどく、純無産者にとつては立候補それ自身が一の不可能事である。無産政黨が選擧基金を持つ樣になつて適當の人を公認し得る樣になれば兎も角、目下のところあたら適當の候補者も供託金制度の故に立て得ざる狀態である。

言論及文書による運動の自由に就ては既に述べた通の障害がある。のみならず選擧法の外に治安警察法、新聞紙法、出版法等の偏頗な適用によつて、政見發表演說會の辯士が中止されて氣勢をそがれたり、警官が演說會を物々しく警戒して聽衆を近づかしめなかつたり、印刷物やポスターが禁止されたり撤回を命ぜられたり、合法的な形式による

選擧干渉——それは選擧法第百十六條「選擧に關し官吏又は吏員故意に其の職務を怠り又は職權を濫用して選擧の自由を妨害したるときは三年以下の禁錮に處す」に該當する場合が多いであらう——が行はれた。即ち選擧の自由は單なる選擧法だけの問題でなくかゝる言論、集會、出版等の法規の改正にまでその要求が擴張されなければならぬ。

不在投票制度は地方選擧には認められて居ず、今回始めて試驗さるるわけであるが、郵便による不便なる不在投票制度を幾人利用するかは疑問である。海員に於て殊にさうであると思はれるが、海員の選擧權に就ては實はその不在投票權の行使以前に選擧權を登錄されて保有する者が極めて僅少であるといふ事實が横はる。それは下級船員の住居が明確でない爲に原籍地に於て名簿に登錄されてゞも居れば格別然らざれば選擧資格を殆んど有しないであらう。之は確に法の缺陷である。海上勞働者が住所定らざるの故を以て選擧權の行使を不能に歸せしめらるゝの不合理は急速に改められねばならぬ。

選擧法の不備と缺陷はもとより上述したところに盡くるものではない。要求も亦然りである。だがこゝには暫くそれを預つて無產政黨は如何なる合法的選擧戰術をとるであらうかを一般的に述べてみたい。立入つた戰術を述べることはもとより差控へなければならぬことでありほんの輪廓を畫くにとゞめねばならぬ。

五 無產政黨は如何に戰ふべきか

立候補屆出以前には選擧運動に出來ない、唯立候補準備の爲めなる行動丈が許される。所謂地盤を所有物の様に心得、之を讓渡したりして選擧民を愚弄し來つた既成政黨の代議士諸君は却つて選擧戰の幕があいて物々しい監視の目が光らぬ裡に暗黒の取引やら地方民の籠絡やら自家廣告やらをやるであらう。無產政黨はそんなことはしない。無產政黨はその階級的利害の爲に又特にその地方的利害の爲にも、常に熱心に勇敢に鬪爭することによつて民衆の信賴を博し又その陣營の中に之を獲得することが出來る。それは不斷の努力に俟たなければならぬ。從つて無產候補に擬せらるべき人も、今まで緣もゆかりもない或る地盤に突如として割當てられてそれで成功するものではない。間斷なき日常鬪爭を特定の場所に行ひ黨大衆の組織が完備し地方民一般に黨支部の活動はもとより候補者たるべき人を個人的にも印象せしめて始めて地盤としての確實性が得られるのである。日本勞農黨は今やその全體をあげて徹底普選獲得、生活權擁護、既成政黨打倒の三運動に邁進して居るが、それは結果に於て總選擧と無關係ではない。

解散が來て選擧期日の公布があつてこゝに選擧戰は展開されるのであるが、供託金を積み立候補の屆出を濟し七箇所を限つての選擧事務所と、選擧事務長以下選擧委員、選擧事務員が選任されて戰線に入るわけである。これ等の選擧運動員は選擧權者でなければならぬが、這般の府縣會選擧にあたり同一候補者の爲の連續的應援に種々の干渉が行はれた事例に鑑み應援辯士の或者は選擧運動員の屆出を爲すを便と

するかも知れぬ。數隊に分つた演説隊を編成して一日二回乃至三回の演説會の開催を爲すであらう。勿論演説會場は費用を要しない公立學校、公會堂、議事堂等を多く使用するであらうし、又府縣議戰に於て農家を借りて會場にあて比較的好結果を收めた經驗もある。

もとより我等の本領は選擧法の如何にかゝはらず言論戰一天張でおし通すのであるから言論の內容は細心の注意を拂ひ、演説隊の編成を組織化しなければならぬ。

さて黨支部員及勞働組合、農民組合の組合員は如何なる活動を爲すべきかといふに、さきの選擧の實績に照し選擧革新運動が有效であると思ふ。候補者と限られた運動員とによつて選擧運動が爲され、第三者は行動を封せられてたゞ働きかけを受けるばかりである。況んや二十五才以下の青年は如何に有能の士であつても選擧運動員にはなれない。かゝる人々によつて組織された選擧革新同盟は獨自の立場から演説會を開き、候補者の立會演説を催し、又選擧違反殊に買收、戸別訪問の摘發をなし官憲の選擧干渉あるとき之を告發する。革新運動の如き政治運動を通じて意義ある選擧戰に國民としての責務の一端を盡すことはもとより合法的で咎むべき何等の理由もないことと信ずる。

之も選擧法の窮屈な解釋から生ずる不都合であるが、選擧委員事務員の下にあつて演説會のビラやポスターを張る人手は一時的に機械的勞務に服する者でなければならぬといふので切角勞務を無償で提供しやうといふ人があつても何かと難癖をつけられたが、かゝる人をおいて高い給料を拂つて熱心にやつてもくれない者をわざ〲傭ふ必要がどこにあるか、之は寧ろ事實によつて打破し法の解釋を變へしめなければならぬ。

我々はまた喧傳さるゝ所の選擧干渉が決して然く恐るゝに足らぬことを知つた。たゞ干渉によりて選擧運動員が萎縮することなく敢然として戰ふに於ては形勢が好轉こそすれ損失を招くことはない。また取締規定の末節に拘泥することは運動をして精彩なからしむるものであつてかゝる弊に陷つてはならぬ。

六　選擧人の立場

さきにも述べた如く選擧法は選擧運動の期間選擧權者をたゞ受動的立場におく。特定の候補者の肩を持つて投票を勸誘して歩けば第三者が選擧運動をしたといふので第九十六條違反の罰則にふれた上、第九十八條の戸別訪問とか個々面接とかの違反罪を構成する。かうした窮屈な規定は選擧人を消極的ならしめ、選擧氣分といふ一種の熱狂的氣分に水をさす。棄權の多かつたのはかゝる不快なる取締規定の存在をその一理由として數ふることは強ち無理ではない。

運動員に關する煩瑣なる取締は直接選擧人の問題ではない。戸別訪問、個々面接、並に電話による運動の禁止によりていくら助かるかわからない。若し演説文書による運動か、選擧人を索引する勢力を有するに至るならば選擧人にもとより一般的にも問題は解決されるであら

う。選擧人は働きかけられる側に立つが、買收の働きかけだけは斷乎として峻拒し、之を摘發するだけの正義感があつてほしい。人情負けして闇から闇に葬るときはより大きな社會惡を犯すことになる。さはれ之は一朝にして醫し難く、況んや法律を以て一掃さるべきものではない。たゞ無產政黨の進出とその政治教育の徹底とこそが救治の鍵を握る。

選擧人名簿に登錄されて居る有權者は選擧期日の午前七時から午後六時までの時間に投票所に至つて投票することが出來る。投票は一人一票、そして選擧しやうとする一人の議員候補者の氏名を書かねばならぬ。氏名は必ずしも氏と名とを併せて書くを要せずその一方のみを書いても何れの議員候補者に投ぜられたるかを確認し得れば足り、假名でも又ローマ字でも差支ない。議員候補者として屆出をした者以外の氏名を記載したるもの、一投票に二人以上の議員候補者の氏名を記載したるもの、議員候補者の氏名を自書しないもの、等は無效投票として扱はれる。議員候補者の氏名の外によけいなことを書いたものも無効である。但し官位、職業、身分、住居又は殿、樣、君等の敬稱の類を記入しても差支ないことになつて居る。投票の秘密は絕對的で選擧人は何人に投票したかを陳述する義務はない。官吏吏員は選擧人が何人に投票せんとし又は投票したかの表示を求むることを得ず。又選擧に關係ある官吏、吏員、立會人又は監視者が選擧人の投票したる被選擧人を表示してはならず、又投票所又は開票所で正當の事由なくして選擧人の投票に干渉し又は被選擧人の氏名を認知する方法をとつてはならぬ。以上何れも禁錮又は罰金の制裁が附せられて居る。

選擧人の心得とでも云ふべきものは今改めて縷述するの必要はあるまい。たゞ新有權者が買收の毒牙にかゝることなくその欲する者を選ぶことだけは法により取締により、選擧人の自覺により、又革新運動の如きものによつて保障されんことを希ふて已まぬ。(一、一二)

既成政黨と如何に戰ふか?

山川　均

かつて五十二議會は、解散の瀬戸ぎわまでいつて、一夜のうちに急旋回をしたゝめしがある。ブルジョア政治の内輪喧嘩ほど、見當のつかぬものはない。今年の議會の雲行きといへども、際どいところでどう引つくり返へらぬものでもない。しかしどの道、改選期が迫つてゐ

るのだから、政府の切崩しも案外きゝめが少ないかも知れぬ。在野黨としては、どの道總選擧に臨むのなら、不信任案をもつて威勢よくぶつかつておいた方が、人氣がつくかも知れぬ。そこで今度といふ今度こそ、いよく議會も解散といふことに、多くの人々の豫測が一致してゐるようである。議會の休會明けを前にして、政府がまたぞろ地方官の更迭をやつたのも、野黨の不信任案提出の前景氣に對する對抗運動とも見ることができる。

そこでいよく解散となれば、三十日以内には、普選最初の總選擧が行はれる。幸ひ先き頃の地方選擧で、ともかくも一應の小手調らべをやつた無産諸政黨が、いよく全國的政治の土俵に立つて、ブルジョア政黨と如何に戰ふか？　これは決して、單なる興味の上からの見ものではなくて、歴史的に重要な意義のある見ものである。

○

最近におけるわが國政界の展開は、いふまでもなく、政黨政治の確立を、二重にも三重にも、確かめた上にも確かめてゐることである。政黨政治の確立といふことは、言葉をかへていへば、ブルジョアジーの政治的支配の確立にほかならぬ。

これは先づ衆議院の方面では、ブルジョア政黨の分野の整理となつて現はれた。昭和二年の特筆すべき出來事は、政友本黨が分解して、ブルジョア政黨がほゞ精粹に、二大財閥を中心とする二つの勢力の對立に、きつぱりと分かれたことである。政友會は地主黨であつて、民政會がそれよりも自由主義的な、商工階級の政黨であるといふような幻影は、もはや完全に雲散霧消した。そして金融資本の勢力を中心として、帝國主義的反動的政治勢力に結合したブルジョアと地主の政治勢力が、鮮やかな姿をもつて、吾々の眼前に躍動した。

ところが貴族院の方面では、これは一見、相反してゐるかのような、二つの方向への現象となつて現はれてゐる。その一つは言ふまでもなく、普通の意味での貴族院の政黨化が、いよくますく露骨になつたことである。

ブルジョアと地主の政治勢力が（ブルジョアと地主が對立する代りに）、二つの對立政黨に集中せられたのは、ブルジョアジーの内部における勢力の對立が、一そう大きくなつたものであるかのようにも見へる。けれども眞實の意味は、わが國現在の政治が、主として（或はほとんど全く）帝國主義的ブルジョアジーの内部における、勢力のバランスのみで動いてゐることを現はしてゐるものである。しかしブルジョアジーの内部に限つていふならば、その勢力のほゞ伯仲した二大政黨の對立状態になつたゝめに、政爭は一そう激しくなつた。そしてこれがまた、貴族院の政黨化を促進したにちがひない。先き頃からの貴族院諸團體の動搖と分解の作用、それから反政府聯盟——貴族院における民政黨勢力の結合——なるものが出來、若しくは出來かゝつたことなどは、貴族院の政黨化が一歩前進した證據である。

ところが面白いことは、かような貴族院の政黨化が急速に進んでゐ

る一方に――或は、急速に進んだがために――貴族院の政黨化を防がうといふ、新運動の起こつたことである。これは言ふまでもなく、近衛公爵を中心とする火曜會の運動である。これは一見して、ブルジョア政黨の勢力――即ちブルジョア政治勢力――が、すばらしい勢力で貴族院に侵入して來ることに對する、反撥であるかの如くに見える。

しかし實際は、決してさうではない。この新運動は、貴族院の政黨化に反對するのではなくて、現在の制度そのまゝでは、貴族院の政黨化が圓滑に行はれぬことを心配した運動なのである。貴族院は、衆議院に多數を占める政黨の內閣に、いかなる場合にも楯突いてはならぬ。これがこの新運動のモットーである。貴族院の現在の制度では、政黨化が圓滑に行はれ得ぬとしたならば、これはたしかに、貴族院が政黨政治――ブルジョア政治――に順應する便利な方法にちがひない。それは貴族院を政黨化する代りに、貴族院をそつくりそのまゝ、もはや少しも、ブルジョアジーの『胃の腑にもたれる不消化物』でないものとするための、奏効確實な消化劑の處方にほかならぬ。

貴族院の政黨化と、貴族院の政黨化の防止、この二つの相背馳するかのやうな運動も、詮ずるところ、ブルジョア政治確立の信號なのである。

これがいま吾々の無產諸政黨が、恐らくは數旬の後に、總選擧の戰場において、向うに廻はして戰はうとしてゐる對象物なのである。

○

選擧の直接の目的に、[illegible]と云つても、否認するわけにはゆかぬ。しかし直接の目的が、いつでも、一番大きな目的であるわけではない。吾々は食事をする。吾々が一日三回食事を取る直接の目的は、空腹を滿たすことである。けれども空腹を滿たすといふことは、吾々が生存をつゞけるといふことよりも、或は、吾々が何事かをするために生存をつゞけるといふことよりも、より重大な目的であるとは云はれない。ところが實際には、吾々は空腹を滿たすことを直接の目的として食事をする。そしてその結果が（むしろ、その結果がたま〱と云つてもよい吾々に生存をつゞけしめてゐる。

無產政黨は決して、候補者を當選させることを度外視して選擧に臨んでよいといふわけはない。無產政黨は、その獲得し得られる得票をもつて、一人でも多くの候補者を當選させねばならぬ。これがためには、ブルジョア政黨から選擧の技術を學ぶことも、少しも憚ることはない。現に先き頃の府縣會選擧では、ブルジョア政黨は約四五千票をもつて一人の議員を出だしてゐるが、無產政黨側では、約九千票に對して一人の當選者を出だした割合になつてゐる。かやうな投票の不經濟は、無產諸政黨間の協定によつて、かなりの程度まで避けられるにちがひない。

しかしながら無產政黨にとつて、當選數以上に重要なものは、いふまでもなく動員率である。無產政黨はそのプラットフォームのなかに、

大衆をどれだけ現實に動員したか。これが、眞實に、無產政黨の勢力を示す指標であり、同時に、大衆の政治的生長を測る指標となるものである。

○

無產政黨は、選擧をやる政黨である。しかし選擧をやるための政黨では決してない。であるから、無產政黨がブルジョア政黨と──即ちブルジョアの政治勢力と──闘ふのは、決して選擧だけではない。無產政黨は四年に一回、ブルジョアの政治勢力と選擧戰において闘ふのではなくて、日常不斷に闘ふのであるが、この日常不斷の闘爭に小決算をつけ、その出入勘定の帳尻を明白に數字で出すものは、選擧の動員である。

それと同時に、選擧は無產政黨の影響範圍を擴大し、大衆を既成政黨の影響から引き離なす機會として、最大限度に利用せられねばならぬ。既成政黨にとつては、選擧は民衆を欺くことであるが、無產政黨にとつては、選擧はこの欺瞞を摘發曝露して、民衆を政治的に教育することである。選擧によつて大衆に與へられる政治上の教育は、いはゞ收約的ではなくて、粗放的である。それは最も廣大な地面の上に、影響の種子を播くべき機會を與へるものである。無產諸政黨が、この機會をどれだけ有効に利用し得たかといふことは、やがてはまた、既成政黨と如何に有効に闘つたかを意味するものである。

○

來るべき總選擧は、無產政黨が外に向つてその力を擴大する機會になると同時に、その内部的な發達の機會ともなるべきものである。これは議會解散の形勢を前にして、無產諸政黨の間に、選擧協定が促進せられてゐることに、すでにその一端が現はれてゐる。先き頃の地方選擧に當つても、或る少數の地方では、選擧についての協定、または選擧についての共同戰線の行はれたところがある。しかしその結果は、むしろ悲觀的であつた。或る地方では、共同戰線は依然として、競爭政黨に對する謂ゆる『曝露』の機會に供せられたにすぎなかつた。或る地方では、競爭政黨の得票を少なくする目的で、全投票を、民政黨の候補者に投じたとさへも傳へられてゐる。來るべき總選擧に對する無產諸政黨の協定が、どの程度の内容をもつものなるかは、まだ明らかでない。それはたゞ、競爭をさけるための、立候補地域の協定にとゞまるか、或は一歩を進めて、共同の候補者を立てる程度のものとなるか、それともさらに一歩を進めて、ブルジョア政黨と對立してゐる無產政黨の候補者は、いかなる場合にも、無條件的にこれを支持する程度のものとなるかは明らかでない。けれどもいづれにせよ、數ヶ月前には、黨と黨との間に、何らの協定をも持たないで選擧に臨まざるを得なかつた無產諸政黨が、數ヶ月後の今日は、少なくとも選擧協定のための會議の召集に對しては、無條件的に同意せざるを得なくなつたのは、無產階級政治戰線の統一への、大なる進歩といはなければならぬ。

けれども總選擧の機會は、たゞ單に、これな選擧のための協定の機會として終らしめてはならぬ。ブルジョア政治勢力と、最も單純な問題について、最も分かり易い形において正面から對峙するこの選擧の機會は、鬪爭目的の一致にもとづく眞實の共同戰線——鬪爭のための協力——を發展せしめる絶好の機會として用ひられなければならぬ。

○

いはゆる普通選擧によつて加へられてゐる無産階級の選擧權の制限は、來るべき總選擧においては、地方議會の選擧の場合以上に、痛切に經驗せられるにちがひない。普選法の改正、徹底的普選要求の運動は、來るべき總選擧の經驗のうちから、一そうの力をもつて生まれ出なければならぬ。

選擧法は選擧費用を制限してゐるにも拘らず、一人の候補者の選擧費用は、最少限度に見積つても、五千圓を下らぬといふことであるから、立候補供托金二千圓を加へて、少なくとも七千圓を必要とする。これは無産諸政黨の立候補を、著るしく制限することは言ふまでもない。この困難は、無産政黨を、多かれ少なかれ、危險と誘惑とに曝らさゞるを得ぬ。選擧費用においては、僅かにその十數分の一にしか當らない府縣會選擧の場合においてさへも、無産政黨は、この危險と誘惑とに、全く侵されなかつたとは云ふことができぬ。これは一部の候補者と當選者との性質が、これを告白してゐる通りである。來るべき總選擧の場合には、この危險と誘惑とは、一そう大きな力をもつて、無産政黨に迫り來るにちがいない。危險とは、選擧費用を負擔し得るものが、候補者として公認せられることである。選擧費用を負擔し得る者が立候補することは、必ずしも差支へはないが、選擧費用を負擔し得るといふ條件のみによつて、何人でもが候補者たり得ることは、無産政黨に取つての、明らかな危險であり、しば〳〵致命的な危險でなければならぬ。

無産政黨は、現行選擧法によつて加へられてゐる選擧權の制限と、戰はねばならぬ。金力候補者の擁立は、この制限と戰ふことではなくて、これと妥協することであり、この制限に順應することである。

○

ブルジョア政治勢力の強度の結成作用を前にして、無産政黨は、いかにこの勢力と鬪ふか。無産政黨は、もとより當選を無視することはできぬ。けれども大衆の動員は、當選者の絶對的數量よりも、さらに重要なことを忘れてはならぬ。選擧場への道は、最も廣大な大衆が、何らの危險をも冒すことなしに、最も容易に進み得る、最も道幅の廣い、最も平坦な道である。無産政黨はこの平坦な道に大衆を導びき得る以上の成功をもつて、より、、、、の道に大衆を導びき得る筈がない。それ故に、選擧は無産政黨の影響力の及ぶ、最大限度の指標となるものである。

無産政黨は、選擧によつて、この影響力を、最大限度に擴大しなければならぬ。それと同時に、無産諸政黨は、最も單純にして最も平明

なこの闘爭を、戰線統一の作用として働かしめなければならぬ。無產階級の單一な政治戰線の結成こそ、反動的帝國主義的ブルジョアの政治勢力の結成に對する、最も有力な答へだからである。

旗印のない二大政黨

興味は無產黨の進出力

緒方竹虎

議會解散を見越してといふ注文であるが、いまの政黨の對立である限り、如何なる切迫した事情の下においても、解散を斷言するのは冒險である。去年の議會は、周圍の勢ひ、誰が見ても解散の外なかつたのであるが、いよ〳〵蓋を開けると、例の三黨首會合といふ醜惡なる筋書の下に、朝野三黨の間に非解散の妥協が出來、國民は開いた口がふさがらぬ始末であつた。要するに、解散の利害が少しでも問題の場合には、十中の九分、解散は無いと見て差支へないのだ。たゞ今年は現任期最後の議會で、解散がなくとも、眼前に總選擧を免れぬといふところに、平生と違ふ事情がある。したがつて、もし解散の方に札を入れるとすれば、これが一つの材料となるので、それ以外には、今年特に解散を豫斷せしむる理由は、何ものもない。

× × × × ×

實をいへば、議會が解散になるか否か位は、疾くに、しかも公然定まつてゐて一向差支へないはずである。解散は議會を懲罰するの意味ではない。また、敵に不意討を喰はす必要もないのである。それを、政府の方では、政府から解散を買つて出るのは不穩當であるかのやうにいひ、反對黨の方でも、不信任案を出すのか、出さぬのか、何時もそこに多少の餘裕を殘して置く。まるで駆引づくなのが、まづをかしいではないか。

それといふのも、議會を解散して國民に訴へるといふ理由がハッキリしない、いはゞ理由なしに、あるひは政權中心の勝敗といふ方からばかり、解散非解散を考へてゐるからだ。政府の方では、國民に訴へて多數を獲、それによつて行ふといふ政策の目標は何もない。折角の地租委讓は何時の間にかウヤムヤにして了つてゐる。民政黨にしてもうまく多數を得れば、政權にありつけるといふスペキユレーションだけで、もし眼前に總選擧が迫つてゐなかつたら[illegible]

[illegible]

[illegible]

つたらう。いはゞ、政府も反對黨も、どちらでもよい、たゞ勢ひに任すといふだけである。イギリスの議會では、少數黨が天下を取れば、最初に先づ議會を解散することが慣例になつてゐる。一九〇六年、キャメル・バンナーマンの下に、自由黨が久しぶりで内閣を組織した時ロイド・ヂョーヂの聯立内閣が潰れて、保守黨のボナー・ローが内閣を組織した時、など、みなそうであつた。これは何もイギリス流だといつて、形式のためにやるのではない。議會政治の實際の運用上、多數の支持がなくては、政策らしい政策の實行が出來ぬからである。この意味からいへば、田中内閣は、最初から豫定して議會を解散すべきであつた。議會閉會中解散する先例を開くも、よかつたらう。それでなければ、内閣組織と共に、その重要政策——地租委讓、地方分權のごとき——を掲げて、議會開會までに津々浦々に遊説し、議會開會と共に、その政策に國民的裏書を求める意味において、解散を奏請すべきであつた。これはイギリスの眞似でも何でもない。議會政治である以上、當然踏まねばならぬ筋道だ。然るに地租委讓をはじめ、およそ重要政策らしいものは皆棚に上げ、そしてたゞ空に解散非解散を考へるのでは、懸引の仕合になるのは當然である。

× × × × ×

政民兩黨の關する限り、かうした盲打ちの總選擧であれば、いづれが勝つても、要するにまぐれ當りで、したがつて今からその勝敗を豫言するほど馬鹿氣たことはない。臨時議會における田中首相の肥料の

分配以來、政府にする事なす事、ほとんどヘマ許りである。こゝに、問題每に政府部内の不統一はどうだ。いまの政情は、眼前に普選に伴ふ無產黨の擡起を期待するところに、政府、反對黨ともに陣容のすこぶる亂れてゐる時において、イギリスのバルフオア内閣末期の政情に似たものがあるが、ことに『自分は慢性の風邪を引込んでゐるのでも一度風邪を引添へたら直ちに參る』と述懷したバルフオアの立場は第三者の眼には、田中首相の立場そのまゝの觀がある。たゞ日本製のバルフオアは、すこぶる樂天的なのと、恥も何も政權を持ちながら選擧に臨み得るのと、閣内にチエンバレンほどの暴れ者を有しないだけで助かつてゐるが、何處に政府の中心があるか、選擧に臨んで黨として何等國民に訴へるものを持たないところ、當時のイギリス保守黨そつくりだ。

しかしながら、鮮かな旗印を有しない點においては、民政黨も政友會と五十歩百歩である。政友會の地租委讓が世間の評判に上ると、民政黨でも、義務教育費の國庫全額負擔といふことを唱へ出したが、初めから慌てゝ作つた地租委讓の應急對抗策であつたゞけ、政府が地租委讓をウヤムヤにすると同時に、何處へか姿を消し、關西大會の場合にも、東京の大會の場合にも、濱口總裁は一言これに觸れなかつた。その外にも、電力の國家統制であるとか、教育制度の根本的建直しであるとか、民政黨創立當時には、いろんな意見もあつたが、いづれも最高幹部の決裁を經ぬいはゞ私製政策で、國民の頭には、田中内閣組

繼當時、政友會の山本幹事長の名で發表された五十餘項の『將來實現することあるべき政策』ほどにも響かなかつた。

× × × × ×

普選の下では、官權の干渉は從前ほどに効果はない。何とかいつても、買收も結局やりにくゝなる。そして、今後の選擧には、何よりも簡單明瞭に大衆に訴へる旗印と、大衆を引付ける、たとへば活動のスターにも例へるやうな、リーダーを必要とするのだ。いまの米國大統領クーリッヂが、一九二〇年、ハーディング大統領の下に副大統領に當選した時の旗印は、たつた一つ『法と秩序のために』といふのであつた。彼れがボストンの巡査罷業に際し、何はともあれ斷乎として鎭壓の鐵槌を下したことを知つてゐるアメリカの民衆は、無口な彼れから『法と秩序のために』といふ一言を聞くだけで、譯もなく彼れを當選させた。イギリスの保守黨が、一九二四年の選擧に、空前の多數を占めたのも、勞働黨の執政八ヶ月の間に、少數黨内閣下の政情不安定を十分經驗したのと、赤退治といふ簡單なスローガンが、うまく選擧心理に投じたからに外ならぬ。かうなることが、善いか惡いかは別とし、今後の選擧には確かにかうした傾向を免れなくなる。

打見たところ、政民兩黨ともに、簡單明瞭な旗印を缺いでゐることと、民衆的リーダーの無いことゝは、選擧に臨む上に、非常の弱味である。近ごろ既成政黨の評判が馬鹿に惡いが、議會政治には、國民のすべての利益を反映しなくては完全でない。この意味から、既成政黨は少くも既成勢力の利益を代表してゐるといふことで、十分に存在の理由を有するのである。有産階級といふか、支配階級といふか、いづれにしても既成勢力といふものが社會の一隅に存續する以上、議會だけが、無産階級獨占の議會になつて了つては、議會ではなくて、一種の無産階級專制になる。が、かく掲げる旗印もなく、たゞ朋黨的に勝敗を爭つてゐるのでは、結局國民の興味を遠ざかつてゆくだけであらう。

空氣が人を作らぬのか、人が空氣を沈滯させるのか、結局既成政黨の振はぬのは、よいリーダーが出て來ないからだと思ふ。昨秋行はれた府縣會選擧の結果から見ても、また二回の選擧で今日の既成政黨と新興の無産政黨とが勢ひを顚倒しようとは思はれない。今度の選擧においても、大體政友會が政府黨といふ利益を有するだけに第一黨、民政黨がこれと雁行して第二黨、無産政黨は地盤協定が緊密に行はれるとしても、要するに今度までは、よく何人の議員を出すかの問題であらう。イギリスの勞働黨は、一九〇六年、すなはちニューキャスル宣言により自由黨と手を切つた最初の總選擧において、急に四名から三十名に增加したが、これだけの成績を第一回の總選擧であげることは、餘程困難であらう。しかしながら、既成政黨もこの邊で面目一新を考へなくては、無産政黨がプロパガンヂストの時代から實際政治の時代に進み、議會政黨として大衆の信用を把握した時、または非常な大問題にぶつかつた時、一度に地辷り的敗北をまねくこと、イギリス

の自由黨が、大戰中を通じての不評判から、一九二四年の總選擧に、一擧四十餘名に減じたやうなことが無いとも限らぬ。議會は結局何時までも保守と進歩の對抗で進むのである。假りに新與の無產政黨が今日の既成政黨に取つて代るにしても、その間には無產黨中にまた、保守進歩の二分派が出來て、同樣の對抗を繰返すであらう。ラスキーがその政治學綱要の中に二大政黨主義の將來を論じ、『勞働黨の適在性の試驗は、その果して新しい二大政黨時代を作り得るか否かによつて決する』と書いてゐるのも、この意味において正しいと考へられる。が、いづれにしても既成政黨が今日のやうでは、その議會政治上の役目を完全に果しやうがない。

×　×　×　×　×

今日の既成政黨の面目一新をなすためには、例へば大チエンバレンのやうな、ロイド・ヂョーヂのやうな、米國なら、今度民主黨から大統領候補に立つアルフレッド・スミスのやうな、型を破つたリーダーの出現が何より必要だ。チエンバレンやロイド・ヂョーヂやアルフレッド・スミスが典型的政治家だといふのではない。たゞ皆それぐに、その當時の政界の型を破つて、その政黨なり政治舞臺なりに、活力を吹き入れたところに、學んでもよいものがあるのだ。三人が三人ながら正式の大學教育を受けてゐないのも面白いが、それだけ因習に囚はれず、思ふさま黨内を搔き廻して、所屬政黨の上に一時代を開いた。チエンバレンは議會生活に入つて僅か四年目に、ヂルクと棒組になつてグラッドストーンに入閣を强要する、廢翁の愛蘭自治案が氣に入らぬと、直ちに反對黨に籍を移して自黨政府の弱點を完膚なくやつ付ける、バルフオア内閣では閣議の承認なきに拘らず、どしぐ關稅改革案をもつて國民に訴へる。いはゆる黨の幹部にとつては持て餘しものであつたらうが、疲れた保守黨に血液を與へ、政治問題を經濟的に考へる新方面を開いた功績は大きい。ロイド・ヂョーヂも、いろぐ非難はされるが、一九〇六年、カーヂフでした『自由黨の政策を方嚮づけるためには勞働黨の援助を必要とする』といつた有名な演說も劃期的の先見であれば、あの時代に上院の保守勢力を向ふに廻して眞向から土地增價稅で戰つたことも、たしかに自由黨の血脈に新しい生命を吹き込んだものといひ得る。既成政黨もよいとして、その面目を新にするは、やはりリーダーの如何にある。政治の中心が議會から行政府に移つたとは、ロイド・ヂョーヂが全盛ごろに頻りに唱へられた非難だが、多數政治とはいへ、議會の多數が直ちに政策を考へるのではない。議會政治は、その多數によつて出來た内閣が、議會の支持を受けつゝ思ふまゝに主張を實行して行くところに妙味があるのだ。議會に豫算增額の權能が與へてないことによつて、それが制度化されてゐる。したがつて政策を考へ、議會をまとめて實行して行くには、何うしても創意の豐富な、彈力のある、リーダーが出て來なくては駄目である。政友會の地租委讓にしてもが、お座なりの負擔輕減にのみ結付けず、ロイド・ヂョーヂが土地增價稅で戰つたと同じく、むしろ大地主や都會富豪の負擔を

殺さうとも、これによつて政友會の將來を方鄕づけるまでに戰ひ抜けば、はじめて意義があるのであるが、それには如何にも原動力となる人間がない。そうでなくて地主の氣受けをのみ考へてゐれば、結局地租委讓は荷厄介の代物となるだけであらう。今後の十年乃至十五年は、要するに新興勢力によつて刺戟された既成政黨が、如何に過渡期を凌ぐかゞ問題の中心となるのであるが、原動力が起らなければ、新しい形勢も展開せず、今度の總選擧においても、相變らず機密費事件や松島事件を蒸返すだけで、既成政黨の關する限り、政民兩黨の開きがどれだけといふだけの問題に過ぎない。

× × × × ×

民政黨にチエンバレンの關稅改革なく、政友會にロイド・ヂョーヂの土地增價稅なき選擧では、興味はたゞ新興の無產政黨が、一回の總選擧によくどれだけの議員を選出し得るかといふことに歸するのである。勞働黨の蹶起が期待されたイギリスの一九〇六年の總選擧では、保守黨も自由黨も豫めこれに備へ、ロイド・ヂョーヂのカーヂフの演說ともなつたのであるが、政友會民政黨は、この劃期的選擧といふのに、ほとんど手ぶらで臨むのである。これは無產黨にとつて何よりの好機會といはねばならぬ。たゞ惜しいことには、無產黨同志の理論鬪爭が餘りに長くして、選擧準備が十分間に合はなかつた憾みがある。ダラ幹とは、豐富な無產黨用語の一つであるが、ダラ幹といふ名は既成政黨の幹部にこそ當はまるかも知れぬが、無產政黨內では、ダラ幹どころか、實は少しく幹部の藥が利かし過ぎてある。戰ふためには馬車馬を追ひまくるやうなミリタントな方法も必要かも知れぬが、無產大衆には、既成政黨を眼の前に置きながら、何故に無產黨同志で戰はねばならぬかゞ分らない。理論の殿堂には讓一本止めさせぬといふのだらうが、大衆は、理論上の鬪爭よりも、既成政黨によつて顧みられなかつた無產者の利益を、無產黨の力によつて進めんことを、ヨリ熱求してゐるのである。要するに今の無產黨運動は、理論の殿堂から大衆のレベルまで引下すことが必要である。無產黨メード・プレーンでなければならぬ。そして無產黨が、ハツキリ大衆の眼に、反既成政黨の政黨、無產大衆のための政黨といふことになれば、その得る投票は決して二十八萬位ではないはずだと思ふ。二大政黨が無意味な黨爭を繰返してゐる時に、日本の議會政治に新しい命あらしむるためにも無產黨の進出が要望されるのだ。必ずしも一回の選擧で多數の當選が得られなくともよい。第一回の普選を意義あらしむるために、大山、麻生、安部、鈴木氏等の頭株だけでも、揃つて議會に出して見たい。

五十四議會は宜しく自ら解散を上奏すべし

清瀬一郎

本文起草の時に於ては、民政黨は不信任案を提出すべしと報ぜられて居る。之に對し同派以外に相當の不信任賛成者があるから、此不信任案は通過の形勢に在る。そこで、政府は今期議會を解散すべしと豫想せられて居る。

しかし乍ら、議會は、こんな手續を俟たず、寧ろ自發的に解散を上奏するが當然ではあるまいか。日本國の輿論は數年前、普通選擧の必要を承認し、制限選擧に依り構成せられたる現在の議員までが、普通選擧を必要なりとし、其案を通過せしめたのは既に二年前である。此二年間に普選實行のための準備は出來上つた。事務的に言へば、選擧人名簿も完成したし、普選法の疑義も略ぼ解決せられた。又、普選法の諸規則は、昨秋の地方議會の選擧に於て一たび運用せられたる經驗がある。第五十四議會は、それ故、普選即行といふ意味に於て直ちに自ら解散を上奏するのが最も當然なる行き方であると思ふ。

今日、吾々一般國民の見方は斯うである。政友會内閣は失政を重ねて居る。しかし、これは政友會に限つたことではない。民政黨も亦同一である。程度の差はあるにしても、政友會と民政黨とは同一である。民政黨が政友會内閣を彈劾しても、此彈劾には大に共鳴するといふ心は起らぬ。もとより、政友會に失政多く、且、彼の爲すことが極めて露骨であるから、之を惡む心は強いが、政友會の爲したことが、民政黨に勝つて居るか否かといふやうなことを、普選第一回の選擧のイッシューとせられることは迷惑である。既成政黨の爲すことはことごとく惡い。獨り既成政黨が惡いのみならず、今日の議會自體が眞の日本の議會として適當でないのである。こゝに普選第一回の選擧の眞意義があるのである。

議會政治が創まつてからこのかた、今回の我日本の議會が立つて居るやうな立場に、議會が置かれたことはまだ曾てない事である。それ故、此場合の出所進退については前例がない。立憲の常道といへば、グラッドストン、ヂスレリー時代の英國の前轍の外に出でることが出

來ぬと考へて居るのは迷信又は錯覺である。

終りに一言す。一兩年來、無產政黨の人々の間に議會解散の請願運動なるものが行はれて居つた。これに對して、政府は非常な壓迫を加へ來つた。解散請願の文書を散布する者は檢束せられた。議會解散請願の演說會は解散を命ぜられた。私は、其の何の理由であるかはサッパリ判らぬ。奇妙なこともあればあるものである。請願を爲すのは國民の重要なる權利である。請願令に準據し、至尊に請願すること、議院法に依り帝國議會に請願することは國民の重要なる權利である。此權利が惜し氣もなく蹂躪し去られ、而もこれが政治問題と爲らなかつたのも、サスガは日本である。私は今、此請願と同一の主旨のことを帝國議會自身が上奏すべきものであると主張する。

谷崎潤一郎著

四六判 六百三十頁

定價壹圓 送料二十錢

新選 谷崎潤一郎集

最新刊

本集は現代日本文學全集の姉妹出版であつて同全集に編入せざりし氏の名作を悉く網羅してゐる。八ポイント組四六判極上製にして總頁數六百頁に及ぶ。文學全集と併讀せば僅か一圓で氏の大全集を讀むことが出來る譯だ。

（目次）

神童。羹。惡魔。續惡魔。あくび。The Affair of Two Watches。前科者。異端者の悲しみ。人面疽。二人の稚兒。玄奘三藏。ハッサン・カンの妖術。柳湯の事件。富美子の足。ちひさな王國。獨探。呪はれた戲曲。或る少年の怯れ。母を戀ふる記。兄弟。恐怖。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

活版平版

オフセット

高級美術印刷

KIパントーン
プロセス精版法

其他ノ印刷

各種製本裝釘

早稻田分工場　東京・牛込・早稻田大學前
電話牛込(34)一五九一

本社　東京市牛込區榎町七番地
電話牛込(34)二四四〇・二四四一
二四四二・五五〇二

日清印刷株式會社

丸ノ内出張所　東京・丸ノ内・郵船ビル七二〇號
電話丸ノ内(23)三〇八二

大阪出張所　大阪市北區西堀川町三四
神田原色印刷所内　電話北一六三三

神戸代理店　神戸市榮町四丁目岡部商店印刷事務所
電話三宮三四五三

ムッソリーニ傳

澤田謙氏著

ムッソリーニ曰く……『俺の親父は鍛冶屋だつた。その息子の俺は、これから伊太利國民の心を鍛直すんだ。』と、**何たる痛快の一語ぞ！**

貧乏鍛冶の息子から、遂にイタリーの獨裁王となつた彼の波瀾極まりなき經歷こそ……**眞に小說よりも奇しき物語である。**或は小學教員から左官へ、或は浮浪兒として牢獄へ、或は社會鬪士として權勢と戰ひ、一度世界大戰起るや、勇敢なる一軍曹として塹壕の砂を浴み、後三十萬の黑シャツ隊を率ゐて羅馬の都に討ち入り、靑春わづか三十九にして伊太利の國運を双肩に擔へるムッソリーニの勇姿！

壯烈痛快！　英雄兒の大面目！

見よ、英傑の意氣！英雄兒の痛快味！來れ何人も急ぎ見よ！

四六判函入・口繪數葉

定價壹圓貳拾錢

—（送料拾錢）—

東京本郷駒込坂下町一

大日本雄辯會講談社

（振替東京三九三〇番）

石川啄木と女性

吉田孤羊

1

博士森鷗外を中心として、吉井勇、平野萬里、石川啄木の三人が、交互に編輯の局にあたる約束のもとに、雜誌『スバル』が發刊された明治四十二年前後のことである。その當時石川啄木は、流離放浪約一ケ年の北海道生活を終つて、自然主義の潮流めがけて小說で一旗あげる決心の下に上京し、本鄕に不自由な下宿生活をしてゐたが、この『スバル』を機緣として、吉井氏との交情が加速度的に進み、本鄕三丁目の天麩羅屋とか、下宿の啄木の部屋とか、とにかく雜誌の相談なんかで顏をつきあはせるたび、淺酌低唱しては自然主義を論じ、文學とデカダンを談じたものである。かうして交情の深度が加はり、酒杯の交換の數が增すにつれて、話は雜誌や文學ばかりにとゞまらず、放肆な淫猥話にまで辷つてゆくのが常であつた。ある日のことである。恐らくその日も一杯機嫌でそんな話をした序だつたであらう。啄木は吉井氏に向つて、「君は一體今までに婦人を何人もつたのか」とたづねたものである。すると吉井氏は聊かも躊躇する模樣なく、「さうさね、三十四五人もあるだらうか。君には何人ばかりあつたんだ。」と逆襲して來た。啄木は少しもぢ〳〵してゐたが『さあ、十四五人のところだらう。處で、君はその婦人のうちで、ゆくべき境地まで進んだのは何人あるんだ。勿論玄人を除いてだよ。』と更におつかぶせてたづねた。吉井氏は瞬間的に答へた。『十四五人だらう。時に君のは？』すると啄木は『六七人ばかりしかないよ。』と、いくらか吉井氏の壓倒的な數字にへこまされた形で、しよげたやうな聲で小さく答へた。

私はこの秘められた啄木と吉井氏とのデカダン的なエピソオドを、このまゝ信じようとは勿論思はない。猛烈な酒の上で、若さのつけ元氣で、二人とも、婦人の數の多いことで男性としてのプライドの高さを示し、肩を張り合ふとした、罪のない稚氣からの作り話でやりあつた對話だつたかも知れない。だが、誰でも、啄木の歌集『一握の砂』や、『悲しき玩具』を讀んだ人なら、更にその灰色の二冊の歌集の何パーセントかを占めてゐる、あの當時[illegible]つた人

なら、そのモデルとなつた女性のどんな人であつたかを知りたいといふ欲望の湧くのを感じないではゐられないであらうと思ふ。事實、私自身かなりその欲望を押へきれぬまで湧かした一人である。或意味に啄木を研究し出して足かけ七年、私が彼の思想を檢討し、彼の藝術を味へば味ふほど、啄木のあの苦惱そのものゝやうな二十七年の短生涯の路傍に、幾輪かの可憐な野ばらのやうに咲き誇つてゐる女性に對して、どうして無關心で居られやうか。啄木のやうな才氣煥發の天才の周圍にはどんな女性が呼せられてあつたか。そしてその女性達が、薄倖詩人の短生涯といふ悲劇のステージにどんな役割をつとめたかを知るといふことは、とりも直さず、ある一面からいつて、多情的な詩人啄木を理解する一個の方法手段にもなりはしないだらうか。

傳記文學の興隆な外國は流石に違つてゐる。ゲエテなどはその長い一生に、數へ盡せぬほど多くの才媛淑女を友ともし、且つ愛せられもして、恣に女性の感化を身に受けてゐるせいもあらうが、單にゲエテと女性を論じた研究書として、キユンの『ゲエテ四圍の婦人』ボイメルの『ゲエテと彼の女性の友』ボイエードの『シヤロッテ・フオン・シユタインの獻身』などゝいふのが出版され、更に素晴らしい現象は、ゲエテとシユタイン夫人との戀は、精神的にとゞまつたか、それともまた肉體的の境地まで進んだかといふやうなことまで、ゲエテ研究家の間に烈しい議論を捲き起してゐると聞いてゐる。私は勿論こゝでゲエテと啄木を並べて見やうなどゝは夢にも思はない。たゞ私が以下少しばかり書き記してゆく、啄木をめぐる婦人の事蹟についても、將來研究者が出てくれて、ゲエテ研究者の深さにまで行かぬまでも、せめて足許程の論議が試みられるやうになれば、私のこの小さな努力は酬はれるといふものである。

一體文學者にかぎらず、死後その人の價値が何かに定まると、生前知遇のあつた人々の間には、故人に對する全く相反した二つの傾向の感想の湧くのは爭はれない事實のやうである。一つに、一種の反感と反撥と幾分の嫉妬的感情から、何かにつけてけなしつけるのがさうであり、今一つは、周圍に湧き起る讃辭のやうな雰圍氣の中に陶醉されて、つまらないことにまで、勿體附けの說を立てゝ故人を偶像化するのがそれである。傳記々者にとつてこのいづれもが極めて危險な陥穽である。私がこゝに述べようとする啄木をめぐる女性についても、出來るだけこの陥穽は避けりしてでも避け、ドグマを排斥し堅い概念をなるべく拔きにして、極く平面的に書く考へである。尙、啄木と女性といふ標題を示せば、當然、その母堂、夫人、姉妹から書き起さなければならないのであるが、これら肉親の人々についてはいづれ他の機會に讓ることゝして、こゝには肉親以外の女性についてだけ述べることにとゞめたいと思ふ。

2

淡いエロチックな幼少時代の回想を主題とした啄木の短篇「二筋の

血」（明治四十一年六月作）を讀んだ人なら、あの中に出て來る可憐な美少女佐藤藤野といふ名を想ひ起してくれるに相違ない。都會育ちの悧發な兒で、楡澤新太郎といふ六歳になる、啄木自身を描いた少年との交情を描き、後にその藤野さんが過つて水車に捲きこまれて痛ましい慘死をとげたことを述べたものであるが、これは郷里の回想らしく、モデルも實際あつたことは肯かれる。といふのは、彼自身後に

大形の被布の模樣の赤き花
今も目に見ゆ
六歳の日の戀

――「一握の砂」――117――

と述懷してゐるのでもわかる。だが殘念なことには、現在私にはこのモデルがはつきりとわからない。今一つ、啄木が釧路新聞にゐたころ、同紙に發表した隨筆「雪を見つつ」には、彼が盛岡中學校一二年のころ、プラトニックな戀の對照として、二つ三つ歳上のお艶さんといふ少女を懷かしげに回想してゐる。この隨筆に依ると、後にこのお艶さんは、ある田舍の都會（盛岡？）の教師のもとに嫁ぎ、子供を一人もうけてから肺を患つて世をはかなくしたことになつてゐる。これもどうやら前の藤野さん同樣生きたモデルがあるらしい。何故といふに、このお艶さんをその中學時代戀ひ慕つてゐた啄木の一親友が、父親に死別して早く中學を退き、啄木が明治三十七年の初秋、第一次の北海道旅行を終へて歸郷したとき、青森から乘つた東北本線の汽車の中で、この一親友が車掌をしてゐるのにはからざる邂逅をしてゐる。

かの旅の汽車の車掌が
ゆくりなくも
我が中學の友なりしかな

――「一握の砂」――83――

啄木が際に小説に隨筆に、こんなに懷かしく振りかへつてゐる女性で、このお艶さんと藤野さんのモデルだけはどうしてもわからない。他日私の研究がもつと奧深くまで進んで行つたなら、あるひはひよつとそのモデルがたしかめられないともかぎらない。が、いづれにしても三十年から四十年近くも前のことであるから甚だ心細い次第である。

3

明治三十八年の四月十五日、すなはち啄木が二十歳で、かの出世作『あこがれ』を出版した前の月のことである。當時詩壇の總元締であつた新詩社が主催となつて、兩國の伊勢平樓で同人演劇會が開かれたことがあつた。與謝野寛、高村光太郎の兩氏を初めとして『明星』の錚々たる文士詩人連中が、いづれも白粉を塗り鬘をかぶつて舞臺に現はれるといふ有樣、觀客席も大部分は文士や俳優で埋まるといふ古今未曾有のシーンを展開し、恰も日本の文學者全部を網羅した一大演藝會の觀を呈した。この演劇會で啄木は、劇のヒロインが死ぬ際に、舞

舞臺で笛を吹かす役をつとめて大評判だつたことがある。何せこの劇團の出演者は、全然の素人ばかりなので、肝腎の女形をつとめる者がなく、八方手を盡して苦心した揚句、理髪の楢木といふ踊の師匠の娘で、丸ぽつちやに肥つた可愛い丶十六七の少女を舞臺に立たせて無事幕を下したのであるが、この演劇會が機縁となつて、啄木と今一人新詩社の若い同人がこの娘と親しく交通するやうになつた。だが、啄木の方は、この翌月『あこがれ』を出版すると同時に、節子の君とも また新らしい處女詩集を故郷へ唯一の土産に、悄然として盛岡に引揚げたので、この娘との交通が少くなり、かてゝ加へて、パンに脅迫され、故郷澁民村の代用教員や、北海道でのあわたゞしい新聞記者生活をやつて、この間三年も過ぎ去つてゐるので、啄木も殆どこの娘のことは忘れた形であつたが、それでも時候見舞や年賀状の交換位は絶やさなかつたらしい。彼が明治四十一年の四月、三度目の上京をして本郷菊坂町の赤心館に再び下宿生活を初めたころ、ふと思ひ出してこの娘に宛て、『また上京したから遊びに來ないか』といふ意味の手紙を送つた處、匆惶としてこの娘が啄木を下宿に訪ねて來た。さて、この娘が啄木の東京を留守にしてゐた三年間をどうしてゐたかといふに、彼女が憎からず思つてゐた啄木に去られたゝめ、その愛情は今一人の新詩社の同人の方へすつかり傾いてしまひ、かなりな境地まで突き進んで行つたらしいが、この若い同人も、あまりこの娘が執拗につき纏ふのがうるさくなるかして、九州の方へ逃げ去つてしまひ、啄木から上京した遊びに來いといふ知らせを受取つたときは、ちようど二羽の小鳥に北と南へ飛び去られたやうなブロークンハートに傷みぬいてゐたをりであつたので、啄木からの手紙を見るや否や飛ぶやうにして訪ねて來たのであつた。啄木にしても上京して間もなくではあり、また東京の空氣にしつくり浸りきれないころでもあり、且つは行李一つの殺風景な下宿の部屋に、艶めかしい下町風の振袖姿の娘の來訪は、どんなにか啄木の心もその部屋も明るくしたのかしれなかつた。啄木の歌にかういふのがある。勿論この娘を歌つたものと斷言はしかねるけれども、歌の配列からいつても、私にはこの娘を歌つたものといふ以外に心當りがない。

君來るといふに夙く起き
白シャツの
袖のよごれを氣にする日かな
――「一握の砂」――253――

この娘がかうして一度啄木を訪ねてから、『今この人を失つては一生浮ばれない』といふやうな烈しい熱情で、殆ど毎日のやうに啄木の部屋へ押かけるやうになつた。初めのうちこそは啄木も、一度路傍に見て通つた一輪の花が、昔にいや増さる美しさで咲きさかつてゐるのを見るやうなムードで、この娘を迎へてゐたかも知れないが、彼のその當時の心境にして見れば、函館には老母や愛妻がいたいけな愛嬢を抱へて、彼から上京して來いといふ知らせを千秋の思ひで待ちながら細

細と暮してゐたころではあり、殊に田舎新聞でこそあれ編輯長といふ得安からざる椅子まで捨てゝ、一意創作を書いて一家をなさうといふ堅い決心のもとに上京して來てゐるだけ、その仕事が屢々この娘のために妨害されるといふことは、彼にとつてかなりの苦痛であつたに違ひない。偶には下宿の主婦に頼んで居留守をつかふこともあつたが、一旦啄木の愛に狎れた娘は、主婦がどんなに言葉たくみに留守だと斷つても、づか〳〵啄木の部屋に上つて來るまでになつたので、啄木もすつかり弱つてしまひ、或る日、しんみりした調子になつてその娘に、「僕は今まで君を欺いてゐたやうで甚だ心苦しいが、僕には實際妻も子もある身なのだ。それも最近東京へ呼び寄せなければならないやうな事情にあるのだ。だからもう僕の事なんか諦めて、これからあまり頻繁に訪ねて來ないやうにして貰へないか。」と事をわけて物柔かに説いて聞かした。處が今までぢつと脣を噛んで啄木の話を聞いてゐたその娘は、急に疊に打伏して泣きむせび、しばらくしてしやくり上げながら、「ではこれから決してお訪ねしません。諦めます。私はもう仕方がありませんから藝者になつて暮します。妹も藝者をして今淺草に出てゐますから、あちらへ遊びにゐらしたらあげてやつて下さい。」といひ、妹の藝名まで敎へて立ち去つたが、それきりこの娘はふつつり訪ねてこなくなつた。啄木とこの娘のラヴアフエアも、これだけで終つてゐるとすれば極めてあつさりしてゐるが、次のやうな、ちようど江戸時代の艶物語にでもありさうな可憐なエピソオドが一つ殘されてゐて、このはかない戀の最後の幕を閉ぢてゐる。

かうしてこの娘が啄木を訪れなくなつてから、たしか一個月近く過ぎた翌年四十一年の初春ころのことではないかと思ふ。當時北原白秋氏は歌の上で啄木と親しくしてゐたが、一方は社會の隅々を滑り渡つて、世の中の酸いも甘いもすつかり心得てゐた苦勞人だつたし、一方は九州柳河の舊い大きな酒屋の長男として、そのころはもつとも既に左前の境涯ではあつたが、それでもその母堂から毎月小判を二枚づゝ送られて、それを兩替しては小遣にあてゝるといふやうな、いはゞ世の中の明るさのみしか知らないやうな坊つちやんであつたので、年齢こそ同じであつたが、いつも啄木の方がぐつと兄貴らしい態度で白秋氏に接してゐた。時偶、啄木から北海道放浪時代の艶話をのろけたつぷりに語つて聞かせられても、「ハアハア」と但眞面目な顔をして謹聽してゐるといふ風であつた。

或る晩のことである。啄木は小遣錢を七八圓懷中にして、この坊つちやんを連れて淺草をぶらつき、とある藝妓屋に上りこんだものである。銚子も一二本横にしてから、啄木はふと、かつて自分の部屋で泣いて歸つて行つたきり、それなり訪ねて來ない踊の師匠の娘のことを思ひ出した。そしてその妹が淺草で藝者をしてゐることを思ひ浮べた。「ひよつとすると出てゐるかも知れないぞ。」といふやうな好奇心から、幸ひその妹の方の藝名も記憶にあつたので、女中を呼んでこれこれの藝者がゐるかと聞くと、「ゐますよ。おかけになりますか。」とい

ふ。おやすく呼んでくれと頼んだら、しばらくしてその妹の方の藝者が姿を現はした。啄木はその妹藝者に酌さして飲み、自分もその藝者に酌をしたりなんぞしてから、いくらか改まつたやうな調子で『君にかういふ姉さんがあるだらう。』といつてその姉の名をいふと『アラッ！　お馴染！』とその妹は眼を圓くした。『いやそんな者ぢやないか、今こゝで藝者をしてゐやしないか。』とたづねると、『えゝ出てゐます。かけて下さる？　呼びませうか。』と出た。啄木は流石にドキリしたが、『ウン』と頭を縦に振つた。妹は座を立つて電話室に下りて行つてすぐ歸つて來た。『ゐたかへ。』と啄木。『えゝ今ちようどお座敷があいてゐましたから。』と妹藝者。稍々あつて外に俥のとまる氣配がして、やがてトン／＼階段を登つて來る柔かい女の足音、それが部屋の前でとまつて襖がスウーとあいた。姉藝者である。『今晩は………』とお辭儀して顔をあげ、啄木の顔を見るや否や『アラッ！』と頓狂聲をあげてたぢ／＼と廊下へ二三歩退いてしまつた。彼女はかつて死ぬほど戀ひ焦れたその當の相手が呼んだものとは夢にも知らずに來たのである。姉の狼狽したこの有様を見るや否や、その妹は立ち上つて、『何をそんなにはにかむんです。みつともないぢやありませんか。』とばかり、無理矢理袖を捉へて座敷へ引入れた。この様をさつきから眺めてゐた坊つちやんの白秋氏は、すつかりあてられてしまつて眼ばかりパチ／＼やつてゐた。この一夜が白秋氏をして女性、とりわけかうした社會の女性に接觸したそも／＼だつたのである。

明治四十五年四月十三日午前九時三十分。啄木は遂に貧と病に斃れた。たしかその翌日だつたらうと思ふ。親友金田一京助氏か、啄木の遺骸の安置されてあるひと間で、來訪者の受付をしてゐたとき、この白秋氏が默々として訪ねて來た。啄木の死顔に蔽はれた白布をとりのけ、その屍に清水を捧げてから、その枕邊に座つたまゝ三十分近く一語も發せず、腕を組んだまゝ、蒼白く痩せこけた啄木の死顔をぢつとみつめてゐたが、その眼には涙さへ浮んでゐた。やゝあつてから金田一氏を顧みて、『僕に女を覺えさせたのは、この人——この人——』といつて涙にぬれた微笑を洩したとか。

この藝者が今どこにどういふ生活をしてゐるか私にはわからない。五六年ほど前のある夏の日、土岐哀果、金田一京助、江馬修の諸氏と一緒に、啄木の故郷澁民村を訪れたとき、金田一氏が私に、『石川君が亡くなつてから、淺草の墓にしば／＼花束を捧げてゆく意氣な下町風の婦人のあるのを見たけれども、誰だか未だにわからない。』と語られたことがあつたが、ひよつとするとこの藝者ではなかつたらうか。私にはなんだかそんな氣がしてならない。啄木の歌にかういふのが一首ある。

何時なりしか
かの大川の遊船に
舞ひし女をおもひ出にけり

——「一握の砂」——250——

この歌も、この藝者を歌つたものとは断言を憚るが、私一個の研究では、この藝者の外にモデルが思ひ當らないので心覺えまでにつけ加へて置く。

4

啄木が明治三十九年の五月、盛岡で出した雑誌『小天地』に失敗して澁民村に引揚げ、かつて自分の學んだ郷校に、月給八圓の代用教員として教鞭をとつてゐたころ、同じ机を並べてゐた彼よりは三歳ほど年上で、上野さめ子といふ女教師がゐた。稍々頑固に近いクリスチヤンで、啄木もあまり好感はもつてゐなかつたらしいが、それでも頭の岩のやうに古く堅い田舎小學校の先生仲間で、他に話せる同僚がなかつたので、この女教師が唯一の話相手だつたらしい。啄木の小説『雲は天才である』(明治三十九年七月作)には、この上野女史をこんな風に描寫してゐる。

『若し此の小天地の中に自分の話相手になる人を求むれば、それは實に女教師一人のみだ。芳紀や﹅過ぎて今年正に二十四歳、自分には三歳の姉である。それで未だ獨身で、熱心なクリスチヤンで、讃美歌が上手で、新教育を受けて居て、思想が先づ健全で、顔は？顔は毎日見て居るから別段目にも立たないが、頬は桃色で、髪は赤い、目は年に似はず若々しいが、時々判斷力が閃めく、尋常科一年の受持であるが、誠に善良なナースである。で、大概自分の云ふ事が解る、理のある所には敬服同情する。』——『啄木全集第三卷』——三一〇——

同じく啄木の短篇『菊池君』(明治四十一年九月作)には、彼女を福富とし、啄木自身を甲田といふ假名でかう書いてゐる。この『菊池君』一篇を讀むと、啄木と彼女との交情の輪廓を朧氣ながらも摑むことが出來る。

『甲田は何時しか、考へるともなく福富の事を考へてゐた。考へると言つたとて、別に大した事はない。福富は若い女の癖に、割合に理智の力を有つてゐる。相應に物事を判斷してゐれば、その行ふ事、言ふ事に時々利害の觀念が閃めく。師範學校を卒業した二十三の女であれば、それが普通なのかも知れないが、甲田は時々不思議に思ふ。小説以外では餘り若い女といふものに近づいた事のない甲田には、何うしても若い女に冷たい理性などがありさうに思へなかつた。(中略)それから又、甲田は尋常科の一二年には男よりも女の教師の方が可いといふ意見も認めてゐる。理由は、女だと母の愛情を以てそれらの頑是ない子供を取扱ふ事が出來るといふのである。ところが、福富の教壇に立つてゐる所を見ると、母として立つてるのとは何うしても見えない。横から見ても縦から見ても、教師は矢張り教師である。福富は母の愛情の代りに五段教授法を以て教へてゐる。そんな事を、然し、甲田は別に深く考へてゐるのではない。唯時々不思議なやうな氣がするだけである。そして、福富がゐないと、學校が寂寥がなくなつたやうに感じる。福富は滅多に風邪位では缺勤しないが、

毎月、月の初めの頃に一日だけ休む。此木田は或る時、福富さんは乾度毎月一度お休みになりますな。」と言つて、妙な笑ひ方をした。それを聞いて甲田も、成程さうだと思つた。すると福富は、「私は月經が強いもんですから。」と答へた。甲田は大變な事を聞かされたやうに思つて、見てゐると、女教師はそれを言つて了つて少し經つてから、心持顏を赤くしてゐた。福富の缺勤の日は、甲田は一日物足らない氣持で過して了ふ。それだけの事である。互ひに私宅へ訪ねて行く事なども滅多にない。彼はこの村に福富の外に自分の話對手がないと思つてゐる。これは實際である。そして、決してそれ以上ではないと思つてゐる。人氣の無いやうな、古い大きな家にゐて、雨滴の音が耳について寢られない晩など、甲田は自分の神經に有機的な壓迫を感じて、人には言はれぬ妄想を起すことがある。さういふ時の對手は屹度福富である。肩の辺り、腰の周りなどのふつくらした肉附を思ひ浮べながら、幻の中の福富に對して限りなき侮辱を與へる。然しそれは其時だけの事である。毎日學校で逢つてると、平氣である。唯何となく二人の間に解決のつかぬ問題があるやうに思ふ事のあるだけである。(中略)福富は角ばつた顏をした、色の淺黑い女である。』

――「啄木全集」第三卷――532,3,4,5――

啄木の歌集『一握の砂』の中の主としてふるさとを回想した歌を収めてゐる『煙』の章には、この女教師をモデルとしてから歌つてゐる。

わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな―123―

あはれかの男のごときたましひよ
今は何處に
何を思ふや―123―

わが庭の白き躑躅を
薄月の夜に
折りゆきしことな忘れそ―127―

わが村に
初めてイエス・クリストの道を説きたる
若き女かな―127―

この上野さめ子女史は、啄木がまだ教鞭をとつてゐた明治三十九年の十月かに他村の小學校に轉じて澁民村を去つたが、現在澁民村の人人の噂では、京都方面のある教會に傳導師かをつとめて平和な月日を送り迎へてゐるといふ。

5

この上野さめ子女史の後任として來たのが堀田秀子さんである。堀

手縣九戸郡種市村といふ、岩手縣の最北の青森縣に隣接した村の出身で、岩手縣立師範學校女子部（現在獨立）を出た啄木よりはたしか一歳年上、月給も啄木よりは四圓ほど多い十二圓の先生であつた。この秀子さんは前のさめ子さんに較べると極く內氣な娘々とした人であつた。啄木の未完成の自傳的小說『足跡』（明治四十二年スバル第二號）には並木孝子といふ名で出て來る親切な思ひ遣りの深い女敎師が、この秀子さんをモデルとしたものであるし、短篇『道』（明治四十三年新小說二月號？）には矢澤松子といふ名で描かれてゐる。この『道』にはいかにも秀子さんが生々と浮彫のやうに描かれてゐるので、その俤の現はれてゐる部分だけを書きぬいて見る。この中に出て來る今井多吉といふ若い準訓導はいふまでもなく啄木自身である。

『隣村のS――村からも、本校分校合せて五人の敎師が揃つて出懸ける事になつた。其の中には赴任して一月と經たぬ矢澤松子もゐた。「貴方もお出でになつては何うです？」斯う校長に言はれた時、松子は無論行くべきものと思つてゐたやうに、「參ります。」と答へた。山路三里、往復で六里あると聞いても、左程驚きもしなければ、躊躇する態もなかつた。机を向ひ合してゐる準訓導の今井多吉は、それを見ながら前の女敎師を思ひ出した。獨身にしては老け過ぎる程の齡をしてゐた其の女の、甲高い聲で生徒を叱り飛ばした後で人前も憚らず不興氣な顏をしてゐる事があつたり、「女」といふ看板に事々に勞を惜んで、樂な方へ樂な方へと廻つてばかりゐたのに比べて、齡の若いとは言ひながら、松子の何の不安もなげに溫しく自分の新しい境遇に處して行かうとする明るい心は、彼の單調な生活に取つて此頃一つの興味であつた。前の女敎師の片意地な基督敎信者であつた事や、費用をはぶいて郵便貯金をしてゐる事は、それを思ひ出す多吉の心に何がなしに失望を伴つた。それだけ松子の思慮淺く見える物言ひや、子供らしく口を開いて笑つたりする舉動が、彼には埃だらけな日蔭のやうに沈んでゐる職員室の空氣を明るくしてゐるやうに思はれた。』

この秀子さんと啄木との交情はかなり深かつた。啄木が職員會議か何かで、校長の遠藤忠志氏や、次席の某氏と授業上のことについて激しく議論を鬪はしたりなんぞすると、秀子さんはいつもつゝましいながらも力強く啄木に味方して一步も讓らなかつたさうである。明治四十年の四月、彼を慈父の如く慕つてゐた高等科の生徒を煽動してストライキをやつて學校を追はれ、北海道を放浪してゐたときも、東京に出て詫びしい下宿生活をやりながら、賣れる宛もない小說を書いてゐたとき――その當時秀子さんは鄕里九戸郡のある小學校に轉じてゐた――も、二人の間には切手を二枚も三枚も貼つた長い手紙が絕えず交換されてゐた。

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたる夕
――「一握の砂」――

この歌は實に、啄木が秀子さんに宛てゝ長い手紙を書いたときの述懐である。これは決して私の當推量ではなく、啄木自身金田一氏に『これは秀子のことを歌つたものだ。』と言つてゐたといふから間違ひはない。彼が金田一氏と本郷に同宿してゐた頃、この秀子さんを懐かしがつて、夜分故郷の話などが出るたんび、よく沁々と語つたものなさうである。そんな話をするとき啄木は秀子とは言はず『螢の女』と言つてゐた。『一握の砂』の『煙』の章に出て來る左の二首はいふまでもなくこの秀子さんを歌つたものである。

ほたる狩
川にゆかむといふ我を
山路にさそふ人にてありき—132—

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聴きけれ—130—

私が澁民村の知友に、この秀子さんについてその後の消息を二三度問ひ合せたが、やつぱりたゞ東京に出てゐるといふことだけしかわからないといふ同じやうな返書に接してゐる。啄木が秀子さんに與へた、所謂『誰が見ても我(啄木)をなつかしくなるがごとき長き手紙』がまだ秀子さんの手もとに保存されてあつて、私のやうな自分の一生を啄木の研究に捧げてゐる者に讀まして貰へるのだつたら——そしてそれが公けに發表して差支へないものになつたなら——こんな空想を描くのは決して私一個のひとりよがりな慾望ではないだらうと思ふ。

啄木の代用教員時代の教へ兒であつた水上波之助(本名田鎖清)氏は、その稿『代用教員時代の石川啄木』下(岩手毎日新聞大正五年六月二十一日所載)で秀子さんのことをかう書かれてゐる。私はこれについては是も非も言はない。たゞ啄木にかう觀察してゐる人もあるといふ一例として左に原文のまゝ抜書きするだけのことである。

『彼の家のかの窓にこそ春の夜を
秀子と共に蛙ききけり

この當時九戸郡種市村の出身の堀田秀子と云ふ人が小學校一年の受持教師であつたがその人と何か語りつゝあつた事と思はれる。田舎の學校は一般に蛙の鳴く頃は農務繁忙になつて缺席のあるのは免れないから之は先生達の最も奮勵する時であらう。夜深更を破つてまでも督勵に出掛ける先生も他の學校にはあると云ふのだから秀子先生と二人で兒童の督勵のことでも相談してゐたのでせう。その時は僅も一日一夜を延びて行く頃の晩の事であらうかと思ひながら目をつぶれば澁民村の夜も思ひ浮ばれて蛙の聲も殊更に門川から耳近く聞えて來るこの歌に對して、或る人が「この歌に秀子と云つた處は戀人の意味にとれる」と云つたが、事情を知らない人の目から見たらさうかも知れぬ。』(後略)

6

啄木が月給たつた八圓で、しかも誇るに足らない姑息因循な教育者達と伍して、教鞭をとる生活に段々堪へられなくなつて、彼を父とも神とも慕つてゐた高等科の全生徒を嗾けて、無類のストライキを敢行し、校長を他に轉ぜしめ彼自身また『石をもて追はるゝ如くふるさとを出で』當時蝦夷ヶ島の一角に華々しく文藝の花を咲かしてゐた雜誌『紅苜蓿』同人の招きを受けて、たゞ一人の愛妹光子さんを連れ、津輕の海を越えて函館に渡つたのは、明治四十年の五月五日であつた。函館に着いた彼は直ちに『紅苜蓿』を主宰することになり、同區(當時函館はまだ市とは言はなかつた)靑柳町の俗稱露探小路なる同人松岡路堂氏の下宿に一緒に住み、日夜文藝談や作歌に熱をあげてゐたのであるが小さな文藝雜誌を主宰した位で勿論生活費を得られないので、同誌の同人澤田信太郎(號天峰、現逢來生命支配人?)氏の紹介で、函館商業會議所の雇になつたが、算盤の仕事などには堪へられなくてすぐ辭し、同じ同人である吉野章三(號白村、先年物故)氏の斡旋で同區富岡町の彌生小學校に代用教員として教壇に立つことになつた。彼が渡道した年の六月、二十二歲のときである。

當時この彌生小學校に、橘智惠子といふ若く美しいしとやかな一女教師が居つた。札幌區元村四番地に大きな林檎園を經營してゐた資產家の愛孃で、明治二十二年六月の誕生、父君は仁、母堂はイツ子といひ、啄木と相知つたときはまだ十九のお孃さん時代であつた。

あはれかの
眼鏡の縁をさびしげに光らせてゐし
女教師よ
──『一握の砂』──163──

人がいふ
鬢のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし
──『同』──223──

啄木がこの智惠子さんに對する愛慕の情のいかに深かつたかは、『一握の砂』にある北海道時代の回想を盛つた『忘れがたき人々』の(二)の全部である二十二首の、切々肺腑を刺し貫くやうた悲痛な戀歌が、みなこの女性一人を歌つてゐることでも肯かれる。この智惠子さんは、後に彌生小學校を辭して、明治四十三年の九月、二十二の歲、啄木がちようど東京朝日新聞に入社して歌壇の選をしてゐた頃、北海道石狩國空知郡の北村牧場主北村謹氏のもとに嫁いだが、一人の女の兒をあげたきりで大正十一年の十月一日に、空知郡岩見澤町の岩見澤病院で、三十四歲を一期としてはかなくも病沒された。

啄木が友人に對してこの智惠子さんを語つた書簡が數通殘つてゐる。啄木が彼女に對して抱いた戀しくも懷しげな情緒をしのぶよすが

にその部分だけ左に摘錄して見よう。一番古いのは、明治四十年九月二十日附で札幌から、前記『紅苜蓿』の同人岩崎正（號白鯨先年物故）氏に與へたものである。

「住吉小學校の廊下で腰掛の塵を拂つて背廣めいたものを着た君と話した事が頭に浮び來り候、せつ子が戀しく候、京子も見たく候、それから出立の日乃ち吉野君の御喜びの日、岡君が「今盛んにやつて居ます」といつて炭の粉だらけの手を流しで洗つて居た様が目に浮び候、又橘訓導が茶を汲んで出す時の手つきが思出され候、函館百二十日間の短生活が、小生にとつて甚だ有意義なりし事を君と吉野君と皇天に向つて感謝致候」―「啄木全集」第三卷―132―

更に同四十三年一月九日、啄木が思想的に大地へ足をしつかと据ゑ初めたころ、當時『北海タイムス』の電報主任として、主に外事電報の飜譯をする傍ら、文藝欄を擔任して居り、かつて『紅苜蓿』の主宰者であつた大島經男（號流人又は野百合）氏に對しては

『札幌！私のすきな札幌！ゐたのは二週間にすぎませんでしたが、思出は少なからずあります、そして今、私の知つてゐる或る美しい、そして悲しい人が其處で長い病の床についてゐます、私は今後その人の名とあなたの名によつて札幌を思出すことが多いでせう、』

―「啄木全集」第三卷―[illegible]―

この手紙によると、智恵子さんがその當時長く患つてゐたことがわかる。さうすればこの歌が、そのときの哀傷を歌つたものであることがはつきり裏づけられるといふ。

病むと聞き
癒えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

―「一握の砂」―[illegible]―

大島氏に宛てたこの書簡を書いてからかつきり一年目、すなはち翌年の一月九日附で、盛岡中學時代、彼より一級下で共に廻覽雜誌『爾伎多麻』などを作つた郷友瀨川深（號菱水樓又は花郷）氏に與へた書簡には

「北海道は僕の第二の故郷だ、今度の歌集も北海道で一番賣れるだらうと思つてゐる、（中略）さうしてアノ「忘れがたき人々」の(二)に歌つてある人は、石狩原野の中の大きい農牧場のある、札幌郊外の名高い林檎園の娘さんであつたが、こんど來た年賀の手紙によると、去年の五月にその農牧場へお嫁さんに行つたさうである、過去一年間僕は向ふから來た手紙に返事を出さずにゐた、さうして今度初めて苗字の變つた年賀狀を貰つた、異様な氣持であつた、「お嫁には來ましたけれど心はもとのまんまの智恵子ですから――」と書いてあつた、さうして自分のところでこさへたバタを送つてくれたと書いてあるが、東北線の汽車が雪でおくれるのでまだ着かない、」

―「啄木全集」第三卷―[illegible]―

同じ月の十四日附で、やはり「紅苜蓿」の同人――後に啄木の義弟

となつた宮崎大四郎（號郁雨、退役陸軍砲兵中尉）氏にもかう書いてゐる。

『新年になつて珍らしい事が二つあつた。一つは橘智惠子がいつの間にか北村智惠子になつてゐた事だ。空知郡北村といふ處の牧場にゐる。自分のところで作つたバタを送るといつてゐた。』

――「啄木全集」第三卷――289――

右の二通の書簡の斷片を讀んで、すぐ聯想の波間に浮ぶのは次の歌である。

正月の四日になりて
あの人の
年に一度の葉書も來にけり。

――「悲しき玩具」――22――

長き文
三年のうちに三度來ぬ
我の書きしは四度にかあらむ

――「一握の砂」――220――

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り來し
バタかな。

――「悲しき玩具」――31――

啄木が智惠子さんと相知つて間もなく、その處女詩集『あこがれ』をプレゼントしたこともあつたが、彼女には別に深い文學的興味もなかつたらしく、その點では特に啄木の心を惹かなかつたやうである。しかし啄木にして見れば文學さへ知らないやうな――往々にして文學少女なんといふものは變にませて厭な感じを與へるものである――いかにも商家のお孃さんらしい、無邪氣でゐてそしておつとりとしたどこかにおのづからなる氣品の高さ、世の中の醜や惡なんといふものは、夢にも知らないで育つたやうな純潔さとあどけなさ、さうした印象が啄木の胸奧にどれだけ深く濃く刻みつけられたか知れなかつた。二度は啄木から誘つて大森濱を散歩したこともあつたが、遂にその胸中は打明けられなかつたらしい。啄木が北海道をひとめぐりして上京した翌年かに、今私の手許にないので何年の何月號とは言へないが『文章世界』に、『路問ふほどのこと』といふ題で歌を二十首ばかり掲げたことがある。それが後に『一握の砂』として一冊に纏められたとき、『忘れがたき人々』の(二)にそつくり收められたものである。啄木が智惠子さんにかすかながら現し得た思慕の情は、僅々この歌の題が示す通り『路問ふほどのこと』に過ぎなかつたのである。『一握の砂』の

頰の寒き
流離の旅の人として
路問ふほどのこと言ひしのみ――22[illegible]――

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ
それだけのこと——同——

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれど——122——

といふやうな歌はこの間の消息を婉曲に物語つてゐるといへやう。啄木が上京してから、この智恵子さんの思ひ出話を友人に語るときは、その名は言はずに『眉の女』と呼んでゐた。それほど眉の美しい人だつたらしい。

いつなりけむ
夢にふと聴きてうれしかりし
その声もあはれ長く聴かざり
——「一握の砂」——219——

かの声を最一度聴かば
すつきりと
胸や霽れむと今朝も思へる
——「同」——220——

外套の襟に頤を埋め、
夜ふけに立どまりて聞く。
よく似た声かな。
——「悲しき玩具」——21——

全市の殆と三分の二を舐めつくした明治四十年八月二十五日の函館の大火には、勿論啄木の勤めてゐた彌生小學校も何一つ残さず灰になつてしまつた。學校では直ちに各職員を督勵して罹災兒童の狩集めに不眠不休で奔走しなければならなかつた。その時のエピソオドである。啄木は自ら進んで同行を求めたか、どうかして、とにかく『彌生小學校の生徒は何月何日某處に集合せよ』といふやうなビラを市内の要所々々に貼りつけに、この智恵子さんと二人きりで活動した晩のことである。啄木は俄かに腹痛を覺えて來たが、用事を濟ますまではと我慢しながら歩いてゐた。智恵子さんは啄木の顔色の惡いのを心配してたづねたが、なんでもないと平氣を裝つてその腹痛を訴へなかつた。その中あまり烈しい痛みを覺えて街路に打倒れしまつた。智恵子さんはすつかり驚いてしまつて、同行の甲斐々々しく人目も憚らず、頭を冷やすやら、背をさするやら、藥を買つてくるやらしてやつと甦らせた。彼にはその夜の彼女の優しい情けは生涯忘れられないとある友人に沁々語つて聞かしたさうである。

函館のかの焼跡を去りし夜の
こころ残りを

今も殘しつ
——「一握の砂」——223

啄木がこの智恵子さんに對する戀情は、結果から見て遂に片戀であつたことは、彼女が病沒する約五ケ月前の大正十一年の五月、北海道の啄木研究家遠藤勝一氏に與へた書簡が、それを最もよく裏書してゐると思ふ。

『石川啄木氏に就きましては私も委しきことは存じません、函館におすまひになりました時分にお知り合ひになりまして其の後年に一二度お便りがありましたのみ、ほんの一寸の御交際で御座いました。奧樣も御子樣も少しも存じませんが、奧樣はお亡くなりになり、御子樣は函館の遺愛女學校に御通學ときいて居ります。亡き後の詩人の御子樣を御氣の毒に思つて居りますが、おたづねも出來ずに居ります。青年時代から變つた方でしたが、こんな有名な詩人だとは存じませんでした。啄木全集には色々委しいことがのつてゐる樣です。これ以外には私存じません』

論者もしくは啄木研究家に依つて、色々異つた觀察をされるかも知れないが、少くとも私一個の卑見では、啄木のあの短生涯に眞に彼が魂の根底から搖り動かされ、深甚な影響を與へられた戀愛といふのは、後にその愛妻となつた堀合節子孃との中學時代の戀と、この橘智恵子孃へ捧げた哀切極りなき片戀の二つしかないやうに思ふ。このことは私がもつと研究した上ではつきり論じたいと思つてゐる。この項の最後に、以上引用した以外で、啄木が智恵子孃に思慕の歌を全部かかげて、いかにその戀情の悲痛であつたかを知りたいと思ふ。

ひややかに濟き大理石に
春の日の靜かに照るは
かかる思ひならむ
——「一握の砂」以下同——221

世の中の明るさのみを吸ふごとき
黒き瞳の
今も目にあり——221

眞白なるラムプの笠の
瑕のごと
流離の記憶消しがたきかな——222

馬鈴薯の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ——221

山の子の
山を思ふがごとくにも

かなしき時は君を思へり——224

忘れをれば
ひよつとした事が思ひ出の種にまたなる
忘れかねつも——225

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ——226

いそがしき生活のなかの
時折のこの物おもひ
誰のためぞも——227

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ——227

死ぬまでに一度會はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか——228

時として
君を思へば
安かりし心にはかに騒ぐかなしさ——228

わかれ來て年を重ねて
年ごとに戀しくなれる
君にしあるかな——229

石狩の都の外の
君が家
林檎の花の散りてやあらむ——229

あはれなる戀かなと
ひとり呟きて
夜半の火鉢に炭添へにけり——273

公園のかなしみよ
君の嫁ぎてより
すでに七月來しこともなし——273

公園のとある木蔭の捨椅子に
思ひあまりて
身をば寄せたる　――284――

Yといふ符牒、
古日記の處々にあり――
Yとはあの人の事なりしかな
――「悲しき玩具」――32――

7

啄木が函館で日を送り夜を迎へた百有餘日は、彼の生涯にとつて、その中學時代につゞくべきロマンテイツクな華やかな時代であつた。一人の知己もない北海の一小都に渡つて多くの離れがたき友をつくり、橘智惠子といふ美しく優しい女教師と相知つた彼は、後に上京してからも、死ならば函館に行つて死にたい　函館は第二の故郷だと言はしめたほど、それほど深い印象を殘したのであるが、四十年八月の大火には席暖まる暇もなく、翌月の十三日『北門新報』の校正係としてパンを得べく、アカシヤの都札幌に落ちのびなければならなかつた。札幌についてからは、前記『紅苜宿』の同人である向井永太郎(號、夷希微、當時道廳技手)氏の宿である札幌區北七條西四丁目四番地の田中といふ素人下宿にひと先づ腰を落ちつけたのである。

私が昨冬ちようど一ヶ月ほど、啄木研究の目的で渡道し、札幌に二泊したとき、せめてこの田中といふ家が現在どこに轉住してゐるかを突きとめるだけでもと思つて、雪と風の中を、札幌驛からあまり遠くない西四丁目を中心に、Aの家からBの家へ、Bの家からCの家といふ風に、その附近に永く住んでゐる老人のある家を、殆ど軒別に一日がかりで探し廻つたが、何せ二十年以上も前のことであり、殊に手懸りとしては田中といふ姓と、下宿をしてゐたといふこと、若い姉妹があつたといふことだけしかないので甚だ心細く、たうとう夕方までかかつてたづねたが、何等ヒントになりさうなことすら得ることが出來なかつた。

啄木が下宿してゐたころ、この田中といふ家に、姉が二十一二、妹が十七八かの姉妹がゐた。啄木と親しく話したのは妹の方らしく、名は徽子といつた。彼が上京してから金田一氏にこの娘のことを語るときは、やはり前の智惠子さんを『隣の女』と呼んだやうに、『スヰイトピイの女』といつてゐたといふ。啄木の感想『きれぎれに心に浮んだ感じと回想』(スバル明治四十一年十二月號123)にはこの『スヰイトピイの女』をかう書いてゐる。この中に出てくる友人といふのは金田一京助氏のことである。

『同じやうな事がある。矢張其友人と、或日、札幌の話をした時、話の中の女の名を不圖忘れて了つて、どうしても思出せなかつた。それから二三日の間、機會があると考へて見たが、矢張思出す事が出

來なかつた。その女といふのは、私が一昨年の秋、二週間札幌にゐて泊つてゐた家の娘であつたスヰトピイとかいふ花を机の上の瓶にさして、その前で小声に讃美歌を歌ひながら、創作をしてゐる大人しい娘であつた。一週間か其餘も經つてからである。其友人と日が暮れてから、本郷の通りを散歩してゐると、色色の花を列べてある植木屋の露店の前に來て、突然、私はその女の名を思出した。大切な落し物を拾つたよりも猶嬉しかつた。そして友人に話した。友人は、「ああさうでしたか。」と言つた。私は口を噤んで、「また贅澤な喜び方をした。」と思つた。』

啄木がこのスヰイトピイの『女』といふよりは寧ろこのおとなしい娘に對して抱いた感情は、戀なんといふ境地まで進んだものではなく、たゞ單に可愛らしい少女としての印象を殘してゐる程度にとゞまつてゐたらしい。『一握の砂』の『忘れがたき人人』の章にこの娘を歌つたといふのは只一首しかない。

わが宿の姉と妹といさかひに
初夜過ぎゆきし
札幌の雨
——181——

遠藤勝一氏はその稿『北海道時代の啄木』（短歌雑誌第十卷第八號）で、この歌と『一握の砂』の『手套を脱ぐ時』の章にある

いつ見ても
毛糸の玉をころがして
韈を編む女なりしが——30——

といふ歌を説明して『これ等の歌はこの娘に關するものらしい。』と言はれてゐるが、この歌については、啄木が母校の代用教員時代の教へ児であつた秋濱三郎（現岩手縣二戸郡岡本小學校訓導）氏が、その稿『書簡を通じて見たる天才詩人石川啄木のこと』（岩手日報大正九年十一月十九日所載）の第四回目において

『いつ見ても
毛糸の玉をころがして
韈を編む女なりしが——歌集には少女をたゞ女とある——
四十三年の年賀状に、この歌を書いて絹ちやんはどうなりましたの
其後、とんと、たよりは、ない、といつて、よこされた、これによつて、この歌の主は、絹ちやんであることをしつた絹ちやんは、私より、二つ年上で、姉のやうにしてきた、山へ川への散歩には、よく、先生の手にすがつて、ともをした。今は樺太に居る様にきく、」

と述べられてゐるから、この歌はスヰイトピイの娘を歌つたものでないことは斷言できると思ふ。

8

現在、啄木のラヴアフエアで、新聞に雑誌に最も艶つぽく喧傳され、そして又、最も多く誤つて傳へられてゐるのは、彼が釧路新聞記者時代、土地の名妓として謳はれた小奴との情話であらう。私はそれ

ら十指を屈するに足る新聞や地方の文藝雜誌の記事にひととほりは眼を通したが、いづれも啄木の歌だけを通して、執筆者自身の主觀を無遠慮にさらけ出し、啄木と小奴は戀の最後の一線まで越えたかのやうな、少し口を惡くするならば、その臀部を見て來たやうな嘘を吹き散らし、書き飛ばしてゐるのが甚だ多い。なかには文藝雜誌などになると、一個の販賣政策のため、他人の書いたものを無理にのしいかみたいに引き延して味をつけてゐるものもある。甚だしいのになると、今年三十九になる小奴と、七十に近いその母堂の名とをとつちがへたりして堂々と書き立てゝゐるものすらある。然し私はそれらの誤謬や勘違ひを一々指摘するだけの勇氣も時間もないので、こゝには私の知つた範圍で、誇張も想像も差し挾まずに、たゞありのまゝを書き進めて見ることにする。

啄木が釧路に行つたのは、『小樽日報』を喧嘩して退いた明治四十一年の一月下旬で、『釧路新聞』の編輯長としてゞある。當時釧路から根室までは汽車がまだ通らなかつた時代で、北海道の東海岸としては正に『さいはて』の驛であつた。

さいはての驛に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき
——「一握の砂」——202——

啄木が『釧路新聞』に入るや、直ちに『釧路詞壇』なる文藝欄と、花柳界の記事を『柔く取扱ふ』『紅筆だより』といふ欄を設けた。最初文藝欄を起した頃は投稿者も至つて少なかつたので、彼自ら毎日新作の短歌を數首づゝ發表してゐた。その頃宮崎郁雨氏に對して『釧路では啄木も鳥なき里の蝙蝠だ。』同氏編、啄木書簡集（五）と言つてゐるほど、それだけ當時釧路には彼と語るに足る人物がなかつたのである。かうした歌はざる人々の間に伍して働きながら、毎日新聞の上でフレッシュな文學趣味を鼓吹したから、釧路の多少でも文學を解する若い女性の間に『石川啄木』の四字が吸ひこまれるやうに浸み渡つて行つたのは、極めて當然なことでなければならなかつた。私が以下述べやうとする小奴も實にその一人だつたのである。

小奴と啄木との戀物語を述べる前に、順序として一應簡單にでも、彼女のひとゝなりをスケッチする必要がある。小奴は本名近江ジン子、明治二十三年十月十五日函館で生れた。實父辰六氏も實母ヨリ子も、共に京都の人であるせいか、その血を享けた小奴は、どつちかと言へば、純京都型の背のすらりと高い、色の飽くまで白い瓜ざね顏で、瞳の涼しい美人である。當時彼女の家庭は別に生活に困るでもなかつたので、九歳の尋常二年生のときまでは、乳母日傘で兩親の下に育つた。九歳のとき何かの事情で十勝の親戚のにあづけられて十三の歳まで暮し、それから帶廣に移つて高等科四年を修め、十七の歳の六月までそこで育つた。この帶廣で厄介になつたといふ家は伯母にあたる人で、料理屋をやつてゐたゝめ、彼女もいつとなく見様見眞似、門

前の小僧習はぬ經を讀むの俗諺通り、店に出入する藝者達の感化で、殊に天性藝事が好きだつたので、知らず識らずの間に三味線の彈き方も覺え、踊の二つ三つは苦もなく踊りぬくやうになつてゐた。そして十七の歳かにその伯母とは懇意の間柄で、釧路に鶤寅といふ藝者屋をやつてゐる家にあづけられることになつた。そのころは厚内までしか汽車が通らず、厚内から釧路までは馬で通つたものなさうである。彼女がかうして釧路に着いてから間もなくの頃である。何丸とかいふ船が釧路の沖で難破し、多くの船員が海に吞まれたといふ大椿事があつた。そのときは釧路全町が湧き立つやうな騷ぎになり、遭難船員の遺族の慰問やら何やら色々の計劃が行はれたが、その一つとして慈善素人演藝會が催されることになり、全町の藝者がそれ〴〵役割を當て嵌められて舞臺に登ることになつた。そのとき鶤寅の主婦から『ジン子さん、あんたも出て見ない？』と誘はれたので、ある劇の主役である佐々木四郎高綱を演らせるなら出ると彼女が大きく出たので、初めは一同笑つて取り合はなかつたが、どうした風の吹き廻しか、とにかく十七か八の彼女を主役の高綱に扮裝させて舞臺に立たせた處が、それがまた豫想以上の大成功だつたので、『こんなに藝のある人をたゞ遊ばして置くのは惜しい。』と周圍からすゝめられるまゝ、彼女もいくらか油が乘つて、小奴といふ藝名を貰つて座敷に出たのが、彼女の左褄生活の第一歩であつた。かうして一本立になつてから、顏はよし、藝はたしか、それに多少文才があるといふので、たちまちの中に、當時一流と謳はれてゐた、小奴よりは七歳も年上の小蝶といふ、盛岡出身の藝者と釧路一の株を爭ふやうになつてしまつた。

啄木と相知つたのは、彼女がかうして賣り出して間もなくのことである。そのころ毎日『釧路新聞』の文藝欄を賑はしてゐる石川啄木と署名した新しい歌に彼女は何がなし心を惹かれて、毎朝新聞の配達されるのを待ち焦がれるやうにしては愛誦してゐた。ある夜の宴會の席でのことである。その席に『釧路新聞』の一記者が出てゐたので、小奴は、『石川つてどんな人？　大層新しい歌を作る方ね、わたし一度會つて見たいわ。』といつたら、その一記者は、『おや〳〵もう岡惚れか、よし〳〵僕が會はせてあげる。』といつて、次の何かの宴會で啄木もその記者と一緒に出席したとき、『石川君、これが君の歌を通じて岡惚れしてゐる文學藝者だ。おい、小奴、そつぽを向くなよ、この人が君の憧れてゐる石川君だ。東京で詩人として鳴らした人だよ。あまり熱くならないやうにね。』といつた調子で引合はされた。小奴こと近江ジン子さんは、その第一印象をかう語つてゐる。『私が初めて一さん（彼女は石川さんとも啄木さんとも言はず本名の一さんと呼んでゐる）にお目にかゝつた刹那は、あまりあがらないその風采と、いかにも弱さうな體格に、歌を通じて想像した人とはあまり違ふので、オヤこの人が？　といふやうな輕い失望を感じないでもありませんでしたが、その記者の人に紹介されて一さんがニッコリ笑つたとき、その色白な笑顏はまるで無邪氣で、なんとも言へない可愛らしい感じの人でした。

その後二三度か宴會の席でお目にかゝるやうになつてから、どつちからともなく打とけて泌々語り合ふやうになつたのでした。』

啄木がその新聞記者といふ職業上、屢々花柳の巷に出入するやうになつたのであるが、當時の彼の心境は、左の『幽思』といふ一篇の叙情詩から充分汲みとることができる。この詩は明治四十一年三月十七日の『釧路新聞』に、『おもはれ人』といふ署名で發表したまゝ埋れてゐたものである。

　ほのかにも搖げる灯あり。
ほのかにも今我が心、
はるかなる人無き島の
洞内の光明を忍ぶ。

　ほのかにも搖げる灯あり。
ほのかにも今我が心、
春の夜、遠方人の
涙にし濡れたる思ひ。

　我が思ひ、幽かに顫ふ。

又、歌集『一握の砂』の『忘れがたき人々』には、この心境を追憶してからも歌つてゐる。

　火をしたふ蟲のごとくに
　ともしびの明るき家に
　かよひ慣れにき

啄木がかうして『ともしびの明るき家にかよひ慣れ』てゐる中に、彼に心を寄せたのは小奴ばかりではなかつた。四十一年二月七日附で宮崎郁雨氏に宛た書簡には、こんなことも書いてゐる。當時の釧路の花柳界を小さく纒めてキヤツチしてゐるので、左にその部分だけ書きぬいて見る。

『そこで二人で出掛けて釧路で一番の料理店喜望樓へ乘込んだ。此料理店は先日の落成式宴會場であつたからよく案内を知つて居る。主婦などとも御懇易だ。此處で一寸說明して置くが、釧路の藝者は約四十人、見番は先月新らしく出來たが極めて不振で、皆料理店には內藝者が抱へてある。㋖には大小十一人のペン〳〵猫が居る、呼んだのは其十一人のうちでチョイト名の賣れてゐる小靜といふので、三面先生のノートによると年齡二十四、本名尾張ミエ、小樽札幌でやつて居る新派俳優朝霧映水の妹だ、萬歲事件と小樽で一度俳優に擲られた時と、當地へ來てから社長に一度引張られて此㋖へ行つたのと、先日の宴會と、昨夜と、僕が生れてから藝者なるものに接したのは僅か此五回に過ぎぬ。そして其第五回目には自分が主人公になつて行つたのだから、或は隨分急足の進歩かも知れぬ。茲に至つては石川啄木も天

下の消息を解したものといはねばなるまい。サテお銚子は六本許り倒れた樣であつた。僕と客と藝者と、共に大分醉つた。無論僕は此先に目的の話は充分聞いて了つた。小静はよく彈きよく歌つた。客もまたよく飲みよく笑ひよく醉ふた。小静は僕に惚れたといふ。僕は、宴會以來豆ランプと綽名のついた禿頭を叩いて、モ少しでナツタく節を歌ふ所であつた。」

この小静といふ藝者は、今北海道々會議員○○○氏の夫人となつてゐる。左の書簡は啄木から小樽の知友、西田紅果、藤田南洋の兩氏に與へたもの、まだ未發表のものであるから全文をかゝげる。日附は同年二月十七日となつてゐる。

『昨夜當町釧路座に催したる慈善演藝會の際、釧路北東兩新聞記者合同し餘興として芝居三幕演じ候、小生就中主役にて大に喝采を博し候、釧路は我儘の出來る所に御座候。十日程前より或必要のため毎夕遊廓低唱の巷に出入致し、藝妓三人許りに少し惚られ申候、酒は小さい盃にて十位は飲める樣に相成候、小生の方ではチツトモ惚れ申さず候へど、そのため毎日新聞の氣味と急がしさの爲め、先日のなつかしき御手紙に對し、返事申遅れ御申譯なく候、釧路の藝者はお客を呼ぶにダンサンと申候、ダンサンはいゝ那樣の少しヒネタレタのに御座候、釧路は小樽より萬事心地よく候、着釧早々種々調査いたし候ふに、將來隨分面白き事があるらしく候、殊に泥や來るとすぐ「豆ランプ」といふ異名をつけられ、何處へ行つてもモテルに於てをやに候、社の方より懇々の話もあり、兹に意を決して二三年釧路の人たる決心いたし、來月あたりは家族も當地へ呼びよせる筈にいたし候、何でも人間は多少に不拘我儘の出來る所に居るに限るものと信じ候、二三年居れば小生でも自費出版の資金位は何とかなりさうに候、六十迄は生きる決心故、少しも急ぐ必要なしと、乃ち何とかなる迄居る事にいたし候ふ次第に候、大に君等と論じたい事山々あるけれども、時は既に一時、隣室の鼾聲雷の如く耳に響き候間、それはお預りにいたし候。三月中旬紙面擴張まではウント俗になつて釧路を研究し、然る後、專心創作に從ふつもりに候、「北海道の人間」は益々面白くなり候、藝妓小静は下町式のロマンチツク趣味の女にて、鏡花の小説で逢つた樣な女也、この下宿の主婦は體量三十貫もありさうな珍無類の肥大婦人にて擬角形マル出しに御座候、それから古川某といふ男あり、話をする時舌をペロ／＼と出し候、「若い時は二度ない」と藝者小静が歌ひ申候、これ眞理なり、兩君、釧路に逃げて來られては如何に候や、來たなら必ず目は見つけてあげる、若い時は二度ないと藝者小静がうたひ申候、

二月十七日夜　　草々頓首

啄木

武治樣
紅果樣
侍史

啄木が釧路でひと月ばかり暮してゐる中に、小奴との交情は日に増し親密の度を増して行つた。歌を教へて貰ひに小奴が彼を下宿に訪ねることもあれば、雪の霽れた夕方などは、ショールに顔を深く包んで、啄木が社を退けて帰るのを待つて、赤い練瓦造の釧路新聞社の前の電信柱に倚りかゝつてゐることもあつた。啄木は散歩が好きだつたので、小奴を誘つては、氷の屑が物凄い唸りを立てゝ浪と共に岸に打ち寄せてくる知人の濱から春採湖へかけてそゞろ歩きをすることもあつた。そんな散歩のとき、啄木は癖のやうに『唐詩選』の詩を聲高らかに吟じた。そして又小奴に話すのは、いつも新聞社の不平や、同僚の無能や、詫びしい現在の境遇などであつた。そんなとき小奴はいつも、「男の癖に何をくよくよするんです。あなたには私といふ女がついてゐるぢやありませんか。」といつたやうな、歌舞伎の臺詞もどきで彼を激勵するのが常であつた。

さらさらと氷の屑が
浪に鳴る
磯の月夜のゆきかへりかな
——「一握の砂」——213——

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手のあたたかきかな
——同——207——

啄木はそのころから、進まぬ酒もかたり飲んだらしい。小奴により以上飲んだ。——酔客の乱暴な要求を拒むにはこの外に途がなかつたのだ——それを思ふと、啄木の兄が妹に對するやうな、思ひ遣りの深い愛情が、彼女にとつても唯一の安らかな隠れ場所でもあつた。場所は名だゝる北海の果の港町である。障子に灯の明るい料亭の雪の夜遅く、彼が小奴の膝を枕に、遣り處のない憤懣を酒に紛らして沈吟することもあれば、時には又逆に、酔ひぬいた客の座敷に出る苦痛を酒に訴へた小奴が、啄木の膝を枕に宿酔の夢を結ぶこともあつた。

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
いかになれるや
——「一握の砂」——203——

小奴といひし女の
やはらかき
耳朶なども忘れがたかり——[illegible]——

舞へといへば立ちて舞ひにき
おのづから

悪酒に酔ひてたふるるまでも——208

死ぬばかり我が酔ふをまちて
いろいろの
かなしきことを囁きし人——209

いかにせしと言へば
あをじろき酔ひざめの
面に強ひて笑みをつくりき——210

酔ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり——211

きしきしと寒さに踏めば板軋む
かへりの廊下の
不意のくちづけ——212

その膝に枕しつつも
我がこころ
思ひしはみな我のことなり——212

ある風のない物靜かな晩であつた。月は鎌のやうに冴えかへつてゐた。二人はいつものやうに手を結び合つて、散步場所ときめてゐる知人の濱から海岸づたひに春採湖の近くまで、啄木は例の通り詩を吟じながら、小奴は啄木に寄り添ふて、そのむせぶやうな詩の顫音に心を奪はれながらそゞろ歩きをしてゐた。波打際まで來て二人が何がなしに立ちどまつたとき、啄木はしばらく無言のまゝ月の美しさに見惚れてゐたが、傍にしよんぼりこれも亦無言のまゝ立ち盡してゐる小奴を振りかへつて『ね、何といふ素晴らしい月だらう。こんな靜かな月のいゝ晩に、この底の知れない海に飛びこんで死にたいとは思はないかな。』そのとき、リアリストの彼女、ウヰットの巧みに働く小奴は、すぐさま自分の咽喉を示して『一さん、ホラ御覽なさい。私一度自殺しかけたことがあるんですよ。あのときのことを思ひ出すと、死ぬなんて考へても厭です。さあ、もう歸りませうよ。歸つてお酒でも飲んでこの冷たくなつたからだをあつためやうぢやありませんか。』小奴は何となく薄氣味惡いムードに包まれながらも、強いて笑ひに紛らして彼の袂を引張つた。啄木は默々として小奴と步調を揃へた。

死にたくはないかと言へば
これ見よと
咽喉の瘢を見せし女かな
——「一握の砂」——208

この時の回想である。この歌が歌集『一握の砂』に收められて、啄

木から一本贈られて讀んだとき、小奴はびつくりした。彼女には自殺しかけたやうな經驗は夢にもないのである。咽喉の瘍といふのは、四歳のとき腫物ができて、その切開手術をした痕なのである。彼女はこのことを憶ひ出して『一さんはほんとに正直な方でした。私がそんな口から出まかせなことを言つたのに、そのまゝほんとにして歌にまでされたので、歌集を贈られて讀んだときは何だか濟まないやうな氣がしました。』彼女がこんな風に、啄木に深くうちこんでゆけばゆくほど、朋輩間の評判は益々惡くなる一方であつた。就中、小蝶といふ姉分の競爭者が最も辛辣だつた。『小奴さん、一體どこがよくて、あんな貧弱な肺病やみみたいな書生つぽと熱くなるんですか。ほんとにあなたの行く末も考へなくちやんいけませんよ。』彼女はこんな風に自分の愛人を滅茶々々にこき下されゝば下されるほど、啄木がいとほしいやうな、どんな苦しい思ひをしても庇つてやらなければならないやうな、人としての俠氣と、藝者としての意氣地を感じて、あたりからそんな風に水を注がれゝば注がれるほど、かへつて反動的に啄木へ深く接觸して行つた。

藝事も顏も
かれより優れたる
女あしざまに我を言へりとか
――「一握の砂」――203――



腰かけたるは小奴立てるは小蝶(明治四十年八月撮影)

あるとき小奴が微恙で床に臥つたことがある。啄木はすぐ見舞に來て封筒を一枚置いて行つた。あけて見ると十圓紙幣が一枚。彼女は啄木の薄給もわかつて居り、生活狀態もよく知つてゐたし、今でこそ十圓といへば大したものでないかも知れないが、そのころとしては、少ない金でないので、なんとかして返す方法がないものかと考へたが、啄木の氣性もよくわかつてゐて、一旦出したものなんかひつこめること

は夢にも考へられないので、明け暮れそのことが氣懸りでならなかつたが、間もなくその金を返すときが來たのであつた。といふのは、啄木が愈々自然主義の潮流めがけて、創作家として起つべく、その年の四月二日、酒田川丸といふ船で釧路を出帆上京の途に上つたとき、彼女は胸一杯に別離の淚を押し包んで緑橋まで見送りに出、啄木の手にかつて貰つた見舞金を二倍にしてそつと握らせたのであつた。

かうして啄木が上京してから間もなく、小奴には一人の旦那が出來た。そのころ彼女には東京が何がなし心を誘つてならなかつた。序いで言へば、東京はまだ未知の世界だつたので一度は見物したかつたしその東京に住んでゐる啄木にも會ひたかつたのである。で、彼女は東京見物をさしてくれとせがんだ。その旦那は大阪に商用もあつたので快く承諾した。小奴は啄木に上京するといふことは全然知らさなかつた。何故ならば不意打をして驚かしてやらうといふ茶目氣が手傳つたものだから。明治四十一年の十一月下旬、旦那に連れられて小奴は上京した。日本橋區通三丁目の蓬萊屋といふ旅館に旅裝を解くや否や、翌日すぐ、そのころ本鄕森川町一番地新坂上の蓋平館別莊に移り住んでゐた啄木を訪ねた。女中に案內を請うた處、啄木がなかなか姿を現はさない。しばらくして二階の階段口からひよいと顏を出して覗いて、彼女が玄關口に佇んでゐるのを見た啄木は、辷り落ちんばかりに驚いた。ちよつと言葉が出ない有樣であつたが、『やあおあがり、よく訪ねて來たね。ひどく驚かすぢやないか。いつこつちへ？一人で？』啄木はから笑みかけて聞きたから、同館三階の彼の書齋と應接室と寢室とを兼ねた、狹い三疊間に招じ入れた。小奴はその三疊間に座らせられて先づ啞然とした。見廻した處、何一つ持物らしいものはない。部屋の隅に一脚の机が据ゑられて、その上を見ると、彼女が啄木に贈つた寫眞（本文挿入の寫眞）が一葉飾られ原稿用紙がのつてゐるばかりである。彼女はふつと胸が塞つて來た。『まあ、あなたのお部屋これ一つきり？』と思はず口走つた。すると啄木は微笑しながら『なあに、これでも東京なら上等の方さ。家がなくて公園のベンチに寢るのさへあるからな。』と負け惜しみを言つた。然し小奴は、このあんまり見窄らしい生活ぶりを見かねて『ね、いくらか置いて行きませうか。』といふと『いや大丈夫だ。今東京毎日新聞に小說を連載してゐる、その方から一日置きに一圓五十錢づゝ入るから心配しなくてもいい。いづれ何か是非入用なときは僕から改めて賴むから。』と小奴のその提議はうけ入れなかつた。そしてその晩は一緒に本鄕から淺草方面に散步に出かけて別れ、翌日かに又小奴が訪ねて來た。その目的は啄木にその旦那を引合せたかつたからで、彼女が旦那に、石川さんといふ人はこれこれの人で、偉い文學者だから一度會つてくれないかと賴むと、旦那も快く承知した。そのことを啄木に話すと、啄木もではお目にかゝらうと言つて、その晩二人連れ立つて小奴の宿にその旦那を訪ねたのであつた。そしてその初對面の席で、旦那の人が『私は商用で半月かひと月ばかり大阪へゆくから、留守中お忙がしいだらうけ

れど、この女を東京見物さして貰へませんか。』と頼んだ。啄木も『お易いことです。』と承諾したので、その旦那が大阪へ旅立つた後の一ヶ月ばかりは、殆と毎日のやうに小奴が啄木を訪れ、主に夜分、釧路時代の懐かしい追憶に耽りながら、一緒に散歩に出ては、東京の名所といふ名所を悉く案内して貰つた。このとき、小奴は殆ど一文も遣はずに啄木に奢られてばかりゐたといふ。かうして小奴が東京を見物して歩いてゐる中に、すつかり東京が好きになつてしまひ、來年の四月には東京に移るやうに、旦那が大阪から歸つてから話を纏め、十二月の二十六七日頃釧路に歸るべく上野を發つときは、啄木も上野驛まで見送りに出てくれたのであるが、このときが生前小奴が啄木と顔を合せた最後であつた。小奴が東京滯在中には、啄木にからまつて色々面白いエピソオドが殘つてゐるけれども、あまり長くなるのでこの邊で切り上げる。かうして小奴が釧路に引揚げ、東京に出る仕度をしてゐた翌四十二年の二月の末ころ、啄木から一通の電報を受取つた。文意は至急入用のことが出來たから濟まないけれども五十圓ほど心配してくれといふのであつた。そのとき小奴の懐中にはいくらもなかつたので、そのころ初めて持つた金の腕輪時計や衣類やらを質にまげて、言つて來たゞけの金を算段し、すぐ電報爲替で啄木のもとへ送つた。啄木からは追つかけて歌を一首書いた禮状の電報が來た。彼女は今『カネヨリモヒトノナサケノアリガタサ』といふ上の句だけしか記憶にないといふ。啄木がこの五十圓を何のために小奴から借りたかといふに、いくら小説を書いた處で滅多に金に代へることが出來なかつたので、苦しさのあまり同郷同窓の出身である東京朝日新聞の編輯長佐藤北江氏に依頼して、ともかく校正係として入社さして貰ふことが出來たので、その羽織袴を用意するためであつた。その後長い手紙で禮状が來たり、小奴からも度々手紙を送つたが、啄木の方では彼女も既に夫持になつてゐるので、手紙も自然遠退勝になり、小奴も亦啄木から貰つた手紙などは、その夫と京都で家庭をつくるやうになつてから、夫に遠慮して、一束にしてストウブに納めてしまつて、今は一本も殘つてゐない。

その後小奴は、二十一の歳長女貞子を擧げたが、大正十二年の六月、その主人と破鏡の嘆を見てから、實母が釧路で經營してゐた同市一流の旅館街大近江屋にかへり、今ではその旅館の主婦として、男まさりの手腕を揮ひながら、母と愛娘の三人で平安な月日を送り迎へてゐる。

彼女が啄木の死を知つたのは、『一握の砂』以後の歌稿が土岐哀果氏の手で一冊に纏められ、『悲しき玩具』となつて出版されて、その一部を誰からか送られて讀んだときであつた。それだけ啄木の晩年には、雙方から遠慮し合つて手紙の交換も打ち絶えてゐたのであつた。

前の橘智惠子さんに對する啄木の思慕の情は、一言で現はすならば『山の手の戀』と言へやうし、この小奴との情話は『下町の戀』とでも言へやうか。

9

啄木が『釧路新聞』の編輯長として、政治面に、文藝欄に、社會記事に、得意の麗筆を揮つてゐたころ、彼の才を慕ふて、その下宿を訪ねて來る女性は、小奴の外に二人の女性があつた。一人は梅川ミサホといふ、啄木が下宿してゐた洲崎町一ノ三十二關方の向ひ側の笠井病院につとめてゐた稍々モダーン型の看護婦で、今一人は本行寺といふ寺の伊藤といふ今の前代の住職の娘であつた。この娘は後に誰かと戀行の道行をして現在居所も何もわからないので、啄木の下宿にお百度を踏んだといふことは誰にも知られてゐないが、梅川といふ看護婦の方は、現在釧路で生活してゐるので、釧路でも一人か二人は知つてゐるやうである。

この看護婦は、啄木が釧路に住むやうになつてから、殆と毎晩のやうに訪ねて來た。ある晩は弟を連れて來て啄木の社の同僚達と一緒に歌留多を取つたこともあつた。ある晩は十二時過ぎても一時過ぎても、啄木の部屋に坐つたまゝ、歌のお話をして下さいと言つて動かなかつた。ある晩は一緒に散歩に出かけませんかとも誘つた。又ある晩は、造花の眞紅な薔薇の一輪差を啄木の机に飾つて行つた。明治四十一年三月十九日、『釧路新聞』に『おもはれ人』と署名して發表した啄木の歌は、この間のムードを表現してゐるものである。前にかゝげた『幽思』といふ一篇の詩と共に、一度發表されたまゝ埋れてゐる歌なので、左にかゝげることにする。

冬の磯氷れる砂をふみゆけば千鳥なくなり月落つる時

君を見て我は忘れぬ我を見て君は笑ひぬその夕暮に

一輪の紅き薔薇の花を見て火の息すなる脣をこそ思へ

釧路潟千鳥なくなる夜の波の此月影を忘れずと言へ

啄木も初めのうちこそ、厭な顔もしないで應待してゐたが、殆と一日も缺かさずに訪ねて來るので、手紙一本書けず、雜誌一册讀めたかつた。ある日小奴と會つたとき、『看護婦のためひどく弱つてゐる。濟まないけれども、その看護婦が歸るまでゞいゝから、僕の部屋で頑張つてゐて貰へないかな。』といふと、小奴は『そんなお易い御用なら。』とばかり、早速その晩から、殊更に美しく飾り立てゝ啄木の部屋に押かけた。小奴にした處で、自分の思ひ人を危險な立場に曝して置くのは忍びなかつたのである。小奴は啄木の部屋に行くたんび、殊更に親しさを誇張してはしやぐのであつた。看護婦の方でも極めてバツが悪かつたが、それでも『こんな藝者風情の女にこの人をとられては……』といふ樣な片意地から、これは又反動的に動かなかつた。ある晩の如きは、夜が白々と明けかゝるころまで、露骨な鞘當の芝居をやつたものである。かうして三四日小奴が詰めかけてその看護婦を牽制してゐる中に、流石に思ひつめた彼女もたうとう啄木を諦めたかしてそ

れたり訪れたかつた。恐らくその最後の晩のことであらう。看護婦は泣いて啄木の冷淡さと薄情を詰つた。『一握の砂』にある左の二首はそのときの追憶にかゝるものである。

よごれたる足袋穿く時の
氣味わるき思ひに似たる
思出もあり　――217――

わが室に女泣きしを
小説のなかの事かと
おもひ出づる日――218――

啄木が釧路を去つて上京してひと月も経たぬ中に、この看護婦も病院を辭して上京して、親戚の家に身を寄せてゐたが、ある日ひよつこり神田の駿河臺下で啄木と會つた。そのとき啄木は『君のおかげで僕はひどい濡れ衣を着せられたよ。四五日前釧路の友人から來た手紙に依ると、僕のゐた釧路新聞とは仇同志の間柄である北東新報で、僕と君とが駈け落ちしたといふやうなことを堂々と書き立てたんださうだよ。』と笑ひながら話したことがあつたとか。

彼女は啄木と同じ明治十八年生れで、今年四十四にたる。父は秋田縣の人、母は岩手縣の人で、彼女は函館で生れた。二十歳前後に前記の笠井病院に看護婦をつとめ、上京してから間もなく小山といふ人と結婚し、四人ほど子供をあげたが、十一年ほど前に夫に死別してから、二人の子は夫の實家にあづけ、自分は二人の幼い兒と老母を抱へて、今は釧路でかつて習つた裁縫術をパンのしろに、生活の荒波と健氣に闘つてゐる。彼女はかつて若い時は歌を作つてゐたが、現在では俳句の方へ精進し、月二回づゝ開かれるその地方の俳句會に出席して名句を物し、五尺男子を後へに瞠若たらしめてゐる北海道唯一の女流俳人である。

10

私が初めて彼女と會つて、彼女から啄木の思ひ出話を聞かされた話の中で、今でも私の胸に金の如く光つて印銘されてゐるのは左の一言である。

『石川さんは表面柔かさうに見えて、どうしてなか〱堅い方でした』

啄木の小説『病院の窓』(明治四十一年五月作)に出てくる梅野といふ若い看護婦は、この小山ミサホさんをモデルとしたものである。

雜誌『スバル』が創刊されたとき、吉井、平野の二氏に、啄木を加へた三人が、同誌の歌壇の選をしたことがある。投稿者は思ひ〱に、自分の最も好きな選者を狙つて投稿したもので、當時、石川啄木の名は、漸く歌壇でも重く視られるやうになり、その奇警な新しい着眼點をもつた歌ひぶりに、かなり數多くの憧憬者が出來つゝあつた時代である。『スバル』に前記三人がそれ〲歌の選をすることを發表し

てから、誰の處に一番多く女流歌人が集まるだらう、といふやうなことをいふ連中もあつてかなり賑つたが、そのころから熱心に啄木のもとに歌稿を送つてくる一人の女性があつた。名は菅原芳子。住所は筑紫のさる町で、ある商家の一人娘であつた。試みに『スバル』第五號（明治四十二年五月號）の『秋』の題詞で、啄木の選した彼女の歌をぬいて見る。

秋の風をぐらき街のうり家のひさしに咲ける月見草吹く
がた馬車の音遠ざかり居酒屋に赤児泣く醉し秋の日暮れぬ
白き衣すくなくなれる都大路その瓦斯の灯を秋の風吹く

字も歌も決して上手な方とは言へなかつたが、その質樸な歌ひぶりに打たれて、啄木はこの女詩人から送つてくる歌稿は親切に見て、朱筆を入れる處は入れ、全然歌ひかへる處は歌ひかへて送つては、手をとるやうに敎へてゐた。彼女の歌はぐんぐん伸びて行つた。伸びて行つたのは勿論歌ばかりではなかつた。送つてよこす歌稿には、少女らしい戀心をほのめかした玉づささへ添へるやうになつた。啄木からもまだ見知らぬ愛人に對するやうな好奇心の手傳つて認めた書信も送るやうになつた。吉井勇氏の稿『棕櫚の葉蔭……啄木の追憶』二（都新聞大正十三年五月廿二日所載）にある左の斷片は、この女詩人のことではないかと思ふ。

『最後に私は地下の啄木の苦笑を豫期しながらも、彼から艶書を見せられた時の記憶を附け加へたい。それは「昴」を出す少し前のことだつたと思ふが、彼は飄然と郷里から上京して來て、菊坂の菊富士館と云ふ下宿に滯留してゐた。或日私が訪ねて往くと、彼は私にその情事を打ち明けて徐ろに私に示したのは、纏綿の情を述べた或る女からの艶書であつた。少年詩人として秀才の名を擅まゝにした彼のことであるから、無論かう云ふ艶書の來るのは當然のことではあつたけれども、かうして堂々と艶書を示されて、それを讀ませられたに到つては、私と雖も僻易せざるを得なかつた。思へば啄木もその當時は多情多恨の風流兒であつた。』

そのころ啄木が、この女詩人について友人岩崎正氏に書してこんな風に語つてゐる。

『かくて今日は十二時に起されて、机の上で三通の消息を讀んだ。一つは京子の病狀、また醫者にかかつた事を報じてよこした妻の葉書。一つは筑紫なる菅原芳子からの長い長い手紙。どんな人か見たことはないけれど、字も優しく、歌もやさしい。この手紙にかいてよこした歌が急に數段の進歩を示してゐる。望みのある女詩人だよ。（僕のお弟子のうちでは。）そして手紙によると、一人娘なので兩親の商業をつがねばならぬ身なさうで、兄弟でもあればすぐにも東京に行きたいと言つて來た。人は、殊にも女は、戀をすると急に歌がうまくなるね。まだ見ぬ人の温かい消息ほど、罪のない仄かな樂しみを與

へるものはない、(中略)時として死ぬ事を考へる。不意で、何の恐怖なく考へる。日記にも書いてあるよ。恰度一週間前に、僕は辭世の歌、自殺の方法まで考へた。然し矢張死なゝかつた。あんな時、誰か一諸に死なうといふ見も知らぬ人――たとへば筑紫の芳子の様な――が來たら、屹度死んだに違ひない。』

――「啄木全集」第三卷――196,197――

啄木はある日この菅原芳子にあてゝ、寫眞を一葉送つてくれろやうに頼んでやつた。間もなく彼女から寫眞を送つてよこした。見るとまだ若いいかにも田舍の良家の處女らしい女學生姿であつた。そのころのとである。同じ筑紫から、深谷某といふ名で、頻々と歌を送つてよこす一人の女詩人があつた。字も文章も歌も、芳子とは一段とかけ離れて垢ぬけがしてゐた。啄木はなかば茶目氣と好奇心から、この女詩人にも寫眞を送つてくれと要求してやつた。折り返して寫眞が届いた。見ると目覺むるばかりの美人である。啄木の好奇心は更に度を高めた。で、早速、以前から啄木を思慕してゐた芳子に、『深谷といふ人はどんな人か、知つてゐるだけ知らして貰へまいか。』といふ意味の手紙を書いたものである。返事が來た。讀んで見るとそれには『深谷といふ方とは、こちらの短歌會でもお目にかゝることがありますけれども、あの方のことについては何も申上げたくありません。』といふやうな意味が書かれてある。啄木は考へた。これには二つの解釋が出來る。一つは、この深谷といふ女詩人は、實際は男ぢやないかしら。地方の歌人でよく女の名を使つて、中央雜誌の歌の選者をたぶらかす者があると聞いてゐる。このすばらしい美人の寫眞も、ひよつとすると土地の藝者の寫眞なんかかも知れない。それで芳子は、自分の先生に恥をかゝせたくないためさういつてよこしてくれたのかも知れない。もしさうだつたりして、變な手紙なんか書いては飛んでもない恥さらしである。あぶない〳〵といふやうな心持と、今一つは、實際この深谷といふのは寫眞の通りの美人で、あゝいふ秀歌を物す才人かも知れない。それで芳子はなかば嫉妬して、『何も申し上げたくない』なんて言つてよこしたのかも知れない。だが、どつちにしてもこれは惡戯が過ぎた、といふやうな後悔の念も生じて、それ以來芳子に對して、そんなことは噯にも出さなかつたが、一度疑ひに胸を閉された芳子からは、以前のやうな熱の籠つた手紙は來なくなつたのであつた。次の二首の歌は、この女詩人に對する啄木のその間の心境を充分現はしてゐると思ふ。

思ふてふこと言はぬ人の
おくり來し
忘れな草もいちじろかりし

――「一握の砂」――155――

秋の雨に逆反りやすき弓のごと
このごろ
君のしたしまぬかな

――「同」――155――

(完)

現代政治家の最高峯
トーマス・ジー・マサリツク

古莊國雄

一

チエツコ・スロヴアキアの大統領トーマス・ジー・マサリツク博士の名が次第に世界を風靡するやうになつた。

「歐洲におけるジヨージ・ワシントンである」と言ふ者がある。

「世界の平和に貢獻した事はウイルソン以上である」と國際的の讃辭を呈する者がある。

世界大戰を機緣として新生したチエツコ・スロヴアック共和國の目覺しい進展振、その生みの親であり、育ての親であるマサリツク博士の偉大さは眞に世界驚異の的である。現代世界の政局に活躍するものに、ムツソリーニやザイペル流の彈壓政治家あり、ヒンデンブルグやピルスドウスキー、田中義一等の軍閥出身者あり、ボールドウインやクーリツヂの如き穩健第一主義者があつて、良く言へば百花繚亂、悪く言へば玉石を混淆したやうな奇觀を呈してゐるが、その中にあつて、たゞ一人異彩の輝きを示すものがマサリツク博士である。

彼は、「國家のために」といふ美名に隠れて、自己及びその一黨の私慾を充たす政治家ではない。彼は、「民衆の幸福のために」といふ標語をとつて國民を僞瞞する政治家ではない。

彼は徹底的のリアリストである。いささかのロマンテイシズムの臭味もない實際家である。自己の信念と自己の案出した新組織に國民をピツタリと結合せしめる優秀健實な技術家である。

彼は時代の先驅者である。哲學專攻の學究であり、博士であり、教授である彼が、哲學的、文學的の素質を多分に持つてゐることは當然の話であるが、同時に彼は科學的政治家である。社會組織の改革を斷

むマルキシズムの信徒ではあるが、彼にはまた彼一流の確固たる思想體系があつて、勞農ロシアの物眞似はしない。

世界各國とも、いろ〳〵の意味で行詰り、さま〴〵の苦みを嘗めてゐるが、彼の率ゆる新興國のみは、天馬の如く躍進を續けてゐる。『現代に比類なき最高の政治家』といふ讃辭が、彼の一身に浴せられるのも不思議はない。

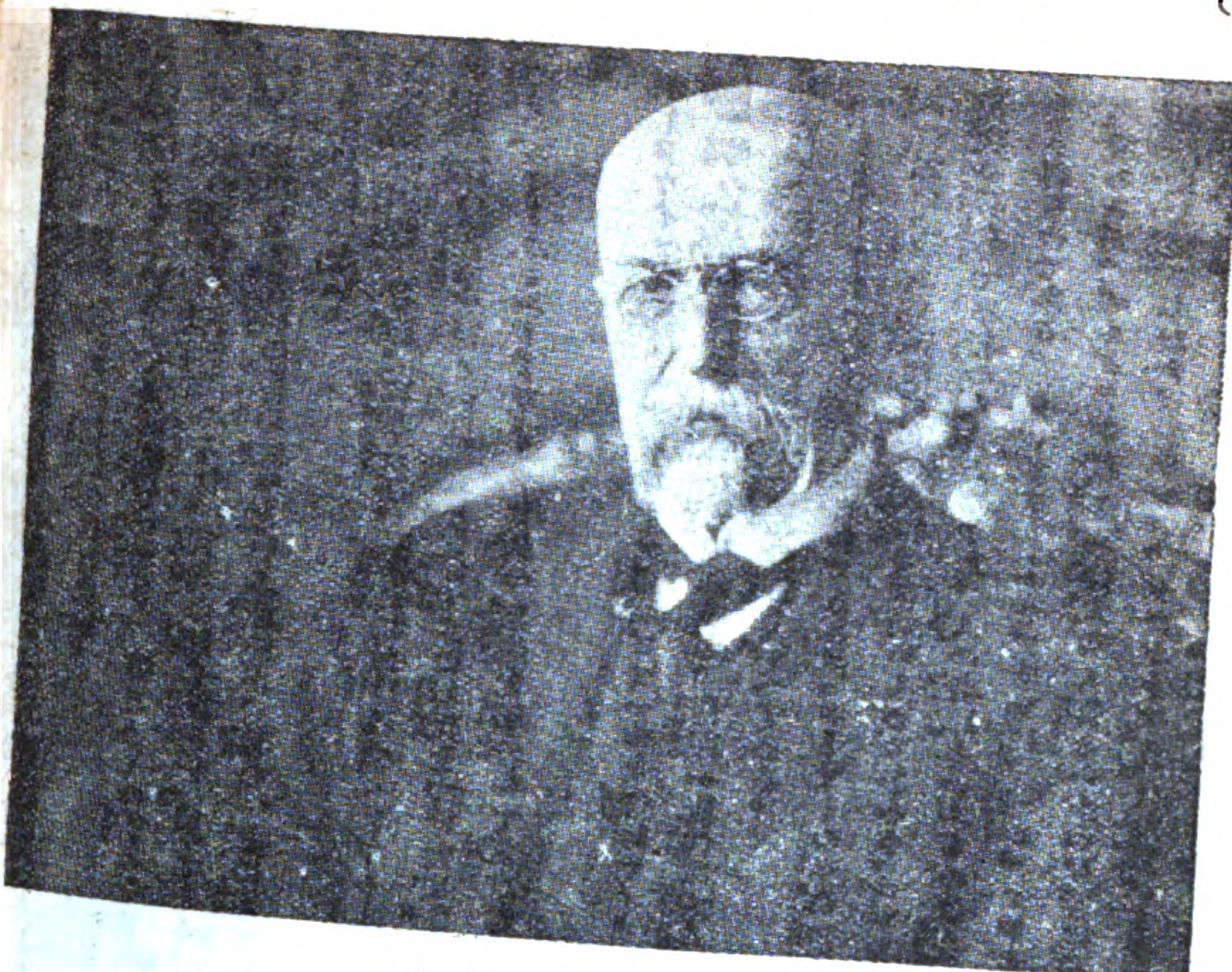
私は彼の經歴、思想、事業及び、最近におけるチェッコ・スロヴアック共和國の飛躍を說く前に、彼の偉大さに折紙をつけた史家兼文明批評家エミール・ルードウイッヒ氏の所說を紹介して置きたいと思ふ。

ルードウイッヒ氏は『ナポレオン傳』『ビスマルク傳』『ウイリアム二世傳』等の名著を出して有名な人であるが、最近『現代に大人物ありや』といふ論文を發表して大要左の如く述べてゐる。

『……ホーマーの詩は廣く讀まれてゐるが、ホーマーの私生活を知る人は無い、恐らく彼は實在の人物では無いものであらう。コロムバスは怪我の功名で不朽の人物となつた。人の名聲といふものは全く當にならぬものである。チャーリー・チャプリンは、ベルグソンよりも有名であるが、ベルグソン以上の偉大な人物といふわけではない。世界歴史を變革したナポレオンや、ワシントン或は詩聖ゲーテなども、現代人が考へるほど當時の人間にその偉大さを現はし得たかどうかは疑はしい。リンドバーグの名は一晝夜の冒險直後において世界の隅まで宣傳されたが、數十年前リンドバーグ以上の冒險を行つて北極に向つたクック博士の成功は、數年後にしてやうやく世界に知れ渡つた。事業と名聲には様々なハンデイキャップがあり、不公平がある。歐洲大戰當時には雲のやうに有名な武將が現はれたが、ヒンデンブルグを除いた外、今は殆んど忘却されて了つた形である。——世界的名聲を博する人、世界の偉人と稱せらるる人は、時代によつてその標準が異ふものである。武人が有名になる時もあり、藝術家が有名になる時もあり、政治家が有名になる時代もある。そして、現代においては、科學者の時代となつた。現代が後代に遺すべき最も偉大なる贈物は科學文明であり、現代の誇りと稱すべきものも偉大なる科學者である。——が、私は現代各方面の大人物、後世にもその名聲を博すべき眞に偉大なる人物を擧げよと云はるれば、躊躇なく次の四名を選ぶであらう。發明家としてのエデイソン、學者としてのアインスタイン、政治家としてのマサリック、文學者としてのバーナード・ショウ。……』

ルードウイッヒ氏は現代の偉人として選んだ四人に就て、各々その偉大さを說いてゐるが、マサリック博士については次の數語を費してゐる。

『またたく間に統率者となつたムッソリーニなどとは異り、廿年の間、ジッと自國及び自國民を胸に描いてゐたのが、マサリックである。長い年月を絶えず遠大な計畫に沒頭した彼は、時節到來、遂に、



マサリツク博士

二　「彼の國民」を創造した」

マサリツクは一八五〇年、東モラヴイアのホドーニンに生れた。日本流に言へば當年七十八才である。美しいマルク河の岸にある小都市、彼の父は町端れに住んでゐた貧しい御者であつた。日夜稼いでも貧しさが募る父親は長男なる彼を鍛冶屋にした。御者よりも數倍收入のある一人前の鍛冶屋として一家の繁榮を計らうと思つたのである。父の意志に從つて彼は熱心に鍛冶屋としての修業をした。歐洲における古今の傑物と稱せらるる者の中に、その幼時を鍛冶屋の徒弟として過した者が多いのは一奇である。

が彼は青年期に達して、學問の必要を痛感した。三百年以前、フレデリック二世に征服されて以來、ドイツ及び墺匈國の權力の下に被征服者として慘めな歴史を繰返してゐるチエック族、スロヴアック族、民はあれど一寸の國士も持たぬ兩種族のために他日事を擧ぐる爲にはどうしても深き學識を備へねばならぬと決心した。心を決した後の彼は前にも増して過激な勞働を續けた。そして相當の貯蓄が出來た。その金を持つて彼はウインナに行き、數年の準備教育を受けた後、ウインナ大學の哲學科に入つた。勉強の暇には肉體的勞働を行ひ、全く血と涙と、力と熱に彩られたのが彼の學生生活であつた。努力は報いられて彼は優秀な成績をもつて學業を卒へた。卒業直後に著はし

た『近代文明の自己破滅』といふ著述が各方面に非常なセンセーションを與へた。

彼はカント及びその亞流によつて祖述されたドイツ哲學から解放され、フランス及び英國の實驗哲學、實證主義、進化論の傾向に注意を拂つた。即ちヒユームやミル、コムトやスペンサーなどが最も強く彼の思想を培養したものであつたが、彼はそれ等偉大なる思想家の思想をそのまゝに受け入れたのではなく、飽く迄も批判的態度を忘れなかつた。批判し、解剖し、渾然たる自己の哲學として再生せしめたのであつた。廣汎な哲學の諸流派を一丸とし、更に科學的特徵を多分に加味したものがマサリックの新哲學であつた。

一躍彼の名聲が上るとともに彼は祖國民の希望として、一八八二年、プラーグの大學教授に招聘された。チエック族の持つ唯一の大學、當時新たに創立された祖國民の最高學府に、彼は遠大な計畫の第一歩として赴任したのである。

チエックの復興と、獨立のためには、何よりも先に教育の普及を計らねばならぬと信じた彼は、講堂における講義とともに、各種の著述によつて民衆の教育に努めた。『社會問題』といふ著書の中で彼は次のやうに言つてゐる。

『高らかに國民の自覺を叫び、或は、國民の進むべき道を教へる事は必要な事である。しかしながら、國民を導かんとするものは第一に、次のやうな事實に注目せねばならぬ。貧しい家に暮してゐるチエック人はさながら自分の家に於て哀れな姿をしてゐる事について、どんな考へを抱いてゐるか。壞れかゝつた部屋の中に、その子供達までが肉體的にも、精神的にも日毎に傷けられつつある親達には、果して祖國についての自覺などを起し得る餘裕があらうか。眞に貧しき者には聖書の章句も精神的の糧とはならぬ。愛國的の叫びも彼等を奮起せしむる力は無い。彼等には先づ、住みよき家を與へねばならぬ。彼等の生活が向上した後において、初めて彼等の輝かしい日が來るであらう――』

彼は政治はどこまでもリアリテイの上に立たねばならぬと說く。生活問題を第一義とせねばならぬ、徒らに夢を追ひ、理想に走る事は、最も愼むべきものであると、ともすれば奇矯、過激に走るボヘミア風の政治家、論客を戒めてゐる。かうした信條の下に、彼は祖國民の教養に廿年に近い努力を續けた。今日においてはボヘミア、モラヴイアの知識階級の知識の程度は西歐諸國民の上にあり、更に一般民衆の向上振も目覺しいものであるが、これは主として彼の努力の成果と言つてもいい。

『我々がマサリックによつて、如何に適切に、如何に健良に教育されたか、その實狀を詳しく眺めて貰ひたい』

こんな言葉はチエック人が、同國を訪るゝ者に必ず囁してゐる言葉である。

國民精神の振興、知識の向上にあらゆる努力を惜まなかつた彼は、

同時に舊來の迷信打破と、不正不義への反抗にも全力を擧げた。そのためには幾度身邊の危難に遭つたことさへある。

一八九九年、ボルナの町に近い森林の中で、一人の少女が何者かのために殺害された事があつた。事件は全く怪奇であつた。血に染つた少女の死骸の傍には何等の物的證據もなく、官憲も犯人について何等の手掛も發見しなかつた。が數日の後に、誰言ふとなく犯人はボルナの町に住むユダヤ人のヒルスナーであらうといふ噂が立つた。ユダヤ人は宗教上の信念から少女の血を求める時がある、人氣ない森の奥に信心深い少女を連れ込んで慘ましく殺したのはユダヤ人以外には無いといふのが一般の考へであつた。噂は遂に官憲を動かし、ヒルスナーは捕へられた。そして一切の辯解は容れられず死刑の宣告を與へられた。『ユダヤ人は昔から少女の血を求める』といふ迷信を持つてゐるチェック人はヒルスナーに對する判決を是認した。その時猛然と立つたのがマサリツクであつた。プラーグ大學教授であつた彼は、怪事件の經過について詳しく調査した。そして、單なる迷信に基く以外、ヒルスナーに對して何等嫌疑をかくべき點の無い事を發見した。彼はチェック人の迷信を責め、不公平な判決を攻撃し、不正不義の前には、身を以てチェック國民全體とも戰ふといふほどの意氣を示した。彼の説を聲援したのは同僚ドルテイナ氏一人であり、彼の教ふる學生は一齊に彼の講義にストライキを起すといふ狀態であつたが、彼の意志は挫けなかつた。彼はヒルスナーと特別な關係があるのではないかとあらぬ疑をかける者さへあつたが、最後の勝利は彼のものであつた。眞犯人は別に現はれた。眞理と正義を熱愛する彼の高潔な思想は萬人に理解さるゝやうになつた。

『眞理と正義のためには忌はしい迷信を破らねばならぬ。一切迷信は愛國心を妨げる魔物である』

と叫ぶ彼の言葉を民衆には神の啓示のやうに尊く聽いた。

彼は決して、美辭麗句を用ひて民衆を釣る煽動政治家ではない。傳統の力によつて、民心を惹くといふトリックを不要とする『チェックの問題』(一八九五年出版)の中に次のやうな言葉がある。

『我々の必要とするものはリアリズムである。リアリズムは誇張された歷史的慣習に反對するものである。――事實は歷史ではない。事實は展開ではない。これがリアリズムの合言葉と私は信ずる。多くの人は我國民の華かなりし過去に憧れてゐる。過去を樣々に彩つて限りなき誇りを抱いてゐる。そして言つた、(國民的自由を與へよ、獨立を與へよ)と。然し何が我々に與へられたか。彼等は我々の獨立自由の第一要素が知識と勞働の二つにあることを忘れてゐる』

彼は倦まず、怠らず國民的訓練を施こして、遂に今日の光輝ある共和國民を形成したのである。

三

チェツクは普通ボヘミヤ人と稱ばれてゐる。ボヘミア高原に住んで

ゐたスラブ族の一種である。現在の人口約九百萬、スロヴァック人は舊ハンガリーの西北部に群居したスラブ人で、人口約二百萬、ボヘミア、モラヴイア、スロヴアキア、シレシア、ルセニアの五部をもつて、現在のチエツコ・スロヴアック共和國を成立し、總人口一三、六一三、一七二人（一九二一年現在）、人口の密度は二五一、一人である。

チエツク族は獨墺種族に對して歴史的に反抗心を抱き、スロヴアツク族はマジヤール人に對して同樣に長い間の反抗を續けてゐた。特にチエツク族には藝術家的の情熱が漲り、高原の非凡な景趣とともに自由奔放の精神がその國民的特徴となつてゐる。墺匈國はこの兩種族に對して、多年極度の壓迫を加へ、その國語使用を禁じ、生兒の屆出等にまで苛酷な取締りを行ふといふ有樣であつた。その結果は自然種族民の海外移住となり、歐洲大戰前におけるチエツク・スロヴアツク兩種族民のアメリカに在住するもの一百萬を越え、各地に自國語の新聞を發行して、反抗の叫びをあげ、革命の氣運を釀してゐた。マサリツクを戴くプラーグ大學はチエツクの復興、ボヘミア國の建設を隱れたる校是とし、力強いマサリツクの言論によつて、青年學徒のみならず、あらゆる民衆に革命思想を注入してゐたものである。

一八九一年、彼は墺國議會の議員に選まれ、ウイーンナの議會に出席した。そして、獨墺流の侵略主義、帝國主義を論難し、特に墺匈國のボスニア、ヘルゼゴヴイナに對する野心に對しては徹底的に糺彈した。しかしながら當時の彼には未だ墺匈國の政治を動かすほど有力な力は無かつた。多數の議員は彼の所說を冷笑し、政府は彼を目して、危險なる存在と感ずる程度であつた。

彼は議員を辭して、プラーグに歸り、再び、革命思想の鼓吹と、國民教育に專念するやうになつた。彼の目的とする處は第一にチエツコ・スロヴアツクの獨立、續いてユーゴスラヴイア、ポーランド等弱小民族の獨立であつた。彼は獨墺のミリタリズムと、英佛諸國の利害問題は、近く一大爭鬪に至るべきを先見し、それに善處して民族の自由を得んと勇躍した。

一九一四年、歐洲大戰が開始されんとする頃は既にパリを根據として、チエツコ國民議會を開き、ロンドン、ローマ、ペトログラード、ニユーヨーク等に各支部を置き、國土なきチエツコ及びスロヴアツク族はその組織を完備し、團結を固め、世界的に脈絡を持つ一大共和國の姿を現出してゐた。その統率者は言ふまでもなく國民議會準備委員長マサリツクであつた。

大戰前に彼はプラーグにゐた。墺匈國の動搖につれて國内には各處にチエツク族の暴動が起つた。墺國政府は彼を目してその元兇とし、直ちに死刑の宣告を與へ財産全部を沒收した。彼は身をもつてパリに脫れたが、可憐な彼の愛孃は墺國官憲に捕へられた。愛孃を人質にされたと聞いて、彼の心は一時暗澹に閉されたが、重大なる民族獨立の使命の前には肉身の愛着心も省る餘裕がなかつた。墺國官憲は激怒の餘

り變轉を銃殺の酷刑に處せんとした。が米國婦人團體の激烈な抗議によつて、危ふく一命は救はれた。

パリに潜入したマサリックは世界各地に散在する同胞に向つて直ちに國民議會開會の飛檄を發し、續いて混亂のロシアに入り、露軍の捕虜となつてゐる同族の將卒及び祖國の救援隊を糾合して五萬余の一軍團を組織し、それを浦鹽に集中した。日本のシベリア出兵と前後して勇敢なチェック軍が、いはゆる當時の過激派軍及び、獨墺捕虜軍と戰つたことは未だ世人の記憶に殘つてゐる處である。當時日本の出兵はその目的の不可解不徹底なる點において近時の山東出兵にも増した愚擧であつたが、チェック軍の活躍の裏面には近く民族獨立の基礎を固むるためといふ明確なる目標があつたのである。

シベリア及び歐露國境におけるチェック軍の活躍状態に滿足を抱き、まさに實現せんとするチェックの獨立を前にして、彼は浦鹽より日本經由米國に向つた。大統領ウイルソンは、先に中歐諸民國の獨立を宣言しながら、急速にその援助を與へないので、彼は直接米國の朝野に訴へて輿論の喚起に努めた。その結果國務長官ランシング氏は『チェック援助』の宣言を出し、彼はまた在米同胞に檄して十萬餘の義勇軍を募り、西部戰線に出征せしめて聯合軍の威力を加へることとした。時局は著しく獨墺軍に不利となつた。當時、彼は、ワシントンにおいて熱辯を揮つたがその中に次のやうな一節がある。

『墺匈國内には墺國皇室及びマジャール貴族に反抗する七種の民族がある。しかも國内には今や一日として暴動乃至示威運動を見ない日はない。一度チェック活躍の烽火が揚つて、是等の小爆發に點火せば、果然の墺國皇室は忽ちロマノフ王家の轍を踏むであらう。墺國皇室の轉覆は即ちドイツにとつての致命傷であり、これによつて中歐帝國の夢想と東方侵略の大野望は根底より破壊されるものである』

そして墺匈國内における最大多數の人口を有するものはチェック及びスロヴァックであり、兩種族は平和愛好の民であると說き

『世界の平和を亂すドイツの中歐帝國建設及び東方侵略計畫を抑止するためには墺國の國力恢復を待つか、然らずんば墺匈國を瓦解せしむるか、二途の一つを選ばねばならぬ――』

と力說したものである。

彼の主張は實現し、平和會議によつてチェッコ・スロヴァック共和國は認められ、一九一八年十一月、國民議會によつて彼は初代の大統領に選擧された。隣邦民族の獨立とともに歐洲の地圖は一變した。

四

昨年八月チェッコ・スロバアキアの飛行將校スカラ中佐はプラーグ發、シベリア經由、極めて優良なレコードをもつて所澤に飛來した。チエッコにおける飛行術の發達、飛行機の普及は驚くべきものがある。飛行機のみではない。鐵道、道路の完備、學校の完設、社會施設の發達

等十年足らずの間に文字通りの黄金時代を形成してゐる。軍隊の組織も整然たるものであるが、その訓育の方針は決して侵略的、軍國主義的なものではない。同國を訪れたロバート・マクレー氏は言つてゐる。

『…チエツコ・スロヴアキアの常に希望するところは平和である。有名なスコダ工作所の方針を見ればチエツコ・スロヴアキアの政策が何れにあるかを知る事が出來るであらう。歐洲大戰においてスコダの巨砲が偉大な效果を發揮したことは今尚世人の記憶に殘つてゐる。同工作所においては今日も武器の製造をしてゐるが、それは全體の二割に過ぎず、他の八割は平和的機械の製造に使用されてゐる――。

彼等は勤勉努力の民である。そして彼等の偉大なる大統領マサリツクが彼等に與へたモツトーは、勞働せよ、努力せよといふことであつた。產業の發達は當然である。――

マサリツクは農業、工業勞働者を立國の基礎とする政策を立ててゐる。新らしく制定した農業法によつて極貧の農民にも自作の耕作地を與へてゐる。あらゆる筋肉の勞働者には、あらゆる機會に正當なる權利を與へてゐる。男子も婦人も、若きも老いたるも、適當な勤勞によつて國を富まし國の文化を高めねばならぬ――彼の振かざす興國の大旗の下に、チエツク及びスロヴアック兩種族はさながら一人の踊子のやうに踊つてゐる。

チエツク魂を最もよく發揚するものにソコール運動がある。ソコールは『鷹』の意、夭折した天才ミロスラフ・テイルス博士が創意したもので、マサリツク其他の有力者が今日の盛大を見るまでに育て上げたものである。民族精神の振興と國民の鍛錬を目的とした團體運動、愛國的、道德的、保健的な訓練である。首都プラーグに每年一回ソコール祭が開かれる。六萬のソコールを容れ、九萬の見物人を收容し得る大競技場に全國のソコールが集る。手工勞働者は無料で入場見物するといふ特典がある。競技場には四ケ所の入口を設け、大音響板を用意した奏樂壇からは滿場に聞える音樂が奏される。定刻四つの門が開かれると音樂隊はソコール進行曲を奏し、一萬四千四百人のソコールが整然と入場する。隊員の帽子には鷹の羽を挿み、濃青色のズボンと白い運動着が爽快無比な感じを與へる。隊伍整然たるソコール式分列式が濟めば一同高らかに『ナ・ツダア』を三唱する。ソコールの萬歲である。續いてマサリツク大統領萬歲を唱へる。それからソコール特有の鮮やかな團體體操が初まる。千變萬化、或は兩腕を上にあげ、或は兩脚をサツと開いて律呂整然たる壯觀を呈する。それがただ一人の指揮者によつて行はれるのである。終れば敏活に退場する。男子に續いて女のソコールが入場する。女の服裝は白の上衣に赤袴、頭には同じく鷹の羽が飾られてゐる。

ソコールは軍隊の補助機關でもある。必要の場合には何時でも軍隊と合同運動を起す事が出來る。必要あれば一夜にして數萬の男子を戰線に送り、組織的に訓練された婦人がその背後から援くるといふのがソコールの精神である。ソコール祭の第一日が風雨に見舞はれた時、

ズブ濡れになつた數萬の男子の後ろにあつて、婦人のソコールは青春への服を用意し、靴下までもはき替へさせるのに一時間を要したかつたさうである。

『國民は小なれば小なるほど一層健全であらねばならぬ。國家の生命は國家を構成する民族の精神に育まれてゐる。この民族的精神に育まれ、健全なる身體に養はれた國家の生命は如何なる權力もこれを屈服することは出來ない。少數にして不健全なるは自滅の兆である。健全にして進取的なる國民に榮光がある。』

といふのがソコールの意氣である。世界の團體運動、民族運動のうちに、ソコールほど規律あり、進取の氣宇に滿ち滿ちたものは無い。創始者の卓見も尊敬すべきものであるが、それを渾然たる現在の大民族運動に仕上げたマサリツクの功勞は多大である。

『ソコールは世界大戰の後始末に際して、平和會議に發言の權利を持つ事になつた。チエツコ・スロヴアキアを獨立せしめたのは、實にソコールである。五十年の努力が報いられて、自由獨立の榮光に接した。ソコールはチエツコ・スロヴアキアの救世主である。』

といふ論者もある。

マサリツクは徹底的にチエツク魂の發揚に努めた。『チエツクはスラブ人ではない』といふハヴリセツクの說を固く信じそれを高調したのが彼であつた。スラブ種族として傳へられた不確實な史實、史上の光榮、それ等はすべて忘れてもいゝ。たゞチエツク人としての榮譽と誇りに生きよ。といふのが彼の持論である。だからソコール運動においても、進取的ではあるが決して古代スラブの如き侵略的の教養は施さない。我を侵すものは死を以て防げよと教へるが、進んで國土を擴張せよとは教へない。彼が最も力を注いでゐるのは國內產業の開發である。戰後不振を極めたボヘミアの織物工業は、素晴らしい發達を示し、スロヴアツク婦人の刺繡其他の手工藝、全國に亙る農產物工業品の生產は加速度に增加してゐる。チエツク・スロヴアツク兩族の間に、人種的反感があつて容易に融和しないと論じてゐた人々もあつたが、最近に至つては、その問題に就て何等の懸念不安も無く、新國家の前途にはたゞ光明のみが待つてゐる。

五

マサリツクは單に自國の幸福のみに心を用ふる者ではない。彼の目ざす處は歐洲諸國の共存共榮であり世界の平和である。

彼は國際聯盟の固き信者であり、國際的協力のためにはあらゆる努力を惜まぬ人である。

彼はインターナショナリズムを諸國民によつて行はるる勞働の分配と構成と解釋してゐる。そして勞働は生產的勞働とともに、精神的、知識的勞働も一視同仁に差別すべきものではないと說いてゐる。

彼はまた次のやうに言つてゐる。

『歐洲全體は一層の密接な經濟的關係を持たねばならぬ。同時に

世界の人道主義も假面をつけぬ眞誠眞銘のものとならねばならぬ。そして私は小國及び小國民の存在が決して世界の協和の障害になるものとは思はない。わが國の如き小共和國の存在は却つて世界平和に貢献するものと信じてゐる。』

この見解から彼は、近隣のスラブ種族の國家との政治的連絡をとる事には極めて冷淡である。ただ經濟的接近を計る。文化の交驩に努める。彼はまた勞農ロシアの振興を期待してゐる。しかしながらロシアのサルヴエーションは内部から起し得るものではない。多分に外國の資本が注入された後において、目覺しい國家の隆興を見るものであらうと觀察してゐる。ロシアを初め列國とも彼は出來得る限りの經濟的深交を結ぶ、そして歐洲の前途を樂觀してゐる。デモクラシーとヒユーマニテイによつて最後の眞の平和が到來するものと信じてゐる。彼の片腕であり國際政局に重きをなす外務大臣ベネーシユ博士は『チエツコ・スロヴアキアの使命』と題して次のやうに言つた。

『新らしき世界と新らしきヨーロツパには二つの特色がある。一は舊墺匈帝國及び露國から分裂して數個の小國が起つたことである。二は國際聯盟である。小國が起つたことは一面から見れば分裂作用を意味して、戰後の世界及び歐洲の政治組織を複雜ならしむる觀がある。そして國際聯盟は統一、單化作用を意味するから、兩者は一見相反するやうに見える。しかし事實においては兩者全く同一の傾向を表現してゐるものである。思ふに、從來外國の支配を受けつつあつた民族が成熟してその自由と獨立を得るのは政治的デモクラシーを實現する所以である。しかして一切の民族と國家が民主的平等を基礎として各々他國の權利を尊重し、善隣の厚誼を結んで協調する。以上二つが新世界、新歐洲の基調をなすものであつて、かく見れば小國分立の作用と國際聯盟の統一作用とは相反するものでないといふ事が判るであらう。新歐洲は一層完全なる永續的調和を實現し、諸國の必要と發展のために一層の正義を確保し、世界に向つて安全平和の恵福を分たんとするものである。新世界の一員たる國々は戰前の舊世界と違つて大いに右の理想に進まねばならぬ。――チエツコ・スロヴアキアは民主々義の精神をもつてその内政外交の根幹となすものである。――我國の金融通貨、貿易のバランス、豫算等に關し、良果を舉げたことは内外の認むる所である。その隣國に對する關係においては、全力を盡して同じく中歐全局の整理團結に貢献するを以て任務とする。これがために我國は各種の政策を取つた。舊領土恢復の反動運動に對する防禦手段がその一つである。――歐洲における新組織、新方法の成否はチエツコ・スロヴアキア及びその同盟國の活動如何による。――我國は國際聯盟の眞の贊成者である。世界的協同團結の制度を立て、平和的に客觀的に爭議を解決するのが我國の政策である。――我國は聯盟の可能と任務をばロマンテイツクに見ず、極めて現實的に見るのである。さきに英國が聯盟以外の手段により歐洲の平和問題を解決すべく提議するや、チエツコ・スロヴアキアは少しの躊

躊躇なく之を歡迎した。かのロカルノ協約なるものは實際的、具體的の政治に聯盟の方法を取入れたものであつて、ために全歐の政局は一大進展をなし、同時に我國の地歩も一層確固になつた――。』

正義と自由をその主義として歐洲の政局に臨むマサリックの態度は右の外相の言辭によつて良く代辯されてゐる。

七十八歳の高齢ながら彼は今なほ壯者をしのぐ元氣さである。彼は未だ未だ爲すべき多くの仕事を抱へてゐると豪語してゐる。

『常に前途を見やう。過去への執着や、回顧的な悲觀は止めやう。我我には輝かしい未來がある。我民族の眞の力は數年の後、數十年の後に初めて發揮されるであらう。』

と彼は確信ある樂觀説をもつて民衆を率ゐてゐる。祖國及び祖國民の復活のために廿年の夢を描いた彼、機に乘じて自己の創作したセオリーに自國の民衆を誘導した彼、彼は第一期の大統領の任期を國民感激の中に終つて、昨年再選せられ『偉大なる我等の大統領』といふ敬愛の稱呼を受けてゐるのである。

彼の長い過去は全く苦鬪の歴史であつた。ムッソリーニは『余の半生は貧乏、勉強、爭鬪の三字に盡きる』と言つてゐるが、マサリックの生涯はそれにも増して血と涙の交錯であつた。

六

私は短かいマサリックの評傳の最後に、最近號のプチ・パリジャン紙に現はれた『マサリック大統領訪問記』を抄譯したい。筆者はアンドレー・ヴイオレス氏である。

『……プラーグの大統領の住居はデモクラシーのマスターの住居としては餘りに華麗であつた。彼が貧乏なプラーグ大學教授であつた姿を思ひ合すれば頓に隔世の感がある。が彼が、ヴエルサイユ會議に弱小國の權利を主張した雄々しい姿を想起すればこの宮殿のやうな住宅を持つことも當然な話かも知れぬ。

大統領の居室に案内された。私は昔ながらの哀れな大學教授の姿を見るつもりでしばらく設けの椅子にかけてゐた。……痩せてはゐるが、どつしりした、思ひ切つて背の高い、七十過ぎの老人とはどうしても思はれない人物が私の前に現はれた。強大な意力が五體に漲つてゐる。けれども厳々したひげの優しさ、魅力ある眼光、これが、新興共和國の大統領とは信じられぬやうな穏やかさである。と思ふ次の瞬間にはこの人特有の底力ある強さに打たれた。……丁寧な挨拶を交した後に私は言つた。

『早くも共和以來九年の月日が流れましたね』

『そうです。確かに九年……』

九年の間のお國の狀態を簡單にお話し下さいと言つたら大統領の顏は緊張した。そして

『勞働者も、農民も、つまりすべての國民が非常に幸福な狀態にあります。共和のめでたさを謳歌し、政府の行政を喜んで居ります。

政府も國民とともに幸福です』

ときつぱりした口調で言つた。

『どうしてそんなに幸福ですか』

私は無遠慮に問ふた。

『國民は自由だからです』

『何故に自由ですか』

『國民は獨立してゐるからです。チエッコ・スロヴアックは如何なる外國の政府に對しても獨立してゐます。如何なる國に對しても自由です。コムミユニズムに對しても自由です。わが共和國は共和の上に陶冶されて、すべての國、すべての思想に對して自由だからです。國家的にも思想的にも一切外力の影響を受けないからです……』

更に私は質問した。

『貴下の最も力を注いでゐられるのは如何なる問題ですか』

『それは新らしく制定した農業法案の實施であります。これは地主にも利益を與へ、小作人にも利益を與へるもので、農業耕作に障害となるべきものが除去されたのです。チエッコ・スロヴアキアにおける五十萬戸の最も悲慘な無産農民はこの法によつて完全に自己の耕作する土地を所有することとなりました。ただしこの方法はフランスのやうな共産主義に絕對に反對する見解からは大いに非難されるものかも知れません。農民のみならず、すべての我國の勞働者は希望に滿ちた勤勞生活を送るやうになりました。これが何よりもチエッコ・スロヴアキアの誇りであり望みであります』

大統領はいよいよ熱心に國家の現狀について語り續けた。

『國庫は充分に充たされてゐます。行政は充分に人民に歡迎されてゐます。總選擧の如きは何等いまはしい紛爭もなく、愛國の至情の下に、易々と行はれました。教育の狀態も非常な好成績を擧げてゐます。社會狀態の平靜なことも充分に誇り得るものと思ひます。國內の東西南北を通じて、日に日に、あらゆることが進步發達してゐます』

『大統領會見記』は大體以上の如きものであるが、自信をもつて國內が日に日に進步してゐると豪語し得るものが果して世界中の政治家中に幾人を數へ得るであらうか。

アメリカの萬國婦人婦選會長アナ・エ・ゴルドン女史はかつて次のやうに言つた。

『あの子は絕對に私を信じてくれる――と言ひ得る母は仕合せた母である』

國民から無限の信奉を受け、自らもまた祖國及び祖國民に絕對の信愛を注いでゐる大統領マサリックの境地は羨ましい。(終)

英雄崇拜と看板心理

高畠素之

一

ルバート・ヒューズといふ男は、アメリカの何流どころの作家か知らないが、映畫の原作者として二三度プログラムで散見した記憶があるから、どうせ大した高級な代物とも考へられない。そのルバート・ヒューズが彼等の稱して『建國の父』と呼ぶジョージ・ワシントンの傳記を物し、彼れが如何に稀代の法羅吹きで賭博常習者で、その上手のつけられぬ好色漢だつたかを暴露したさうである。平民主義の本家本元を以つて自任するヤンキー族ではあるが、さすがに彼等の國民的偶像に對しては夢をつなぎたかつたと見え、ヒューズの取り扱ひについては多大のセンセーションを喚び起こし、寄ると觸るとその噂で持ち切りだといふ。新聞聯合の特派員ともあらうものが、何百金か何千金かの電報料を擲つて長文の通信を寄せ、昭和二年十一月二十二日附の各新聞が擧げて大々的に記事としたところを見ると、當の米國人は素より日本人も人並ならず驚歎したに違ひない。

ジョージ・ワシントンといへば、小學校の修身教科書で庭の櫻樹を切つたといふ逸話でお目に掛かつて以來、何人に對しても『正直の典型』として記憶された筈である。正義人道、自由平等、博愛信義等、あらゆる善德善行の代表者はワシントンであつたといふも過言でなく、苟めにも凡人と同列に考へるなどは、それ自體が冒瀆であるかに畏怖されてゐたのであつた。人もあらうにそのワシントンが、山師で博徒で色魔であつたと聞いては、聖母マリヤの處女性が蹂躪された以上の珍事でなければならぬ。寄ると觸るとの大騒ぎも、必ずや無理からぬこと〻思はれる。

尤もヒューズの摘發は、事實に立脚するよりもヨリ以上空想に依賴する部分が多かるべく、その意味では嚴密な傳記と呼ぶことも許されないであらう。だが、物の道理を考へ合はせると、如何にもそれが事實であるらしく見える。少なくとも、傳說化され神話化されたワシントンの印象よりも、無賴漢の親方として扱つたヒューズの解釋が、まだしも事實に近く、彼れの正體を寫眞したと思はれる。といふ次第に、

叛軍の總帥として『神國』を建設した程のワシントンが、一筋縄や二筋縄の曲者であるべき道理はなく、酢いも甘いも嚙み分けた遊業者であつたればこそ、喰ひ詰め者の荒くれ男を統御して大英帝國の覊絆を脱却する大芝居を打てたのである。修身教科書の材料として生れたやうな男なら、とうの昔しに田舍町の牧師として一切の覇氣を喪失してゐたことであらう。

日本人の祖先崇拝を輕蔑する米國人ではあるが、成り上がり者の悲しさを如實に表はして、彼等は彼等の祖先を本國の迫害から逃れ出たピユーリタンに假定してゐる。或はさういふ分子もあつたらう。だが、それよりも遙か多量の分子は、今も昔も變らぬ一攫千金的出稼人であり、隨つて無頼漢的要素であり、いはゆる淸敎徒的要素は九牛の一毛にも及ばなかつたに違ひない。斯うした向ふ見ずの亂暴者が寄り集つたればこそ、少數雜軍の軍隊を擁して『日沒なき帝國』の組織的軍隊を擊破し得たのであつた。總帥のワシントンだけ、ひとり高く淸かつたとは、如何に贔負目で見ても見られる道理がないではないか。受胎告示を素朴的に信仰し、性交を前提とせざる姙娠の可能を盲信せざる限り、ワシントンの偶像性も信用する譯には行くまい。

引き合ひに出されたワシントンには氣の毒だが、世間大方の偶像的人物も素性を洗へば兒たり難く弟たり難く、佐倉宗吾が三百代言で騒擾院長兵衞が監獄部屋のカスリ取り、國定忠治が居直り强盗とあつては興も座も白らけ渡るだらうが、それが正眞正銘の正體である限り、なんともお家の爲と申し上げるの外はない。ナポレオンが大盜賊でも、マルクスがクロポトキンでも、レーニンがムツソリーニでも、傳統のままを彼等の眞價と盲信するのはコケの骨頂、嘲罵の賣り出しと同様、何割かの割引があることを最初から覺悟して掛からねばウソである。勿論、さうはいふものの、筆者の微意は何も彼等の人物にケチをつけようといふのではなく、彼等の偉大は人後に落ちずこれを認めるに躊躇しない。唯だ何割乃至何十百割の掛け値があるといふに止まる。

斯かる掛け値は如何なる徑路で生じたか? その直接間接の答辯が、實は本論の主題に擇はんとする趣旨なのである。

二

英雄が時代をつくるか、時代が英雄をつくるかといふ問題は、鷄が先か卵が先かの水掛論と共に、昔から執拗に繰りかへされて來た爭點である。觀方によつてはどつちとも言ひ得べく、一人の英雄を中心として新しい時代がつくられる場合もあり、新しい時代に對する必要として英雄をつくり上げる場合もあり得る『英雄崇拝論』の名著で知られたカーライルの如きは、英雄一元論で時代創成の意義を説くさうとした代表的論客であるが、それも些さか狂信的に過ぎると反對に、スペンサー(その他大勢)の如く、英雄中心の從來の歴史を書き直すべしと主張する論據にも、少なからざる誇張があつたことを認めたけ

れぱなるまい。要するに楯の兩面があつて、どちらへ軍配を擧ぐべきか困難である。

然し當今の常識では、英雄が時代をつくるのでなくて時代が英雄をつくるといふことに、殆んど衆評一致の傾きがあるやうに思はれる。それといふのも、今やデモクラシーの時代とあつて、諸物の尺度はその數量的多寡に於いて決定せられ、眞理は賛成者の多數を俟つて始めて立證せられるといふやうな一般的風習が、個人的才能を著しく輕視する傾向を助長したからに外ならない。賢人の一票も愚人の一票も、同等の資格を代表する世の中である限り、特に偉人や傑士を珍重すべき理由も必要もなく、いはゆる英雄主義の人氣が失墜したのも無理からぬところである。その代りといふのは變だが、反對の平民主義が時代の獨占的人氣を博し、白亞館の大統領も自動車の運轉手も人間として平等だといつた觀念が高揚され、英雄と凡人との差別待遇を極端に嫌忌し出したのである。殊に最近に至つては、あらゆる世界觀の根基といふ觸れ出しでマルクス主義が幅を利かせ、その唯物史觀的解釋が一般人心を支配するやうになつた結果、英雄が時代をつくるなどとは飛んでもない妄想であるかに思はれ、ますます英雄主義の人氣は頽化せざるを得なかつた。それも惡くはない。正當の理由も必要も窺はれる。同時に英雄崇拜家らしい口吻を洩らせば、それ自體が直ちに時代後くれと漫罵され、甚だしきは反動派と十把一束に片づける風潮も、決して無理とばかりはいへない事情も見出だされる。だが、茲に不思議としなければならぬ問題は、斯かる時代の平民崇拜的人心にも拘らず、實際の現象は却つて英雄崇拜的に傾向しつつある一事である。

イタリーのムツソリーニを筆頭に、トルコのケマル・パシヤ、スペインのプリモ・ド・リヴェラ、ギリシヤのリザ・カーン、モロツコのアブデル・クリム、支那の張作霖等、その他ラテン・アメリカや回教アジアの諸國には、枚擧に遑なき偶像的英雄が彼等の國民から支持されてゐる。更らに先進國と呼ばれる諸國にあつても、ドイツはヒンデンブルグをフランスはポアンカレーを、骨董品ながらに國民の偶像的信賴を繋ぎ得るといふので第一線に起用し、イギリスはダイ・ハーツ連を中心勢力とする保守黨内閣、アメリカはクー・クラツクス・クランの跳梁、日本は上下を擧げて劍劇の陶醉、どこに平民主義の面影を偲ぶべくもない。社會主義國の本場ロシヤにしたところで、死んだレーニンの遺骨を佛陀のシヤリと同樣に禮讃し、たうとう彼れを『神』の王座に祭り上げてしまつたのである。唯物史觀の素朴的な信徒であり、人間を土塊と共に一個の物質と見る國柄でありながら、これはまた驚くべき盲拜ぶりではないか。

舊い偶像を破壞して新しい偶像をつくることは、如何にも皮肉な現象といはなければならぬ。然しそれは、皮肉なりにも動かすべからぬ目前の事實である以上、英雄崇拜は時間と空間を問はぬ人間本能の現はれと見なければなるまい。武斷的ナポレオンから平和的ワシントンへと、崇拜對象たる英雄の條件は移動したが、これを一個の偶像とし

て讃仰する要求が民衆にある限り、いつの世いかなる時に於ても英雄は民衆のために必要であらう。必要なればこそ、舊來の英雄概念に正反したる『英雄』を新しく創定し、彼等の崇拜感を遺憾なく傾倒するのである。引き合ひの序にワシントンを例證すれば、彼れは平民的で民主的であつたればこそ、即ち舊來のいはゆる英雄的條件を缺如してゐたればこそ、新しい時代の『英雄』として萬人の崇拜を購ひ得たのであつた。實際のワシントンが果して斯かる人物であつたか否か、これは多分の疑念があること前述の通りであるが、時代の平民的乃至民主的要求は實際以上にこれを理想化し、彼等の崇拜感を滿足せしめ得るやうな『人物』に造り上げたといふ方が正しい。隨つて、民衆に取つては、彼れの實際が理想的であつたか否かが、重要なのでなく、理想的な人物として彼れを造り上げることが重要なのである。その意味で、時代が英雄をつくるといふ觀方に誤りはないが、唯だしかし、この命題を唯物史觀的解釋にのみ適用することは異議なきを得ない。

三

オスカー・ワイルドであつたと記憶する。人類の夥しき發見の中にあつて、その最大なるものは『神』の發見であると喝破した。神話的信仰からいへば、許すべからぬ冒瀆であるが、なるほどそんなところかも知れない。神が人を創つたのではなく、フォイエルバッハの言ふ如く、人が神を作つたのである。その姿に似せたのは、神でなくして實は人であつた。蟹が甲羅に似せて穴を掘る如く、人はその姿に似せて神をつくり、而も美化し美化し得る最上の姿に於いて神を創造したのである。

民衆に取つての英雄は、謂はゞ神の現世的なる投影圖に外ならない。故に、英雄を英雄たらしめるには、あらゆる理想化が絶對に必要である。精神的な浄化は素より物質的な美化さへ行はれる。倭躯醜面の義經は斯くして美少年の典型となり、御曹子の名譽を獨占するに至つた。猿面冠者の異名を離れ知らぬ者なき秀吉さへ、芝居の眞柴久吉として眞ツ白に塗り立てる光榮に浴した。現實無視も甚だしいが、英雄として彼等を崇拜する限り、遮二が無二でも容貌的美を具備させなければ滿足しない民衆心理を表明したものである。また「英雄色を好む」といふ下世話の譬にしても、好色の自己辯護に案出したといふよりは、英雄の必然惡を瞑目する窮策に出でたと解せられる理由が多い。それもこれも、理否曲直に拘らず彼等の崇拜する人物を、最上無缺の偶像に祭り上げたがる弱點を暴露したものに外ならぬ。理想化されし英雄の傳說的存在と、有るがまゝなる英雄の現實的存在との間に、如何に相違があるべきかは推想に難からないであらう。

そこで問題は、何が故に民衆は斯く英雄を必要とするかである。人間は誰れしも自己の微弱を意識する。斯かる結果は、何か知ら超人的な力を求め、その庇護の下に身神の安全を計らうといふ本能を助

長し、つひには全智全能の『神』を想定してまで、文字通り安心立命を見出だそうといふに結果せしめた。思へば淺ましき限りだが、今更ら文句をつけて見たところで始まらぬ。既に神信心が自分本位の利益本能から導かれたとすれば、果して神が存在するか存在しないか、さうした詮議立ては一切無用なるべき道理、鰯の頭が鮒の骨でも、信仰の對象に撰んで惡いといふ理屈は成り立たない。所詮は氣やすめである。氣やすめであるから、出來るだけ善化し美化して御利益の多大を買ひ冠り、自分だけ滿足してゐればよいといふ理屈にもなる。そこで『全智全能の神』といつた絶對超特の作品も生れた譯だが、その模寫たる英雄にしたところで五十歩百歩の相違を出ない。

戰國時代の英雄にしても秀吉が豐國神社に祭られ、家康が權現樣と崇められるといふやうに、少し氣の利いた男は悉く『神』の尊敬を拂はれてゐる。これ祖先崇拜の我が國民的美徳の發揚だから、大いに中外に向つて宣傳する價値もあるが、秀吉や家康にすれば苦笑を禁じ得ない記憶もあらう。まして石州津和野の荒くれ粂の平内が、優にやさしき緣結びの神樣に祭り上げられたなどは、さぞかし面喰つてゐることだらうと思はれる。だが、秀吉や家康は素より平内の末に至るまで、何もさう氣恥づかしがるには及ばない。けだし後世の民衆は、自分達の氣休めに彼等を神として禮拜するのだから、その代償に賽錢を貰ひ受けることは少しも差支へなく、鰯の頭や鮒の骨と共に、大手を振つて神樣らしく擔がれるに越したことはない。——などと、論點の中心はいつの間にか外れたやうだが、唯だ物の道理は斯くの如しといふ一例である。

神樣になり損ねた古來の英雄とて、後世の崇拜を贏ひ得るまでには、原形を止めないまでの善化美化が行はれてゐる。又してもワシントンだが、彼れの實際がヒューズの摘發した如き人物であらうと思はれるに拘らず、あらゆる美事善行のチャムピオンとして今日通用するのは、斯かる善化美化が幾百千たび繰り返へされたがためであつた。後世の識者は、荒唐無稽なりに彼等を理想的人物の典型につくり上げ、以つて愚夫愚婦の人格鍛錬に標本たらしめると共に、あはよくば自分もお裾分けに與づからうとしたに過ぎない。その效果は必らずしも絶無でなかつたから、プラグマ的には英雄崇拜の正用逆用が世道人心に裨益せる部分おほく、その限りでは英雄が時代をつくつた場合も必無としない。

閑話休題、要するに英雄とは以上漫錄した如く、人類の崇拜本能の上につくり上げられ、神と共にあらゆる善化美化を經て一個の偶像となり、當初の實物とは似ても似つかぬ超凡性を附與された『偶人』だと言ひ得る。而もかうした偶人の設定は、自己の卑小を保護せんとする努力の反映であり、同時に民衆に取つての傀儡であることも暗示したつもりである。けれども、單にそれだけの說明では、英雄の出現を促した物理的乃至心理的原因の全部を盡くしたとはいひがたい。民衆に取つて英雄の『必要』は、更らにヨリ直接にしてヨリ深刻なる理由

を睥睨してゐる。

それは何であるか？　十六夜の月を待つ氣永さで刮目を乞ふ。

四

今もいふ通り人間には、自己の微力を補はんとして、何か知ら強力なものゝ庇護に依頼したがる癖がある。これは人間の保存本能に出發してゐる。それ故に人間は、權力なり武力なり金力なり、或は他の何等の力なりに於いて、自分よりもより強力な人間を求めて外敵の侵害を防ぎ、一身の安穩を計策するやうになり易い。二十軒に足らぬ山間の部落などにあつてさへ、必らず勢力家と稱せらるゝ二三の人間があり、これを取り卷く數人の追隨者は、その勢力家に阿附迎合することに於いて彼等の利益を守護しつゝある事實を見かける。それが一村となり、一郡となり、一縣となり一國となつて、次第に範圍を擴大するにつれ、ヨリ以上の勢力家から更にヨリ以上の勢力家へと對象を移動し、同時に追隨者の頭數も次第に增大して行くが、斯かる勢力家の庇護の下に一身の安穩を期待する小兒的心理は共通し、唯だ斯かる關係を複雜に累積して組織的ならしめたるに過ぎない。政友會といひ民政黨といひ、レパブリカンといひデモクラットといふも、畢竟はかうした關係の縱斷組織と解せられる。隨つて、それらの政黨が似たり寄つたりの人物を網羅し、主義も政策も同じく似たり寄つたりであることも不思議ではなく、若し兩者に相違があるとすれば、相互に對峙する二つの勢力として反對のための反對を繰り返へした結果、むしろ偶然的に斯かる相違を發生せしめたと見るべきである。

反對のための反對とは、いはゆる敵本主義の意味である。揭揚した一定の主義なり政策なりは、不言不語の野謀を巧言令色する手段であつて、それ自體が結合の動機となるのではない。勿論、ウソから出たマコトといふ諺があつて見れば、最初は巧言令色のために擔ぎ上げた看板であつても、恰かも彼等の結合が主義政策の實行にあつたかの如く思ひ込み、これに狂熱を傾注するといふ場合も有り得よう。例へば我が無產黨の分布の如く、最初はヨリ多く個人的な利害問題や感情問題やを中心としたに拘らず、いつの間にか便宜のための看板に引きずられ、どうやら主義そのものの異同であつたかのやうに啀み合ふ狀態がそれである。また、民政黨の義務教育費全額國庫負擔論にしたところで、政友會の地租移讓論に對抗し得る看板といふ意味から考案した事實を忘れ、佛家の秘寶の如くこれを吹聽しつゝあるが、これなどもウソから出たマコトの好適例でなければならぬ。

尤も、その段になれば、地租移讓の看板だつて同斷であつた。政友會が地租移讓を擔ぎ上げたのは、普選通過に依つてデモクラ的人氣を憲政會に獨占されんことを警戒した結果、その上を越すデモクラ的看板を發見しなければならなくなり、貴院改革だ知事公選だといふ看板と共に地方分權といふ看板を拾ひ出し、論理の當然で地方財政の確立を圖らなければならなかつた窮餘の一策である。今にして四年度豫算編

の五年度實施のとお茶を濁こしてゐるが、實行の可能性などは最初から齒牙にかけなかつた以上、いざ實行となつて面くらふに少しも不思議はあるまい。

政黨主義政策ばかりでなく、凡そあらゆる看板といふ看板は、決してそれ自體のために擔ぎ上げるのではない。それがため自己一身の利益をもたらし得るが故に擔ぐのである。デモクラシーだつて、コムミュニズムだつて、、、、だつて、文化生活だつて、既にそれが看板である限りは、擔ぐ當人が看板の庇護で商賣が成り立てばこそ擔ぐのである。啻に合理合論的な看板のみならず、レーニンを擔ぎ、ムッソリーニを擔ぎ、張作霖を擔ぎ、田中義一を擔ぐ心理も同じこと、擔ぐ方は擔ぐことに依つて利益があるから擔ぐのである。故に這般の因果關係を探索すれば、擔がれる要求があつて擔ぐ條件が生れるのではなく、擔ぐ人間があるから擔がれる人間が出來ること明瞭であらう。

スペンサーを筆頭とする平民主義の一味徒黨が喝破することく、從來の歴史はなるほど英雄の歴史であつた。だが、それ故に從來の歴史は本當でないといふのは變である。何となれば、英雄は時代の民衆が擔ぎ上げた看板なるを以つて、英雄の歴史は即ち平民の歴史であらねばならぬからである。英雄の行跡は民衆の行跡の縮圖的記錄であり、當該時代の民衆的要求を如實に反映した意味で、從來の歴史を新しく書き直すべき必要は毫も認められない。堺利彦翁せつかくの勞作たる『平民日本史』の完成も、その意味に於いては無駄な努力と評するの外なく、民衆を離れて英雄なき代りに英雄を離れて民衆なし、何ぞ英雄史と別個に平民史を編纂する必要あらんや。

五

英雄と民衆とを斯く二元的に分別する解釋は、これを強制支配の一事に依つて翻譯することに出でてゐる。即ち『共産黨宣言』のいはゆる『、、、階級闘爭の歴史である』的人生觀に拘泥し、英雄と民衆とが氷炭相容れざる存在であるかに誤認した結果と思はれる。勿論、それも萬更らのヨタではない。けれども、英雄に依る民衆の斯かる強制支配の一面には、以上に列擧した如き英雄に對する民衆の任意服從があつたことも見逃してはならぬ。右の任意服從は民衆の利益を本位として馴致されたものである限り、これを皮相的な強制支配の一點から解釋することは許されない。

『萬國の勞働者』は一本立ちや微力たるが故に、相互に『團結』して強大な力を得ようとするのである。組合をつくり政黨をつくるのも、畢竟は自分自身の利益を擁護する手段であり、微力を強力化する打算の現はれと解せられる。謂はゞ平民主義の正道である。ところが、一たび組合乃至政黨が結成されるについては、そこに幹部とか指導者とか稱する特殊の人物が出現してくる。この人物は最初、當該團體を代表して内外の折衝を統裁する程度の役目を負せつかるに過ぎな

かつた。が、いつの間にか、先頭を切つて彼等を號令する程度の權威を獲得してしまふ。けだし、一團を代表する限り、彼れが手腕に於いて卓越せる人物だつたに相違なかるべく、隨つて各人の尊敬に支持される結果、彼れに對して任意服從が馴致されたからである。事態が玆まで發展すると、彼れを支持する一團は、ヨリ多數の成員を吸收してヨリ強大な勢力を蓄積する必要から、彼れの人物を實際よりもヨリ以上に吹聽し以つて主義や政策と共に彼れを一團の看板に擔ぎ上げるやうになる。勿論、これには無意識的な『親の欲目』も作用するであらう。が、更らに有意識的な『虎の威を藉る狐』の狡智が作用することも事實である。斯くて皮肉にも、彼れを次第に親分化し暴君化して、人物の偉大性を寄つて集つて築き上げてしまふ。而も主義とか政策とかの抽象的看板より、人物の看板は遙かに具象的であるから、引力も重力も隨つて現實的な道理であり、その結果はやがて主義や政策の看板力を凌駕し、以つて人物の一枚看板を高く揭揚するといふ狀態にまで發展せしめる。主義や政策はつひに附錄的意義を出で得ない。現にマルクシズムのレーニニズムの、或はムツソリーニズムのといはれるやうに、人物あつての主義だつたことを立證してゐる。

從來の事實は端的に、人間が天賦的に英雄崇拜的動物であることを立證する實例でなければならぬ。勿論それは、偉大な人物を尊敬するといふ道德的な動機よりも、或る人物を偉大ならしめることに依り、その看板の陰にかくれて商賣しようといふ功利的な動機をヨリ多く含む意味に於いて、凡人道の裏道を示す行き方であつたことが知られる。平民主義の表道を分け登るにしても、英雄主義の裏道を分け登るにしても、眺めんとする月は共に衆俗の功利的打算であり。發しては平民主義となり、變つては英雄主義となつたにしても、根本の動機が自己保存の本能に置かれる限り、氷炭相容れざる二つの存在と見る解釋は誤りでなければならぬ。デモクラシーのアメリカで、ワシントンやリンカーンやウイルソンを偶像に祭り上げたり、ボリシエキーキのロシヤがレーニンを神様あつかひにしたり、一見いかにも矛盾する現象と思はれやすいが、所かはれば品かはる、看板を偉大ならしめて置いて取り卷きの凡人群が一ト儲けしようといふ本能を通有する以上、結果の相違は取り立てて不思議がるにも當らないのである。

世態人情の複雜性が增大すると、何事にあれ眞理の所在は裏の裏にかくされ易い。英雄主義といふ如き單純素朴な看板は、それなりに擔ぐ動機を容易に端睨せしめるが、正反對の平民主義といつた看板になると、奈邊に動機するか一寸わかり兼ねるのである。寧ろ前者が英雄の庇護にかくれて野望の追求を圖るに對し、恰かもこれに抗爭して萬民平等の理想を實現せんとするのであるかにも考へさせる。現に當代の常識では、前者が惡玉の代表で後者が善玉の代表と考へられてゐる。だが、卑俗低劣な我欲に、執着する人間性の現はれが、一方だけ邪惡で他方だけ正善であるべき道理はない。ソコにソコあり、正善らしく巧言令色して動機の邪惡を胡魔化し、隣人のためと見せかけて秘そ

かに自分のために闘るといふ裏道も有り得る。正義人道、自由平等、、、、、社會革命、世界平和、等、等はなはだ多くの看板は斯くして有象無象に依つて掲ぎ上げられたが、元を洗つて見れば我が身の後生を願ふ念佛である。

その人情的弱點に突け込み、最も巧みに看板的效果に於いて利用したものが、取りも直さず、英雄であり傑士である。彼等はこの看板を最も巧みに利用することに依つて、我れと自らを看板の位置に成り上がらしめ、更らに彼れを看板的に利用する者をして新しい看板たらしめ、斯くして亞流に續く亞流はいつまでも際限がない。

社會主義の看板を『科學的』の名に於いて利用したのは、實にカール・マルクスその人であつた。マルクスの看板を『半歩前進的』に利用したのはレーニンであつた。レーニンの看板を『戰ひ取る的』に利用したのは福本某であつた。福本某の看板を『プロレタ藝術的』に利用したのは……馬の骨か牛の爪でもあつたらう。が、兎にかく斯のやうに、上は牛頭より下は狗尾に至るまで、看板は掲がれる者より掲ぐ者の必要に生ずることを繰り返へし、遺憾ながら消息をもう少し卑近な實例に於いて立證することに依り、看板掲揚と英雄崇拜との相救奇緣性に落着をつけよう。

六

ウヌボレとカサケを一應放棄して直言すれば、人間は老若男女を問はぬ手前勝手な動物である。上下交々利に走るのは孔孟時代の支那人ばかりでなく、生きとし生ける東西古今の人間は、自分の名利を求めるに汲々としてゐる。唯だ自利追求の手段に於いて、これを露骨ならしめるか、隱曲ならしめるか、直接ならしめるか間接ならしめるかの相違はあるが、自己の名利を豫定せずに他人の名利ばかり圖る人間は認められない。尤もその場合、全部の人間が結局の自利を意識して他利を圖るとばかりは限らず、時に意識せずして他利を圖る場合もあるが、これとて嚴密にいへば、他利即自利の打算が習性化した現はれと見るべきである。これ先刻御承知の如き保存本能の然らしめるところ、耶蘇基督を最大の個人主義者に擬つたワイルドの解釋も、その意味では必らずしも逆說とばかりはいへない。

名利的人間の集團たる社會は、斯かる複雜多岐な個人的勢力をゴッチャにしてゐる。各人は各個の利害を有し、若し純粹に自分だけの利益を追求しようとすれば、四方八方と衝突し續けてゐなければならないであらう。そこで勢ひ、小の虫を殺して大の虫を生かす工夫を考へ、損して得とる打算のもとに、その場合に於ける最も根本的な利害を生かさんとするやうになる。組合や政黨の例は前述の通り、その他の如何なる團結もかうした利害關係を基礎にして構成されてゐる。つまり自分の利益を爲すには、これと共同の利害關係をもつ多數の人々と合體した方がヨリ有利だからに外ならない。出身の血緣や地緣や、或は學緣等を逐つて結ぶ『閥』も同じ理由で

ある。門閥、藩閥、學閥等の名稱は今なほ存し、從來に比較すれば多少稀薄となつたとはいへ、各方面に隱然たる勢力を揮ひつつあるのである。藤原の一門が道長を中心にして『望月の缺けたることなし』と豪語し、平家の一族が滿盛を誇いて『平氏に非ざれば人に非ず』と放言したことを思へば、往時の門閥的勢力が如何に強大であつたか察知するに難くあるまい。かうした血族關係に基づく閥的結合は、德川時代まで連綿として續いた。明治の年代に入るや、血族關係はやがて地緣關係に基づく閥的結合に變り、長閥とか薩閥とか、いはゆる藩閥が猛威を揮ふに至つたのである。一方それと同時に、出身學校の緣故に依る結合も促かされ、赤門閥、三田閥、早稻田閥、一ツ橋閥、藏前閥といふやうに、甚だ多くの學閥が官界、政界、學術界、實業界等、あらゆる方面に抗爭を續けつつある。その他、あらゆる緣故を辿る小閥は枚擧に遑なく、前述の如き二十軒足らずの寒村に於いてすらこれを見るとすれば、行住坐臥いづれも閥的關係ならざるはなしと言ひ得よう。組合や政黨の如き集團も、素より一個の閥的關係に於いて結合するところのもの、唯だそれが學閥や藩閥の如く、單純素朴な形態を取らぬといふに過ぎない。

利益追求の途上に於いて、人間は單一獨個では無力なるが故に斯く相互依賴の心理を助長する。つまり斯くすることのみが、彼れを有力ならしめる唯一の方法だからである。從の依賴心は當然、量的條件と質的條件との兩面に集中せられる。前者は外部の共鳴者をヨリ多く掻き集める努力に向けられ、後者は内部の結合をヨリ強く結びつける努力に向けられる。然るに、掻き集めも結びつけも、これを出來るだけ效果的ならしめるためには、表示する看板の吸引力と重壓力とが絶對に必要である。而もその看板が、抽象的であると具象的であるとは問ふところでない。が、唯だ看板としての威力に於いて、具象的なものは抽象的なものより遙かにヨリ有力である關係上、よし最初は抽象的看板に依つて導かれた結合であつても、次第に人物的看板を擁護する必要が內外とも促かされて來るのである。そこで好むと好まざるとに拘らず、一團の中心となるべき人物を見出だし、寄つて集つて看板的に偉大ならしめるやう、實際以上に彼れの人物を吹聽するといふ結果にも立ち到る。ウソから出たマコトの譬へに洩れず、最初は人おどかしの看板のつもりだつたのが、本當に人がおどろいたのを見て道具人的に自分までおどろき、いつの間にか最初の傲本主義を忘失する場合もなしとせぬが、無意識なりに親分を偉大ならしめて置いて自分の偉大も一擧兩得し、看板の陰にかくれて商賣を忘れぬところは、さすがに三ツ兒の魂だつたと感心させられる實例が多い。

七

看板を擁く動機は、斯くの如くに卑俗でもあり低劣でもある。然し擁かれる人物は、さればといつて必らずしも卑俗低劣であるとは限らない。如何に信心からでも、まさか鰯の頭や鯖の骨とは違つてゐよ

う。擔がれるには擔がれるだけの看板的素質もあつたのである。唯だ一旦、これを看板として擔き上げる段になり、實際以上に誇張するため周圍の人間より圖ぬけて偉大らしく吹聽され、現物の名殘りを留めないほど修飾されるといふに過ぎない。勿論、擔ぐ方の側からいへば、さうなつて呉れて初めて思ふ壺であるが、空間的に時間的に距離が遠くなればなるほど傳說化の程度が著しく、ますます現實の人物とは似ても似つかぬ架空の人物が出來あがつてしまふ。

冒頭に引例したワシントンについていへば、たとひ彼れが指摘された如き無頼漢であつたにしても、獨立運動の一枚看板に擔ぎ上げられるには、確かにそれだけの人物的長所があつたに違ひない。ヒユーズ自身も『驚ろくべきほど信義に篤かつた』ことを認めてゐるさうだが、この一事が他の色魔的、博徒的、山師的な弱所を補つて餘りあつたればこそ、周圍の取り卷きから看板的偉大を吹聽される光榮に有りつけたのである。而も一犬の嘘は萬犬の嘘に役立つを以つて、背德ワシントンはいつの間にか高德ワシントンに傳說化され、有りの儘の眞實を喝破した（らうと思ふ）ヒユーズが、却つて四面楚歌の憂き目を見るといふ皮肉な現象をさへ生ぜしめた。恐るべきは英雄に對する崇拜心理に非ず、實は直接間接にこれを導いた風俗の看板心理である。

豐臣秀吉も西鄕隆盛も、ナポレオンもビスマルクスも、レーニンもムツソリーニも、その他あらゆる數百千の偉人傑士と雖も、恐らく『來て見れば左程でもなき富士の山』であらう。藩閥の巨魁伊藤博文や黨閥の親玉原敬やは素より、遥か降つては主義間の元兇大杉榮にしたところで、彼等は生前から周圍の凡俗的幇間の功利目的のために看板的效果を發揚してゐた。而も彼等の光彩陸離たる劇的最後は、看板的效果を彌やが上にも助勢した傾きがあり、今や次第に傳說化の程度が年と共に濃厚とならしめつつあるかに見られる。何十年の後、何百年の後、彼等が明治大正の『英雄』に祭り上げられぬとは誰れが保證し得よう。その場合、彼等の人と爲りは遺憾なきまで傳說化され、彼等と偶然に出生を同じうして彼等を見聞した我等の印象とは、似ても似つかぬ偶像的資格を附與されてゐるに違ひない。若しヒユーズの如き白眼者が現はれ、彼れがワシントンに下したと同樣の偶像破壞を企てたとしたら、恐らくヒユーズが現に受けつつあると同樣の非難漫罵を蒙むらなければならないであらう。何ぞ知らん、彼等の人と爲りは事實に於いて山師的であり、博徒的であり、或は色魔的でさへあつたのである。

思ふに『英雄』に對する謂はれなき現代的反感は、それが超人的な或る種の力を所有し、その力を強用して無理無態に當代の民衆を支配したと見る誤解に出でてゐる。隨つて、英雄と民衆とは全く相容れざる二つの利害を代表する存在であつたかの如き誤解も生じ、江戸の敵を長崎で打つ心意氣に於いて、あらゆる反感と呪咀とを挑發するに傾いたのである。ところが、さうした平民的彼等であるに拘らず、實際に處世する態度は黨同伐異の限りを盡くし、それぞれの利害關係や緣

故關係やで閥をつくり、中心となるべき看板的人物を擔いで意識的に彼れの偉大を助勢してゐる。デモクラシーだの社會主義だの、凡そ偉人傑士の輕蔑をもつて身上とすべき筈の一派に於いて、特にその傾向が著しいことが認められる。それもそのはず、閥をつくり看板を擔ぐのは、これに依つて商賣に有りつかうといふ凡人道の逆面的な現はれであるから、ヨリ多數の凡人的集團たる彼等が、平素の口吻に似もやらぬ英雄崇拜の馬脚を露はすべきが當然である。むべなる哉、デモクラシーの本場を以つて許す米國民のワシントンに對する偶像崇拜や、共産主義の大本山たる露國民のレーニンに對する偶像崇拜や、である。日本國民などは、古來尚武の氣風を以つて名高く、自他ともに英雄主義のチャムピオンとして許してゐるのであるが、米國民に於けるワシントンや露國民に於けるレーニンの如く、しかし偉大なる國民的偶像を崇拜し得ざりしことを悲しむ。

英雄主義と平民主義とは、斯くして楯の兩面に過ぎなかつた。謂はば凡人道の表裏である。隨つて、現代は民衆時代であつて英雄時代でないといふ議論は、それ自體が淺薄きわまる解釋でなければならない。民衆の時代になればなるほど、英雄は民衆に取つて『必要』の程度を増し加へる。武斷的であるか平和的であるか、專制的であるか民主的であるか、母性的であるか娼婦的であるか、凡そかうした英雄を英雄たらしめるところの條件は、當該時代に彼れを擔ぐ民衆の『必要』に依つて決定されるのである。その意味に於いては、時代が英雄をつくるといふ觀點も正しい。それだけに偶は、英雄の歴史が民衆の歴史であらねばならぬ理由も見出だされるのである。

木下謙次郎と池上四郎

野村胡堂

◇田中内閣の人物行政ばかりは、近頃の内閣に例の無い大味噌であつた。文句を言へば際限は無い、が、ここでは、一般論を預つて、需めらるるままに、人氣と不人氣の兩極端なる、池上新朝鮮政務總監と、木下新關東廳長官の月旦に止めて置かうと思ふ。

◇

◇木ノ謙――と言つて惡ければ、木下謙次郎と訂正してもいい――彼は大分の出、明治二年生れの中老、尾も鰭も不足のある年ではないが、策士がかつた昔の經歷が祟つて、今に猶ほ、貫祿に不足があるらしく思はれて居るのは氣の毒な事だ。木ノ謙が關東長官と聞いた時、大抵の人は腹を立てる前に、恐らくプッと吹き出したらう。邪ほど左樣に、彼は輕覽らしく、愛婿者らしく、且つ愉快にも常識を飛離れて居る。

◇實家には巨萬の富が積まれてあつたが、父親を亡ふと同時に、その巨萬と形容される財産を、幾人かの弟妹へ、何んの未練もなく、極めて簡單に分配してしまつた。この男、昔から隨分評判はよくないが、金にだけはまことに淡白であつたらしい。これが我が木ノ謙を特性づける第一條件である。

◇京都の高等學校をオン出たのは、彼がグレ始める抑々であつた。その原因は、官學臭が嫌で自ら飛出したとも言ひ、當時の危險思想で、學校の方からオン出されたのだともいふ。が、兎に角、あまり方正謹直なる學生さんで無かつた事だけは事實だ、三ッ兒の魂百までといふ通り、後年政治家としての經歷が、甚だ方正謹直でなかつたのも偶然ではない。考へて見ると、一種安定し難き思想が、彼に付き纏つたのは恐らくこの頃からで、これは當然、木ノ謙第二の特性として、揚ぐ可きである。

◇彼は幾度か婦人と同居した。が、最後は悉く過分の金をやつて別れ、その爲に甚しく親讓りの身上を細くした。二十年ばかり前、當時有名だつた紅葉館の太郎を宿の妻にした事があるが、例の調子でソリが合はず、遂に家屋什器は勿論、全部の財産を女に與へて、自分の方から、着のみ着のままでオン出てしまつた。これは彼の潔癖と哲學に由來した事で、下らぬ見得を切つたわけでも、僞善めかしき事をやつたわけでもない。過つて彼を快男子扱ひにしてはいけない、この一例は、たまたま彼がその持つて居る一種怪奇なる哲學を、如何に勇敢に實現したかといふ、彼の第三の特性を知つてもらう爲に揭げたものである。それで充分だ、それ以上のものでは無い。

◇明治三十五年、始めて代議士に打つて出てから、政黨から政黨へ、庭石を踏むやうに彼は渡り歩いた。政治家として――少くとも當代の黨人道德から見れば――それは唾棄すべき無節操の行爲であつた。木ノ謙の評判の惡さは、その策士として博した虚名(?)のせゐもあるだらうが、大部分は、政黨を踏石にして傍若無人に渡り歩いたせゐだと言つても、六

した間違ひではなからう。

◇けれども、彼の爲に辯ずれば、少くともそれは、世の所謂陣笠諸君の如く、利權に誘惑されて移り歩いたのでない事だけは確かだ。

彼の行動は、何時の場合にも能動的であつた。よく言へば彼は、哲學者の如く勇敢に理想を追ふた。惡く言へば彼は、夢遊病者の如く盲目的に幻覺を趁つた。彼は常に彼岸の樂園を夢みた。「あすこに行けば、あすこに行けば」と絶えず幻を追及してノタ打ち廻つた。そして政治的幻覺は、蜃氣樓よりもたより無い存在だといふ事を覺らずに、空しく年を取つてしまつたのである。

◇彼は常に夢みる。議員生活に入る前、換言すれば、未だ親讓りの小金を持つて居る頃、臺灣から南支那へかけて、ユートピアの建設を夢みて放浪の旅を續けた事がある。そのためには、原始人の生活を知る必要があると信じて、身命を賭して臺灣の生蕃に接近した事さへある。斷るまでもなく、これは悉く正氣の沙汰であつたからお話になる。

◇議員生活に入つてからも、乞食に對して異常なる興味を持ち、錢をやつては、その最も簡單なる職業を選んだ動機を研究した。自分で好きでやつたか、それとも社會が乞食にしたか、無可有郷建設者に取つて、それは極めて重大にして、且つ興味津々たる問題であつたらしい。或時の如き、乞食の子の爲に、自分の袖を脫いで泥餅をすくつてやつた事さへある。カンガルー皮の袖に、果して何匹の泥鰌を捕り得たか、史も亦そこまでは傳へないが、これもズンと正氣の沙汰なんだから、看る人大に驚いて宜しい。

◇彼、木下謙次郎は、同姓藤吉郎秀吉君よりも空想家であつた、彼は六十近くなるまで幻想の「青い鳥」を追ひ續けて來た。追つても追つても「青い鳥」は捕らぬ。その結果、彼は人事と社會を輕蔑し、それに超然としやうと努めたが、凡人の悲しさ、トルストイにもタゴールにも、アウンパラパにも隱田の行者にもなり切れず、官職を輕蔑し乍ら官職を戀ひ、政治を輕蔑し乍ら政治に追ひ使はれつつ、五十餘年を空しく過したのである。悲しい事に彼の辭書には、「迷ひ」といふ字だけあつて、「悟り」といふ字は無かつたのである。

◇彼には「美味求眞」といふ名著がある、彼の後年は、政治家であるよりは、より多く料理の大家であつた。どうしてそんな破目になつたか、これにも少しばかり話がある。彼の郷國は大分の山奥、天然の物資に乏しく、うまい物が無いから、從つて料理道が異常に發達して居る。彼が子供の時からスッポンや鰻を捌ふ事に馴れ、庖丁を持つ手と、料理を味ふ舌だけ方外に發達したのは少しも不思議はない。

◇桂太郎が癌で弱つた時、スッポンがいいといふので、盛んにそれを食はせた。木ノ謙一日見舞に行つて、そのスッポンなるものを味はひ、「これはスッポンでない」と言ひ出した。一坐大に驚いて「お前にスッポンが解るか」といふと「解る」と胸を叩く、「そんなら料れるか」「言ふにや及ぶ」と、即時郷里に電報して、大分のスッポンを取り寄せた。長崎の强飯ではない、當時の運輸機關の最大能力を發揮して、何日とかでそれが手に入つたといふ記錄が殘つて居る位ゐだ。

◇そのスッポンを木ノ謙の庖丁で食はせると果して味が違ふ。當時一坐して招伴に預つた杉孫七郎「オレの家へ客をするから、お前が

來て料理をしろ」と代議士のパリ〳〵と知らず、高等板前の木ノ謙を顎で呼んで大に問題を起したといふ喜劇などがある。

◇爾來、暇々に料理に没頭したが、政界幾變轉の後、自分の思ふやうな目が出ず、世間も木ノ謙の水性に愛想を盡かし、木ノ謙も政界といふものに愛想を盡かして、一時すつかり政治てふものをあきらめ、山に隱れた積りで庖丁に隱れた時代がある。木ノ謙を料理道の大家たらしめたのはその時の研究だ。

◇關東廳長官に任命される二三日前、故博北里柴三郎は、田中首相以下の高官を招いて、木ノ謙のスッポン料理を馳走した。その時、あるじの博士、坐興半分に「木下は政治家としては失敗したが、料理通で腐らすのは惜しい、彼には外に用ふべき才がある、これをいつまでも放つて置く法は無い」と首相を責めた。田中首相はこれに對して「イヤ木下の才能はオラもよく知つて居る、決して閑却して置くわけではない」と應へた。坐にある木ノ謙にも、田中が何んかしら自分の事を考へて居てくれるなといふ事が解つたが、さてそれが何を意味するか解らなかつた。

◇當時木下は、「美味求眞」の植物篇を書くため、一度支那へ行つて研究して來る必要があつた。田中はその旅費をくれるか、せい〳〵研究の便宜を計つてくれるのが關の山だらうと思つて居ると、豈はからんや、關東廳長官と言ふ棚ボタで兩頰を叩かれた。この任命で一番驚いたのは、恐らく當の木ノ謙自身だつたらうといふ事である。この際、況んや天下の人をや、などと交ぜつ返してはいけない。

◇木ノ謙登用については、世間で考へるやうに田中首相を強要した者があるわけではない。木ノ謙登用に關する功罪は、あげて田中首相自身が負ふべきである。尤も田中と木下は、水よりやや濃い程度の親類關係がある相で、その他にも、田中が政界に野心を持ちはじめた頃、當時相當羽振のよかつた木ノ謙が、一かど相談相手になつてやつた事が無いでも無い。

◇木ノ謙の策士時代の話は面白いが、今はそれを書いて居る紙が無い。憲政本黨に巣くつて、犬養取つて投げにかかつたり、二大政黨の對立を夢みて、桂太郎引つぱり出しにかゝつたり、隨分世間を騒がせた事は大方も知つて居るだらう。けれども、それが結局木ノ謙の爲に何になつたらう。彼は頭も良い、政治家には惜いほどのイマジネーションも持つて居る。しかし、それが彼の爲に何の役に立つたらう。

◇曾て私は、十五年前、小著「人類館」の中に木ノ謙を傳して、から書いた事がある「安達謙藏あたりの下風に立られては、流石に木ノ謙もやり切れまい」と。ところで、その安達が一度大臣の洗禮を受けて、今は民政黨の長老で押しも押されもせずに納つて居る。一方木ノ謙は、たかが關東廳長官になつて、世の中からあの通り騒がれて居るではないか。

◇要するに、政治は力だ、策でも知惠でもない。岡崎も木下も、賢こい割に香しい事の無かつたのは、策があり過ぎて、力が足らなかつた爲ではないか。一生「策」を封じろ、これが木ノ謙の首途を送る私の餞だ。

◇彼は併し、肌ざわりのいい話のわかつた男だ。彼は長上官であるよりは、すべての人に友人である方を選ぶだらう。恐らく部下の爲には結構な長官として喜ばれもしやう。仕事も出來る筈だ。遞信參政官、鐵道の勅參であ

つた過去の經歷はそれを語る。しかし關東廳はそんなわけには行くまい、三頭政治の小面倒さに愛憎を蓋かして、木ノ謙一流の足を投げ出さなければ仕合せだ。何しても、あまり頼母し氣な長官ではないが‥‥。

◇

◇木の謙の不評判に比較して、朝鮮の政務總監になつた池上四郎の評判のよさはどうだ、政黨から政黨へと渡り歩いた男と、大阪市長を十年勤めた男では、これだけ世間の信用が違ふ。尤も門番だつて三十年も勤めれば表彰される。東京市は五年間に六人の市長を代へた、市長を十年勤めるのは、並大抵の事でないのはよく判つて居る。

◇その昔は大阪の市會も、常盤會が蔓つた時代の、東京市のそれと大差が無かつた、七里淸介は、タマニーを率ゐて、さながら當年の森久保作藏であつた。市長植村俊平、肝付兼行は、これに制肘されてどうにもならず、蹴でマリのやうに投り出されてしまつた。

◇結局、當時大阪の三長老、朝日の村山龍平毎日の本山彥一、それに三十四銀行の小山健三が乘り出し、前警察部長の池上四郎を引つこ抜いて市長に頂いた。斷るまでもなく、池上は大阪府の前警察部長だ。市會議員の弱點を悉く諳んじて居るばかりでなく、全大阪市の署長は全部彼の部下であつた。市會議員如何に勇敢なりと雖も、この市長に睨まれてはグウの音も出ない。

◇もう一つは、大阪で兩新聞を背景にした上財界の長老小山健三を背負つて居る。當時小山が顔を出せば、市の事、財界の事、一として解決せざるは無しと言はれた。これだけ五光を背負つて仕事が出來なければ、それこそ手の付けやうのない凡クラだ。池上四郎が三期に亙つて市長を勤めたのは、必ずしも彼のエライせゐばかりではないとも言へる。

◇池上は警視廳の警部補をフリ出しに、鰻上りに出世した男だ。市長就任と同時に、自分に學問の無い弱點を知り拔いて居る彼は、助役に一流の人物を据ゑるつもりで、その選定を小山に頼んだ。小山は高商の先生をして居た時の生徒で、當時法學博士になつて居る關一を推した。關は交通政策の研究者で、折から市電問題の解決に、どれだけ池上を助けたか解らない。姑の光で儲けて今度は女房をもらひ當てた。池上も亦一代の幸運兒といふべきではないか。（關一は、池上の後を承けて今の大阪市長であることはいふまでもない）

◇池上はよく飲む。東京も同じ事だが、大阪の市長は市會議員に御馳走しなければ勤まらない、盃盤の間に應酬して、一寸も退けない酒量は、その非凡の健康と共に、又池上を幸した。

◇大阪の市長は歷代市會議員を私宅に訪問して、就任の挨拶をしたものだ。これはまことに大阪らしい習慣だが、前の植村と肝付は、見識張つてそれをやらない。池上はシルクハツトにフロツクコートで酒屋さんの店頭にも立ち、風呂屋の暖簾もくぐり、「よろしく頼む」とお辭儀をして廻つた、この如才なさがまた素適にきいた。

◇彼は又ヌーボー式で巧に非凡を韜晦し、容易に人に憎まれない。その上淸廉で無理な金を欲しがらない。彼の如きは實業都市大阪の市長としては、全く最上等の出來であつたらう。大綱をすべる人で、細節の解る人ではないが、それでも多年懸案の大阪電燈を買收して市營とし、市長としての治績もかなりあが

つた。

◇三期の滿十年勤めて市長を止した時は、退職慰勞金を三十五萬圓貰つた。前代未聞の額だ。その金を當てにして、會社ゴロやかれこれ屋の比が、甘きにつく蟻の如く雲集し、重役や社長の口が彼の上へ雨と降つたが、池上は賢いから悉く追ひ退け、市外吹田に閑居して悠々老を樂んで居るかに見えた。が、彼の野心はなか／＼こんな事ではやまなかつた。老を樂しむべく、彼はあまりに娑婆つ氣がある。

◇彼は後藤とよかつた。その關係で地震内閣當時、滿鐵總裁に擬せられたが、不幸にしてお流れになつた。中橋とは大阪以來の深い關係があり、軍人後援會を主宰した縁故で、田中とも知る機會があつた。彼は恐らく逢ふほどのすべての人に頼母しがられ、調法がられそして親類附合をされた事であらう。七十一歳世の常ならばお念佛と親しむ年齢にして、遙々朝鮮の要官に抜かれたのは、そのためだとも言へる。

◇彼は太つ腹で、頑固らしいくせに融通がきき、最も巧に人に利權を與へる。そのくせ、自分では決して利權に指を染めない。市長として十年續いたのはその骨のお蔭だ。利權屋に睨まれて、とう／＼東京市を追ん出された西久保とは何んといふ違ひだらう。どつちがいいか惡いか、それは申し度くない。

◇評判の香しくない山梨の女房役として、名總監の湯淺の後に、池上は何んな事をするか見物だ。然し朝鮮は大阪と違ふ、あまり利權屋に飴をしやぶらせ過ぎると、甚だ面白くない事にならないとは限らない、戒め度いのはそれだけだ。

◇評判の惡い木ノ謙にも取り柄があり、評判のいゝ池上にも危まれる點がある。これが人物行政の六つかしいところでもあり、面白いところでもある。（完）

農耕餘錄

吉植庄亮

私は新聞記者をやつてゐた時分から、農村問題には深い興味を持つて對してゐた。議會記者として記事を取つてゐる際などでも、議員や當局の態度が農村問題に冷淡なのを見ては、我慢出來なくなつて

わが國を脊負ひ立つとふ人々のものいふ聞けばわが國危し

安んじて米作り得ぬ百姓のふるさと人に思はゆきつ

心より百姓を思ふ人ならず大臣の言のけふもさびしき

春小田にうらやすからず耕せる百姓の心大臣はしらず

安んじて米作り得ぬこの國を瑞穂の國といはまくかしこし

なんぞと歌に所懐を托して、時事吟として紙上に發表してゐたものである。そして、この心が今日の私をして遂に百姓たらしめたのである。

私の郷里は十數年前までは、比年の大洪水で、疲弊その極に達し、地主といふ地主も殆ど裸一貫となり、その後利根治水の治績揚が

ると共に、洪水の惨害も減少し、生活もいくらか樂になつたが、村人の手から失はれた土地は再び村人の手に戻つては來なかつた。そして殆ど小作人ばかりの集團部落が、いくつも殘されて今日に及んだのである。

　地主や、地主兼小作人の多い部落の人達は、互にその收穫を競ひ、隣人に負くるを恥辱として、努力、力行の徒となつてゐるのが普通である。ところで、小作人のみの部落では、肥料を出來るだけ少くし、勞力を極端にはしよつて、辛く平年作位に出來た田の年貢を、如何に巧妙に切りひきさせる事が出來たかを自慢にしあふのが普通である。此處では怠けに怠けた上で、うまくごまかしおほせた人が威張るのだ。律義とか、勤勉とかいふ言葉はここでは通用しないのである。私達のいくつかの部落も、勿論、こうした氣風からの禍をのがれる事は出來なかつた。私の心は傷んだ。宗教も教育も窮極は之を救つてくれやう、然しそれは遠い遠い將來の話である、さし當つては彼等を地主にする以外に良策はない。こう思つて私は所有地の分割を決意した。

　私の考を實行すべく幸な事には、政府では自作農創設法案を制定して、小作人に對し自作農創設資金の低資貸付を始めた。私の分割言明とこの創設資金貸付とは小作人達を大變喜ばした。然し、この資金借受には保證人が二人要る事になつて居り、その保證人には法定の資産を有する人たる事の條件があつた。ところで、私の部落は殆小作人ばかりであるので、その點では親子、兄弟、親戚友人殆無資格者である、依て私は父と相談してそれらの人達には二人で保證人になつてやる事にした。然しまだ障害がある。本縣（千葉縣）に割當資金が二十萬圓であるのに、希望額は百萬圓を突破してゐるといふのだ。この分では私の部落の人達が例へ小さな地主でも、その地主になれるのは十年二十年待たねばならなくならふ。政府と實際とのへだたりの一つの例をこの大切な事實に見つつ、私の心は暗然たらざるを得ない。

　こう見て來ると、農村は果して如何なるであらうと、誰しもが思ふことであらふが、私は私が研究し且つ實驗した範圍に於て、農村は浮ばれると思つてゐる。

　私はいま一生懸命に開墾をしつつある。何故開墾をしてゐるのか、それは私の理想とする新農業をなすには、日本の既成田では不便だからである。といふよりは、新農法を行ふ一纒めの廣い地區を得る事が困難だからである。日本の既成田は餘りに小區劃に分たれ、餘りに分散的に配置されてゐるからである。

　私の理想は勞力の半減と、生産の倍加にある。今日わが農村に於ける反當り勞力二十人、反當り收穫五俵といふ數字を、反當り勞力十五人より十人に、反當り收穫七俵より十俵にするといふのである。そして私は私の理想に隨つて開墾し、耕地整理を行つた十六町歩に於て、本年反當勞力二十人、收穫反當り十俵に漕ぎつけた、私の理想は曙光を認めたのである、既に一歩を踏み込んだわけである。

　今日私の知る限りでの反當り多收穫は岩手縣の佐藤染三郎氏の反二十俵に止めを刺すやうである。又勞力節約は靜岡縣小笠郡農會の十三人七分が最高のやうである。私の理想は佐藤氏の實蹟と、小笠郡農會の實蹟とに兩足をかけて、一般農民としての理想を、勞力の半減と、二倍增收とに置いたのである。この私の理想が實現を見る曉は、小作爭議の處理また自らにして解決出來ると思ふ。

　自作農創設資金貸下による自作農創設に危惧を感じつつ、私は今私の理想の、日本農民の爲め、日本邦家の爲め一日も早く到達し得ん事を神に祈念しつつあるのである。（三年一月三日、印旛沼の家にて）

漱石の思ひ出（五）

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

二十　黒板の似顔

前にも申しましたとほり、着物も夜具も着破つて了つたことですから、愈々歸朝といふことになればその仕度をして置かねばならなくなりまして、貧乏してゐる父の厄介になるわけには行かず、とう〳〵妹婿の鈴木に賴んで百圓ばかり用立てゝ貰つて、どうやらかうやら迎へる準備だけは出來ましたが、歸へつて來た夏目も殆んどこれ又無一文でかへつて來たので、さて愈々東京で家を持たうにもどうにもあがきがつきません。それだからといつていつまでもこの小ぼけな離れに厄介になつてるわけにも參りませんので、夏目は毎日毎日借家をさがしに出かけます。本郷小石川牛込四谷赤阪と、山ノ手は相構はずさがし歩るいた様子で、かへつて來ては今日はどこそこを歩いたと、そんなことを申して居りました。よく菅虎雄さんと御一緒に出掛けました。

ところが運よくさがし當てたのが、本郷駒込千駄木五十七番地の齋藤阿具さんの御宅。齋藤さんは洋行してらしたかそれとも仙臺の高等學校に行つて居られたか、ともかくあき家になつて居つて、話をして見ると差配が貸してもいゝといふこと、齋藤さんとは大學時代から識り合ひの中で、早速そこへ移ることにきめました。しかし前に熊本から引き揚げる時に、世帶道具は一式賣り飛ばして身一つで來たのですから、それから買ひ調へなければなりません。それから移轉料もいります。けれども有金は殆んどないのです。そこで大塚さんの貯金のうちから百圓か百五十圓かをお借りして、漸くそこへ落ちつくことが出來ました。

ところが私が一月に風邪を引いて、手のないところから無理をしたものでせう、なほつたかと思ふと又熱が出て、その頃でもまだはつきりせずにぶら〳〵して居ましたので、自分からそんな世帶道具萬端を買ひ調へたり、引越しの世話をやいたりしてくれました。それがたしか明治三十六年の三月三日の事だつたと覺えて居ります。

狩野さん大塚さんなどの肝入りで、望みどほり熊本に歸へらないで、東京に居て一高で教鞭をとることになりましたが、それだけでは生

活にも困らうとあつて、文科大學の講師といふことになつて、小泉八雲先生の丁度後に入ることになりました。どうしてさういふことになつたのか、其間の消息は私にはわかりませんが、當人甚だ不服でして、狩野さんや大塚さんに抗議を持ち込んで居たやうです。夏目の申しますのには、小泉先生は英文學の泰斗でもあり、又文豪として世界に響いたえらい方であるのに、自分のやうな駈け出しの書生上りのものが、その後釜に据はつたところで、到底立派な講義が出來るわけのものでもない、又學生が滿足してくれる道理もない。尤も大學の講師になつて、英文學を講ずるといふことが前からわかつてゐたのなら、その積りで英國で勉強もし準備もして來るであらうのに、自分が研究して來たのはまるで違つたことだなど〻ぐづついてゐたやうですが、結局狩野さんあたりからまあ〳〵となだめられて落ちつきました。

そこで文科大學の學長に會ひに行つたやうです。歸へつて來ての話に、いくらあつたら暮らせるかとのことだつたので、百圓位ならと言つて來たと申しますから、私もこれ迄二年半ばかりの間、ともかく二十五圓でやつて來たのだから、百圓でやつて行けないとは申しませんが、いづれにしても苦しいでせうと申したことでした。其頃月給は兩方合はせて百二十圓位でしたが、ちよい〳〵お借りした金をかへしてゐたので、本當の手に入るものはいくらもないのでした。其うちに大塚さんのところでお子さんが亡くなられ、用立て〻頂いたお金をかへさねばならなくなつて、何でも山川さんかにお願ひして肩代りをしたことがありました。

さて四月の新學期から學校へ出ましたが、大學が六時間、一高が二十時間、講義のノオトを作つたりして、隨分勉強してゐたやうです。けれども學校ははれつから面白くないらしく、自分では外國で計畫してゐた著述でもしたい様子でしたが、これ迄の行きが〻りと外に生活費を得る道もないので、目をつぶつて學校へ出て居たやうです。しかしいやだ〳〵と口ではいつても、根が義務觀念の強い人ですから、滅多に休んだり遲刻したりするやうなことはありませんでした。かて〻加へて外國から持つて來たあたまの病氣が少しもなほらないので、なほ更すべてのことが面白くない様でした。

此間、帝大醫科の眞鍋嘉一郎さんにお伺ひした話ですが、眞鍋さんは夏目が松山中學へ赴任した時の上級生で、何でも東京から新來の英語の先生が來たといふから一ついぢめてやらうといふので、英語の字引を二つも引いておいて、これなら大概參るだらうとあつて、ひそかに不意打ちを企て〻ゐられたさうです。さていよ〳〵其時間になつたので、こ〻だと思つて、先生それは違ゐます、何々の字引と何々の字引にかうありますと天晴れな博識振りを振りまはすと、夏目の方は落ちついたもので、それは二つとも字引が違つてゐる、なほしておけといふわけで、これには眞鍋さんも參つて了つて、いぢめるどころでなかつたといふお話でしたが、一高あたりでも學生さんたちがいぢめてやらうと計畫を立て〻やりかけると、あべこべにとんでもないむ

ぢかしいことを尋ねられたり、ぺら／＼と洋行歸へりの英語で何やら早口にやられたりして、みんな度膽をぬかれたなどゝいふことがあつたさうです。そんなところは心得たものだつたらしいのです。其頃或日學校からかへつて來て、

「今日教室へ入ると、黒板に高いダブル・カラーをつけて、頭をぐつと高くそらしたおれの顏が描いてあつたよ。」

と笑ひながら申しますから、

「貴方どうなさいました。」

と尋ねますと、

「仕方がないからだまつて消しておいたよ。」

と言つて居りました。其頃の夏目は所謂ハイカラで、尖の細い沓をはいて、爪先ですつ／＼と廊下を氣取つて歩るいてゐたものだとかいふことです。かまひつけない半面には、さういふお洒落のところもあつたのです。后で伺ひますと、それが野上臼川一郎さんあたりの級だつたとかいふことです。

二十一　別居

此頃まではまづ／＼どうにかよかつたのですが、六月の梅雨期頃からぐん／＼頭が悪くなつて、七月に入つては益々悪くなる一方です。夜中に何が癪に障はるのか無闇と癇癪をおこして、枕と言はず何といはず、手當り次第のものを放り出します。子供が泣いたといつては怒り出しますし、時には何が何やらさつぱりわけがわからないのに、自分一人怒り出しては當り散らして居ります。どうにも手がつけられません。

丁度其頃私が又姙娠して居りまして悪阻で苦しんで居ります。其上正月頃風邪をこじらせて熱がとれないといつてゐたのが、實はいつの間にやら肋膜をいくらかやられてゐたとかで熱があります。そんなわけで始終臥せり勝ちだつたのですが、どう考へても夏目の癇癪が腑に落ちません。あんなに無茶苦茶に怒る人ぢやなかつたのだが、あんまり勉強でも仕過ぎて、どつか身體なり頭なりに異狀のあるのではあるまいか。以前とはまるでころりと違つて居ますので、不審でもあり心配でもあるので、其頃始終私を診に來て下さつた尼子四郎さんにお話をしまして、とてもまともに診て上げませうなどゝいつたつて、近頃の容模様では素直におとなしく診せる氣遣もなし、いつか折を見て、私を診に來てゐるとどうも夏目の顏色が悪いがとか何とか云ひがかりをつけて、そこのところをうまく持ちかけて診察してやつてくれませんかと御願ひしました。尼子さんも仔細承知で引きうけて下さいました。

四五日たつと、尼子さんが見えての話に、余程話がうまく運んだと見えて診察をされたといふのです。どんなでしたとお伺ひしますと、どうもたゞの神經衰弱ぢやないやうだと首を傾けられます。それではと重ねて御伺ひしますれば、精神病の一種ぢやあるまいか。しかし自

分一人では何ともそこのところは申上げ兼ねるから、呉博士に診て頂いてはといふお話です。さうなれば是非もありませんが又益々心配なので、ではさう願はうといふことにお話をきめて、萬事の謀は尼子さんに御願ひ致しました。

　さう言はれて改めて見るせいか、どうもやることなすことが只事でありません。何が癪に障はるのか女中を追ひ出して了ひます。私にはいよいよつらく當ります。女中は居ず、その上私は病氣でふら〳〵して居るのですが、仕方がないから何かしますれば、それが一々氣に入らない様子ですが、此方もさう〳〵面當てがましく振舞はれるのでは堪まりません。又そのいら〳〵してゐるのを見るのが實に堪まりません。しきりに里へ歸へれといふことを面と向つて申しますので、私も考へました。こんなことが續いて、一層頭をいら〳〵させて了つても悪るいし、萬一子供にどんな危害がふりかゝらないものでもない。或は私が一時子供たちを連れて身を引いてゐたら、其間それだけ目の前から邪魔物がなくなるわけで、かへつて氣が鎭まるかも知れない。一先づ身を引いて様子を見よう。さう考へまして父に相談しまして、ともかく病氣に逆はないやうにして、一時子供を連れてどいて見ることに致しました。さうして七月に一旦里の父母の元へかへりました。其時尼子さんが病氣が悪いやうなら、私が電話を上げるなり何なりいゝやうにしますから、其方は私にまかして心配なくと親切に言つて下さいました。

其中に尼子さんが御約束どほり呉さんに診せて下さいましたといふことだつたので、呉さんのところへ様子を伺ひに參りますと、あゝいふ病氣は一生なほり切るといふことがないものだ。なほつたと思ふのは實は一時沈静してゐるばかりで、後で又きまつて出て來ると申されて、それから病氣の説明をいろ〳〵詳しく聞かして下さいました。私もそれを聞いて、なる程と思ひまして、漸く腹がきまりました。病氣なら病氣ときまつて見れば、其覺悟で安心して行ける。かう思ひまして、どんな工合かしらと時々行つてはのぞいて見ますが、いつ行つて見てもどうも御機嫌甚だうるはしくありません。さらばといつて此儘いつ迄かうして居るわけにも行かず、どうしたものかと思つて居りますと、夏目の兄さんが、これは昔風な考から、私がむきに此儘離籍でもすると思はれたものか、夏目の爲めを思ひ、私の爲めを思つて、どうか別れるの何のといはず、其儘默まつて怒らずにかへつてやつてくれ、とかういふお話なのです。で私も、別に怒つてゐるわけではなし、夫婦別れをしやうと云ふのぢやなし、虐待されたからといつて、それは誰からでもない自分の夫だから、そんなことで人様に御迷惑はかけないつもりですが、たゞあゝいふ頭で、子供がやかましいといつてはいぢめられたり打たれたりしたのでは、第一子供の爲めにもよくないし、又自分の頭も悪くする一方に違ゐないから、それで一時避さかつてかうして別居して見たのだけれども、さつぱり験がないとすれば元どほり歸へるより外にない。どうか兄さんから話の日を切つて貰ひ

たい。あやまつて歸へることにするからといふので、兄さんが夏目に、と夏目が、

「つまり兩方で神經過敏なんだ。歸へりたいといふんなら、そんならかへつて來るがいゝ。が、大塚中根の家では子供を甘やかせて我儘に育て過ぎる。だから鏡子なんぞもあのとほり我儘で、自分のやりたい放題をやる。」

とか申しますので、兄さんも、

「外の姉妹はどうか知らんが、鏡子さんはあんたの奧さんぢやないか。細君のことなら強情であらうと我儘であらうと、自分のいゝやうに教育したらいゝぢやないか。」

とか何とか言つたやうな按配だつたさうです。そこで母を煩はしまして、母から夏目にどうかといつた工合にあやまつて貰らつて、そこで漸く千駄木にかへることになりました。母には別につけつけ文句も言けなかつたさうです。私はこの時今度はどんなことがあつても決して動くまいといふ決心して參りました。これは九月のことで、まづこの事件はこゝで一段落がつきました。

二十二　小刀細工

二ケ月ばかりはそれから大分いゝので、私もよい按配だと喜んで居りました。これなら歸へつて來た甲斐もあつた。そんな風に思つて居りますうちに十月の末に三女の榮子が生まれました。するうちに十一月に入ると、さきにいくらか愁眉をひらいたのもあだとなつて、又ぞろ前にも增して雲行きが險しくなつて參りました。

私はお産でまだ床について居ります。覺悟はきめてゐるとは云ひ條、はらはらするやうなことがよくあるやうになつて參ります。さうして何故か私を目の讐にして、困らしてやらう、苦しめてやらう、彼は怪しからない奴だといふやうな素振りが見えたり聞こえたりして參ります。するうちに私がねてゐる産室の隣座敷の陰に參りまして、

「貴樣はお産でねてゐるのだから、相當日がたつたらかへれ。」

かういふのです。私は始まつたなと思つてだまつてゐるのですが、看護婦や女中の手前困つて了ひました。それでもまだ子供たちが小さかつたから此の頃は何をされやうとまだよかつたのですが、これから數年たつてこの病氣が起こつた頃には、娘も大きくなつてゐたので、本當に困つたことが再々ありました。どういふわけか勿論自分の頭の中でいろいろなことを創作して、私などが言はない言葉が耳に聞こえて、それが古いこと新らしいことをいろんに聯絡して、幻となつて目の前に現はれるものらしく、それにどう備へていゝのか此方には見當がつきません。さうなり出すと何もかもみんな惡意に取り出すので、私のやることなすことが、話せば話したで、默つて居れば默つて居るで、何もかも夏目をいぢめ苦しめる爲めにやつてると、かう感じるらしいのです。ですから餘程癪に障はると見えまして、いきなり厭

風の蔭へ來て、
「お前はこゝの家に居るのはいやなのだが、おれをいら／＼させる爲めに頑張つてゐるんだらう。」
などゝ惡態をついたりなどするのです。さうして私がねて居ても女中や何かを手なづけて、さうしてあれやこれやと差圖をしたり策略をめぐらしたり、夏目を苦しめよう苦しめようとするとでも思つてるのでせう。或る日學校からかへつて來ると、女中を呼んで、
「これを奧さんのとこへ持つて行つて、これで澤山小刀細工をなさいつてさう言ひなさい。」
と申しまして、錆ついた小刀を渡しました。女中は何のことかわからないながら只ならぬ氣色におびえたものと見えまして、
「奧樣、氣味が惡うございますね。」
とおど／＼してゐます。私はだまつて小刀を取つて、枕の下にかくして了ゐました。つまり私が何かにつけて小刀細工をして夏目を苦しめる。これでするならしろといふ皮肉なあてつけなのです。後で考へたのですが、一番最初にお話した井上眼科で見初めた女の方の母親が、相も變らずまはし者をしてゐるのではないかなどゝいふつかないとこまで、病氣が始まると一緒に聯絡を取つて、いろんな風にそれからそれへと考が發展して行くらしいのです。さうして近くに居る者程やられるのですからいゝ迷惑です。
次女の恒子が漸く三つで、丁度赤ん坊が出來て私に離れた時なので、ひい／＼よく泣くのです。勿論やかましくもあるのですが、それがひどく神經に障はると見えて、夜中にでも何でもひどい目に會はします。一つには私への面當てかと思ひましたが、ともかく時々狂的にいぢめるのです。

　しかし私は前にも申しますとほり、覺悟はきめて居りますし、それに産褥半ばに動いたり氣をもんだりしては惡いと思ふものですから、つとめて靜かにしてゐて、ともかく二十一日間といふもの、いかに傷づかれても動かずに居りました。そこでどんなことがあつたものか、自分の部屋以外に起こつてゐたことを知らずに居りますと、丁度其頃、實家の父から夏目に當てゝ手紙が來てゐるのが目に入りました。見ますると、かへすかへすと仰言つても、今當人は外ならぬお産の爲めねてゐるのだからといふ、夏目から私を引き取れとでもいつてやつた手紙に對する返事と見えます。そこで私も大變氣になりましたので、使をやつて母に來て貰ひました。實は學校へ行つてるのですからそこは調法でした。
「話はどうなつてゐるの。」
　私が改まつて話を尋ねますと、母が實はと前置きをして一伍始什の顚末を物語つてくれましたところはかうなんです。私が産褥に居る間に、例の定夏目が父に宛てて、再三私を戻すから引き取つてくれと申してやりましたが、そんなことをいつたつて、當人今お産でねてゐるんだから、いづれ床上げでもすんだら、私の意志も聞いた上で御相談

しませう。かういふ返事を其都度出しておいたものだと申すことでした。それから今假令こんな話をされて見ても、私に聞かしてはよくないといふので、今日迄だまつてゐたといふこと、しかし父は夏目の家に私が居ることを、いゝとも悪いとも言つては居ないこと、結局當人なる私の意志でどうとも決するがいゝといふと、ともかくなほつてからゆつくり話をしやうと言つてるなどを話してくれました。それでも親類や何かはそんな精神病の男のところへびく／＼しながら娘や孫をおくとはない、いまに何をされるかわかつたものでない。一時も早く引き取つたがいゝといふ風に騒ぎ立つてるといふ母の話なのです。

そこで私は母へ申しました。

「そんなならどうかお歸へりになつて、皆さんに仰言つて下さい。夏目が精神病ときまればなほ更のこと私はどきません。私が不貞をしたとか何とかいふのではなく、譯はたゞ私の落度はないのです。なる程私一人が實家へ歸へつたら、私一人はそれで安全かも知れません。しかし子供や主人はどうなるのです。病氣ときまれば、傍に居つて及ばずながら看護するのが妻の役目ではありませんか。たゞ私だから嫌はれてゐる。私さへどいたなら夏目の頭がなほるといふのなら、又考へなければなりませんけれど、あの病氣では私がどいた、後へ誰か後妻に入つて來たといつても、あんな風にやられて隨分辛棒してゐるものですか。きつと一ト月の辛棒も出來ず逃げかへるに違ひありません。どうせかうなつたからには私はもうどうなつてもようございます。私がこゝに居れば、嫌はれやうと打たれやうと、ともかくいざといふ時にみんなの爲めになることが出來るのです。私一人が安全になるばかりに、みんなはどんなに困るか知れやしない。それを思つたら私は一歩もこゝを動きません。どうか私は此家に居ることに決しましたから、此上は何も仰言らずにだまつて見て居て下さい。一生病氣が直らなければ私は不幸な人間ですし、なほつてくれゝば又幸福になれるかも知れません。危險だといふことも萬々承知してゐるから、子供たちもだんかも充分注意して出ます。どうか一切このとについては實家の方から差圖がましいことをして下さらないやうに………」

涙を流して母にくれ／＼も決心の程を打ち明けて頼みましたので、母もそれ程にいふならと快く肯つてくれました。今其當時のことを想ひ出して見ましても、どうしてあんなところに居たものかと、むしろぞつとする位ですが、本當に其時は一生懸命で死物狂ひだつたのです。相手と言へば頑是ない小供たちばかり、やさしい言葉一つかけてくれる人も居ず、たまさかさうした言葉を聞くかと思へば、今の私の實家側の親類のやうに、たゞ私一人の身の上ばかりを懸念して、少しも夏目の身の上を勘定に入れてない、親切さうに見えて、其實不親切な言葉ばかりで、本當に情ない思ひを致しました。母も大變同情して、

「あんまり心配おしでないよ。」

と慰めてくれますから、私も

「此家に居ると覺悟したからには、めそ／＼泣いたり、くよ／＼考へ

たりして、結局喧嘩を壊はしたりしては何にもならないんだから。」と元氣に母を送り出したものです。

　夏目の兄さんも大層私を氣の毒がつて、飯も食はせないなんかといふわけではないし、ともかく貴女が居てくれなくてはどうにもならないんだからと慰めたりはげましたりして下さいました。其頃だつたと覺えて居りますが、一つには家にばつかり居て勉強してゐるのがいけないと思ひまして、寺田寅彦さんや高濱虚子さんにお願ひして、出來るだけ遊びにいらして連れ出して下さるやうにとお賴みしたことがありました。かういふ方々には大變いゝらしいのですが、熊本時代に家に居られた土屋さんなんぞだと、もう私の味方だとかいつて、家へ來ただけで御機嫌が惡いのだから、一緒に散歩に連れ出して貰ふところの話ぢやありません。

二十三　離緣の手紙

　其頃は朝學校へ出るにしても、洋服を着せやうとすれば、彼方へ行つて居ろと頭からどなりつけるので、前の晩のうちにカラーからネクタイ迄揃えておいて、それを朝になるとそつと部屋へ置いておくと、ひとりで默まつて着て出かけます。出掛けますと箒をもつて書齋に入つて行つて掃除を始めるといつた工合でした。

　それからお金なんぞ一文も吳れず、お小使も元よりくれません。日用品は通で取つて月末にこれだけかゝつたと勘定を見せれば、まさかそれを拂ふのはいやだとは申さないのだからいゝのですが、手元に小錢をおいてくれないのには弱りました。みんな私を困らせる爲めだつたのでせう。此方でもいるのはいるのですから、それなりに泣き寝入りも出來ず、後には意地になつて、今度は何々でいくら下さいと日に何度でも言ひにまゐります。さう一々やられたのでは、自分でも五月蠅くて困るのでせうが、貰ひに行くといきなり一圓札を足元へ放りつけたりしたものです。それから私を呼びますから行つて見ますと、部屋の障子を明けるが早いか、煙草がないといつていきなり蟇口を放りつける。さうかと思ふと時計がとまつてるといつては懷中時計を放りつける。お金をくれないのですから、煙草の切れる位は當り前なのですが、ともかく何から何までが此の調子なのだからやり切れたものではありません。

　それでもどんなことをされても私が動かないので、又父のところへ引き取つてくれろ、連れ戾しに來てくれろと言つてやつたものです。それで父も再三のことではあるし放つて置くつもりだつたのですが、それではかへつて昂じさせてもと思ひなほして、そんなこと言はずに置いてやつてくれろと賴みに來ました。すると彼奴（私）は小刀細工ばかりやつて怪しからぬ奴だ、さう〳〵賴むんならともかく當分試驗の爲めおいといてやるとかいつた工合で、父もそんなものの相手になつても居れず、試驗的でも何でもいゝから置いてやつてくれとそこ〳〵にしてかへると、後で私に申しますには、

「お前の親父は不人情だ。おれのいふことを上の空で聞いてろが、大方おれを氣狂ひだとでも思つて相手にしないんだらう。怪しからん。」

と大層な見幕です。それからともかく親父も頼むから試驗的におくことにはしたが、おれはどうもお前が氣に喰はないから、其うちにはかへつて貰らはう。おとなしく歸へらなければ、追ひ出して仕舞うといつたやうな口振りです。私もさう言はれて見ればへえ〳〵と敗けてゐるわけには行かず、

「私は惡いことをしないのだから、追ひ出される理由はありません。それに子供をのこして何でおめ〳〵と出て行くものですか。私だつて此のとほり足もあることだから、追ひ出したつて又歸つて來る迄のことです。」

と抗辯して、書齋を出て了ゐます。すると暫らくして父宛の手紙を書いて持つて來て、これを里へもつて行けと申します。てつきり離緣狀に違ゐないので、

「手紙なら三錢の切手を張つて出さしたらいゝぢやありませんか。」

といつたわけなのです。私がどうしてもその手に乘らないので、今度は歳暮に行け、やれ年始に一寸顏を出して來いと、すかすとも命令ともつかず、誘ひをかけます。ともかく私を邪魔にして何とか里へ追ひやらうとするのです。私は私で

「お歳暮になんぞ行くことはありません。」

「實家へ年始になんぞ行かなくたつてもようござんす。」

といふわけで決して動きませんでした。

此頃は何かに追跡でもされてる氣持なのかそれとも脅かされるのか、妙にあたまが昂奮狀態になつてゐて、夜中によくねむれないらしいのです。夜中に不意に起きて、雨戸をあけて寒い寒い庭に飛び出します。何をするか知れたものぢやありませんから、ついて出たいのですが、そんなことをしやうものなら、あべこべに何をされるかわからないし、第一大きな聲で怒鳴られでもしたら、四邊近所に面目もないし、息を殺ろして寢た振りをして聽耳を立てゝ居ますと、やがて何事もなく戾つて參ゐります。かと思ふと眞夜中に書齋でドタン・バタン、ガラガラとえらい騷ぎが持ち上がることがあります。これも仕方がないので出たいのをじつと堪らえて居りますと、やがてそれも一時で騷ぎもひつそり鎭まつて了ゐます。まあよかつたと翌朝學校へ出るが早いか書齋に入つて見ますと、ランプの火屋は粉微塵にわれてゐる、火鉢の灰は疊一面に降つてゐる、鐵瓶の蓋は取つて投げたものと見えてとんでもないところにころついてゐる、二目と見られた部屋の模樣ぢやありません。留守の間に大掃除をしておくと、歸つて來て又けろりとしてそこに入つて居ります。

千駄木の家には鼠が中々居りました。いつぞや夜中に鼠がすさまじい音を立てゝあばれた揚句臺所の方かで何か取り落したやうな物音がしたことがありました。すると早速目をさましまして、

「今ガタくしたのは貴樣だらう。」

と、怒鳴り散らすんです。私もその物音で目をさましたのですが、目をさまして知つてるとあつては又五月蠅いと思ひましたので、寢呆け顏をして

「鼠でせう。」

と何氣なく答へました。するとそれが又癪に障はつたのか、鼠であつては戸棚の持つて行き場がない爲めか、

「ぢや鼠をつかまへて來い。」

とからなんでせう。これを大眞面目で怒鳴るんですからやり切れません。

或る晩なんぞは、何でも眞夜中の二時頃になつて急に手を叩きます。行つて見るとすぐ御飯を持つて來いといふ難題です。其刻限に女中を起こすわけにも行かず、寒い中をそれでもよくしたもので、何かかんか有合せのものを見つくろつて其場の間に合はせます。お膳を置いて來て翌朝行つて見れば、別に箸をつけた樣子もないのです。そんな人困らせをやられたことも隨分ありました。

かうなつて來ると、別に刃物いぢりをするといふのではありませんが、非常に殘忍性を帶びて參ります。一度などは私が買ひ物に出た留守中に、女中を二人とも追ひ出して、かへつて見ると家の中は眞暗がりで、子供がその暗い中で泣いてるといふ始末。誰もランプのつけてがないのです。

そこで子供が三人もあつて　その一人は全くの赤ちやんと來てゐるのですから、何から何までは私一人では手がまはりかねます。第一憎らしいから、朝御飯の代りにはパンを買つて來て御膳の上に出しておくと、それを小供たちが砂糖でもつけてたべてゐます。自分もだまつて其御仲間に入つてぼそくパンを食べて學校へ行くなどゝいふ滑稽もありました。それでもよくしたもので、追ひ出された女中が、家の内情をよく知つてゐるので、私や子供が氣の毒だとあつて、學校へ出た時刻を見計らつてこそく裏口から手傳に來てくれて、洗濯をしてくれるやら、片付けものをしてくれるやら、何かと面倒を見てくれて、又夕方になつて夏目が歸へつて來る頃になると逃げて歸へるなどといふ親切者もありました。そんなわけでこの後でもパンをたべたり長いこと常飯をたべたりしたことがあつたものです。

こんな風に蔭に謂はゞ挑戰してくるのですが、私がだまつてゐるので、其の口返答をしないのが氣に食はないと見え、

「貴樣、だまつてさへ居ればいゝかと思つてゐる。」

と再々どやされましたが、外に仕樣もありません。

或時夕飯をたべてゐますと、子供が唄をうたひました。するとうるさいつといふが早いか、御膳をひつくりかへして書齋に入つて了ゐました。餘りのことなので子供たちもびつくりしてべそをかいて了ゐます。私も困つて了ゐましたが、程經てどうしてゐるかしらと書齋をのぞいて見ると、机に頰杖をついてすましてゐました。自分でも食べか

けたのですが、あたまのこんな時にはお腹もすかないと見えます。

隣に俥屋があつて、そこのおかみさんが始終がみ〱言つてるのが大變氣になつたと見えて、「猫」か何かにも書いて居りますが、それよりも可笑しいのは、向ひの下宿屋に居るある書生さんに對する仕打ちです。全集にのつてゐる日記の一節にも、その書生さんが夏目の噂をしてゐる夢のやうな話が書いてありますが、丁度その書生さんの二階の部屋から書齋が見下される工合になつてゐて、毎晩部屋の窓に明かついて、そこで書生さんが相當高い聲で音讀するのです。それが習慣と見えて、窓ぎはの机に向つて勉強してゐる時には、きまつて聲を立てて本を讀んでゐるのです。そこへ時たまお友達か遊びに來る。さうするとやはり大きな聲で話をしてゐるのです。それが一々夏目の異常な耳には、穩かならぬ自分の噂や陰口に響くらしいのです。さうして高いところから始終此方の方を覗いて監視してゐる。それが氣になつて仕方のないところへ、學校の始まる時間はどこでも大概同じですから、夏目が出かける頃になると、其學生も出かける仕度をして、夏目の後からついて行く。あれは學生だがしかし自分をつけてゐる探偵に違ゐない。かう一人できめてゐるのです。學生さんこそいゝ面の皮です。

そこで朝起きて顔を洗つて、いざこれから御飯といふ時になると、まづその前に書齋の窓の敷居の上に乘つて、下宿の書生さんの部屋の方を向いて、大きな聲で聞こえよがしに呶鳴るのです。

「おい、探偵君。今日は何時に學校へ行くよ。」

とか、

「探偵君、今日の出かけは何時だよ。」

とか、自分では揶揄つてる積りか、先方でそんなにこそ〱ついて來なくなつて、此方で堂々と教へてやるよといつた工合に、一ぱし上は手に出た積りらしいのです。それを毎日毎朝やるのだから、書生さんも變な氣狂親爺だ位には思つてゐたとでせう。それを大眞面目になつて斷はつてから、それから食膳につくのだから妙なことをやつたものです。

或日私が午後に錢湯へ行つてると、女中が奥樣大變ですといつて驅け込んで參ります。何が起こつたのかと吃驚りして聞いて見ますと、前の通りでどこかの中學生がボオル投げをしてゐたのが、過まつてボオルを家の庭中へ投げ込んだ。すると此奴怪しからんとあつて、逃げる中學生を捉まへて、その家に呶鳴り込んで行くといつて根津權現の方へ引き立てゝ行つたといふのです。氣の立つてる場合どんなひどいことをしないものでもない萬一他樣の息子さんに怪我でもあつてはと心配はするものゝ、さうかと言つて追つかけて行けば、此方で道の眞中で夫婦喧嘩でも始めなければならず、そこの場合賢者も變なのですが、ともかく尼子さんに相談に行くと、さあ、大したこともおやりにはなるまいが、少しのとでもあつたら、私が行つてよく事情を打ちあけて謝罪をして來るといふので案じながら待つてゐると、案外ケロリとして戻つてまゐりました。後で先方の家から抗議でも來やしないか

しらと心配してゐましたが、それなりで何事もありませんでした。何でも根津權現附近の相當の御宅の坊ちやんだつたとかいふことでした。よく裏の郁文館中學の生徒がボオルを投げ込んだりしたのが根にあるので、とんだ災難に會はれたことなのでせう。

　こんなことを數え立てたらまだあるでありませう。此頃かういふあたまでつけてゐた日記があつたのですが、今見當りません。一體よく日記を書いては後で破いて捨てる人でしたから、これも大方捨てたものでせう。其頃書齋に入つて見ると、机の上に墨黑々と半紙にかういふ意味の文句が書いてのせてありました。

　――予の周圍のもの悉く皆狂人なり。それが爲め予も亦狂人の眞似をせざるべからず。故に周圍の狂人の全快をまつて、予も佯狂をやめるもおそからず――

　氣味の惡いたらありませんでした。

何でも此頃でしたでせう。又私を里へかへさうといふので、父に引き取れと手紙をやつたものです。そんなことは前申したとほりこれ迄幾度もあつたことなので、其度毎に父は相手にならずい丶加減な挨拶をしてゐたのですが、それでは切りがありませんので、私も腰掛けの女房ぢやなし、さう／＼そんなことを言はれたんでは立つ瀬がないので、いつ迄ずる／＼べつたりでゐるのはいやですから、最後に一度きつぱり斷はつて下さいと父に頼みましたので、父もとう／＼終ひに、鏡子は理由がないから絶對に離縁はうけないといふし、私も亦同意だ。第一夫婦の離婚問題は双方合意の上でなければ法律が許さない。しかし若しどうあつても鏡子がいやだから離縁なさらうといふのなら、正式裁判にかけて黑白を決して貰ひませう。だからどうしても我を通すといふのなら、裁判所に願ひを出して下さいとかう出たのです。さう書いたこともチヤンと私は知つてるのですし、又その手紙を夏目が讀んだことも知つてるのですが、一向そんなものは受取りもしなかつたやうな顏をして、こん度はお前の親父は怪しからんとも言はずすまして居りました。

二十四　余戯――小康

　それでもい丶案配に翌る三十七年の四五月頃から大分よくなつて參ゐりまして、段々こんな無茶なことをしないやうになりました。その代り前から貧乏だつたのが、この年には一層つまつて了つて、どうにもかうにも參りません。そこでたしか秋から帝大一高の外に明大へ一週二時間づ丶出るやうになつて、その二三十圓の金でも余程當時の私たちの生活にはたしになりました。けれどもそれで元より樂になつたとは申されません。よく大學なんかよして了ひたいと申して居りましたが、それでも學校にはキチン／＼と出たやうです。

　三十六年の暮頃からしきりに何かを書いてゐたやうですが、私が一番不思議に思ふのは繪のことです。

　十一月頃一番頭の惡かつた最中、自分で繪具を買つてまゐりまし

て、しきりに水彩畫を描きました。私たちが觀ても、其頃の繪は頗る下手で、何を描いたんだかさつぱりわからないものなどが多かつたのですがそれでも數は中々どつさり出來ましたやうです。勿論大きいものもないやうでして、多くは小品ですが、わけても多いのは端書に描いた繪です、橋口貢さんと始終自筆の繪端書の交換をしたものらしく、いつぞや橋口さんのところからそのアルバムを拜借して、澤山あるのに驚きました。

繪は死ぬ迄好きで描きましたが、尤も中程氣が進まなかつたり忙しかつたりで描いたり描かなかつたり致しましたが、不思議なことに其後も頭が惡くなると繪を描いたのは面白いことだと思ひます。自分では何をしても面白くなし、一つにはくさくさした氣持を繪でも描いて紛らさうといふのでせうが、現に宅に殘つてゐる南畫の密畫などは、さういふ時に幾日も幾日もかゝつて描いたもので、こり出すと明けても暮れてもこれでいゝといふ迄、紙のけばだつ迄、いぢつてゐるのだから根氣のいゝものです。死ぬ年なども隨分中央公論の瀧田樗陰さんなどが來られて描かされてゐましたが、此時も大分あたまのわるい時でした。南畫の密畫は大正二年前後のもので、後で自分で表裝をして箱書きまでしたのですが、其頃もいけなかつたのです。

尤も繪を描いて居ればきつとあたまの惡い機嫌の惡い時だつたときまつてゐるのではありません。隨分上機嫌で面白さうに樂しんで描いてゐたこともあつたのですが、力作の密畫に限つてあたまの惡い時に出來たのは妙なことです。

一體此の時以後氣のついたことですが、あたまの惡くなる前には、まるで酒に醉拂つたやうに顏が眞赤に上氣するのです。初めはそんなことに氣がつきませんでしたが、後ではそれがわかり、子供たち迄上の方の娘などはそれを知つて、いくら前の晩ににこ〳〵してゐても、顏がゆだつたやうに火照つてゐる時には、それ明日は又と警戒してゐます。ときまつて翌朝になると、がらりと空行が變はるのだから不思議です。

これで晩年に一度私が困つたことがありました。鈴木の妹のところでお父さんが亡くなられまして其葬式があるといふ日のことです。一體夏目は、この離緣話をやたらに持ち出した當時、最後に父が仕方なしに法律云々をかつぎ出したのに對して、お前の親父は不人情だ、法律さへ擔ぎ出せばいゝかと思つてるが、氣に入らない女房をもつてゐたら、おれの一生の損だといふことはちつとも考へちや居ない。本當に怪しからん、おれはそんな奴は大嫌ひだから、今後絶對にお前の親や親戚とは交際しないことにすると申しますから、えゝ構ひませんよと私が答へます、夏目もしかしお前は實の親なり親戚なんだから、おれに構はずに勝手に行き來をするがいゝといふので、それからといふもの婚禮葬式其他一切の親類間の交際は私一人が引きうけて、夏目は一切出ないことにしてゐたのです。それが親類の間にも通りものになつて、夏目だけは特別待遇にされてゐたのです。

ところが鈴木のお父さんが亡くなられた時には、どうした風の吹きまはしか、前の晩にはお悔みにも行くし、葬式の當日にはおれも行かうといふことになつて、機嫌よくフロック・コオトにシルク・ハットで、

私とならんで俥で出かけました。が其日は朝から變に雨がちらく、寒いのでしたけれども、私も大して氣にせずにそのまゝ鈴木の家へ參りますと、先方ではてつきり夏目は來ないものときめて居りますので、鈴木が私に申しますには、お姉様の馬車の席は取つてあるが、夏目さんのゝは取つてない。すまないが、出かけるといふ間際になつて折角編成したのをかへるのも困るから、夏目さんからは俥で行つて貰へまいかと頼みますので、私がその事を傳へますと、よろしいと承知してくれました。そこで呑氣な私は人の馬車にのつて、わかれくに葬儀場の淺草本願寺へ行つたのです。

さていよく讀經も始まり燒香も始まらうといふのに夏目の姿が見えません。側の人に聞いて見ると、一般會葬者席で見たやうだなどゝ申しますが、とうく終ひ迄姿を見せません。歸へりにも行き違つたと見えてわからないので其儘鈴木家へ引き上げてゐますと、そこへ家からすぐかへれといふ電話がかゝつて參りました。歸へつて見ると大變な怒り方です。

「何故おれをおいてきぼりにする。」

と、まあかうなんです。そこで私も、

「だつて一人で行つて下さいつてお頼みしたら、よろしいと承知なすつたぢやありませんか。」

と申しますと、

「あの場合さう返事する外ないぢやないか。」

といふわけです。どゞ、それが後迄たゝつて、程經て埋骨式のある日、すつかり紋服に改めて行つて參りますと申しますと、

「どこへ行く？」

と尋ねます。

「鈴木のお父さんの埋骨式に參ります。」

「お前はおれより鈴木の親父を大事にしてゐる。そんなところには行かなくつてもいゝ。」

さうなつて來れば又何んだかんだと面倒くさくなるにきまつてゐるから、とうくそれなりで失禮したことがあります。それから幾日か過ぎて、私が一寸外へ出ますと、近所で鈴木に逢ひました。

「夏目さんが家の葬式以來怒つてられるといふから、そのわけを聞いて、あやまつて來やうと思つて……」

と鈴木が申しますから、

「およしなさいよ、くだらない。あの時は私が氣がきかなかつたばかりにあんなことになつたので、又例のゝが出たのです。だから氣にすることはありませんよ。」

と答へますと、鈴木もそれならと始めて眉をひらいて、

「病氣だから仕方がないやね。一緒の馬車で行けば行つたで、それぢやよさうといふかも知れないし、お寺へついてもあの坊主のお經のよみ方が氣の喰はないなんて怒り出すかも知れないんだから。」

と其儘笑つて後戻りをしたことがあります。そんなわけで誰か近く火照つてると、いつ何かの拍子で爆發するか頗る危險なのです。

この三十七年の夏頃、此頃は一時にくらべれば餘程よくなつたのですが、それでも時々怒つて、一度こんなことがありました。夕方頃に子供がしきりに泣きましたら、それが癪に障はつたと見えて、子供たちがよつてたかつて泣かせるのだらう、おれのところに連れて來ておけといつたわけで、自分の部屋に連れて參りました。ところが此の子は癇性でかへつて火のつくやうに泣くのです。私はどうするだらうかと半ば可笑しくも亦危かしくも思ひながら、赤ん坊をおんぶしてお醫者のところへ藥取りに參りまして、かへつて來て見ますと、玄關側の書齋には灯がついて、夏のことだから窓を明け放して、簾をかけてあります。中では何だか子供がまだ元氣に泣いて居ります。どうしてゐるかしらと簾をすかして見ると、泣いてる子の側に坐はつてしきりと團扇をもつて一生懸命あほいで居るではありませんか。それなり私も家へ入つてなほも放つておきますと、やがて女中を呼んで、

「連れて行け。」

と泣いて泣いて泣きやまないお荷物にとうとう匙を投げて了ゐました。

あたまの工合がよくなりかけると、段々怒る度合が少くなつて、ただまつて人の樣子を窺つてるのです。私たちにはすぐそれがわかるのですが、自分ではあたまがなほりかけて來たとは思はずに、反對に彼奴近頃はおとなし相な顔をして飯を食はせてゐるなと、それで氣をゆるさずに警戒しながら眺めてゐる樣子です。しかしよくなつたとは申せ、ほんの一時小康を得たといふ程度で、三十七八九と續いて、一進一退の狀態でしたが、本當によくなつたと思つたのは四十年に今の早稻田の家に越してからで、それから大正二年迄は、まづまづ出ないと言つてよかつたでありませう。其間にあたまの代りに胃を惡くして了ゐまして、それがとうとう死病になつて了ゐました。

七月頃、私の父が高利貸にせめられて困るから、どうか借用證書に判をついて呉れないか、迷惑はかけない積りだからとたつて頼みましたが、判をつくのだけはいやだと申しましてきつぱり斷はりました。しかし金に何とかして上げなければならない、殊に最初の頼みではあり、こんな度ばかりはといふので、手元にはないのでやむを得ず常さんから二百五十圓程用立てゝ頂いて、そつくりそれを父の手に渡して、一時を凌いで貰ひました。こんな時には隨分親切に骨を折る方でした。がそれもすぐに此方の肩にかゝつて來ることなので、此月から、前に外からお借りした分と一緒に月賦でおかへしして居りました。此頃が一番金に困つてゐた時なので、一寸したことにも弱りましたが、しかし苦しい中にも丸善から本を買ふのだけは、よして下さいとは言へず、足りないとは、どうやらだまつて質屋通ひなどして凌ぎをつけて居りました。尤も夏目の方でも不斷は家の暮らし向きなどに口を出すではなし、自分も本を買ふ外お小使を使ふではなし、お客が見えたつてそんなわけですからおもてなしも出來ないのですが、それを又氣にかけて見得を張らうといふのではなし、そんな點については、頭さへ靜まつてくれゝば、貧乏な中にも割合暢氣なのでした。（つゞく）

ロシア共産黨近況と將來

北浦千太郎

トロツキー、ジノヴエフ等有數の『ボリシエヴイキ』が第二黨を組織し、昨年十一月七日の革命第十週年記念祭に於て街頭で反プロレタリア獨裁的示威運動を敢行せんとして果さなかつたことは既に諸種の出版物によつて明かにされたところである。

彼等の勢力は、聯邦共産黨内に於ては、一九二七年十一月十六日現在で〇・七パーセントの二、四二三人(黨員三六、四〇〇〇の中)であつたが、ジノヴエフ、トロツキー等が大會で除名されて仕舞へば、之等の勢力も勿論減少するものと見做し得る。

だが、一體トロツキー、ジノヴエフ等の主張するところは何であるか?

トロツキーは、その『アンチ・テーゼ』の中で、彼等の主張を展開してゐるが、それに據ると、支那革命の失敗はロシア共産黨中央委員會の日和見主義的政策に縁ることが大であり、ソヴエツト聯邦の國家機關は、ネツプマンと融合し、その行ふところ悉く資本主義的要素の發展を援助し、社會主義的要素は段々『惡化』して行き、今やソヴエツト聯邦には『二重權力』が存在するに至つたとさへ斷言してゐるのである。

ソヴエツト權力は今や勞働階級のものではなく、ネツプマンのものであるから、斯かる權力を倒すべしと獨逸でヒステリカルに叫んでゐるルーテ・フイツシヤ一派と、このトロツキーの主張とは一脈相通ずるものがある。宜なるかな、彼等は國際的に反ソヴエツト聯邦的運動を敢行してゐるのである。

ソヴエツト權力と支那革命の擁護を叫んでゐる聯邦共産黨が斯かる分子を黨内に止めて置くに忍びず、大會に於て斷然たる除名處分をなしたのは當然である。

然し問題は、除名された有名なる『革命家』達が、如何なる態度に出でるかにある。國際ブルジヨアジーは、彼等がソヴエツト權力倒潰の原動力になることを望んで止まない。だがこの希求は實現されないであらう。何故か?

何故なら、彼等もまた『ボリシエヴイキ=レーニン主義者』と呼んでをり、且つ假へ彼等がこの言葉の上の『ボリシエヴイキ=レーニン主義者』を實踐に於ては反ソヴエツト權力的、メンシエヴイキ的行動に移したとしても、ボリシエヴイキ的、レーニン的精神で訓練された百萬人の聯邦共産黨員、二百萬人の聯邦共産青年同盟員、百七十萬人の少年團員、九百五十萬人の勞働組合員、赤衞軍、二千四百萬人の協働組合員を有するソヴエツト聯邦に於ては、忽ちにして彼等は大衆の反撃に遭ひ、且つまたその反ソヴエツト權力的運動は須臾にして崩解するであらう。

だが、トロツキー、ジノヴエフ等が斯かるメンシエヴイキ的泥濘を七轉八倒するに至つたのも、もとはと云へば、彼等の極左主義、日和見主義であり、この極左主義、日和見主義の一定の累積が、量より質への辨證法的轉換を來たし、彼等をしてソヴエツト權力擁護者より反ソヴエツト的運動者に轉化せしめるに至つたのである。

註本稿は除名者達流刑以前に脱稿したものだ。

裏日本特に北國の切支丹宗門

姉崎正治

天主教會の記錄では北陸道を北國 Foccoou と稱してゐるが、特に加越能四州を指したもので、その布教の本據は京都にあり、安土からも枝を延はしたが、後には金澤が中心になつてゐる。越前は、加賀と京都との往復路に當つて、勿論同系統に屬する。若狹一國は地理上、山陰と連る外に、京極氏の關係で、主として丹後と連り、又山陰から近江に亘る布教の路に當つてゐた。

越後と佐渡とは、一面加賀の方からの系統にも屬するが、又他面は出羽と聯絡し、海路佐渡と松前又は津輕と連つた布教もあつた。元和以後には、江戸を本據とする布教が、上野信州を通過して越後に出、それから加賀、能登にも及むでゐる。

さて、北國布教の端緒を尋ねると、天正九年（1581）初夏、高山圖書頭、即ち右近殿の父が、越前北の庄（福井）で柴田勝家の家にあづけられてゐるのを、教師フロイスが訪問したのが最初の記錄になつてゐる。フロイスが、訪問以外にどれだけ布教したかは、不明であるが、奇妙な運命の廻り合せが、此の場合に着眼される。即ち高山が北の庄に居たのは、信長の不興を蒙つての配流であつた。而して信長はその九年前に近江で淺井長政を滅ぼしたが、長政の室は彼自らの妹であつた。此寡婦は、三人の娘を連れて柴田勝家に身を託してゐた。而してその長女、即ち後に淀君として豐臣家の運命を擔ひつゝ切支丹嫌であつた阿茶々は、この天正九年には十五才、次女は、後に京極高次の夫人で、義母又父方の伯母たる高吉の妻マリヤ夫人の感化で、夫と共に切支丹になり、若狹に於ける信者の一人になつた人、此の時恐らく十三才。而して末女は、後に再嫁して德川の二代將軍秀忠、即ち切支丹迫害者の室崇源院となつた人、年齡は十一才。此の三人が此時、北の庄で南蠻教師を見たや否や、勿論確め得ないが、多少の見聞があつたものとすれば、その後三人の身の行末と共に、切支丹に對する態度關係の差異には、測られぬ運命の緒がつながれてゐたとも考へられる。

然るに、此の訪問の翌年（1582）梅雨の頃に信長は弑せられ、安土の城は灰燼となり、教師等はその大切な本據を失つた。そこで北陸の

布教も中絶したらしいが、此も亦好都合な運命で、同じ高山一家が又も秀吉の不興を被り、加賀の前田家に預けらるゝに及んで、布教が興つた。パゼスは一六二三年の條に左の如く記してゐる。（五八三頁）

美濃と近江とではキリシタンの禁が嚴しいが、伊勢と備後はそれほどでなく、北國諸州も亦同樣で、筑前の主ハシユヤは、少しもそれを壓迫しないで、曰く「自分のデウスに不忠な者は人間の主にも不忠である筈だ」と。教師等は加賀、能登、越中、紀伊を巡回する。

伊勢や紀伊を引合に出したのは、地理的には離れてゐるが、北國三州の事を主として見れば、此は過去に溯つての記述であつて「筑前の主ハシユヤ」といふのは羽柴筑前守、即ち前田利家の事で、次に示す筑前殿と同一である。即ち一六二三年長崎から出したゼスス會の報告（パゼスA二八九）は、左の如く述べてゐる。

江戸在住の教師は、又加賀能登にも出かける。此の二州には多くの信徒があるが、その源は本會のパテル達が筑前殿の保護の下に開いたものである。

此を眞だとすれば、利家が金澤に城を築いた天正十一年（1583）から慶長四年（1599）利家の亡くなるまでの間に、教師が、可なり屢はその地方に入込むだ事を示す。而して高山右近が金澤の前田家に預けられたのは、天正十六年（1588）であつたから、筑前守の保護といふのは、つまり高山右近が金澤に住む樣になつてからのことである。慶長六年（1601）の條にパゼス（四七頁）は記して曰く

北の方にある北國三州は、異教徒なる肥前殿（即ち前田利長）に屬する。肥前殿はジユスト右近殿をかゝへて米四萬石を給した。右近殿の乞に應じて、一人の教師は京都からその方へ來た。肥前殿は好遇を表し、始に二十人の授洗があつた。その教師は、滯在を延して一年居たが、授洗志願者は增し、教理の教授は間斷なくつゞいた。その中の一人は、高野山の坊主であつたが、弟子等と共に自分の寺を棄てゝ、佛像と經卷とを燒いてくれといつて、パテルに差出した。五十一人がそれにつゞいて洗禮を受けた。肥前殿も内心に、日本の神の僞なるを見たものと見え、稻荷神についてゐる狐を、火筒で射殺して、恐る所はなかつた。

此事は當時、信徒の間に珍重された話と見えて、繰返してあるが、翌年（1602）には教師が三人に增した。その又翌年には、一教師が、元右近殿の領地であつた山村（即ち今の千提寺、音羽村邊、攝津丹波の境）を音づれ、それから丹波、美濃、尾張を經て、北國に行つた。右近殿と舊領民との聯絡として見るべき旅行である。（その地名に美濃尾張とあるは丹後若狹の方が順路であるが、それ等諸州を經廻つたかも知れない）。その時、右近殿と共に千五百人の信徒があり、その教師は六ケ月その間に滯在した。此頃、北國には寺が三つ、金澤には寺が一つに、駐在所が一つ、右近の領邑能登には駐在所が二つあつた。それから越前の方にも、加賀の北にも、布教に出かけた。後年の記錄には、越前、能登、金澤、丹波、若狹には、各々若干の寺があつたと記してゐる。つゞいて次の年（1604）にはパテル一人とイルマン

一人が北國に布教して、八十人に授洗したが、その一人は佛僧で、キリシタンの教によつて、靈魂の不滅を信じ得る樣になつて安心したといふ。此等の教師は何れも越前を通過巡教した。

此の如く布教は進み、教師の往復は段々頻繁になつた。その事は猶ほ下に述べるが、布教の進歩と共に、佛教との衝突は免れない。慶長八年(1603)の條に、場處は不明ながら(大阪邊?)道如(Remiy)の門人なるリモン(Rimon)といふ者が、一イルマンと宗論をして大に負けたといふ。慶長十年(1605)の條に、パゼスは佛教が盛にキリシタンを讒謗したといつてゐる。又佛教の讒謗に關せず、大名達は頗るキリシタンに傾いたといつてゐるが、丹波の一城守(内藤如安の事か)は信者であり、越前の三河守(秀康)も好意を表して、越前の布教に利益があつたといふ。特に肥前殿(前田利長)が好意を表した事は、處々に繰返し、全くその教の信者にならずとも、その教を實行すればよいと臣下に云つたと傳へる。又その臣下の半分以上は信者にならうとの心があつたといひ、その夫人(信長の女だとしてゐるのは、家康の女の誤)が信者になりたい心をも拒まなかつたといふ。その外、その妾の一人は、洗禮こそ受けなかつたが、殆と信者の生活をして斷食やその他の苦行をし、オラシヨを捧げ、又母や妹にもキリシタンの教を聽く事を勸めた事もあるといふ。此等がどれだけ事實の眞相を得たか、定めるに由ないが前田家の大儀にもどれだけかの影響はあつたと見てよからう。此と同樣に、尾張の薩摩守(忠吉)も、自ら狩して得た鷹をパテレンに贈つた程だといふが、肥前守もその位な好意を表したかと思へる。

兎に角、北國へは布教の活動がつゞき、先に述べたのにつゞいて、慶長十年(1605)には金澤から教師が能登や越前に出かけ、翌年頃には、能登で九十人の受洗があり、慶長十五年(1610)には、ゼスス會の教師二人が金澤に居を占め、翌十六年には金澤(并に附近)で二百五十人の受洗があつて、多くは士分の人であつたといふ。越前と能登との布教も相變らず進んだ。右近殿が南坊(Minamibo)と稱した事を、此の頃の記事に見る。その後も教師の往來在化に關する記事がつゞくが、慶長十七年(1612)の條に、肥前殿が右近に對して少々壓迫を加へた事を傳へてゐる。此壓迫はその時は極めて輕いものであつたといふが、今まで好意を表し、又少くとも妨害をしなかつた肥前守の態度が段々變ずる始めであり、而してそれが將軍からの禁教壓迫が加はつて來たしるしであつた。

その結末は、二年後に愈よ顯著になつて來た。幕府はキリシタンの主要人物を國外に追放する策を定め、それを右近殿にも加へる爲め、金澤藩に對して强硬の命令を下した。肥前守は、自ら一箇人としては、キリシタンを惡いものと思はないでも、幕命に反抗するだけの熱心もたない。そこで慶長十九年(1614)領内のキリシタン中主要の人物を追放するに至つた。高山右近は勿論その筆頭で、パテレン等も同じくその數に漏れない。

追はれたパテレンの事は後にして、右近殿は二十年の住處領地を去り、一族と共に南に向つた。教會の記録には、此時から右近殿と稱せず、南坊（日本では茶道の名といふ）といふ名を用ひて居るのを見れば、追放人として自ら此名を用ひたものでなからうか。去るに及むで前田殿にも、その世子（筑前殿即ち利常）にも厚い禮を述べ、進物をして、御役にも立たなかつた御詫をし、內藤如安、その他信仰上の一族と共に、此の世を思ひ切つた人として旅路に上つた。途上處々で同信徒の別れを惜むあり、江州阪本では京都から追ひに來た人々に會ひ、又板倉周防守に最後の返答を與へて、讓歩改教の意なきを明にした。此の時秀頼も南坊を誘はうとしたといふが、勿論問題にならぬ。此の如くにして、戰場の勇士は、浮世の榮華を一夜の夢と棄て、四萬石の高祿に未練もなく、二十年の安宅北國にその感化を殘して、身は流人となつた。行く先は海を越えてマニラの地、そこで信仰の人として一年餘の後病死した。その墓は今も尙ほジュストの名を留めて尊敬の記念になつてゐる。

此の追放に加賀から追はれたパテレン二人の名は分つてゐて、ビエーラ（Sebastian Vieyra）とトルレス（Balthazar de Torres）とである。北國布教には、今までも記した如く、少くも十人位の教師が働いてゐたが、その名が一向現れず、追放に至つて始めて二人の名前が傳はる。此は自然の事で、今までの布教は秘密の中に行はれ、特に業績や姓名を留める事件もなかつたのが、追放、それに續く艱難で始めて名を錄するに至つたのである。さて追放を受けたパテレンの中、ビエーラは右近殿と別れ、藝州廣島へ行つて（多分山陰道を經て）一時福島正則保護の下に布教した。それから九州に行き、終には、二十年後に江戶で火あぶりになつた。追放前の事は全く分らぬが、どれだけかの時は北國に居たものと思はれる。他の一人トルレスは、二十年前日本に來た人であるが、始は京阪地方、それから六年間北國で働いてゐたといふ事が傳はる。追放には右近殿とどれだけか同伴したらしいが、其後は隱れて大阪邊で働き、夏の陣の時にはその混雜中にも難を遁れ、その後十年、長崎で殉教した。慶長十九年、高山右近の追放は、北國キリシタン史の大分界線で、その前は比較的平和の傳道、その後が迫害中の傳道になり、又それと共に北國のキリシタンが東北奥羽の方並に江戶と聯絡をする様になる。云はば布教系統の變更である。

此の如く追放のあつたに關せず、その翌年には二人のゼスイト教師が京都から出て、丹波、尾張、伊勢等を經て北國に傳道してゐる。大阪陣後の混亂に乘じて地方に出かけたものと思はれる。それから暫く消息を絕つて後、元和六年（1620）、自ら日本人ペントと稱するヘルナンデス（Bnta Fernandes）が北國に來た。此のパテルが日本に來たのはこの十四年以前にあるが、大の日本好で自ら日本人と稱した位。迫害期にはトルレスの下で京阪地方に働いてゐたが、その後江戶傳道の使命を帶び、それから上野、信濃を經て、越後では野盜の間をくゞりぬけて、金澤に來た。三ケ月そこに留まる間に、將軍の從兄弟一人

に洗禮を授けたといふ。即ち多分秀康の男子の一人（忠直？）であらう。それから能登に行き、そこでは大に感化を布き、新に禮拜所をも建てた。此の傳道はつまりトルレスの事業のつゞきであつて、前後に亘つてトルレスを北國傳道の最も重要な人と見るべく、即ち其系はゼスス會の事業であつた。

越えて元和七年（1621）にはゼスス會のマルチノ式見が江戸から北國に傳道旅行をし、次年（1622）には同じ會のアダミ（Mrtteo Adami）は、奥羽傳道の中心人物ジロラモの伴をして、二度越後と佐渡とを遍歴した。此から後奥羽系統の傳道が段々に北陸に及んでくるのであるが、此に注意すべきは、佐渡鑛山と出羽の鑛山とが一緒に傳道の目的地になつてゐる事である。追放のキリシタンが鑛山の苦役に使はれた爲であり、又其等の關係をたどつて山中に迫害を避けるに都合のよい處から、教師等が鑛夫の間に入込んだものと推測し得る。此點、尚ほ後に述べる。此の如くにして、出羽と越後及佐渡との傳道は、陸にも海にも聯絡して、此から絶えず行はれてゐる。但し他方面からの傳道もあつたので後、一六二六年の條に、パゼスは、佐渡について記して曰く、

> 佐渡の銀山には、多数のキリシタンが働いて生計を營むでゐる。又その一漁村で先づ二人が改教して、他を勸め、終には佛寺の坊主を迎出して、一村擧つてキリシタンたる事を決心した。而してパテルが歸つて來て洗禮を施すのを待たずに此を斷行した。

此時佐渡で働いた教師の名も所屬も傳はらぬが、日本人であつて、隱者として旅行し、都の國から但馬、丹後、若狹を經、それから近江を經て、美濃、尾張にも出、北に轉じて越前に入り、加賀、能登、越中から佐渡へ渡つたのである。此年東日本では二千人の新受洗があつたといふが、多く北國と奥羽方面であつたと思はれる。それから少し後、寛永七年（1630）には上方と北國とで五百六十人の受洗があつたといふが、上方は勿論、北國でも迫害は段々進みつゝあつたので、北國で少くとも十七人の殉教者を生じてゐる。その中でデーゴ鈴木といふのは士分の人であつたと思はれる。その他一人ミゲル木村がゼスス會のイルマンであつたといふが、先に北國に布教したとして記した日本人教師その人であらう。鈴木はその妻の外に八人の婢と共に斬罪になつてゐるのを見れば、一家擧つての熱心を見るに足り、此も高山右近の感化の殘りと見るべきであらう。此の如き間に數百人の殉教者があつたといふのは、多少誇大の嫌はあるが、布教の熱心を反映する事として記すべきであらう。

右、日本人教師の旅行は、北陸と山陰との聯絡を示すが、それと同様、弘く裏日本に傳道旅行をし、北國傳道最後の記録を留めてゐるのは精神のルカス（Lucas del Espirita Santo）でドミニコ會に屬する。此の人は元和九年（1623）初めて日本に密航潜入し、長崎から江戸に出、それから二年ばかり裏日本で働いた。即ち出雲、因幡、美作、但馬、越中、越後から能登へと行つた。寛永九年（1632）頃には

金澤にゐて、月日は分らぬがそこから出した手紙がその活動と當時の狀態とを示す。

御知らせすべき事は多くあるが、それ等は總てエルキシア（長崎に居た）に任せる。但し數年來相見ず、又迫害の中で互に會ふ機會もありそうにない。

どこに行くにも火の中を通ると同じで、到る處危險があり、それを逃れ得るのは不思議といふ外ない。

今居る處は此州（多分加賀）の城下（即ち金澤）で、こゝから出ては此國を巡回する。一昨年來、一年九ケ月の間、海上をも陸路をも回つたが、其の中には今まで敎師の行つた處もあり、又一人も足跡を印しない處もあつた。特に北方の國々に向ひ、日本の北端までも行つたが、海上では嵐にあひ、陸では困難の旅行をし、異敎徒の家に宿を求める外ない。

ロザリヨの組合と我會（即ちドミニコ會）の事は此州で廣く又能く知られて、我々はロザリヨのしるしで人に知られてゐる。他の會と關係は總て圓滿に行つてゐる。

即ちゼスス會の傳道の外に、ドミニコ會の敎師は、九州と同樣にロザリヨの組合を作つて信心を奬勵したので、云はゞキリシタンの念佛講である。

此の如く北國キリシタンの後期には、ゼスス會以外の布敎もあり、一方東北と聯絡し、他方若狹、丹後を經て、山陰地方の布敎とも聯絡してゐた。

そこで、今まで別系統として略しておいた若狹の事を記す。若狹と丹後とは常に聯絡し、後にはキリシタンの痕跡が薄くなつてゐるが、此の二國のキリシタン史は、最初に記した京極高吉の夫人マリヤを中心とする。そこで先づマリヤについてパゼスの所傳を擧げる。それは慶長六年（一六〇一）の條である。

大阪ではパテル・オルガンテノと三人のイルマンとが五百人に洗禮を施した。マリヤ京極と云ふ貴婦人、その夫は近江の大名であつて、その一子は丹後を、一子は若狹を内府樣から拜領したが、（即ち關ケ原役の後）、大に歸敎を増すに力を盡した。

夫人の子の一人、修理殿は丹後の領主である。幼少の時に洗禮を受けたが、迫害の起るに從つて冷淡になつた。但し後に熱心を回復した。マリヤの娘の一人はキリシタンであり、他の一人はまだ異敎者であつて、太閤樣の四人の夫人の一人であつたが、歸敎するに傾いてゐた。マリヤは、自分の子の嫁、即ち若狹の主宰相殿の妻女をも感化せうとしたが、それは成功して、その夫たる子も亦歸敎した。たゞそれを一時祕密にしてゐた。兎に角、大名達も大阪の傳道所へ來て敎を聽いたが、結果は多かつた。

此を日本側の傳に照らすに、系圖確かに一致する。之を表にすると左の如くで、次に述べる點と聯絡して、キリシタンであつた名に○をつけて示す。

高吉（宰相）
妻　淺井氏　淀君の伯母（即ちマリヤ）

一女（日本側に記さず）慶長十一年死
松の丸殿　秀吉の妾壽芳院
高次　若州小濱の城主　慶長四年參議（即ち宰相殿）
妻　淺井氏　淀君の妹常高院
高知　丹後宮津の城主　侍從修理太夫

忠高？　若狹守少將
妻　德川氏　興安院
高政―高和（忠高の繼嗣）

尙は之をパゼスの記述で充實する。慶長十一年（1606）京極マリヤの女、即ち秀頼の從姉妹に當る人であるが、京都附近に住し、その夫は異教者であるに、自分は信仰を貫いて死に至つた。夫は佛教の葬式を行はうとしたが、母マリヤはキリシタン葬式を主張し、京都で出來た新な寺で、音樂儀式を備へた葬式を行ひ、傳道師の一イルマンが說法をした。市民は皆大に感動を受けたが、佛僧は激昂した。此は京都での事ではあるが、マリヤ夫人の熱心を示す。その後慶長十四五年の頃、マリヤの求めに應じて、丹後に布教所が出來、爾後、マリヤは自分の尼寺の如くにして生活したといふ。慶長十二年（1607）、美濃尾張に巡回布教した一教師に、內府の子薩摩守（即忠吉）と親密の關係を結び、その他山地を旅行したが、若狹の主なる人の養子を感化したといふ、此人が忠高を指すか高和を指すか不明である。

此の如くマリヤ夫人が熱心な信者であつた事は確であるが、その逝去の年月さへ傳はらない。又高次ら兩人の熱心の程度も分らぬ。而して後年の結果を見れば、丹後と若狹に於けるキリシタンの根が、餘り深くなかつた事を證する。即ち井上筑後守の記錄では、若狹に僅に一兩人、丹後には全くない。

若狹丹後と密接の聯絡あるは丹波であり、而して丹波丹後は、又自から山陰道全般と聯絡するから、北國傍系の附屬として山陰道を概見する。

丹波は內藤飛驒（如安）の領域で、城は八木にあつて京阪に接近し、特に高山右近の領域高槻の山地方面とは山續きで交通多く、信者も多く、パテレンの來往も多い。後年（例へば元和五年）に二三の殉教者を生じ、井上の記錄にも多少の痕跡を留めてゐる。その隣の丹後は右に述べた通りであり、その隣りの但馬は信者も極めて少なかつた。それから先の山陰諸州は、時々教師の往來を記すのみで、信者の事跡としては、慶長十五年（1610）に石見での迫害を傳へるのみ。但しそれから後十四年秋田及仙北地方の殉教者中、石見の者が數人ある事を思へば、其地方には前年長州方面からの布教があつて、信者は可なりあつたものに違ひなく、その起源は中々古い。即ち開教最初に洗禮を受けたデーゴ金子といふ長州人は、石見（大森）の銀山で働き、後には下ノ關に住むでゐるが、それからキリシタンの系統は大森鑛山

には絶えずつゞいた。此の銀山や佐渡金山を管理してゐた大久保石見守の死後、キリシタンと聯絡のあつた事が暴露したといふのも偶然でなく、仙北地方の鑛山に石見人の多かつたのも、必然の聯絡あつた事である。

此の如く教師の往來とはいふものゝ、その系統として見るべき事は、中國や四國と聯絡しての山陰布教が、ゼスス會のトルレスとその部下の旅行に關係深いといふ點にある。此點では北國とも關聯してゐる。トルレスの部下の中で、此の方に力の多いのはボルロ（Porro）である。北國布教の有力者ルカス（ドミニコ會）も亦、先に述べた如く、山陰全體を旅行してゐるが、記すべき事蹟は傳はらぬ。要するに山陰地方は、その始に當つては石見地方では長州と聯絡し、後には北國系統の一餘波となり、又京阪から中國にかけての傳道聯絡の一傍系でもある。

此の如く見て、その結果を總括して見ると、金澤を中心とした地方を除いて、北陸と山陰とは、全體としてキリシタンの勢力の最も少なかつた地方である。大名には京極の外に信者はなく（右近殿は一時の避難移住者）、而て迫害はいくらかあつても、一つも峻嚴なものはなく、殉教も同樣、壯烈なのは少く、加賀と丹波で少數の殉教者があつたのみである。傳道史の上では事件の少い方面であるが、それでも、裏日本の處々に、此の如く傳道が及むでゐたといふことは注目すべき事たるを失はぬ。

切支丹懺悔錄

吉野作造

はしがき

私が始めてコリヤド懺悔錄の飜字を試みたのは六七年の昔である。意味不明の個處が澤山あり之を色々の人に聞き廻つたので、何時の間にやら私は一部の人達から此方面の專門研究家でもあるかに見做されてしまつた。姉崎教授がその名著「切支丹宗門の迫害と潜伏」の序言に於て此事に言及されてから、殊にその公表の勸說を聞くことが頻繁である。別に公表を欲せぬといふのでもないが、元來一時の手控のつもりで書き上げたものとて不完全の點頗る多く、公表するとなれば更に大に研究工夫するの必要がある。不幸にして今の私にその餘裕はない。去年の秋一寸試みては見たが外の用事に碍げられて第一段を了つたきりで中止してしまつた。にも拘らず其後も熱心にその公表を勸めらるる向があるので、遂に私は私の草稿全部を提供して松崎實君にその完成を誂うたのである。松崎君は人も知るごとく切支丹研究家として所謂伴天連文學に精通されて居るのみならず、又天主公教會の信徒として教會内部の行事にも明るく、懺悔錄の飜字に付ては私などよりも遙に適任の人なのである。幸にして同君は私の請を容れ、約一ケ月を費して帝大圖書館に詰めかけ、原本と對照して私の草稿に十二分の斧鉞を加へ、更に綿密なる考證を遂げて現に見らるゝ通りのものに仕上げられた。故に本篇は形式的にいへば吉野作造稿松崎實訂正といふべきだが、吉野作造の力に成つた部分は量的には多いが之は誰にでも出來る部分で、本稿の本當の値打は實は寧ろ松崎君の骨折に成る部分にある。故に實質的にいへば松崎實稿吉野作造助筆とでもいふべきものであらう。併し松崎君は謙遜にして之を肯じないので暫く玆には私の名を以て公表することにした。本稿に對する私共兩人の責任を明にするため、公表に到るまでの事情を有りの儘に表明しておく。

昭和二年十一月二十八日記

原本解題

一六三二年(寛永九年)羅馬に於て西班牙ドミニカン僧フライ・ヂダコ・コリヤド (Fray Diidaco Collado) の編纂出版したもので、今、東京帝國大學圖書館所藏本に就て見るに、本の大きさは邦舊菊版型に相當し、厚さは表紙ともに九分、表紙の厚さ一分二三厘、背には COLLADO, DICTIONNAIRE JAPONAIS の三語を三段に現してある。勿論表紙は

後から製本して附け直したものの如く、背文字の佛蘭西語なるを以ても明かである。總頁四百九十七頁、内分すれば、

第一部、Grammaticae Iaponicae. (75p.)
第二部、Dictionarium Iaponicum. (158 p.)
第三部、Additiones ad Dictionarium Iaponicum (198p.)
第四部、Niffonno Cotōbani Yô Confesion・・・・ (66p.)

第一部は羅甸語で書かれた日本文典、第二部と第三部とは羅和辭典、第四部はこゝに飜字した吉利支丹信徒の告白錄で、和文はいづれも西班牙葡萄牙語系の當時の羅馬字で書かれてある。

告白錄には別段表題らしいものはなく、たゞ第一頁の中扉に、「日本の言葉に能うコンヒサンを申す容態と、またコンエソルより御穿鑿さるゝための肝要なる條々のこと」(以下略) と羅馬字で記してあり、表題と云へばこれが表題である。第二頁は出版允許文、第三頁は序言、共に羅甸文。第四頁がタイトル頁で、先づ最初に前記表題の文句を再記し、ついで伴天連と信徒との問答が始まる。第五頁は前頁の羅甸對譯文で、形式全く第四頁に同じ、一節の行數さへもほゞ同一を示す。かくて、以下、偶數頁は和文、奇數頁はその羅甸譯と云ふ次第で、逐次進んで六十六頁に至り、その最後の一頁は Errata eic Corrige. 即ち正誤表になつてゐる。

文典辭典に就ては姑く措き、今この告白錄を考察するに、これが新來宣教師の日本語習得、特に信徒の告白を聽くに必要な日本語習得の手引として、書かれたものである事は推量に難くない。伴天連として最も重要缺く事の出來ぬ任務は、彌撒を立てる事と信徒の告白を聽く事とで、說教の如きは寧ろその次ぎである。從つて渡來宣教師は何はともあれ、告白を聽き且つ罪の赦免を與へるに必要な言葉を一早く修めるを常とする。此の事實から、右樣の推察は大過ないと思ふ。尤も、信徒に告白の仕方を敎へるために書かれたものと考へられない事も無いが、それなら羅馬字を使ふわけがない。當時羅馬字の讀めた者は、信徒中多少有つたとしても極めて少數特殊の者であらう。それに記錄の內容を見るに、邪淫戒に關する告白の如きは精細詳密を極め、告白の手引となるよりも寧ろ淫心を挑發して罪科に導く怖れがある以上、信徒に讀ませる目的で書いたものとは到底受け取れない。

さて記錄の內容が詳密を極めてゐても、伴天連が信徒の告白を聽き乍ら其れを其儘筆記したものでは勿論ない。告白悔悛の事は基督が定めた七つのサクラメント(秘蹟)の一つとして極めて神聖なものとされ、信徒は謙虚敬虔な態度で己が罪科を心底から懺悔し、伴天連はデウスの代理として之を聽き、之を訓戒し、之に赦免を與へ、其間係事をさし挾む事を許されない。信徒の告白後、その聽罪師たる伴天連が聞き憶えに認めたものである事は、文中、言葉の云ひ廻しやてにをはの使ひ方など一見して外人の日本語らしく察せられる事實を以てしても、明瞭である。

敎會の法規上、神聖なサクラメントとして行はれた告白に就ては、聽罪師は其の告白事實を絕對に他に洩らす事を許されない。宮廷の聽罪司祭が王妃の告白內容の開陳を王から迫られて肯んぜず、其爲につひに殺されて殉敎した話は、カトリック敎會の聖徒傳中にもあるくらゐで、告白者自身が洩らさぬ限り其の懺悔の內容はデウスと司祭と告白者との間の永遠不測の秘密である。この記錄中告白者の姓名が全然載つてないのは、右の理由からである。

現今では、糺明すべき罪科を詳密な箇條書にして敎會規定の祈禱本中に載せてあるから、信徒は告白の際大體に於て其の條項の文句を用ゐて懺悔すればよいわけで、從つて告白が概念的であらうが、から云ふものの無い吉利支丹時代に於ては、己が良心の不安になつてゐる事は、事件

關係者の名こそ云はないが、（これは云へぬ事になつてゐる）洗ひ浚ひ悉く打ち明けたものらしい。併しそれにしても、信徒の信仰心の深さは勿論、信徒がよく伴天連に心服し、兩者が精神的に膠漆たゞならぬ關係に無ければ、斯うは出來るものではあるまい。この告白錄を以て見れば、戰國の餘風を受けて殺伐淫蕩、道義頽廢してゐた慶長時代に於て、基督教の道德的勢力が當時の精神生活に如何に深く浸潤してゐたかが判る。文化史研究上から見ても本記は逸すべからざる貴重資料であらう。

既に一言した如く、言葉遣ひは外人の日本語たるを失はず、中には歐文の直譯體のやうな云ひ廻しも二三箇所あり、其上多く長崎地方の方言が使つてあらうから、當時の日本語としても相當割引（わりびき）して考へねばならぬが、それにしても、慶長年代の純然たる口語を傳へたものとしては恐らくこれが唯一無二のものであらう。天草本平家物語にしても伊曾保物語にしても、當時の口語には違ひないが、特に文章として書いたもので、從つて文語化した口語に外ならぬが、これは、述べた言葉を其儘聞き覺えに書き錄したもので、なんら意識的な推敲修飾がない。この意味で、國語研究上の資料としても本記錄は逸し難いものである。

なほ、編纂者はコリヤドとなつてゐるが、記錄者は必ずしもコリヤドとは斷じ難い。殊に本書の出版年代は西が寛永九年に當るが、少くとも寛永年間に書かれたものでない事は、告白者中に武士や代官などが居るのを以てしても明白で、信徒中武士階級に屬する如き身分の高い者は既に元和五六年頃までに轉宗するか殉教するかして、元和末から寛永にかけては全く其の跡を絕つてゐるのである。且又、文中『去年御所樣直的（ちよくてき）に御利運を開かせられた砌（みぎり）、それ（は）神佛（かみほとけ）の御合力を以てと思召されて』云々の句あり、また『將軍樣の御法度に從つて』云々の事あり、兩者を照合すると、「御所樣」は家康、「將軍樣」は秀忠を意味する事明かで、從つて幕府の禁教令發布後から家康他界までの年代に記錄されたものと察し得べく、殊に「御所樣御利運を開かせられた」云々の事が大阪陣の勝利を意味するとすれば更に此の推察は妥當なるべく、要するに慶長元和の交に於ける告白記錄と見て大過あるまいと思ふ。然るにコリヤドの日本渡來は元和五年であるから、おそらく其の以前からマニユスクリプトの儘新來宣教師の用に供されてゐたのを、後年コリヤドが纏めて編纂したものに違ひない。果して然らば實際の記錄者は誰人なるか。そはなほ今後の考證に待つ。

最後に、ヂエゴ・コリヤド（Dilnco は羅甸綴、Diego が西班牙綴で即ち本來の音）は西班牙エスツレマンヅレ（Estremandure）に生れ、ドミニコ會修道僧となり、一六一九年（元和五年）日本に渡來、耶蘇會反對の報告書を書いたのが祟をなして羅馬に召還された事は有名な話である。一六三三年（寛永十年）即ち本書出版の翌年、難船の厄にあつて死んだと傳へらる。

モ一つ序に附言しておきたいのは、この懺悔錄の原本には一八六六年巴里でパゼスの公刊した複刻本のあることである。之には日本語の部分に於て數ヶ所にわたり一二行づゝの脫落があると聞いて居る。この複刻本は屢々見たことはあるが、未だ初刊本と對照するの便宜を得ない。そこで脫落のことも確然斷定するわけには行かぬのだが、實は外にしかく信ずべき理由もあるので、參考までに茲にその旨を記しておく。

譯字例言

（一）羅馬字文の意味不明な箇所は對譯羅甸文を參照し、またレオン・パゼス（Léon Pagès）の日本辭書に據つた。

（二）漢字はなるべく當時の吉利支丹文書の慣用語を用ゐんとして、主として「ぎやどぺかどる」中のものを採つたが、原文の意味から判斷して現代通用の漢字を宛てたものも尠くない。

(三)本來なら假名で書くべき所も、その假名の意味を説明する爲に、漢字を宛てて原文の語音を振假名で現した所も相當ある。例へば、光榮、靈魂、表面、抔摺く、の如し。片假名は洋語、平假名は邦語なる事云ふまでもない。

(四)原文の洋語は必ずしも其の發音通りを記さず、吉利支丹慣用の訛音を用ゐたものが多い。例へば、Confesion をコンヒサン、padre をパデレの如し。但し其場合、下に括弧して原字を示す。

(五)括弧( )の中の洋字は原文にあるもの、邦字は總べて譯字者が加へた註である。

(六)が(は)とあらば、がをはに置きかへて考ふべしとの意。それ(の)とあらば、「それ」に「の」を加へて解すべしとの意である。

(七)てマ、とあらば、「て」では變だが原文のマ、を記すの意。

(八)文字の傍に記した(一の如き日本數字は註の番號、一の如き横線と洋數字は即ち原本四頁の終りを示す。

(九)〔又は〕〔即ち〕は原文の vel を譯したもので、特に角形括弧〔 〕を附しておいたから、丸形括弧( )と區別して欲しい。

(十)章末の註の内、デウスの十誡の明文は、明治初年、往昔吉利支丹の教理書を基礎として編纂出版された「理教初學要理」に據る。

本文

日本(Nifon)の言葉に能うコンヒサン(confesion)を申す容態と、又コンヘソル(confesor 聽罪師)より御穿鑿めさるゝための肝要なる條々の事。談義者の門派のフライ・ヂダコ・コリヤド(Fr. Didaco Collado)と云ふ出家、羅馬に於て之をしたてもの也。一六三二。

師。いつ〔又は〕いつ頃コンヒサンを申しあつたか。

答。それがしが(がははに解すべし)今年デウスの御慈悲の上より吉利支丹になりまらしてござる故にまだコンヒサンを申さいでござる。

答。〔又は〕吾が(は)四五六年さきより吉利支丹でおりあつたれども、御存じの如く伴天連(padre)様の御拂底によつて、速々(しきりにの意)コンヒサンを申し上げうとて力の及び才覺致いたれども遂に其の丁日がござらいで、今までコンヒサンを申し上げまらせなんでござる。

答。〔又は〕わたくしが(は)十五年前お水を授かりまらしてござれども、それはむさと人並に仕つた所で、このほどまで吉利支丹(の)の御教について未だしかじか分別得心と申すことはござらいで、吉利支丹の行儀、例へば毎年づゝせめて一度のコンヒサンの事、又十の御掟を保つことなんどに構はいで、たゞ浮世の何んでもない事にたづさはつて罷りゐてござる。さりながら、此中御談義を少し承つてから、心中にデウスに對して信心の心を催し、兎角大事なる後生を助かるために先づ吉利支丹の事をいちいち合點し、身持を改め、之にのみ誠精を盡さいではと思ひ當つたによつて、それから即ち吉利支丹の事を習ひまらして、又コンヒサンの覺悟も致いてござる。さりながら未のコンヒサンは三四年の前でござつた。

師。さてもさても大きなるデウスの御慈悲かな！　誠に一旦無道なる

拙い科人、デウスを背き奉り その御掟に叛はいで悪道に陥溺してゐる所に、却てデウス其れに御恩を施し、おん光で照らし、また萬事叶ひ給ふ御力を以て其の心をお直し改め、後生を助かる様に聖寵(gracia)を與へ下さること、言語に及ばぬ御憐みでござる。

して？ さうあるが、さだめて所謂(cruci)とまた信仰(fide)の條々を事細にお知りあらうまで。

答。なかなか。多分デウスのお事をば知りまらしてござる。

師。デウスと申すは何んでござるか。

答。デウスと申し奉ることは、萬事叶ひ給ふ萬の源、天地森羅萬象を造り、それぞれの御計らひ手、始めも無い、果しも無い御一體、御方でござる。

師。されば、デウスは幾體でござるぞ。

答。いやいや、デウスの御體はたゞ御一體でござる。

師。何處で聞きまらするも、その沙汰がござらぬ。とかく三體と聞き及びまらしてござる。

答。おゝ、その御事でござる。御意の如くデウスの御理に就て、三體とも御一體とも聞えまらすれども、三體と申す時はデウスのペルソナ(persona)のおん所に當りまらする。また御一體と承るは、デウスのヂビニダアデ(divinidad)と云つぱ、御本體に相應ひ給ふと、吉利支丹皆合點仕る。

師。然れば其の沙汰を細かに說つてたもれ。

答。緩怠ながら仰せの如く御前で、我等が分智に從つて浮かるゝために、申し上げまらせうず。先づデウス、無量無邊の御智恵、御計らひ、不替の御安樂、御憐、御柔和、また量りましまさぬ萬の御善徳、御一體に籠り給ふこと、これまた御一體の所も、ゼンチヨ(gentio, 吉利支丹ならぬ者を總べて指す、外道)にまでも明白ぢや。さりながら三の御ペルソナは、格別の吉利支丹(xpã)たる者の分別でござる。それと申すは、デウス申した如く、御一體でござれども、其の御一體は、三のペルソナス(personas)御親と、御子と、御親と御子の互ひの御大切(愛の意)でござる。さりながら其のペルソナスの中に、御親をば一番のペルソナと、また御子を二番と、—また御大切をば三番のペルソナと申し名乗り奉れども、御親(もを補うて解すべし)デウス・パデレ(Deus padre)と申す眞のデウス、其の御親の御子もデウス・ヒリヨ(Deus filio)と申す眞のデウス、またデウス・パデレとデウス・ヒリヨの御大切、スピリツス(spiritus)と申す三番のペルソナも、恰度パデレとヒリヨの御一體に眞のデウスでござる。また御親を一番、御子を二番、御大切を三番のペルソナと申しても、その三の御ペルソナスの中に、この下界の段々の様なことがござらぬ。例へば、ここには(この下界には の意)親の人體は其の子を生ずる前に數年の間活きて居る筈でござる。また大切は、それに思はるゝ物のやうに人でござらぬ。たゞ人の大切と云はれ、または其れに較べて見れば後の事と云ひまらす

る。さりながらデウスの三のペルソナのうちには、前、末、前後、左右なんどの沙汰は念氣もござらいで、たゞデウス・パデレの御ペルソナの御所はデウス・ヒリヨの御ペルソナ又スピリツ・サント(Sprita Santo. 即ち聖靈)の御ペルソナでござらねども、デウスの御尊體に微塵ほどの差別なく、三のペルソナながら御一體の眞の一つのデウスでござる。そのほか、御親デウスはその御子デウスの御前へ(以前の意ならむ)と申し、(六)また御親と御子より出で給ふ御大切スピリツ・サンクト(Spu Sancto)と申す三番のペルソナは共の出で給ふ二つのペルソナの後の御事と(申し)、また御大切でござるに依つて眞のデウスでござらぬと(申すは)、切利支丹の思ひもよらぬ事でござる。その如くも、二番のペルソナ(たる)デウス・ヒリヨ、(即ち)デウス・パデレの御智慧でござる所は、その御子でござると聞ゆる時は、恰度パデレとスピリツ・サンクトのやうに眞のデウス、またパデレ(及び)スピリツ・サンクトに籠り給ふ謂りましまさぬ御善德(は)ヒリヨにもつもり給ふ事も、信仰の御教でござる。

師。さては! そのデウスは何處にござるぞ。

答。デウスは萬の御作者、また御計らい手(で)ござる所で、何處に(も)もござる。さりながらプロ・エスピリツ(puro espiritu)と申す(い)(し)、御色體を持たせられいで、何處にもござれども、五體の六根にかゝらせられぬ御方でござる。

師。して、さうあるに於ては、御主ゼス・キリシト(Jesu Christo)の御事に就ての吉利支丹の御取沙汰は、何として眞の一事でござらうか。兎角御色體を有たせられずば、一切人間の御濟度のために三十三年の間に種々千萬の御辛苦御苦勞を凌ぎ、終に磔木に上らせられた事は皆虚事と思ふか。

答。いやく、御扶手ゼス・キリシトに就て吉利支丹の信仰教ゆる事ども、皆いちく一つも殘らず眞でござるが、その御主はデウスでも御人でもござる故に、チビニダアデ(divinidade 神性)のおん所には似合はぬ事どもは、例へば不犯の女ビルゼン・サンタ・マリア(Virgen S. Maria)と申し奉るに生れ給ふ事、また此の世界に總別人にデウス・ヒリヨと見識られ給はいで常の人(八)のやうに思はれ給ひ、三十三年の間に、人間の正體に當る人とならせられたと共に受けさせられた御辛勞、色體の難儀、逼迫におんきはまり、終に十字架(cruz)に懸らせられて死なせられた事(九)なんどは、其等はフマニダアデ(humanidade 人性)と申す人界の限りのうちでござるによつて、御主ゼス・キリシトのフマニダアデの所に申し宛て奉る。とかく御扶手は人でもデウスでもござれば、デウス・パデレとデウス・スピリツ・サンクトのチビニダアデ御一體の無量無邊の御善德を持ち給ひ、また人界と共に受けさせられた其の不足をばお凌ぎ、終に一切人間元祖アダン(Adam, 又はAdam.)より傳ひせられた科とまた面々の科によて地獄(inferno)に受けらずる苦患の

贖ひをば、そのおんかゝり手（主宰者の意か）の身にてましまし、御身につとめ、それに就き御死去なされたとおよ（おや）でござる。

師。さうあるならば、まことにデウス要らざる儀をばめされたと見えてござる。仔細は、アダンと一切人間の科と云ふは、デウスの御掟を背き奉つたに依つてぢやの？

答。なかなか、その分でござる。（全くその通りの意）

師。しては、スピリツス・サンクトのお力を以てデウス・ヒリヨ人とならせられて、一切人間のおんかかり手にてましまし、其の科送（贖罪の意）に死なせられたよりも、デウス・パデレ、御心に叶ひ給ふ御慈悲の上より其の科を只赦させられたばかりが、ましぢやと見えてござる。[10]

答。いやいや、さうあつたらば御憐み御哀憐ばかり現れ給ふが、御主ゼス・キリシトお死にあつた時は、御慈悲もなほ輝き、デウスの御憲法（羅甸 justicia、即ち英語 justice）にも人の科の似合の償ひを與へ下され、其上人に御善作のお鑑みとならせられて、終にその霊魂（anima）の御薬（羅甸 medicina 即ち薬）と息災のために七つのサクラメントス（sacramentos、秘蹟）をたくみ作らせられた事、何よりも一つ優れた御所作でござつた。

師。さてもさても、言語道斷不思議な御返事かな！ 然れば、御主ゼス・キリシト御死しなされてからは、未だ死んでござるか。

答。御霊魂御色身に離れさせられた御跡（刹那の意）、チビニダアデと共に、古へ天地開闢より死たれせらた諸善人達の霊魂皆集まらせられた古聖所（limbo）と申す所へ降らせられ、その諸霊魂を召し出され、それぞれにグロリア（gloria、榮光、また特に天國の榮光）の快樂を遂げさせられて、三日目に甦らせられた。それからまた四十日の間に、御母サンタマリアと御弟子達を連々御見舞ひ、御指南なされて四十日目に御力を以て御上天なされて、デウス・パデレの御右の不盡無量無邊のグロリアの御座にそなへられ給ふ事でござる。また此世界の末の總々一切人間の御糺明にデウスの御定めの日が來らう時は諸天使諸聖徒（anjelos, Lentos）達の諸霊魂を召し供しさせられ、その御座處より天降らせられて、御糺明のため、その諸霊魂をばそれぞれの元の色身に戻させられて、甦へさせられたらうずるに、よつて御返報、罪科人には霊魂色身ともに果しないインヘルノの苦患、善人達にはグロリアの充滿の快樂を與へさせらるゝ筈でござる。

師。さうあらうずまゝよ。が、その御糺明に、吉利支丹（xtan）ばかりか、吉利支丹でない者共もか、遭ひまらせうぞ？

答。一人も殘らず、一切人間皆その御糺明に遭はいでは。さりながら、後生を助かる爲に（は）御水（洗禮の意）を授かるよりほか別の道がない所で、誰とてもゼンチョの者共は後生を助かること曾て罷りならぬ。またたとひ御水を授かつても、サンクタ・イグレシア・カトリカ（Sancta Iglesia Catholica、即ち Holy Catholic Church）の教ゆる如く、[12]ゼス・キリシトの信仰の條々を皆まことに受けぬ者

るに於ては、それも後生の頼の道に外れたによつて、インヘルノの苦患に相定まつておぢや。また頼のカトリコ（Catolico 公教徒）、その條々を一つも殘さず、恰度サンタ・イグレシアの御定めのやうに眞に受けまらしても、その行儀が悪うてモルタル科（mortal toga 大罪）を有ち乍ら死ぬるに於ては、それも後生を助かる事も得いで、インヘルノに墜ちいで叶はぬ。併し乍ら、モルタル科を有たいで、たゞ或はベニアル（venial 小罪）ばかり、或は科送と申す其の科に當る過怠（贖ひの意）をば此世界に遂して遂げずば、グロリアへござらぬ前に、プルガトリヨ（purgatorio 煉獄）と申す處の苦患にその罪送の贖ひを勤めいでなりまらせぬ。

師。して、モルタル科、ベニアル科（と）仰せあつたこと、その差別は何んでござるぞ。

答。モルタル科を作るでは、デウスを眞に背き、その御掟に離れ、聖寵（gracia）の御位を失うて唯天狗の奴になり、デウス、アンゼレス、ベアト達の怨敵に相成り奉る。さりながらベニアル科と申すは、これ程深い科ではない。たゞデウスの御内證（聖意の意）に叶はいで、その御掟に少し外れて、それでデウスの聖寵（と）一味（デウスとの一味同心の意）を失はずして、たゞ其の淺い科に當る過怠は有に無に此世界にかプルガトリヨにか勤めいで叶はぬと、心得まらしてござる。

師。さては、コンヒサンの覺悟と申すは、前の科を穿鑿して思ひ出し、それ〳〵を後悔し、また再びその科を犯すまいとの思ひ定めに極まる所で、コンヒサンの覺悟扱いたと仰せあつた時は、定めて其分であらうまでござる。

答。なか〳〵、デウスの御慈悲の上より、その覺悟數（希望の意）がござる。

師。して、前のコンヒサンの科送をば勤め果しあつたか。

答。宛てさせられた贖罪（[illegible]）は最早勤みまらしてござる。科送も大略致いたれども、たゞ、人に借を濟せと、また他人より無理に取つた金をば其の主に取り返せと仰せつけられたばかりを、仕らいでござる。さりながら今は最早、打ち戻さうと思ひ定めまらしてござるに依つて、御氣遣ひあるな。

師。叶ひながら其金を戻しあらなんだか、力の及ばいでか。

答。障がる時もござり、無精でそれを致さぬ事もあり、更にそれは身が深い過誤でござる。

註。（一）談義者の門派は聖ドミンゴのコンパニヤ（Companhia de San Domingo）、即ち聖ドミニコを父祖と仰ぐ修道團。

（二）レン〳〵は様々の字をも宛て得るが、意味から判断して連々を採る。

（三）チヨウビは對譯羅何文には occasião とあり、機會の意味なれば好く丁日を宛つ。

（四）xpãは、x は希臘字の ch、またpはrに當り、依て xpã は chr、之に葡萄牙語の Christão の語尾 ão を取つて結合

し、xpan 即ち ch (rist)an として略字に用ゐし如し。なほ他の箇所には xpā とあり、これは ch の音は葡語では x の文字で現す故であらう。ともかく xpan 及び xpā は christan に相違ないから、吉利支丹と譯す。

（五）トウジヤクは、パジエス（L. Pagés）の日本辭書に「喧嘩し合ふ雀」とあり、なほ其の用語例としてトウジヤクヒトニオヂズなる諺を擧げ、「喧嘩に夢中な雀は人を怖れぬ」と說明してある。今此場合トウジヤクスルは夢中になるの意なれば、パジエスの所謂トウジヤクを動詞に用ゐたものと解すべく、依て鬪雀を宛つ。

（六）Spū Sancto の Spū は Spiritu の略。因に羅甸では Spiritu Sanctus, 西語では Espiritu Santo, 葡語では Espirito Santo で、吉利支丹用語としては羅西葡を混淆して用ゐたやうである。單にスピリツ・サントの場合のみではない。以下注意されたい。

（七）Puro espiritu は西語で、英の pure spirit 即ち純靈に當る。

（八）正體は本體の意に用ゐ、「人間の正體に當る人」とは、人間でも「個人」を指さず、「人間其者」即ち「本體としての人間」を指したのであらう。アダムは本質的普遍的人間、共存は第二のアダムと云ふ教理が、古來カトリック敎會にある。

（九）人界は人間と同じ。共に佛敎語。

（十）モルタル科は「死に價する罪」で、之は伴天連にコンヒサンをしなければデウス（即ち神）から赦されぬ。ベニアル科は「輕き罪」で、之はコンヒサンせずとも痛悔だけすれば赦される。

（十一）プルガトリヨは、インヘルノの如き永遠の地獄ではなく、天國に行けるまで靈魂を淨化する一時的の地獄である。

答。さて一番の御掟に就ての科を申し出す所に、先づ三十度ゼンチョと吉利支丹の取沙汰に就き物語を承つて、一世界の吉利支丹の數、ゼンチョの數に較べて見れば、水の一雫（を）大河に較ぶる如くぢやと耳に入つた時は、はッ！　これは何んとしたことか、と思うてとかく吉利支丹の事に就て不審が起つて疑ひまらしてござる。

また一度は、御彌撒拜む時、その小麥の粉で作られた餅ホシチア（[illegible]）聖餅。これが祝別されると聖體（ユウカリスチア）と申すの上に、パデレ樣御言葉を誦へらるゝ端的、そのホシチアは御主ゼス・キリシトの御色體に、また同じう御酒の上に御言葉を誦へらるゝでも、その御酒がおん主の御血に成り給るに就て、相究まらぬ念が起つて、疑ふ程（では）ござなかつたれども、その惡念を防ぐに精力があつて、心に懸りまらする。

度々も無用に慢氣な心で吉利支丹の事を、或は心のうちにか、或は言葉で人と語つてか、質いて、一つゝの仔細、傳へ、由來、有合似合などを穿鑿して人の生得の智慧に超えられ唯信仰の御告の光で眞に受けた御事を、吾が智慧分別で揣らうとした事は、身が誤でござつた。これは再々でござつたれども、幾度とは覺えさらせぬ。さりながら無用危い穿鑿であつた所で、胸に据わつて、科でござらうと思うて現しまらする。

たま一度、身が息子が深う病うた時、其の動倒逼迫に窮つて、吉利支丹の心で一心不亂に其子が命を助かり存らゆるやうに／デウスを恨み

まらしたれども、其の益がござらいで、死ぬる程の思ひや？否や？と知る爲に、算(即ち筮卜の算木)を置きまらした。それにつけても、其の難儀さに責められて、息子を失はぬため、ゼンチョの意見を聞いて、山伏を呼び寄せて、此の上に(息子の上にの意)祈り、祈禱をさせ、札守りも掛けさせまらしてござる。これは眷屬の前での事と、また近邊衆の聞えた所で吉利支丹衆、「はッ、吉利支丹たる者は別の科を仕つてさへ惡いが、難儀の時ゼンチョのやうに祈りなんどを仕ること、沙汰の限りぢや(三)」と、皆見限つて申された所で、身が過誤がなは深うなりまらした。これは二度でござつた、一度はゼンチョの神佛を頼もしう存じて、ま一度は、役に立たぬと存じながら、知人(の)ゼンチョより勸められて致しまらした。

また此中將軍樣の御法度に從つて、其の奉行都より下られて、濱懸(是非ともの意)この辺りの吉利支丹衆を轉ばせうとて、皆に判も据ゑ、吉利支丹の行儀をさしおけ、せめて表面になりとも轉べ、と切りに勸められたによつて、吾等より女房子供の命を免れうずるために、遂に口ばかりで轉びまらした。

師。表面ばかりでも轉ぶ者が(は)、それを云ひ戻さいでならぬが、其分でござつたか。

答。いや未だでござる。それこそ不幸悲しうござりまらすれ。とかく其の奉行、切利支丹の事を打ち捌つてからは、その儘上(へ)罷り上られてござるさかいに、何も得致しまらせいで、今迄此分に罷り居るが、御意見お頼みまらする。

師。其の奉行のせられた事どもの日記は何處にあるぞ。即ち(直ちにの意)それを持つて上られたらば、其の奉行へ文なりとも、使をやつてなりとも、云ひ戻さいでは。其上吾樣が作懸も遲りの者共もそれを知られたによつて、最早眞實の切利支丹に成り直りあつたと皆得心せらるゝやうに召されて善うござらうぞ。

答。おゝ、其分致しまらせうず。また今りは切利支丹よ一の行儀を勵めて、ゼンチョの事に遠ざかり、心を乾度改へまらせうと、思ひ定めまらする。

其上去年御所樣直的に御利運を開かせられた砌、それ(は)神佛の御合力を以てと思召されて、愛宕八幡にお寺を御建立されうとて、其の奉行、代官衆、百姓共にそれぞれの分際に從つて其の公役を充てがはれまらしたれば、吾れは吾れと(自分から進んでの意)仕るまいために、ゼンチョを雇うて貨を濟いてなりとも其の公役をさせうと斡旋つたれども、それを其のゼンチョ衆の意何んとも彼とも得請ね出さいで、二三度吾れがゼンチョと共に其の公役を致しまらした。さりながら、神佛に對しての心中の敬ひ少しも無うて、たゞ御勘氣を免れうずるための辯護(三)でおりあつたれども、ゼンチョ寺(異宗の寺の意)を造ることは切利支丹の爲に御法度でござらうと思ひ乍ら、致しまらした。

或時も、訴りの公事(相續の訴訟)に就てゼンチョの所に久しう居り

まらしたれば、其の節の寄宿と隣より、切利支丹と見識られまいために、其れを伴ひて度々ゼンチヨの御堂へ行つて、ゼンチヨ並に誦念もなしまらした。また度々ゼンチヨ、神佛の事を褒美せらるゝ時、吾れも肯いて、言葉でもなか〳〵御尤もぢやと申して、深い科を犯しまらした。これは何度でござらうと覺えまらせねども、大略二三十度ほど、せめて二十度餘りであつたらうと、思ひ含みまらした。

また難儀に遭ふ時も、デウスの御守り、御扶手ゼス・キリシトの御憐み御合力、其の難儀をば逃るゝために御力を與へ下さるゝやうに頼み奉る事もござらいで、たゞ口惜しう存じて、これは迚もの事に堪へられ難うござれば兎角これよりも死ぬるがましぢやと存じて、二三度精神を失ひまらした。

一度も、ゼンチヨと轉宗切利支丹も、互ひに切利支丹の事を譏り嘲り、其の沙汰散々に取りなし、デウスに對しても惡口を吐いて居らるゝ所へ、吾れが附き合うて、其の物語をば身方より揃へねども（自分の方から賛同はしないが）呼ひながらも止めさせまらせいで、抵捂き（批難するの意）も致さいでござつた。

また近所の不切利支丹の上の事どもも皆その身の望みのまゝに成るを見、また世界（世間の意）の事に就て良い切利支丹衆の散々の體を思ひ觀る時は、デウス、インヘルノの苦患を受けうずる果報拙いゼンチヨどもには御慈悲の上より今の少しの快樂を遂げさ（せ）られて、後生の果しない無量の苦艱を受けさせられうずる切利支丹達には、下界に唯難儀苦勞ばかり當てさせらるゝ事、まことにデウスの不可思議なる御計らひ御憐みでござると申すもござる。（が、）一度も二度もデウスに對して恨み嫉み懐化まつて、さても逆様のデウスの御計らひかな！と存じて、デウスと少し叱りまらした。これは心根からでござなかつたけれども、不信心敬ひ無くしてデウスの進高い御事をば取り扱うた事は、身が誤りでござる。

また戰なんどの噂くを聞くに就て、時によつては構ひまらせぬ、さりながら二三度は氣に障つて、定めて吾が事の上に何か災難禍殃があらうぞ！と氣遣ひ致しまらした。これも必ず此分であらうと申しまらせねども、とかく切利支丹の慣には、たゞデウスの御計らひばかりに從ひ、殘る所に構はいで罷り居る筈でござる所で、身が不足でおりあつた。同じく、夢の中に見た事を四五六度少し眞に受けまらした。

また吾等不斷デウスより數々の御恩を受け奉りながら、其の御禮と申す事は少しも無く、たゞ無禮不信心のみ致し申した。とかく身は切利支丹の名ばかり附いた者ぢやによつて、死ぬる事も御糺明の事もしかしか思ひ致さいで、たゞ死ぬるよりほか殘る所も無いと思ふやうに生きて居りまらした。

其上また某し毎日祈禱を申し（申す事や）切利支丹（の）行儀を勤めぬのみならず、却てそれを蔑して めさるゝ人體をば譏り嘲り仕まつ

ておぢやる。これは再々十五六度ほどでござつた。——22

また二三度デウスの無量無邊の御憐みに頼みをかけて、その御掟を背いても大事あるまい、とかく罪科と申せば有つても後悔致さば御慈悲の上より赦しは何よりもいと易いと思うて、御哀憐をば猛悪の基となしまらした。また一度は逆さまに、吾れより罪惡の數々の事を思ひ量つて、これはさて御慈悲と申しても赦させらるゝ程ござるまいと存じて、賴母敷を失ひまらした。

三度も、或る題目に就て、これを致さばモルタル科ほどにならうかなるまいかと疑うて(疑ひながらの意に取るべし)、取り掛つて(進んでの意)致しまらした。其後それほど深うないと知つたれども、仕まつつた時は其分でおりなんだに依つて、身が科でおぢやつた。

註。(一)一番の御掟は「御一體のデウスをのみ拜み奉りて、萬事に超えて深く御大切に存じ奉るべし」と云ふ事。

(二)原文には此處に引用記號無きが、解し易からむため特に附す。

(三)チョーギ(chôgui)はパゼスの辭書に「トヽノユルギ」と字解して、Artifice ou industrie と說明あり、また「チョウギヲスル」を Concevoir une idée と說く。ギは議、儀、技、戯など種々考へ得られるが、姑く議を採る。但し調戯と云ふ熟字はあるが、果して意味が叶ふか。

(四)シュツクワイ(xucquai)は同じくパゼスに plaintes とあり、如何なる漢字に相當するか判然としないが、これも姑く述懷を採つておく。

二番の御掟に對しての科の事

二番のマンダミエント(Mandamient, 誡律)に就ての科を申し現すに、私が(は)この三箇年の間に惡しい癖に入りまらした。それと申すは、物別人に語る事は實か不實か見分けずに、聞き及ばるゝ人數に僞事に受けさするため、切々誓文を立てまらする。

また二三度人に仇を爲すために、不實と能う存じながら虛誓文を致しまらした。一度の仇の題目は少しの事でござつた。二度はそれで大事なる損に遭はれまらした。

其上また四度程も內の者と腹立つて、デウスの御名にかけて打殺さうと誓文致しまらした。一度は(實際)仕らうと存じて、三度はたゞ脅しに致しまらした。度々も其れ(其者)と叱つて、打ち叩かう折檻加へうずなんどと誓文立てまらする。時に依つては遂げうと存じながらも、後は怒か冷めて赦しまらする。再々も、何も思はずたゞ腹立に引かれてさう致しまらした。——21

其外或るいきくに就て人と喧嘩してゐる所へ、別の人が附き合うて、切りに仲直しをめされた依つて、身は表面で肯うたれども、心中に善惡(是非とも)遺恨を打ち果さうと誓文して、思ひ切りまらして後は差し置きまらした。

また善い事をばするまいとの誓文は繁うござつた。例へば、吾れが貸いた物を返されぬ時、其中貸すまいとのやうな誓文でござる。さう

する時は、諍やうと(の)心もあり、致すまいこともござる。稀にも(は)浮と致しまらする。

また二百匁(金額)の公事に就て、身方から道理とは少とも違うて、負けては外聞も其金をも失はうと存じ、兼ねて勝つために、知る人を頼うで虚誓文をさせまらして、其金の三分一を知人にやつて、残りをば私に取りまらした。或時も其の知音が公事があつて、吾れが其れ(其人)より受けた合力の報として、私もそれに對して非道の誓文四ケ人の前で二度立てまらしてござる。さりながら其の公事の相手のせられた損は、二三十匁程と覺えてござる。

其外、させらぬ事に就て無益無用の誓文は數限りもござるまい。

また博奕打に負けて、相手に金三百匁を取られたによつて、身(己が身)を呪うて、赤癩白癩にかぶらう、一期の間にも打つまいと約束したれども、其後二三度打ちまらした。さりながら、一度(目)は強ひられて恐みにばかり、金を掛けいでござつた。二度(目)は下手の金をば必ず取らうと致しまらしたれば(ど)、兎角互ひに勝ち負けとはござらなんだ。

其上また患ひの難儀な時分(四)に、其の腹中に祟つた物をば常もくださるまい(食ふまいとの意)と願を立てたれども、病氣に人よりやらせられたれば、横柄な者と思はれまいために遂に取つて食べまらした。

ま一度は彌撒慈悲の數の願を立てたれば(ど)、彌撒は慈悲油斷があつてそれた施しまらせなんだ。—さりながら、成らう時分に遂げまらせうず。

非道私誓ひする事に仕なれた者で、内の者に悪い鑑を見する上に、其れ(内の者)も誓文する所を、憚つて得挫ぎまらせいで其儘におきまらする。

註。(一)二番の御掟とは、「デウスの御名にかけて虚しき誓ひを申すべからず。」

(二)イキイキ(iqi iqi)は、對譯羅甸文の方には quandam differentiam とあり、即ち certain difference の意味だが、如何なる漢字を宛つべきか。

(三)ヘタ(feta)は、羅甸文 ludi ignorantem に當り、即ち「博打を知らぬ者」の意。

(四)クダサル、マイは羅甸文 nō comedendi, 即ち「食ふまい」の意。

(五)彌撒慈悲は「施しのための彌撒。」ミサは missa, 司祭(伴天連)が葡萄酒とパンとを基督の血肉に化して、之を犧牲としてデウスに獻げる祭儀。

(つゞく)

野田に於ける勞働爭議

松岡駒吉

爭議の原因

千葉縣野田町所在、野田醬油株式會社に、日本勞働總同盟所屬關東醸造勞働組合野田支部(當時野田聯合會と稱す)の組織されたのは、大正十年十二月の事である。大正十二年三月待遇改善の要求決裂して、罷業廿六日間の後、當時の千葉縣知事齋藤守圀氏並に內務部長白上祐吉氏の調停に依て圓滿なる解決を見た。會社は其後常に勞働組合の破壞を策し來つたが、大正十四年四月に至つて、小麥の過剩に關する責任を、不當に轉嫁し、何等關係なき組合幹部六名を解雇したるため、組合は之が復職と待遇改善とを迫つた。

而して復職の目的は貫徹し、待遇改善の問題は、希望案として、會社の自發的誠意に待つことゝなしたが、爾來之に對する會社の努力を見る能はず、依つて昭和二年四月、右希望案の精神に從ひ、左の如き要求條件を提出したのである。

(一)、賃銀の二割増給、女工は二割増給、(二)、解雇老衰退職手當は從來の支給率に對し勤續一ヶ月に就き日給一日分を加算すること。(三)桶工徒弟は各工場に於いて一名乃至二名を桶工全員の責任を以つて養成せしむること。(四)年末賞與の最低額を日給一ヶ月分と定めること。(五)入社より熟練工に達する年限を四ヶ年となすこと。(六)日雇工に對し工員扶助規定を適用すること。右の要求條件は、四月十日に提出し、四月廿日迄に其回答を求め、尙其間數回の折衝をなしたるも、不幸にして不調に終つた。從つて豫告通り五月一日より罷業の筈であつたが、更に十日間の延期をなし、飽くまで合理的解決を期するため、右の待遇改善條項に關して、第三者を加へたる調査委員會の設置を提案した。然るに之も亦會社の拒絕するところとなり、玆に總罷業は避け得ざる狀態に至りたるも、我關東勞働同盟會執行委員會は、當時あたかも財界の大混亂あり、未曾有の社會不安の狀勢に鑑み、且又問題の平和的解決の爲めに、尙一層の努力を試むる餘地ありと信じ、要求條件を一と先づ、保留すべきことを野田支部に勸告した。野田支部亦、之を諒とし、其總會に於いて滿場一致承認したるため、漸く危機は轉回されたのであつた。

然るに會社は、之を目して組合が實力を失ひたるものとなし、この機に乘じて組合破壞の目的を達すべしと、先づ丸三運送店(會社が實權を握る)の組合を破壞すべく、別に丸本運送店なるものを新設し、荷物の取扱ひを漸時之に移し、丸三の自然消滅を計つた。之が爲めに七十三名の從業員の收入は漸減し、遂には失業を豫想さるゝに至つたのである。野田支部は之に對し、再三交涉を行ひたるも、會社は言を左右にして全く誠意を見る能はず、平和的解決の望みは絕えたので、九月十五日先きに保留せる要求案も復活し、九月十六日より總罷業を斷行したのである。

抑々會社の組合破壞策は、組合創立以來一貫してしばしば事件を惹起したのであつて、前記の外に大正十一年には、組合幹部の××を計畫し、反つて組合員の爲めに××××××され、二名の組合員は殺人罪に依りて五ヶ年の實刑を受け、會社側亦殺人豫備罪に問はれて判決を受けたるが如き事件もあつた程であ

る。

勞働條件

野田醬油株式會社は、十七ケ工場を有し、關係勞働者二千二百三十八名（運輸、袋製造從業者等も含む）内女工四百三十名である。而して第十七工場の三百二十六名を除く他は全部關東醸造勞働組合野田支部に加入するものである。

勞働組合組織以前の勞働條件は、甚だしく劣惡にして、大正十年當時は、熟練工が一ケ年壹百八十圓（食費會社持）従つて多くは妻帶するを得ず、ヒロシキと稱する豚小屋に等しき寄宿舍に住ひした。木枕を用ひ、或は病氣中のカユを煮るに石油罐を使用したる一事を以つて、すべてを想像さるゝであらう。

勞働組合組織後、ヒロシキは廢せられ、勞働條件は著しく改善を見たるも、現在の賃銀は、（大正十二年協定）一日平均男工一圓八十六錢、女工九十五錢である。勞働時間は午前七時より、午後四時二十分迄實働八時間であるが、醸造工の七割は請負制で、其勞働時間は平均五時間である。而しこの種の醸造工の作業は、其性質上最も過激なるもので、寒中も半裸體で汗をしぼると云ふ狀態である。故に單なる勞働時間のみを以つて、其短かきを云々することは、極めて皮相なる見解であると云はねばならぬ。

野田町に醸造業の起りたるは、三百年の昔なりと傳へらるゝ。茂木一家が之を統一して、野田醬油株式會社を創立したのは、大正七年である。當時七百萬圓の資本金は、大正十四年一躍三千萬圓に增資したが、之は實質的には殆ど利益金を以つて充てたるものである。産業の性質上、財界の不況も多く影響せず、大正十五年上半期には九十一萬餘圓の純利益を計上し（實際は之以上と推察さるゝ理由あり）たる狀態で、今日茂木一家の財産は優に一億圓なりと稱せらるゝのである。

こゝで、今回提出せる勞働條件改善案の具體的說明は、紙數の爲めに不可能であるが、之に要する金額は一ケ年約十萬圓位であることを附記する。

會社の戰術

總罷業後、會社のとりたる戰術は、

一、暴力的挑戰に依つて、勞働組合の暴力的行爲を誘發せしめ、官憲の取締りを利用せんとした。卽ち人夫を以つて暴力團を組織し常に積極的行動に出で、行德支部の事務所の如き目茶々々に破壞された。

二、組織的逆宣傳に依つて、組合の内部崩壞を計つた。印刷物の撒布、小新聞の買收、或はスパイ事件で有名なる遠島某を使用し、又、正義團を驅使した。

三、勞働組合員の經營せる購買組合の差押へ、集合所に使用せる劇場の立ち退きを強要して、罷業の持久力を流失せしめんとしたが之は全く失敗に終つた。

四、會社の御用商人を以つて、正義團なるものを組織し、盛んに之を利用した。而し豫期の效果は擧げ得られなかつた。

五、組合員の解雇と新工員の募集、及び猛烈な切り崩し運動。卽ち三回に亘つて一千百三十八名を解雇し、一切の勢力を動員して、系類を求めて戸別訪問をなし、或は自動車を以つて歩行中の勞働者を奪ふ等全力を傾注したが、之に依つて約一割の裏切者を得たに過ぎなかつた。

勞働組合の陣容

總罷業後勞働組合は、

一、統制を嚴にして會社の暴力誘發の奸策に乘ぜらるゝことなきを期し、

二、購買組合の運用配給を圓滑ならしめ經濟的安定と持久に努力し、

三、爭議中亀甲萬のボイコットを全國的に宣傳して、市場の亀甲萬を停頓せしむる爲め

に活動し、

四、近農村に於ける新工員の應募を防ぎ、

五、宣傳部を充實して正しき輿論の喚起を計り、

六、警備隊の組織的活動に依つて會社の切崩し運動を不可能ならしめ、

七、十一月十九日よりは船夫の罷業を斷行して船に依る出荷を停止した。

殊に特記すべきは、野田支部中野田醬油株式會社に屬せざる白木工場其他の從業組合員は、收入の二分の一を罷業の開始より終る迄醵出することに決してこれを實行し、野田支部以外の關東醸造勞働組合所屬支部は（東京群馬、栃木、千葉、埼玉、神奈川、茨城の各縣に亙る十六ケ支部）十一月十五日より收入の三分の一を醵出しつゝあることである。

現狀

會社は、十七工場（非組合員工場）は十月四日より作業を開始し、約一割餘の製切工及新工員、社員、店員等に依りて十一月三日より十二月初旬に亙つて、四、六、十六、の三ケ工場を除く他は作業を開始し、十一月中に約十六萬樽の出荷をなし（平年十一月は六十萬樽）十二月半ケ月に十六萬四百四十四樽、二リツトル壜詰一萬八千三十本の出荷を見た。

而し乍ら十二月下旬に至つて約十分の一の仕込作業を開始したけれども、それ以前は全々搾取及出荷作業のみであつて、醸造產業の自然的性質上、本年の十月より十二月には、仕込原料の不足より再び罷業と同程度の打擊を受る筈である。尙罷業中の不熟練勞働の結果龜甲萬の品質著しく底下したるは爭はれざる事であり、問屋筋の返品もしきりに行はれ、十月下旬には、一日四千樽の返品があつた程である。

勞働組合の陣容は、十二月三日に、罷業の統制を野田支部より關東醸造勞働組合に移し、更に十二月廿日より關東勞働同盟會に移し、以つて今日に至る。一月八日よりは、小學兒童七百名の盟休を斷行することに決定した。これ學校當局者の露骨なる會社擁護的行動に反對なるが故である。

組合の統制、活動は整然、且敏活、飽くまで堂々の陣を張つて居るが經濟的基礎も極めて强固である。

罷業の影響を受けて野田町は、小商人が甚だしき不況に沈みつゝあるが、正義團全く凋落し、會社の頑迷なる態度に反對する分子益增加し、十二月下旬には、數百名の調印を以つて、縣當局に調停要求の運動を起し、十二月廿五日には町民大會が開催された。

社會民衆黨千葉縣第一支部も、全力を擧げて、勞働者の要求を支持して戰ひつゝある。

然し乍ら、會社の態度は極めて頑强である。一切の調停を排し、徹底的に勞働組合破壞を期して居る。かくして、旣に罷業百十三日に及ぶも、何等解決の曙光を見ることが出來ぬ。

結語

最近の資本家階級は、政府の反動的傾向を利用し、又は之に策應して、至る處に勞働組合破壞を策しつゝある。彼の猛烈なる攻勢に對して、勞働階級は目前の利害を超え、勞働組合に殉ぜんとする壯烈なる鬪爭を以つて答へる。この烈々たる精神は、新しく且深刻なる鬪爭手段に依つて、頑迷なる資本家階級を戰慄せしむるであらう。勞働組合の健實なる發達は、合理的產業秩序の基礎的條件である。これを妨害し、これを拒む所の資本家階級に對し、徹底的に鬪爭する事は、勞働組合に課せられたる國民的義務である。

野田に於ける今回の勞働爭議に當りて、我等の期する處は、之に依つて些少なりとも、日本の勞働組合運動に何等かの教訓と暗示とを與へ、其よき礎石たらんとするに在る。（一月五日）

バッハ以後の音樂の陷れる誤謬

久志卓眞

小引

久志卓眞君は卓越した作曲家また提琴家として京阪間に名がきこえてゐる少壯有爲なる新人です。提琴樂の作曲が今まで五十五ほどあります。もとは樂壇に立つて歐洲の名曲と自作の新曲とを演奏されたものでしたが、昨今は健康のため全く演奏を中止して專ら西樂の評論と指導とに意を注ぎ傍ら美術史の造詣を努められてゐます。しかし作曲の方は全廢されたわけではなく現に最近にも一新習作を試みられたほどです。さういふ經歷と體驗とを具へた上に、曾て智山大學に在つて深奧なる眞言哲學を修めて頭腦を鍛錬しただけあつて、西洋音樂の新義を闡明するに方つても新人をして傾聽せしめ舊人をして覺醒せしめる所が多うございます。よしやその修辭に生硬なところがあるにもせよ、肺腑より出づるその明快なる辯說は言々句々力づよく人をひきつけずんば止まざるの概があります。論證の方法資料の典據共にわたくしども學究とは常に必ずしも一致してゐるとは申されませんし、その時として渝越にわたる論調は雅馴を愛するわたくし自身の趣向とは共鳴する所はすくないと敢て自白いたします。然しいまこゝに推擧せんとする所のバッハ音樂の功過論の如きは、或は用語の常例に戻り行文の稍奔放に流るゝの感があるにもかゝはらず、日本に於ける樂論の新聲として注目すべき文章ではなからうかと存じます。わたくしの如き西樂に通じない者の稱揚は却てこの論文の眞價にわるく響きはしないかと私かに恐れるのでありますが、ともかくも多年久志君を知れる一人として識者の一讀をおすゝめします。異論の發表はもとより樂界の歡迎する所であるばかりでなく原論者を啓發し且つ滿足せしめる所が多からうと存じます。(昭和二年三月二十八日京都に於て新村出しるす。)

バッハ(Johann Sebastian Bach 1685──1750)は實に現代音樂を産んだ音樂の父である。彼は偉大なる音樂の創造者であつて、獨逸の當時の新教的思想を以つて宗教樂を大成すると共に、一方には從來の伊太利式音樂を否定して、新しき近代音樂の基礎を建てた。尙彼に就いて特筆すべきことは、純粹な複音的器樂を大成したことゝ、風琴樂曲の最後の巨匠であつたことゝである。

バッハは前述の如く現代音樂の父であるが、翻つて彼が音樂に對して取つた態度を考ふるに、彼は同時に音樂を「音の遊戲」化せしめた罪人と云つても差支へ有るまい。彼の最も得意としたフューグ（Fugue—遁走曲）の如きは音の遊戲でなくて何であらうか。同一旋律（Melody）が數節遅れて後を追つて行くことに依つて複音的効果を擧げるが如きは、最も偶然を貴ぶ無反省な態度といはねばならない。勿論バッハの時代には音樂を生活として眞面目には考へて居らなかつたに相違ない故論者の如き態度を以つてバッハの音樂を評することは稍々無理かも知れない。若し音樂を吾人の精神生活の複雜深刻なる象徴として見るに於いては、バッハの如きは深刻にして複雜な藝術を創作したといふことが出來ない。バッハは非常に微妙な趣味の豐かな天才であつたに過ぎない。

バッハはピアノの前身であるクラヸコード（Clavichord 翼琴）やオルガンの如き平均音階の樂器を最も愛し、それ等の樂器の爲めに多くの曲を作つたのである。後人はそれ等の樂曲を通じてバッハの創造的な目新しい世界を憧憬し、只管盲目的に價値あるものと信じ、遂に偶像化してしまつたのである。而して彼等はバッハの目新しい巧妙な魔術の爲めに失ひ去られてしまつた音樂の本質の世界のあることを知らないのである。

バッハ以後に於ける平均音階の有鍵樂器の發達は或一面に於いて眞の旋律的音樂や和聲（Harmony）的音樂を滅ぼし音樂を邪道に導いてしまつたのである。平均音階の有鍵樂器では何處まで修練を積んでも、眞の旋律と和聲は出し得ないのであつて、唯アクセント（Accent）や拍子（Tempo）の面白さを出し得るに止まるのである。眞にヴアイオリン等の絃樂器等に依つて耳を鍛へ上げた人間にとつて、ピアノ等の如き平均音階の樂器の旋律や和聲は聽くに耐へないものである。若しピアノの音を長時間聽いて居ても頭痛を感じない人があるとすれば、其人は正しく耳の悪い人と稱してよいのである。斯かる粗雜な有鍵樂器の發達は遂に音樂を學ぶ人類の殆ど全部を平均音樂的頭腦の所有者としてしまつたのである。ピアノを演奏する人が斯かる樂器の粗雜な旋律や和聲に慣れてしまつて、ピアノの粗雜な點を意識しないのは無理も無いことと認められるが、ヴアイオリンやセロ（Violoncello）を演奏する人までも有鍵樂器に親しむ結果、殆ど眞の旋律や和聲を意識しないやうになつてしまつたのである。エルマン（Mischa Elman 189?—）の言ふ如く、世界一流の大家と稱せられる人と雖も耳の良い人は稀なのである。斯かる耳の悪い現代を產み出した最も大なる原因は、バッハ以後に於ける平均音階的有鍵樂器の發達に非ずして何であらうか。幸ひにして吾が日本は斯かる粗雜な有鍵樂器の發達を見ず、三味線の如き樂器に依つて明治初年頃までは耳を荒されずに來たのであるが、明治の中頃より外國式の唱歌が輸入され、オルガンやピアノが跋扈し來たるに至り、新教育を受けた人間は殆ど全部耳を荒されてしまつたのである。純粹な日本音樂に依つて耳を修練した人は

西洋音樂の音程の杜撰なるに呆れ果てるであらう。外國のヴアイオリン教則本等を見るも外國の音樂家が如何に平均音階的な杜撰な耳の所有者であるかと云ふことを知るに充分である。彼等が最も旋律を本位とするヴアイオリンの教則本の作者であり乍ら、斯くも耳が悪いと云ふことは、バッハ以後の有鍵樂器發達の惡影響に外ならない。ヴアイオリン演奏者と稱せられる者の中に眞の演奏者を見出せない所以は、斯かる耳惡き音樂家の教則本に依つて教育されたことに存するのである。以下述べることは少しく專門的で難解な點もあるであらうが、其點に觸れない時にはバッハ以後の音樂の陷れる誤謬を眞に指摘し得ないのであらうから、述べることにする。

吾々が音樂といふことを考へるに當つて、最も根本的た問題は音樂以前の世界と音樂を求めねばならない心である。音樂を求むる心は音を通して吾々の精神の根底に潜在する憧憬れの幻影の世界を體驗しようとする心である。音樂以前の世界とは吾々の精神の根底に謎の如く何の具象的な形もなく潜在して居る憧憬れの世界であつて、音樂の音に現れる以前のものであり、音に現はれた世界より本質的な世界である。音樂を聽くことも結局は音以上の音樂以前の世界を體驗せむが爲めでなければならない。音樂以前とは、言葉では説明し難いが、吾々の祖先が太古に於いて何の藝術も無いに拘らず神話を産まなければならなかつたやうな純粹な精神に基づくものといはなければならない。吾々は音樂を作曲し演奏するに當つても、態點を此の音樂以前の世界に置かなければならない。徒らに音色や和聲や組織や形式に拘泥つて、音樂以前の世界を蔑ろにするが如きことがあつてはならないのである。古來の大作曲家と稱されて居る人の作品を見るに、少しく音樂以前の世界に觸れて居る作品はスケール (Scale) が小さくて雄渾の趣に乏しい憾みが有る。シューベルト (Franz Schubert 1797—1828) の作品の如きは其の最も好い例である。ベートーフエン (Ludwig van Beethoven 1770—1827) の作品の如きは外面如何にも雄大で音樂といふよりは音樂以前でのものの如き感じさへするが、其の實際も雄大な所は無く、内容の何等無い世界を徒らに誇張し論理的に形式的に整頓したものが其の作品の十中の九以上を占めて居るのである。ベートーフエンの音樂は天才的ではないが哲學的であると言ふ人を多く見受けるが、それ等は人々の論理的、寧ろ形式的といふことと哲學的といふことを混同して居るのではあるまいか。哲學は論理的態度を取る故論理的といふ所を哲學的といふのかも知れないが、哲學的といふことは認識論的、或ひは形而上學的、或ひは價値論的ともいふべき意味ではなからうか。若し然りとせば論理的といふことと哲學的といふことを混同出來ない筈である。藝術は建築を除き何處までも直觀と跳躍とに依つて進んで行くべきものであつて、絶對に論理的に形式的に進んで行くべきものではない。若しベートーフエンの作品が論理的形式的のものとすれば、ベートーフエンの音樂は、音樂としての出發點を誤つて居るものと言はなければならない。人間の心の

動きの如く純粹に動いて行くべき音樂は、人間の心の動きの如く無形式な茫漠とした跳躍的な多情多感の中に自づとそれを貫いて行く一の動かすべからざるトーン（Tone）が無ければならない。音樂にして若し形式的な一の主題を聽くのみにして全部を推測し得るが如きものとせば、其の存在を認める必要は更に無い。音樂は次の瞬間を豫想せしめざるが如き變化の多くして無形式なるものであり乍ら、貴とい實在の世界、即ち音樂以前の世界が自然のトーンを以て動いて居る所に其の存在の意義と理由とがあるのである。斯く考へ來ればクラシシズムの形式音樂の如きは、音樂以前の世界に觸れざる單なる音のみの遊戯と論斷せざるを得ないのである。ロマンチシズムの音樂は如何にと云ふに、是れも亦感覺が技巧的であり刺戟的ではあるが平面的で俗氣たつぷりで深さを到底見出し得ない。次に近代音樂はと云へば、多少感覺が立體的となり形式的臭味が著しく脱け、取るに足らぬ技巧の末端に趨らない、といふに止まり、バッハ以後の音樂の惡影響を充分打破しては居ないのである。其の點、近代音樂も矢張り亦音樂の本質に充分觸れて居ると云ひ難くいのである。

要するにクラシシズムの音樂にしてもロマンチシズムの音樂にしても、近代音樂にしても、バッハ以後の音樂の惡影響を多少ともに受け、音のみの感覺に趨り、音樂以前の實在の世界に觸れて居るものが殆と無いのである。

然らば音樂以前の世界を最も純粹に表現せむが爲めには如何なる態度に因つて臨めばよいのであらうか。寧ろ大膽にバッハ以前の世界に歸れ、若し和聲や音色を必要とする場合は、必要にして十分なるだけの樂器を調へてこれに和せしめよ、と言ふのみである。音樂の根本は何處まで行つても旋律である。旋律一本でオーケストラ以上の内容が表現される場合が充分存する故に然かいふのである。徒らに組織を大にして音色を複雜にし、同一主題を屢々繰り返へすことに依つて大曲を模するが如きことは絶對に否定しなければならない。

然らば眞の自由なる旋律とは如何なるものであらうか。抑も旋律なるものは機械的固定的音階を上下することに依つて生ずるものではなく、より自由に有機的動的音階を産み出して行くことに依つて生ずるものである。如何なる旋律も樂理に於いて論ずるが如きピタゴラスの（Pitagoras 希臘の數學者と同名）音階や和聲的音階や平均音階を辿つて行くものではない。斯かる振動數より割出した固定的音階の如きは音樂を藝術の對象とせず科學の對象として便宜上割出したものに外ならないのである。眞の旋律は生きたものであつて魂に即して有機的に轉調して行くものである。2と云ふ音にしても1 2 3といふ場合の2と7・2 1と云ふ場合の2とは性質も異なり、音程も異たつて來る。1 2 3といふ場合の2はピタゴラス音階の2に近いものであり、7・2 1といふ場合の2は平均音階の2に近いものであつて、振動數には必ずや少しの差異を生じて來る筈である。1 2 3の2が7・2 1の2より高いのは云ふまでもない。ヴァイオリンに於いて第四弦のC

即ちハ調の1ドの位置が正確であつたならば、1ド2レ3ミといふ場合の2レを第三弦の放弦で出すことは絶對に不可能である。即ち2レといふ音は放弦(第三弦の)より幾分高い故である。殆ど總てのヴアイオリン演奏者は2レといふ音を此の場合放弦で奏いて平然としてゐる。かなり耳の良い人になると2レといふ放弦に1ドを合はさむが爲めハ調以外の調子を出してゐる譯である。斯かる演奏をする時は、ハ調以外の調子を出すのみならず、2レの放弦一つを生かさむが爲め第二弦及び第一弦の放弦を無効に歸せしめるが如きことになるのである。併しそれ等の演奏者はCの音を下げて1ドの音を出し乍ら平然として第二弦及び第一弦の放弦を使用してゐる。斯かる誤謬を爲して平然たるは、演奏者に大分が無いか、誤れる教育法に依つて耳を荒されてしまつて居るかの何れかを表明してゐるものに外ならない。現今のヴアイオリン演奏者や教育家に於いて、明確な耳を持ち、斯かる誤謬の起らないやう反省して居る人は殆どあるまい。ヴアイオリンの如き最も純正な旋律本位の樂器を研究せむとする人は此の點に最も注意すべきであらう。尙ほ音階は上行と下行の場合、1ド3ミ5ソの基音を除く外、何れも異なつた音程を經過するものであつて、一として同一音程を上行下行する音はないのである。上行の場合の2レは下行の場合の2レより高く、4ファは3ミに密接し、7シは高い1ドに密着し、5ソ—6ラの音程は6ラ—7シの音程より幾分狹くなる。下行の場合7シは導音的性質を離れて經過音的となり上行の場合の7シよりやゝ低めになる。4ファも3ミに接近し乍ら幾分經過音的色彩を帶び殆ど心持ち上行の場合より高くなる。2レは上行の場合より少し低くなることは云ふ迄もない。斯く音階の上行下行の場合においてすら音程は常に變動するものである故に、複雜なる旋律に至つてはその變動は複雜微妙で豫測しがたいのである。殊に轉調極まりなきものに至つては、餘程の大分があつて然も極度の修練を積んだ者でなければ其の旋律を追ふことすら出來ないであらう。斯かる旋律の複雜微妙な内容的世界は平均音階等の樂器に甘じて居る類ひの人にとつては縁無き世界である。否なバッハ以後の音樂の惡影響を受けた人間者の覗くべからざる世界である。今、論者は斯かる複雜微妙な内容的な自由な旋律を具象的に示したいが、筆に依つて示し得ないのを寔に遺憾に思ふ次第である。

畢竟バッハ以後音樂は神話的精神を失つて科學的となり、平均音階や粗雜な和聲や組織に捕り、眞の自由な内容的旋律を沒却し、外面的効果的な方面に進んでしまつたのである。今や音階運行の微妙なる關係を知悉し、眞の自由な旋律に依つて自己を發現しようとする者は一人も見られなくなつてしまひ、眞の旋律を演奏すべきヴアイオリンやセロの演奏者までが耳を惡くしてしまひ最も不都合な到底調和すべからざる有鍵樂器の伴奏に依つて自己の演奏を色付けようとするやうになつてしまつたのである。斯かる愚劣無反省の傾向はヴアイオリン演奏者の無思慮無能にも因るであらうが、バッハ以後の作曲家の無智無反省に因ることが多いのである。即ち彼等作曲家は旋律一本を以つ

て、何等和聲や形式や小細工無しに偉大の音樂を創作するに足る天分や生活内容を有しなかつたのである。同一主題を五回も六回も繰り返へすが如きは、貧弱なる天分を繰返へすことに依つて幾分大きく見せようとする拙策中の拙策に過ぎなかつたのである。事實作曲に携はつてみる時、始めこそは單純な旋律を繰返へさないでは作曲出來ず、終に單純な旋律を後生大事と何回も繰返へして漸く、曲らしく見せるやうなことになるものである。作曲が音樂以前の世界に觸れるやうになり、旋律が複雜に有機的に湧いて來るやうになると、その出て來る旋律を如何に節約し緊縮し全體としてのトーンの有るものにしようかと考へるのみで、形式的に整頓しようとか繰返へさうかなどとは少しも思はないものである。形式的整頓や繰返へしに安住してゐる間は其の人間の生活内容が毫もないのに拘らず、有るやうな眞似をせむとして居る時である。形式或ひは整頓といふやうなものは、人格が立派であり統一がある以上、考へなくとも完成し過ぎて居て困る位である。要するに從來の作曲家中恐ろしい反省的な深刻な人と思はれるやうな人は一人も無い。フランク(Cesar Franck 1822–1890)の如きは多少反省的な點もあつたが取り立てゝ言ふ程のこともあるまい。非常な天才としてスクリアビン(Alexander Nicolas Scriabin 1871–1915)の如きは擧げて差支へないが、其の作品が生々しい儘で洗練されずに終つたことを殘念に思ふ。ブラームス(Johann Brahms 1833–1897)の如きは非常に深刻に思はれるが、彼は藝術に對する態度を誤り科學者の如き態度を以つて、音を結合、分析、數術、修飾し今までに無い珍らしい世界を創つた人である。彼は神話的精神を以つて、自分自身の精神生活の根底に潜在する要求より創作した人ではないのである。從つて彼の音樂の内容は全く空虚で何ものもない。唯世間人に深刻さうに思はれる忠實な科學者的態度のみがあるのである。エルガー(Sir Edward Elgar 1857–)の如きは天分も有り可成り反省的な所も有る人と思ふが、生活内容が偉大と思はれる程大きくない。而して意識の透徹を幾分缺いて居る點がある。ドウビュッシイ(Claude Achille Debussy 1862–1918)は印象派音樂の先驅者であつて從來の傳統を破り、東洋的神話的精神の表現に努めた人であるが、多くはピアノの如き平均音階の樂器を以つて表現せむとしたことに依つて充分効果を擧げることが出來なかつた。東洋的精神を表現せむとすれば、旋律の杜撰な平均音階のピアノ等で爲し得る筈がないのである。如何してもオーケストラに依るか絃樂器か管樂器の獨奏に依らねばならない。彼は詩人でいへばマラルメ(Stéphane Mallarmé 1842–1898)の如き天才であり、畫家でいへばルドン(Odilon Redon 1840–1916)のやうな天才であるが、意識の透徹を缺いて居つた。併し彼はスケールが小さい作らも鋭い豐かな天分を以つて神話的精神の溢れた内容の有る曲を作つた。彼の態度は最も藝術家らしい態度であつて、バッハ以後の音樂の惡傳統を破壞し眞の音樂の行くべき一面を暗示した人といつても過言ではあるまい。バッハ以後の惡傳統の結晶であり究極であるブラ

ームスの如き音樂製造科學者と對照することも興味なきことではない。

扨て先に述べた如く眞の自由な旋律は動的なものであつて固定的音階を上下するものでなく、絕えず有機的に臨機應變に動いて居るものであるが、其のアクセントや拍子は如何なる進行を取るものであらうか。

從來の西洋音樂に於いてはアクセントは拍子の初めにあり、拍子は數學の如く機械的に數へるものであるといふ謬れる不文律が出來てしまつて居るのである。此の謬れる考への爲めに如何に多くの人類が音樂の本質を究めずに終つたか分らない。音樂を爲す者の殆ど大部分は音樂以前の世界といふものや音樂を爲さねばならない心といふものを少しも反省してみない故に、斯かる謬れる考へを金科玉條と信じてしまふのである。彼等音樂の徒は音樂以前の世界を考へず、音樂は平均音階的旋律と平均音階的和聲と機械的拍子とを以つて作られるものと考へて居るのである。此の考へも畢竟バッハ以後の平均音階的無內容の音樂の惡影響に外ならないものである。ヴァイオリンの弓法の如きも此の謬れる考より割出されて居るもので、眞の音樂の精神を毀すものに外ならない。此の弓法はクラシシズムの遊戲的作品を演奏する爲めに使用されたものであつて、近代音樂の如き瞬間々々の音にアクセントを要するものには使用すべからざるものなのである。此の謬れる考へは如何にして起こつたかと云ふに、夫れは平均音階の有鍵樂器が發達したといふことゝ、バッハ以後の作品が何れも遊戲的な機械的な音の輕い味を賞美するものであつたことゝ、作曲家自身の精神生活が單調であつて、複雜な內容も矛盾も有して居らなかつたことゝ、次には和聲を音樂の要素とする以上、旋律も同一步調を以つて進まなけない爲め小節にアクセントを附し拍子を單純にし揃ひ易くもなければならなかつたことゝ、最後には樂譜の書き方の關係上幾分樂譜に拍子やアクセントを制約せられねばならなかつた事等に起因して居るのである。眞の意味のアクセントと拍子は、ダンス（Dance）マーチ（March）ベルスーズ（Berceuse 子守歌）セレナード（Serenade）の類ひの單純な內容のものを除き、人間の複雜な心の動きの如く刹那刹那に轉開して行く複雜微妙なものでなければならない。即ち在來の音樂の拍子を超越した刹那拍子とも無限拍子とも云ふべきもので、形式一遍の小節の如きもの〻必要を認めないやうなものでなければならない。而して其の刹那々々の拍子やアクセントを通じて行く一曲としての全體のトーンと、一樂章としてのトーンと、一フレーズ（Phrase 樂節）としてのトーンとが非常に透徹した意識を以つて統一されて居なければならないのである。畢竟眞の拍子とアクセントは魂に最も忠實な無形式な自由な何等從來の概念的拍子に囚はれない旋律の一要素として、其の內容を肉づけて行くものに外ならない。もう一層詮じ詰めて見れば拍子といふが如き判然としたものは無くなり、有機的な全體としての、其の部分的にも統一された、一のアクセントの流れ

が殘るのみである。旋律は此のアクセントの流れと同一體であつて單一不可分のものである。否な同一體といふより寧ろ旋律たる言葉の中に既にアクセントなるものが含まれて居なければならないのである。要するに眞のアクセントと拍子と云ふものは從來の音樂のアクセントや拍子と異なり無小節のものであつて刹那々々に無限に有機的に轉開して行くものと言はなければならない。

次に和聲(Harmony)は旋律(Melody)の如く重大なるものであらうかといふに、論者は然らずと答ふることを躊躇しないものである。和聲は理智的なものであつて繪畫の陰影の如きものである故に、洋畫の如き作品を作る場合には必要であらうが日本畫の如き或ひは近代の洋畫の一部のものの如き作品を作る場合には不必要であると思ふのである。殊に水彩畫南畫の如き或ひは近代の洋畫の巨匠のデッサン(Dessin)の如き作品を作る場合には和聲は寧ろ妨害を爲す邪魔物になつて來るのである。和聲は音樂の内容を決して豐富にするものではなく、或場合、唯音の味を補ふものに過ぎない。從來の音樂に於いては作品が内容貧弱な和聲を附して内容のあるかの如く裝ほうとしたものが著しく多い。甚だしきに至つては水彩畫や淡彩畫に等しいヴアイオリン曲に粗雜な平均音階の樂器の伴奏を附するが如き滑稽な眞似を敢てし乍ら、作者も許し人も許して居るものであるからここに至つては全く批評の餘地が無い。ヴアイオリン曲に斯かる愚劣な伴奏を附するが如きは、從來の作曲家が殆どすべて平均音階の樂器の演奏者であつて、ヴアイオリンなる樂器や眞の微妙な有機的(固定音階的に非ざる旋律を理解しなかつた所より起ることである。ヴアイオリン音樂は何處までも天分有り且つ極めて反省的な人にのみ創造されるものである。然らば從來のヴアイオリン演奏者の作曲は眞のヴアイオリンの使命を果したものであるかと云ふに決してさうではない。パガニニ(Nichlo Paganini 1784—1840)にしてもサラサーテ(Pablo Martin Melitón Sarasate 1844—1908)にしてもエルンスト(HeinrichErnst 1814—1865)にしても總べてヴアイオリンを外面的に技巧的に解釋して居るに止まつてゐる。

其の伴奏に至つては從來のヴアイオリン曲に伴奏の附してある關係上、唯無反省に偶然的に持つて行つて取つて付けたに過ぎない。其の伴奏が甚だ幼稚であつて從來の作曲家の模倣であり、旋律と全然無關係であることは云ふまでもない。ヴイウータン(Henri Vieuxtemps 1820—1881)は彼等の群を一歩拔きんでて眞の旋律を創造して居たが、幾分バツハ以後の音樂の惡影響を脱して居ない所があり、妥協的に無意味な伴奏を附して惜しまなかつた。

要するに和聲を隨喜渇仰して無反省に應用するといふことは、恰も日本の近代の淺薄な畫家達が日本畫の生きた獨特の旋律とも云ふべき線を忘れ果てゝ、陰影を附することに甘んじて居るが如きと餘り大差ない。ゴツホ(Vincent van Gogh [illegible]—[illegible])の如きは日本畫の線が陰影以上に光彩あるものたることを知つて、盛んに輪廓を線で描い

て居るではないか。西洋の音樂もゴッホの如く陰影以上の線、四方和聲以上の旋律を見出す時が來なければ論ずる價値が無い。和聲の發達した動機を見るに、夫れは兒童が好奇心を以つ一聲を出してみ乍ら、面白がつて色々な細工をしてみるが如き簡單にして遊戯的なものである。從つて和聲は音樂の内容に關係したものではないのである。斯かる遊戯的興味中心の遊戯が不知不識の間に或一定の秩序を造つてしまつた。其の一定の秩序を論じたものが和聲學である。此の和聲學が後人の音樂の常識となり、遂には本能的と思はれる程の勢力を占むるに至つたのである。此の和聲學が音樂を涸渇せしめ生命の無い偏したものにしたことは如何ばかりであらう。此の和聲學は封建時代の舊道徳程の價値もないものであり、生きた音樂を去勢し殺伐ならしむる安逸遊戯以外の何物でもないのである。幸ひにして近代に至りフランクを始めスクリアビンやエルガーの如き人が出て、從來の和聲學を根底より覆へし、和聲の本流を示して現れたことは音樂史上大いに記念すべきことである。

次に和聲とは如何なるものであるかといふことに就いて論じてみよう。和聲は結局旋律を演繹して、其の音を合はせたものであつて、旋律と共に動的に有機的音階（固定的音階に非ずして瞬間瞬間に音程の變じて行く音階）を辿つて行くものである故に、ピアノの如き平均音階の樂器では絶對に出し得ないものである。完全な和聲は最も天分ある世界的演奏家の絃樂四重奏等によつても聽き難いものである。和聲の中、協和音の正確なるものを知るのは易いが、不協和音の正確なものを知るのは殆ど神中の神事である。樂理に於ける和聲は振動數より割出して計算されたもので至極簡單であるが、事實に於ける和聲は左樣なものではない。1と5の如きは無論「完全五度」でなければならないが、2と6、又は3と7、又は1と4の如く樂理上「完全五度」と稱せられねばならない重音は旋律の進行に伴つて音程を變ずる爲め、絶對に「完全五度」とならないのである。此の場合、夫れ等の音を強ひて「完全五度」にすれば、それは樂理より割出した音となり音の有機的生命を沒することになるのであつて、結局「完全五度」でない方が音樂の實在性を確實にするのである。「完全四度」にしても「完全三度」にしても、又は「完全六度」「完全七度」にしても、其の他增減長短を論ぜず何度にしても總べて樂理より割出された如き音は出し得ないのであつて旋律の運行に順應して微妙に變動して行くものである。從つて眞の和聲は餘程の天分を持ち旋律的にも和聲的にも修練を積んだ者でなくては出し得ないことになつて來るのである。それ故、殆ど總べてのオーケストラの和聲は完全でないのが當然であつて、マンドリン（Mandoline）オーケストラの如き平均音階の和聲が寧ろ眞の和聲を毀すものであるのは云ふまでもない。以上の所論に依つて和聲は旋律を演繹して出るものである限り、旋律に附隨すべきものであり、音樂の内容に關係するものではなく、音の味を豐富にするものに外ならない。卽ちヴァイオリン曲やセロ曲の如き水彩畫や淡彩畫に等し

しいものには和聲は殆と不必要であつて、寧ろそれ等を毀する場合が多い。次に眞の和聲は旋律と共に動的に有機的音階を辿つて行くものである以上、ピアノの如き平均音階の樂器では絶對に出し得ない。又眞の和聲は原理に於ける、振動數より割出した和聲とも全然趣を異にするものである。從つて充分の天分と教養ある人にのみ出し得るものなる事が明瞭になつたであらう。

扨て和聲に就いて少しく述べたいのは、和聲が旋律より出發したものであり味本位のものであつて、意味内容の世界には觸れにくいと言つたが、果して和聲が味の世界に何處までも終始するかといふことである。眞の和聲が平均音階的な機械的なものでない限り、それ等の和聲が一の統一を以つて樂曲を作る際は、其の曲は和聲を通して一の旋律を暗示し意味内容の世界を表示するものとなることは疑ふまでもないことである。但し複雜なる和聲は偶然の効果多く、正確な和聲を出すことが困難であり、且つ微妙な刹那刹那のアクセントや拍子を以つて進むことが殆ど不可能であるが故に、旋律程自由に有機的に思ふが儘に効果を擧げることが出來ない。但し旋律よりも音の瞬間的効果を與へることが出來る。併し斯かる音の瞬間的の効果の如きは藝術上最終のものとすべき性質のものでない故に、大局より考へれば眞の旋律は眞の和聲より遙かに藝術の眞諦に觸れ易い特質と可能性を有して居るのである。

バッハ以後の惡影響を受けた音樂は以上述べた如く眞の旋律も眞の有機的和聲も投げ捨て、最も杜撰な機械的旋律や和聲に據り、然も其の邪道に陷れる點を意識せずに進んで居るのである。

論者は再びバッハ以前に歸れ、而して最も眞劍な純粹な態度を以つて、人類の精神の根底に潜在する微妙複雜なる音樂以前の世界に觸れよ、と敢て言ふ者である。科學の進歩と共に藝術は神話的精神を失ふに從り、彫刻は解剖學に支配され、繪畫は色の科學となり、音樂は音の科學となるに至つた。繪畫にしても音樂にしても科學的に製出されるのであつて、創作しなければならない心や、繪畫以前の世界や、音樂以前の世界は沒却されるに從つたのである。其の結果、不均音階の跋扈となり機械的旋律や機械的和聲や機械的拍子が眞の旋律や眞の和聲や眞の拍子を驅逐し、人類の耳を無慚にも毀してしまつたのである。吾々は又藝術に對する科學者的の態度を根本的に否定し、傳統や因襲を離れて全く白紙の宇宙人となり、大地に足を付けて大空に向つて叫喚し、生き生きとした精神を以つて、吾々の心の中に燃えて居る神話的幻想的精神を養ふべきである。

尚は此の稿を終はるに及んで轉調のことに就いて一言附加したいと思ふ。轉調は作曲の内容如何を示すものである、故に、非常に重大なものである。クラシシズムの作品は單純で轉調も少いが、近代の作品に從れば可成り轉調が多くなつて來る。併し其の轉調が有機的に湧いたものでなく、作意的に爲された場合が多いのである。從つてそれ等の作品に外面的には音の變化があるが、内容的には少しも發展ではな

いのである。斯かる轉調は必ず平均音階的のものであつて、平均音階的和聲が附せられてゐるに限られるのである。眞の意味の轉調は和聲に依つて寧ろ其の微妙さを損はれるものであるが、平均音階的な効果的な轉調は和聲に依つて其の音を曖昧にすることなしには成立しないものである。平均音階の場合に於いてこそ、轉調した場合も轉調したといふ意識なしに鍵盤を辿つて行けばよいのであるが、聲樂やヴァイオリン等では、其の場合非常に細密な注意と明確な意識とを以つて轉入して行つた新しい調子を演奏しなければならないのである。斯かる聲樂やヴァイオリン曲に於ける轉調の苦心は殆ど總べての聲樂家やヴァイオリニストにすら理解せられない點であつて、ピアニスト等には全然理解し得ない點である。簡單な例を擧げてみれば、ハ調からト調に轉調して行つて3 2 1と奏く場合（ヴァイオリンに於て）、多くのピアニストはハ調の7 6 5と云ふ音もト調の3 2 1と云ふ音も同一に思ふであらうが、眞のヴァイオリニストや聲樂家は其の間に非常な差別を立て幾分音程を變更してしまふ筈である。又變ロ調で2 3 4 3 2と演奏し後に變ホ調に轉調して6 7 1 7 6と演奏する場合、樂譜面やピアノに於ては同一音であらうが、事實は非常な差を見出すのである。變ロ調の3 4は變ホ調の7 1より幾分低い筈である。斯く論じ來れば、轉調した場合には、新しく轉入した音階を意識せずに轉入前の音階で讀み續けるが如き杜撰な振舞は到底出來なくなる。從つて轉調の場合は必ず轉調を意識し、新しく轉入した調子の音階で樂譜を讀まなければならないのである。轉調のことに關しては尚云々すべきことが多くあるが、專門家にすら難解である故、これ以上詳しくは論じまい。要するにバッハ以後の音樂の惡影響の爲め、眞の微妙な轉調をするものは一人としてなく、作意的に外面的に音を複雜にする類ひの轉調のみが行はれ來たつたが、斯かる轉調は須らく絕滅すべきものである。バッハ以前に歸り、最も眞劍な純粹な態度を以つて、眞の意味に於ける音樂の創作に沒頭するならば、軈て作者の精神生活が圓轉滑脫、複雜微妙を極めるに從つて、自づと作品が複雜微妙な醍醐典雅なものとなり、轉調躍りなき中に大なるトーンの有るものを創作し得るやうになるであらう。

以上述べた所を要約すればバッハ以後の音樂が意味内容即ち音樂以前の世界を次第に遠ざかり、平均音階的和聲に趨り、音樂の生命とも爲すべき眞の旋律を離れ、徒らに科學的に傾き、音樂なる藝術にも非ざる、而も科學にも非ざる中間的なるものとなるに至つたのであるが、吾々は此の場合大いに反省し、バッハ以前の白紙の世界に歸り、最も眞劍な純粹な態度を以つて、人類の精神の根底に潜在する音樂以前の世界に觸れた眞の音樂を創作しなければならないのである。

以上の所論の中簡單に過ぎて不備と思はれる點も有るが、餘りに專門的に流れ興味を殺く畏れがあり、且つ古來の幾多の作品を擧げ事實に就いて說明しなければならないのであるが、筆紙を以つてしては說明し難い故、これを以つて擱くことにする。

（終）

内容見本進呈

全集

改造社

ボヘーム（マーガー）

第十四巻 ステラダラス（プローチー） 譯者未定

改譯 ナナ（ゾラ） 譯者未定

第十五巻 ゼンダ城の虜（ホープ） 菊池寛譯

第十六巻 道樂息子（ケーン） 秦豐吉譯

第十七巻 獨逸名作（原書未定） 櫻井忠溫譯

第十八巻 陸戰小說（原書未定）

ルコック探偵（ガボリオ） 森下雨村譯

第三十二巻 金剛石その他（フレッチャー） 譯者未定

第三十三巻 紅はこべ黨（オルチー） 和氣律次郎譯

第三十四巻 地下鐵サム（マッカレー） 佐藤春夫譯

第三十五巻 支那名作時代小說（原書未定） 譯者未定

第三十六巻 未定

豫約規定

體裁 菊半裁、八ポイント組、一冊平均五百頁以上。クロース金文字入極上製

會費 毎月拂、一冊五拾錢。一時拂拾七圓五拾錢。

頒布方法 全三十六卷、豫約者のみに頒つ。

刊行期日 昭和三年三月より一冊づつを刊行、昭和六年二月を以て完結す。

申込方法 御申込の際申込金として五十錢を御拂込み下さい。これは最後の會費に充當しますから、最初の月の會費は別に御拂込み願ひます。尚申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（一時拂の方は申込金不要）

送本料 會費の外に郵送料として一冊八錢づゝ申受けます。尚ほ書留送附を希望せらるゝ方は別に書留料十錢を御增し下さい。

拂込方法 振替貯金又は爲替でその月の一日までに着金するやう御拂込み下さい。但し郵便切手代用は一割增に願ひます。

締切 三月中旬の豫定

シンクレーアの胃腑

前田河廣一郎

『小説家も、ナポレオン式軍律下の兵隊のやうに、やはり胃腑で進むのである。そこで（シンクレーアが『斷食療法』（ゼ・ファスティング・キュウア）をあらはした年に）もう一つの傑作――『愛の巡禮』が書かれたのである。』これは、最近『シンクレーア評傳』を著はしたアメリカの新進批評家フロイド・デルが、アプトン・シンクレーアの生理的方面に觸れた言葉である。

一生涯、茶、珈琲、煙草等の刺戟物を攝らず、酒精分は彼れの父親の慘めな前例から意識的にさへ觸れようとしなかつたシンクレーア氏にも、青年時代から『ジャングル』を著はした頃、それから彼れの受難期を通じての唯一つの弱點があつた。それは貪食家パンタグレーエルとは反對の意味に於て發見された『胃と腸』とであつた。物を書いてゐて、頭が鈍くなり意識が朦朧として來ると、彼は自分の胃腸を呪ふ癖があつた。永い間その呪咀は單なる呪咀に止まつてゐたが、終ひに思ひ切つて、その根本原因を探ぐりあてた。そしてあらゆる療法を試みた揚句、やつと『完全なる健康への秘鑰』を搜がしあてたのは、『自然の安全瓣、疾患に對する自動的保護法』としての斷食療法であつた。私が曾て腎臟病で惱んでゐたとき、シンクレーア氏から見舞金といつしよに贈られたのが、やはり『斷食療法』一册であつた。この彼れの著書には如何にしてシンクレーアが執筆中に、必要以上の胃腑の存在の發見に苦しむだが、そしてそれを切脱けるためにどんな方法を竭したか、斷食療法とはどんなことであるかが、具に書かれてあつて、そのうちでも面白いエピソードとして注意を惹くのは、こんな事柄である。

――シンクレーア氏は三日間斷食してゐて、十五哩の長距離散歩に出かけた。歸へると夕刊にメッシナの大地震の記事が出てゐて、新聞記者は避難民が七十二時間も一粒の食もなくて凌いだと慄然として書いてゐたといふのである。それを讀んでゐた彼も亦七十二時間食物なしで過ごしたのである。そこで彼は云つてゐる。『食物に對して感ずる飢ゑは半ば飢ゑてゐると考へること』であると。

かうして、私の知つてゐる範圍では、シンクレーア氏は、いつも仕事をする前には斷食をはじめるのである。尤も長期の一と月とか一ケ月半とかいふのではなしに。その間彼は主として小量の果物と多量の水を攝取し、常に灌腸を怠らない。そしてどしどし戸外運動（得意なのはテニスである）や屋外散歩を試みる。しかもさうすることによつて、普通人が恐怖をもつて想像するやうに、空腹を感ずるとか、眩暈を起こすといふやうな斷食療法初期の現象は起こらず、平氣で十五時間も十六時間もぶつ續けて執筆し思索し讀書し得るものである。もしシンクレーア氏の讀者が、彼れの明晰な文章と些末なデテールに對するまでの關心に不思議を抱くとすれば、それを解く謎はかういふ肉體的な方面により多く横はつてゐるのを知るだらう。バルザックの小説に珈琲があるとすれば、シンクレーアの小説には空つぽな、衛生的に空虚にされた胃腑があるのだ。

國際映畫戰

城戸四郎

映畫の社會的地位

等しく人間を以て組成する國にありても、君主國もあれば、共和國もあり、さては露國の如き極端なる左傾國もある。而も各々その主義主張を他の何れよりも正當なりとなして滿足もし誇りもし、更に是を主張せんとして居る。

昨日は笑つて相親しみあつて居た人が、今日はもう相反いてゐる。朝に悲しみを分ちて泣いて居たのに夕には互に嘲罵しあつて居る。稀有の傑物として、世の渇仰の的となつて居た人が忽然として醜事に依りて、葬られて了ふ。世に在りては赤貧洗ふが如きも、一度逝きて、名聲をはせる。

善者榮えて惡者亡びる如くにして、而も又惡者威を逞うして、善者虐げらるゝ如く見ゆ。單純な人は元より、現代に於て相當教育を受けたる人々にして、自己の得たる智識を以て何よく此の世の中を解することは能はず、呆然としてその歸趨を知らず、或者は宗教に安住の地を求め、或者は哲學に解決を求む。又或者は此の不可解なることそ、即ち眞の世の中にして、かくて始めて人生に深き意義を有し、人間に發達を生ずるものなりと悟れるが如くに云ふ。

何れにもせよ此の複雜なる世態、千變止なき人情思想を如何にして中樞を誤らず健實に家庭的に、國家的に、指導感化するために各國が是が爲めに拂ふ所の費用及犠牲、並に注意力は、其の良き結果を得ると否とに拘らず、古今東西皆に甚大なることは吾々の想像の外である。而して其具體化されたるもの學校、軍隊、病院、養育院、感化院、監獄其他各種の教化機關、及宗教團體等枚擧の煩に堪へぬ位である。

然しこれと同時に如實に世態人情を示して、一般民衆に對して世に處するの態度或ひは解決を知らしめ、又は解決を與へぬ迄も世に處する心の用意を與ふるものとして、現時社界に重大たる地位を占むるも

のに、新聞、雜誌、演劇、映畫の存在することを否定することは出來ぬ。否寧ろ人間本來の趣味性を通して無意識の間に其の心に喰ひ入つて深き感銘を齎し、やがては各人の性格の一部をも組成するに至るといふ點に於ては、或ひは現時社會に存在する何物よりも強き力を持つて居るかも知れぬ。而して今映畫に就きて是を見るに、その發明されて近々三十年程にならざるにも拘らず、大河の溢るゝが如く今や世界各國の隅々迄も利用さるゝに至り、映畫を通じて各種各樣の世態、人情、思想が強調さるゝに至つたことは、吾人の驚嘆に値する。殊に映畫の愛好者は全世界を通じて數に於て、未だ思想が充分固りきらぬ若い人々所謂セコンド、ジエネーレションが大部分を占めて居る。故に此の若い人々に深き感銘を與ふる映畫の使命、責任は實に社會的に又國家的に重且大なるものであつて、各國政府は勿論一般識者階級の注目の焦點となつたのも、決して理由なきものではない、自分は玆に現時社會に於て映畫が只單に娯樂品として遇せらるゝ許りでなく社會政策上決して等閑に附せらるべきものでない、從つて世界各國が如何に映畫の利用發展に就きて熱狂し競爭して居るかを述べ、併せて我邦當局及有識階級が無關心で居るかを述べて其の猛省を促したいと思ふ。

映畫發展の原因

一八三二年白國のプリユツセル人プラトウ及ヴヰンナ人シユタインフエルといふ人が殆んど同時にストロスコープといふものを發明して以來幾多の人々により工夫を重ねられ（是等の發明經過に就きては他日述ぶる機會もあらうから略す）明治二十八年一八九五年米國の發明王トーマス、エヂソンに依りて完成されたものであつて、以來僅かに三十年程であるが、映畫が如何に今日の隆盛を來し、又將來益々發展する希望を抱かしむるに至つたかといふ原因を求めて見るに、

一、劇の映畫化の成功

從來の劇は主として舞臺劇に止まつて居つたが、活動寫眞の發明さるるに及びて劇を映畫化さるゝことになつた。その結果は舞臺劇が設備場所等に拘束さるゝ爲め主に俳優の演技及科白に重きを置いて居たが、映畫劇に於ては自然の美景を其儘現實に取り入るゝことが出來、又場面の變化を限りなく加ふることが出來る結果は、人心を感銘せしむることが舞臺劇よりも遙かに適切である、從つて吸引力が偉大である。次ぎに

一、現代生活との適應性

科學の進歩に基く文化生活の發達に伴ひ、一般民衆は、凡ての點に於て金錢、時間共に經濟的に使用せんとして居る。殊に時間經濟といふことに就きては、最も重大視する樣になつて來た。短い人間の一生の間に最も有意義な生活をなさむとし、深く力強く人生を享樂せんとし、博く知識の探求に努めんとするは、今日人々の誰もが要求する所の願ひである。此の點に於て、映畫は現代生活に適應するものである。加之文化の發達は、やがて生存競爭をして益々激烈たらしめ

る。現代人は殆んど活動を以て始終し、全能力を傾けて活動せねばならなくなつた。その反動作用として、慰安を求むる心が高められる樣になる。その點に於ても、映畫は愈々現代生活との適應性の度を深められるに至つたのである。

一、普遍性

映畫は舞臺劇と異り、一度映畫に作成されたる場合は凡ては只僅かに一つのフイルムに收められる。そして何れの時、何れの場所を問はず、容易に運ばれて、人々の前に展開されることが出來る。從つて居ながら世界何れの思想人情も手にとる樣に知ることが出來る、而も映畫は主として具象化されたる一種の綺たるを以て、智能の程度低き人人にも字なぞよりも遙かに容易に理解さるゝものにして、是等の點よりして映畫は普遍性強きものといへる。

映畫の感化力

前述の如く映畫が現代人の生活と交渉が最も密接であり、最も適應せる關係よりして、非常なる發展をなし、今日世界を通じて映畫を見ざるものは、殆んどないと云つてよい位であつて（實は見ない人の割合に多いのは文明國としては日本であるが）映畫常設館の激增しつゝあるのは、今や世界の狀勢である。殊に米國に於て近時頻りに建てられる四五千人も收容出來る劇場は、皆映畫殿堂であつて、舞臺劇場としては到底維持することが困難な有樣になつて來たのである。

我邦の常設館は、活動寫眞が輸入されて僅に僅かな歳月を經たるに過ぎないが、既に壹千を越えつつあり、而して臨時に劇場又は寄席を使用する場合をも加ふるときは實に夥しき數に上るのである。そして大正十五年一月より昭和元年十二月迄（諒闇休業五日間を除き）の一年間の有料觀覽者は當局の調べによると、一億五千三百七十三萬餘人（內小人は三千五百八十萬人）更に是に無料觀覽者は三千六十六萬餘人といふ多數に上るのである。而して昭和貳年度の數は未だ調査發表を得ざるを以て、知るを得ないが、自分の關係せる松竹キネマの成績より測定しても、一割は增加したといふことが出來よう。

更に商業會議所の調べによると、米國に於ては壹萬五千を超へ、自國映畫製作の隆盛ならざる英國でさへ四千を突破して居り、獨逸是に準じ、佛蘭西は約三千であるといふことである。故にもし世界各國人の映畫觀覽者の數（有料、無料）を、算せんとする場合には、到底嚴密なる測定を許されぬ程度の多數に上るであらう。

加之文化の發達に伴ひ、人は娯樂を求め是によりて自己の元氣の更新をなし、以て生存競爭の中に突進するといふ風潮が、益々高められるに至り、娯樂慰安は單なる贅澤物ではなく、今日人間生活上緊需必要缺く可からざる必需的のものとなつて終つたのである。それに元來人は自由を愛するものであつて許さるゝ場合は常に自己の身を自由なる生活に置かむとする傾向は、古來より人の潜在的欲望である。只社會共存の組織の圓滑を達成せしむる爲めに生活上種々の拘束を受ける

ことを甘受して居るものである。故に動もすればその生活に倦怠を覺ゆる樣な場合が屢々生ずる。學校に於て教育さるゝものも時に、倦怠をおぼえてその感受性が鈍る場合があるのである。

然るに映畫を見る場合には殆んど何等の拘束を受けず、むしろ映畫を通して、各自活潑なる想像力や趣味性が活躍し知識欲を滿足し、從つて無意識の間に深き感銘を受け常識を增して行くものであつて、是がやがて各自の個性に迄影響して行くものである。殊に前述の如く算ふること能はざる程度の多數の人々に觀覽さるゝものなるが故に、場合によりて自ら時代の思想を形成することもあるといふことは、決して架空の言でもなく、映畫の感化力の大なる實に驚異に價するものである。

米國の着眼

米國は流石に敏感である、映畫の如何に感化力の大なる又普遍性の強きを察知し、映畫に依りて經濟的にも利益を得、思想的にも米國の主義主張を示して、全世界をしてアメリカナイズせんとして、莫大なる資本を傾けて遠大なる希望の下に突進した。そして娛樂、宣傳、感化方面に映畫を利用することを怠らなかつた。米國政府も具眼の人多き爲めか、極力是が援助をなすことを怠らなかつた。例へば軍隊を進むで促し、軍艦等も是が利用に委した。(日本では理由の如何を問はず、軍隊を映畫製作に利用し俳優監督の指揮の下に置くことは即ち軍人の體面に關はるといふ議論が陸軍の一部に上つたと傳へられて居る)果せる哉米國映畫は非常な勢を以て世界に發展した。歐洲大戰の時直に映畫を利用して、軍人の如何に勇壯にして名譽なるかを國內に知らしめた。若い米國民の血は躍つた。國民は擧つて軍人に對して最高の敬意を表し、米國軍人は歐洲戰に於て重大なる地步を占めた。

かくて歐洲戰後の米國映畫は、益々その勢に乘じて富を注いで映畫製作に努め、是を各國に向つて發表した。スケールの雄大、出場人員の多數、驚くばかり自由に使用した。我邦映畫の大物を作るに僅かに四、五萬圓を使つただけでも會社を擧げて宣傳し居る際に、米國は一映畫に參百萬圓程度を要する映畫をどし〳〵發表した。一映畫の原版より我邦に於ては、僅か拾本位燒增すれば充分事足るのに、米國にては、參百本も四百本も燒增しをなしても未だ不足を感ずる位であつた。

忽ちにして映畫は米國輸出品中五指を數ふる內に入る位の高位に達した。露國さては獨逸國よりも續々と名優が招かれて、米國に渡つて行つた。他國民が米國の資本力に驅使されて、一生懸命に米國の富を築き上げるのに努力した。全世界に於ける映畫の約九割程度は、米國映畫となつた。支那あたりは本邦映畫を使ひそうなものであるが、假令古くとも又風俗人情が本邦よりも遙かに異つて居ても、米國映畫を歡迎した。米國政府は勢に乘じ商務省に専門に映畫に關する調査をなす

る局を設けて、試驗の調査は元より映畫製作者に對し、各國より來る報告を示して、指導し内に製作、配給の圓滑を計り、外に向つては一意米國映畫の發展を奨勵し、米國映畫を以て各國を化せんとせる許りではなく、米國映畫を通じて、世界の人々に對し、米國の民情は元より富の程度、生活樣式等凡ての點に亙つて驚きと、敬意と又親しみとを求めんとした。が果して漸次その希望は遂行され樣とした。米國民は映畫により戰はずして全世界を風靡したと豪語した。それは確に事實であつたのである、而して各國は米國映畫の勢の餘り大なるに驚いたのである。

米國映畫に對する各國の防禦戰

かく大なる富の力と熱とを以て、全世界に君臨せんとするや、各國映畫製作者は等しく驚かざるを得ず、各國政府も亦是に同じて防禦に努めたのである。只我國政府は泰然として貧乏揺ぎもしなかつた。その理由は映畫に對する智識と興味とが乏しかつたからである。

英國

は由來映畫事業は他の事業に比して餘り活氣を呈して居らなかつたので、過半は米國映畫の供給を受けて居たのである。大戰後は殊に著しく振はず、その機に乘じて米國映畫は非常な勢を以て輸入されるに至つたので、英國民は擧つて英國映畫發展の方法を講じ、税金の撤廢、政府の補助並に撮影所の建設等種々なる方法により、政府と民間と提携して米國映畫の輸入を防止せんと策して居る。而して偶々「映畫により各般に亙つて民心に及ぼす影響の大なることは、恰も新聞と少しも異る所がない、而して今假りに英國に發行さるゝ新聞の過半が外國人の經營に移さるゝときは、英國民は果して默して居るであらうか、然も映畫は殆んど大部分が他國品で、故に此映畫によりて民心に及ぼす影響を考ふるときは實に寒心にたへぬ。何故是が對策を講ぜぬか」といふ樣な趣旨の意見が發表されて輿論を喚起し、製作者に非常な有利な結果を齎らしつゝあつて、最近獨逸の例に從ひ割當法案が議會を通過せんとし、今や國を擧げて是が對策を講究して居り、英國に於ける映畫熱は非常な勢を以て擡頭して來たのである。又最近政府が補助金を出す樣になつたと聞いて居る（是は確實なる材料を得ぬために眞僞の程は解らぬが參考に書いて置く）

獨逸

かういふことには獨逸は常に周到なものであつて、一九二五年以來自國内に封切られる映畫の外國物と自國物との比率は一對一といふことになりて今日に至る。その間更に一層有利な補助を得んと努力せるもの〻如きも未だその實現を見ぬのである。

佛蘭西

輸入映畫（主として米國映畫）に對しては高率の關税を課して自國映畫の保護に努め、最近不燃性プリントの使用を獎じて居る故、間接的に米國映畫を排斥した結果となつて居る。

伊太利

世界的人氣男ムツソリーニ氏は非常なる國産奬勵者であつて商工業殿堂等凡てに亙つて激勵し映畫に於ても盛んに國産映畫の奬勵をなし、莫大な金を補助し、自らも映畫上の人物たることを進んで引き受け、尚外國映畫に對しては一割の値引を强要する等萬般抜かりなく補助し居るを以て映畫製作者も力を得て非常な勢を以て努めて居る。

露國

國内統一整理に多忙なるためもあらう。大體興行的映畫は充分ならざるも、さして苦痛を感ぜぬものゝ如く、政府はむしろ主義宣傳の爲めには映畫を利用することに非常に力を入れて、最近も政府の手により映畫學校を作りて、盛んに技師俳優監督等を教育しつゝある。

以上の如く各國等しく米國映畫の使用を政策的に防ぎたる爲め、米國映畫は多少苦境に陥りしも、元より今日迄に得たる優越なる地位、莫大なる資産は、依然米國映畫をして第一位を占めしむるのみならず、常にその機をねらつて、米國映畫黄金の時代を再び獲得せんとしてるのである。

各國の映畫の傾向

而して各國に於て製作さるゝ映畫の内容的傾向を見るに、自らその國風の一端は隠然として表はれ居る。是はその國風、人情が、自ら映畫に表はるゝ場合もあらうが、前述の如く各國が、努めて其國を表はす樣苦心して居る結果に外ならぬ。殊に宗教に對しては冒瀆を加へざる樣に注意せるは各國の等しく施行せる所で米國映畫なぞは最も著しい。

而して各國映畫の内容並に表現法を調べて見るに、

米國映畫

誰もが、米國映畫を見て第一に感ずることは、規模が大であつて、如何にも金をおしむ所なく製作されてることである。從つて場面が常に壯重、華麗である、晴れやかである。そして目的は米國の思想、風俗、富の程度を全世界に向つて宣傳することと、經濟的に利益を得ることの二つよりない。殊にリターン、ファースト(利益)といふことま製作者凡てのモツトーとなつて居る。而して娯樂としては元より宣傳であらうと教化であらうと、苟も映畫は理屈であつてはならぬ。映畫は常に人を樂しましめねばならぬ、趣味を滿足せしめねばならぬ、興味を呼び起させねばならぬ、人をして人生の暗黒面を見さしてはならぬ、といふことを主義として製作される。故に映畫から受ける印象は常に晴れやかな笑でなければならぬ、人生の歡喜でなければならぬ、かくの如き映畫こそ非常な人氣を博し從つて利益も得ることが出來るのだと米國製作者は信じもし主張もしてる。故に米國映畫は常に新鮮であり、飛躍がある。殊に米國政府は、映畫は常にハツピー、エンヂングでなければならぬといふことを、厳重に施行して居ること故、映畫をして益々晴れやかなものとなすことが出來る。米國映畫は藝術的

に於ては頗る欠けて居るが（製作者は藝術的ならざることを恥と心得て居らぬ）民心に深き感銘を與ふる點に於ては、却つて大であるといふ現狀である。そして觀者は必ず溌溂たる才智に驚かされ、或は新らしき思想流行を教へられ、人生觀に晴れやかさを與へられるために米國映畫に執着を感ずる樣になる、是米國映畫の最も力強き所にして製作態度の悧巧な所である。

獨逸映畫

獨逸は由來國民の性質が非常に理屈張つて居て、又哲學的である。從つて藝術的にかなり、深刻な映畫を作つて見たり、又未來派だとか表現派だといつた映畫の製作を試むる等、動もすると一般性を失ひ、又は特殊の人々にのみ理解される樣なものを製作して撮影法は頗る巧妙で敬服に値するが、行き方が米國と全然反對で、むしろ人生の暗い方面を餘りに深刻に見せる傾あるため甚だしく興業價値を減殺して居る。故に獨逸映畫は主として輸出され難き狀態である。近時稍一般性ある興業價値を伴ふ映畫が製作さるゝに至つては來たが、依然人生の深刻なる處をまざ〳〵と表現する域を脫せぬために（藝術的なることは確かであるが）觀者をして暗い氣持ちを釀さしむるに止まる故、今後の製作態度を餘程かへぬと、只單に國家の政策によりて、僅かに自國內に供給し得るに止まつて米國映畫と覇を爭ふなぞといふことは、當に思ひもよらぬことになるのであらう。

佛國及伊國映畫

佛蘭西伊太利の映畫は、米國獨逸の映畫に比して甚だしく、見劣りのするものであつて、獨逸の如く藝術味も餘りなく、又米國映畫の如く才智と元氣の充滿せる處は少しも認むることが出來ぬ。從つてひどく退屈なものである。兩者とも時々有名な文藝作品の映畫化を企てゝは、多少の氣勢を揚げては居るが、凡ての點に於て熱に乏しく、觀者をして充分感銘せしむる程度に至らないのである。伊太利の如き時々大規模の下に映畫を製作する場合もあるが、筋がひどく杜撰で、扱ひ方又拙劣にして、吾々が嘆賞する場合が屢々ある。

露國映畫

露國の映畫は殆んど市場に表はれず、殊に政綱の宣傳映畫に力を注ぎ居る樣であるが、宣傳を露骨に表はして、觀者をして甚だしく不愉快に感ぜしむるといふことであるから、是亦さしたる希望を求むることが出來ぬであらう。

要之目下の映畫界は、米國映畫に殆んど壓倒されて、他國に向つて輸出するなぞは容易のことに非ずして、只僅かに各自、國家の保護政策によりて米國映畫と對立して、自國內の配給をなしつゝあるといふに過ぎず只僅かに期待を持ち得るものは獨逸と伊太利である。前者は國民が非常に學理的で、そして、着實であるが故に今後映畫を一般性化することを研究して、その工夫を加ふるに至れば、或は豫想せざる發展を來すやも知れぬ。後者には新快兒ムッソリーニあるを以て、吾々の意表に出づる樣な計畫を企つやも知れず、此點吾々の期待をつ

なく所以であつて、もしそれ外國の如きに在りては遙かに下位にあるを以て暫く是を問はざるに若かず而して轉つて本邦の映畫に就きて述べんに。

本邦映畫の現況（苦境時代より全盛時代迄）

本邦に外國映畫が紹介され是に誘發されて本邦映畫を製作するに至つたのは實に近々に屬するものであるが、その進歩發展の著しき驚く許りである。嘗ては舞臺劇その儘を映畫化し、從つて科白劇の域を脫しなかつたものが、說明劇に移つて今日に至つた跡を顧みるときは、實に宵壤の差あるを知る。

凡そ化粧品たると織物たるとを問はず、自國品と外國品とは品質、値段等凡ゆる點に於て常に激しき競爭を續けてその國の輸出入額に高低を示して居るものであるが、その競爭は比較的外部からは容易に認識されぬものである。然るに映畫に於ては筋の內容に撮影技巧に設備に最大の努力をなし、而も華々しき宣傳に智能を傾け然して後常設館により軒を並べてその輸贏を決するのであるから、實に堂々と眼覺ましきことであつて、恐らく映畫位その競爭の明瞭なることはあるまい。

演劇に於ては、場所といふものに拘束されるために、外國演劇と競爭する術もなく、文藝的作品と雖も、映畫に依る以外は、明瞭なる競爭をなすことは全然不可能である而して今本邦映畫が今日の隆盛を來すに至つた、經路を辿り見るなに、その間莫大なる犧牲を拂つたことを知る。抑々外國映畫が本邦に輸入さるゝに至るや、我國の人々は多年親しむで居た娛樂物に接する如く、驚きの目を瞠りつゝ集まつたのである。ついで本邦映畫の製作が企てらるゝに至つたが、その撮影法演出法の幼稚なるために、到底競爭する域に達せず。僅かに氣息を續けて來たのである。爾來映畫製作者は絕えず輸入される外國映畫を範となして多大の犧牲を拂ひつゝ研究を續けて彼の長を捉ふことに努力して行つたのであつた。震災二年程前に說明を以て科白を廢する映畫劇が製作さるゝに至つて、俄然本邦映畫は順潮に向ふことを得た。然し尙外國映畫には到底對抗する氣力もなく、依然その下位に屈服するより外はなかつたのである。加ふるに米國より時々發表さるゝ大作品に對して譯もなく粉碎されて終つたのである。

此頃より漸く國產映畫の獎勵の聲が、製作者側に唱へられる樣になつた。

間もなく關東の大震災により本邦經濟界は混亂狀態に陷つた。然るに不思議なことに東京市民は震災による傷手の未た癒えざるに、反動作用として、努めて自分が受けた暗い氣持より逃るべく、娛樂慰安を躍つて求めた。映畫は民衆渴望の焦點となつた。本邦の主要なる撮影所が撮影困難に陷れるに乘じ、その機を失せず外國映畫は滔々として輸入され、本邦映畫は立直る暇もなく、外國映畫に壓せられて了つ

た。間もなく移民問題で米國に對する我國の民情が昂騰した際、本邦映畫當業者も擧つて米國映畫排斥を企てた。是もある意味に於ては本邦映畫が米國映畫に壓倒されつゝあつたために、此際國民の愛國心に訴へて擡頭せんとする一つの企ともいふことが出來よう。然るに米國映畫ならでは、本邦映畫ファンは滿足するとが出來なかつた。米國映畫排斥の協定は破れたのである。依然本邦映畫は壓迫を感じつゝ努力を續けて行かねばならなかつた。而も政府は國産奨勵といふことを常に主張しながら映畫に就きては袖手傍觀といふよりも、寧ろ如何に本邦映畫が苦境に陷つて居るかといふを全然理解できぬ狀態であつた。關係當事者は悉く聲を大にして訴へたにも拘らず、依然一笑に附さるゝが如き狀であつて映畫製作者は唇を噛みて努力した。

先づ如何にせば米國映畫を壓倒し得るか、といふことを研究した。獨逸佛蘭西伊太利の映畫の如きは本邦人に味はゝること少くして本邦映畫に取つては既に敵ではなく、只殘る米國映畫のみを、敵ともし、師ともして邁進したのである。

米國映畫は盛んに大作品の宣傳を放つた。本邦映畫製作者は先づ撮影法照明法に就きての研究を最大の努力を以て遂げた。そして大正の末より昭和の始めに亙つて各製作者は期せずして時々大作品を發表することにしたが、如何に大作品と雖も、費用は到底米國映畫に比すべくもない、然し日本人は依然日本人である、誰も好き好んで外國品を見るのではない、本邦映畫に見榮のするものがないからである。然し漸次大作品が發表さるゝに當り、米國映畫を離れて本邦映畫を顧み、同時に多少の好感を持つ様になつて來た、本邦映畫製作者は此時を離さず、米國映畫を壓倒せんと努力したのである。出場人員の多數、セット小道具、衣裳、及各種のロケーションを縱橫無盡にとり入れるが如きは、結局費用の大小に歸着するものなる故、是等を以て競爭するの愚なることを知つて居る故によく日本國民性の麗しき表現、日本獨特の劍による動きの鮮かさ等米國映畫に缺くる所を以て、內容的に觀客を捉へることに努力し、一方米國映畫の新鮮な晴れやかな氣分を映畫全體に漲ぎらすことに努めたため、本邦映畫は俄然擡頭するに至つたのである。然るに米國映畫は日本よりもむしろ他に多くのファンを持つて居る、そして其の大作品により日本以外に充分對價を得てる關係もあるであらう。依然として大作品を續々發表したのであるが、漸次本邦映畫によつて壓迫され勝ちになつて來た。然し米國映畫關係者は一時的現象なりとなして、さして問題にもしなかつたのである。

本邦映畫製作者は米國映畫の大作品を續々發表することは、やがて觀者をして徒らに眼を肥えさすに止まり、曾ては驚きの眼を瞠つて見た者も、次第には是に慣れて、驚かなくなり、遂には眼まぐるしさを覺えて倦怠を感じ、やがてはセットの雄大、出演人員の多數なぞには意を用ひず、內容的に確りしたものを求めんとする傾向を生ずるであらう。その場合には本邦映畫は大作品を發表せる時が米國映畫よりも遙かに遲き爲めに、米國映畫と同等又は多少これ以下の內容であつても

珍らしきこと故多大なるハンデキャップを以て歡迎されるであらうと想像した。そして勇を鼓して是が作成に努力した。果して非常なる勢を以て迎へられ本邦映畫は大正十五年一月より昭和元年末の一年間に於ては大いに米國映畫を壓倒した。而して米國映畫がかくも窮地に陷つて來たことは本邦映畫がよくなつたといふ以外に重大なる原因は米國映畫の大作品亂發で是が却つて米國映畫自體を早く窮地に陷れたのである。

かく本邦映畫の大作品が、よく米國映畫を壓しはしたもの〻、容易に倦かれることは寧ろ米國映畫の大作品よりも早いのである。といふのはいつも大作品で内容其他凡て完璧ならしむといふことは本邦の經濟、設備の狀態では到底不可能で筋の構想其他に於て萬一先きに發表したる映畫より多少見劣りする場合には實際價値の二倍乃至三倍の不評を受け、將來發表する映畫に及ぼす影響は、實に大なるものなのである。故に大作品は製作數を努めて少くし、その間發表する映畫は表現は平易にして、而も内容が確りした深き人生觀を有するものでなければならぬ從つて是からは製作者は深き智識と良き頭を以て製作せねばならぬ。莫大なる費用なぞをかけるのは、抑々末の問題であるといふことになつて來た。

此の事は富の程度に於て米國なぞと劃然と差のある本邦にとりては、實に此上なきよき解決方法である。而して昭和貳年度は大體製作者は右の方寸の元に製作した。果せる哉昭和貳年度より參年にかけて に、完全に米國映畫を壓倒し去つた。實に痛快なことで從來諸國は米國映畫の勢を防ぐために前述の如く諸種の政策を講じた。然るに本邦は政府に些の力を借ることなく、完全に米國映畫を實質上壓倒するに至つたのである。そして既に本邦に支店を有するものは經營困難に陷りて引きあげんとするに至つたそうである。

最近本邦を視察に來朝したパラマウントの撮影所長をして「米國映畫の恐るべきものは日本映畫である」と言はしめたそうであるが、誠に喜ばしいことで只單に映畫製作當事者のみならず、日本國民の痛快とすべきことであらう。

本邦映畫の將來

前述の如く完全に米國映畫を壓倒せる處よりして、直ちに以て安心し得られるであらうか、といふに、苟も寸時にても此くの如き心を抱かむか、本邦映畫は直に米國映畫と地を替へることは火をみるより明かなことである。元來米國映畫は、人情風俗其他萬般類似する點に於ても歐洲諸國の方へは容易に勢を延ばし得るも、本邦は是と異り米國映畫が本邦の都市を除きては、未だ充分なる感銘を以て、迎へられざる有利なる立場にある。故に米國映畫で他日形式内容を改めて、本邦の都市以外にも充分感銘し得る作品を製作し來る時ありとせば、本邦映畫は再び起つ能はざるに至るであらう。

然らば今後如何なる態度を以て進むべきかといふに、解り切つた話

であるか、此の機を失せず、積極的に進むに若くはないのである。本邦内に於ても未だ現在の狀態にて滿足すべきではない。高々一千の常設館を抱擁するのみにて足れりとすべきではない。伊太利の人口及、地積は、遠く本邦に及ばざるは既に人の知る處であるが、倘日常設館約貳千五百を有してゐる位である。故に今後とも充分發展の餘地がある譯である。而して前述の如く米國映畫を本邦映畫により壓倒せりとするも、そは單に本邦映畫市場に於て僅かに壓倒したりとするに過ぎずして、一度一歩外國に踏み入る丶場合に於ては、依然米國映畫の壓迫を受くるものにして、本邦映畫が米國映畫を壓倒するも、要は本邦に於て本邦人に觀賞さる丶ことに依つてのみ實現され得る狀態である。されば屢々本邦映畫が外國に輸出されて、大いに歡迎を受けたと宣傳さる丶も、そは單に米國西海岸の如き本邦移民多き處か又は僅かな特殊の集團によりて迎へられたるを棒大に宣傳され居るに過ぎぬのである。誠に寒心に堪へぬ次第である。

然らば將來絕對に外國に輸出されて市場にて堂々と競爭され得ざるものなるかといふに、自分は決して悲觀すべきものにあらざることを、斷言して憚らぬのである。

如何となれば、近時歐米諸國は擧つて東洋趣味に樂しむで居る、そは歐米諸國の生活樣式にも是を見出し得べく又映畫にも度々發見することが出來る、歐米人は寧ろ努めて東洋の文物を知らむとして居る。故に是を映畫に充分利用し表現する樣考慮する場合には、將來必ずや輸出の道が開拓されて輸出品の重要なるものとなるであらう。

然し從來試みられたる如き姑息な方法を以てしては、到底望み得られざるべく、製作當事者が多少の犧牲を意とせず、歐米人に充分理解出來る樣な、筋の構想をたてねばならぬ。是が將來最も研究を要することであらう。現に今迄輸出されたる映畫の批評を聞くに、常に充分映畫の表現する氣持を理解することが出來ぬ、といふことが一般の批評である。而してよく理解されるものは、人間本來の情である、例へば母性愛、兄弟愛の如き是であるが、隣人の愛、同胞愛の如きに至りては大分見解を異にして居る樣である、そは日本の如く大和民族といふ一つの強い民族精神に統一さる丶のと異りて、雜多の民族の混合によりて、國をなしてる關係上、勢ひ異つた理解を持つといふようになるのであらう。

曾て松竹キネマの乃木將軍の映畫を米國に於て觀せたる時、將軍が聯隊旗を失ひ單身、身命を賭して奪還に行く氣持が、如何にしても理解できぬと云つたさうである。

一方同じく松竹キネマにて製作した時代劇萩寺心中が、最近露國より歸朝された小山内氏の談に依れば、露國の一流常設館に上映されて非常なる好評を博し、他の劇物としての映畫が甦るのみにて、萩寺心中が堂々二ケ月打ち續けられた、といふことは實に喜ばしきことであると同時に、益々輸出の可能性を裏書するものといふことが出來よう。

（但輸出可能なるものは主として時代映畫に限り、現代映畫は樣式が和洋折衷で疊かあつて洋服で坐つてるかと思ふと和服で椅子に腰かけたりすることが、外國人の眼には非常に不調和であつて、紛らはしきのみならず、寧ろ滑稽に見ゆるといふことである故、現代映畫の輸出は仲々に困難なことであらう）

故に是等人情の研究といふことが、將來外國に映畫を輸出する上に、重大なる仕事となつて來るのである。

然し單に製作當事者の努力のみを以ては、到底充分の效果を擧げ得るものに非ずして、政府當局の完全なる理解を必要とするのである。

本邦政府當局の態度

前述の如く映畫が最も進歩せる文化的産物として、全世界に於て注目の焦點となり、政府當局が努めて補助して、映畫を以て單に娛樂品として扱ふ許りでなく、是を利用して民心の作興に努め、更に經濟的には輸出品の主要なるものたらしむ可く注意を怠らず、是が發達を期しつゝあるにも拘らず、獨り本邦政府が實に無關心なることは、驚く許りである。偶々今日は本邦映畫によりて米國其他の映畫を壓倒し得たるを以て、幸とするも、萬一本邦映畫が殆んど歐米映畫に壓倒され、映畫製作者頻りに倒産するものとするときは、果して如何なる狀態を現はすことであらう。前述の如く本邦に於ける有料映畫觀覽者が每年一億五六千萬人を下らざるとき、若し外國映畫が猛威を逞ふして利益を得るとせば其金額の莫大なるは云ふも更なり。その映畫によりて本邦人の受くる印象たるや、決して等閑に附せらるべきものでない。個人主義の發達したる歐米の思想が、家族主義の發達した我國民思想に對して、果して如何なる影響を與ふるであらう。さらでだに我國民思想は、歐米の思想に攪され樣として居るではないか。

政府當局は何故、映畫の感化力の偉大なることに氣附かぬのであらう。

又何故此感化力の偉大なるを利用して、國民の心を作興し、元氣を鼓舞せぬのであらう。今や文化の發達、人口の增加は生存競爭を激烈ならしめつゝある、國民は動もすれば疲れんとする、故に映畫によりて疲勞せんとする國民に慰安を與へ、萎靡せんとする氣を引き戻す上に於て、映畫は今日は重大なる使命を有する樣になつた。

軍縮論は今や世界の輿論となつた、誰一人是に反對するものはなからう。然し戰爭が忌むべきものであつたにしても、何れの國も軍備を率先して廢止しようとはいはぬ、軍備は假令縮少さるゝとも、依然存在して居る以上、戰爭が起ることも止むを得ぬ。かゝる時豫め軍人が國家國民のために自己を犧牲にする崇高な念慮の元に、如何に活動するかを一般國民に知らしむる爲めに、映畫を用意して置けば、國民は緊張し、軍人に對する敬意を失はざるのみならず、國民的團結を容易ならしむることが出來よう。

人は眼を通して智識を得るのが一番容易である、幼時に於ては殊に

然り、若し映畫によりて科學的智識を與ふるときは從來の教育よりも或はより以上效果的であるかも知れぬ。現に米國にては小學校にて是を行つてる處もある其他農作工業等萬般に亙つて利用すべきものが多々ある。

百聞は一見に若かず、映畫も同様の效果を擧ぐることが出來るといへよう。

外國に於ては政府當局は夙に是が利用を怠つては居らぬ。米國は元より獨逸伊太利の如き然り、獨逸の如き最も健實に行つて居るのである。

然るに本邦の現狀を見るに徴々として振はず、偶々利用することありとするも、何等の精氣なく寧ろ無きに若かざる程度のものである。由來當局の仕事を見るに消極的のみ多くして、積極政策を見る事甚だ稀である。それは多くの場合萬事事勿れ主義が役人間に瀰漫せるためであらう。

萬が一の非難、假令それが僅少であつても、やがて自己の地位に不安を感ずるのを恐れるためであらうか、萎靡逡巡して容易に實行を見ぬものである。然し世の中の事は理窟はどうにでもつけられるものである、其理窟を恐れて、實行を鈍らすよりも苟も大綱を誤らず、遠大なる理想が實現するならば、むしろ直ちに斷行する方が何の位賢明であるか解らぬ。映畫は今日世人が知る程度に止まつて居るものでは決してない必ずや將來凡ゆる方面に利用されて重大な使命を果すものであらう。其時になつて始めて心附くようでは既に遲いのである。

然るに近頃少年が映畫によつて不良少年になる傾向あるを以て、是が制限を加ふべしといふものがあるが、果して何の程度迄の研究を積みてその主張を云ふのであるか知らぬが、是は實は羹にこりて膾を吹く類に屬するものであつて、その實際を知らざるもの丶言だしといふ可きである。少年時代は智識欲旺盛なる時にして、凡ての物に對して智識を得んとするものにして、映畫によりて種々の智識を得たる場合、更に欲望が強くなるものである。それにも拘らず却つて是を拘束するがためにその欲望にかられて不良の行爲をなす場合が却つて多いのである。米國に於て二十餘年も職に在つて研究し居る少年裁判所長の說も亦等しく是を裏書きして居るものである。勿論映畫の内にて好ましからざるものを製作さる丶場合もあらうが、寧ろさういふ方面に政府當局が積極的方針をとりて、製作規範を示す方が遙かに妥當である。

要は今の政府當局を責めるに非ず、代々の政府が此の將來偉大なる勢力を有するに至る、映畫の發展並に利用に就きて、餘りに無關心に過ぎ、今日に到り歐米各國が非常な熱心を以て是が發展に努力し居るにも拘らず、本邦のみ悠然たるはやがて世界の物笑ひとなる許りでなく、他日臍を噬む場合が必ず生ずる事故一日も早く是が實行を期す所以である。

而して先づ左の如きことが、政府の手によつて實行されるに到ら

ば、本邦映畫界は非常たる活氣を呈し、やがて外國に迄その販路を擴張し、輸出品中重要なる地位を占めて經濟的に國家に寄與する許りでなく、本邦の國民思想を外國民に知らしめて、本邦に對する充分なる理解を持たしむるに至るであらう。

一、米國の如く商工省に映畫調査部を設けて外國に於ける映畫の狀報を集めしめて製作者側の參考に供せしめ時々官民合同の協議會を開きて販路開拓の方法を審議し外務省と聯絡してその販路擴張のために援助すること

一、獨逸國の如く割當法案を發すること

一、內務省に官民合同の映畫製作協議會といふものを設けて國民思想の高上、及教化といふことに就きて常に常に政府の趣旨を示し政府と同一歩調をとらしむること

一、本邦映畫に對する諸稅を撤廢すること

檢閲手數料の如きは最も意味なきものである　以上

結論

此く論じ來つて今後の國際的映畫戰は如何といふに、歐洲諸國が全力を擧げて米國映畫の輸入を阻止しつゝある間に、よく自國映畫を以て米國映畫に對抗し得る程度の優秀なる映畫を作成し得るや、米國映畫は依然莫大なる資本力を擁して壓倒を續くるや、その競爭の甚だしき、今より豫側するに難からず。その內に在りて政府が依然消極的政策のみを踏襲して、何等映畫發展利用に關する施設なくんば本邦映畫の將來、國民の將來は寔に寒心に堪へぬ次第である。

新刊紹介

◆萬葉集傳說歌考（川村悦磨著・土俗的傳說を孕める萬葉の諸歌に訓、語釋、譯、餘釋、餘言等を施し縱横に解剖す・定價五圓五拾錢・東京市赤坂區青山南町六ノ一〇一・甲子社書房）

◇イエイツ研究（尾島庄太郎著・定價三圓五拾錢・東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七・泰文社）

◆歌集つぶて（山極忠恕著・定價一圓・長野縣小縣郡西鹽田村大字手塚八五七　瞑想社）

◆歌集山の娘（藤田晉一著・定價六拾錢・東京市外西巣鴨町堀之內四四四・第一藝術社）

元旦の夕

親類に年始に來て
醉つて臥てしまつた
日がさめるともう元日の夕で
座敷の中は暗くなつて
淡く燈火がついてゐるが
未だ雨戸を締めないので
庭がほの白く
築山の蔭邊りで雉鳴が啼いてゐた。
襖の蔭から次の間を見ると
フロック姿の遲い年始客と叔母が話して居た。
自分は障子を開け廊下づたいに手水に行つた。
庭の暗闇の上に星の瞬くのが婆々と見へ、
元旦の夕の寂しさを感じた。

千家元麿

歳晩

年ははや暮んとして
はや五日を餘すよりなし
正月の仕度整へる家々にては
惠み多かりし年の靜かに暮るるに
明けそむる新春の心地
はや年の内に飾り成りたる部屋々々に溢れたり
されど廣き東京の世を渡る人の風情はさまぐ〵にして
人々の町を馳せ廻るさま　狂氣のごとく
さしもに廣き東京の道も
人を以て埋らんとする有様にて
夜も晝も町に殺氣立ちたり

東京の年末氣分は
入るところには豐かに金が這入り
入らぬところには常の月よりも收入薄く
金あるものは福の神のごとく
金のないものは亡者のごとく
十二月の商人の心も見へてあさましくも果敢なし
町には鹽鮭、昆布、燥で蛸なぞ軒につるし
木枯は賣り出しの旗と血眼せる人々を吹き
哀れ世を渡る人のおしなべて有難からぬ年の暮とはなりにけ
り
淒じき人の世の悲しさ眼の前に
安き心地も消ゆるばかりなりけり

人の身の上

朝の霜　夕の凩
身を切るやうな十二月の東京
空には星が寒々と美しくちらばり、
例年のクリスマスや歳の市が近づいて
富める家々では惠みある
幸福の年が明けるのも間もない時
遠近の餅搗の音もにぎやかに忙しくなくきこえる
忙き裏長屋では火の消えたような淋しさ
四十にして世路の辛苦を審に知り
今日も借金取りが來て
いつも妻に斷らすのに
直接に會つて見れば向ふにも
氣の毒な事情があつた
主人が病氣で入院してゐるのださうで、
掛取りに來た人は老ひたる父らしく
その人の困つた顏を見ては
自分は拂ひを永ひかしてゐたのを悔ひた
自分直接に當つて見なければ
人の身の上は分らないものだと思つた。



散文詩

青色の微笑。外四篇

吉江喬松

午睡

巴里の眞夏の午後のひとゝき。

午睡は正規的に家々をおとづれて、左岸街の舊巷は、幾世紀來の夢をそのまゝ、壁のひだに腹をたゝみ、屋上のマンサルドも眼を閉ぢて、物音ひとつなき中世紀以來の眠りである。

その時、舊巷の一角に、遙か下の方の舗石路の、サボの往き來にすりへらされた上から、微かな樂の音がひゞいて來る。六階七階の屋根裏までも、その微かな樂の音は、深い水底から立ちのぼる水泡のやうに、のぼつてくる。

何處とも知れず、鎧戸の開かるゝ音がして、人聲と共に、何か投げらるゝ。深い谿底へ小石を投下したやうな、沈默のひとゝきをおいて、かすかに石に當る金屬の澄んだ響がきこえて來る。樂の音はひとゝき止んだ。

やがてまた、悲しい、ふるへるやうな、何人でもを、幼い頃の思ひ出に誘ひ込むやうな哀音が起つて來る。これこそは幾世紀原始的な放浪の生活をつゞけてゐるボエミヤ女の手ずさびである。

黒い頭髮と、野性動物に見るやうな不思議に白い齒と、生き生きとした血色と、そして透き通るやうな、ひきいれずばやまないやうな聲をした野性美そのものゝ如き放浪の女性、それがいま、幻の如く、巴里の舊巷の一角へ現はれて、午睡の夢の中へ浮び出た美しい夢魔のやうに、その眠りの深淵の底を潛りつゝ、どんよりとして夏の午日の重い空氣の積層の下底から樂の音を送つてゐる。

このシレエヌに向つて投ぜらるゝ金屬のひゞきと、鎧戸の開閉と、樂の音とは、いづれも深い水中で耳にする物音のやうに、澄み透つてゐて、そしてまたかすかにはかなく、やがて跡方もなく消えて行つてしまふ。

はぐれ鳥の如く、またまぐれ魚の如く、巴里の眞夏の午后のひと

とさを、小形なオルゲ・ドウ・バルバリイを抱いて紛れ込んで來たこのボエミヤ娘の哀しい樂の音は、次第に遠く／＼消えて、クルウニイの古塔にまつはる蔦の蔓にそよかぜが吹き起るまでは、この午睡のタブロオはまつたく亂さるゝことなく展開せられてゐる。

青色の微笑

白堊の館は若い時代の人々を送迎するために、大都市の一角に建てられつゝあつた。

此處は既に年經た傳統の森に包まれて、その暗緑の色は、白堊と對照して、初夏の空に、一種の輝きを立てゝゐた。

尖塔が、時鐘樓が、その高層建築の上部に、日々きづき上げられつゝあつた。空色の斷片の閃きのやうに、無數の青色の工人等が、群蟻の働く如く、その高樓の周圍にとりついて、その仕上げに急いでゐた。

中空に働きつゝあるこの高層建築物上の無數の青服の集團は、彼等の頭上を覆ふ初夏の輝く空色を身にまとうて、無限の希望に、やがては身分等の表出ともならんこの巨大な白堊館を既に征服しつゝあるやうでもあつた。

この時、地上では、この白堊館につゞいた廣場では、また無數の黑色をしたユニフオルムの幾團が、何ごとかを叫びながら、或は集合し、或は幾條の流れとなつて流れた。

そのなかには高塔へのぼつて、何ごとかを高聲に叫びいだすものもゐた。拍手と、叫喚と、動搖と、地上の騷ぎは刻々に加はつて行つた。

この黑色の幾團は、高樓へは登り得ずして、たゞ地上を低迷しつつ、激越の波をあげてゐるのであらうか？　彼等の頭は、彼等の眼は、上を仰いで、中空に働く青色の人々の方へは向けられさうではない。彼等の流れはうづをまいて、たゞその背後の暗緑の森へと突き入つてゐるのである。

中空では、この高樓の上では、無數の空色の集團は、地上の激越なぞは無關心に、それを瞰下しつゝ、その黑色の流れがいづこへ向はうとも、それに委かせて、いづれにもせよ自分等のところまでは登り得ざるのを憐むもの〻如く、大空の無限の解き難き微笑を身上に反映せしめつゝ「何をやつてゐるんだ。いつまで地面を匍ひまわつてゐるんだ」とつぶやきながら、なすべきことを踐みつゝあつた。

やがて、この白堊館は巍然として出來上つた。暗緑の森を背景として、嶄々として立つた。そして、その表戸の開閉ごとに、幾多の

黑色の集團を吞吐しつゝ、冷然として立つた。

けれど、その巨體の上を被ふ初夏の大空の青色の微笑の輝きは、依然として解き難きものとして掛つてゐる。そして、その微笑を身に受けつゝ中空に傲いて、この巨體を出現せしめた幾多の青色の肖のつぶやいた一語は、いまだ一人のエデイプ王をも見出し得ないで、白堊館の存在と共に、一個の不思議ななぞとして殘つてゐる。

銀座街

何處かの大都會の場末を見るやうな銀座の街。

世紀末兒の群れ集ふ大路の上を、一人の野人が歩いて行く。

何人ひとり彼の存在なぞに注意するものはない。彼もまた、自分の周邊に行きかふ人々なぞには目も向けない。彼の眼は、地上數步の前を見据ゑて、先きへ先きへと追ふて行く。

彼の視線に先立つものは何か？

犬でもない。鋪石路にひゞきを立てる金色の拍車でもない。といつて、勿論、太短いモダン・ガアルの脚でもない。

それは數葉一團となつてまろんで行く木の葉である。

この街では、時々思ひ出したやうに、鋪石の上へ水を流して洗ふやうな真似はすれど、たゞ塵埃を石の面で彼方此方漂はすだけで、取り去つてしまふのではない。去年の落葉も新葉といつしよに、いつも車道の隅に、歩道の端にうづくまつてゐる。

街路に並ぶ銀杏樹の若木から、去年の秋、揺り落されて、地上にひらみつき、存續してゐた落葉の一團は、春、そよかぜが街々の動脈をまひたゝせると共に、生氣づけられて、騒ぎだした。それ等はまつたく亡靈の舞ひ動くごとく、殘骸のおどりまわる如く、塵を掃つて、鋪石の上をまろがりだした。

けれど、この落葉の舞踏に、殘骸の跳躍に、氣づいたものは一人もなかつた。ショオ・ウヰンドの輝きと、カッフエの喧騒と、自動車の疾走と、時代遅れの路面電車の往來とは、有ゆる人間を、頭の方へ、視神經と聽神經とのはたらきだけに、夢中にさせた。

たゞ一人、彼、野人だけが、足許へ目をおとした。輪舞と、縦走と、散樂と、交響と、それ等一團の銀杏葉の群れは、やはりこの地上の一角で、全體の空氣の動波をその最下底に於て感ずる如く、敏感に狂ひだした。

殘骸の狂舞！

野人の目にはこの木の葉の亂舞しか映じない。それしか感じられない。それしか存在しない。

彼は夢中になつて、それを追ふた。旅樂師を追ふ兒童等のやう

に。そして、その音波のなかで、總てのものが狂ひ動く如く感ずるやうに、彼はこの一團の枯葉を中心として、周圍ことごとくがおどり狂つてゐるのを見た。

亡靈の亂舞はあわたゞしくなりだした。ワルツが終りに近づいたのであらう。

歩道の上の人足が忙はしく動き、幾千年で初めてつけられた踵の高い靴の中で、それ等女人等の足は、さぞ無限の窮屈を更に感じだしたことでもあらう。

枯葉の遁走と、人足の亂調子と、野人はその中を突ききつて、何處までも、何處までも、その目標のあとを追ふて、走らずにはゐられなかつた。

路面は橋へ近づいた。枯葉は歩道を橋へと驅けよつた。けれど、その時、一陣の突風が、それ等を吹いて、河の面へする〳〵と追ひ落してしまつた。

橋まで驅けつけた野人は、不意に目標を失つて、茫然として佇立した。そして、今まで自分の背後に狂ほしく拖襲して來た街全體の亂舞が、同じ勢をかつて、喚叫をあげながら、橋の上を通過するのを眺めてゐた。

原始人

我が胸に棲む原始人よ。

お前は、いつも驚き、騒ぎ、取り亂す。

夜風の樹々の葉を掠めてすぐるにも飛び立ち、遠き路を消えて行く人の足音にも身をおのゝかす。

お前はさかしらな、取りすました姿のなかに囚はれて、いつも子雀の眼のやうに、やむときなく、狂ほしくおどり動く、そして疲れては眠り、怯えては飛び上る。

日の照る原野がお前の休息の場處か。

夢魔のうづまく深淵がお前の隱れ家か。

小ざかしき思慮が、共同の連鎖が、近代都市の雰圍が、お前を四方から取りつめて、脱出をゆるさない。

反逆は内抗し、活力は亂調し、シメエルの連續のみが、お前の眼前を亂舞する。

死の如き執拗な疲勞は、お前の肉體の節々をうづかせ、そのゆるんだ關節と、狂つた内臓の機關とが奏でいだす亂調の騒音は、お前の耳の内部から叫び、十里霧中の、晩秋のロンドン市中に置かれた人間のやうに、全身はたゞ聽神經だけの緊張である。

何處へ身を措かうか。憫みと疲勞とでくた／＼になつたお前の眼前を掠めてすぐる小止なき閃光か、一瞬お前の神經をいらだたせ、たゞ存在を喘いでゐさせるばかりである。

眞夏の日の犬の呼吸！　地上に死の如く横はつてゐるお前の姿。それでもまだ生をつないで行くのか、我から死をむかへる力すら實は失つてゐるのだらう。

お前にとつては明日の日が恐ろしい。それが今日と同じであるならば、同じであるだけおそろしく、異つてゐれば異つてゐるのでさらにおそろしい。

小刻みな生をつゞけて、瞬間瞬間に燃燒もなしえず、たゞ花火の黑玉のやうな姿を、生死の間にもてあそんでゐるだけである

かつてお前のまへに、落日の湖畔に、無數の群鳥が勝利の叫び聲をあげて、森から丘へ、空から水面まで、彼等の自由な飛翔を見せて、幻影の都市の破壞の上を去來したではないか。お前もまた、その叫び聲につれて、初めて、現實の中に身を置く場處を求め得たやうに、その無數の羽族と共に、狂喜して破壞の上を飛び廻つたではないか。

かつてお前は、巨木の森の中へ、巣をくつてゐる野獸の如く、そしてその野獸が長い安らかな冬眠を求めにはいる如く、落葉に埋まつた樹根を隱れ家として、其處で初めて太い、全身での呼吸をして、また春の來るまで樂しみに、身を横へて、何の不安をも感じなかつたではないか。

その强い現實を何處へ失つたのだ。

小さな無力な反逆兒よ。

その小ざかしい理智と、煩さい思想との矛盾の牢獄を脱出する力は持たないのか。

お前はさうやつて身もだへしながら、死の手の救ひをまつてゐるのか、

我が胸に棲む原始人よ！

或る風景

何人でも、自分を炎然の點景人物とした、或る特定の風景を、必ず持つてゐる。

それは運命の繪卷であらう。その中では、彼は自分の小さな全身を、またその小さな後姿をさへ見ることができる。

その中へ身を置きさへすれば、何人でも心のなごむのを覺える。遠く誘ふやうな、魅するやうな、一種の力が、彼の全身をその畫面の中へすひこむでしまふ。

如何なる時にこのタブロオが出來上るのか、それは判らない。けれど、何人でも、必ずこの宿命のタブロオを腦裡に刻まれて持つてゐる。

それは、モンマルトルの丘の上に立つて、遠く眺めやつてゐる少女の前にも、汽車の腰掛に埋つて、ぢつと前を見つめてゐる老人の前にも、また印度洋を通ふ汽船のデツキ、オフイサアの眼前へも、或は暖爐を圍んで、それ〲默つて坐つてゐる冬の夜の客人等の腦裡を拔けだして、それ等の人々の前へも、盡く浮び上る。

囚人服を身にまとうて、常は兇暴な眼ざしをしてゐる人が、時としては神々しい閃きをその面貌へ浮ばせることがある。瘋癲病院で、窓枠へ腰を掛けて、大聲で喚き散らしてゐた男が、不意に沈默して、ずつと一ケ處を見据ゑてゐることがある。彼等は、遠くひゞく音樂に聽き入つてゐるやうな、また白日の眠りが醒めたまゝの彼等の上へ不意に襲ひかゝつて來たやうな、透明不動の姿をして、自然がきざみいだした彫像の如く、ぢつとして、いつまでも動かずにゐる。

――明るい空から淡靑の光が落ちて、蘆の葉がゆれてゐる。野ばらが白く咲いて、溪流のふちを埋め、白い路が一筋、その落合ひを通つてゐる。四方の山の靑葉が默したまゝ、空からの光を吸ひこみ、山と山の間の大氣は、透徹して、微動もしない。それでゐながら全體として、一種さそひこむやうなメロデイを漂はしてゐる。

音樂のタブロオであらうか。精神組織の畫的展開であらうか。

そのなかへ、その淡綠の音波のなかへ、一つの小さな影が浮び出て、眞白い途の上を、四方の山頂に近く、眞白に高照る雲の行くへを目送しながら、步いて行く――。

小さなロマンテイクよ。お前の姿は、永久このタブロオのなかから脫れ出ないであらう。いや、このタブロオのなかへ身を入れる時だけこそ、お前は眞實に生きてゐるのかも知れぬ。甘い眠りが落ちかゝる前、このタブロオはかならず、お前の生存の背景とならないことはない。

如何なる人でも、それと氣付かうが、氣付くまいが、必ずこの特定な背景を持つてゐる。それは各の聖者等が必ずその頭部の背後に、特定の圓光をめぐらしてゐると同じことである。

この宿命のタブロオを持たぬ人は、影を持たぬ人である。初戀を知らぬ人である。そして祈りを持たぬ人である。これは現在までの人間としては考へられぬことである。



狐

(伊太利) グラーツィア・デレッダ作

岩崎純孝譯

一

生温い長い五月の黄昏が來る樣になつた。トーマス爺さんは、まるで葡萄の房の最後の粒の樣に小さい構へで、山の灰色の地面に黒ずんで建つてゐる彼の家の中庭で、去年の樣にそして十年前と同じ樣に腰をおろしてゐるのだつた。然も春が何んの遠慮もなく逸樂の風を吹き送つてゐるのに、黒い老犬と黄色い年寄り猫を兩側に蹲まらせて、身動きもしない此の老人は、その周圍の事物同樣、無感覺でまるで石の樣に見えた。彼は、夕方の草の匂だけに、幾んどその一生涯を送つて來た牧場の事を思ひ起してゐるのだつた、そして大きく太陽の樣に金色に光つた月が、遠い海の上にあがつて來る時でも、そして銀色の空に黒ずんでゐる海岸の山々や、廣い溪谷や、地平線の右方と前方の山々の幻想的な半圓が、森と湖の樣に思へる光と影の帶と、燦くベールとに覆はれる時でも、子供らしい物事や死んだ人達の事や牧場に猪の樣になつた犯罪人を連れ込む惡魔ルスベエの事しか考へてゐなかつた。さうして月が雲の中に――彼はその雲を本氣で一腹仔の七匹の牛だと考へるのであるが、――隱れたりすると、月はその隱れ家で靜かに食事をその時攝つてゐるのだと眞面目に何時も思ふのだつた。

彼は幾んど口を利いた事がない、が或る夕方、姪のツァーナが寢床に入る時間を知らせに來て髆を搖つたのに、餘り強情に默りこくつて居り腰掛の上に體を硬直させてゐるので、ツァーナは初めて彼が死んだのではないかと考へた。彼女は吃驚りして隣家のレナルダを呼び立て、そして一緒になつて老人の體を搖ぶり續けた。それから二人でやつとこさと家の中に運んで、暖爐の前の莚の上に寢かせたのである。

――ねえ、小母さん、お醫者を呼ばなくちやならないわ、お爺さんは死んだ樣に冷めたいんだもの――老人を觸りながら娘は言ふのだつた。

――お前さん、先生は今ゐないよ。耳の病氣の研究さ二ケ月ばかり

本土に行つたよよ。あの人の牧場の地代の仕拂ひの話になると、皆んな耳が聞えなくなるからと言つてたから、それでだらう。……だけどその牧場だつて、此の土地のお金で買つたわけぢやなし……ちつたあいゝ事をほどこすがいゝさ！　そんで今はあの先生の代りに、そら西班牙の王様附だつたといふ噂の、あの口の尖つた町のお醫者がゐるがね。さあ來て見れるもんだかどうだか？

——だつて、小母さん、仕方がない來るわよ。一日二十リーレ取るんだもの！——と、ツァーナは威張つて言つた。

でベレナルダは出かけて行つたのだつた。

その先生の代りの醫者と言ふのは、此の邊では唯一の人間の住家であると言へる位な先生の立派な邸宅に住んでゐた。菜園や鐵柵や葡萄棚の塀に圍まれ、一切が葛や大豆で蔽はれた廣い庭の此の住居は、たとへ小さな町とは言へ、大都會同樣賭博場や女や高利貸やあらゆる罪惡や貧窮の存在する或る都會から來た此の醫者さへも、愉快にする程だつた。

レナルダは、庭に面した食堂で黄色い表紙の本を讀んでゐる彼を見つけた。疑ひもなくそれは醫術書だつた。まるで本に喰はれてゐるかの樣に、彼は眞に近眼の目を近づけ、外齒の上に部厚な脣をあけたまゝで、白い拳を弱々しい澤のない頬に押しつけて、熱心に讀み耽つてゐるのだつた。

召使の老婆は、此の女の來訪を告げるために二度も彼を呼ばねばならぬ始末だつた。彼はパタンと本を閉ぢて立ち上り、物靜かに少し距てた後からレナルダの後に蹤いて行つた。彼女は敢て口を利かなかつた。月に照された間道の岩道の方へ、石ころを素速く踏み越え踏み越え默りこくつて、只だ道を彼に教へ樣とするかの樣に彼の先にたつて行くのだつた。

道をおり切つて彼女の家の闇い窓の下で、醫者は銀色に光つた山の嶺を見た。谷の淋しい凹地は、小屋々々から發する、そして入口の階段のところどころに蹲つてゐる羊飼の爐から發散する牧羊場の匂とごつちやにたつてゐた。すべてが印象的な物淋しさに滿ちてゐた。然しトーマス爺さんの庭は雑草や毛蕊花の匂で一杯だつた、そして醫者は、斜面に作られた土塀の前で、大きな月とまるで頭に觸れる程の屋根のもとで、頭巾をピッタリ包んだ女が、一人すつくり立つてゐるのを見た。腰から下が餘りに細そりしてゐるので、彼は初め胸像が立つてゐるのかと思つた位だつた。

彼を見て女は臺所から燈火を持つて來た、そしてお爺さんの寢臺の前に膝まづいた。その間にレナルダは醫者が腰を下ろす樣に、樫木樣附の小椅子を奥の部屋から持つて來るのだつた。

彼は腰を下ろして老人の脈を取つた、そして黄金の檢温器を取り出してツァーナの燈火の前で振つた。

その時娘は顔を上げて彼を見たのである。醫者は今迄にこんな美しいこんな謎の様な女の顔を見たことがないと思つた。それ程彼は忘れ得ぬ強い印象を受けたのだつた。片方の眉が片方のより少し高く、その眉に迫る額は少し高い、そして黒い光澤のある髮は二つに分けられ、頸は細くて突き出てゐる。平らな顴骨は引つ込んだ頬に僅かな影を作り、そしてピッチリ詰まつた眞白い歯は、高慢ちきな口もとに、幾分殘酷味を加へてはゐる、がその大きな黒い眼には悲しみと深い深い憐みがこもつてゐるのだつた。

からして瞶められて、ツァーナは目を伏せた切りもう顔を上げなかつた。然しお爺さんが醫者の問に答へないので彼女は小聲で言つた。

――もう二十年來の痙ですの！

――脈はしつかりしてゐますな！　兎も角うんと暖い脚湯を使はせなくちやいかんですね、あんまり冷えきつてゐるから。

――脚湯だつて？　却つて惡くはないかねえ、――レナルダはツァーナに相談しながら言つた。――もう八ヶ月も靴を脱いだことがないでなあ！

――脈はしつかりしてゐなさる！　でもこんなところへ寢かして置くんですか？

――だつて何處と仰有るんです？　何時も此處で寢てゐますんです。

醫者は立ち上つた、そして手帳に處方箋を書いてツァーナに渡してから、周圍を見廻すのだつた。

部屋は洞穴の様に暗かつた。奥の方に廊下と木の梯子段が見えた。一切が如何にも惨めなものだつた。彼は同情の目でツァーナを眺めた。彼女があんまり色が白く細そりしてゐるので、彼には丁度洞穴の隅に咲いた一本の水仙の様な感じがするのだつた。

――御老人は滋養分が足りなかつたです……――と彼は躊躇ひながら言つた。――それに貴女も矢張り、と思ひますが……。お二人共滋養分をお取りになる御注意が肝心です……出來れば……

彼女は直ぐその意味を了解した。

――何んでも出來ますわ！

彼女がこんな威張つた口を利いたので、醫者は匆々に歸つて行つた。

そして石ころを踏み越え踏み越え、岩の細道をのぼつて彼のオアシスへ歸つた。月は葡萄棚の亭を照してゐた、そして大豆の房は、その香だけで人を醉はす奇妙な葡萄の様に思へた。妻はやがて戸口の所で糸を紡いでゐたので、絶えず目の前にツァーナの黙つた顔附を思ひ浮べな

から彼は訊いた。

――お前、トーマス・アッキットゥを知つてるかね？

――はい／＼、ヌヲーロの町に迄評判で御座いますよ。旦那樣！ツァーナを嫁に欲しがつてゐる學校出はどつさり居りますです。

――うむ、美人だね。私は今迄ついぞお目に罹つた事がなかつたよ。

――滅多に外へ出ねえからでごぜえますよ、それに出る用もごぜえませんしね。まあ／＼家ん中にゐても器量は匂ひますだ。方々から知らん人が、ヌヲーロからさへやつて來ては、あの娘を見ようと家の前を通りまんで御座いますよ。

――然し東西屋が美人だ美人だつて吹聽して歩いたんだらう？

――そんな事が、滅相な！ あのお爺さんは、そりや迚もの金持なんでごぜえます。それにスペイン國程の土地を持つてゐるし、あの爺さんの居間には二萬ものお金が隱してあるちゆうこつてす。その塲所はツァーナだけが知つてるんださうでごぜえます。それと言ふのは、あの娘が、お金のない貴族出のドン・ヤッキヌを嫌つてゐるからで御座いますよ。

――おやそんなにお金をどうして儲けたんだね？

――世の中の物は何んでもかでも持つて來れる樣な事をやつてござせえますだ。ずつと／＼昔あの爺さんは、今の憲兵程あの龍騎兵といふのが働きのなかつた時分でごぜえますが――わしは神樣に誓つても言ひますだ――追剝の仲間になつてゐた事があるちゆうこつてす。でそんな事をしては、表面は羊飼でも、片つ方にチーズを一杯片つ方に金貨をどつさり詰めた袋を擔いで家へ歸つて來たんでごぜえますよ……

婆やは、宛も糸捲から糸を引き出すかの樣に、自分の記憶からそれからそれへと話しつゞけるのだつた。彼は金貨の牛頭の樣た葡萄棚の亭の影でその話を聽いてゐた、そしてその時初めてツァーナの笑つたのが「何んでも出來ますわ！」と言つた言葉が分つた樣な氣がした。

翌日の彼の最初の往診は老人のあばら屋だつた。老人は鎹の上に坐つて、きれいた水に浸けた、大變の麵麭を靜かに喰べてゐるのだつた。その兩側に犬と猫が蹲つてゐた。太陽は小さた戸口から斜めに射し込み、五月の風が老人の發する皮と野生の麝臭を追ひ出してゐた。

――どうですね？

――此の通り、大變よくなりましたわ、――ツァーナは嬉しさの情少しも見せずに答へた。

――成る程、此の通り！ これでトーマスさんは一體お幾つですか

な？

――まだ此の通りありますだあ！――老人は抜け殘つてゐる黒い齒を見せながら言つた。

――齒だと思つたんだわ！――ツァーナは老人の上に身をかゞめて、兩手の指を右の拇指だけ折つて全部擴げて見せながら言ふのだつた。――お爺さん、からでせう？

――さうぢや、有り難いことに九十になりますぢや。

――百迄、いや百以上迄大丈夫ですな！ で、ツァーナさん、貴女はお爺さんとお二人きりでお住ひなんですか？

彼女は、自分の兩親や伯父や伯母や從兄弟や老人や子供が皆んな死んでしまつたかの樣に、彼に頷いて見せた。そして平然としてまるで單純な何んでもない出來事であるかの樣に、人間の死の話をするのだつた。お爺さんは、彼女が喋つたり說明したりしてゐる事を了解してゐた。然しその時醫者は彼に叫ぶ樣に云つた。

――暮しをお變へない！……淸潔にして、肉類を喰べたりい、葡萄酒を飲んだりするんですな！ そしてツァーナさんを喜ばしてあげなさいよ、トオ爺さん！

老人が頷ねた。

――何時歸るんぢやね？

――誰かです？

――あら――とツァーナが言つた。――自分の耳を達して貰ふので、何時もの先生を待つてゐるんでせうよ！

――はゝあ、是はどうも！ 我々の先生の高名が保證されたわけですな！

彼の身振りで話を分らうとしてゐた老人は、襤褸々々になつた、そして油で光つた皮の上衣の袖を叩いた。

――汚れてゐるのかね？ 癖ですな！ 丈夫な人はそんなところを見せちやいけませんな。

實際醫者は以前から、此の邊で一番身ぎれいにしてゐるものは貧乏人であること、金持は表面の事には無頓着で、然も便利であるので服裝にかまはないといふ事を知つてゐた。その例は、まるで下女の樣な服裝をして庭で醫者を待つてゐるレナルダを見てもよく分るのである。齡の頑丈な彼女はその服裝は惡くとも、地所や家畜を持つて居り、年が四十三にもなつて二十歲の美しい若者と一緒になつてゐる程の金持だつた。

――先生樣、お早よう御座います。先生樣、俺に是非頼まれておくんなさいましよ、夫のヤークは兵隊にとられてゐますだが、今丁度半の刈込み期でごぜえます、休暇を取つて歸つて來て貰ひたいもんだと

ふんでごぜえます。貴方様は、どなたかお役人を御存じぢやねえでせうかねえ？

――やあ、それはく〱。お氣の毒だが、私の知つてゐる者はゐないな。

――俺あ、何時もの先生に話しましたつけが、覺えてゐらしたら、若しや驛馬にいらつしたらつてね。でもあの方は何時もよしく〱と言つては呉れますが、ぢきにお忘れなさるでね。夫のヤークはいゝ男でごぜえます――俺あ、あいつの女房だから賞めるわけぢやねえですが――まるで蜂蜜の樣に氣立のいゝ……それに一寸一押しで何んでもかんで仕遂げる奴でさあ……

彼女は糸捲で突く樣な恰好をした。然し醫者は溜息を洩しながら出て行つてしまつた。

――男前や氣立がいゝのばかりで、思つた事が何んでも仕遂げられるわけのものぢやないさ、お主婦さん！

さうして彼は、ツァーナの事や自分の過去の色々の事を考へながら、家へ歸つた。彼は、若い時分見振りもよく氣立もよかつたと考へるのだつた。然し彼は何んにも仕遂げてゐなかつた、然も幸運も快樂すらも。思ひがけなくさう言つたものが自分の懷へ轉がり込んで來くるのを待つてゐて、強ひて彼がそれらのものを求めなかつたのは恐らく事實であつたらう、さうして待ち暮してゐるうちに時は經つてしまつたのである。然しここ數年來、彼は時々狂ほしい程の誘惑に襲はれるのを感ずる樣になつて、自分の土地を賣りはらひ、惱ましい程戀と幸運と快樂とを探し求めてゐた。然し或時期にふと彼は、かゝる物は購ふ事の出來ないものである事を知る樣になつた。そして財布を空にしてしまふや患者を訪ねる樣になり、彼等と他愛のない冗談を言ひ合つたり、ぼんやりと散歩したり、佛蘭西の物語類を讀む樣になつてゐたのだつた。

美は何事をも仕遂げ得ると信じてゐるレナルダの方はレナルダの方で、もう老人が快くなつたにもかゝはらず、毎日アッキットゥ家を訪れては歸つて行く醫者を見るや、ツァーナに言ふのだつた。

――お金を一摑みやるといゝよ！　皆んな羊の刈込みの仕度をしてんのに、品物を他人まかせにしなきやならないなんて、そんな事どうして俺に出來るだ？　あの先生は、糸捲の眞珠貝の樣なでつかい目をして、あんたを見る癖に！　それでまるで見ない樣な顏をしてるんだよ、ねえ？　あんたが若しやヤークの休暇の事を願つて呉れりや、厭とは言ふまいよ、あんたにや。

然しツァーナは約束しなかつた。そして暖い風と晴れ切つた青空と明るい太陽が、何んとも言へぬ哀愁を與へるあの長い退屈な日がか

げつてから、夕方、醫者がトーマス爺さんの庭に、やつて來、そして螢が飛び星が見える土堀の前で、模樣入りの小椅子に股かる樣に腰をおろしてゐる時、彼女は彼と冗談を言ひ合つたり、さうして彼にどうして病氣は起るのか、どうして癒るのか、どうして藥は作られるのか、等と訊ねながら、色んな話を靜かにするのだつた。然し彼女は隣の女から頼まれた事は一言も口に出さなかつた。

時々此の隣の女は、土堀の上に腰をかけて、闇いのに糸を紡いでゐた、そして二人の會話の仲間に入つた。是は、夜の空氣が體にはよくないからと言つて老人を早く寢かせた後に、ゆつくりツァーナと語りたいと思つてゐた醫者を憐ました。そして隣の女はきまつて羊毛の刈込みの話をするのである。

——旦那樣、貴方が羊毛の刈込み時期のお祭り騷ぎを御覧になつたらねえ！　サン・ミケーレのお祭りもサン・コスタンティーノのお祭りも、あんなに面白くねえでさあ。ヤークが歸つて來ましたら、俺あ貴方をお呼びしますだ。けれどヤークがゐなくちや、お祭りもお葬式見たいになつちまふこつてせう。

——ふむ、お主婦さん、そのお祭りを見て貰ひたいと言ふのかね　お前さんのヤークに休暇が許可されるのは、お前さんが病氣にでもなつた場合に限るんだよ！　然しお前さんは默つてピン〳〵してゐるからねえ。

すると彼女は、ヤークがゐなくなつてから色んな病氣になつてゐる事、それから羊毛の刈込み期が近づくので全く死にさうに惱みぬいてゐる事を愚痴り出したのだつた。彼女は醫者をもつと說き伏せるために、ドツと床に就いた、でも彼は彼女の感情の昂ぶるままにさせて置いた。そして診察をして藥を當てがつた。ツァーナは隣の女の世話を色々焼いて、スプーンにすくつた藥をランプの赤い焔に透して見ながら彼女に當てがふのだつた、そして呟くのだ。

——毒藥ぢやないのね？

それから醫者が腰かけてゐる庭に歸つて來るのだつた。もうその時分は氣候もぐつと暖くなり草木も匂ふ六月上旬の夜になつてゐた。戀と思ひ出の夜だつた！　かくて、闇い憐ましい谷底から夾竹桃の甘い苦い匂が匂つて來る樣に、醫者の闇い憐ましい過去から、是等が甘く苦く思ひ浮んで來るのだつた。彼は、ツァーナが腰かけてゐる土堀の傍へ椅子を近づけた、さうして彼等は何時もの話を始めるのだつた。二三の羊飼が、トーマス爺さんの家の中庭から醫者の聲が聞えて來ても、別段不思議にも思はずに前の道を通り過ぎて行つた。終ひには、彼がツァーナと老人の財産に正式の結婚をしたがつてゐるのだと考へる樣になり、そしてツァーナもそれを承知するのであらう、若しさう

でなければ、そんなに彼を近づけて置くわけがないと考へる様になつた。それはそれとして、二人は、庭で表面は邪氣のない草や薬草や花や醫藥の事を話しあつてゐるのだつた。

——夾竹桃？ いゝや、あれは毒はない、えゝ、毒のあるのは毒人參の方です。知つてますか？

——ブッダルウは？ 誰か知つてるか知ら？

——えゝ、サルデーニヤ特有の毒草ですね。笑ひながら人を殺せますよ……貴女がする様に！

——先生、私の脈なんか取らないで下さいな！ レナルダの小母さんと同じで、私熱なんかないわ。

——ツアーナさん、熱がありますよ、私にや分る！

——いゝわ、ぢや、いゝいゝ、さるとりいばらは取つてもいゝのね！ 矢つ張り是も毒草？

——貴女は今夜毒草の話ばつかりですね！誰か殺さなきやならん人があるんですか？ 若し貴女が直ぐに殺したいなら……でも……

——でも？……

——でも……

彼は彼女の脈を再び取つた、彼女は彼のなすまゝにしてゐた。闇い夜だつたし、往來からは誰も見てゐるものはなかつた。

——えゝ、私狐に似せる毒が欲しいんですの。

——へえ、こんな所まで狐が來ますか？

——來る様な氣がするの！ まあ放して下さいよ——彼女は、恐くなつて身をくねらしながら低い聲で言ふのだつた。然し彼は彼女のもう一方の手をも把つて、まるで泥棒でも捕へたかの様にしつかり握つてゐた。

——ツァーナさん、キッスをさせて下さい！ 一遍でいゝから一寸……

——あら、燃えてる燒木にでもキッスしたらいゝわ！ でも、よくつてよ、毒藥を下さりや……狐つたら、生れたての小羊を盗つて仕様がないんですもの……

* * *

醫者の診斷書を添へてヤークの休暇願を出すや、レナルダは體も良くなり、隣の人達の事件の中に割り込む様になつた。だが醫者がまるつきり夢中になつてゐるのを知つても、別段驚きもしなかつた。醫者はツァーナの家の前の往來を行つたり來たりしてゐるのだつた、そして彼の同僚が本土から歸らないうちに、老人の脚を癒して見せると偽つては、日に二度も彼のもとを訪れるのだつた！ ツアーナは何んとも思つてゐない様に見えた。洞穴の様な自分の部屋に閉ぢこ

もつて、蜘蛛の樣に着物を織つてゐた。

日曜日の晝間だけ、彼女はお祭りに行くために家を出るのだつた、すると隱者は教會の前で彼女を待つてゐるのである。晴着を着て眞面目た顏附で、縫取りをした前掛の上に兩手を組み合せたり、或ひは十字架を附けた赤いマントを着せた子供の手を引いたりして、銘々先きになりながら女達は曲りくねつた細道を登つて行くのだつた。そして或る地點迄來ると、共同墓地のお像に見守られてゐるヌヲーロの山の方に向いて十字を切つた。太陽は彼等のリボンの金色を煌かし、そして普段着の彼等の美しい横顏を照してゐた。然し隱者は憑かれてしまつたかの樣に、ツァーナだけを眺めてゐるのだつた。で口の惡いお婆さん達は考へた。

――トーマス、アッキットゥの娘は、あの男に曼陀羅華でものませたんだんべえ！……

女達の心を撹亂してゐる極く少數の男達の仲間に、或日休暇を貰つて歸つて來たヤークが加はる事になつた。彼は形容する言葉のない程美しい男だつた、背丈が高くて縮ら髮で髭はなく目が青味がかつて居り、非常に光つてゐるので、女達は彼の方で見てゐなくても、その前を通る時は下を向いてしまふ程だつた。軍隊生活は、女の事ばかりでなくもつと眞面目た事に就ても、從順者の樣なしつかりした物腰を彼に與へた。彼は歸つて來ると早速、隱者の所へ御禮を申述べに行つた。そして彼に仔山羊を持參し、有名な羊の刈込みの日に彼を招待したのだつた。隱者は彼に方言で話したが、彼は伊太利語で答へた、そして隱者が多少試みる樣に訊ねる問にも答へるのだつた。

――大勢の人を招待するんですかね？

――えゝ、親戚が大勢ありますから、それに私の樣た男は敵も多いかはりに友達も多いもんですから――と彼は答へた。――それに私はこだわらぬ人間ですから、レナルダの先の亭主さへ呼ぶんです。若し私が嘘を言はうものなら、皆んなに私は殺されますよ。若しあれが三度も夫を持つてゐたら、その三人共の兩親を私は招待するんです。

――貴君は仲々世間の分つた人間らしい。偉いもんだ、それぢや矢つ張り隣近所も呼ぶんでせうな？

世間の分つた人としてヤークはツァーナに對する隱者の惱みに就ては全然知らぬ顏をしてゐた。

――勿論ですとも！　隣人は兩親以上のものですからな。

羊の刈込みの日が來た。ヤークの引いて來た車の上に、ツァーナやレナルダや他の女達がそれ〴〵位置をしめた。

牧羊場は高原の平地にあつた。そして此の重い牛車は、飼ひ馴されたばかりの二匹の黑い去勢牛に牽かれて、岩で凸凹した細道を辿り出

したが、女達は恐からなかつた。ツアーナは膝の上に兩手を組み合せて、暖爐の前にゐるかの樣に、靜かに蹲つてゐるのだつた、そして何やら悲しげに見えた、然し彼女の目は、闇の夜にパッと光つて森の奧迄をも透して見せる強い燐光の樣に輝いてゐた。

——ツアーナさん、陰氣になるなあ——ヤークは諷戲ふ樣に言つた。

——まるでお葬式へ行く樣な顏をしてるんだな。先生は、來るさ……お祭りが濟み次第、牧師と一緒に來るだらうよ……

——陽氣におしよ、ツァーナ！——輕口で女達が言ふのだつた。——

——あの人が、惡魔の樣に馬を馳けさせて來るのが聞えるつたら……

——陽氣におしよ、お前さん！　私にや時計の金鎖がキラ〱光つてるのが見えるだ……

——無駄使ひだね！　あの金鎖幾らする？　九レアルはするだらう？

ツアーナは焦々した。

——あんた達には碌な事はないよ、私の事にはかまはないでお呉れ。あの人にや今日は會へやしないよ。若し私があの人の顏を見る樣だつたら、目の玉を引つこぬいてもいゝよ……

醫者と牧師は萬歳と歡喜の聲を浴せられながら、正午少し前にやつて來た。コルクの木の蔭で、ヤークや召使や友達連は、犧牲を獻ずる祭壇の樣な大きな石の上で、四足を縛つた羊を横にして毛を刈込んでゐた。犬は飛廻り馳けまわつてゐるし、鳥は森の木で囀つてゐた。醫者エリアに似てゐる一人の老人が羊毛を袋の中に入れてゐる。けいびらんの花や山百合の花が香氣のある風に靡いてゐる森は、手に剪刀を持つて身をかゞめてゐる男達の仕事を、好奇心から見たいと前にのめり出してゐる樣に見えた。毛を刈られ縛を解かれた羊は、泡の波の樣な羊毛の山を飛び越えて、鼻を地面に押しつけ押しつけ、遠く小さく走つて行くのだつた。

暫くの間醫者は兩手を後で組み合せてそれを見てゐた。それから、仔山羊一匹を鐵叉に刺して焙り燒く役目を背負はされてゐるヤークの老父と、それを手傳つて女達が料理を作つてゐる小屋の中へ入つて行つた。遠くの方のコルクの木の蔭では、草の上に横になりながら牧師が、招待された數人の青年にデカメロンを語りきかせてゐた。女達は、醫者の顏を紅くさせる程、ツアーナの腰を肘で突ついた、それで忽ち機嫌をよくした彼女は、彼に泉のところから水を汲ませて來ようと、冗談を言ひ始めた。彼も彼女の冗談に合槌を打ちながら、コルクの桶を取り上げ、雑草や雛菊花を暖め人を醉はす樣な香を撒散せしめてゐる太陽の光の中に出て行つた。

すると牧師のまわりにゐた連中は、口笛を吹いたり大聲を揚げたりして囃し立てた。それに又仔山羊を焙つてゐた老人すらも、嘲笑的な

樣子をして隣者を蔑むのだつた。與間や教養のある人が、かくも女達から調戯はれるとは！ その時彼女はさう言ふ呪はしい氣持になつた、そして頭の上にヒラ〳〵してゐるハンケチを片手でしつかり押へて馳け出して行き、到頭隣者に追ひ着いて彼の手から桶を奪ひ取つてしまつた。遠くから女達は、泉へ行く細道を、女の後から蹤いて行く彼を見た、そしてヤークの老父は、あの男をゐなくしてしまひたいかの樣に、プン〳〵して火の中に唾をはき始めた。

——トーマス・アッキット。の姪のあのざまを見たけえ？、あの男と二人つきりになりたがつてけつがるんぢや。俺の娘なら踵で首根つ子踏んづけてやるだが。

——かまわんでおきなせえよ、お義父つあん——と同情を以てレナルダが云つた。さう、彼女は戀がどんなものかを、魅惑の水を飲ませされる時は、如何に愚かになるものかをよく知つてゐたからだつた。

強い太陽の光に、すつかり氣も顛倒してしまつてゐた隣者は、ツアーナの後に蹤いて、泉のほとりの野薔薇の蔭へ行つた。そして又もや彼女を抱擁かうとしたのだつた。彼女はサバの女王に似た目で彼を睨めた、然も桶の水を頭からぶちかけるといふ風に身構へて、彼を押しやつた。あの庭の土塀のそばでの最初の晩以來、何時も此の通りだつた、何時も同じ話が繰り返された、彼女は彼を誘惑する、そして彼を拒絶するのである。そして眞面目とも不眞面目ともつかず、挑戰といふ同じ問題がかはされるのである。

——いゝかね、ツァーナさん、あんたの望みを適へさせて上げるから。今晩家へ私が持つてつて上げる。めんがたすゞめ（鶉、鴨）から取つた小網を持つてつて上げる。でも納屋へは行かない樣に氣をつけなくちやいけないね。

——狐にやるんだつて言つたぢやないの！ えゝ、持つて來てね。でも今は放して。誰か來る樣だから！

事實、泉のほとりの野薔薇が、まるで猪でも通るかの樣に搖れて、ヤークが現れた。此の二人を驚かして喜ぶのだと云ふ風を作つても、その歪んだ顏附は誤魔化せなかつた。

——ああ、こんな所で何してゐんです？ 內證話の時ぢやなく、食事の時間ですぜ……

——あんたはお腹が空つたより、咽喉の方が渇いてんのよ——ツアーナは桶を持ち上げながら反語的に言つた。——お飲みよ、色男！ 然しヤークは、泉の湧くところに腹ばひになつて、息もつかずに水を飲んだ。

隣者は視察中、牧師がパンきれを彼の額に投げつけたり、人の惡い暗示をしたりしても笑つてゐた。そして笑つてはゐたが、新たな考へ

に囚はれて時々心が離れるのだつた。宴がはてゝから、小屋が建てゝある岩と岩の影に行つて横になつた。そこからは、人から見られないで遠くを見る事が出來た。そして樫の木のずつと下の方迄を眺める事が出來た。その樫の木の日影では羊飼が羊毛の刈込みを續けてゐた。そのずつと此方側では、牧師と他の連中が、即興詩競技を始めてゐた。女達は列を組んで坐りながら、手を前掛の下に入れたまゝ聽いてゐるのだつた。

深い沈默の中に、話聲やら歎聲やら笑ひ聲やらが、丁度澄み切つた蒼空に小さな白雲が消えて行く時の樣に、擴がつて行つた。隱者は岩の後で、馬が草を喰べてゐるのを、時々ヤークが刈つた羊毛をあけに來る小屋の中で、犬が骨を齒んでゐるのを聞いた。

即興詩の競技が熱狂に達してゐる時、ツァーナは突然立ち上つた、そして彼女も小屋へやつて來た。隱者は煙草をふかしながら、その青い煙を目で追つてゐた、そして金齒を見せながらニヤリと脣を曲めた。

そのうちに獵頭ヤークも亦小屋へ來た、するとツァーナの低い泣いてゐる樣な聲が、小屋の隙間から洩れて來るのだつた。

——嘘ぢやないわ……獵連が姿を困らしてんのよ……あの人も私の手さへ掴まなかつたら……そりや私がいゝ顔をするから、その譯は知つてるけど……私達の仕合せのためだもの……だつてそんな後悔なんか無くなるわ……消えてたくなるわ……

羊毛をあけて行く意りでゐたのであらうか、男は默つてゐた。彼女は憎々しげた聲を放つて、又もや大聲で訴へ出すのだつた。

——私があんたのお上さんを嫉いてると思ふの？　私が？　あの年寄りのあさり島の畜生を、あの年寄りの狐の畜生を？　……さうすりや皆んなそんな事も消えてなくなるわ……だから早くさ……

するとヤークは笑つた。でそれからは再び笑ひ聲やら歎聲やら馬の草を喰ふ音やらが聞えて來た。

然し隱者は一つ試して見たけりやならぬと思つた、で彼は立ち上つて大聲で怒鳴り始めたのである。

——！やあ！　狐が出た！　狐が出た！

是を聞くや、吃驚した二人の戀人同志は周章て小屋から飛び出して來た。又一方では例の一團が歌を歌ふのを止めてしまふし、さうして女達はあちらこちらをキョロ〳〵見廻し、犬は本當に狐が現れたかの樣に吠え立てゝゐるのだつた。（終）

維新回天史の一面（其二）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　德富猪一郎

（第六）．對外怠慢は幕府の責任

德川幕府の當局者は、如何に辯解しても、世界列強が、日本に開國を促し來る事に就いて、其の準備を怠りたる責任を免くる事は出來ない。如何に日本國民を舉げて、皆然りとて、申譯はしても、それは相立たない。何となれば委任政治の根抵は、一國の平和を維持し、一國の體面を全し、一國の國民を舉げて、その業に就き、其の職に安ぜしめ、天下泰平國土安全ならしむることである。然るに、外患、内訌交々至らしめ、上下紛擾、火事場の如き騷を出で來らしむるに於ては、切角委任せられたる甲斐はない。卽ち其の當然の義務を怠りたるものである。

×　　×　　×

世に義務なき權利の、存在する筈はない。嘗て德川家光が、甲斐庄喜右衞門を、長崎奉行とならしめたる時に、「日本の中にては、御當家御滅び、他人天下を取り候ても、これは御一分の御恥ばかりにて候。異國に日本の地、一寸なりとも遣し候

ては、日本の恥にて候。左候ては大切なる事にて候間、隨分油斷仕まじき由』云々と申したと、寛永小說にも見えてゐる。眞僞の程は保證しかねるが、是れは此れ當然の事だ。

然るに何たる無責任の事であつた乎。幕府は殆ど——否くとは云はない——外患に對して、何等の準備をなさなかつた。此れに就いては、天下に識者が無いではなかつた。天明頃には、林子平が三國通覽や、海國兵談を著し、頻りに警告を發した。又た寛政の頃には、露國から、幸太夫、磯吉等の漂流民を護送し來り、文化年間に至りては、レザノフが長崎に來りて、公然互市を要め來つた。而して其の時分から、國防論や、海防論は、草莽識者の口に上るのみならず、寛政年間の賢宰相松平定信の如きは、自ら伊豆、相模、房總等江戸灣の咽吭を踏査して、それ〴〵防備の計畫をも立てた。然るにそれ以來全くとは云はぬが、殆ど全く、紹成擴充するを怠りつゝ、それを閑却し去つた。

× × × ×

單に亞細亞大陸の西北邊から露國が來り薄るのみならず、英國は印度洋の方から、支那を陵し、しば〳〵日本の邊海にも、その船艦が出沒した。米國の捕鯨船は、又追々太平洋の北部から、鯨を追うて金華山沖や、若くはその以南の地點に現れ來つた。

如上の形勢は、決して我國を何時迄も、鎖國の甘き夢に終らしむべきものではなかつた。

而して前にも記したる如く、弘化元年七月には、和蘭國王が懇切なる忠告書を寄せて、開國の止むべからざる所以を、現時の世界の大勢に照し、切々偲々として、我が省覺を促した。

然も我が當局者等は、それに向つて何等の注意をも加へず、只お座なりの返事丈をした。それには鎖國は祖宗以來の法であれば、これを變ずる事は出來ない。以後は決して斯る書翰を寄する勿れ。寄すれば開封せずして、そのまゝ返却すべしといふことであつた。何たる理解なき態度であらう。此れが則ち舊幕官吏の所謂る官僚式を發揮したものである。

× × × ×

斯く返答しても、幕府當局者がその言に鑑み、一方には巨砲を鑄り、大船を製造し、而して他方にはせめて開國の準備をなしたらんには、まだしもの事であるが、水戸齊昭等が、しばしば大船巨砲製造の意見を建てたるも、幕府が自らこれを行はさ

るのみならず、他をして之を行はしめなかつた。

而して彼等は江戸の灣港に印ばかりの砲臺を築き、申譯的に大名等をして、其處を守らしめ、見張り番所を設けて、外船の來るを見張らしめたのみであつた。

天明寛政以來の事は兎も角も、弘化元年より、嘉永六年まで、足掛十年の間、幕府の老中抔は何事を爲しつゝあつた乎。實に言語道斷の怠慢といはねばならぬ。即ち此の一事に就ても、幕府は自から亡滅す可き理由は十分だ。

且つ又ペルリーの艦隊も、決して藪から棒に出て來たのではなかつた。彼等は天から降つたでもなく、地から涌いたでもなかつた。その事は前年から、幕府の當局者には、よく解つてゐた筈である。

× × ×

和蘭からは、前年國王の忠告書の効果無かりしにも懲りず、重ねて米艦の來る事を知らせ、それについては、豫め之に善處する方法をも示し、即ち我より進んで、彼の希望を容れ、從來和蘭に對する方法を推し擴げて、之を米國にも及ぼすべしと云ひ、その爲に周旋の勞を執る可しとさへ申添へて來た。

然も幕府の當局者はそれを省みず。而してその船の來ることを知りつゝも、彼等は相變らずの秘密主義を株守し、一切を唯だ秘密箱の内に封じ込め置きたれば、ペルリーの黒船が浦賀に來るや、世の中は上を下への大騷ぎが出來たのは、當然過ぎる事と云はねばならぬ。

× × ×

その騷ぎの模樣は、とても今日から想像は出來ない。

『都て浦賀及其外諸所之沖より、晝夜を分たず注進の汗馬、並に海陸飛脚之往來、櫛之齒を挽よりもはげ敷、江戸の大亂は八百八十之巷に家々の武器調度を持運び、市中古着商ふ店々は陣羽織、小袴、裁付等を取ならべ、下駄傘を鬻ぐ家々は、一時に蓑笠を商ひ、又鍛冶を業とせるは、家ごとに甲冑を鍛ふ。此故に武器之價ひを槩て百倍せり。且海邊に屋敷ある輩者、老少婦人は其所を立退、家財雑具を持運び、さしもに廣き大江戸も、錐を立べき所なく、往還道に混亂せり。傳へ聞享和文化之度、蝦夷之擾騷に聞怖れしも、斯まではあらじとぞ思ふ。又異國船此度の渡來は、實に尋常ならず、既に去年四月咬𠺕吧之頭役よりも注進し、同九月紅毛和蘭よりも、此段

來を告ぐ。加之、去年十月四日、江戸に白虹日を貫たり、程なく此地も戰場とならんやと、俗說大いに喧し。此頃下谷邊に武具を商ふ市人何某、江戸の騷動にて數多の武器を一時に商賣し、多分之利潤を得たりとて、餅を搗、酒客を呼集め、今度アメリカ船渡來は、我が爲の幸船なりとて祝ひし事顯れ、名主よりこれを咎めて暫く店戸を閉たりと云ふ」

以上泰平年表第三編の記事、以て其の一斑を知る可しだ。

然れば當時の詩人梁川星巖が、

> 一道砲聲夜渡天。邦家從此事騷然。
> 何須警報方爲備。轉海書來已十年。

と詠んだが、如何にも尤もの事である。

× × ×

予は內外政治一切、御委任を根本義とする幕府の當局者が、この對外準備を怠つた一事に徵しても、幕府は當然その政權を返上すべきものと思ふ。

世人は戊辰の役を以て、幕府の存亡興廢の時と思ふべけれ共、その實は、幕府は既に嘉永六年六月ペルリーが、浦賀灣に乘込んだる時に於て、既にその存在の理由を失つたものと云はねばならぬ。

× × ×

吾人は決して一個人に向つて、これが責任を、全部負擔せしめんとするではない。併しながら阿部正弘の如きは、最も責任の大部分を負擔すべき一人であるといはねばならぬ。

何となれば、彼は重なる老中として、最も賢明であり、且つ最も將軍の信寵を得てゐた。彼は決して伴食でなく、全く首相の位地を占めてゐた。彼にして成す能はずんば、何人も成し能はざるものであらう。然らば則ち彼がその責任を、最も多く負擔すべきは、當然の事である。とは云へ必ずしも彼一人に限つたことではない。要するに是れ將軍を戴く幕府そのものゝ、總體的責任と云はねばならぬ。果して然らば其の責任を果さなかつた責任として、幕府は當然、政權を朝廷に返上すべきである。

（第七）委任政治の徹底困難

或は曰く、幕府は朝廷に向ては委任政治であり、大名に對しては獨裁政治である。即ち幕府は何等朝廷よりは實際政治に就いて、容喙を受けない。されば幕府そのものからして、別に朝

廷の御趣旨を伺ふとか、御允許を請ふとか云ふことさへなかつた。否從來如何なる重大事件に就いても、通知とか、報告とかいふことさへも、全くなかつたといはぬが、殆んど是れ無かつた。且つ又大名に向つては、譜代にしろ、外様にしろ、元より彼等が幕府に向つて、建白するとか、請願するとかいふことはあつても、兎に角、幕府の方から、彼等の意見を諮問する筈の事はなかつた。政權の動く所は、申すも憚りあれども、上は朝廷より下は百姓町人に至る迄、皆幕府に對しては、絶對服從であつた。

幕府それ自身の政治は、一切の事、老中共の相ひ會する御用部屋にて決し、時としては、御用部屋からして、三奉行——即ち、町奉行、勘定奉行、寺社奉行——若くは大目付、目付等に諮問することもあり、又た溜間詰の大名に、意見を徴することがあつた。併しながらいづれにしても御用部屋に於て評決したることを將軍に伺ひ、裁可を得て行ふのが、幕府の政治の仕組であつた。

× × ×

されば外交の事もその通りに行へば、何等面倒もなく行はれたのである。これが二百幾十年間幕府の仕來りである。然るに阿部正弘は、この仕來りを破り、一方に於ては、これを朝廷に奏上して叡慮を伺ひ奉り、他方に於ては、之を大名に諮りたるが如きは、畢竟彼が優柔不斷、自ら責任を取ることを恐れ、斯の如く姑息手段に出たのであらう。

× × ×

若しこの際テキパキと開國なら開國といふことを、斷然幕府の方針と定め、これを以て内外に臨みたらば、外は元よりこれにて承知をし、内も亦多少の不平があつても、これに向つて反抗する程の猪武者もあるまじく。つまり斯の如くにして我が國の開國の大政策は、下に唯して出で來つたのであらうと、今以て口惜しく思つてゐる者も少くない。

以上何れも一理である。

英語にて Might have been 即ち斯くすれば、かくあつたかもしれないといふことは、歷史上に於ても、しばしば我等の遭遇する問題である。

× × ×

されどそれは興味ある話にして、國際問題には、何等の干係

もない。我等は敢て阿部正弘を辯護するではない。されど彼の立場について考ふれば、彼の取りたる方法が、當時に於ては最も賢明なる方法であつたかも知れない。何となれば、當時の情勢は、到底幕府をして、從來の專政制度を徹底せしめんとするも、不可能であつたからだ。

不可能と知りつゝ、强ひて之を行はんとするは、決して思慮ある政治家の爲すべき所ではない。假に今論者のいふ如く、阿部正弘が大名にも諮らず、朝廷にも奏上せず、一切の事は幕閣限りにて實行したとせば、如何に成り行くべきであつたらう乎。第一當時の大名は、決してそれで滿足すべきものではなかつた。恐らくは幕府が斯く爲したる時に於ては、三家中の水戸は勿論、尾張でも滿足はしなかつたであらう。況んや外樣の薩摩杯は、斷じてそれを承知しなかつたであらう。若し大名中、一人起て其の不可を唱ん乎、皆な相ひ擧りて、之に唱和す可き形勢であつた。現に島津齊彬の水戸齊昭に與ふる嘉永六年七月十日附の書翰中にも、かゝる事が記してある。

『兎角御秘しに相成候哉之由に相伺候。此儀乍レ恐人氣之動亂を老中共恐れ候故にも可レ有レ之候得共、餘り御秘し過候へ者、猶更人々疑念を起し、小事をも大事に申ふらし候譯に御座候。日本に生れ候ものは、一人として皇國をあしかれと存候者は無レ之事ゆへ、此度之如き儀、御秘しに不レ及、御三家方御三卿方は勿論、國持諸大名えも委敷被二仰聞一、存寄之御諒も御座候而、御評決に相成候へ者、人心一和之基ひにも可二相成一、當時のごとく御秘事計りに而者、如何程之御良策に而も、人心疑惑可レ仕は必定に奉レ存候。加樣之儀申上候者誠に恐入候得共、何分にも後來之處心配奉レ存候而、外に愚存申上候所も無レ之候間、荒增此段奉二申上一候』

× × ×

斯る意氣込であれば、國持大名等を無視して、幕府の役人のみにて、斯る大問題を解決し去らんとすることは、到底爲し得べき事ではなかつた。殊に朝廷と幕府の關係に就いては、猶更のことである。

元來委任政治と云ふも、朝廷から御委任遊ばされた譯でなく、徳川幕府が、獨り自ら勝手に政權を握り、事後承諾の態にて、委任政治は出で來つた。されば朝廷は初めよりそれには御

足ではなかつた。後水尾天皇の如きは、最も御不平なる御一人で在した。爾來いづれの天皇方も止むを得ず、長い物に捲かれる御姿にて、それに御任せ遊されて在したが、御心中は決して御安心遊ばされなかつた。光格天皇の時に至りては、前にも記したる如く、尊號問題にて、幕府と衝突を來らせ給ひ、遂に一旦仰せ出されたる事も、御引込ませ遊さるゝの已むなきに至つた。然もそれは萬々已むを得ざる次第にて、全體の空氣は決して良好ではなかつた。幕府もその以後は頗る自戒するところあり、なるべく朝廷の御意を害ふことなからんと勗めた。斯る場合に時勢は、外來の刺戟の爲に、急轉直下した。

× × ×

それは既記の通り、弘化三年八月二十九日、

『尚此上武門の面々洋蠻之事、不レ侮二小寇一、不レ畏二大敵一、籌策を立、神州之瑕瑾無レ之樣、御指揮候て、深可レ奉レ安二宸襟一』

云々の御沙汰があつた。斯る御沙汰書に對しては、如何に幕府が委任政治の原則に據りて、餘計の御世話であると申上んとするも、決して能はざる所だ。斯る次第なれば、幕府がその以來外國船渡來に就いて、その事情を朝廷に奏聞するも、止むを得ぬ次第であつた。

奏聞して奏聞の結果が、又朝廷からの御沙汰を來す動機となりたることは、これ亦た止むを得ぬ次第であつた。此の如くして歩一歩づゝ朝廷の御干渉は、幕府に浸潤し來つた。

上述の如く、幕府は到底朝旨を伺はずしては、外交のことを專斷すること能はざる破目に陷つた。これは幕府自ら求めて然かしたのではなく、朝廷から進んで然かするに至らしめ給うたのである。

若し幕府が、然かせざるに於ては、必ずこの問題に於て、朝廷と衝突を免かれなかつた。

× × ×

斯る場合に於ては——尊號問題の比どころではなく——大名の中にも朝廷の御趣意を奉ずるものあり、庶民の中にも斯る者輩出し、遂にこれが爲に大亂を來たすやも知れなかつた。予は繰り返して云ふ、若し朝廷と幕府とが、外交問題に付て確執を來たさせ給ふ場合には、決して日本の大名や士民は、朝廷を孤立に陷らしめ給ふことはなかつたであらうと。

今夫れ幕府が委任政治を勵行する程の實力があつたならば迚

も角も、既にその實力を失墜したる後に於て、猶強ひて之を行はんとせば、不覺自ら禍を招くの外はあるまい。

されば阿部正弘が、從來の委任政治、獨裁政治を改め、幕府を中心とし、上に朝廷を戴き、下に大名を控へ、三者一致の力を以て、國難に當たらんとしたるのは、最も賢明なる方法といはねばならぬ。これが恐らくは當時に於て、最善の方法であつたらうと思ふ。

× × ×

且つ如何に幕府が獨裁政治を行ひ得る實力を、今尚保有したと假定するも、幕府一個獨裁的に斯る大事件を行ふが得策である乎、否乎は疑問である。

何故なれば幕府の制度は、殆ど對外的關係を無視したる制度だ。一度鎖國令を施行したる上は、最早外艦の來たる心配はなきものと豫定しての制度だ。然るに世界の大勢は、時と共に變化し、到底日本が世界より孤立すること能はざる狀態に瀕したる場合に於ては、從來の制度をそのまゝ株守し、そのまゝ實行することは、最も不都合と云はねばならぬ。云はゞ嘉永安政の時勢は、未曾有の時勢だ。この未曾有の時勢に處するには、又た未曾有の方法を以てすることが、當然ではあるまい乎。

乃ち幕府に其の實力ありとしても、猶且つ變通の策を講ぜねばならぬ場合である。況んや幕府に其の實力なき場合に於てをやだ。

× × ×

若し又幕府が、朝廷の御沙汰を待つ迄もなく、幕府は幕府の委任政治の範圍内にて處置する。故に朝廷に對し奉り、御干渉一切御無用とはねつけ、大名等には、餘計なることに、喙を挾さまんよりも、須らく沈默して幕府の命を俟つべしと、高壓的に押しつけたらんには、如何なる結果を來たす可き乎。それこそ日本は外患どころか、忽ち内訌の渦の中に陷つたかも知れない。

斯る破綻危局を生ぜしめずして、兎に角、曲りなりにも小康を保つて、この危機に處することを得たのは、實に賢明なる阿部正弘の處置として、當然過ぎる程、當然のことである。

× × ×

併しながら我等が遺憾であることは、只だこの際、原案なしに、衆議を聽かんとしたことだ。苟も一國の大宰相として、

自ら國政を秉る以上は、自ら信ずる所あり、自ら見る所あり、而して之を以つて、輿論を誘ひ、之を以て輿論を導き、而して之を以て輿論を率ゐねばならぬ。然るに阿部正弘は何等輿論を善導し、善誘するところなく、只だ自ら白紙の情態にて、他の云ふところを聽かんとした。これが幕府にとつての一大失策にして、これ亦た一大無責任と云はねばならぬ。予をして云はしむれば、阿部の失策は、上下に國家の要務を協議したるが爲めではない。但だ協議するに原案を持たなかつたことだ

誰でも少しく考慮したらんには、當時到底外國と戰爭などの出來るものではなく、又た本來外人等も戰爭の爲に來たのではなく、貿易通商の爲に來たのであれば、彼等に向つて此方より戰爭をしかくるべき筋合ではないことは分明だ。

されば幕府は先づ此處に開國の國是を定め、その國是によつて、衆議に諮り、その國是によつて、宸慮を伺ひ奉り、而して全國悉く一致と云はざる迄も、輿論を自らの信ずる所に導き、これを以て内を堅め、これを以て外に臨まば、誠に申分なき仕方であつた。然るに阿部はどこ迄も原案なくして諮問した。幕府自らの方針を明白に定めず、たとへ極秘には定めたりとするも、定めたることを明白にせず、所謂白紙の情態にて天下に莅みたる爲、衆議紛々、底止する所を知らざるに至つた。

× × ×

凡そ議事には原案ありて、それによりて賛成も出來、反對も出來るものだ。然るに原案無くして、只だ御意見を伺ふといふ時に於ては、その意見の歸着する所なきが當然である。

この一點については、繰返して云ふが、實に遺憾千萬であつた。併しそれが爲に、幕府が獨裁專制の制度を改めて、公議に諮りたることを咎むるは、平允の判斷ではあるまい。

阿部が朝廷に奏聞し、大名に諮りたるは、時節柄至當の事だ。何故に彼は朝廷に向て、外交の眞相を申上げ、朝廷をして安んじて、開國の國是を御允可あらせ給ふ樣取り計はさりし乎。何故に大名に向ても、旗本に向ても、將た一般士民に向ても、開國が當世の大計であることを指示し、一國の輿論を、開國に歸着せしめなかつた乎。人は阿部を臆病と云ふも、予は阿部其人にも、當時は定見がなかつたのであらうと思ふ。

(第八)　阿部正弘に定見なし

何れも幕府の方から朝廷に對し奉り、御相談申上げるといふわけでなく、當は朝廷の方から積極的に幕府に向つて、叡慮の程を諭し、且つ對外交渉の模樣も、御報道申上ぐべく御下命あらせられた次第であれば。若し萬一幕府が從前の如く、何處までも委任政治を楯にとつてゆく場合には、違勅の責を負はねばならぬことになる。されば我等は阿部正弘が、朝廷の思召を伺ふといふことを、對外交際に於ける、一の要件としたることは、必ずしも自らが責任を避くるといふ意味ばかりでなく、立派なる理由があり、又た政治家として最も機宜の宜ろしきに從うたごとく信ずる。只だ返すぐも遺憾であつたのは、何故に幕府自ら對外の大政策、大方針を定め、これを朝廷に申上げ、朝廷をして御落納あらせらるゝ方法を取らなかつたのであるか。繰返して云ふが、叡慮を伺ひ奉るも、大名の意見を諮詢するも、當時の政策としては、然るべきことである。只だそれについて、何故に幕府自ら定見を示さなかつたのであるか。

× × ×

凡ての顛倒や、難題は、廣く上下の公議をとるといふ意味から來らずして、幕府彼自身の無定見から來つたのである。世間では兩者を混同して、幕府が専制主義を改めて、公議主義となしたことを、咎むる者があるが、それは政治の活機を知らない机上の空論である。何人が政局に當つても、當時の幕府では、上は朝廷の思召を伺ひ奉り、下は諸大名の意見を徴するといふことは、避くべからざる事であつた。

× × ×

只だこの場合に於て、幕府當局者として、自己の大活眼、大見識を以て、對外の政策を定め、これを以つて、上下の意見を利導し、國家の力を打つて一丸となし、以つて外國に當るといふ方法をとらなかつたのは、如何にも殘念である。

世間では、阿部正弘を、弱き政治家といふが、予は必ずしも然りとせぬ。只だ阿部に不滿なるは、その見識の不徹底であつたことだ。

阿部は人に向つて、其必要なき論點までも、意見を鬪すことを欲する者ではなかつた。彼は議論の爲に議論を欲する者ではなかつた。併し必要に應じて、自己の意見を發表するを恐るる程の臆病者ではなかつた。これは彼が水戸齊昭と意見の交換に際して、しばしば齊昭の意見について、反對説を唱へ、若くは

同意し難き旨を、明白に語りをるのでも知られる。新伊勢物語を見れば、彼が御三家の一人にして、其の年齢から云へば、父とも見らる可き水戸齊昭に向つて、時としては忠告までも試みてゐるではない乎。



阿部伊勢守

併し如何にせん、彼自身には一定の考なく、謂はゞ彼も開港でもなく、攘夷でもなく、只だ當分談判を長引かせ、然る後

に時を以て解決をつけんとしたのであつた。彼は當座に開戰するなどは、不可能であることを、百も承知してゐた。而して彼は其の希望通り談判を、三年の後まで延引せしめたならば、果して我が武備が充實して、彼と戰ふことが出來ると信じたであらう乎。恐らく彼には其の確信はなかつたであらう。さりとて彼は當初から開國主義をとつて、立つだけの勇氣と云はんよりも、見識がなかつた。故に評する所は、彼の政策は手から口への、其日暮らしに止つた。

× × ×

併しこれは單に阿部正弘のみでなく、當時に於て、最も世界的知識者の一人といはれたる島津齊彬の如きも、その意見は殆ど阿部と同一であつた。されば吾人は強ひて阿部の見識が徹底しなかつたと云つて、阿部一人を咎めることは出來ない。

若し阿部と島津齊彬とが、今少しく長く存命したならば、幕府の最後も、或は異りたる解決方法をとつたかも知れぬ。併し彼等は、時を大なる味方となしつゝも、却つて味方たる時の爲めに致された。即ち彼等はいづれも短命にして逝いたのである。その事は他に語る機會があるであらう。

× × ×

幕府の制度では、大名は政治上に就いては、京都と何等の接觸をも持つことを許されなかつた。然るに當時に於ては、京都と大名との關係は、種々なる溝渠を通じて行はれた。例へば水戸は有栖川家及び二條家と結婚の關係あり、薩摩は近衞家と祖先以來の關係をつなぎ、土佐は三條家と結婚の關係あり、その他大名と公卿との緣組やら、自餘の關係にて、いづれもそれ〲京都と大名の或者とは手を握り合つてゐた。故に幕府があくまで委任政治を墨守して、朝廷を政治の外に押込めんとするも、大名は決して承知するものでなかつた。世間では、水戸が京都に手入したことを咎むるけれども、薩摩の如きは、恐らく水戸以上であつたかも知れぬ。現に島津齊彬が、近衞忠熙に與へたる書中にも、

御内々勅諚等之儀相叶申間敷や、度々手後れに相成候而者、實に朝廷之御恥辱は差見得申候間、何卒御賢慮の程恐入奉二申上一候。

云々とある。

× × ×

即ち島津齊彬は、近衛忠熙を通し、朝廷の力を假つて、大船巨艦を製るの許可を、大名に與へしむ可く、高壓的に幕府に加へんと試みた。斯の如く大名が手を代へ、品を代へて、朝廷と直接の交通をなしつゝある場合に、幕府が委任政治を楯にとつて、それ等のことを停止せんとするも、到底行はるべきことではなかつた。語を換へて云へば、當時の幕府は上は朝廷を、下は大名を敵として、委任政治を徹底し得べき實力を有したか、否乎。それを思はゞ時に從つて變通するは、止むを得ぬことだ。

只だ如何に變通しても、自ら國運の向ふ處に目途を定めて、之れを利導すべきである。この一點に於て、幕府當局者には大なる責任がある。即ち幕府の第一責任は、準備を怠つたる事だ。第二責任は、示導を怠つた事だ。

（第九）朝廷と幕府

朝廷は國家的問題として、外船の頻繁に我が邊海に出沒するを、安からぬ思召もて、眺め給ひしことも、當然のことである。然のみならず朝廷親政の動機は、幕府建設以來潜在してゐた。それが時と共に顯れ來るも、必然の勢と云はねばならぬ。

但だ當時の朝廷は、外交の事にかけては、その知識が最も遲れてゐた。これは朝廷の罪ではなく、朝廷をして、かく外交知識を缺乏するに至らしめた、幕府の罪と云はねばならぬ。從來朝廷を内外政治の外に排除し去りて、而して朝廷に向て、内外實際政務に迂なるを咎むるが如きは、寧ろ咎むる者の咎であらねばならぬ。

斯る次第であれば、朝廷は只管全國の重なる寺社に向つて、國難鎭靜の祈禱を捧げ給うた。これは朝廷自らの思召ばかりでなく、幕府からもこれを慫慂し奉つた。

×　×　×

即ち嘉永六年六月、ペルリーが一先づ浦賀灣より引上げた時には、京都所司代より武家傳奏の三條實萬、坊城俊明に宛て、

『浦賀表へ渡來の異國船、退帆に及び候條、御達申候はゞ、叡慮にて仰出され候御祈禱も、最早沙汰止可レ被レ仰出哉に候得共、異國船調伏の儀は、御先蹤も有レ之事に候得ば、退帆之有無に不レ拘、神國之光輝彌相增候樣有レ之度候。此段御兩卿へ御示談に及び候樣、年寄共より御越候事』

と申し上げた。

年寄りと申すは、江戸の老中の事である。斯る次第であれば幕府も、朝廷が幕府に同情せられ給うて、御祈禱遊さるゝ事を、寧ろ歡迎してゐた。

朝廷では更に武家傳奏、三條、坊城等が、江戸に下りたる時に於て、江戸の老中に向ひ、それ〴〵親しく叡慮の程を示し給うてゐる。

即ち嘉永六年十一月、傳奏三條實萬は阿部正弘その他老中に向つて、關白鷹司政通の書取書を授けてゐる。その書取書は左の通りである。

『近來度々異國船渡來有レ之、殊には去夏亞墨利加國より、差出候書翰之趣不ニ容易一儀と、深被レ惱ニ宸襟一候處、今般右御取計方之儀無ニ急度一兩人へ被ニ達置一候旨、脇坂淡路守より致ニ承知一即及ニ言上一候處、當地不ニ一方一御配慮之御事と叡感に被ニ思召一候。誠に神州之一大事に候へば、猶來心堅固に國辱後禍無レ之樣にと被ニ思召一候叡慮をも、幸實萬從明參向に付、宜申述旨御沙汰候。仍此段申入候事』

斯くて阿部は又この書取書に就ては、左の意味を答へてゐる。

一、容易に取計も難レ成候は常々御世話も御座候得共、何分當時十分之御手當も相成居不レ申候。一時之儀は兎も角も可ニ相成一候得共、一發すれば何く迄も參らねばならぬ事故、得と整備出來之上ならでは難ニ取計一。夫故彼是と隙取、御評議之事に有レ之候。

先年穩に爲ニ取計一、其上彼より亂妨も有レ之時は盡力候て、取計候積之事と委敷被レ申了。

一、何分叡慮をも被レ惱、關白殿にも御心配被ニ思召一候と存候。上(將軍の事を云ふ)には叡慮を被レ安候樣に被レ遊候御趣意專ら之御事、私共にも一同其心得にて、精々心配致居候由。尤當地にて之御取計は、叡慮を被レ安候樣被レ遊候事こそ、御當然之御事、一同にも其心得と申事縷述し被ニ申述一了。

一、叡慮に、何樣被レ遊度と申思召も被レ爲レ在候はゞ、無ニ御遠慮一被ニ仰出一候樣、左候はゞ又其思召にて、御取計も可レ仕儀と申事、再應被ニ申述一、若直御沙汰も如何にも被レ爲レ仕候はゞ、兩人より申越候樣にと、隨分懇切に被レ申也。

一、此度兩人出會　幸之儀に付、從二彼方一も右之次第被二申述一由、何卒此　趣も叡聞にも達　候樣、殿下へも申入　候　樣にと、慇懃に被レ申也。

斯の如く朝廷と幕府の間は、誠に圓滿に事が運んでゐた。而してこれも畢竟、幕府に於て阿部正弘が、大政處理の任に當つてゐたからである。されど一膜を排して考察すれば、阿部の所說は、問題の要點に觸れては居ない。問題は和戰でなく、開鎖である。然るに阿部の說く所は、鎖國的平和である。斯る蟲の好き話が實行さる可きものではない。

× × ×

この場合に於て、久邇宮朝彦親王は、天台座主として、御祈禱の御用を勤め給うたことは、云ふ迄もない。卽ち嘉永六年六月には、親王は天台座主御護持僧にあらせらるるを以つて、左の宣命があつた。

『此頃夷船來二相模國三浦郡浦賀沖一、其情實難レ知、防禦之備雖二嚴重一近來度々寄二近海一、叡念不レ安、偏在下仰二佛陀之冥助一速退中攘夷類上莫レ損二國體一四海靜謐天下泰平。寶祚長久萬姓娛樂御祈自二今日一七箇日一寺一同抽二丹誠一可二勤行一之事。

六月十五日

但だ單に御祈禱といふばかりではなく、この頃からして親王は、近衞内大臣忠熙、三條大納言實萬等と、最も主上の御信賴を受け、種々その内議に參し給うたことは、言を俟たぬ。

× × ×

此時に於て幕府では、嘉永六年六月廿一日將軍家慶薨じて、その子家定繼いだ。これは幕府にとつて、非常なる損害であつた。家慶はその父家齊に比すれば、比較的缺點少なき將軍であつたが、又た家齊ほどの長所も持たなかつた。

云はゞ彼の一生は平凡に始り、平凡に終つた。併し彼は始めに水野忠邦に一任して、改革に手を燒き、後には阿部正弘に一任して、兎も角も難局に際して、大なる破綻を見ず、ペルリー入港の騷の間に不安心を懷きつゝ逝いた。

彼に代りたる家定は、平凡といふよりも、彼に接近したる者の言によれば、寧ろ一種の片輪男であつたらしい。如何にも癇癖が強く、而してその身體にも申分があつて、男女の交りさへも

出來ないといふ說があつた。兎に角、最も困難なる危局に於て最も困り入りたる將軍であつた。子を知るは父に如くはなしで、家慶も百歲の事を豫め心配し、此に於てか、一橋慶喜を愛し、ゆく〱は彼をして、將軍職を襲がしめんとする心持があつて、側近の者にはその意をもらしたと云ふ說もある。

一橋慶喜はいふ迄もなく、徳川齊昭の第七子、即ち七郎丸にして、しかも有栖川宮家より嫁れたる文明夫人と稱する御簾中の腹であり、父齊昭も始から特別に扱ひ、然もその人物は夙に俊敏英發の名が顯はれたれば、家慶が彼に目をつけたのも、當然の事であつて、或は彼を將軍の世嗣とせんが爲に、一先づ一橋家に入れたのであらうと揣摩する者さへあつた。併し彼を一橋家に肝煎りたるは阿部正弘で、彼を他日の將軍と仰ぐ可く、阿部に其の下心あつた乎、否乎は姑らく措き。少くとも阿部は、その父たる水戸齊昭の心を慰むる爲、即ち水戸老公懷柔政策の一として、然したものであらう。

然るに詎くんぞ知らん、この一件が、他日徳川幕府を倒す、唯一の動機でなき迄も、主なる動機の一たらしめたることを。實に世の中の事は、思ひ掛なき事が、事から事へと連絡するものだ。

× × ×

幕府は將軍の代替りに於て、幸にもその口實を得、米國に對しても、又露國に對しても、將軍代替りであるからとて、談判の決答を延引す可く、これを利用したが、然もこの癇癖強き不具なる將軍出で來りたることは、幕府にとつて、大なる不仕合だつた。否な寧ろ致命傷であつた。

× × ×

話は移つて、天明の丸類燒にかゝらせ給うた皇居は、松平定信の努力によつて出で來つたが。嘉永七年即ち安政元年四月六日には、御所の中より火を出し、これが爲に孝明天皇は始に鴨社に避け給ひ、それより聖護院に御幸し、後には桂宮の邸に假皇居を定め給うた。

この火事の起因は如何にもたはいもなき事にて、實は今城定成の女にして、先代に御仕へ申したる常侍、孝順院が、ことの外毛虫が嫌であつた。然るに芝御殿の中、孝順院住居、東の方湯殿の傍に梅の枝あり、そこに毛虫が生じたから、孝順院召使の、紅梅といふ女が、主人の禁物故、竹の先手に蟲を少々結付

け、毛虫を焼きゐたるに、飛び火して湯殿の屋根に燃付き、それより大火になつて、御所全體を焼拂つたのである。これは隨分の大火にて、寺社二十四所、堂上十四家、同抱屋敷等九所、地下官人以下八十二戸、藩邸以下十五所、堂上家來百五十戸、武家家來三十戸、町家五千七十八戸、町數凡そ百九十町に及んだといふことである。

× × ×

この大火に就いては、朝彦親王青蓮院宮様は、直に駈け付け給うた。その御模様は左の通りである。

『正午刻禁中炎上、仙洞御所幷北手芝御殿不レ殘炎上、宮御方には即刻御歩行にて御供頭大谷宮内卿幽信、御近習林隼人八瀬雅樂御先依田數馬、池田左中、前後押二人御參内被レ遊候處、最早先刻、聖上、祐宮御方、敏宮御方、和宮御方、新待賢門院雅子御方々、下加茂社御借屋へ遷幸被レ爲レ在候に付、直樣夫へ御參、天機御伺、夫より御本殿不レ殘明ケ渡、此御殿を以宮御方御住所に被レ用、御本殿代聖護院の坊を被レ用、聖上祐宮御方は、午後三時頃、下加賀御板輿にて聖護院御門室へ御遷幸、敏宮、和宮、新待賢門院御方は、常御殿上人六名御供奉、午後五時頃再御成、青蓮院御門室を御住居とす。准后御方は御所清和院御門内北へ入、中筋御下り御殿を以而御役所と相成、敏宮御方一品淑子内親王(常御殿梅の間、波の間、黒書院上の間の外等被レ用)同和宮親子内親王(黒書院上の間之外等被レ用)仁孝天皇女房當今御實母元宰相典侍新待賢門院雅子御方(黒書院上中下段竹之間。』

× × ×

當時宮様は天台座主で在したが、決して長く佛門にあることを以て安じ給はず、常に京都の御守りの手薄きを心配あらせられ、若し萬一異國船が、小濱に來るか、若くは浪華に來るかといふ場合には、自ら叡山の衆徒を率ゐて、朝廷を守らんとの思召にて、恰も元弘年間の大塔宮に自ら比し給ひ、衆徒にも武藝を修練すべしと命ぜられ、御自身にも御力量を修練遊さるゝ爲、庭に土俵を積置かせられ、時々之を持上げ給うたが、遂には五斗の量ある土俵を、容易くあげ給ふに至つたとの事である。又甲冑、野劔等の御用意もあり、何時にても戰鬪準備が出來てゐるといふ御有様で、又た常に御頭を剃ることを嫌ひ給ひ、御總髪の時が多く。たまく剃り給ふ時は、剃刀を五六挺よく

とぎ遊べ、手早く取り繕らせ給うたとの事である。

當時の朝廷が異船の事について御憂慮あらせられたるは、單に國家の爲といふばかりでなく、京都の御守りが誠に手薄きを感ぜられ、その爲に取越苦勞の樣なれども、當時に於て、種々防禦策を講ぜられた。或は叡山に、或は吉野に御遷幸あらせらるゝとか、又は當時の町奉行淺野中務大輔長祚などの意見には、兩本願寺をして、守備の任に當らしむるなどの計畫があつた程である。――當時兩本願寺は約七萬の傭兵を召集し得べき見込みありたりと淺野の意見書に記してゐる――斯る次第なれば、朝廷の御憂慮も、誠に當然のことであつた。

×　　×　　×

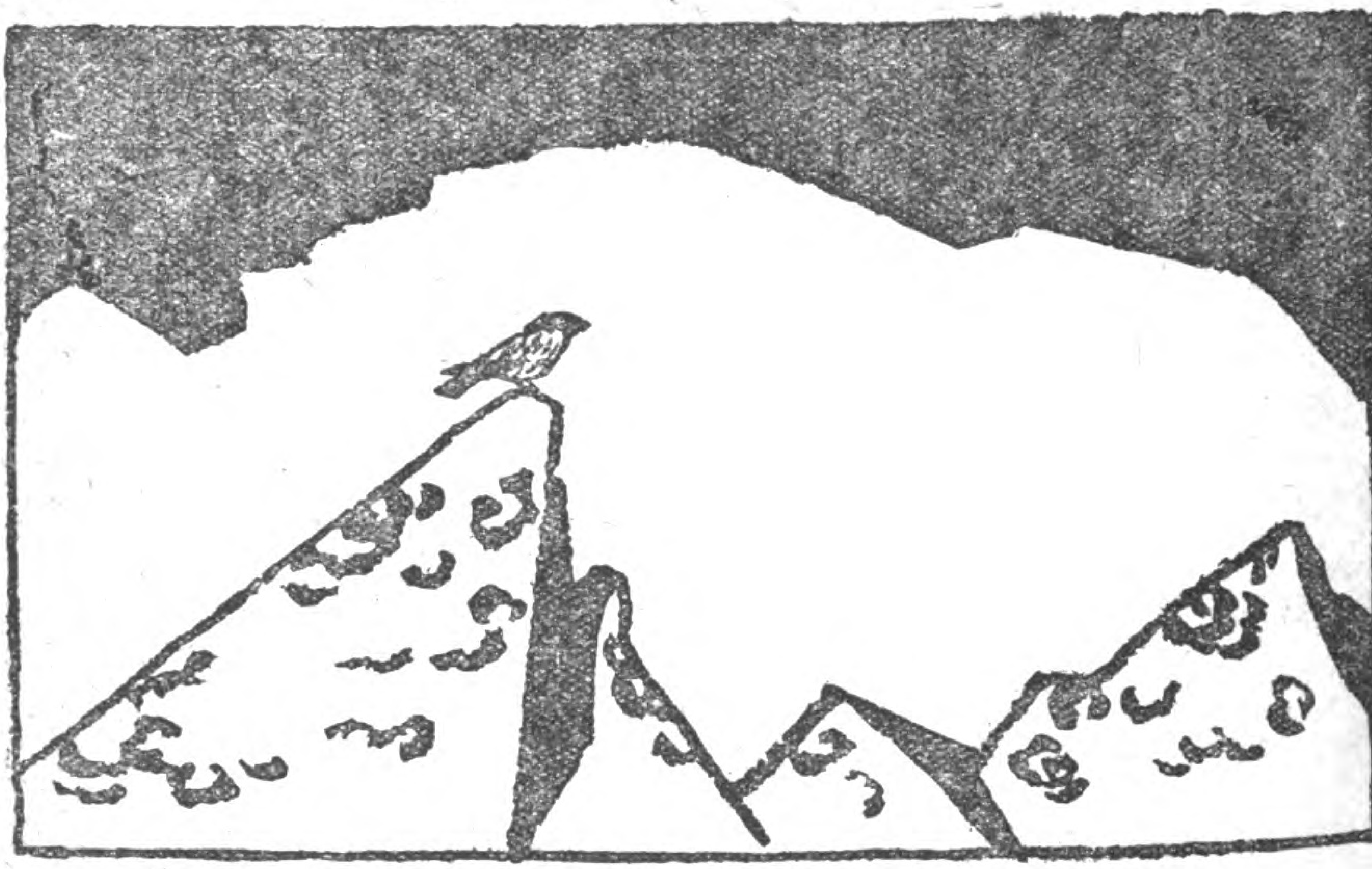
然るにその際に於て皇居炎上の難に罹らせ給うたことは、誠に以つて宸襟を惱まし給うた次第である。されば幕府の力にてもそれぞれ評議を凝し、國家大多事の際とは云ひ乍ら、朝廷の御迷惑を傍觀するわけにはゆかず、四月十九日阿部正弘は京都所司代脇坂安宅に向つて左の書翰を與へた。

「以二内書一申入候。不同の時氣候得共、倍御安靜御勤珍重存候。然ば此度は禁裏御所方御炎上誠以驚入存候。非常之儀とは乍レ申叡慮之程如何にも恐入候次第に候。先以禁裏御所方彌御機嫌不レ被レ爲レ替候御儀被レ爲レ在二御同意一恐悅不レ斜存候。別而御自分には彼是御心配何程歟萬々致二遠察一候。爰元にても品々心配評議中、同列共へ御目見にて此度之儀、上にも深く恐入被二思召一、彼是御配慮の御沙汰も被レ爲レ在、當節海防を始、品々御事多に候得共、御造營之儀御先例にては餘程時日相懸候得共、此度之儀は御別段之御事、何事を被レ爲レ差置一候ても、何卒一日も早く御出來に相成候樣被レ爲レ進度、同列共格別精入申談取計可レ申旨、呉々厚被二仰出一、實以思召之程御尤之御儀難レ有存レ堪候事に候間、何れも肺肝を碎き申談も御速成に相成候樣取計可レ申候間、於二叡慮一も御安心被レ遊候樣致度存候間、右等之趣御自分より程能關白殿初へ被二相咄一達二叡聞一被レ置候樣存候。依レ之此段申參候。　以上。

四月十五日　　　　　　　　　　阿部伊勢守

脇坂淡路守樣

これは相當の事であるが、幕府としては、誠に適當の處置と云はねばならぬ。斯る事に就ては、阿部は如何にも氣の利きたる政治家であつた。



船の犬「カイン」

葉山嘉樹

私たちの船に一匹の犬がゐた。雌犬であつた。船長が連れて來たのだ。
船長はその犬に『カイン』と名をつけた。『カイン』とは何の意味であるか、水火夫たちには解らなかつた。多分何かの譯ではあるまいか。

カインは、船員の半舷からは愛されて半舷からは憎まれた。カインは誰にでも慕つてまとひついた。カインは人間の階級と云ふものを知らなかつたのだ。ところが、船長から見込の惡いものや、給料が昇り損ねた者などは、カインに當つた。

耳の素晴らしく長い、裂長の眼の、毛並の艶が迚もよくて、白い顔を特に目立たせるための女の入れぼくろほど、効果的な斑が白の地に茶色に染め出されてゐた。何と言つても、彼女が別嬪で、魅力に滿ちてゐることは、誰にも異存が無かつた。

殊に汽船の上だから、泥や何かに汚れることは絶對にないし、食物は船長の命令に從つて、コックが腕によりをかけたビフテキの殘りを與へるし、カインのベッドは船長室からブリッヂへの昇降口になつてゐるマットの上なのだ。そのマットにはカインの脱毛以外には、一つの塵でさへもつけて置くことは出來ないのであつた。

カインの幼年時代が思春期に移る時分には、彼女は全く驚くべき美しい女になつた。

『いい女になつたなあ、おめえは。』

と、西澤が言つた。水夫たちはブリッヂから見えないメインデッキの、石炭庫の出入口の陰に集つて晝食後の休みをカインとふざけてゐた。

『氣をつけろよ、カイン。西澤は危ねえんだぞ。』

大工が言つた。水夫たちは笑つた。

船は佐渡と本土との間を抜けて、北海道の小樽に航海中であつた。右舷に日本海沿岸の陸地がセンチメンタルに眺められた。

『畜生奴！　俺なんざ叶はぬ縁よ。なあカイン。』

西澤はから云つて、カインと顔を並べてその長い耳へ彼の頬をこすりつけた。

『止せよ。船長にでも見附からうもんなら、いきなりお払箱だぜ。』

『、、なくてもいいでせう、と言つてやらあね。』

『馬鹿だなあ、お前は。、、、、だぞ。』

『船長にでも言へよ。』

『全くおめえは助平だよ。人間の常識を飛び越してらあ。』

『常識なんてものを背負はされるやうな、そんな酷い事をしたことたあねえや。』

『チョッ、畜生の話出しやがつた。』

大工と小倉と西澤とがヘラズ口の叩き合ひつこをやつてゐた。

仙臺は眼を輝かして、カインを眺めてゐた。

船の上には陸よりも早く秋の涼しさが襲つて来る。暖い港から寒い港へ向けて航海する時は、殊更らにそれが甚しい。陸のやうに待つてゐるのではなくて、飛び込んで行くからだ。

『、、、、カイン！』

仙臺はさう鋭く呟くと、いきなりカインを蹴飛ばした。

カインは悲鳴を擧げて、上甲板へ駆け上つた。

『チョッ！　仙臺の野郎、本氣で嫉いてやがるんだぜ。』

西澤が吐き出すやうに言つた。

『糞にさわらあ！』仙臺はカインの駆け上つて逃げたタラップからブリッヂの方を、眼で追ひながら言つた。

『オイ三上、駄目だぞ。おめえはボースンと共犯ぢやねえか。直江津で下船されたかつたのが目付けもんだつたんだぜ。カインなんか蹴つ飛ばさうもんなら、小樽で思ひ知らされるぞ。』

小倉が言つた。全くその通りであつた。三上はボースンを下船させるために、二度までもサンパンを押したのだつた。そこで、その罪

科白！はボースンと共同で行つた事なのだ。然し總ての人間が同じやうな神經や、考へ方を持つてはゐない。三上（仙臺）には三上獨得の考へ方があつたのだ。そして三上のやうな飛び離れた考へ方と云ふものは、常人に想像の出來るものではないのだ。

號鐘が鳴つた。午後の作業開始の合圖が鳴つた。水夫たちは起つた。そして、おもてから來た三等運轉士に、舷縁の錆落しと、ペン塗りとを命じられた。で水夫達は「おもて」へペン罐を取りに行きかけた。

その時、船は急に方向を變へ始めた。船尾の水脈が曲り始めた。當番である筈の一等運轉士が、ブリッヂから降りて來てサードに何か言つた。

『カインが海へ落つこつたんだ。みんな見張りだ！　懸賞付きだぞ！最初に見付けた奴に十圓だ。』

サードが怒鳴つた。

『よし來た。』

一番先に叫んだのが仙臺だつた。と同時に彼は驅け出して、倉庫からロープを出すと直ぐに前檣に登つた。全で猿だつた。彼は頭の働きの代りに筋肉の働きを神樣から授かつてゐた。その點では船中で誰れも仙臺にはかなはなかつた。彼はカインを蹴飛ばしたのは自分だつたと云ふことを、多分もう忘れてしまつたのだらう。或は、『十圓だ！』と宣言されると同時に、その方へあらゆる思考力が流れ出してしまつたのだらう。

小倉が當番の舵手と交替してブリッヂに上つた時には、仙臺はマストのテッペンに登つて、一本檣の上にとまつた山鳩のやうに、キョロ／＼海面を見廻してゐた。船が方向を變へたゝめに追手にたつた北風は、三上の止まつてゐる邊に煙を吐きつけた。

小倉は舵輪を操りながら、仙臺が眼を擦つたり咳をしてゐるのを見た。そして危く笑ひ出しさうになるのを抑へつけた。

船長は非番なのにブリッヂで、小作りな仁王のやうな相格で、仙臺と同じやうに『望遠鏡』でキョロ／＼してゐた。だから、船長がカインの溺れる姿の代りに小倉の笑顔でも見やうものなら「事だ！」と小倉は考へた。

波田はボートデッキへ上つて、ブリッヂから見えない陰に攫り長くなつてゐた。彼はカインがどうして海の中へ轉げ込んだか、と云ふ事から考へて、犬の種類、犬の境遇にまで考へ進んだ。そして彼は『犬の境遇について』考へをひつかけてしまつたために、現實のカインの溺死については、頭をも眼をも働かさうとしなかつた。

『カインは少くとも僕たちよりは幸福だ。カインは搜索される！　だ

が俺たちは？」

波田は考へ續けた。「發見されるものは大抵の場合必要なものよりも大切にされるものだ。錆びた古い何々の旬の短刀は俺のメスよりや價が高いんだ。畜生！　だが俺たちにや凄い程お代りが待つてらあ。」

彼は、山國の人力車や荷車の心棒に縛りつけられた犬を思ひ出した。それは長い舌をピストン、ロットのやうに急速度に、一杯に開け放つた口から出し入れして、全で主人の足に食ひつかうとでもするやうに足搔くのだ。だが輪には綱があり、その綱には重い荷がかゝつてゐる。どんな努力も、主人に追ひつかせやうとはしないので、時々、キャイン、キャインと悲鳴を擧げて、車の下から這ひ出やうとする。が、兩側には車輪が廻つてゐる！　兩側には車輪が廻つてゐる！　廻つてゐる車輪の中に首を突つ込むか！　足搔きながら引つ張るか！　後退りでもやるか。喉がある。棍棒がある。

彼はデッキの木理を數へながら、そして體はじつとしてゐながら。何とも言ひ表すことの出來ない「急がしさ」を感じた。全で自分が、坂道を驅け上る俥に縛りつけられた犬でもあるやうな焦立たしさと、憤りとを覺えた。

彼はデッキのチーク材から眼を上げると、ボートを越えて、マストのテッペンで忙しさうに首を振つてゐる仙藏を見た。

「助からねえなあ、あいつにかかつちや。」

彼は呟くと、サイドから外に首丈け出して、腹這ひになりながら波を眺めた。

船は一時間餘り引き返した。一時間十節の速力で。

一時間、七輪の炭を熾し續けると、木炭がいくら要るか、そんなものぢやないんだ。飛行船にでも聞いて見るがいい。

――カインは幸なる哉！――いや船長は幸なるかな！――

彼は波田の眼の下で、グルグル廻つた。彼は自分の眼が廻つてるやうに感じた。

突然マストの上に「ひつかかつてゐた」三上が怒鳴つた。

「右舷船首。」

船長は傳令機のハンドルを、スローに入れた。船脚は少しづゝ遲くなつた。

仙藏の肉眼は船長の双眼鏡よりも遠くを見たのだ。豆ほどの小さいものを右舷に見ると、彼は『十圓』を横に振るか振らないの瀬戸際と許りに、鉤かけの大聲で怒鳴つたのだつた。

やがてテレグラフがストップに置かれ、エンヂンは停止した。そして傳馬が卸された。

それはのんきな情景であつた。船は日本海にボカンと泛んでゐる。直ぐに荷役にとりかかるのではない。何かの修理をするのでもない。輕い疲れを休めるスポーツマンのやうに、それは手を拱いて浮んでゐればいいのであつた。生産に關はりのない一時間であつた。セーラーたちはそんな時間を航海中に、一度だつて持つた事はなかつた。それは何かのお祭りのやうであつた。船長の氣持とは關係なく、彼等はのんびりしてゐた。捕られる事のない時間は本能的に彼等を解放したのだつた。

カインは懸命に泳いでゐた。

三千噸の汽船が彼から一浬の處に高く浮んでゐるのに、彼女は船とは反對の方に一生懸命に泳いでゐた。然し、三上と小倉とが押す傳馬は、彼女に追ひつくのに世話はなかつた。二時間も泳いでゐたのが不思議な位だつた。だから彼女は辛ふじて浮いてゐる程度で泳いでゐるに過ぎなかつた。

小倉が、カインの頸輪を掴んで引き上げると、彼女はチョッと首を振ふやうにした。けれども、どの犬でもが水から上るとよくやるやうに、四本の足がフラフラするほどに水を撥ねはしなかつた。ぐつたり頸を舟板の上に垂れて、歯を食ひ縛つて人事不省？　に陷つてしまつた。

カインが傳馬に引き上げられたのを見ると、船長は汽笛の綱を引つ張つた。それは『カイン、しつかりしろ！』と怒鳴るやうに、ボ、ボーと鳴つた。

傳馬が本船につくと、ラダーからボーイがカインを受け取つて揚げ昇つた。

汽罐室の入口に船長が待つてゐた。

船は動き初めた。傳馬は釣り上げられた。

汽罐室の上では、カインを温めると同時に乾かしてやる事が出來た。

ボーイが銀盆の上にウイスキーと葡萄酒の瓶とを並べて持つて來た。

船長はそれを等分に割つてカインの口へ流し入れた。

ボーイがそれを持つて歸る途中で、仙太はうまく彼を捕へた。

『一杯、一杯！　たつた一杯。』

ボーイが『駄目だ！』と言つた時には、仙太はウイスキーの瓶を取つて、ハウスと汽罐室との間の狹い路次見たいな處に驅け込んでゐた。

『馬鹿野郎！　ラッパ飲みなんかしやがつて。』

と、ボーイが怒鳴つた。

『馬鹿野郎』と鸚鵡がへしに仙太が云つた『命の親ちやねえか！』

『よこせ！』

ボーイが受け取つたウヰスキーの瓶には、二滴つ切り殘つてはゐなかつた。

『ゴッデム！』

ボーイは呪ひを浴せながらケビンへ入つた。仙介はニヤッとして、二つの鐵板で出來た路次から出た。その時は彼はもういい氣持になつてゐた。下級海員たちは船内で、航行中酒の氣にありつく譯には行かなかつた。よし持ち込む事が許されても、蓄へて置くだけの錢を仕入れる金を持ち合さなかつた。よし、その金を持ち合せてゐたにしても、『船などに幸福がある筈がない』のだ。だから船でチビリ〳〵やる代りに、彼等は上陸したら最後であつた。一航海はおろか二航海分も五航海分も、飲んで飲んで飲み溜めるのだつた。だが、常人は飲み溜めた積りでも、由來アルコール分は吸收が早いものだ。だから彼等のアルコールに對する抵抗力は非常に弱くなつてゐるのだ。

仙介はいい氣持になつた。

海はやがて枯れる前の、秋の芝草のやうな青いうねりの上を、十節の速力を取りかへして辷つた。

海が芝草であるならば、全く虫の聲が聞えたに違ひない。波がサイドにチョロチョロと鳴いた。波の鳴くのは、秋の虫よりも淋しい。秋の虫は急に氣を換へて鳴り出しはしないが、波は急に齒を剝いて吠えるからだ。その前の氣まぐれな愛撫なのだ。

カインは甦つた。アルコールがひどく利いたのに違ひない。彼女は鼻つ先に嗅覺を取り戻した。そして聽覺と視力とを同時に恢復した。

船長はしやがんで、カインのその長いビロードの布に似た耳を飜へして、丹念に兩方とも檢査してゐた。

『耳に水が入らなかつたので助かつたんだなあ。』

と船長が云つた。

『へえ、耳に入ると駄目なんですかねえ、へえ。』

と司厨が云つた。

カインはそれを聞いてゐた。そして彼女の耳を擽る感觸に甘へた心持になつて、船長の手首を舐めやうとして頭を傾けた。

『ほゝう、元氣が出たぞ。』

その時、カインは船長の手首を舐めた。そして、ずつと稚い時にしたやうに、輕い齒跡のつく位に嚙みついた。

『ふん、いよいよ大丈夫だ。よし、よし。ほら立つて見ろ歩けるかい。』

そう言つて船長はカインを立たせた。カインは立つた。そして船長へ鼻をこすりつけた。船長はポケツトからハンケチを出して、カインの口の中を拭いてやつた。

カインはおとなしくされるまゝにして、腰を卸した。

『あゝそうか、矢つ張り草臥れたんだな。よく二時間も泳いでゐたもんだなあ。よく泳いだ、よく助かつた。だが、もうあんなことをしちやいかんぞ、いいか、もう海ん中は懲り懲りだらうな。』

船長は船中の誰よりも親しい口調で、愛情を籠めてカインと語るのだつた。

ボーイにカインの體を湯で洗はせ、タオルで拭はせてから、彼はカインを船長室に連れて入つた。

『垂れ流しにするんぢやあないよ。いいかい。』

そう獨言つてドアを閉ぢて、ケビンへ出て來た。

『小倉、三上を呼んで來い。』

『ハイ。』

小倉がおもてへ入ると、仙臺はカインの上前をはねたウヰスキーでいい氣持になつて、休みの日の朝のやうにグツスリ、彼の巣の中で眠りこけてゐた。

船長の前に出た仙臺は、白兎のやうに赤い目をして、しけを食つたマスト見たいにフラフラしてゐた。

『三上か。ボースンにそう言つとくからな、給料の時に十圓渡すやうにつて。御苦勞。』

と、船長が言つた。

『へえ。』

仙臺は頭を下げた。その途端に彼は『頭なし』である事を思ひ出して、揉みくちやにした雑巾のやうな顔付きをした。

『キヤプテン、現金で貰ひたいので。』

『どうしてだ。船にや現金はないんだ。』

『へえ、ボースンはさつぴきますので。』

『さつ引く？　何をさつ引くのだ？』

小倉は、三上の代りにハラハラした。——馬鹿野郎！　下手あ言ふと元も子も無くしちやうぞ。と——

『へえ、頭なしたんで。』（『頭なし』とは『下り』のこと。給料を前借してゐて貰ひ分のないことを云ふ。）

『あ、さうか、よし、さつ引かないやうに現金で渡すやうにと言つといてやる。アツハツハハハ。』

船長は御機嫌が良かつた。

小倉はほつとした。ケビンを出ると仙臺の肩をこづいて言つた。

『止せよ。船長にあんなこと言ふなあ。』

『構ふか。』

『だが、今日の船長の「お天氣」のよさはどうだ。人間一人助けたつて、あんなにお天氣がいいこたあねえや。』

仙臺は、これも「お天氣」よくフラ〳〵とおもてへ歸つて行つた。

船では一人のセーラーよりも、一つのジン、ブロック（鐵製滑車）。一人の火夫よりも、一つのドンキー、ボイラー（副汽罐）の方が、大切にされるのだ。

カインは救はれた。船長の愛は益々カインに加はつた。若しカインが非業の死を遂げなかつたならば、カインにとつて不幸であつたに違ひない。と云ふのは、犬は人間よりも早く年をとるからだ。毛の色艶も惡くなるだらうし、漆器の剝物に似て方々皮膚が剝き出しになるだらうし、醜陋の表情にしたところで、そういつまでも愛嬌があるものでもないし、そのくせ昔日と變りなく船長にじやれつくとすれば、船長は蹴飛ばすに違ひない。

その冬のある日だつた。

船は引つくりかへる決心をつけてゐるやうだつた。風も、怒濤も、それから雪も、海の上から船を追つ拂ふ覺悟を決めてるやうに見えた。滅茶苦茶だつた。どこか船體の一つのリベットでも弛めば、『それでよし』であつた。一切が片がつくのだ。全く、セーラーの中に一人でも痴呆者がゐるのだつたら、片をつけたに違ひない。何のためにそうまで骨を折つて『もつと擲られたいのだ！』と考へたであらう。だが、いや違ふ、そんな時にそんな事を考へろものではない。しけは夜に入つてその威力を增して來た。

『どの位與化られるもんだか、お前たち人間は知らねえだらう』

と、海は風雪と一緒になつて喚いた。船のあらゆる部分は悲鳴を擧げた。

『來たくたばらねえか、此野郎！』

と、暴風の一塊が叫びながら船に打つつかると、ボートがデッキから吹き千切られて飛んだ。

卒倒する時に人が兩手を差し上げてゆらゆらするのと同じやうに、マストが兩手をフラフラさせた。そして上部の木の部分が浪の血潮を浴びながら捥ぎ取られた。

ボートが漣なんか何とも感じないのと同じく、怒濤は船を馬鹿にした。その荒々しい足どりで大跨にデッキを乘り越して行つた。デッキではハッチまでも波に覆はれて、ウオッシ、ボートから未だ半分も出切らない中に、次の浪は再びブルワークを躍り越えて踏み込んで來た。

若し此時、私たちの船を誰かゞ外から見たならば、海の中に四角なハウス丈けが浮んでゐると思つたに違ひない。ハウス以外の部分は絶えず波の下に埋められてゐたのだ。

汽笛は絶え間なく泣いた。力なく咽び泣いた。絶え間なく喚いたので、今はもう鳴く丈けの元氣もなく、僅かに咽び泣くのだつた。何故つて蒸氣が上らないのだ。

大工は直江津の失敗をとりかへすために、——そんな時にまで職業意識が働くものだ。——波の合間を覗つてはデッキの上を見て廻つた。ハムマーを唯一の味方と頼みながら。

水火夫たちは、中央のサロンデッキに集まつてゐた。おもてとの間のデッキは激浪に洗はれるので交通途絶の狀態であつた。それは月島の橋が落ちて東京から切り離されたのより、もつと甚しい光景であつた。

そして、此船は何と云ふ船だ！

發電機もなければ、無線電信もないのだ、三千噸の圖體をしてゐながら。おまけに貨物をしこたま頬張るために、支柱さへも儉約して、ダンブルは風船の内部見たいなのだ。おまけに戰時中の好景氣時代に大急ぎで造られたものだから、推進機軸には出來すぎた大根のやうに『す』が、空いてゐるのだ。その上、團扇のやうに固つこい船だ。ボイラーは古物で間に合はせてあるのだ。パイプは動脈硬化症にかかつてゐるのだ。平時でもあれほどチョイ〳〵吹くではないか

食糧品は五日分丈けしか積んでゐないのだ。豐富なのは石炭丈けだ。戰地へ送るための石炭が船中に、セーラー達の床の下にまで詰め込まれてあるんだ。

無線電信でもあれば、SOSを、アンテナから火を吹くほど打つことも出來る。發電機でもあれば狼火信號も出來る。そして兎に角仄暗い電灯の下に、お互の顔だけでも眺めてゐられる。

たゞ一つ心強いのは、船の鐵板が新らしい事だつた。造船所が誤間化してさへゐなければ！

海の向ふのヨーロッパの天地に、軍隊が死にもの狂ひで徹夜強行軍するやうに、時化まで徹夜で強行軍した。

船員達は内心は緊張のため熱く、然し體は防寒設備のないサロンデッキで凍える程寒く夜を明した。ファンネルの廻りや汽罐室の上は少數の特權者が占領してゐた。

『しぶとい時化だ』

誰かゞ、小さく呟いた。大きな聲で言つて時化に聞かれでもしては大變だと云つた風に。

人間と云ふものは恐ろしいものだ。時化は少しも靜まらないのに、

一晩中暴化と抵抗してゐる中に、いくらか風が衰めたやうに感じ初める。眠れるのだ！　初めは、海が非常に身近に迫つた事を感じる。デッキまで波に洗はれるからだ。全く海の中にゐるのだ！　ほらデッキに打ち上げた。又乗り越した、と。だが、デッキにまで波が来ない時、彼等は海の中にゐる事を感じないやうに、終ひにはデッキが波に占領されてしまつた事に馴れて来るのだ。

『未だ船は壊れない。助かるかも知れないぞ。』

私たちは、船がどんなに辛抱強く波と闘つたか、そして我慢して持ちこたへたかを知つてゐるのだ。

へシ折られたマスト、引き千切られたワイヤロープ、粉々に吹つ飛んだボートの跡、それ等のものに目をやる時、全身傷つきながらもなほ勇敢に闘つてゐる、同志に對すると同じ感激を覺える。

そして、彼女は未だ闘ひ続けてゐるのだ。

『そら、又打ち込んだ。よく倦きないで暴化やがるんだなあ。』

『いやんなつちやうなあ。』

これがふだんであれば『いやならさつさと陸へ上るさ』と、混ぜつかへすのであるが、こんな場合には誰もそんなことを言ひはしない。誰でもの心の中に倣に似た愁ひが潜んでゐるのだ。マドロスの多くはマドロスを選ぶ動機を、大抵は彼の若き日の夢に持つてゐるのだ。

私たちの船でも、殆んどすべてがさうであつた。

小倉と岡田はアメリカに行かう、と思つて乗つたのだつた。彼等は、徳川時代やもつと以前の日本を臨めたマルコ・ポロのやうに、アメリカを想像したのだ。そこには黄金の塔が軒を並べてゐる。アスファルトの代りに黄金の舗道がある。川の小石はみな金だ！　そこでは極楽のやうに誰もが、楽しく働いてゐる。そして彼等はサンフランシスコに入港するのだ。そして見たのだ。ピストルを持つて彼等を看視する巡査を。波止場をウロつく失業者の群を。機械に手足を食ひ取られて街頭に投げ出された彼等の仲間を！　そして、そこでは彼等は上陸する代りに、船室に閉ぢ込められて外から鍵を下される。恰度囚人のやうに。

波田はビクトリアドックの職工になる積りであつた。が彼はビクトリアドックのある英國に行く代りに、日本の近海を、船の周りの鰯のやうにウロ／＼してゐるのだ。

三上は、たゞもう『洋服を着て働きたい』ばつかりに、汽船乗りになつたのだつた。

暴化の初まりや最中には、彼等はそんな事を思ひ出しはしない。だが人間が晩年になると兎角く愚痴つぽく昔を振りかへるやうに、暴化の盛りが過ぎる頃になると、船のり以前がそうつと彼等の心の中に忍

び込む。そして西澤は『紡績會社がどんなに惠まれた働き場所であるか、』について語り初めるのだ。彼はたゞ仲間を羨しがらせるやうにだけ話す。決してそこで、『危く熱湯をかぶつてうで章魚見たいになりかけた女工』の話や、『機械にスツカリ髪を持つて行かれた彼の戀人』の話はしないのだ。

だから、非情さへ惠まれるならば、『俺も一つ紡績へ入らなきや』と、仲間を思ひ込ませてしまつた程だつた。

怒濤はその頂上にあつた。頂上にあると云ふ事はこれから凪ぎになると云ふのと同じであつた。だが未だ海面を覆ふ程の低い雲が、粉雪を混へてマストにひつかゝつた。殘つたステーが鋭い悲鳴を擧げた。

夜が少しづゝ明けかけた。しかし冬の上に暴風雪の拂曉なので、それは明けると云ふよりも剝れて終ふ時の陰慘な明りに似てゐた。

エンジンは浪に胴腹を叩かれないためと、風位から船首を奪はれないためとに、スローで運轉してゐた。又、たとひ出來たにしても此暴化にフルスピードを出す亂暴な船長も居ないだらう。そんなことをすればプロペラーが空氣と波とを半分づゝ叩いて、一遍に故障してしまふことになるのだ。

ところが、先にも言つたやうに、人はいろいろな事に馴れる習慣を持つてゐる。そしてわが船長としても人間以外のものではなかつた。彼は夜が明けた事を知つた。そして夜が明け初めると云ふ事を、少し異常に緊張しすぎたゝめに、暴化が凪ぎ初めたと錯覺した。

彼はエンジンにフルスピードを命じた。

丁度此時、大工は波の合間を見計つて、デッキでハッチカバーの檢査をやつてゐた。

その時は、船が波の坂を上る處であつた。だからスクリューはうまく利いた。で速力がかゝりかけたのだつた。次の瞬間に、船は波の下り坂にかゝつた。ドドッドッと辷り下りて、そして波の間に頭を突つ込んだ。と同時に船はかぶりを振つた。いやいやをしたのだ。左舷から波をたらふく飲んで、右舷から直ぐに吐き出した。

大工は、きつと何か怒鳴つたのだらう。が、それは聞えなかつた。ただ、めちやくちやにハムマーを振り廻すのが、デッキの上を流れてゐる瞬間だけは、拂曉の仄明りの中にも見えた。次の瞬間には、もう大工はデッキの上にはゐなかつた。

デッキが波を吐き出すと、大工が浚はれた後では、白い泡波がチャプ〱と立つた。

『あつ！』

と、船長は叫んだ。そしてテレグラフをストップに入れた。然し二事に遅かつた。スクリユーはプロペラーを一つ落してゐた。ゴットン、ゴットン、ギグ、ギグ。と妙な不愉快極まる振動が、一人残らずのマドロスの頭に響き初めた。

そして、大工は右舷から吐き出されると、[illegible]で泳いだ。船は相かはらずかぶりを振つて進んでゐた。

エンヂンが止つて、舵を延したために、船は風位から横に流された。で動揺がひどくなつた。そのためにその次の怒濤は右舷から力一杯デッキへ叩き込んだ。

その怒濤の中に大工がゐた。波頭の上に鰯の群が手にとるやうに見えるやうに、大工は波に乗つて再びわが船に打ち込まれた。

そしてその波は四番のウヰンチに打つ衝つて砕けた。

大工はウインチの中に、寸法を合せて拵らへられた機械の一部のやうに、グシヤツと嵌り込んだ。

けれどもそれは直ぐには発見されなかつた。直ぐに発見されたにしても、命が助かつただらうとは思へなかつた。けれども、たとひさう云ふ珍らしい例が曾てどの船かで有つたにしても、その例を直ぐに思ひ浮ぶものではなかつた。

大工が浚はれたので、ヴヰが投げられた。がそのヴヰは大工の所在を示しはしなかつた。マドロスたちはそのヴヰの所在を眺め出さうと努力した。

船は救助不可能と見て、風位に船首を立て直さうと、その二枚の羽根残に近いプロペラーで足掻き出した。

ブヰは既に遠く離れた。そして波頭と区別がなくなつてしまつた。

汽笛が悲しく吠つた。『俺も草臥れた。』とでも言ふやうに。

その間にも鋭い波が、船首を立ち直す間に二三度後部甲板に打ち上げた。

何かいびつな器物に入れられた海月のやうに、大工はウインチの各部にへばりついた。

それは惨たらしい死骸ではあつた。が汚い死骸ではなかつた。海水は此上もない鄭寧さで傷口を洗ひ、血を流し去つた。折れて突き出た骨は波の泡と同じ色であつたために目立たなかつた。

雪は壮豪さを感じる程やみくもには降つてゐなかつた。泣きつかれた小供の涙に似て小熄みになつた。そしてその涙の下に大工は、どうしても大工とは思へない姿に変つて散ばつてゐた。

『ボースンと一緒に下船されてりや、命だけは助かつただらうに。』

と、誰も口には出さなかつたが、心の中では感じてゐた。全く、ボースンが下船を命じられた事が些も『助かつた』事にはならないにして

も、大工が直江津で一緒に下ろされてゐれば、今、ここで喰はれはしなかつたのだ。

『助かつた！　M丸を先月降りた許りだぜ俺は！　××岬沖で座礁しちやとても助からん。どれ見せろ！』

かう言つて、新聞を奪ひ合ふやうにして讀むマドロスの顔には、悦びと悲しみとがチヤンポンに漂ふ。彼は助かつた。だが先月迄一つ釜の飯を食ひ、共に働いて來た彼の仲間たちが、小さな活字に代つてそこへ表れるのだ。その一つ一つの活字と、彼はどんなに多くの思ひ出を生活して來た事か。

そして今、わがM丸はその小さな活字金の坩堝の中を、びつこを曳きく歩いてゐるのだ。そのびつこは堪らなく頭に應へた。急にヘシ折れた足を曳きずるやうな、不快な痛さが全船のマドロスの胸を締めつけた

私は本船が新造船であると云つた。新造船がプロペラーを折るなんて、と私を責めるかも知れない。だが、私が無理に折つた譯ではない。プロペラーどころか、次の航海にはスクルーシヤフトを折つたのだ。靖國神社の銅の鳥居程もあらうと思はれるスクルーシヤフトを！だが、それは次の航海の事だ。

それにしても大工は可哀想だつた。彼はよくハムマーを振つたり、板を削つたりしながら唄つてゐた。

――泣くな嘆くな、三月にや歸る、
おそて四月の櫻時、
四月に歸らにや五月にや歸る、
五月に歸られにや六月にや歸る、

彼はいつまでもその歌を續けるのであつた。六月、七月、八月、到頭十二月から正月まで持つて行つた。そして終ひに投げ出すやうに結ぶのだつた。

――それでも歸らなきや鱶の腹よ――

大工は鱶の腹に入る事は免れたが、ウインチの下で格好が悪くたつてゐた。未だ誰も彼を見附け出さうとしなかつた。

船は捨てつぱちになつた。

『どうにでもなれ。』と言ふやうに、ノロノロと進んだ。

『碌なこたあねえや、こんなイソダラ船はブチ壊して、地金で賣つた方が氣が利いてらあ。』

とマドロス共は考へた。

が、冗談ぢやない。船舶好況時代に於けるわがM丸が、わが大日本帝國の『富』に貢献する處は實に、實に偉大なるものがあつたのだ。たとへその『富』が、わが仲間たちマドロス共に全で關係がなかつたにしても。

『やけにギクシヤクしやがるなあ。』

と波田が言つた。

『まるで仙籟が横根を踏み出した時見たいだ。』

と西澤が言つた。

『ううん、』と、仙籟が獨特の唸り聲を出しながら答へた。『手前の骨がらみの歩きつ振りとそつくりだあ。』

時化はだんだん凪いで來た。

セーラーたちは、大工を浚はれたり、プロペラーを折られたりしたので、すつかり鬱陶しくなつてゐたが、海の凪ぐにつれて心に餘裕が生じて來た。そして折れたプロペラーを修理するために、ドックに入ると云ふ事實の前に、明るさを見た。

怒濤がデッキを洗ふ事が少なくなつた。

船はどの位の深さの處を間誤ついてゐるか知るために、デイープ、シー、レッドを入れる事になつた。

セコンドオフイサーの、吹殼の詰つた灰皿に似た顏がブリッヂから怒鳴つた。

『スタンバイ、デイプ、シー、レッド(測深機)を入れろんだ!』

セーラーたちの腰は重かつた。彼等はノロノロと立ち上つた。そしてプープ、デッキ(船尾樓)の方へ行かうとした時、タラップの降り口で西澤が何か叫んだ。

そして、タラップを一跳びに飛んだ。彼は四番のウインチの處で、頭から蓋ひかぶさつた蓆でもはねのけるやうな風に、兩手を上に振り上げた。

『大工だ!』

大工の仕事着の切れつ端が、ウインチのバルヴに引つかかつてゐた。肢體は散らかつてゐて、拾ひ集めても形をなしさうもなかつた。何故だか右の手だけが關節とくつついて、ウインチとハッチとの間に、岩と岩との間の磯巾着見たいに、固く捩り込んでゐた。

セーラーたちは、急に冬が來た事に氣づきでもしたやうに更めて寒さを感じた。そしてデッキに作りつけられたベンチレターのやうにつつ立つてゐた。

セコンドがタラップの上から下りながら怒鳴つた。

『おい、そんなとこにレッドはないぞ。』

『レッドどころか、ぼけなす奴。』

と波田が呟いて、セコンドが殺しでもしたかのやうに、憎々しく彼を睨んだ。

『大工が打ち上げられて死んでゐます。』

西澤が言つた。

『何？』

『だ、だ、大工だ。』

と仙拳が言つた。

セコンドも見た。

『船長にさう言つて來い。西澤。』

『ハイ。』

西澤はタラップを驅け上つた。

マドロスたちはひどく氣がふさいだ。たつたさつきまで一緒に怒濤と闘つて來た、一人の勇敢な同志。それが浪に浚はれた事に氣を腐らしてゐたのに、又、舞ひ戻つて來てゐたのだ。それもこんな格好になつて。

『海の中にたつた一人で流れるのは淋しい。』と、大工の屍骸が云つてゐるやうだつた。

そして首が千切れてゐるのに、右の手だけが胴體にくつついてゐるのは、『俺はこの手で泳いで來たのだ。』とでも言ふためのやうだつた。

鐵デッキの上は凍つてゐた。死骸が寒さうに感じられた。マドロスたちの足は感覺がない程、デッキに濕かさを吸ひとられた。そして寒さは、足から腰、首すじへと急に走り拔けた。

誰も口を利かうとしないのがなほ堅かつた。死のやうな沈默！そうださうださう云ふ言葉があつた。その通りだつた。

寒さと闘ふために、兩足をガタガタ足踏みしなければならないのに、彼等はじつと立つてゐた。餘り足が痛くなるとそうつと足を擧げた。その時バリッと凍りついたものの離れる鋭い音がした。マドロス共はその音の方に揃つて振り向いた。

『音をさせるな！』と眼で言つた。

彼等はどうにも、大工のその變つた死に方を、自分の身に持つて來て較べない譯に行かなかつた。大工だからいい、と思ひ込める譯のものではない。

いろいろな傳說がデッキの上にはある。それは怪しいありさうもない話が多い。彼等は冬の寢床の下にストーヴの側で、夏の晴れ亘つた太陽をさける日覆の下で語り合ふ。それには暗澹たる事實もあれば、吐き出さないではゐられない話もあつた。

今は新らしい傳說の一つが、彼等の前に現實の姿で、デッキの上に

張りついてゐるのだ。激浪に洗はれた大工が、眼が船に躍つて來た時。それが彼等の前に生の肉の塊が散らばつてゐるではないか。

今までは嫉妬交りに邪にさへく聞いてゐた、彼の美貌に惚れ込んだ繼女房の話も、マドロス共の胸をついた。

ファンネルから吹いて來る煙の臭ひが、忌はしい火葬場の臭氣を作つて彼等の鼻から忍び込んだ。

『水葬にするんだらうか？』

それは餘りに慘酷な氣がした。切片粉々になつてまでも、船を慕つて歸つて來たものを。又、此冷たい、驕るやうな、果てしもない海の中に抛り込む！

そんな事が出來るだらうか。

そして、此、私たちの眼の前にある大工が言つてゐたではないか。

『大工は割合に樂で、仕事が奇麗だからいいが、水葬の棺を作る時丈けは全く厭だ！』と。その彼が、今度はバラバラになつて棺の中へ、冷たく入らねばならないだらうか。

船長が來た。彼も威厳を押し賣りするやうな表情は持つてゐたかつた。彼がそんな表情を捨てたのを、私たちは初めて見た。

船長は言つた。

『わが××丸の大工、動使河原芳道はその職務に殉じた。哀悼に堪えない。今は故人の靈を厚く葬ふのみだ。』船長（セーラーたちをさう呼んだので、セーラーたちはびつくりした）は、故人の死體を拾つて、謹しんで弔意を表するやうに』

その時突然、妙な事が持ち上つた。

船長が弔辭を述べてゐる後ろの方にカインが姿を現はした。そしてスチームパイプのカバーの下に、クンクン云ひながら手を突つ込んで引つ掻いてゐたが、何かを引つ張り出した。それは千切れた大工の右の腕であつた。彼女はそれを啣へた。丸で射止めた鴨でも啣へたと云つた風に。そして誇らしげな顔付きで尻尾を振りまくつた。

セーラーたちはゾツとした。自分の腕を啣へられたやうに。

『アツ、畜生！』

仲間が鋭く叫んだ。

カインは腕を啣へたまゝ、勝ち誇つたやうにデッキの上を逃げ廻つた。セーラーたちは憤怒に燃えて追つかけた。船長の犬もくそもあるか』と思つたのだ。

船長はカインカインと呼んだ。

カインはデッキの上を自由に跳びはねながら、セーラーたちの手の間を潜つて、船長の處へ駈けて來た。

『馬鹿！』

船長は怒鳴つてカインの頭を叩いた。

カインは褒められる代りに毆られたので、悄氣て尻尾を挾んで、船長の足の下に蹲まつた。

波田が力一杯カインを蹴飛ばした。

カインは三尺許り跳ね飛んだ。

『波田、何をする！』

船長が叫んだ。

『何もくそもあるか、蹴殺してやる！』

そう叫びながら彼は狂つたやうに再びカインに飛びついた。

『こらつ！』

船長が叫んだ。そして波田の腕を捕まへた。

『馬鹿、相手は畜生ぢやないか。』

『うるせえつ』

波田は船長の握つてゐる腕を、體ぐるみ、ぐつと引いた。

デッキが凍つてゐたので、船長は辷つて轉んだ。

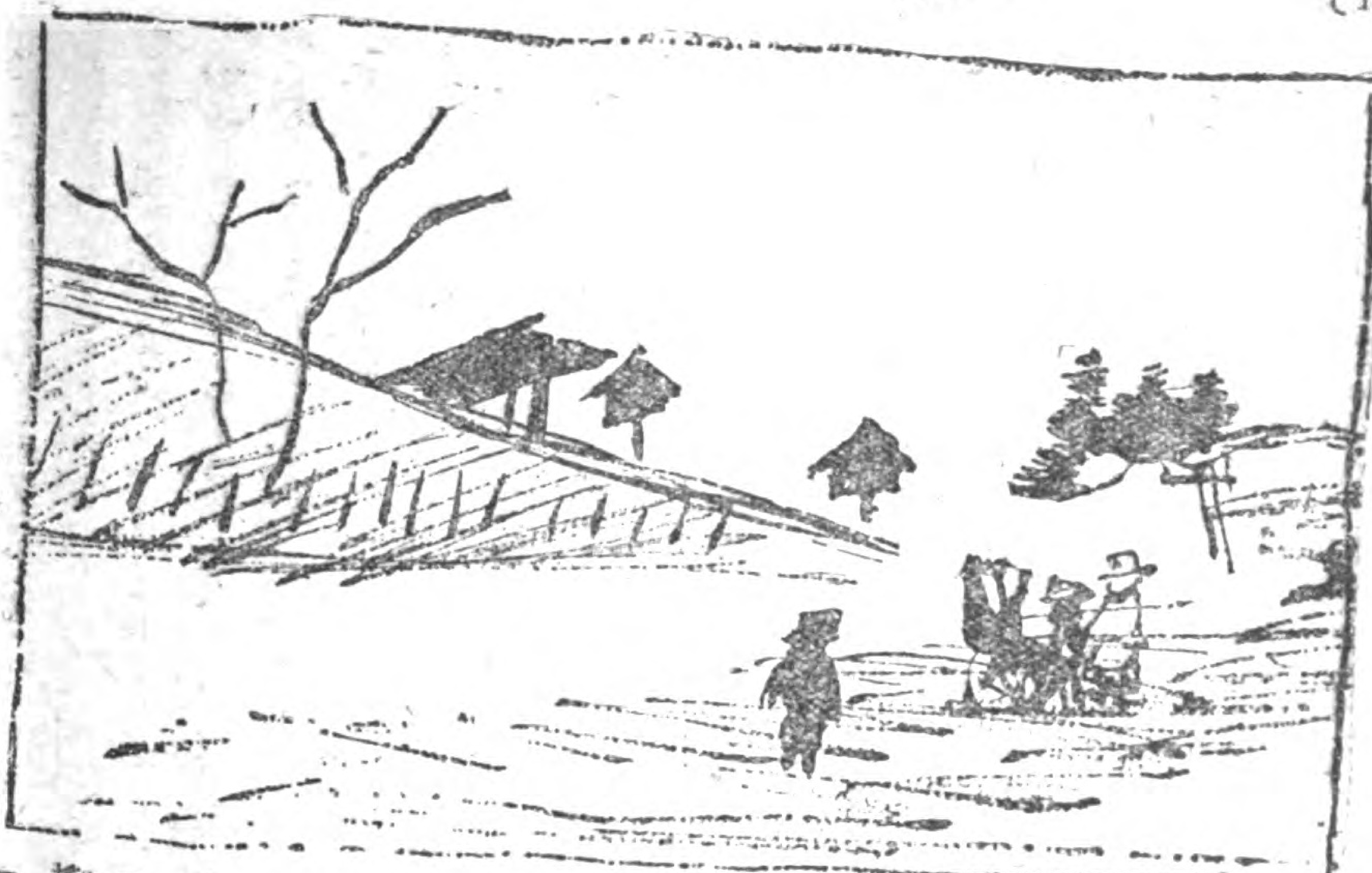
カインは動物の本能から危険を直感して、タラップを驅け上つて、ケビンの方へ消えてしまつた。

船はビツコを曳き〳〵進んだ。船全體が大工のやうな運命にならないとは、未だ保證の出來ない天候であつた。

カインが死に、船長が死に、わがM丸が沈沒して終ふのは次の物語りに屬する。

——一九二七、一〇、二二——

作者註。これは『海に生くる人々』中の人物と事件とに關聯があるのです。



別離

廣津和郎

一

『それぢやあ、そろそろ出かけるとするか』

信之が立上つて、小さなトランクを持ちかけると、

『あれ、あたしが持つてまゐりますわ』と榮子は側からそれを引つ奪るやうにした。

『君には持てないよ』

『いゝえ、持てますわ』

力を入れて云つて、トランクを提げたまゝ、榮子はじつと信之の眼を見た。長い睫毛の二重瞼の底から、彼女の黒味勝の眼が、何事か囁いてゐた。

『今頃になつて。……どつちにしたつて、今更同じことぢやないか』信之はさう思ひながら、少し笑つて、彼女の方へ口を持つて行きかけると、彼女はぱちぱちと瞬きをして、それから急に横を向いてしまつた。横顔が信之の笑ひと同じやうな笑ひにかすかに揺れた。――『さうね、同じことだわ』彼女も急にさう思ひついたやうな様子だつた。

『それ御覧な』

口に出してさういふ代りに、信之は指で榮子の頰を一寸ついた。それから聲を出して笑つた。

『あら、何故お笑ひになるの、こんな場合に？』

彼女はさう云ひながら、上眼づかひに彼の眼を睨む眞似をした。が、直ぐ彼女も聲を出して笑ひ始めた。

二人はそのまま聲を合はせて笑ひ、そして互の笑ひ聲を互に耳を澄ませて聞き合つてゐた。

笑ひがをさまると、何か云ひ出さなければならなさうでゐて、言葉が出なかつた。信之は默つてゐたら、彼女が涙ぐむかも知れないと思つた。

そこで彼は默つたまま、つと部屋を出た。そのまま二人で顏を見合はせて、もう少しの間立つてゐたら、直ぐ逆戻りになりさうな氣がしたし、又逆戻りになつたところで、今までと違つた生活が二人の上に展けて來る筈のないことが解つてゐたから……

つかつかと玄關口に出て行つて、彼は待たせてあつたタクシイに乘つてしまつた。榮子も直ぐ後から乘つて來た。

『東京驛』信之は運轉手に向つて云つた。

自動車が走り出すと、二人は暫く默つてた。何か忘れものをして來たが、もう間に合はない――そんな樣な感じが胸にいつぱい擴がつて來た。

『山岡さんは驛に來てゐて下さるでせうか？』

『ああ、來てゐるだらう、さつきの電話では、直ぐ行くといふことだつたから』信之はさう云つて、それから調子を變へて『あの男も弱つてゐるだらうよ、さぞ。――別れ際の立會人に撰はれたんだから』

『……』

榮子は肩掛に顎をうづめて、眼を伏せながら、何も云はなかつた。

信之は彼女の輪廓の正しい横顏を見た。そして今更のやうに『この女はほんたうに美しい』と考へてゐた。

眉の根が迫り過ぎてゐるために、どうかすると顏全體がきつく見え過ぎる事はあるが、併しさうした眉から、睫毛の長い、黑味勝な大きな眼のあたりが、彼女の顏を印象強いものにしてゐた。別段化粧をしないで歩いても、彼女のさうした顏や、彼女の肩のすんなり落ちた、身丈の高い姿は、人々の眼を惹いた。彼は銀座通りなどで、行き交ふ若い眼が、彼と並んで歩いて行く彼女の方へ、どれもこれも吸はれて行くのを見て、得意に感じたり、時には面痛ゆく感じたりした事が度度あつたが、今からして彼女と別れようとしてゐるタクシイの中でも、時々夕暗の往來から、幾つかの眼が、車内に向つて光つて來るのに、或快感を感じ、又一種の得意さへ覺えてゐた。

『たうとう別れる』改めてさう自分に云つて見ると、何かそれが嘘な事見たやうな氣がした。——彼は彼女に對つて、十分哀惜の心を感じてゐた。

けれども、それと同時に、だからと云つて、もう一度逆戻りする事はは到底出來ないといふ強い考が、彼の心を引きしめてゐた。

『それは精神の浪費だ』彼はそんな風に自分に向つて云つた。

彼女と戀愛關係に落ちてから、彼は休息といふものを知らなかつた。一度或法學士に嫁ぎ、誰が見ても平和な、幸福な家庭生活と思はれるやうな生活に二年を過した後、彼女はその法學士に倦足りなくて、その家庭から飛び出して來た。彼女は燃ゆるやうな戀愛至上主義の情火に、みづからを燒きつくして行くやうな女だつた。彼女は彼女の戀人の心に、彼女以外の他の考が少しでも這入ることを許さないやうな女だつた。彼女の戀人は、彼女に向つて、毎日毎日愛の確かめを誓はなければならなかつた。

『あなたの心がぴつたりしないわ。すきがあるわ。——あたし信じられない。信じられない』

信之は榮子が部屋の隅にぺつたり坐つて、そこから疑惑に充ちた眼で、じつと彼の方を見る時、そこに、どんな平和の間にも、陰影の匂ひを嗅ぎつけずにゐられないやうな本能を附與されて、その本能のままに押し進められて行く魂を見るやうな氣がした。角に松火をつけられて、谷の中までもまつしぐらに飛び込んで行く牛のやうな、何か盲滅法な力——そんなものに押しまくられてゐる彼女を見るやうな氣がした。

『困るな、どうも。信じられない、信じられるは君の心にあるんだよ。君が君自身を制しなければ、それは誰にも君の心を靜めることは出來ないよ』

信之は靜かにこんな風に云つて、むづかる子供を諭すやうに、彼女を諭すこともあつたが、併し時によると、彼女の神經の苛立ちは、彼の心にもその波動を傳へて來ることがあつた。

『好い加減にしないか』彼はこんな風に烈しい調子で叫び立てた。

『人は疑はれてゐると、疑はれてゐる通りになるものだよ。若し君が疑ふ通りに、僕の心にスキが出來たとしたら、その時は、それは僕が作つたのではない、君が作つたのだ。君に對して、僕の心に愛がなくなれば、それは君が僕にさういふことを教へたのだ。』

併しさういふ事は、口に出して云つてしまふと、急に一つのはつきりした形を取つて來るやうに思はれた。——信之は彼の心も身體もが、もがく事も出來ないやうな桎梏に囚はれてしまつたやうな憂鬱を覺えた。手や足を自由に延ばす事の出來る草原、日光の照りそそぐ廣

い願、さういふものに向つて、ひた向きに走つて行きたいやうな、このままでは窒息するより外ないといふやうな不安を覺えた。——彼の眼の前には、或海近い町にある寺院の境内が浮んだ。彼はそこの寺の一室を借りて生活してゐた事があつたが、そこの閑靜な生活の休息が、何よりも增してなつかしいものに思はれる。

けれども、さうした切迫つまつた心と神經との探り合ひは、榮子自身にも決して樂なものではなかつたらしかつた。異常な緊張の毎日毎日は、彼女自身をもうそれ以上にそれに堪へることの出來ないところまで、押しつめて行くものらしかつた。

『いつそ別れた方が……』

さういふ言葉が第一に口切られたのは、彼の脣からではなく、彼女の脣からだつた。

その言葉は或日突然云はれたものであつたが、それはそれを云つた彼女自身をも、彼をもぎよつとさせた。思ひ設けないことが云はれた——二人は互にそんな感じを持つた。それにも拘らず、その言葉は云はれて見ると、云はなかつた前の茫然たる混沌の雰圍氣に、ひとつのはつきりした纏まりを與へて來た。

『いつそ別れた方が……』

それは三日に一度、二日に一度、そしてしまひには何彼につけて、毎日毎日二人の脣に上るやうになつて來た。

二人はその言葉が出る度に、その言葉の前に、滅茶苦茶になつた。それを口にする相手の不眞實を、狂的に責め合つた。が、相手が云はない場合には、彼自身が、或は彼女自身が、相手に向つて、それによつて挑戰の口火を切らなければゐられないやうな狀態になつた。

『結局やつぱり、このまま行つたなら、早晩行く先が解つてゐる』

昨日も持上つたさうした爭ひの末に、信之はしづかにかう云つた。

『さうよ、さうよ、結局さうよ。どうしても他にしようはありませんわ』

一つの興奮の過ぎ去つた後で、おちつきを恢復した榮子は、眼に淋しい微笑を浮べてゐた。

『僕にはもうこのままはやつて行けない。僕は疲勞し切つた』

『さうよ。あたしももうやつては行かれませんわ』

二人は顏を見合はせて、頰笑み合つた。

『それぢや、決行しようか』

『ええ、それより仕方がありませんわ』

笑ひのうちに、そんな風に話がきまつて來たといふ事は、信之にはすがすがしい心持のするものだつた。惱みのない手術——そんな事が思ひもかけずに可能だつたといふ事が、彼にはうれしかつた。

夜、二人は平和な心持で町を散歩した。二人は二人の戀の最初の時分のやうな心持になつてゐた。電燈の明るい店で、向ひ合つて、珈琲一杯づつ飲むといふ事にも、他愛ない新鮮さを覺えてゐた。劇場が明るく通過出來た——終りを完うしたものの愉悦にも似たやうな、明るい満足が二人を浮立たせてゐた。

『あなたはこれからどうなさつて？』

『僕は又暫く昔の生活に歸る。そして頭を休めて仕事をする。——君は？』

『あたし？　さあ』

彼等の最後の眠りの前に、彼女は仰向いて、天井に向けて眼を瞬きながら、暫く考へてゐた。

『あたしの事は解らないわ』

が、彼がそれについて何か云ひ出さない前に、くるりと彼の方へ向いて、

『でも安心してゐて。どうかなつてよ、どうか……』

『……』

彼は何とも云はなかつた。うつかりした事も云へないやうな心持だつた。

彼は割に安らかに眠れた。彼は譯の解らない夢を見た。側から消えて行つてしまふやうな夢だつた。すると、その夢の間に、彼は彼の額にかすかな風を感じた。彼は薄眼を開けて見た。すると榮子の顏が、彼の顏の直ぐ近くに迫つてゐた。薄暗い電燈の下で、彼女の顏色は白——といふよりも、日影の山の雪のやうな冷たい灰白色に沈んでゐた。彼女は彼の額に頰を寄せて、彼の皮膚の匂ひを嗅いでゐた。『フン、フン』彼女の鼻孔を出たり這入つたりする空氣が、彼の額にこそばゆい冷たさを與へてゐた。

『あつ』彼はあぶなくそんな聲が出さうだつたのをこらへて、じつと眼を瞑つてゐると、彼女は彼の額から更に彼の髪の毛を嗅ぎ、彼の頰を嗅ぎ、彼の鼻の頭を嗅ぎ彼の唇を嗅いだ。

それは情慾的なものを含んでゐないやうな動作だつた。さうした單なる慾望よりもつと違つたもの——彼女の生の充たされざる渴望の苛立たしさ、さう云つたやうな狂しいものだつた。

『空虚を嗅ぐ』

信之は彼女の中に、底知れぬ淋しい人間を感じて、ちりけ立つやうた氣がした。……

東京驛の乘車口の階段の上に、山岡は立つてゐた。信之と榮子がタクシイを下りると、彼は一寸帽子に手をかけ、遠くから『やあ』と云

つた。

近づいて行つた信之に小聲で、

『やつぱり？』と訊いた。

『ああ、やつぱり』

『さうかね、それより仕方がないかね？』

信之はそれには答へないで、宵の口の急行のために混雜してゐる改札口の上の時間表を見に行つた。彼は時計を出して、横須賀行きが何時と何時とであることを確かめた。

彼が後に戻つて行くと、榮子と山岡とが話してゐた。

『ほんたうに山岡さんにはお氣の毒ですわ、こんな御迷惑な事をお願ひして』榮子は快活にさへ響くやうな聲でそんな事を云つて、にこやかに笑つてゐた。

『いえ、迷惑でも何でもありませんが、併し』と丁度そこに信之が戻つて來たので、彼は信之の方へ向つて云つた。『どうにかならないものなのかねえ、そんな風にしないでも……』

『ふん』信之は漠然とうなづいた。

『君達二人の間のことだから、僕などが立入つて容喙することもないが……』

『……』

信之は笑つてそれには答へなかつた。

『君は飯は？』彼は未だ山岡が云ひさうにしたのでから云つた。

『未だだが、今別に食ひたくもない』

『つき合へないといふ程でもないんだらう？』

『それやさうだ』

『それぢやあ、日本橋か銀座通にでも出かけて見ようか』最後に一緒に飯を食ふのも自然でもあるし、又惡くないと云ふやうな氣が突然に彼はした。彼は十時一分かの汽車に間に合ふやうにすればそれでいゝと考へて、再び時計を見た。

『赤帽』

彼は輕い旅行に出かける若者のやうな輕快さで赤帽を呼んで、十時一分の横須賀行きまでトランクを預つて置いて貰ふことを賴むと、更に先に立つて、入口の階段の上に出て行つて、タクシイを呼んだ。

二

彼等が東京驛に再び戻つて來た時、三人はそれぞれ多少の酒氣を帶びてゐた。

酒の飲めない信之は、五六杯つき合つた酒に、眞赤な顏をしてゐた。彼は不愉快な醉は感じなかつたが、併し何かがいつぺんに働くな

つてゐた。

『もういい、もういい、此處でいい』と彼は兩手で山岡を押しのけるやうにして云つてゐた。『もう歸つてくれないか。此處でいいと云つたら』

彼は榮子の方へ向いても同じやうに云つた。

『君もお歸り。もういつまで經つたつて同じことだから』

『いや、あたし何處までも送つて行く。鎌倉までも送つて行く』

信之よりも酒の强い榮子は、大分の酒を飲んでゐた。『あたしが代りに飲むわ』そんな事を云ひながら、彼女は山岡が信之にさした盃を、片つぱしから奪つてはそれをぐいとひと口に飲んでしまつてゐた。彼女は顔色ひとつ變つてゐなかつた。が、何處か多少燥ぎ加減だつた。

『何處までも來るがいい。――今頃お寺に行つたつて、女のお客様はお斷りだつていふから』

『いいことよ。あたしはひとりで宿屋に泊つて、明日ひとりで海岸を散歩して歸つて來ますから。あなたのお世話なんかになりませんわ』

煙草を吹かしながら、ぼんやり何か考へてゐたらしい山岡は、榮子の言葉の一部が耳に這入つたものか、

『何ですつて？　あなたが鎌倉に？』

『嘘ですよ』と彼女は笑ひながら打消した。『あたし厭なこつてすわ。――鎌倉まで行つて、益々淋しい思ひをするなんて』

思はず云つた最後の言葉が、妙に實感を持つてゐたので、三人はそれきり默つてしまつた。

昔と違つて、停車場の中はかなりひつそりしてゐた。驛夫が横須賀行きを知らせると、三人は改札口の方へ歩き出した。

『でも、品川まで送つて行きますわ。品川までならいいでせう？』

榮子の調子はやさしく素直だつた。信之は誘ひ込まれるやうにうなづかずにゐられなかつた。

二等車の中はがら空きだつた。それは二人づつ並んで腰かける例のロマンスカアではなく、横に長く腰掛のついた舊式な車だつた。三人の外には誰もゐなかつた。彼等は一列に並んで腰をかけた。

『一緒に箱根に行つたのはいつでしたつけ？』

彼女は過去のそんな風な思ひ出に、少女のやうにあこがれる眼付をして、腰掛から垂らした兩足を、ぶらぶら振つてゐた。

汽車が動き出すと、三人は默り込んでしまつた。二人の話の邪魔をしまいと思ひでもするやうに、二人から少し離れて腰かけてゐる山岡は絶えず休みなしに煙草を喫つてゐたが、信之は煙草を出すのも懶いやうな氣がしてゐた。

新橋で、外國人の男女が二人乘つたが、彼等は三人とは反對の一關の、彼等と同じ側に腰を下ろした。

汽車は間もなく再び發車した。

品川近くなると、默つてゐた榮子が急に何か云ひたさうな樣子をして、信之の方へ振向いたが、信之はこの最後のどたん場に行つて、感傷的な言葉は聞きたくなかつた。それで知らん顏をしてゐた。

榮子はもどかしさうに、いらいらしてゐたが、やがて汽車はそのままプラットフォオムに這入つて行つた。

『それでは……』

彼女は立上つた。

『ああ』

彼女の眼がじつと彼を見据ゑると、彼はこんな風に漠然と云つて、彼女に眼を返したが、こんな場合をいつまでも持續させることは、彼にはやり切れなかつた。

『ぢやあ』と云つて立上つた山岡の方へ急いで眼をそらした。

『頼むよ』信之は簡單にさう云つた。

『ああ』

山岡が車を下りた後から、彼女も下りて行つたが、二人は直ぐ又車窓の下に來た。信之は窓を開けないわけに行かなかつた。

『ではお手紙だけは、時々下さるでせう？』

『うん、出す』

『お身體をお氣をつけになつてね』

『うん』彼は幾つもうなづいた。『解つてゐる、解つてゐる、いいよ、何も云はなくつても』そんな風なうなづき方だつた。

それだけ云つてしまふと、品川の停車の時間が、へんに長過ぎる氣がして來た。じつと彼を見つめてゐる榮子にも氣の毒な氣がして來た。發車を用意をするために緊張して見張つてゐた彼女の眼が、途中で或ゆるみを生じたのを彼は見た。が、その途端に汽笛が鳴つた。

彼は急いで二つ三つ辭儀をして、汽車が動き出すと、直ぐ首を引つ込めてしまつた。彼女の黒味勝な眼の追求が、彼の神經を疲勞させてゐた。彼はほつと溜息した。

『これで愈々綺麗さつぱりだ』彼はそんな風につぶやきながら、さつき停車場で買つたサンデエ毎日を、外套のポケットから取り出して、ペエジを繰つたが、どういふ題目に眼をやつても、活字が頭にうつゝて來なかつた。これで綺麗さつぱりだ、と言葉で云つたやうな感じが、彼の頭には來てゐなかつた。

彼の心には昨夜の彼女の顏がうつゝてゐた。『フン、フン』彼女の嗅ぐ鼻息の感觸が、彼の顏にも頬にも、新しく感ぜられるやうな氣がし

た。——彼は云ひやうもない淋しさを感じた。

彼はサンデエ毎日を腰掛の上に投出して、少し居眠りをしようかと考へた。それでさうした姿勢を取らうとして、一寸立上つて、再び腰を下ろした瞬間、彼の眼に異様なものが映つた。それは彼から斜め右の方の向ひ側の硝子戸にうかんだ或物の姿だつた。

彼は眼を据ゑるやうにしてそれを見た。それは外の暗闇を背景として、硝子窓にうつゝてゐる室内の光景だつた。彼はその一枚の硝子戸の丁度中あたりに、黒い一本の太い線が、桃色の布様のものゝ上を、右から左へぐいと力強く捲きついてゐるのを、一番先に見た。彼はそれを中心として、その上下左右に眼をくばつた。すると、その黒い力強い線は、男の洋服を着た腕で、その桃色は、婦人の服である事が解つた。彼の眼の跡付けは、間もなく、その硝子戸——一枚の鏡面の上部で、向う向きになつた西洋婦人の顔に、その半面をそれによつて隠されながら、婦人の顔にぴつたり喰つゝいてゐる西洋人の男のこつち向きの顔を描き出した。それは窓硝子の不完全な鏡面の上に、総ての線が消えてしまつて、調和を帯びた色彩の配列ばかりで出来上つた、印象派風の絵画だつた。

信之はその絵画の意味が解ると、愕然として、彼の右手の方、彼が腰かけてゐる側とは反對の方の側を見た。

——彼は今硝子戸に見たものゝ正體をもつとはつきり見た。桃色の婦人の腕は投げるやうに男の首にかゝり、男の力強い腕は、桃色の背中を力いつぱい抱きしめてゐた。

それは傍若無人の振舞ひではあるが、併し又素晴しい、と云つてもいいやうな光景だつた。彼等は、、、したまま、何かそのまま化石した彫刻でもあるやうに身動きもしなかつた。

信之はそれから眼をはなし、再び窓硝子の上の彼等の絵画の方へ眼をやつた。實物を見る事は、彼にはまぶしかつたが、この方は彼等の實體の方へ向く事なしに見る事が出來たので、彼は悠々と見られた。

それは長い長い、接吻に値するほど、、、、だつた。彼等は省線電車の停車場の灯が、窓を横切る僅の間のみ離れるが、過ぎると直ぐ又、、し、さうして大井、大森、蒲田をも通り過ぎ、六郷川の鐵橋の上を、轟々音を立てて汽車が通る間も、それを續け、川崎、鶴見を過ぎても止めなかつた。

信之は最初は好奇心でそれを見てゐたが、たうとう威壓を感じて來た。西洋人の肉體的情熱——それは彼が持つてゐるものの何層倍であるか知れなかつた。彼は彼等の何分の一かの刺戟によつて、直ぐ面をそむけたくなるやうな充足を感じた。いや、さう云へば、彼は精神的情熱に於いても、それと同様の無氣力者かも知れなかつた。さうでな

けれぱ、榮子のやうな精神的戀愛至上主義を、悠然として受けいれる事が出來るものなのかも知れない。

東神奈川に來ると、さすがに二人の外國人は互にはなれて、めいめい正面を向いた。彼等は互に言葉を交はさずに唯默つてゐた。信之はこの二人が夫婦關係でない事は確かのやうな氣がした。若し夫婦だつたとしたら、數年間も互に會はなかつたものに違ひない。――彼は彼等が帝國ホテルあたりのダンスの踊りである事を想像した。二人は戀人か――或はひよつとすると、今夜あたり始めて互に戀を打明け合つたやうな仲なのかも知れない。二人はさういふ新しい恍惚境に、あんな風にしてひたつてゐるのかも知れない。

信之は、今は離れてゐるので二人の方を安心して見た。女は二十五六の美しい人だつた。男はもう四十以上らしく、頭の上が圓く禿げて、茶褐の髮が耳の後から後腦にかけてだけ生えてゐた。

彼はこの情熱の主人公の頭がそんな風に禿げてゐたといふ事に、急に一種の可笑しみを感じて來た。彼はうつむいて一人でくすくす笑ひ、これは山守からの第一信に、山岡に書き送るのに丁度いいと考へた。

さう思ふと、彼はそれを山岡に書き送つて、榮子には書き送れないといふ事が、一寸淋しかつた。――だが、それにしても、自分が戀人に別れて來たこの汽車の中で、かうした素晴らしい情熱の繪畫を見るといふ事は、何か位置の皮肉、と云つたやうなものが感ぜられた。

横濱で二人の日本人が乘つて來て、戀人たちの前にかけたが、それは程ケ谷で直ぐ下りてしまつた。それから後も、外國人達は再び長い、、を始めたが、信之はもうそれが氣にもならなかつた。

鎌倉の驛前には、丁度一臺の自動車しかなかつた。信之がそれに腰をかける前に、二人の外國人達が早くもそれを占領してしまつた。彼は小袋坂の坂道を、人力車で登らせる勇氣はなかつた。

『海濱院までですから、お待ちになれば直ぐ戻つてまゐります』運轉手は信之の方へ向つて、さう云ひながら、二人の外國人のために自動車のドアを開けた。

男の方の外國人は信之の方を見ないやうにしてゐた。けれども、女の方は車に乘る前に、顔をつき出して、彼の方を尻眼にかけた。

信之はやはり自動車の歸つて來るまで待つことにした。

三

信之は總ての疲れが一時に出たといふやうな感じで、翌日一日は夜具を敷きつぱなしにして、寢たり起きたりしてゐた。

三日目の晴れた朝、彼は彼が借りた寺院の雨戸を開けると、十一月

末の青空が、彼の眼に沁みるやうな快さを持つて來た。都會生活では知らぬ中に過ぎてゐる氣候の變化が、急に一遍に彼の感覺を捉へたやうな氣がした。彼は暫くぶりで自然を見たといふやうな爽快を感じて、晩秋——といふよりも、初冬の赤黒ろい草木を眺めてゐた。

庭の眞中に池があつて、その池の向うは赤土の崖になり、その崖の上の灌木の間から、日光が池の半分及びその手前の土の上に射してゐた。柔かた霜柱がそこだけ溶けて、じゆくじゆく地面が潤んで來てゐる。その日向の部分に、生き残つた木の葉色の蝶が一羽とまつて、日向ぼつこをしながら、翅を開いたりつぼめたりしてゐた。時々パタパタと活潑な翅の動かし方で、ツツウとその邊をまはつては、又日の當つてゐる地面の上にとまつて、翅を休めた。

信之は十一月末に蝶がゐるといふ事が不思議な氣がしながら、それは暑い時分から生き残つたものか、それとも天氣の好い、温い日などに、急に卵から孵るものなのか、といふやうな事をぼんやり考へてゐた。

彼にはそんな事は考へてもよくは解らなかつた。が、氣がついて見ると、蝶ばかりではなかつた。虫は大體夏のものとばかり考へてゐたのに、この初冬の濡れた空を見てゐると、名も知れない小さな虫が、ツト、ツトと、まるで水の中の水すましのやうな線を引きながら、いくつも、いくつも空中を飛んで行くのが見えた。

彼は今迄氣がつかなかつたものに氣がついた興味で、それをいつまでもぼんやり見てゐた

『此處に田島さんていふ人ゐるかね?』さういふ聲が聞えたので、彼が振向くと、庫裡の方から出て行く郵便脚夫の後姿が見えた。

『田島さん、お手紙ですぞ』

この附近で灸がうまい事で有名な七十いくつかの和尚は、少し曲つた腰つきで、その手紙をつまむやうにして持つて來た。

『どうもありがたう』

それは山岡からの手紙だつた。

『品川驛で、君の汽車が發車してから、僕はあんなに弱つた事はない』信之の眼はかういふ文面を追つた。『汽笛が鳴つて、汽車が動き出して、君の姿が窓の中に隠れると、彼女は聲をはり上げて泣き出したのだ。それは哀切きはまる、精いつぱいに張り上げた聲だつた。「ワアッ」と四邊近所かまはずぶちまけた泣聲だつた。彼女はハンケチに顔を埋めて、その聲を押へようとしてゐたらしかつたが、それでもとまらずに、子供が泣くやうに聲をはり上げて泣きつづけた。驛夫がけげんな顔をして立止つた。それでも彼女は泣き止まなかつた。僕は慰める術がなく、彼女と一緒に泣き出したいやうな氣がしながら、漠然と

して彼女の側に佇立してゐた。

彼女は東京驛の方へ引つ返すために、ブリッヂを渡つて、電車のプラットフォオムに行く間も泣き止まなかつた。電車のプラットフォオムに行つても未だ泣き止まなかつた。乗客達、もつともそれは澤山はゐなかつたが、併し電車を待つてゐた五六名の人々は、吃驚して、彼女の方を見てゐた。

彼女は少し鎮まつても、又思ひ出したやうに歔欷し、歔欷は直ぐ又號泣に高まつて行くといふ風で、彼女自身もどうしようもないやうだつた。

僕はあんなに人が泣いたのを見た事がない。そして僕はあんなに驚らされた事は生れてから未だ一度もない』

信之はその手紙を二度よみ返した。そして彼は暫くぼんやり眼の下の緣側を見てゐた。彼の心持はすつかり沈み込んでしまつてゐた。が、やがてその中に、彼の頭にこんな考へが閃いて來た。

『泣いて好かつた。泣けるだけ泣いてくれて好かつた。若し泣けずに陰にこもられたらやり切れなかつたが……』

彼は泣けるだけ泣いたら、彼女がすつぱりしたであらう事を想像した。そしてすつぱりしたら、彼女に又新しい生活が展けるであらう事を想像した。彼女の情熱の新しいはけ口が、やがて彼女によつて求められ始められるだらう事を想像した。

『これでこそ綺麗さつぱりだ』

信之は淋しかつた。が、丁度この晩冬の空のやうに、頭の中がすつぱりと透明になつて行くのを覺えた。（完）



渦巻ける鳥の群

黑島傳治

一

「アナタア、ザンパン、頂だい。」

子供達は青い眼を持つてゐた。そして、毛のすり切れてしまつた破れ外套にくるまつて、頭を襟の中に埋めるやうにすくんでゐた。娘もゐた。少年もゐた。靴が破れてゐた。そこへ、針のやうな雪がはみこんでゐる。

松木は、防寒靴をはき、ズボンのポケットに両手を突きこんで、炊事場の入口に立つてゐた。

風に吹きつけられた雪が、窓硝子を押し破りさうに積りかゝつてゐた。谷間の泉から湧き出る水は、その周圍に凍てついて、氷の岩が出來てゐた。それが、丁度、地下から突き出て來るやうに、一昨日よりは昨日、昨日よりは今日の方がより高くもれ上つて來た。彼は、やはり西伯利亞だと思つた。氷が次第に地上にもれ上つて來ることなどは、内地では見られない現象だ。

子供達は、言葉がうまく通じないなりに、松木に憐れみを求め、こびるやうな顔つき

と態度とを五人が五人までしてみせた。
彼等が口にする「アナタア」には、露骨にこびたアクセントがあつた。
「ザンパンない？」子供達は繰かへした。「……アナタア！　頂だい、頂だい！」
「あるよ。持つて行け。」
松木は、残飯桶のふちを操つて、それを入口の方へころばし出した。
そこには、中隊で食ひ残した麥飯が入つてゐた。パンの切れが放りこまれてあつた。その上から、味噌汁の残りをぶちかけてあつた。
子供達は、喜び、うめき聲を出したりしながら、互ひに手をかきむしり合つて、携へて來た琺瑯引きの洗面器へ残飯をかきこんだ。
炊事場は、古い腐つた漬物の臭ひがした。それにバターと、南京袋の臭ひがまざつた。
調理室で、牛蒡を切つてゐた吉永が、南京袋の前掛けをかけたまゝ入口へやつて來た。
武石は、ペーチカに白樺の薪を放りこんでゐた。ペーチカの中で、白樺の皮が、火にパチ／＼はぜつた。彼も入口へやつて來た。
「コーリヤ。」
松木が云つた。
「何？」
コーリヤは眼が鈴のやうに丸くつて大きく、常にくる／＼動めいてゐる、そして顔にどつか尖つたところのある少年だつた。
「ガーリヤはゐるかね？」
「ゐるよ。」
「どうしてるんだ。」
「用をしてる。」
コーリヤは、その場で、汁につかつたパン切れをむしや／＼頬張つてゐた。
ほかの子供達も、或はパンを、或は汁づけの飯を手に掴んでむしやむしや食つてゐた。
「うまいかい？」
「うむ。」
「つめたいだらう。」
彼等は、残飯桶の最後の一粒まで洗面器に拾ひこむと、それを脇にかゝへて、家の方へ雪の丘を馳せ登つた。
「有がたう。」
「有がたう。」

「有がたう。」

子供達の外套や、袴の裾が風にひら〳〵ひるがへつた。

三人は、炊事場の入口からそれを見送つてゐた

彼等の細くつて長い脚は、強いバネのやうに、勢ひよくぴん〳〵雪を蹴つて、丘を登つてゐた。

「ナーシヤ!」

「リーザ!」

武石と吉永とが呼んだ。

「なアに?」

丘の上から答へた。

子供達は、皆な、一時に立止まつて、谷間の炊事場を見下した。

「飯をこぼすぞ。」

吉永が日本語で云つた。

「なアに?」

吉永は、少女にこちらへ來るやうに手まねきをした。

丘の上では、彼等が、きやあ〳〵笑つたり叫んだりした。

そして、少し行くと、それから自分の家へ分れ〳〵に散らばつてしまつた。

二

山が、低くなだらかに傾斜して、二つの丘に分れ、やがて、草原に連つて、低く、遠くへ廣漠してゐる。

兵營は、その二つの丘の峽間にあつた。

丘のそこかしこ、それから、丘のふもとの草原が延びて行かうとしてゐるあたり、そこらへんに、露西亞人の家が點々として散在してゐた。革命を恐れて、本國から逃げて來た者であつた。前々から、西伯利亞に土着してゐる者もあつた。

彼等はいづれも食ふに困つてゐた。彼等の畑は荒され、家畜は掠奪された。彼等は安心して仕事をすることが出來なかつた。彼等は生活に窮するより外、道がなかつた。

板壁の釘が腐つて落ちかけた木造の家に彼等は住んでゐた。屋根は低かつた。家の周圍には、藁やごみを散らかしてあつた。

處々に、うづ高く積上げられた乾草があつた。

荷車は、軒場に乘りつけたまゝ放つてあつた。

室内には、古いテーブルや、サモワールがあつた。刺繍を施したカーテンがつるしてあつた。でも、そこからは、動物の棲家のやうに、異様な毛皮と、獸油の臭ひが發散して來た。

それが、日本の兵卒達に、如何にも、毛唐の臭ひだと思はせた。

子供達は、そこから、琺瑯引きの洗面器を抱へて毎日やつて來た。ある時は、老人や婆さんがやつて來た。ある時は娘がやつて來た。吉永は、一中隊から來てゐた。松木と武石とは二中隊の兵卒だつた。

三人は、パン屑のまざつた白砂糖を捨てずに皿に取つておくやうになつた。食ひ殘したパンに味噌汁をかけないやうにした。そして、露西亞人が來ると、それを皆に分けてやつた。

「お前ンとこへ遊びに行つてもいゝかい?」

「どうぞ。」

「何か、いゝことでもあるかい?」

「何ンにもない。……でもいらつしやい、どうぞ。」

その言葉が、朗らかに、快活に、心から、歡迎してゐるやうに、兵卒達には感じられた。

兵卒は、殆んど露西亞語が分らなかつた。けれども、そのひゞきで、自分達を歡迎してゐることを、逸早く見てとつた。

晩に、炊事場の仕事がすむと、、、、、かれないやうに、一人づつ、別々に、息を切らしながら、雪の丘を攀ぢ登つた。吐き出す呼氣が凍つて、防寒帽の房々した毛に、それが霜のやうにかたまりついた。

彼等は、家庭の温かさと、情味とに飢ゑ渇してゐた。西比利亞へ來てから何年になるだらう。まだ二年ばかりだ。しかし、もう十年も家を離れ、内地を離れてゐるやうな氣がした。海上生活者が港にあこがれ、陸を戀しがるやうに、彼等は、内地にあこがれ、家庭を戀しがつた。

彼等の周圍にあるものは、はてしない雪の曠野と、四角ばつた煉瓦の兵營と、、、、ひばかりだ。

、、、、、彼等はかういふところで雪に埋れてゐなければならないのだらう。それは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、。、、、、、、、、、、。

、のために、彼等は、只働きをしてやつてゐるばかりだ。

吉永は、胸が腐りさうな氣がした。息づまりさうだつた。、、、、せられることなしに、、、、、、、得るならば、彼は、一分間と雖も我慢してゐたくはなかつた。――僅かの間でもいゝ、、、の外に出たい。情味のある家庭をのぞきたい。さういふ欲求を持つて、彼は、雪の坂道を攀ぢ登つた。

丘の上には、リーザの家があつた。彼はそこの玄關に立つた。

扉には、隙間風が吹きこまないやうに、目貼りがしてあつた。彼は、ポケットから手を出して、その扉をコツ〳〵叩いた。

「今晩は。」

屋内ではペーチカを焚き、暖気が充ちてゐる。その気はひが、扉の外から既に感じられた。

「今晩は。」

「どうぞ、いらつしやい。」

朗らかで張りのある女の聲が扉を通してひびいて來た。

「まあ、ヨシナガサン！　いらつしやい」

娘は嬉しさうに、にこ〳〵しながら、手を出した。

彼は、始め、握手することを知らなかつた。それまで、握手をしたことがなかつたのだ。何か惡いことをするやうに、胸がおど〳〵した。

が、まもなく、平氣になつてしまつた。

のみならず、相手がこちらの手を強く握りかへした時には、それは、何を意味してゐるか、握手と同時に、眼をどう使ふと、それはかう云つてゐるのだ。氣がすゝまぬやうに、だらりと手を出せば、それは見込がない。等々……。握手と同時に現はす、相手の心を讀むことを、彼は心得てしまつた。

吉永がテーブルと椅子と、サモワールとがある部屋に通されてゐる時、武石は、鼻から蒸氣を吐きながら、他の扉を叩いてゐた。それから、稲垣、大野、川本、阪田、みなそれ〴〵二三分間おくれて、別の扉を叩くのであつた。

「今晩は。」

そして、相手がこちらの手を握りかへす、そのかへしやうと、眼に注意を集中してゐるのであつた。

彼等のうちのある者は、相手が自分の、、、、、、、を與へてくれる、とその眼つきから讀んだ。そして胸を湧き立たせた。

「よし、今日は、ひとつ手にキスしてやらう。」

一人の女に、二人がぶつかることがあつた。三人がぶつかることもあつた。そんな時、彼等は、歸りに、丘を下りながら、ひよいと立止まつて、顔を見合はせ、から〳〵笑つた。

「ソペールニクかな。」

「ソペールニクつて何だい？」

「ソペールニク……競争者だよ。つまり、戀を爭ふ者なんだ。はゝゝ。」

三

松木も丘をよぢ登つて行く一人だつた。

彼には笑つてすませるやうな勤務者がなかつた。

彼は、朗らかな、張りのある聲で「いらつしやい、どうぞ！」と女から呼びかけられたこともなかつた。

若しそれが戀とよばれるならば、彼の戀は不如意な戀だつた。彼は、丘を登りしなに、必ず、パンか、乾麺麭か、砂糖かを新聞紙に包んで持つてゐた。それは、、、、、、すべきもの丶一部をこつそり取つておいたものだつた。彼は、それを持つて丘を登り、そして丘を向うへ下つた。

三十分ほどたつと、彼は手ぶらで、悄然と反對の方から丘を登り、それから、、、へ丘を下つて歸つて來た。ほかの者たちは、また、ペーチカを焚いてゐる暖かい部屋で、胸をときめかしてゐる時分だつた。

「あゝ、もうこれでやめよう！」彼は、ぐつたり雪の上にへたばりさうだつた。「あほらしい。」

丘のふもとに、雪に埋れた低い街道がある。雪は橇や靴に踏みつけられて、固く凍つてゐる。そこへ行くまでに、、、、、、が張りめぐらされてあつた。彼は、毎晩、その下をくゞりぬけ、氷を辷りさうな道を横切つて、ある窓の下に立つのであつた。

「ガーリヤ！」

彼は、指頭で、窓硝子をコツ〳〵叩いた。脇腹まで凍りつきさうな寒い風が吹きぬけて行つた。彼は、その軒の下で暫らく佇んでゐた。

「ガーリヤ！」

そして、また、硝子を叩いた。

「何？」

女が窓硝子の向うから顔を見せた。唇の間に白い齒がのぞいてゐる。それがひどく愛嬌を持つてゐる。

「這入つてもいゝ？」

「それ何？」

「パンだ。あげるよ。」

女は、新聞紙に包んだものを窓から受取ると、すぐ硝子を閉めた。

「おい、もつと開けといてくれんか。」

「……窓が冷えるからだめ。——一度開けると新[illegible]分[illegible]すゝの。」

彼女は、櫻色の皮膚を持つてゐた。笑ひかけると、左右の頰に、子供のやうな笑渦が出來た。彼女は悪い女ではなかつた。だが、自分に出來ることをして金を取らねばならなかつた。親も、弟も食ふことに困つてゐるのだ。子供を持つてゐる姉は、夫に吸はせる煙草を買ひに來た。

松木は、パンを持つて來た。砂糖を持つて來た。それから、五圓六

十錢の、、で何かを買つて持つて來た。

でも、彼女の一家の生活を支へるには、あまりに金を持つてゐなすぎる。もつとよけいに、、を取つてゐる者が望ましい。

肉に饑えてゐるのは、、ばかりではなかつた。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を求めてゐるのであつた。

「私、用があるの。すみません、明日來てくださらない。」

ガーリヤは云つた。

「いつでも明日來いだ。で、明日來れや、明後日だ。」

「いえ、ほんとに明日、――明日待つてます。」

四

雪は深くなつて來た。

炊事場へザンパンを貰ひに來る者たちが踏み固めた道は、新しい雪に蔽はれて、あと方も分らなくなつた。すると、子供達は、それを踏みつけ、もとの通りの道をこしらへた。

雪は、その上へまた降り積つた。

丘の家々は、窓のやうに雪の下に埋れてゐた。

後方の山からは、始終、パルチザンがこちらの村を覗つてゐた。のみならず、夜になると、歩哨が、たびたび狼に襲はれた。四肢が沒してもまだ足りない程、深い雪の中を、狼は素早く馳せて來た。

狼は山で食ふべきものが得られなかつた。そこで、すきに乘じて、村落を襲ひ、鷄や仔犬や、豚をさらつて行くのであつた。彼等は群をなして、わめきながら、行くさきにあるものは何でも喰ひ殺さずにはおかないやうな勢ひでやつて來た。歩哨は、それに會ふと、ふるへ上らずにはゐられなかつた。こちらは銃を持つてゐるとは云へ、二人だけしかゐないのだ。慓悍な動物は、彈丸をくゞつて直ちに、人に迫つて來る。それは全く凄いものだつた。衛兵は總がゝりで狼と戰はねばならなかつた。惡くすると、腕の下や、のどに喰ひつかれるのだ。

薄ら曇りの日がつゞいた。晝は短く、夜は長かつた。太陽は、一度もにこ〳〵した顏を見せなかつた。松木は、これで二度目の冬を西伯利亞で過してゐるのであつた。彼は疲れて憂鬱になつてゐた。太陽が、地球を見棄てゝどつかへとんで行つてゐるやうな氣がした。こんな狀態がいつまでもつゞけばきつと病氣にかゝるだらう。――それは、松木ばかりではなかつた。同年兵が悉く、ふさぎこみ、疲憊してゐた。そして、女のところへ行く、そのことだけにしか興味を持つてゐなかつた。

ガーリヤは、人眼をしのぶやうにして炊事場へやつて來た。古いが、もとは相當ものが良かつたらしい外套の下から、白く洗ひ晒された彼女のスカートがちら〱見えてゐた。

「お前は、人をよせつけないから、ザンパンが有つたつてやらないよ。」

「あら、さう。」

彼女は響きのいゝ、すき通るやうな聲を出した。

「さうだとも、あたりまへだ。」

「ぢやいゝ。」

黒く磨かれた、踵の高い靴で、彼女はきりつと、ブン廻しのやうに一とまはりして、丘の方へ行きかけた。

「いや、うそだ〱。今さつきほかの者が來てすつかり持つて行つちやつたんだ。」

松木はうしろから叫んだ。

「いゝえ、いらないわ。」

彼女の細長い二本の脚は、強いばねのやうに勢ひよくはねながら、丘を登つた。

「ガーリヤ！　待て！　待て！」

彼は乾麵麭を一袋握つて、あとから追つかけた。

炊事場の入口へ同年兵が出てきて、それを見て笑つてゐた。

松木は息を切らし〱女に追ひつくと、空の洗面器の中へ乾麵麭の袋を放りこんだ。

「さあ、これをやるよ。」

ガーリヤは立止まつて彼を見た。そして眞白い齒を露はして、何か云つた。彼は、何といふことか意味が汲みとれなかつた。しかし女が、自分に好感をよせてゐることだけは、潤みのあるおだやかな調子ですぐ分つた。彼は追つかけて來ていゝことをしたと思つた。

歸りかけて、うしろへ振り向くと、ガーリヤは、雪の道を辿りながら、丘を登つてゐた。

「おい、いゝかげんにしろ。」炊事場の入口から、武石が叫んだ。「あんまりぢやれつきよると戰爭に行くぞ！」

五

吉永の中隊は、大隊から分れて、×××へ守備に行くことになつた。

HとSとの間に、かなり隔つた區域に亙つて、森林地帶があつた。そこには山があり、大きな谷があつた。森林の中を貫いて、河が流れてゐた。そのあたりの地理は詳細には分らなかつた。

だが、そこの鐵橋は始終破壞された。松木はいつの間にか引きぬか

れてゐた。不意に軍用列車が襲撃された。

電線は切斷されづめだつた。

HとSとの聯絡は始終斷たれてゐた。

そこにパルチザンの巣窟があることは、それで、ほゞ想像がついた。

×××へ守備中隊を出すのは、そこの聯絡を十分にするがためであつた。

吉永は、松木の寢臺の上で私物を纏めてゐた。炊事場を引き上げて、中隊へ歸るのだ。

彼は、これまでに、しば〳〵危險に身を曝したことを思つた。

彈丸に倒れ、眼を失ひ、腕を落した者が、三人や四人ではなかつた。

彼と、一緒に歩哨に立つてゐて、夕方、不意に、胸から血潮を迸ばしらして、倒れた男もあつた。坂本といふ姓だつた。

彼は、その時の情景をいつまでもまざまざと覺えてゐた。

どこからともなく、誰れかに射撃されたのだ。

二人が立つてゐたのは山際だつた。

交代の歩哨は衞兵所から列を組んで出てゐるところだつた。もう十五分すれば、二人は衞兵所へ歸つて休めるのだつた。

夕日が、あか〳〵と彼方の地平線に落ちようとしてゐた。牛や馬の群が、背に夕日をあびて、草原をのろ〳〵歩いてゐた。十月半ばのことだ。

坂本は

「腹がへつたなあ。」と云つてあくびをした。

「内地に居れや、今頃、野良から鍬をかついで歸りよる時分だぜ。」

「あ、さうだ。もう芋を掘る時分かな。」

「うむ。」

「あゝ、芋が食ひたいなあ！」

そして坂本はまたあくびをした。そのあくびが終るか終らないかのうちに、彼は、ばたりと丸太を倒すやうに芝生の上に倒れてしまつた。

吉永は、とび上つた。

も一發、彈丸が、彼の頭をかすめて、ヒウと唸り去つた。

「おい、坂本！　おい！

彼は呼んでみた。

軍服が、どす黑い血に染つた。

坂本はたゞ「うう」といふばかりだつた。

内地を出發して、ウラヂオストックへ着き、上陸した。その時か

ら、既に危険は皆の身に迫つてゐたのであつた。

機關車は薪を焚いてゐた。

彼等は四百里ほど奥へ乗りこんで行つた。時々列車からおりて、鐵砲で打ち合ひをやつた。そして、また列車にかへつて、飯を焚いた。薪が燻つた。冬だつた。機關車は薪がつきて、しよつちゆう動かなくなつた。彼は二ケ月間顔を洗はなかつた。向うへ着いた時には、まるで黒ン坊だつた。息が出來ぬくらゐの寒さだつた。そして流行感冒がはやつてゐた。兵營の上には、向うの飛行機がとんでゐた。街には到るところ、赤旗が流れてゐた。

そこでどうしたか。結局、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、した。赤旗が退路を遮つた。で、戰爭をした。そして、また、、をつゞけた。赤旗は流行感冒のやうに、到るところに傳播してゐた。また戰爭だ。それからどうしたか？

……

雪解の沼のやうな泥濘の中に寢て、戰爭をしたこともあつた。頭の上から、機關銃をあびせかけられたこともあつた。

吉永は、自分がよくもこれまで生きてこられたものだと思つた。一尺か二尺、自分の立つてゐた場所が横へそれてゐたら、死んでゐるかもしれないのだ。

これからだつて、どうなることか、分るものか！ 分るものか！

、、、、、、、、、、、、、、、、つてゐないのだ。たゞ、自分のことを心配してくれるのは、村で薪出しをしてゐるお母だけだ。

彼は、お母がこしらへてくれた守り袋を肌につけてゐた。新しい白木綿で縫つた、かなり大きい袋だつた。それが、垢や汗にしみて黒くなつてゐた。彼は、それを開けて、新しい袋に入れかへやうと思つた。彼は、袋を鋏で切り開けた。お守りが澤山欲張つて入れてあつた。金刀比羅宮、男山八幡宮、天照皇大神宮、不動明王、妙法蓮華經、水天宮。――母は、多ければ多いほど、御利益があると思つたのだらう！ それ等が、殆んど紙の正體が失はれるくらゐにすり切れてゐた。――まだある。別に、紙に包んだやつが。彼はそれを開けてみた。そこには紙幣が入つてゐた。五圓札と、五十錢札と、一圓札とが合せて十圓くらゐ入つてゐる。母が、薪出しをしてためた金を内證で入れといてくれたのだらう。

「おい、おい。お守りの中から金が出てきたが。」

吉永は嬉しさうに云つた。

「何だ？」

「お守りの中から金が出てきたんだ。」

「ほんとかい。」
「嘘を云つたりするもんか。」
「ほう、そいつあ、儲けたな。」
松木と武石とが調理室の方から走せ込んで來た。
札も、汗と垢とで黑くなつてゐた。
「どれ〳〵。内地の札だな。」松木と武石とはなつかしさうに、それを手に取つて見た。「内地の札を見るんは久し振りだぞ。」
「お母が多分内所で入れてくれたんだ。」
「それをまた今まで知らなかつたとは間がぬけとるな。……全く儲けもんだ。」
「むう、儲けた。……半分わけてやらう。」
吉永は、自分が少くとも、明後日は、×××へ行かなければならないことを思つた。雪の谷や、山を通らなければならない。そこにはパルチザンがゐる。また、撃ち合ひだ。生命がどうなるか。誰れが知るもんか！ 誰れが知るもんか！

六

松木は、酒保から、餡パン、砂糖、パインアップル、煙草などを買つて來た。

晩におそくなつて、彼は、それを新聞紙に包んで丘を登つた。石のやうに固く凍てついてゐる雪は、靴にかち〳〵鳴つた。空氣は鼻を切りさうだつた。彼は丘を登りきると、今度は向うへ下つた。丘の下のあの窓には、灯がともつてゐた。人かげが、硝子戸の中で、ちら〳〵動いてゐた。
彼は歩きながら云つてみた。
「ガーリヤ。」
「ガーリヤ。」
「ガーリヤ。」
「あんたは、なんて生々してるんだらう。」
さて、それを、ロシア語ではどう云つたらいいかな。
丘の下でどつか人聲がするやうだつた。三十すぎの婦人の聲だ。それに一人は日本人らしい。何を云つてゐるのかな。彼は、ちよいと立止まつた。なんでも聲が、ガーリヤの母親に似てゐるやうな氣がした。が、聲は、もうぷつゝり聞えなかつた。すると、まもなくすぐそこの、今まで開いてゐた窓に青いカーテンがさつと引つぱられた。
「おや、早や、寢る筈はないんだが……」彼はさう思つた。そして、鐵條網をくゞりぬけ、窓の下へしのびよつた。
「今晩は、――ガーリヤ！」

——彼が窓に叩くやうに持つてきておいた武石がとりのけられてゐる

「ガーリヤ。」

砕かれた雪の破片が、彼の方へとんで來た。彼の防寒外套の襟のあたりへばら／＼と落ちた。雪はまたとんできた。彼の背にあたつた。でも彼は、それに氣づかなかつた。そして、ぢいつと、窓を見上げてゐた。

「ガーリヤ！」

彼は、上に向いて云つた。咽が切れるやうに冴えかへつてゐた。

「おい、こらッ！」

さきから、雪を投げてゐた男が、うしろの白樺のかげから靴をならしてとび出て來た。武石だつた。

松木は、ぎよつとした。そして、新聞紙に包んだものを雪の上へ落しさうだつた。

彼は、若し、、か、或は知らない者であつた場合には、何もかも投げすてゝ逃げ出さうと瞬間に心かまへたくらゐだつた。

「また、やつて來たな。」武石は笑つた。

「君かい。おどかすなよ。」

松木は、暫らく胸がどき／＼するのが止まらなかつた。彼は、武石だと知ると同時に、吉永から貰つた金で、すぐさま、女が喜びさうなものを買つて來たことをきまり惡く思つた。「砂糖とパイナップルは置いて來ればよかつた。」

「誰れかさきに、ここへ來た者があるんだ。」と、武石が聲を落して窓の中を指した。「俺れや、君が這入つたんかと思ふて、ここで様子を伺ふとつたんだ。」

「誰れだ？」

「分らん。」

「、、か、、、か？」

「ぼつとしとつて、それが分らないんだ。」

「誰奴かな。」

「——中に這入つて見てやらう。」

「よせ、よせ、……歸らう。」

松木は、若し、、にでも見つかると困る、——そんなことを思つた。

「このまゝ歸るのは意氣地がないぢやないか。」

武石は反撥した。彼は、ガン／＼硝子片を叩いた。

「ガーリヤ、ガーリヤ、今晩は！」

次の部屋から面倒くささうな男の聲がひゞいた。

「ガーリヤ！」

「何だい。」

ウラヂオストツクの幼年學校を、今はやめてゐる弟のコーリヤが、白い標章のついた軍服を着てカーテンのかげから顔を出した。

「ガーリヤは？」

「用をしてる。」

「一寸來いつて。」

「何です？　それ。」

コーリヤは、松木の新聞包を見てきいた。

「こら酒だ。」松木が答へないさきに、武石が脚もとから正宗の四合壜を出してきた。「澤山いゝものを持つて來とるよ。」

武石は、包みの新聞紙を引きはぎ、硝子の外から、壜をコーリヤの眼のさきへつき出した。松木は、その手つきがものなれてゐるなと思つた。

「與れ。」コーリヤは手を動かした。

でも、その手つきにいつものやうな力がなく、途中で腰を折られたやうに挫けた。いつも無遠慮なコーリヤに珍らしいことだつた。

武石も、物を持つて來て、やつてゐるんだな、と松木は思つた。ぢや、自分もやることは恥かしくない譯だ。彼はコーリヤが遠慮するとなほやりたくなつた。

「さ、これもやるよ。」彼は、パイナツプルの罐詰を取出した。

コーリヤはもぢ／＼してゐた。

「さ、やるよ。」

「有がたう。」

顔にどつか劍のある、それで一寸沈んだ少年が、武石には、面白さうな奴だと思はれた。

「もつとやらうか。」

少年は與れるものは欲しいのだが、貰つては悪いといふふうに、遠慮してゐた。

「煙草と砂糖。」松木は、窓口へさし上げた。

「有がたう。」

コーリヤが、窓口から、やつたものを受取つて向うへ行くと、

「きつと、そこに誰れか來とるんだ。」と、武石は、小聲で、松木にささやいた。

「誰れかな。俺れやどうも見當がつかん。」

「這入りこんで現場を見届けてやらう。」

二人は耳をすました。二つくらゐ次の部屋で、何か氣配がして、開けたてに扉が軋る音が聞えてきた。、、、、、、、がなる。武石は窓枠

に手をかけて、さばり上り、中をのぞきこんだ。
「分るか。」
「いや。サモヷールがじゆんくたぎつとるばかりだ。——ここはまさか、娘を寶物にしとる家ぢやないんだらうな。」
コーリヤが扉のかげから現れて來た。窓から屋内へ這入らうとするかのやうに、よぢ上つてゐる武石を見ると、彼は急に態度をかへて、
「いけない！　いけない！」叱るやうに、かすれた幅のある聲を出した。
武石は、突然、その懸命な聲に、自分が惡いことをしてゐるやうな感じを抱かせられ、窓から辷り落ちた。
コーリヤは、窓の方へ來かけて、途中、ふとあとかへりをして、扉をぴしやつと閉めた。暫らく二人は窓の下に佇んでゐた。丘の上の、雪に埋はれた家々には、灯がきらく光つてゐた。武石は、そこにも女がゐることを思つた。吉永が、温かい茶をのみながら、リーザと名殘を惜んでゐるかも知れない。やせぎすな、小柄なリーザに、×××まで一緒に行くことをすゝめてゐるだらう。多分、彼も、何かリーザが喜びさうなものを買つて持つて行つてゐるのに違ひない。武石は、小皺のよつた、人のよささうな、吉永の顔を思ひ浮べた。そして、自から、ほゝ笑ましくなつた。——吉永は、危險な×××守備に行つてしまふのだ。
丘の上のそこかしこの灯が、カーテンにさへぎられ、ぽつく消えて行つた。
「お休み。」
一番手近の、グドコーフの家から、三四人同年兵が出て行つた。歩きながら交す、その話聲が、丘の下までひゞいて來た。兵營へ歸つてゐるのだ。
不意に頭の上で、響きのいゝ朗らかなガーリヤの聲がした。二人は、急に、それでよみがへつたやうな氣がした。
「ばあ！」彼女は、硝子戸の中から、二人に笑つて見せた。「いらつしやい、どうぞ。」
玄關から這入ると、松木は、食堂や、寢室や、それから、もう一つの仕事部屋をのぞきこんだ。
「誰れが來てゐたんです？」
「、、。」
「何？」二人とも言葉を知らなかつた。
「、、、、、です。」
「何だらう。、、、、、つて。」松木と武石とは顔を見合はした。「、、寄ゐと解釋すれや、ダンスでもする奴かな。」

七

、、、松木にとつて、笑つてすませる、、ではなかつた。

二人が玄關から這入つて行つた、丁度その時、、、は勝手口から出て來た。彼は不機嫌に怒つて、ぷり〱してゐた。十八貫もある、でつぷり肥つた、腕のある男だ。彼の靴は、固い雪を蹴散らした。いつぱいに擴がつた鼻の孔は、凍つた空氣をかみ殺すやうに吸ひこみ、それから、その代りに、もう〱と蒸氣を吐き出した。

彼は、、、。、、、、、、、、、、、、、行つた。……途中で、ふと、彼は、踵をかへした。

つひ、今さつきまで、松木と武石とが立つてゐた窓の下へ、、は歩みよつた。彼は、がん丈で、せいが高かつた。つまさきで立ち上らずに、カーテンの隙間から部屋の中が見えた。

そこには、二人の一等卒が、正宗の四合壜を立てらして、テーブルに向ひ合つてゐた。ガーリヤは、少し上氣したやうな顏をして喋つてゐる。白い齒がちら〱した。薄荷のやうにひり〱する唇が微笑してゐる。

彼は、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、取つておきの、、、、、、、、、、、、、、、。その聲は、のどの最上部にまで、ぐう〱押し上げて來た。

が、彼は、必死の努力で、やつとそれを押しこらへた。そして、前よりも二倍位ゐ大股に、、、へとんで歸つた。女のところで酒をのむなんて、全くけしからん奴だ！」

、、、、をした歩哨は、何か怒聲をあびせかけられた。

、、、、、が鞭で殴りに來やしないか、そのひどい見幕を見て、こんなことを心配した位ゐだつた。

「、、、！」

彼は、部屋に這入るといきなり奴鳴つた。

「、、！」

、、が這入つて來ると、彼は、、、、、、、、椅子に腰を落して、荒い鼻息をしながら、

「、、、、、、。すぐだ、すぐやつてくれ！」

「はい。」

「それから、炊事場へ露西亞人をよせつけることはならん。殘飯は一粒と雖も、やることは絶對にならん。嚴禁してくれ。」

「はい。」

「よし、それだけだ。」

、、が、命令を遂行するために、次の部屋へ引き下ると、彼はまた叫んだ。

「、、、！」

「はい。」

「、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。さうするんだ。——すぐだ、速刻やつてくれ！」

八

一隊の兵士が雪の中を黙々として歩いて行つた。疲れて元気がなかつた。雪に落ちこむ大きな防寒靴が、如何にも重く、邪魔物のやうに感じられた。

雪は、時々、彼等の膝にまで達した。すべての者が憂欝と不安に襲はれてゐた。中隊長の顔には、焦燥の色が表れてゐる。

草原も、道も、河も悉く雪に蔽はれてゐた。枝に雪をいたゞいて、それが丁度、枝に雪がなつてゐるやうに見える枯木が、五六本づゝ所々に散見する外、あたりには何物も見えなかつた。どこもかしこも、すべて、まぶしく光つてゐる白い雪ばかりだつた。そして、何等の音も、何等の叫びも聞えなかつた。はら／＼雪を踏み砕いて歩く兵士の雑音は、空に呑まれるやうに消えて行つた。

彼等は、早朝から雪の曠野を歩いてゐるのであつた。彼等は、昼に、パンと乾麺麭をかぢり、雪を食つてのどを潤した。

どちらへ行けば×××に達しられるか！

右手向うの小高い丘の上から、銃を片手に提げ、片手に劒鞘を握つて、斥候が馳せ下りて來た。彼は、銃が重くつて、手が伸びてゐるやうだつた。そして、雪の上にそれを引きずりながら、馳せてゐた。松木だつた。

彼は、息を切らし、中隊長の傍まで來ると、引きずつてゐた銃を如何にも重さうに持ち上げて、「捧げ銃」をした。彼の手は凍つて、思ふ通りに利かなかつた。銃は、位置に、形正しく、鼻のさきへ持ち上げることが出來なかつた。

中隊長は、不満げに、彼を睨んだ。「も一度。」そんな捧げ銃があるか！——その眼は、さう云つてゐるやうだつた。

松木は、息切れがして、暫らくものを云ふことが出來なかつた。鼻孔から、喉頭が、マラソン競争をしたあとのやうに、硬燥し、硬ばりついてゐる。彼は唾液を出して、のどを湿さうとしたが、その唾液が出てきなかつた。雪の上に倒れて休みたかつた。

「どうしたんだ？」

中隊長は腹立たしげに眼に角立てた。
「道が、どうしても、」松木は息切れがして、つゞけてものを云ふことが出來なかつた。「どうしても、分らないんであります。」
「露助は、どうしてるんだ。」
「はい。スメターニンは、」また息切れがした。「雪で見當がつかんといふんであります。」
「仕樣がない奴だ。大きな河があつて、河の向うに、樅の林がある。さういふところは見つからんか、そこへ出れや、すぐ×××へ行けるんだ。」
「はい。」
「露助にやかましく云つて案内さして見ろ！」
中隊長は歩きながら、腹立たしげに、がみがみ云つた。「場合によつては銃劍をさしつけてもかまはん。あいつが、パルチザンと策應して、わざと道を迷はしとるのかもしれん。それをよく監視せにやいかんぞ！」
「はい。」
松木は、若し交代さして貰へるかと、ひそかにそんなことをあてにして、暫らく中隊長の傍を並んで歩いてゐた。
彼は蒼くなつてゐた。身體中の筋肉が、ぶちのめされたやうに疲れてゐる。頭がぼんやりして耳が鳴る。
だが、中隊長は、彼を休ませやうとはしなかつた。
「おい行くんだ。もつとよく探して見ろ！」
ふら〱歩いてゐた松木は、疲れた老馬が鞭のために、最後の力を搾るやうに、また、銃を引きずつて、向うへ馳せ出した。
「おい、松木！」中隊長は呼び止めた。「道を探すだけでなしに、パルチザンがゐやしないか、家があるか、鐵道が見えるか、よく氣をつけてやるんだぞ。」
「はい。」
斥候は、やがて、丘を登つて、それから向うの谷かげに消えてしまつた。そこには武石と、道案内のスメターニンとが彼を待つてゐた。
松木と武石とは、朝、本隊を出發して以來つゞけて斥候に出されてゐるのであつた。
中隊長は、不機嫌に、二人に怒聲をあびせかけた。
「中隊が××××に行かなけやならんのは誰れのためだと思ふんだ！、、、、、、、、、、、、、、、、、、よつたせゐぢやないか！」彼は、心から怒つてゐるやうな眼で二人をにらみつけた。「中隊長は、皆んなを危險なところへは曝したうない。中隊が可愛いゝんだ。それを、危險なところへ行かなけやならんやうにしたのは、貴樣

等二人だぞ！ 軍人にあるまじきことだ！」

そして、二人は骨の折れる、危険な勤務につかせられた。

松木と武石とは、雪の深い道を中隊から十町ばかりさきに出て歩いた。そして見た状勢を、駈け足で、うしろへ引つかへして報告した。報告がすむと、また前に出て行くことを命じられた。雪は深く、そしてまぶしかつた。二人は常に、前方と左右とに眼を配つて行かなければならなかつた。報告に、息せき／＼引つかへすたびに、中隊長は、不満げに、腹立たしさうな顔で何か缺點を見つけてどなりつけた。

雪の上に腰を落して休んでゐた武石は

「まだ交代さしてくれんのか。」ときいた。

「あゝ。」松木の聲にも元氣がなかつた。

「弱つたなア――俺れや、もうそこで凍え死んでしまふ方がましだ！」

武石は泣き出しさうに吐息をついた。

二人は、スメターニンと共に、また歩きだした。丘を下ると、深い谷があつた。それから、緩慢な登りになつてゐた。それを行くと、右手には、けはしい山があつた。右には、雪の曠野が遙か遠くへ展開してゐる。

山へ登つてみやう、とスメターニンが云ひだした。山から見下せば地理がはつきり分るかもしれなかつた。それには、しかし、中隊が麓へ到着するまでに登つて、様子を見て、おりてきなければならなかつた。さうしたければ、また中隊長がやかましく云ふのだ。

山のひだは、一層、雪が深かつた。松木と武石とは、銃を杖にしてよぢ登つた。そこには熊の足跡があつた。それから、小さい、何か分らぬ野獣の足跡が到るところに印されてゐた。落葉が雪に蔽はれてゐた。灌木の株に靴が引つかゝつた。二人は、熱病のやうに頭がふらふらした。何もかも取りはづして、雪の上に倒れて休みたかつた。

山は頂上で、次の山に連つてゐた。そしてそれから、また次の山が、丁度、珠數のやうに遠くへ續いてゐた。

遠く彼方の地平線まで白い雪ばかりだ。スメターニンはやはり見當がつかなかつた。

中隊は、丘の上を蟻のやうに遅々としてやつて來てゐた。それに、廣い、はてしのない雪の曠野で、實に、二三匹の蟻にも比すべき微々たるものであつた。

「どつちへでもいゝ、えゝかげんで連れてつて見れよ。」二人は、やけになつた。

「あんまり迫ひたてるから、なほ分らなくなつちまつたんだ。」

スメターニンは、毛皮の帽子をぬいで額の汗を拭いた。

九

薄く、そして白い夕暮が、曠野全體を蔽ひ迫つてきた。

どちらへ行けばいゝのか！

疲れて、雪の中に倒れ、そのまゝ凍死してしまふ者があるのを松木はたび〳〵聞いてゐた。

疲勞と空腹は、寒さに對する抵抗力を奪ひ去つてしまふものだ。

一個中隊すべての者が、、、、、、、する、そんなことがあるものだらうか？　あつてもいゝものだらうか？

、、、、、、、、になつたのだ。兵卒達はさういふことすら知らなかつた。

何故、、、、、へ來なければならなかつたのか。それは、、、、こされたのか？　さういふことは、勿論、、、、にかくれて、彼等には分らなかつた。

われ〳〵は、、、、へ來たくなかつたのだ。、、、、、來させられたのだ。──それすら、彼等は、今、殆んど忘れかけてゐた。

彼等の思つてゐることは、死にたくない。どうかにして雪の中から逃かれて、生きてゐたい。たゞそればかりであつた。

雪の中へ來なければならなくせしめたものは、松木と武石とだ。

そして、道を踏み迷はせたのも松木と武石とだ。──彼等は、そんな風に思つてゐた。それより上に、彼等に、、、が強く働いてゐることは、兵士達には分らなかつた。

彼等が、いくらあせつても、行くさきにあるものは雪ばかりだつた。彼等の四肢は痲痺してきだした。意識が遠くなりかけた。破れ小屋でもいゝ、それを見つけて一夜を明かしたい！

だが、どこまで行つても雪ばかりだ。……

最初に倒れたのは、松木だつた。それから武石だつた。

松木は、意識がぼつとして來たのは、まだ知つてゐた。だが、まもなく頭がくら〳〵して前後が分らなくなつた。そして眠るやうに、意識は失はれてしまつた。

彼の四肢は凍つた。そして、やがて、身體全體が固く棒のやうに硬ばつて動かなくなつた。

……雪が降つた。

白い曠野に、散り〳〵に横たはつてゐる、、、、は、埋められて行つた。雪は降つた上に降り積つた。倒れた兵士は、雪に蔽はれ、暫らくするうちに、背嚢も、靴も、軍帽も、すべて雪の下にかくれて、彼等が横たはつてゐる痕跡は、すつかり分らなくなつてしまつた。

雪は、なほ、降りつゞいた。……

十

群が來た。

太陽は雲間からにこ〳〵かゞやきだした。枯木にかゝつてゐた雪はいつのまにか落ちてしまつた。雀の群が灌木の間をにぎやかに囀り、嬉々としてとびまわつた。

鐵橋を渡つて行く軍用列車の轟きまでが、のび〳〵としてきたやうだ。

積つてゐた雪は解け、雨垂れが、絶えず、快い音をたてゝ樋を流れる。

吉永の中隊は、×××に分遣されてゐた。丘の上の木造の建物を占領して、そこにゐる。兵舍の樋から落ちた水は、枯れた芝生の間をくぐつて、谷間へ小さな急流をなして流れてゐた。

松木と武石との中隊が、行衛不明になつた時、、、、は、他の中隊を出して探索した。、、、は、心配さうな顔もしてみせた。遺族に對して申譯がない、そんなことも云つた。——、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、出すか、その行きかたはかりだつた。

一週間探した。しかし、行衛は依然として分らなかつた。、、、は、もうそのことは、全然忘れてしまつてゐるやうだつた。彼は、、、、、、、、の家の方を眺めて、口笛で「赤い夕日」を吹いたりした。

群が來た。だが、あの、、、、が、どこでどうして消えてしまつたのか、今だにあとかたも分らなかつた。

吉永は、丘の上の兵營から、また、すつかり雪の解けきらない曠漠たる曠野を見渡しながら、自分がよくも今まで生きてこられたものだ、とひそかに考へてゐた。あの時、自分達の中隊が、さきに分遣されることになつてゐたのだ。それがどうしたのか、出發の前日に變更されてしまつた。彼の中隊が、橇でなく徒歩でやつて來てゐたならば、彼も、今頃、どこで自分の骨を見も知らぬ犬にしやぶられてゐるか分らないのだ。

徒歩で深い雪の中へ行けば、それは、死に行くやうなものだ。

彼等を、、、、、、、、、、者は、彼等が、、、、、、、にならうが、、、、、、、、、、、、、、つてゐやしないのだ。一人や二人が死ぬことは勿論である。、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、も考へやしない。代りはいくらでもゐる

るのだ。それは、たゞでかり出して來られるのだ。……

丘の左側には汽車が通つてゐた。

河があつた。そこには、まだ氷が張つてゐた。牛が、ほか／＼その上を歩いてゐた。

右側には、はてしない曠野があつた。

枯木が立つてゐた。解けかけた雪があつた。黒い鳥の群が、空中に渦巻いてゐた。陰鬱に啞々と鳴き交すその聲は、丘の兵舍にまで、やかましく聞えてきた。それは、地平線の涯々からすべての鳥が集つて來たかと思はれる程、無數に群がり、夕立雲のやうに空を蔽はぬばかりだつた。

鳥はやがて、空から地平をめがけて、騒々しくとびおりて行つた。

そして、雪の中を執念くかきさがしてゐた。

その群は、昨日も集つてゐた。

そして、今日もゐる。

三日たつた。しかし、鳥は、數と、騒々しさと、陰鬱さとを増して來るばかりだつた。

或る日、村の警衛に出てゐた兵士は、露西亞の百姓が、銃のさきに背嚢を引つかけて、雪にかついで歸つて來るのに出會した。銃も背嚢も、、のものだ。

「おい、待て！　それや、どつから、かつぱらつて來たんだ？」

「あつちだよ。」髯もぢやの百姓は、大きな手をあげて、鳥が群がつてゐる曠野を指さした。

「あつちに落ちとつたんだ。」

「うそ云へ！」

「あつちだ。あつちの雪の中に澤山落ちとるんだ。……兵タイも澤山死んどるだ。」

「うそ云へ！」兵士は、百姓の頰をぴしやりとやつた。「一寸來い。中隊まで來い！」

、、、、、、、、、、てゐることが明かになつた。背嚢の中についてゐた記號は、それが、松木と武石の中隊のものであることを物語つた。

翌日、中隊は、早朝から、鳥が渦巻いてゐる空の下へ出かけて行つた。鳥は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、で、そ、、、、、、、、、、、、。

兵士達が行くと、鳥は、かあ／＼鳴き叫び、雲のやうに空へまひ上つた。

そこには、雪は、、、れて見るかげもなくなつてゐた。、、。

雪は半ば解けかけてゐた。水が靴にしみ通つてきた。

やかましく鳴き叫びながら、空に群がつてゐる鳥は、やがて、一町ほど向うの雪の上へおりて行つた。

兵士は、鳥が雪を、、、、、、、、、、、ゐるのを見つけては、それを追つかけた。

鳥は、また、鳴き叫びながら、空に廻ひ上つて、二三町さきへおりた。そこにも、、、、、、。兵士はそれを追つかけた。

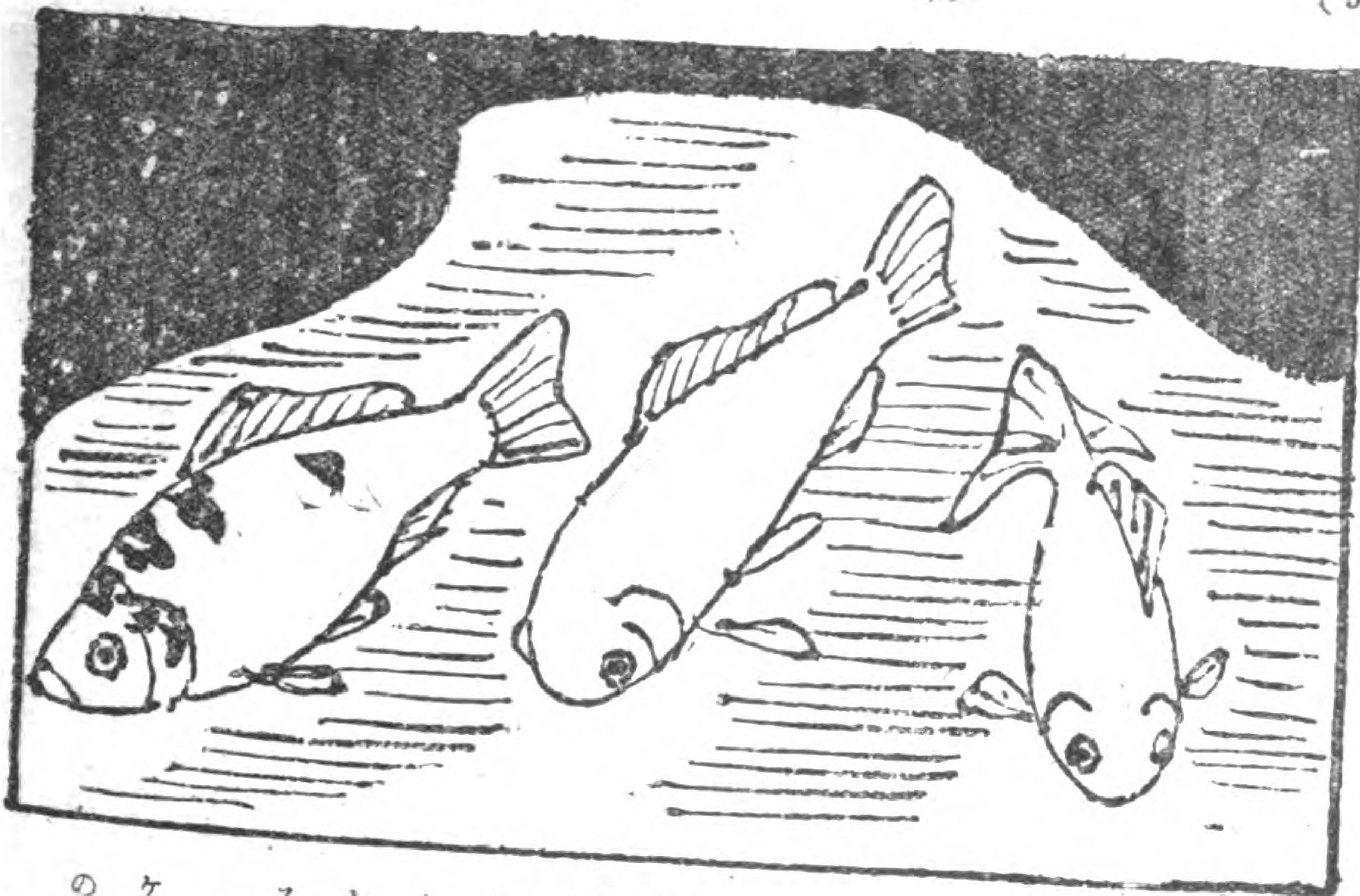
鳥は、次第に遠く、一里も、二里も向うの方まで、雪の上におりながら逃げて行つた。

松木と武石との中隊は どうにかして生きようとあせり、雪の上をさまよひ、歩いて、最後の力を搾つたのであつた。そして、雪の上に

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、

鳥はそれを知らせるかのやうに、雪を、、、、、、向うの方へとんで行つた。



木を伐る

里見弴

一

こゝは南海の小嶋である。

常夏の國の八月の朝である。而も、一體が水蒸氣の多いところへもつて來て、ゆうべ眞夜中の半時ばかり、瀧のやうに灌いで行つた驟雨があつて、樹々も草も褐色の土も、渴き切つた咽を纔に潤したと思つたばかりで、すぐまた熱い氣溫のなかに喘ぎ返してゐたから、ひときは研ぎ澄まされた南國の蒼穹は展がりながらも、謂はゞその面にかゝつた息の汗と凝つたやうな靄に覆はれて、決して夏の朝らしい爽さは覓められなかつた。銅色に燻つて、靜に高まつて行く太陽などは、午の炎熱を、指を以て脅してゐるかと、底意地わるく思はれるほどだつた。

藍碧の海を見晴す丘の頂で、山持のワルドルウといふ老爺と、若白髮の作男、ハンケとが、直徑三尺にもあまる槲の根元に蹲つて、差向ひに片足を踏んがけ、互引の大鋸を、キユウ、ビユウ、キユウ、ビユウとやりとりしてゐた。

この槲は、丘を越え谿を渉つて、西の方へ三哩ばかりも隔てた親村に通じる街道の

上に、こんもりと枝をさしかけてゐた。その故にワルドルウも、乏しいなかゝら、この木だけは、最後まで金に代えることをしなかつたのだが、こゝよりはだいぶ大きい隣島の港に出稼に行つてゐる長男の、急な入用のために、思ひ切つて鋸の刃を加へることにしたわけだつた。

厚い靄に、日の光も直には來なかつたが、蒸れ返る地息に、二人とも眞黑な顏を、脂汗でテカ〳〵光らせてゐた。ハンケがヘルと挽けば、親爺は、低く呻くやうに、ショッホとうけて、曲つた背骨のまま、土の上に寢倒れんばかり引き返した。――ヘル、ショッホ。――ヘル、ショッホ……。

夜の白々明からの努力も、まだ大樹の根元に二寸と引き込むことは出來なかつた。だから、時折パラ〳〵と降り注ぐ葉房に溜んだ雨水は、とぎれ〳〵に吹きあげて來る海の風に搖り落されるので、刃渡り六尺に近い大鋸の起す震動も、太い、嚴丈な幹を傳ひ昇るまでには至らなかつた。何も知らぬげに、梢は、遙に靄にかすんでゐた。臆病な小鳥でさへ、枝から枝に跳び移りながら、甲高に朝の歌を囀つてゐた。けれども、水づいた鋸屑は、苛ち走る馬の口尻に湧きあがる白泡のやうに、鋸の刃に從つてこぼれ落ちて來た。刃の高まる目とともに、ヘル、キユウ。ショッホ、ピユウ。――ヘル、キユウ。ショッホ、ピユウと、低く、單調な二拍子が續いた。

そこに、急な坂道を、息も切らせずに、勢よく駈け登つて來たのは、ワルドルウの、五十を越してからもつた末子で、サキスコン、愛稱でサッチヨと呼ばれる九つになる男の子だつた。裸の胸に、肋が一枚々々數えられるほど息を引き、圓に眼を瞠つて、老父と作男のする樣を見詰めてゐたが、

「トタカ！」

と、鋭く父を呼びかけて、「トタカ、何するか」

「ショッホ」

ピユウと引き倒れながら振り向いて、「サッチヨの眼、何しについてる」

「何するか」

「木を伐る」

「よせよ、トタカ、よせ！」

血相變へた幼い顏を、齒のぬけた口もとに微笑を浮べ、目尻を皺めて、好ましげにヂッと見詰めてゐたが、

「どうしてか」

「どうしてでも……。よせよ、よしてくれよ、たのむ！」

「だから、たゞよせと云ふのか、それを訊いとるんだ」

「知らん！　たゞ、よして貰ひたいんだ」

「をかしな子だ！　今よしたつて、もう木は、前のやうになりはせん」

「生きた木のつぎ合せやうは誰も知らん」

作男も、まぜッ返すやうに口を入れて、ハ、ハと軽く笑つた。

「畜生！　罰あたり！　黙つてひつこんでろ！」

「サッチョ！　お前こそ黙つて見てをればいゝんだ。ハンケは、わしの云ひつけた通りをしてゐるんだから」

「トタカ！　お願ひだ、もうよしてくれ！」

「だから、なぜよせと云ふんだ」

「なぜでもいやだ。見てゐていやだ。そんなことをすれば、きつと何か悪いことがある。きつとある！」

「わしは、一生のうちに、何本木を伐つたかわからないが、その度にいゝことはあつても、悪い報ゐの来たためしは一度だつてない。だから、サッチョ、安心して見ておいで！」

「日の暮れないうちに、素晴しい地響をたてゝ、この木が横倒しになる。その前に、わしがサッチョさんを呼びに行つてあげよう。とても勇しい見物だ、それは。ゴウジュもさう仰有る」

この、作男の最後の言葉は、我が島の子供たちの「げんまん」とか「指切り」とかに当る言葉の一つで、早く云へば、きつと間違ない、の意だつた。ゴウジュは、自在に空を翔る冒険心の強い精神で、雷鳴と電光は、その憤な激作するものと信じられてゐた。島から島へ遠い旅をして廻る時、必ず高木の梢を宿とするといふ點など、よほど日本の天狗といふものに似てゐた。また、病を司る神として、それに罹るのも、それから癒えるのも、総てゴウジュの御機嫌次第とされてゐたから、一度でも宿をしたと云はれる木には、標縄のやうなものを張り還し、その葉たり皮なりは、影乾にして煎薬に用ゐられる習はしもあつた。

「ゴウジュがさう仰有る」

サキスコンは、作男の言葉を切り返して、渋面をつくり、地踏鞴をふみながら、「お前の手足はもげちまふぞ！　ほかのならどれでもいゝが、この木だけはいけない！　よせ！　よせつたらよせ！」

「うるさい！」

老父は、厳しく叱りつけて、おッと我が子の顔を睨め据えたが、その時はじめて、黒い皮膚の裡に、眼と眼との間の鼻の上が、幽かあちらしく青ずんでゐるのに気がついた。成女と同様に、子供たちも、月に一度づゝは、必ず不機嫌に苛立ち易くなる幾日かゞ廻つて来るもので、その期間は、眉間のあたりや顳顬に、薄青い隈が地どつてゐるのでも知れる、といふことは、この島國の親たちには、一つの常識とな

つてゐた。そして、これもまた病魔神のなす業として、日本で、俗に「蟲がおこつてゐる」といふべきところを、優しくは、「ゴウジュの猫風にあふられる」とか、また露骨的には、「ゴウジュに小便をひつかけられて來た」とかいふ風に云つてゐたが、いまワルドルウは、子供の鼻の上にその特徴を見て、頭ごなしに叱りつけた自分自身に、軽い非難を加へずにはゐられなかつた。で、ハンケに眴をして大鋸の手をとめさせ、やおら腰を擡げると、のそり〳〵我が子のそばに歩みよつて行つた

「サッチョ！」

頭の上に節くれだつた掌を載せて、優しく引きよせながら、「いゝから、もうお前は下においで。きつと、マッカは燕麦を乾しに行つてるから、お前もそこイ行つて手傳つた方がいゝ。ねえ、いゝ子だからさうおし、ねえ、サッチョ！」

父親の一喝にはツとして、石のやうに突つ立つてゐたサキスコンも、こんな風に劬られると同時に、突然大聲をあげて泣きだした。

「いやだア、いやだア、いやだア」

両腕を、附根から、連枷のやうにブン〳〵振り廻して、ピヨロリと丈の高い父親の腹や腰のあたりをやたら打にした。「いやだア、いやだア、トタカの馬鹿！ いやだア、いやだア、いやだア！」

微笑のうちに、ワルドルウは、軽く両の掌の平でうけ止めながら、

「よし、よし！ そんなにいやなら行かないでもいゝ」

「伐るからいやだ！ 木を伐るからいやだ！」

「そんなわからんこと云ふもんぢやない」

「いやだ、いやだ、その木だけはいやだ！」

「ようし、よし！ そんなに云ふんならよさう。よし、もうよす、よす！」

さう云つて、泣き叫ぶ子を宥めながら、一方には、もう一度また作男の方に眴をして、

「さア、ハンケ！ そいぢアもうこの木を伐ることはよしにするから、道具を片づけてお了ひ！」

「よしだ、よしだ！ さア、もう、サッチョさん、道具ゥ持つてうちイ參のう」

ハンケも心得て、大鉞を杖に立ちあがり、そこらに抛り出してあつた太縄や楔などを拾つて廻つた。

子供はけろりと泣きやんで、父の手をとり、阪道をぐん〳〵引つぱりおろさうとした。作男は、もう一度道具類を草の上に投げだして、懶げに胡座をかき、腰にさげた煙草入や燧石をぬき取つた

空はもうすつかり瑠璃色に晴れあがつてゐた。凪ぎ鎮つた海の上か

らは、時々微風がそよいで來た。

根元の切り傷にも拘らず、楠の大木の影は紫に深かつた。叢から、するくと縞蛇が近づいて來た。作男は、たゞ悪戯に、煙草の吹殼をそれへ投げつけてやつた。ヘラくと、炎焔のやうな舌を吐いて、すましこんで、方向を變へると、すぐまた草のなかに、美しい赤縞の、長い姿は消えて行つた。

ほどなく、ワルドルウが戻つて來た。

「ハ、ハ」

と、輕く笑つて、「サツチヨのやつ、ゴウジユの小便をくらつてやアがつたんだ」

「あゝ、どうれで……」

すぐ二人は、大鋸を把りあげて切り口へ挽き込んだ。油蟬の鳴きしきるなかに、――ヘル、キユウ。シヨツホ、ビユウ。――ヘル、キユウ。シヨツホ、ビユウ……。

二

南國の永い薄暮の頃、親村から歸つて來た三人づれの村人が、ちよいとした丘ながら、峠になつたその頂で、伐り倒された楠の大木に打ち敷かれてゐるワルドルウとハンケとを見出した。また獨身でゐた作男は、その、年齢に不似合な白髪頭を、蛇のやうに平たくつぶされて、既に縡切れてゐた。山持のワルドルウは、腰を壓えられ、口尻に白い泡を吐いて、うんく悶搔き苦しんでゐた。

一村を擧げての大騷ぎになつた。滿天の星のもとに、炬火をふりかざした長い列が、馬の背に縛りつけた重態のワルドルウを護つて、親村に住む白人の醫者の家へと急いだ。そのなかには、氣丈なマツカ(母)に手をとられて、先刻から、眼の珠も飛び出さんばかりに瞠いた兩眼を、炬火の光にキラくと輝かさせながら、痩ツぼちのサキスコンも、チヨカくと小走りについて行つた。

外傷は何ほどのことでもない。内出血がうまく引いてくれるかどうかの問題で、無論安心はならないが、望みのないこともないのだから、兎に角預つてみよう、といふのが、老つた醫者の言葉だつた。人々はこれに力を得て、大部分はひとまづ村に引きとり、親類縁者は、それぞれ泊めて貰へるうちへと落ちついた。

サキスコンには、二つか三つづゝ年齢の違ふ兄や姉が十人もあつた。隣島に出稼に行つてゐる長男や、嫁に行つた姉を除いて、今夜うちから一緒に出て來たのだけでも六人ゐた。そのうちから、いくらかものゝ役にたつ兄と姉とが二人だけ殘つて、あとは村へ歸れといふことになつた。母方の叔母、アリウスの家が手狹で、とてもそれだけの

人數は泊め切れないし、第一そんな少さい連中がゴチャ〳〵してゐては、母親の足手纏ひになつて、ろく〳〵看病も出來まい、といふ意見からだつた。至極尤なことではあるし、みんなが大人しくその通りにならうとしてゐるのに、自分一人駄々をこねるわけにもいかなくなり、サキスコンは、一刻も父のそばを離れたくはなかつたのだけれど、涙のいつぱいたまつて來る眼を伏せて、仕方なしにマッカの言葉に頷き返した。

そこで、兄妹五人に、アリウスの娘で、一旦よそに嫁いて、不緣になつて歸つて來てゐるギモといふのが、留守宅を宰領するために一緒に行くことになり、なほ歸りおくれてゐた村の男にも途中を賴んだりして、一行七人親村を出たのは、かれこれもう十一時近かつた。

磯臭い濱邊の道を行く頃は、父の上を案じ煩ふ心はそれとして、みんな元氣がよかつた。十七になる、中で一番上の兄が、高々と炬火をかざして、眞先に立つて進むのも、たのもしく勇しかつた。續いて、十五歳の兄、十三と十一になる姉がひと塊になつて行つた。從姉とは云つても、幼い連中の目には、もういゝ加減のお婆さんに見えるギモに手をひかれて、サキスコンは、遂に覺えのないからいふ夜道を、むしろ樂しいほどの緊張をもつて、おくれじと、たゞ一向に足を運んだ。殿には、實直な四十男のビダアルが、賴まれものゝ大きな荷物を背負ひ込み、炬火をさけてついて來た。火は、足もとを照すよりも、野獸や毒蟲を近づけない用心だつたので、道が海から離れて、森林のなかをぬけて行つたりするやうな時になると、先頭の兄が、ウワア、ウワアと喊聲をあげながら、それを水車のやうに振り廻したりした。バチ〳〵バチ、バチ〳〵バチ、と、その度に、竹をよせて造つた炬火が爆け鳴る……。急におりると、風が絶えて、蒸暑さがたまらなかつた。たら〳〵と流れるやうな汗だつた。丸木の上に、縱に二三枚の板を蔓で結きつけたあぶなつかしい橋も二つ三つ渡つた。

行くうちに、サキスコンは、痛酸ッぱいやうなだるさで、時々ぐらッ〳〵と足や腰が萎えるのを覺えだした。つい眼の前の、兄や姉の後姿が、ちらめく炬火の光のせいではなく、たゞの一人に重り縮まつたり、五六人、十人あまりにも、散はり廣がつて見えたりした。さうかと思ふと、ぼうッと、眼の前一面に暗んで了つた……。

死んでもくたびれたとは云ひたくなかつたが、どうにもこらえやうのない苦しさに、たうとうサキスコンも、

「ギモ！」

と、低聲に從姉を呼びかけて、「熱くつてたまらないよ」

「もうついうちだよ。ね？　我慢おし、ね？　サッチョ！」

「うゝん、くたびれやしないけど、熱いんだよ。熱くつて熱くつてた

まんないんだ！」

螢ちら火のやうにほてつて、冷たい汗がたらり〳〵と流れ落ちた。たまらなくなつて、がツくり振り仰ぐ眼に、大きな流星が映つた。

「あ、飛んだ！」

「何が？　何が飛んだい？」

「大きな星だつたよ」

あとはひとり言に、「トタカ、大丈夫かなア」。

「ほんとに、お前、熱い手だね」

ギモは、腕からだん〳〵に摑みあげて行つて、額の熱にさはつてみた。「おや！　これアへんだ！」

「どうかしたかね」

寢惚聲に、ビダアルも追ひついて來て、「くたびれたんだろ」

「うゝん」

サキスコンは、たつた二つしか違はないすぐの姉の手前を、誰よりも一番に氣遣つた。男のくせに、などゝ、いつまでもそれを云つて揶揄はれさうだつた。

「をかしい！　頭が、まるで火の玉みたいだよ」

ギモは、兩掌でしつかりと頭を包むやうにして、「これア、たゞごとぢアないね」

「どう〳〵、熱か？」

熱といふ一語を、ことさららしく使つて、ビダアルも、片掌を額にあてがつてみた。

「どうした、サツチヨ！」

前から上の兄の聲で、「もうひと山ぢアないか。我慢して歩け、歩け！」

「うるさい！　はなせ！」

サキスコンは、死物狂ひで、從姉や村人の掌を振り拂つて、二三四間おくれた距離を駈けようとした。その瞬間に、もう一度また星が流れた。トタカ、死にはしないかな、と思ふとたんに、焚火の焰が、天まで燃えあがつたやうに見えて、あとはわからなかつた……。

何かに躓き倒れたサキスコンは、村人には荷があつたので、ギモの背に背負はされた。その時には、口こそ利かなかつたが、はつきり眼をあいてゐたので、人々も大したことゝは思はなかつた。たゞ、ひどく疲れたのだらう、くらゐにしか考へなかつた。

ギモの背に、ぐたりと額をおツつけてゐたサキスコンの耳に、いつからともなく、鈍い二拍子が聞えて來た。うつら〳〵夢見心地でゐると、それがだん〳〵近づいて來て、はつきり木を挽く音と、ハンケと父親とのかけ聲に聞きわけられだした。

……ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ。――ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ……。

けれども、サキスコンは、

(あ！　あれほどたのんどいたのに、また始めたな)

と、忌々しく思つただけで、それをあり得べからざる事實とは感じなかつた。

(よし、よし、どうせ今あすこを通つて行くんだ。さうしたら、またさう云つて、よさせてやらう)

……ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ。――ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ……。

だん／＼間近に聞えて來た。峠の、もうひと息といふ急阪にかゝつたと見えて、堅肥りのギモの背も、はア／＼と喘ぎ、大きな波に揺れ動いた。

……ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ。――ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ……

もう見える頃と、首を振向け、頬をつけたまゝ薄眼をあくと、いつも見馴れた楡の大木が、星空の半をも覆ふばかりに、黑々と聳え立つてゐた。

(まア、よかつた！)

と、安堵の吐息を洩して(トタカのやつ、仕様のない亂暴者だなア！　ゴウジユ樣のお宿を伐り倒しちまふなんて……。丁度こゝがお通り筋だつてことは、知れきつた話だのに……)

……ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ。――ヘル、キユウ。ショツホ、ピユウ……。

大鋸の響、かけ聲が、いよ／＼近く迫つて、今はもう「トタカ！」と呼びかけやうと首を擡げた瞬間だつた、――音もなく、ふわりふわりと大楡の梢が揺れだすと、葉房を風に靡かせ、はツと思ふ間もなく、傾向に倒れかゝつて來た。身を悶掻いてよけやうとすれば、忽ちその方へよせて來る。――早いやうでおそく、おそいやうで早く、身を振り曲げる方へ方へと、傾向に狙ひさだめて、ド、ド、ド、ドツと、大山の崩れかゝるやうに……。

はすかひに、道を塞いで倒れてゐる大楡の、灰色の幹をすかして見て、足場のよささうなところを踏み越えやうとしたギモの背なかで、ぐつすり寢込んでゐるかと思はれたサキスコンが、突然ものに襲はれたやうに、うん／＼呻き身悶えるのに、驚き慌て、彼方へ足に飛びおりるとたん、うツとひと聲はりあげたと思ふと、後ざまにのけ反つて、兩の拳を胸にしやちこ張つたきり、ぶらんと腰へ、逆吊りにぶらさがつた。

「どうした！」

炬火を投げ捨てゝ駈よつたピダアルは、鼻口耳口から血を吹いた、見るも無残なサキスコンの相貌に、そのまゝへた〳〵と路上にへたばつて了つた

＊　＊　＊　＊　＊　＊

もとより、負ふたギモの身には、擦過傷ひとつなかつたけれど、幼児の脳髄に加へられた重壓は、まさに大槌の重みだつた。

が、一秒の時をもたがえず、貌村の白人の病院では、ひよこり寝臺の上に起き返つたワルドルウが、手足をこすり、腰を叩いて、

「おや？　おや〳〵おや？」

と、呟いて、そばにゐた老婦の醫者を狂喜させたといふ、――芽出度いと云はふより、哀のふかいお話。

編輯だより

編輯だより

◇福田德三氏のアリストテレースの「流通の正義」は原稿は到着したが紙面がないため三月號に延期して貰ふことになつた。福田氏及讀者の御諒恕を乞ふ。

◇現代日本文學全集二月配本は「芥川龍之介集」とする。會員多數の希望により氏の集は獨立し、燦然たる內容のものとなつた。そして最近問題となつた西方の人、或る阿呆の一生、齒車、河童、或る舊友に送る手記、玄鶴山房の悉くを收め、小說だけでも六十篇を收容し、支那游記（北京日記抄だけ拔く）が全部選入り、そして單行本に出てゐない旋頭歌廿五首も選入つた。

◇羅生門、鼻、芋粥、貉、奉教人の死、るしへる、蜜柑、山鴫、トロツコ、湖南の扇、點鬼簿、秋、秋山圖、將軍、鼠小僧次郎吉、或る日の大石內藏之助、地獄變等の代表作も悉く選入つた。

◇三月配本は「少年文學集」とする。此集は七千萬家庭になくてはならぬ有益にして趣味多き編輯をした。小波「こがね丸」露伴「番茶會談」賤子「小公子」思軒「十五少年」藤村「童話廿三篇」白秋「童謠代表作十九篇」三重吉「古事記物語」正雄「アンデルセン童話集」春夫「蝗の大旅行、美しき町」龍之介「蜘蛛の糸、杜子春、魔術」其他未明、万太郎、浩二、與志雄、雨雀の代表作が選入り燦然たる一大冊をなす。

◇今回本社より別項廣告の如く「マルクス全集」と「世界大衆小說全集」とを發行します。前者發行についての困難も、意義も會員諸氏は既に御承知のことと思ひます、確かに本全集は我出版界の輝かしい最大の收穫です。それから後者は現今に於て尤も面白い家庭的の小說を集大成しました、その內容については題目を一覽されても油然として快興を禁じ得ぬもののみです。

◇改造社のマーク募集は一月卅一日〆切。その後到着の分は斷じて受付けません。

◇社務擴張のため今回東京市芝區愛宕下町四丁目に移轉。

◇社の山本に對して原稿を見てくれとて持込まるゝ向が隨分多いが。今後如何なる人の紹介でも山本は取扱はぬことにきめたあしからず。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
△見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和三年一月十八日 印刷納本
昭和三年二月一日 發行
（價五十錢）
（郵稅二錢）
編輯兼發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町四丁目六 山本三生
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍
發行所 東京芝區愛宕下町四丁目 改造社 振替東京八四〇二

自然科學

第三卷第一號

（一月廿五日發賣）　定價壹圓　郵稅二錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二二番　改造社